

ガツシュペアの暗殺教室

シキガミ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔界の王を決める戦いに参加しているガツシユペアは、クリアノートを倒すための特訓に励んでいた。しかし、彼等には魔界を救うための打倒クリア以外のもう一つの目的があった。それは、地球を救うためのE組での殺せんせー暗殺。魔界と地球の危機のダブルパンチを、果たして彼等は乗り越えられるのだろうか？

※評価・感想等お待ちしております。気になる点等ありましたら、気軽に尋ねてください。

※本小説では、4月時点で殺せんせーがエネルギー砲を使える設定でお願いします。

※6／19～20 段落と行間の修正を行いました。

※7／18～19 3点リーダー等の修正を行いました。

※2／16～ 序～中盤の文章が中々アレなので、所々地の文を中心に修正を加えていきます。内容の変化はありません。

※7／23～ p i x i vでも同小説の投稿を始めました。

目次

一学期編

LEVEL. 1	邂逅の時間	1
LEVEL. 2	集会の時間	19
LEVEL. 3	支配者の時間	34
LEVEL. 4	中間テストの時間	47
LEVEL. 5	暗殺の時間	59
LEVEL. 6	旅行の時間	74
LEVEL. 7	救出の時間	90
LEVEL. 8	気になる女子?の時間	108

LEVEL. 9	転校生の時間	125
LEVEL. 10	自律の時間	139
LEVEL. 11	日常の時間	151
LEVEL. 12	克服の時間	166
LEVEL. 13	湿気の時間	180
LEVEL. 14	助っ人の時間	194
LEVEL. 15	転校生の時間・二	

時間目

213

LEVEL. 16 触手の時間

227

LEVEL. 17 特訓の時間

240

LEVEL. 18 球技大会の時間

254

LEVEL. 19 親愛と恐怖の時間

LEVEL. 20 才能の時間

LEVEL. 21 夏の時間

280

LEVEL. 22 交流の時間

LEVEL. 23 寺坂達の時間

314

LEVEL. 24 ビジョンの時間

328

LEVEL. 25 期末の時間

343

LEVEL. 26 終業の時間・一学

360

LEVEL. 27 科学館の時間

期

夏休み編

LEVEL. 28 策謀の時間

391

LEVEL. 29

375

506	L E V E L.	488	L E V E L.	470	L E V E L.	453	L E V E L.	438	L E V E L.	423	L E V E L.	408
	3 4		3 3		3 2		3 1		3 0		2 9	
	休息の時間		黒幕の時間		戦いの時間		潜入の時間		伏魔の時間		決行の時間	

とプリン
の時間

605

	L E V E L.	591	L E V E L.	二学期編前半		575	L E V E L.	557	L E V E L.	542	L E V E L.	523	L E V E L.
	4 0		3 9				3 8		3 7		3 6		3 5
	フリーランニング		竹林の時間				夏祭りの時間		動物園の時間		再会の時間		下世話の時間

LEVEL. 4 1 偽物の時間

622

LEVEL. 4 2 クラスメイトの時

間

638

LEVEL. 4 3 仲間入りの時間

655

LEVEL. 4 4 ラジコンとコード

ネームの時間

669

LEVEL. 4 5 イケメンの時間

685

LEVEL. 4 6 リーダーの時間

701

LEVEL. 4 7 間違いの時間

718

LEVEL. 4 8 ボランティアの時

間

733

LEVEL. 4 9 スターの時間

751

LEVEL. 5 0 プレゼントの時間

768

LEVEL. 5 1 すれ違いの時間

783

LEVEL. 5 2 魔物の時間

799

LEVEL. 5 3 死神の時間

815

決戦!! VS クリア・ノート編

LEVEL. 54 予感と苦悩の時間

833

LEVEL. 55 悲報の時間

849

LEVEL. 56 開戦の時間

867

LEVEL. 57 仲間の時間

883

LEVEL. 58 激闘の時間

901

LEVEL. 59 完全体の時間

916

LEVEL. 60 友達の時間

932

LEVEL. 61 金色の時間

955

LEVEL. 62 帰還の時間

971

番外編 応援の時間

990

LEVEL. 63 進路の時間

1014

LEVEL. 64 祝勝の時間

1032

二学期編後半〜冬休み編

LEVEL. 65 お出かけの時間

LEVEL. 72	1152	LEVEL. 71	1140	LEVEL. 70	1126	LEVEL. 69	1105	LEVEL. 68	1088	LEVEL. 67	1072	LEVEL. 66	1054
苦闘の時間		正体の時間		理事長の時間		期末の時間・二時		縁の時間		学園祭の時間		お出かけの時間・	

LEVEL. 78	1255	LEVEL. 77	1237	LEVEL. 76	1223	LEVEL. 75	1206	LEVEL. 74	1190	LEVEL. 73	1170
自由研究の時間		決着の時間		サバイバルの時間		分裂の時間		冬休みの時間		終業の時間・二学	

間目

二時間目

期

三学期編

間

L 1290 L 1272
E
V
E
L.
8 7
0 9
バレンタインの準備の時間
の時

1303

一学期編

LEVEL. 1 邂逅の時間

クリア・ノートとの壮絶な戦いの結果は、アシュロンの捨て身の攻撃によりどうにかクリアを退けられ、12月までの猶予を得られた。魔界の滅亡を阻止するため、清麿達はこの猶予内にてクリアを倒さなくてはならない。そしてガツシユペア・ティオペア・キャンチョメペア・ウマゴンペア・ブラゴペアはかつてゼオンのパートナーであったデュフオーの指導のもと、特訓に取り組むことになった。

そしてキャンチョメの新たな術が出るということで、デュフオー立ち合いの元ガツシユペアとキャンチョメペアの練習試合が行われることになり、結果はキャンチョメペアの勝利となった。試合後にキャンチョメペアと別れをすました後、ガツシユペアとデュフオーは清麿の家の前まで来ていた。

「キャンチョメ達に負けたのが悔しいか、ガツシユ、清麿？」

デュフオーはそう清麿達に尋ねる。その問いに対して2人は怪訝な顔をしながら返答する。

「いや、それ以上に何が起こったのかわからないって感じだ」

「ウヌ……私もそうなのだ」

清麿達はいまだに何が起こったのかが理解出来ていない。しかしはつきりしていることがある。練習試合とはいえガツシユペアは、バオウ・ザケルガ（一応本気ではない）を出したにも関わらず、キャンチヨメペア相手に手も足も出なかつたことだ。

「だが、時間はまだある。お前たちはまだ強くになれる。俺も最大限協力する。お前たちでクリアを倒すんだ。魔界のゼオンを死なせないためにも」

「ああ、もちろんだ！」

「ウヌ、わかつておるのだ！」

強くなってクリアを倒す、そう改めて清麿達が決意する。それを聞いたデュフォーは2人から視線を逸らすと、突然顔をしかめる。

「ところで、清麿……」

そこに隠れている黄色い生物は何だ？」

「にゅやあ、ばれてしまいましたねえ」

デュフオーが指さす先には、タコのような形をした黄色い生物が隠れていた。その生き物は笑いながら触手をくねらせている。

「おお……殺せんせーではないか！」

「おい！国家機密が何をしているんだ!!」

回想

新学期が始まり、清磨は3年生に進学した。そして数日後、清磨が帰ってきていない高嶺宅には茶色のスーツを着た男が一人来訪する。

「初めまして、高嶺清磨君のお母さん。私は柵ヶ丘中学校の理事長、浅野學峯です。清磨

君とガツシユベル君はまだ帰ってきてはいないですかね？」

その男は清磨の母、高嶺華に尋ねた。ガツシユペアに用があるみたいだ。

「ええ、2人とも帰ってきてはいませんが。（この人、清磨だけじゃなくてガツシユちゃんのことまで知っている。ただものではなさそう）玄関前ではなんですので、家に入ってください。話は清磨達が帰ってきてからでいいですか？」

いきなり家を訪れた見知らぬ男を華は警戒をする。しかし彼女は客人を外でいつまでも待たせる訳にはいかないと判断し、理事長を家に招いた。

「ありがとうございます。お邪魔させていただきます」

「メ、メルメルメ〜！」

理事長が家に入ろうとしたとき、家の前の小屋にいるウマゴンが外に出て来た。そして彼は理事長を睨み付ける。

「おや、ウマを飼っているんですね。しかも、鳴き声が珍しい」

「ええ、そうですね。（人懐っこいウマゴンがこの人を警戒している。やっぱりただものじゃなさそう）大丈夫よ。お客さんだから」

華は改めて理事長への警戒を深めながらもウマゴンをなだめる。そして彼女は理事長を家へと招き入れた。

華が理事長を家に入れてからしばらくして、ガツシユペアが帰ってきた。

「ただいま」なのだー！」

2人は玄関に入ると、理事長が履いていた見慣れない靴が彼等の視界に入る。

「清麿、お客さんが来ているようだよ」

「ああ……そうみたいだ」

そして清麿達はリビングに入ると、先程の男がガツシユペアに微笑みかける。その表情は、表面上は柔らかかでも内面に強い意志を持ち合わせていることをガツシユペアは察した。

「待っていたよ、高嶺清麿君。そして、ガツシユベル君。私は柵ヶ丘中学校の理事長、浅野學峯です。帰ってきて早々に申し訳ないが、本題に入らせてもらってもいいかな？」

清麿達に自己紹介をすませた理事長が話し始める。

「さて、清麿君。君には我が学園に編入してもらいたい」

「な、何だつて？」

「清麿、へんにゆーとは、何なのだ？」

清麿が驚いているそばで、ガツシユが清麿に編入の意味を聞いて来る。しかし清麿自身も状況を整理出来ていない。それを察した華が清麿の代わりにガツシユの疑問に答える。

「ガツシユちゃん、清麿が今とは違う中学校に通うという事よ。しかも柵ヶ丘って、私立

の超名門じゃないの」

「いきなりな話で申し訳ありません、お母さん。しかし学費は免除します。それに学力面でも、清磨君なら問題はないかと」

確かに清磨の学力であれば、どこの名門校でも落ちこぼれることはないだろう。それに学費まで免除されるのだから、一見は悪い話ではない。

「ウヌウ……それはつまり、スズメ達とは別れてしまうことになるのではないのか、清磨？」

「ああ、そういうことになる」

「又オオオオオオ、それは嫌なのだ!! 清磨オ、そんなのは絶対にダメなのだ!!」

「ガツシユ、まずは落ち着け。俺も水野達とは離れたくない。それに、いきなりこんな話をされてもどうすればいいのか……お袋、どう思う?」

転校を泣きながら否定するガツシユをなだめた後に清磨が考える。確かに悪い話ではないが、裏があると思えない。それに今の仲の良い同級生と離れてしまうのは、清磨も嫌だった。そして清磨は、華にも意見を聞く。

「それはあんたが決めなさい。あんたが決めただ道に、私がとやかく言うつもりはないわ」
しかし華は、これは清磨の問題なのだから彼自身で決めるべきだと考えている。彼女が清磨を信頼した上での発言だ。

「確かに、すぐに答えを出せることではないね……さて、清麿君のお母さん。非常に申し訳ないのですが、少し席を外していただけないでしょうか。清麿君とガツシユ君とお話をしたい」

理事長が表情を変えて言い放つ。彼の変化を見た清麿は、ここからが本題なのだろうと覚悟した。

「……わかりました。私は清麿の判断に従います。じゃあ、清麿、ガツシユちゃん。私は買い物に行ってくるから、話し合いが終わったら連絡をちょうだい」

華もまた、何かを察するようにそう言っただけで部屋を出た。彼女なりに空気を讀んだうえでの判断だ。それから少しの沈黙の後、理事長が口を開く。

「さて、高嶺君、ガツシユ君、単刀直入にいう。君達にはこの超生物を殺してほしい。そのため、柵ヶ丘中3年E組に編入してほしいんだ」

理事長は殺せんせーの写真を差し出した。そして殺せんせーが3年E組の担任をしていること、来年の3月に地球を滅亡させようとしていること、殺せんせーの存在が現在国家機密になっていることを話した。

「なぜ、そんな依頼を俺達に？」

この疑問は必然だ。清麿は一見はただの学生。このような国家レベルの依頼がくるなどとは考えられない。しかし、

「それはね、君たちが実際に一度、地球を救っているからだよ。突如モチノキ町に現れた巨大な怪物からね」

その言葉を聞いた途端、ガツシユペアは顔色を変える。

「お主、ファワードのことを言っておるのか？」

「へえ、あの怪物はファワードというのか。あの怪物、ファワードは突然の電撃によつて動かなくなった後に消えたと聞いている。しかしその電撃は、ガツシユ君の呪文なのだろうか？」

理事長は口に笑みを浮かべる。そしてその目はまるで全てを見透かすようだ。その視線は、数々の戦いを経験した清麿達でさえ冷や汗をかかせる。そして、

「その表情は肯定と捉えて問題なさそうだ。そしてなぜそれがわかるのか、と考えている。それはね……」

私も、かつては魔界の王を決める戦いに参加していたからだよ」

理事長から発せられた言葉にガツシユペアは動揺を隠せない。彼は魔物の戦いにまで参加していたのだから。

「しかし私は、パートナーの魔物と良好な関係を築くことが出来ずに早々にリタイアしてしまった。戦いに敗れてしばらくは平穏な日常を過ごしていたが、ファウードのニュースを目撃して理解したよ。まだ、この戦いは続いているのだと、日本に魔物が存在しているのだという事をね。そして4月にあの超生物があらわれた。あの超生物は強敵だ。何より早い。E組の生徒が防衛省の人間と訓練しているが、全く暗殺のめどが立たない」

理事長は眉をひそめながら、暗殺における現在の進捗状況を話す。

「そこで私は、魔物に目を付けた。魔物の力なら、あれを殺せるのではないかと。そんな矢先にあの老人と出会ったんだ。その老人もまた、あの超生物に目を付けていたそうだった。全く彼の情報網は素晴らしかったよ。そして、その老人から君達の話聞いたん

だ。そう、〃ナゾナゾ博士〃と名乗る男からね」

「な、ナゾナゾ博士だと!?」

彼等の頭はヒートアップ寸前だ。入ってきた情報量が多すぎる。何から質問すればいいのかすら分からないほどに。

「実は私が負かされた相手も、ナゾナゾ博士だったんだ。それから時を経て、久しぶりに彼と再会した。そこで、彼のパートナーも千年前の魔物との戦いで魔界へ帰ってしまったことを聞いたよ。そして、君たちの戦いのことも。君達なら、地球を救える力を持つことを」

この発言を聞いて清麿達のパンク寸前の頭は落ち着いた。そして今までの魔物たちとの激闘を思い出す。特にデボロ遺跡での戦いは、多くの仲間とともに傷つきながらも勝利した戦いだ。もし戦いに敗れていた場合、千年前の魔物たちが現在の人々を傷つけていたかもしれない。

ファウードでの戦いも然り。清麿達が負けていれば、日本が、それこそ地球自体が滅びていたであろう。そしてこの超生物もまた地球を滅亡させようとしている。それは彼等の仲間、友達、家族、そして全世界の人類の死を意味するのだと。そして2人は答えを出す。

「無理に依頼を引き受けなくてもいい。君たちの戦いもまだ続いているのだろう。それ

なら」

「依頼を引き受ける!! いいな、ガツシユ!!」

「ウヌ! もちろんなのだ!!」

難しく考える必要はなかったのかもしれない。そもそも難しい話ではないのかも。訳のわからない超生物が地球を滅ぼそうとしている。大切な人達を皆殺そうとしている。それを止めるために自分達に出来ることがある。それならば、彼らに断る選択肢など存在しないのだから。

「礼を言うよ、2人とも。さて、君のお母さんが帰ってくるまで待とうか」

「いま母に連絡します」

清麿は早速華に連絡をした。そして華が帰ってきた後に清麿は転校の旨を伝え、来週には編入することになった。しかし柵ヶ丘中学校はモチノキ町からも電車で通える距離であり、引越しの必要は無い。そして理事長は帰ってきた華に挨拶をし、必要な書類を渡した後に帰っていった。

そしてその日の夜、清麿はナゾナゾ博士に連絡をする。勿論此度の超生物と理事長についてだ。

『清麿君、ガツシユ君。まずは連絡が遅くなって申し訳なかった』

ナゾナゾ博士は謝罪から入った後に博士と理事長の出会い、博士独自の情報網で超生物の情報を掴んだ事、理事長にガツシユペアについて話した事を説明してくれた。

「しかし魔物絡み以外でもこんな事が起きていたとは。俺達も地球を救うために最善を尽くすよ！ナゾナゾ博士」

「ウヌ！地球を滅ぼすなど絶対にさせぬのだ！」

『頼りにしているよ！私も超生物のことは調べてみる。有益な情報が見つかり次第連絡しよう。さて、魔物たちとの戦いもあるだろうが、君達の健闘を祈る』

電話が終わり、2人は一息つく。そして、

「清麿、スズメ達にもお別れを言わねばならんな」

ガツシユは呟く。清麿だけでなくガツシユにまで良くしてくれたクラスメイト達との別れ。寂しくない訳が無い。しかし地球の滅亡は見逃せない。

そして学校にて、ガツシユペアは同級生達に転校の事を伝えた。

「え、高嶺君転校しちゃうの？！」

いつも清麿を気にかけてくれたクラスメイト、水野鈴芽は泣きそうな顔で清麿に問い

ただす。彼女は清磨がやさぐれていた時期から彼に優しく接してくれた。その事を清磨は内心感謝している。

「こんな時期に転校だなんて……」

「おい、高嶺どういことだよ！」

清磨の友人の岩島守、山中浩も同様に質問責めを行う。清磨がガツシユと出会って良い方向に変わった後に2人は友達になってくれた。

「えくん、寂しいよお」

「ウヌ……泣くでない、スズメー！」

別れが辛いのは水野も同じだ。彼女は泣きながらガツシユに抱きつく。いつもはガツシユに学校ではカバンに隠れさせている清磨だが、今回は皆にお別れを言うために、大人にバレない程度に外に出ることを許可していた。

「まあ、引越すわけではないんだ。いきなりで申し訳ないと思うが、また予定が合えば会ってほしい」

清磨の言葉空しく、クラスメイト達の質問責めは終わらない。彼等も2人を思っているが故の言動であるが、清磨はそれが分かった上でも困惑する。しかし、

「おめーらよお、別に高嶺達のせいじゃねーだろうが!!こいつ等を責めてどーすんだよ!!」

「『金山がまともなことを言ってる!』」

清磨のクラスメイトの不良、金山剛が大声を出す。それを聞いたクラス一同、驚きを隠せない。金山は当初清磨を毛嫌いしていたが、今となつては共にツチノコを探しに行く程に仲良くなった。

「おめーらどーゆー意味だよ! 全くよお。それにずっとこいつと会えなくなるわけじゃねーだろ。おい、しばらく会えねーだろうけどよ、またツチノコ取りに行こうぜ!」

金山の一言でクラスは落ち着きを取り戻す。

「た、確かにそうだな。高嶺、ガツシユ、悪かった。向こうでも元気にやってくれよ!」
「高嶺君、また勉強教えてね! ガツシユ君もまた会おうね!」

「ともにUFOを見つけよう!」

そしてクラス一同、平穩無事に清磨やガツシユとの別れの挨拶を済ませられた。金山の叱責及び清磨が引越す訳では無い事実が大きかった。

「皆、ありがとう。また集まろうな!」

「また会おうなのだ!」

ガツシユペアのモチノキ第二中学校での生活は突如終わりを告げた。突然の友との別れ。しかし地球を守る為にも2人は新たな一步を踏み出さないといけない。

そして一週間後、柵ヶ丘中学校での生活が始まる。ガツシユペアが教室に入ると、何本もの触手を生やした黄色いタコのような超生物が笑いながら彼等を待ち構えていた。

「な、なんだあの生物は……」

「とてもぬるぬるしておるのだ……」

清磨とガツシユは超生物を目の当たりにし、言葉を失う。無理もない。魔物でもないというのに、その容姿はあまりにも現実離れしすぎている。

「これからは私のことは殺せんせーと呼んで下さい。よろしくお願いしますね、高嶺君、ガツシユ君」

自己紹介が終わり、清磨とガツシユはE組のクラスメイトから質問責めを受ける。清磨だけならまだしも、何故か中学生では無いガツシユが同伴しているのだから当然だ。それだけではなく、ガツシユの容姿は女生徒から大人気の様だ。

「ガツシユ君ていうんだー！すごくかわいいー！」

ガツシユは女生徒からもみくちやにされていた。

クラスが落ち着いて、その日の昼休み。清磨はクラスメイトに改めて、ガツシユが魔

物である事、魔界の王を決める戦いの事、自分たちが使える呪文の事、魔本が燃えるとガツシユが魔界に帰ってしまう事、自分達が理事長の推薦で編入した事などを話した。クラスで殺せんせーの暗殺を行う以上、お互いの手の内は分かっていた方が良い。普通であれば信じがたいことであるはずだが、このクラスではそうではなかった。

「よく受け入れてくれたなー、お前ら」

現実離れた話を信じてくれたクラスメイト達に清磨が呆れ混じりに感心する。そんな彼のぼやきに一人の生徒が反応する。

「全く驚いてないって言えばウソになるけどね。でも俺らの担任あれだよ。もう多少のことじゃ動じないって」

赤い髪のクラスメイト、赤羽業が笑いながらそう言う。電撃を放つ2人組が転校してきたことを多少のことと言いつ放つ彼の胆力は、大したものである。

「こんな漫画みたいな話を聞けるなんて、私、ワクワクが止まらないよー」

漫画好きの女生徒、不破優月は目を輝かせる。彼女は多くの漫画を読んできていることで、非現実的な出来事には特に耐性があるようだ。

これから、清磨とガツシユは地球の滅亡をかけてクラスメイトとともに殺せんせーの暗殺を行う。そのために、体育の授業は全て暗殺の訓練となる。そして暗殺の授業にはガツシユも参加する。この時はまだ、クリア・ノートが魔界を滅ぼそうとしていること

は知る由も無い。殺せんせーが地球を、クリアが魔界をそれぞれ滅ぼそうとしている。清麿とガツシユは両方に抗わなくてはならなくなる。ストレスマツハ待ったなしだ。

回想終わり

「……………大変な一年になるな、お前ら」

デュフオーはガツシユペアに哀れみの視線を送る。彼が同情する程に2人の抱える問題は大きい。一方の清麿は殺せんせーに物申そうとするが、マツハ20の速度で逃げられてしまった。そしてデュフオーは改めて口を開く。

「清麿、ガツシユ。お前たちはあのタコの正体を考えたことがあるか？」

「まだ何もわかっていない。デュフオー、^{アンサーカード}【答えを出す者】であいつを見たんだな」

彼は先生の正体を理解した。しかしそれをガツシユペアに教えるつもりは一切無いようだ。

「ああ、そうだ。だが、この答えにはお前達がクラスメイトと力を合わせてたどり着かなければ意味がない。クリアを倒すための特訓も大事だが、あのタコを殺すためにもクラスメイトとの交流は深めておけ。何よりも、日常を欠いてはいけなからな。それに、やつを殺す訓練はそのままクリア打倒にも役に立つ。どっちもぬかるなよ」

意味深な事を言い残した後、デュフオーは一足先に清麿宅に上がる。それを聞いた2人は改めて殺せんせーの言動を振り返る。

「殺せんせーの正体、か。ガツシユ、どう思う?」

「ウヌ。それは全くわからぬのだが、私には殺せんせーが悪い先生には、とても思えぬのだ」

2人は同じことを考えた。地球を滅ぼすとのたまう超生物、殺せんせー。しかし彼らは悪意を感じない。むしろ、E組の生徒をととも大切にしている。本当に殺せんせーは殺さないといけないのか、という疑問は大きくなる一方だ。しかし地球の滅亡がかかっている以上、殺さなくてはならない。ガツシユペアの暗殺教室は始まったばかりである。

LEVEL. 2 集会の時間

月に1度の全校集会、E組には気が重くなるイベントだ。本校舎はE組の校舎から離れたところにある。そして集会の為だけに彼等は遠くの本校舎への道のりを歩まなければならぬのだ。そしてE組の差別待遇はここでも同じ、それにも長々と耐えなければならぬ。

(赤羽がいない。あいつ、さぼったな)

カルマがいないのを知り、清磨は心の中でため息をつく。そんな中、集会は次の準備のための休憩時間となった。その最中にE組の表向きの担任である、防衛省から来た烏間惟臣先生が本校舎の先生に挨拶周りを行う。しかし、

「烏間先生、ナイフケースデコってみたよ」

「かわいーっしょ」

ゆるふわな女生徒の倉橋陽菜乃とギャルっぽい中村莉桜が飾りを施したナイフケースを見せびらかす。このナイフケースの中には当然ナイフが入っている。しかし、ただのナイフではない。そのナイフは対触手物質でできている。この物質は唯一殺せんせーにダメージを与えられる代物だ。E組の体育の時間では体力向上の運動以外にも、

これを使用したナイフ術、また対触手物質を弾にした銃を扱う射撃の訓練も行う。

(可愛いのはいいがここで出すんじゃない!!? 他のクラスに暗殺の事がバレたらどうする!!?)

烏間先生は形相を変えて2人に小声で注意する。国家機密が早々に世間に知られてしまえば、防衛省の立場も無い。

(倉橋、中村。あいつら暗殺のこと隠す気あんのか? まあ、暗殺のことはデユフォーには速攻で見破られてしまったんだが……)

清麿は呆れ気味で心の中で呟く。するとどういう訳か、本校舎の生徒の雰囲気が変わり始めた。

「なんか仲良さそー」

「いいなー。うちのクラス、先生も男子もブサメンしかないのに」

烏間先生は無愛想ではあるが、クールで格好良いイメージを抱く人が多い。あともものすごく強い。そんな先生とE組の生徒の絡みを見て羨ましがらる生徒が出てきたのだ。いままではE組を差別し、優越感に浸っていた本校舎の生徒達だが、まさかE組に嫉妬の感情を抱く日が来るとは夢にも思わなかっただろう。

それから扉が開き、E組の英語担当のイリーナ・イエラビッチ先生(通称ビッチ先生)が入ってきた。彼女はハニートラップを得意とするスタイル抜群の女暗殺者であった

が、殺せんせー暗殺はあえなく失敗に終わってしまった。

「ちよっ……なんだあのものすごい体の外国人は?！」

「あいつもE組の先生なの?！」

動揺を見せる本校舎の生徒達には目もくれず、ビッチ先生は中世的な顔立ちをした男子生徒、潮田渚を呼び出す。目的は渚が手帳に記した殺せんせーの弱点にある。渚は全て話したというが、ビッチ先生はさらに情報を聞き出そうと渚を自分の胸に抱き寄せた。

「苦しいから、胸はやめて!ビッチ先生!!」

渚は本気で苦しんでいる。しかし側から見れば、美女に抱き寄せられるのは羨ましくも感じる人も多いだろう。実際に本校舎の男子生徒達は鼻の下を伸ばす。

(潮田のやつ、苦しそーだな。うーん。やっぱりビッチ先生を見てると、ビッグボインの顔が浮かんでくる……)

清麿は渚とビッチ先生のやり取りを見て、何故かビッグボインを思い出す。金髪の巨乳繋がりだろうか。そんな内に休憩時間も終わり、AとD組の生徒には行事のプリントが配られる。

「……すみません。E組の分が配られて無いんですが?！」

プリントがなぜかE組には配られない。その事についてクラス委員長の磯貝悠馬が

本校舎の生徒に尋ねる。しかし、

「え？そんなはず無いけど……あー、ごめんなさい。3—Eの分忘れたみたい。悪いんですが、全部記憶して帰ってくださいね。ホー、E組の人にとっては記憶力を鍛えられる良い機会だと思いますので」

体育館の舞台上上がった生徒会員がE組を馬鹿にしたようにさういふと、他の本校舎の生徒達や先生から笑いが起きた。明らかにE組を見下し、侮辱している。まるで見世物だ。

（気分悪くなるな、ったく。悪趣味にも程がある！）

清麿は舞台上の生徒を睨み付ける。烏間先生とピッチ先生も同様に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。そんな中、E組の列に風が走った。そして気付けば、E組の生徒の手には手書きで書かれたプリントが握られていた。

「磯貝君、問題ありませんねえ。手書きのコピーが全員分あるようですから」
「プリントあるんで続けて大丈夫です」

突如変装した殺せんせーが現れ、ニヤリと笑う。磯貝が先生に便乗したように得意げに言い放つと。本校舎の生徒達は面白くなさそうな表情を浮かべる。

（殺せんせー、ナイスだ！しかし、変装しているとはいえ国家機密がそんな簡単に姿を現しているのだろうか、烏間先生も怒ってるし。ん、あの緑のバッグは……）

清磨が殺せんせーの持つバッグに目を向けると、ガツシユが顔を出した。いきなり現れた謎の教師、そして所持するバッグから顔を出す謎の少年。本校舎がざわつく。そしてこの場でビッチ先生が殺せんせーにナイフを突き立てて、鳥間先生に追い出されたのはどうでも良い事だ。E組からは笑いが起こる。しかし、

(ガツシユの奴、本校舎には来るなど言ったのに!!)

清磨は怒りの表情を浮かべる。正式に生徒として登録されていないガツシユの事が他のクラスにバレれば、殺せんせーの事まで知られる可能性まで高まる。

集会が終わると清磨は外に出てた殺せんせーと鳥間先生がいるところに駆け寄る。ビッチ先生は先に帰ったらしい。

「こらガツシユ、本校舎には来るなど言っただろう!!」

清磨はガツシユに怒鳴る。危うくE組の秘密が知られそうになったのだから無理はない。清磨は少し鳥間先生の気持ちがかかるような気がした。

「高嶺君、ガツシユ君を責めないであげてください。彼を連れてきたのは私ですので。彼もE組の一員だ。一度くらいは本校舎を見せてあげたかったです……」

殺せんせーが清磨をなだめる。どうやら殺せんせーの意思で、ガツシユはここまで連

れてきてもらつたようだ。

「はああ、全く」

ガツシユがしでかした訳でない事を知ると、清麿もこれ以上の言及をやめた。そんな彼がふと自動販売機に視線を移すと、渚が本校舎の生徒に絡まれていた。

「清麿、渚を助けに行くのだ！」

「ああ、もちろんだ！」

ガツシユペアが渚の方に行こうとしたが、縞々模様を浮かべた殺せんせーがそれを阻む。

「少し、見てましようか。ヌルフフフ」

殺せんせーは何か自信ありげだ。そんな先生の言動にガツシユペアは、疑問に思いながらも様子を見る事にした。

「何とか言えよE組、殺すぞ!!」

渚は胸ぐらをつかまれる。だが、

「(殺す……? 殺す……か) 殺そうとなんてしたことなんて、無いくせに」

渚がそう言い放つと、絡んでいた生徒達はおびえ切つて、そのまま逃げだした。普段は大人しい彼だが、今この時ガツシユペアは明確に渚を恐れた。

(潮田の奴、すごい殺気だった。今までの戦いでも、こんな殺気を出す敵はそういなかった

たぞ……!」

「渚は、只者ではないのだ!」

渚の殺気を感じたガツシユペアは動揺しながらも渚の方へ駆け寄る。彼は結果として相手を追い返す事に成功したが、2人は先に絡まれた渚が心配だった。

「潮田、大丈夫だったか?!」

「高嶺君、ガツシユ君。大丈夫だよ、大したことないつて」

渚を気にかける2人に対して、彼は何事もないように話しかける。まるで先ほど放った殺気が嘘のように。そして清麿は眉をひそめるが、それを見た渚が話を逸らすかのようには話題を変えてきた。

「そうだ。2人とも、今日放課後空いてる? 茅野と杉野と一緒に最近モチノキ町に出来たスイーツが美味しいレストランに行くんだけど、どうかな?」

渚からの遊びの誘いだ。せっかくのクラスメイトとの交流の場、ガツシユペアも無下にしたくはない。そして2人は少し考える。

「モチノキ町なら家は近いな。それに、デユフオーとの特訓は夕方からだから、それまでは大丈夫そうか」ああ、夕方までなら問題ないぞ」

「ウヌ、清麿がそう言うなら、私も行きたいのだ!」

ガツシユペアは参加を決める。すると渚はこれから行く店について説明してくれる。

「何でも、そこのお店はオーストラリア発祥のお店なんだって！スイーツがおすすめだって茅野がすごく楽しみにしてるんだよ。2人とも参加できて良かったあ」

「潮田、誘ってくれてありがとうな！」

渚達はそのままE組の校舎に帰って行く。その光景を理事長が見ているとも知らずに。

（E組……エンドのE組が普通の生徒を押しつけて歩いてゆく。それは私の学校では合理的ではない。少し改善する必要がある。私にとっては暗殺よりも優先事項だ）

そして放課後、ガツシユペアは渚や他のクラスメイトと共にモチノキ町のレストランに向かう。

「高嶺君とガツシユ君が来てくれて良かったよ。2人ともいつも忙しそうだったから、少し誘いづらかったんだよね」

緑髪の小柄な同級生の茅野カエデが安心したように話す。彼女は甘党であり、今日のレストランを誰よりも楽しみにしている。

「他の魔物との戦いがあるからな。そのための特訓で忙しかったんだ。今日は時間が空いてて良かった」

「こっちの学校に来て、このようにクラスの皆と遊びに行くことは初めてだのお。とても楽しみなのだ！」

「やっぱり魔物との戦いつて大変そうだよな。お前らすげーよ」

ガツシユペアが魔物の戦いの事情を話す。すると元野球部のクラスメイト、杉野友人がそれを聞いて感心する。自分の知らないところで努力しているクラスメイト達を素直にすごいと思っっているようだ。

「いやあ……休息は大事だっつてわかってるんだけどなあ」

清磨はぼやく。クリアが出現してから特訓にあてる時間が多く、2人の遊びに行く頻度は激減していた。日常を崩さないことが大事とはいえ、どうしてもこれまで通りという訳にはいかない。それに加えて殺せんせーの暗殺もあるのだから、なかなか心身共に休まらない。そうやって喋りながら歩いていると、目的地のレストランに到着した。

そのレストランでは、三白眼で長髪の青年が接客を行っていた。そして彼はガツシユペアとは面識がある。

「いらっしやいませ……つて、清磨とガツシユ！お久しぶりです」

「……ウルルさんか、お元氣そうで！」

「ウヌ、久しぶりなのだ！」

そのレストランでは、水使いの魔物パーティのパートナーのウルルが働く。彼は初め、食い扶持を稼ぐためにパーティの言いなりになっていたが、彼女が改心することを望んでいた。そしてデモルトとの戦いを経てパーティがガツシユ達に力を貸すことが出来たことをとても嬉しく思っていた。パーティはその戦いで魔界に帰ってしまったが、ウルルは無事に働きの口にありつけた。

「あの人、知り合いなの？」

「ああ、そうだ。あの人魔界の王を決める戦いに参加してたんだ」

渚の問いには清麿が答える。

「それでは、席に案内します。ごゆっくりどうぞ」

ウルルは清麿達を席に案内すると、自分の仕事に戻っていった。

「あの人も、戦いに参加してたんだ」

「ねえ、びっくりだよ」

「ああ、全くな」

渚・杉野・茅野はそれぞれウルルの事情に驚く。ガツシユペア以外にも戦いの参加者の事を知り、非現実な出来事が身近にも存在する事を実感する。そして彼らはメニューを開く。

「どのスイーツもすごく美味しそう、迷っちゃおう!!」

「カエデ、お主は甘いものが好きなのか?」

「うん!毎日食べても飽きないよ!!」

茅野は甘党だが、その前には超がつく。そんな彼女はテンションを上げていく。

「そういや、殺せんせーも甘いものが好きだって言ってたな。茅野、先生とも甘いものの話をしたりしているのか?」

「……そうだね、高嶺君。本当は一緒にスイーツ食べに行きたいんだけど、先生は国家機密だから、簡単にはいかないんだよね……」

(何だ、この感じは。気のせいかな?)

清麿の問いに茅野は笑いながら答えるが、彼女はほんの一瞬だけ別人のような表情を見せる。その一瞬、誰もが見逃してしまふであろう違和感を清麿は感じ取れた。しかし清麿は違和感自体には気付いたが、その正体にたどり着く事は出来なかった。

「お待たせしました」

店員が清麿達の注文の品を運んでくれた。そして彼等は料理を頼張る。そしてある程度食事が進んだ後、清麿が全校集会の話題を切り出した。

「しっかし、あの集会はどーにかならんのか?」

「うーん、まあ、恒例行事みたいなもんだからね」

「けど、先生達のおかげで大分マシだったよな。いいもんじやないのは確かだけど」

渚と杉野が集会について呆れながら話す。E組として差別され続けた彼等にとつて、集会での待遇は今さらと言つた感じだ。

「高嶺君は柵ヶ丘に来て日が浅いからまだ慣れないと思うけど、あれが本校舎の生徒の日常なんだ。いちいち相手になんかしてられないかな。僕らは僕らのやるべきことをなさないと！」

「でも渚、4月の時みたいなのは、無しだからね！」

やるべきこと、言うまでもなく殺せんせーの暗殺である。渚がそう言いきると、茅野が不機嫌そうに口を出す。

「何があつたんだ？」

清麿が尋ねる。すると茅野が事情を説明してくれた。4月に渚が対先生BB弾の詰まつた手榴弾を身に付けて自爆した様だ。これにはガツシユペアは驚いたが、殺せんせーの脱皮により事なきを得たことを知つて安心した。

その事で殺せんせーは激怒して、自分の身を犠牲にした暗殺を禁止にした。しかし今度は復学したカルマが崖から飛び降りて殺せんせーを殺そうとした様だ。いずれもガツシユペアが転校してくる前の話だ。

「お前ら、無茶しすぎだろ……」

清磨が呆れた表情を見せたが、清磨自身もこれまでの魔物との戦いで捨て身に近い戦法をとったことがある（リオウ戦）ので、渚達に強くは言えない。しかし、

「それは絶対にダメなことなのだ！私は、お主たちが傷つくと悲しい」

ガツシユは渚を見つめる。ガツシユペアは魔物との戦いで、多くの魔物や人間が傷つくのを見てきた。ガツシユはそれを思い出す。親しい者達が傷付く姿を彼は想像したくない。

「うん、わかってるよ、ガツシユ君。もう二度と、あんな方法はとらない」

渚が真剣な表情で答える。それから彼等は少し暗くなった雰囲気明るくするかのように、楽しい世間話をした。そして全員が食べ終わると、

「高嶺君、お願いがあるんだけど、いい？」

「どうしたんだ？」

「これからは僕のことを、潮田じゃなくて渚って呼んでほしいんだけど、いいかな？」

渚がそう頼んだ。これには渚の家庭の事情が関係している。彼の言う事について清磨が少し考える。その後、

「……ああ、了解したよ、渚！」

「ありがとう！さて、そろそろ遅くなりそうだから帰ろうか、皆」

清磨は快く了承する。すると渚は嬉しそうな顔を見せてくれた。

そして渚の言葉を皮切りに退席した後、各々が会計を済ませる。ちなみにレジはウルルが対応していた。

「ウルルさん、この店とても良かったよ」

「ウヌ、また来たいのだ！」

「また来てください、清麿、ガツシユ。それから、戦い、頑張れよ！」

「ああ、もちろんだ！」

ウルルは共に戦った仲間を応援してくれている。魔界の滅亡はパティの死を意味する。当然ガツシユペアは負けられない。そして2人も会計を終わらせて店を出た。

一行は雑談しながら帰り道を歩いていると、それぞれの分かれ道までたどり着く。

「高嶺君、ガツシユ君、今日は来てくれてありがとう！」

「こつちこそ誘ってくれてありがとうな、渚。それに、茅野も杉野も、今日は楽しかったよ。ありがとう！」

渚と清麿はそれぞれ礼を言う。今日の出来事でお互いの関係が少しでも深まった事を彼等は実感できた。

「また集まろうぞ！」

「またよろしくね、2人とも」

「楽しかったぜ、高嶺、ガツシユ！」

殺せんせーの暗殺及びクリアの打倒、これらの苦難はガツシユペアを疲弊させるのに十分であった。しかし、クラスメイトとの交流のおかげで、精神はいくらか落ち着きを取り戻していた。このようにE組の生徒と交流する機会を増やしたい。清麿はそんなことを考えながら、渚達と別れを済ました。

そしてガツシユペアが家に帰ると、デュフオーとテイオペアが既に部屋で待機していた。彼等はすでに特訓モードに入っている。

「悪い、待たせたか」

清麿が申し訳なきように言う。自分達だけクラスメイトと楽しく過ごしていた事を後ろめたく感じていた。しかし、

「指定した時間は過ぎてない、よって問題はない」

「大丈夫よ。清麿君、ガツシユ君」

「今日も気合を入れていきましょ！」

デュフオー達は気にしていない素振りだ。クリア打倒のための特訓が今日も始まる。

LEVEL. 3 支配者の時間

「学校の間テストが迫ってきました。高速強化テスト勉強を行います」

高速移動で分身を作った殺せんせーは、生徒一人ひとりに苦手科目を教える。分身ごとに教える科目の書いてあるハチマキをしている。

「何で俺だけNA〇〇TOなんだよ!!」

E組の不良生徒、寺坂竜馬の担当する分身のみ、木の葉マークの額あてを着けている。苦手科目が複数あるが故の特別コースだそうだ。少し前までは3人くらいが限界だったが、今ではクラス全員分の分身を作っている。殺せんせーは日に日に速度を増している。

「高嶺君は、出来が良すぎてあまり教えがいがありませんねえ。それでは、応用問題を出してみましようか」

「先生の教え方がいいからだよ、助かってる」

「いえいえ、それほどでも……にゅやっ!!」

殺せんせーが清麿に問題を出そうとしていたが、いきなり殺せんせーの顔が歪む。クラス一同驚きを隠せなかった。一人を除いて。

「急に暗殺しないで下さいカルマ君!!それ避けると残像が全部乱れるんです!!」

「「「意外と繊細なんだこの分身!!」」」

どさくさに紛れてカルマがナイフでの暗殺を決行しようとしたが、殺せんせーに避けられる。テスト勉強に皆が集中していると、

「清磨、もう帰る時間ではないのか?」

「うわ、ガツシュか?!いつの間に……」

ガツシュが教室に入ってくる。誰も気づかなかったあたり、クラス一同勉強に集中していたのだろう。いきなり声をかけられて驚いた清磨だったが、皆が時計を見ると下校時間は過ぎていた。

「おつといけません、夢中になりすぎていて下校時間を過ぎていました。皆さん、今日はここまでにしますが、質問がある人は各自受け付けます。それでは、さようなら」

「ホントだ、下校時間過ぎてたか」

「皆とても真剣であったから話かけ辛かったのだが、勉強が終わる気がしなくて、つい声をかけてしまったのだ」

授業が終わるとともに、生徒は次々に教室を出る。テスト勉強が大変な故、皆どこか疲れている。桐ヶ丘中学校のテストはレベルが高い。定期テスト勉強も容易ではないのだ。

そのころE組の職員室には、理事長が訪れている。烏間先生とビッチ先生も同席していたが、雰囲気はとても重苦しい。大半の生徒たちの帰宅を確認すると、殺せんせーがそこに入ってきた。

「初めまして、殺せんせー」

殺せんせーと理事長の初対面だ。殺せんせーは予想外の来客に疑問を隠せていなかった。

「この学校の理事長サマですつてよ」

「俺達の教師としての雇い主だ」

それを見かねたのが、ビッチ先生と烏間先生が理事長の事を紹介してくれた。そして微動だにしていなかった殺せんせーが、一変してあわただしくなる。

「にゅやッ、こ、これはこれは山の上まで!!それはそうと私の給料、もうちよつと高くなりませんかねえ」

理事長に媚びを売り始めた。悲しきかな。いくら超生物であつても雇用主には逆らえない。そんな光景を廊下からガツシユペアに見られていることも知らずに。

「清麿、殺せんせーは何をしておるのだ?」

「ガツシユ、お前にもわかる日はいずれ来るさ……」

清麿は軽蔑交じりの視線を殺せんせーに向けていたが、殺せんせーは気付く由もない。目の前の上司に媚びることで精一杯だ。

「こちらこそすみません、いずれ挨拶に行こうと思つていたですが……」

今まで腰を掛けていた理事長であつたが、少し申し訳なさそうな表情を浮かべて椅子から立ち上がる。

「あなたの説明は防衛省やこの烏間さんから聞いていますよ。まあ私には……すべて理解できる程の学は無いのですが、

なんとも悲しい生物おかたですね。世界を救う救世主となるつもりが、世界を滅ぼす巨悪となり果ててしまうとは」

理事長の言葉を殺せんせーは無表情で聞く。否、内心では思うところがあつたのかも
 しないが、傍から見ているガッシュペアには到底理解出来ない。会話の内容も含めて。

【答えを出す者】アンサー トーカーを使用すれば、あるいは理解できたかもしれないが、人の事情を無断で覗き見するのは無粋であろう。それに清磨一人が殺せんせーのことを知ったところで、その真偽を証明する方法は存在しない。デュフォーがいつか言った通り、クラス皆で答えにたどり着かなければいけないのだ。理事長の話はさらに進む。

「この学園の長である私が考えなくてはならないのは……地球が来年以降も生き延びる場合、つまり、仮に誰かがあなたを殺せた場合の未来です。率直に言えば、ここE組はこのままでなくては困ります」

これまで無言を通してきた殺せんせーの表情が明らかに変化する。そして彼はようやく口を開く。

「……」のままと言いますと、成績も待遇も最底辺という今の状態を？」

「はい。働き蟻の法則を知っていますか？どんな集団でも20%は怠け、20%は働き、残り60%は平均的になる法則。私が目指すのは、5%の怠け者と95%の働きの者がい

る集団です。E組のようにはなりたくない、E組にだけは行きたくない、95%の生徒がそう強く思う事で……この理想的な比率は達成できる」

冷徹。今の理事長の表情を言葉にするのなら、その一言が相応しい。己の理想のためであれば、弱者を切り捨てることさえ躊躇わない覚悟、強い意志を理事長は持ち合わせているのだ。その表情を見て、ガツシユペアは戦慄する。

「……なるほど合理的です。それで、5%のE組は弱く惨めでなくては困ると」

殺せんせーは理事長の理想に納得していないだろう。しかし、表立って雇い主に歯向かう訳にはいかない。そして理事長は話を進める。

「今日D組の担任から苦情が来まして、〃うちの生徒がE組の生徒からすごい目で睨まれた。殺すぞと脅された〃とのことです」

「清麿、渚のことだな。しかし、あれでは渚が悪いみたいになってるではないか！」

「ああ全くだ、ふざけてやがる！先に渚に絡んだのはあいつらだというのに……」

渚に絡んだ生徒が密告をしていた。しかも、渚が悪いような言い方で。これにはガツシユペアも憤慨する。

「暗殺をしているのだからそんな目つきも身に付くでしょう。それはそれで結構。問題は、成績底辺の生徒が一般生徒に逆らう事。それは私の方針では許されぬ。以後、厳しく慎むよう伝えてください」

理事長がそう言つて職員室を出ようとすると、殺せんせーに向かつて何かを投げつける。知恵の輪だ。

「殺せんせー、一秒以内に解いて下さい！」

「そんないきなり☒」

殺せんせーは慌てて知恵の輪を解こうとする。しかし散々テンパった挙句、一秒後には知恵の輪に触手が絡まっていた。

「清麿、この一秒で何があつたのだ？」

「いや、俺にもわからなかつた……」

ガツシユは純粹に疑問の表情を、清麿は呆れ混じりの表情をそれぞれ浮かべる。マツハ20の超生物も形無しだ。

「噂通りスピードはすごいですね。確かにこれならどんな暗殺だつてかわせそうだ。でもね殺せんせー、この世の中には……スピードで解決出来ない問題もありますよ。では私はこの辺で」

知恵の輪に苦戦中の殺せんせーをそのままに理事長は職員室を出た。一方で殺せんせーが苦しみながらも、理事長への対抗心に充ち溢れた目を向ける。清麿はそれを見逃さず、口元に笑みを浮かべた。

そして理事長は廊下にて居合わせたガツシユペアと目を合わせる。そんな3人の間

には張り詰めた雰囲気が漂う。

「高嶺君、ガツシユ君。少し、外で話そうか」

「……わかりました」

彼等はそれ以外の言葉を口にする事もなく、校舎を出た。

「さて……まずは話の盗み聞きは、感心しないかな」

校舎の外、ガツシユペアと理事長の会話が始まる。彼は口に笑みを浮かべていたが、どこか威圧的だ。

「それは、すみませんでした」

「ごめんなさいなのだ」

2人とも理事長の気迫を感じ取り、すぐに謝罪の言葉を述べる。彼から漂う雰囲気は、これまで厳しい戦いを乗り越えたガツシユペアでさえ只者ではないと思わせるほどだ。

「ハハツ、冗談だよ。怒っている訳ではない。君達が廊下にいたことには気付いていた」「気付いていたのか」

先ほどの威圧的な表情が理事長から無くなる。本当に冗談だったのだろう。先ほど

まで緊張感を持っていたガツシユペアは、胸をなでおろす。

「さっきの話はね、君達にも聞いて欲しかったんだ」

「俺達に、何で？」

再び理事長の表情が変化する。先ほどの威圧的なそれとも異なっていたが、その瞳はどこまでも冷徹だ。

「君達にも私の理想を理解してほしいからだよ。君達は本来E組にいて良いような生徒ではない。だから、本校舎の生徒達の侮蔑の目は納得いかないと思う。君達ほど優秀な生徒はそう多くない。しかし、やむを得ない事情があるとはいえ今はE組の生徒だ。私の理想のためにも、本校舎の生徒達に反抗的な態度をとってほしくないんだ。君達がそのような態度を取れば、他のE組の生徒達も便乗してくるかもしれないからね」

理事長はあくまでE組が前を向くことを許さない。己の理想のために。しかし、理事長の身に何が起こればここまで徹底的になれるのだろうか。清麿は考えていたが、それ以上に理不尽な差別を強いる環境に憤りを覚えていた。

「弱者がいるからこそ強者が生まれる。わずかな弱者の犠牲により、我が校は多くの強者を輩出させられる。だから」

「E組が虐げられる環境に目を瞑れ、ですか？」

「絶対に嫌なのだ!!」

ガツシユペアは理事長を睨み付ける。2人にとって、共に暗殺を行うクラスの仲間が差別される行為は見逃せない。

「どうしてそこまでE組の味方になろうとするのかな？ 私に逆らつてまで。私の権限で君達を退学に追い込むこともできるのだというのに」

理事長は不機嫌そうな顔を見せる。彼等が堂々と嘯み付いてくる様子を見て怪訝に思う。

「君達は強い。しかしね、自分たちの力で何でも思い通りに行くとは思わない方がいい。どうにもならない不条理は確かに存在するのだから。君達はもう少し、不条理から自分の身を守ることを覚えた方がいい。なぜ自分達より劣る他人のために自らもリスクを冒すのか、理解できない」

「友達をかばつて何が悪い!?」

不快そうな表情をする理事長とは対照的に、ガツシユペアは不敵な笑みを浮かべる。2人はこれまで何度も不条理な戦いを乗り越えてきており、逆境には慣れている。そんな彼等は本校舎の関係者からのE組への差別にも抗つていくだろう。

「友達……ね。しかし、ガツシユ君。魔界の王になった場合、時には仲間を見捨てる非情な決断も必要にはなるのではないかい？」

理事長にはどうして2人がここまで自分に齒向かうのが理解出来ない。これまで

彼の理想に逆らう生徒など、存在していなかったのだから。

「それでは優しい王様にはなれないからなのだ！」

ガツシユの答えに理事長は目を見開く。

「誰かがいじめられる世界など、誰かが辛い思いをする世界などあつてはならないのだ！ 誰もが幸せに暮らせる世界を作る、そんな優しい王様に私はならねばいけない。だからその考えを受け入れることは出来ないぞ、理事長殿!!？」

「なるほど、それが君の目指す王の姿という訳か。しかし生物とは、他の生物を傷つけるものだよ。誰もが幸せになるなどでは出来ない。誰かが幸せになるということは、他の誰かが不幸になるという事だ。これは紛れもない事実なんだよ。君の目指す理想は余りにも非合理的だ」

理事長がガツシユの考えを冷たく、そして現実的に突き放す。確かに理事長の言う事も正しい。意見の対立や資源等を奪い合うための戦争はこれまで何度も存在し、人間は多くの他人を傷つけてきたのだから。ガツシユの理想が茨の道であることは、火を見るより明らかだ。

「……だからって、故意に人を虐げていい理由にはならないんじゃないですか？ それに、そんな事をしてはいはずれ反発される」

ガツシユと理事長の議論に清磨が横やりを入れる。パートナーの目指す姿を否定さ

れて沈黙を続ける彼では無い。

「反発、今のE組は暗殺の訓練で多少は強くなっている。しかし、そんなことが出来るとはとてども」

「殺せんせーがいるさ」

清磨が先生の名前を出す。彼の目は、殺せんせーを信用している目だ。清磨は先ほどの反骨精神に満ちた殺せんせーの目を見ていた。あの超生物がその気になれば、櫛ヶ丘中学校の悪しき伝統にも抗える。清磨はそう確信していた。

「理事長、あなたはE組と殺せんせーを甘く見すぎている。それに、合理性だけで人は動かない」

「随分とE組に肩入れしているね、高嶺君。君はまだ、他の生徒達とは付き合いも浅いというのに」

それぞれの理想をめぐる議論はまだ続くかに思えた。しかし、

「……やれやれ、これ以上は平行線かな。今日はここまでにしようか。しかし、私にここまで堂々と歯向かうとはね。とはいえ、今君達が学園を去るのはお互いにとつて良くない。君達も路頭に迷う訳にもいかないだろうし、私も暗殺のための戦力が削がれるのはマイナスだ。いやあ、君達との議論は面白かったよ」

理事長はこれ以上の反論を止めた。この時の理事長の表情は、今迄からは想像できな

いほど柔らかだった。自分に真つ向から反論して来る彼等に対して、煩わしく思うどころか改めて興味を示したようだった。彼等を推薦した自分の目に狂いは無いと、理事長は確信していた。

「しかし、殺せんせーがE組とともに私に齒向かう、か。なぜ君はそんな日が来ると思つたのかい？」

「職員室の殺せんせーの目は、燃えてましたよ。あなたに負けるまいと」

清麿の言葉に対しても、理事長は表情を崩さなかつた。仮に齒向かつてきたとして、返り討ちにする絶対的な自信が理事長にはあるのだ。まさしく強者の余裕である。

「なるほど……さて、君達の家まで車で送ろうか。付いて来なさい」

理事長から意外な一言が出てきた。そんな理事長の誘いに、ガツシユペアはきよとんとしてしまつた。

「良いのか、理事長殿？」

「それって、どういう……」

「何、長話に付き合わせてしまつたお詫びさ。他意はないよ」

理事長は先ほどの威圧的な態度を欠片も感じさせなかつた。それが逆にガツシユペアを警戒させてしまつたのは別のお話。2人はお言葉に甘えて車に乗せてもらい、そのまま帰宅した。

LEVEL. 4 中間テストの時間

中間テストが迫る中、生徒以上に殺せんせーの気合が入っている。加えて分身の数がこれまで以上に増加する。

「「「増えすぎだろ!!」」」

生徒たちのツツコミには目もくれず、ひたすらに勉強を教えてくれる。先生はかなり疲労している。なぜこれ程一生懸命なのか。その理由として先生は、自らの評判が上がり、殺される恐れがなくなるためだと答える。しかし内心は理事長との一件を気にしている。もちろんE組を思っただけでそうしてくれているのもあるが。しかし、

「いや、勉強の方はそれなりでいいよな」

「うん。なんだって暗殺すれば賞金百億だし」

キノコ頭の三村航輝とポニーテールの矢田桃花が、賞金の話を持ち出した。それに便乗して他の生徒も勉強には消極的な発言をし始める。全員がそう考えている訳ではないだろうが、その考え方に反対する生徒はいなかった。ただ一人を除いて。

「そんな簡単な話じゃないと思うぞ、皆」

「あ、どうしたんだよ高嶺」

「だって百憶だぜ。一生遊んで暮らせるって！」

他の生徒が反論する中、清麿が話を続けようとする。しかし、

「高嶺君はわかっているようですが、ここから先は私に言わせてください。外で話しましょうか、全員校庭へ出なさい。烏間先生とイリーナ先生とガツシユ君も呼んで下さい」

清麿の話を遮った殺せんせーは、顔にバツを浮かべて、そのまま教室を出て行く。それにいつもと比べて機嫌が良くないようにも見えた。普段あまり見せない殺せんせーの不機嫌な様子に、E組の生徒達は戸惑いを隠せない。

そして生徒達と烏間先生、ピツチ先生が外に出ると、殺せんせーが校庭のゴールを端にどけていた。そして校舎の裏山で特訓していたガツシユと合流した清麿が校庭に来る。

「全員揃いましたね。ではイリーナ先生、プロの殺し屋として伺いますが、あなたはいつも仕事をする時、用意するプランは一つですか？」

殺せんせーがピツチ先生に触手で指差しながら質問する。彼女は怪訝な顔をしながらも問いに答える。

「何よ、いきなり……そうね、本命のプランなんて思った通り行くことの方が少ないわ。不測の事態に備えて、予備のプランをより綿密に作っておくのが暗殺の基本よ。ま、あったの場合規格外すぎて予備プランが全部狂ったけど。見てらっしゃい、次こそは必ず」

「無理ですねぇ。では次に烏間先生」

ビッチ先生の決意表明をブツ切りにして、殺せんせーは烏間先生に話を振った。これに怒ったビッチ先生は地団駄を踏む。

「ナイフ術を生徒に教える時、重要なのは第一撃だけですか？」

「……第一撃はもちろん最重要だが、次の動きも大切だ。強敵が相手では、第一撃は高確率でかわされる。その後の第二撃・第三撃を、いかに高精度で繰り出すが勝敗を分ける」

「なるほどお……では高嶺君」

烏間先生の話に感心した殺せんせーは、次に清磨を触手で指差す。

「ガツシュ君が持つ術は、ただ電撃を出すだけですか？そして電撃が相手に通用しない場合は、どうしますか？」

「電撃を出す以外の術ももちろんある。電撃が通用しない相手に関しては他の手段を使ったり、電撃が通用するような工夫も施す……って、どさくさに紛れて俺達の手の内

を聞き出そうとするんじゃない！」

「又ルフフフ。残念です……」

「おい……」

（ハッ、いかん。清麿がいなければ、殺せんせーに術を教えてしまうところだった。危なかつたのだ……）

清麿にガツシユの術を聞き出すことに失敗した殺せんせーは少し拗ねた表情を見せる。その一方で生徒の多くは殺せんせーの言いたい事が理解出来ない。そんな生徒の一人、前原陽人が痺れを切らした。

「結局何が言いたいんだ!!」

「先生方や高嶺君達のように、自信を持てる次の手があるから自信に満ちた暗殺者になれる。対して君達はどうでしょう?」

彼の問いに殺せんせーは話しながら自分の体を回転させる。そして速さは増していく。

「〃俺らには暗殺があるからそれでいいや〃……と考えて勉強の目標を低くしている。それは劣等感の原因から目を背けているだけです。もし先生がこの教室から逃げ去ったら?もし他の殺し屋が先に先生を殺したら?……暗殺という抛り所を失った君達には、E組の劣等感しか残らない。そんな危うい君達に、先生からの警告アドバイスです。

第二の刃を持たざる者は……暗殺者を名乗る資格なし!!」

殺せんせーの回転は竜巻を生み出す。それも本校舎から見えるほど大きな竜巻を。それを見た生徒たちは愕然とする。

「……校庭に雑草や凸凹が多かったのですね、少し手入れをしておきました。先生は地球を消せる超生物、この一帯を平らにすることなどたやすいことです」

竜巻が収まったかと思えば、校庭はあたり一面、綺麗にされていた。その信じられない光景を見て、生徒たちは言葉を失う。殺せんせーの発言は決してハツタリなどではない。こんな先生を本当に殺せるのか、という疑問が強まる。

殺せば百億円。口にするだけなら簡単かもしれないが、実行するのは至難の業だ。次元が違う。自分たちの手で暗殺を成功させられる保証などどこにもない。生徒達にそう考えさせるのには、十分な光景だ。

「もしも君達が、自信を持てる第二の刃を示せなければ、相手に値する暗殺者はこの教室にいないと見なし、校舎ごと平らにして先生は去ります」

殺せんせーの言動に、周りの雰囲気は重くなる一方だ。しかし、その空気の中でも黙ってばかりいられないと考えて渚が口を開く。

「第二の刃、いつまでに？」

「決まっています、明日です。明日の中間テスト、クラス全員50位以内を取りなさい」
殺せんせーの唐突かつ難儀な指示に、クラス全員開いた口が塞がらない状態だ。当然である。学業が芳しくないが故にE組に落とされた生徒は多い（一部例外もいるが）。殺せんせーが何体も分身を作って生徒達に熱心に勉強を教えているとはいえ、本校舎の生徒達との学力の差は一朝一夕に埋まるものではない。そんな中本校舎の生徒達に、クラス全員に打ち勝てと言っているのだ。しかし、殺せんせーの表情には自信が溢れていた。

「君達の第二の刃は、先生が既に育てています。本校舎の教師達に劣るような教え方をしていません。自信を持ってその刃を振るって来なさい。仕事ミッションを成功させ、恥じること

なく笑顔で胸を張るのです。自分達が暗殺者^{アサシン}であり、E組であることに!!」

「そう言い残して殺せんせーは去る。しばらく彼らの間に沈黙が走るが、ガツシユペアが口を開く。

「……殺せんせー、すごかったのう。こんな先生を殺さなくてはならぬのか」

「ああ、そうだな。しかし、まずは明日の中間テストをどうにかしないと……」

清磨は頭を抱える。明日の中間テストで全員が50位以内に入らなければ、殺せんせーがE組を去ってしまう。地球を滅ぼす超生物を野放しには出来ないため、それは何としても止めなくてはならない。どうすればいいのか考えていたところ、

「やれって言われたんなら、やるしかなくね?」

「さっきの授業をサボり、どこかへ行ってしまったと思われていたカルマが姿を見せた。」

「何、皆ビビってるの?これで全員50位以内に入れば、本校舎の連中見返せるのに……」

カルマが挑発的な視線を他の生徒達に送る。彼は素行不良の為にE組に来ており、学業に関してはむしろ優秀だ。そんなカルマの視線に不快な表情を浮かべる者もいる。しかし。

「皆、どこまでやれるかわからないけど、頑張ってみよう!」

磯貝が周りを鼓舞させた。クラス委員の彼の言葉を聞いて、他の生徒達も次々にやる気を出していく。清麿も磯貝の言葉を聞いて、口元に笑みを浮かべる。そんな中、渚が清麿に質問をする。

「高嶺君、殺せんせーがさつき言つてたこと、最初からわかつてたの?」

テスト勉強をないがしろにする雰囲気の中で唯一異議を申し立てた清麿のことを、渚は気にしている様子だ。そして清麿がそれに答える。

「そうだな。殺せんせーなら契約を破つてここから逃げ出すのは容易。いつまでもここにいてくれるかどうかはわからん。そうでなくても、殺せんせーは手強い。それに、他にも賞金目当ての殺し屋も出てくるだろう。俺達が確実に暗殺を成功させ、賞金を得られる保証なんてどこにもない」

「あれえ、殺せんせーを殺すためにE組に来た高嶺君がそれ言っちゃうんだ」

清麿の話にカルマが口を出す。彼の煽り節は健在だ。

「もちろん殺す気ではいるさ。しかし、この先何が起こるかは予想がつかんからな。色んな可能性は考えておくべきだと思つた。それに、殺せんせーがあそこまで必死に授業してくれたんだ。それを無下にする雰囲気はどうかと思つたんだ」

「なるほどね。まあ、明日のテストは頑張ろうよ。それじゃ、また明日」

カルマは納得したのかどうかよくわからない返答をして、山を下りて行く。そんな彼

の後ろ姿を他の生徒達は見つめるが、内心では目標を目指してやる気に満ち溢れている。

「僕等も帰ろうか」

渚の一言を皮切りに生徒達は帰宅の準備を進める。容易な事では無いが、これは本校舎の生徒達を見返す機会にもなり得る。生徒達は勉強の話をしながら帰路に着くのだった。

翌日、中間テストの幕は切って落とされた。テストは全校生徒が本校舎で受ける決まり。つまり、E組はアウエーでの戦いとなる。しかも、試験監督の本校舎の教師がわざわざらしく物音を立てて、露骨に集中を乱してくる。最悪の環境だ。

(柵ヶ丘の試験問題は難しいな。だが、解ける。殺せんせーが教えてくれた通りの問題。この問題も、この問題もいける！)

清磨は次々と応用問題を解いて見せる。他の生徒も黙々と問題を解き進む。その様子には、試験監督も驚きを隠せない。しかし、
(何だこの問題は？クツ、どうなってやがる!!)

次の問題を見て清磨は表情を変えた。理事長が罫を仕掛けていたのだ。

「……これは一体どういう事でしょうか？どう考えても普通じゃない。テスト2日前に、出題範囲を全教科で大幅に変えるなんて。」

中間テストの結果が帰ってきた後、烏間先生が本校舎の教師と電話をしていた。テスト範囲が変更されていたのだ。しかも、そのことがE組には伝わっていない。しかし、本校舎の教師は白を切るばかりだ。加えて本校舎では理事長が教壇に立ち、短期間で変更内容を教えあげていた。E組は、理事長にしてやられた。殺せんせーの熱心な授業空しく、E組全員テスト50位以内という目標は、果たされずじまいだ。

「殺せんせー、本当に出て行ってしまふのか？」

ガツシユが泣きそうな顔で、か細い声で尋ねた。

「……先生の責任です。この学校の仕組みを甘く見ていたようです。君達に顔向けできません」

殺せんせーが生徒達に背中を見せて佇んでいた。殺せんせーはかなり落ち込んでいる。クラスの雰囲気も重い。そんな空気を切り裂くかの如く、一本のナイフが殺せんせー目掛けて投げられた。殺せんせーは驚きながらも、そのナイフをかわした。

「カルマ君!!今、先生は落ち込んで……」

ナイフを投げたのはカルマだった。そしてカルマは殺せんせーの文句を遮るように、自分のテストの答案用紙を殺せんせーに投げつけた。合計点数494点、学年4位。これが彼の中間テストの結果だ。

「俺の成績に合わせてさ、あんたが余計な範囲まで教えたからだよ。だけど、俺はE組出る気無いよ。暗殺の方が楽しいし。そうでしょ、高嶺君？」

カルマはニヤリと笑いながら清磨の方を振り向いた。彼は清磨の学力の高さには一目置いている。そして彼の返答も分かりきっていると確信していた。

「……そうだな。最も、俺にはE組を出す選択肢はないんだがな。いきなりテスト範囲外の問題が出てきたときは何事かと思っただが、殺せんせーが教えてくれた箇所も多くて助かった。やっぱり、今の俺達にはあんたが必要だ(……)位取れなかったな。まあ、次頑張るか)」

清磨もカルマと同じ点数を取っており、無事50位以内に入れていた。しかし彼が殺せんせー暗殺を放り出して本校舎に行く事はありません。

「で、どーすんの先生は？ 全員50位に入んなかったって言い訳つけて、ここからシツポ巻いて逃げる訳？ 要するに、殺されんのが怖いだけって事？」

カルマは舌を出して殺せんせーを挑発する。そんな雰囲気を感じて、他の生徒達も便乗して殺せんせーをイジリ始めた。

「なーんだ、殺せんせー怖かったのかー」

「それなら正直に言えば良かったのに」

「ねー、〃怖いから逃げたい〃って」

これには殺せんせーも顔を真っ赤にする。まるで本物のタコそのものだ。

「にゅやーっ!!逃げるわけありません!!期末テストであいつらに倍返しでリベンジです!!」

殺せんせーの言動を見た生徒達の気持ちは楽になり、クラスで笑いが起きた。ひとまず殺せんせーが野に放たれる心配は無くなった。

「これで殺せんせーは残ってくれる。良かったのだ、清磨!」

「ああ!一時はどうなるかと思ったが」

そんな中でガツシユペアはお互いの拳を軽くぶつけていた。そしてテストの結果が帰ってきた直後とは比べ物にならないほどに、クラスの雰囲気は軽くなっていた。笑いの絶えないまま、時刻は下校時間となる。

LEVEL. 5 暗殺の時間

中間テストの結果が帰ってきた日の放課後、殺せんせーはまだ教室に残っている。そして彼の後ろにはガツシユペアが立ち塞がっている。

「おや、もう下校時間は過ぎているんですがねえ、高嶺君、ガツシユ君。赤い本を持ち出しているということは、ついに殺す気で来ましたかねえ」

「殺せんせー、あんたに聞きたいことがある」

ガツシユペアは真剣な眼差しで殺せんせーを見つめる。質問に答えなければ、力づくで聞き出さんとする目つきだ。

「私には、どうしても殺せんせーが地球を爆発させる悪いものには、見えぬのだ」

「なあ、あんたは何でここで先生をやってるんだ？そもそも、何者なんだ？」

「それに答えることは出来ませんねえ。どうしても知りたければ、私を殺してから調べてください。ヌルフフ」

ガツシユペアには、殺せんせーがただ地球を滅亡させるだけの悪者には思えない。ただの悪者なら、ここまでE組に尽くす必要がないのだ。しかし殺せんせーはそうではない。いつもE組を一番に考えている。それがガツシユペアには理解出来ない。

「それなら、地球の滅亡を取りやめることは出来ないのか？地球の滅亡は、本当にあなたの意志なのか？」

事情を聞き出せないのなら、滅亡させないよう説得するのはどうか。そもそも殺せんせーが地球を滅ぼす悪党であれば、こんなところで教師をする道理が無い。タイムリミットまで逃げ続けければ良いのだから。しかし彼は逃げ出さない。加えて、教師としての仕事はとて熱心だ。何かどうにもならない事情がある。清麿はそう確信していた。地球の滅亡は避けられません。私自身にはどうしようもないことですので」

殺せんせーは断言する。今までと何ら変わらない表情で。

「本当にそうなのか？殺せんせー……」

ガツシユは悲しそうに殺せんせーを見つめる。しかし殺せんせーは否定しない。殺せんせーは地球の滅亡をやめようとしめない。そして事情も話さない。しかし、ガツシユペアは地球を滅亡させる訳にはいかない。大切な人達を守るためにも。そうなれば、もう戦う以外の道は残されていない。

「なるほど。真実を知るには、そして、地球を救うにはあなたを殺すしかないんだな。行くぞガツシユ、SET、ザケル!!」

ガツシユペアの戦いの火ぶたが落とされた。清麿は殺せんせーに指を差して、術を唱える。ガツシユの口からは電撃が放たれたが、殺せんせーは難なくかわした。

「そんな真正面からの呪文、かわすのは容易ですねえ。しかも、校舎を壊したくないんでしょうか？術の威力もセーブしているのではないですか？」

殺せんせーは得意げに清磨を煽り、教室中を超スピードで動き回る。清磨はそんな殺せんせーを睨み付ける？

「ウヌウ、これでは攻撃が当たらんぞ……」

ガツシユは悔しそうに殺せんせーを見る。しかし、

「にゅやあつー！」

殺せんせーの触手が一本はしげ飛ぶ。殺せんせーの下には、対先生BB弾が転がっていた。殺せんせーがザケルに気を取られているうちに、清磨が仕掛けていたのだ。

「隙が出来たな、殺せんせー！ザケルは第一の刃、BB弾は次の刃を充てるための手段。そしてこれが第二の刃だ！くらえ、マーズ・ジケルドン!!」

ガツシユの口から磁力の球体が出現し、殺せんせーを中に引きずり込んだ。

「これは、にゅやあつ!!」

殺せんせーが外に出ようとしたとき、電流が殺せんせーを攻撃する。このままでは先生も身動きが取れない。

「これで動きを封じた!」

清磨はBB弾の入った銃を取り出し、殺せんせーに銃口を向ける。しかし引き金を引

こうとした瞬間、殺せんせーの周りに小さな爆発が起きた。殺せんせーは何と、マーズ・ジケルドンから逃げ出していた。

(今の攻撃は厄介ですねえ。エネルギー砲を使う展開になるとは！)

殺せんせーは、そのまま空いた窓から逃げ出した。エネルギー砲を使い、マーズ・ジケルドンを打ち破っていたのだ。清麿は少し動揺したが、すぐに頭を切り替える。

「ザケルガ！」

空いた窓を指差して呪文を唱える。一直線の電撃は、窓の周りを傷つけることなく殺せんせー目掛けて撃たれた。しかし殺せんせーは、ザケルガの直撃を避けていた。少し触手にかすった程度だ。それでも殺せんせーには確実にダメージが蓄積されていく。

「ガツシユ、俺達も外に出るぞ!!」

「ウヌー！」

ガツシユペアもまた、窓から殺せんせーを追うために外に出た。殺せんせーもダメージを受けているのか、スピードが落ちている。その隙を、清麿は見逃さない。

「ガツシユ、デカいのをぶちこむ！テオザケル!!」

ガツシユの口からは、先ほどのザケルとは比べ物にならない程の高威力かつ広範囲の

電撃が放たれた。

(この電撃はマズイ!!)

殺せんせーは冷や汗をかいた。直ぐに回避の体制に入ったが、完全にはかわし切ることは叶わない。どうにか電撃を逃れた殺せんせーは、森の方へ逃げて行く。これが彼等の罠とも知らずに。

「ふむう、あの球体とさつききの電撃はヤバかったですねえ。ダメージも小さくない」

殺せんせーは森の中で休息をとる。電撃のダメージのみならず、エネルギー砲を使用したことによる消耗もある。その小さくないダメージは注意力を鈍らせる。殺せんせーを見るいくつもの視線に気付かなくなる程に。そして2発のBB弾が放たれる。撃つたのはクラス髓一のスナイパーコンビ、千葉龍之介と速水凜香だった。

「やったか」

2人は顔を出したが、殺せんせーはこれをギリギリでかわしていた。

「にゅやッ！君達までいるとは！」

「俺達だけじゃないぞ！」

千葉がそう言うのと他のE組の生徒達も現れ、殺せんせーを取り囲んで一齐に射撃を開始した。殺せんせーは鼻が利くので、平常時であれば生徒達を見つけるのは容易い。しかし蓄積されたダメージにより注意力も散漫になり、生徒達の潜伏に気付くのが遅れ

た。それでも殺せんせーは、テンパリながらもギリギリで弾幕を避けていた。そして先生の傷が癒えてきたのか、動きが更に早くなっていく。

「皆、どうだ!!」

ガツシユペアが追い付く。しかしこの大量の弾幕ですら、殺せんせーはかわして見せる。

「(バカな、まだダメージが足りなかったというのか?! ならば) ガンレイズ・ザケル!」
ガツシユの体から電撃の弾が放出されたが、殺せんせーには当たらない。

「ヌルフフ。傷も癒えてきました。これでBB弾はちゃんとかわせますよ」

殺せんせーの顔に余裕が出来始める。ダメージは完全には回復していないだろうが、BB弾をかわすには十分だ。清磨は殺せんせーの力量を見誤っていた。

マーズ・ジケルドン、BB弾、ザケルガ、そしてテオザケル。どれも殺せんせーを倒すための強力な攻撃だ。それ一つ一つがかわされても、ダメージを蓄積させることは出来る。そして森への誘導。満身創痍である殺せんせーを他のE組の生徒達がBB弾の一斉射撃で仕留める。これこそが清磨の狙いだった。

しかし電撃でのダメージは回復してきている。殺せんせー相手にはまだまだダメージが足りなかったのだ。追撃にガンレイズ・ザケルを使用した^{アンサートリガー}が、これもかわされた。(くッ、ここまでののか?! 答えを出す者) を使いこなせるようになっていれば、こんな事

になつてなかつたかもしれないのに！」

清麿はまだ、「アンサーカ【答えを出す者】を完全には使いこなせていない。清麿が諦めかけていた。暗殺のための刃を尽くかわされた。そしてBB弾も限りがある。そんな中、

「あれえ、諦めちゃうの？高嶺君」

カルマが清麿を煽る。そして、

「清麿、諦めるでない！皆まだ頑張つておるぞ!!」

諦めの表情を浮かべていた清麿に対しての、ガツシユの叱責。そしてガツシユの声に呼応するかの如く、赤い本の光が増していた。他の生徒達も、ガツシユの声を聞いて笑みを浮かべる。

「ガツシユ君で、根性あるよね。高嶺君も見習わないと」

「……ああ、その通りだな。すまないガツシユ、赤羽。まだ諦めちゃいけなかつた！」

カルマの煽りとガツシユの叱責により、清麿は再び自信を取り戻す。そして新たな一手を考える。アンサーカ【答えを出す者】を使いこなせなくとも、次の手を繰り出す事は出来る。

「私たちも負けてられない！皆、頑張ろう！」

清麿達のやり取りを見てクラス委員長の片岡メグが、リーダーシップを発揮して他の生徒達に声をかける。その一方で、清麿は赤い本の輝きが増していることによく気が付いた。

「これは、新しい呪文!? よし、これなら……」ガツシユ、殺せんせーの後ろに回り込むんだ!!」

「分かったのだ!」

ガツシユが後ろに回り込むと同時に清麿が呪文を唱える。

「ガツシユ、新しい呪文だ! 第12の術、オルダ・ラシルド!!」

ガツシユの前に電撃の盾が出現し、それに触れたBB弾に電撃をまとわせる。

「うおおおおおおおッ!!」

清麿が叫ぶと、電撃をまとったBB弾が一斉に殺せんせーに向かった。この術、オルダ・ラシルド。たった今出現した呪文ではあるが、清麿は呪文にラシルドの名前があったので、これをラシルド系列の呪文と考えた。

そしてオルダの呪文は、出した術を自分で操作する呪文につけられる。清麿はパティが使用したオルダ・アクロンと言う鞭状の水を操る術を覚えていたため、新たな術の効果を予測出来た。そして予測は当たっていた。

この術の見た目はラシルドと変わらないが、跳ね返した攻撃を術者が操ることが出来る。普通のラシルドでは、跳ね返した攻撃はコントロール出来ないため、流れ弾が味方に当たる可能性がある。その欠点を克服したのがこの術だった。

「……ふむ、脱皮まで使わされることになるとは。月に1度しか使えないというのに」

殺せんせーが脱皮した抜け殻を使ってBB弾を受け止めていた。この術の欠点は、術者が攻撃を操作しなければならぬことそのものである。操作するひと手間により、通常のラシルドが跳ね返す攻撃に比べて、攻撃が1テンポ遅れてしまうのだ。この遅れは、殺せんせー相手には致命的だ。その遅れにより、殺せんせーの脱皮を許し、抜け殻でBB弾を受け止められてしまった。それだけなら、追撃が可能だったかもしれない。

「くっ、弾が!!」

しかしながら、E組の生徒達のBB弾が尽きた。また脱皮後は殺せんせーのスピードが落ちるとはいえ、正面から術をかけても簡単に避けられてしまうだろう。ラウザルクでガツシユの肉体強化を行っても、警戒心全開の今の殺せんせーに攻撃が当たる可能性は高くない。通常の殴り合いと同じという訳にはいかない。いくら肉体強化をしても、ナイフを超生物にあてるのは現状至難の技だ。ガツシユ達がナイフ術を習ってから、まだまだ日にちは浅すぎた。

「脱皮にこんな使い方まであるとは。ここまでか……」

「ウヌ、次は成功させて見せようぞ……」

ガツシユペアがそうつぶやき、今日の暗殺は終了した。清麿は脱皮の存在を知っていた。渚の自爆の時に耳にはしていた。しかし、実際に脱皮を使用する場面を目撃していない。故に脱皮をこのタイミングで行い、BB弾を受け止めることを予測出来なかつ

た。そのことが今回の失敗の原因となった。

「すまない、皆にも手伝ってもらったというのに」

「いや、お前らがいなければここまで追い詰められなかったって……」

「やっぱ呪文の力ってスゲーわ」

清麿の謝罪に対して、坊主頭の岡島大河と長身の菅谷創介はフオローをいれてくれた。また彼等は呪文の力に素直に感心していた。

「今回もダメだったかー」

「いいとこまでいったと思っただけどね〜」

「中々上手くいかないものだねえ」

中村と小柄な短髪の女生徒の岡野ひなた、ふくよかな女生徒の原寿美鈴が3人して悔しがる。殺せんせーの手の内をいくつか引つ張り出す事も出来、途中までは割と順調に暗殺が進んでいた。

「いやあ、中々危なかつたですよ。脱皮まで使わされましたからねえ。高嶺君の考えた作戦ですか？」

「ああ、中間テスト終わってすぐを狙ったんだ。まさか先生もいきなり暗殺に来るとは

思つてなさそうだったからな。そしてガツシユの電撃である程度ダメージを与えてから皆がいるところに誘導する手はずだったんだが、ダメージが足りなかった。しかも、折角出てきた新しい呪文まで対策されちまったし。まさか脱皮にこんな使い方があるとは」

電撃をまとつたB B弾が抜け殻で全て防がれるなどと、清磨は予測出来なかった。殺せんせーは規格外もいゝところである。

「では先生は帰ります。皆さん、B B弾の後始末はお願いしますね」

殺せんせーはそのまま超スピードで帰つていった。先生の速度を見た生徒達は、暗殺までの道のりを遠く感じた。

（今のガツシユがラウザルクを使つても、あのスピードに敵うかどうか。電撃の威力も足りてなかったみたいだし。まだまだ、俺達には特訓が必要だな……）

「高嶺君、ガツシユ君はまだ強い呪文持つてるでしょ。使わなくてよかつたの？」

清磨が特訓の重要性を自覚していると、カルマが意地の悪そうに話しかけてきた。彼は度々何かを見透かす様な態度を取る事がある。

「ああ、強い呪文はある。ただし、これまでの呪文よりも速度は劣るうえ、周りが被害を受ける可能性もある。そのために中途半端に加減するくらいなら、速度の速い術で攻めた方がいいと思つてるから使わなかつた」

バオウ・ザケルガは強力な術だ。しかし、強力すぎるがゆえに、周りへ被害が及ぶリスクも高い。それなら、ガツシユペアだけで殺せんせーの暗殺を試みてはどうか。しかし殺せんせーの速度では、ガツシユペアだけでバオウ・ザケルガを当てるのは容易ではない。だから小回りの利く他の呪文を使いながらクラスの皆で協力する方が、暗殺の成功率が高まる。それが清磨の考えだ。

「あくまで高嶺君は、皆で協力した方がいいと思ってるんだね」

「その通りだ。俺とガツシユだけではあの先生は殺せない」

そんなカルマと清磨のやり取りを聞いて、他の生徒達も会話に加わる。ガツシユペアの実力を見て、多くの生徒達は思うところがあるようだ。

「でもよ、そんなすげえ力を持てば何でも自分とガツシユだけ出来そうだって、俺なら思っちゃうかもしんねえな。高嶺ってそんなにすげえのに、かなり協調性あるよな」

「あー、それ分かる。高嶺君て何でも器用にこなす割に、結構周りを頼る節があるよね」
クラスで最も足の速い木村正義と片岡がそんな会話をする。

「赤羽にも言ったが、俺とガツシユだけで暗殺を成功させられるとは思ってない。そうでなくとも、力に溺れたら終わりだ。それではガツシユを王にしてやれない……何より、今までの戦いで、仲間の大切さは十分すぎるほど実感してる」

清磨は少し照れ臭そうにする。これまでの戦いで、ガツシユペアは何度も仲間を助け

られてきた。そんな彼等にとって仲間の存在は極めて重要だ。

「高嶺君。そのセリフ、漫画の主人公みたいだよ！」

不破が目を輝かせる。そして不破の発言に便乗するかのようになぜか清麿がいじられる流れになってしまった。

「よっ、主役はカッコいいぜ！」

「さすが高嶺、略してさす高！」

「やかましい!!？」

他の生徒達は清麿を持ち上げる発言をしていたが、もちろん清麿をいじるためだ。清麿は顔を赤くするが、あまりにいじられすぎて彼の堪忍袋の緒が切れてしまった。

その一方で、清麿とは別の場所でガツシユは渚と茅野と話していた。

「ガツシユ君、すごい電撃だったよー」

「そうだねー。ガツシユ君でこんなに可愛いのに、すごく強いんだね！」

「しかし、殺せんせーには負けてしまったのだ。私達はもつと強くならねばならん……」

ガツシユは今回の失敗を気にしている。そして彼は今まで以上に力を付けるべきだと誓う。彼等の成すべき事の為にも。

「ガツシユの言う通りね。もっと訓練しないと……」

「そうだな。あそこで弾を避けられてはいけなかった」

ガツシユの発言を聞いて速水と千葉は決意を固める。ガツシユの発言に彼等も影響を受けている。彼等が気合を入れるその様は仕事人そのものだ。

「相変わらずだね、2人は」

「うん、そうだね」

渚と茅野は苦笑いをしながら千葉と速水に視線を向ける。そして皆で喋りながらも、BB弾の片付けは終了した。

片付けたBB弾はガツシユペアが校舎の倉庫にしまうことになり、この場は解散となった。

「清麿、悔しいのお」

「ああ、俺達はもつと強くならなくちやいかん。殺せんせーの暗殺、そしてクリアに勝つために！」

ガツシユペアは悔しさを感じながら、校舎を出た。今回の暗殺を経て、彼等は改めて自分達の実力不足を実感する。このままでは守りたいものを守る事は叶わない。

「清麿、帰ったら直ぐに特訓をしようぞ。デュフォーも待つておる」

「もちろんだ。それに、デュフォーに新しい呪文が出たことも伝えねばならん」

2人は決意を新たに、特訓のために家を目指した。魔界と地球の滅亡を防ぐ為にも。

LEVEL 6 旅行の時間

「知つての通り、来週から京都2泊3日の修学旅行だ。君等の楽しみを極力邪魔はしたくないが、これも任務だ。よつて、ガツシユ君にも参加してもらう」

体育（暗殺の訓練）の授業の終了時、烏間先生から修学旅行についての話がなされた。修学旅行時に殺せんせーが生徒達の決めた班ごとに回るコースに付き添う事、その際に国がプロの狙撃手を手配する事、成功時に貢献度において賞金が分配される事、そのために生徒達には暗殺向けのコース選びが依頼されている事を説明した。

「烏間先生。暗殺つて、俺達もやつていいの？」

「ああ、ただし教室とは違つて目立たないようにしてくれ。ばれたら大変なことになる」
「オツケー」

カルマは旅行中も先生を暗殺する氣でいるようだ。彼のやる氣は大した物だ。そんな中、

「ケツ。カルマの奴、粋がりやがつて」

「ああ、俺らには出来っこねーのにな」

暗殺に積極的ではない寺坂グループであるドレッドヘアの吉田大成とラーメン屋の

息子の村松拓哉が、ひそひそ話をする。やさぐれている彼等にとつて、殺せんせーの存在は疎ましい。

(修学旅行か、烏間先生はガツシユも参加させると言つたが、俺達にはそんな余裕はあるのだろうか。いや、暗殺絡みなら参加すべきなのか。どうしたものか……)

クリア打倒のための特訓をしなければならぬ清麿は、修学旅行を休むことも視野に入れる。それ程にクリアは手強い。

そして烏間先生の説明が終わり次第生徒達は教室へと戻り、班決めを行う。清麿が修学旅行の参加について考えていると、渚が話しかけてくれた。

「高嶺君とガツシユ君、良かったら僕と同じ班にならない?」

「……悪い渚、俺とガツシユは旅行に行けるかわからん」

「ウヌウ……」

渚がガツシユペアを誘つたが、清麿は修学旅行の参加を決めかねている。確かに殺せんせーの暗殺のためなら参加するべきなのだが、クリア打倒のための特訓もある。あまり時間を空けても良いものなのか、清麿は頭を悩ませる。そんな中、カルマが清麿の肩を組んできた。

「高嶺君、それって魔物絡みだったりする？」

「ああ、そうだ。今残っている魔物は強敵だし、かなり危険な相手でもある。そのための特訓に穴をあけていいものか……」

清磨は申し訳なさそうにするが、渚とカルマは特に気にしていない。彼等もある程度ガツシユペアの事情が分かっており、気を使ってくれた。

「そっか。でも高嶺君、参加出来そうなら言ってね」

「ありがとう、渚！」

清磨は渚に礼を言うと、ガツシユとともに廊下に出た。ガツシユペアも本心は修学旅行に参加したいために、内心頭を抱える。

「ガツシユ、てつきり行きたいとねだるもんだと思っただが……」

「私も行ってみたいのだが、クリアのこともあるからの。私達はもつと強くならねばならん。清磨の決定に私は従うぞ」

「わかった、デュフォーに聞いてみよう」

考える事はガツシユも同じだ。そして清磨はデュフォーに相談する為に電話をかけた。

『どうした清磨？この時間はまだ学校だろうに』

「ああ、実はな……」

清麿はデュフオーに修学旅行のことを説明する。

『なるほどな。奴の暗殺が絡むなら参加一択だ、清麿。旅行の日程に合わせたトレーニングのメニューも考えておく。旅行中において、お前達はそれをこなせば問題はない。それにお前達のクラスでの日常を欠くことは、あつてはいけないからな。それ以外にも、遠出をする場合は連絡をくれ。俺がそれに合わせたメニューを考える。ちゃんとクラスメイトとの交流を深めておけよ?』

「わかった、ありがとうな。メニューの方はよろしく頼む」

デュフオーは清麿に参加を促す。クリア打倒の特訓も大事だが、殺せんせー暗殺のためめの旅行もまた、欠かしてはいけないというのが彼の出した答えだ。そして清麿は電話が切れたことを確認すると、ガツシユの肩を叩く。

「ガツシユ、修学旅行に参加出来るぞ!!」

「おおつ、やったのだー!!」

2人はそのまま教室に入る。特にガツシユは喜びの表情を隠しきれていない。

「その表情は、旅行には行けそうかな?」

「2人とも、良かったよ!」

2人が修学旅行へ参加できると察したカルマと渚が、ガツシユペアに駆け寄る。特に渚は彼等の参加を心待ちにしてくれていた様子だ。

「ウヌ、楽しみなのだ！」

「ああ、よろしくな！ところで、班員は誰なんだ？」

「ええとね。君達と僕とカルマ君と、杉野と茅野に……」

渚がガツシユペアに班員を教える。すると、

「あ、奥田さんも誘った！」

茅野と杉野、そして茅野に誘われた眼鏡をかけた女生徒の奥田愛美が渚達の所へ来た。

「皆さん、よろしくお願いします！」

「ウヌ、よろしくなのだ！」

奥田は少し恥ずかしそうに挨拶をする。彼女は理科が得意な大人しい生徒だが、少し内気な面がある。また、得意の理科の知識を生かして殺せんせーの毒殺を試みたが、あえなく失敗した。

「班員は後もう一人いるぜ！この時のために、だいぶ前から誘っていたのだ」

杉野がいきなり得意げに話し始める。

「クラスのマドンナ、神崎さんでどうでしょう？」

彼はE組唯一のマドンナ、神崎有希子を連れてきた。

「みんな、よろしくね」

「よろしくなのだ！」

神崎が挨拶をすると、渚と杉野の顔が少し赤くなる。神崎は性格も良く、かなりの美人だ。クラスでは目立たないが人気は高い。こうして、無事に修学旅行の班は決まった。

1班 磯貝、前原、木村、片岡、岡野、倉橋、矢田

2班 岡島、三村、菅谷、千葉、速水、中村、不破

3班 寺坂、吉田、村松、竹林、狭間、原

4班 渚、カルマ、杉野、茅野、奥田、神崎、清磨&ガツシュ となった。

そして各班、回るコースを決める話し合いを始める。京都には数多くの名所がある。その中から選りすぐりの、しかも暗殺に適したコースの選択となると、決めるのは容易ではない。生徒達の話し合いが盛り上がっている中、殺せんせーが一人一冊、かなり分厚い本を生徒に手渡した。

「この厚さ、何なのよこれ……」

魔女のような雰囲気をもった女生徒、狭間綺羅々が呆れたように呟く。

「修学旅行のしおりです」

「『辞書だろこれ!!』」

生徒達のツツコミを無視して、殺せんせーはしおりの説明を続ける。イラスト解説の全観光スポット、お土産人気トップ100、旅の護身術入門から応用までなど、修学旅行に関する多くの項目が事細かく記載されていた。

「先生はね、君達と一緒に旅できるのがうれしいのです」

修学旅行が楽しみなのは、殺せんせーも一緒だったのだ。

そして修学旅行当日、新幹線の駅。AとD組はグリーン車での移動だが、E組は普通車での移動となる。そのことで本校舎の連中がマウントを取ってきたのは、どうでも良い事だ。またビッチ先生がド派手な格好で同行しようとしていたが、烏間先生の逆鱗にふれてしまい、着替えさせられていた。一方殺せんせーは変装して新幹線に乗車していたが、彼の変装はあまりにも不自然だ。

「殺せんせー、ほれ。まずはその、すぐ落ちる付け鼻から変えようぜ」

先生の変装を見かねた菅谷が、即席で作った新しい付け鼻を殺せんせーに渡す。

「これは凄いフィット感!!」

「顔の曲面と雰囲気にあうように削ったんだよ。俺、そんな作るの得意だから」

菅谷は美術の才能に長けている。だから彼にとつては、ピッタリ合う付け鼻を作ることなど造作もない事だ。これには殺せんせーも大満足である。

「おおつ、菅谷、そんな事が出来るのか!」

「ガツシユ、お前の付け鼻も作ってやろうか?」

「良いのか?」

ガツシユも菅谷の付け鼻に興味津々だ。そして彼に付け鼻を作ってもらい、ガツシユは早速それを身につける。そんなガツシユは生徒達の注目の的だ。

クラスの多くがガツシユの付け鼻の話をしている中で、神崎、茅野、奥田は飲み物を買うために席を立つ。またその時、飲み物を買いに行く途中に神崎が柄の悪そうな他校の生徒と肩をぶつけてしまう光景を、清麿は目撃する。

「どうしたのだ? 清麿」

「いや、随分柄の悪い連中がいますと思つてな」

「ウヌ。確かにあの者たち、悪そうな顔をしておるのう」

ガツシユは付け鼻をしたままの状態で清麿に尋ねる。そして彼は清麿の指差す方向を見ると、柄の悪い生徒が4班女子に視線を向けていた。それに気付いていない女子たちが席に戻ると、清麿が先ほどの不良達について聞く。

「なあ、お前ら。あの柄の悪い奴らに、何かされなかつたか?」

「ああ、高嶺君。あの人達と肩をぶつけちゃったんだよね。でも、特に何もされなかつたから大丈夫だよ。心配してくれてありがとう」

「そうか、それなら良いんだが……」

神崎の返答に、清磨はひとまず納得したように答えた。だが彼は内心嫌な予感が頭をよぎる。何か良くない事が起こりそうで気が気でない。

「変な奴らが絡んできても、俺が守るよ！」

杉野が神崎の方を向いて、顔を赤くしながら拳を握りしめる。そんな杉野の事を神崎は嬉しそうに見ている。なお杉野の好意に神崎が気付く気配は現状無い。

「まだそれ付けてたんだね。今のガツシユ君の顔、面白ーい！」

「あはは、そうですよね！」

ガツシユはまだ付け鼻を外しておらず、茅野と奥田に笑われる。そして4班の皆は、楽しそうに話しながら到着を待ち続ける。不良達が離れた席から見ていることも知らずに。

「なあ、あの娘らに京都で勉強教えてやろうぜ」

「ぎゃはは、俺達バカが一体何を教えんだよ」

「バカつてさあ、実はケツコー何でも知ってたんだぜ」

清磨の嫌な予感は的中していた。不良達は明らかに4班女子を狙っていた。しかも

不良の1人は、神崎の手帳を持っている。肩をぶつけたときに、神崎が落としてしまった。この事により4班の行動は彼らに筒抜けとなってしまう。

修学旅行一日目の宿にて、殺せんせーはグロッキーだ。新幹線やバスに乗っているうちに、乗り物酔いを起こしていた。殺せんせーは乗り物に弱い、新たな弱点の判明だ。「ウヌ、ひなた。今ならナイフを当てられるかもしれぬぞ」
「やってるけどダメ、全然当たんない」

弱っている殺せんせーにガツシユと岡野がナイフでの攻撃を仕掛けるが、全てかわされる。そんな殺せんせーの隣では、神崎が探し物をしていた。

「どう、神崎さん？日程表見つかった？」

「……ううん。確かにバッグに入れてたのに……」

「どこかで落としてしまったのでしょうか？」

神崎が探しているものこそ、先ほど不良達に拾われてしまった手帳である。そこに神崎は修学旅行の日程をまとめていた。そんな几帳面な神崎に、殺せんせーは感心する。

「でも」安心を。先生手作りのしおりを持てば全て安心」

「それ持って歩きたくないからまとめてんだよ!!」

岡島と前原がツツコミを入れる。しおりは厚くて重い為、多くの生徒達が持ち歩くのを敬遠している。

場面は変わって、新幹線にいた不良達は日程表が書いてある神崎の手帳を見ている。

「ふーん、あのガキら、明日はこんな風に回るわけね」

「ゲヘヘ、よくやるわりユウキ。ま、男子校の修学旅行なんてウンザリしてたから丁度良
いけどよ」

「俺って優しさの塊だからよ。ああいう頭良さげなガキ見るとな、無性に救ってやりた
くなるんだよ」

リュウキと呼ばれた顔に傷のある不良のリーダー格が、4班女子に狙いを定める。

修学旅行2日目、4班は【近江屋】の跡地に来ていた。

「ここでは1867年、坂本龍馬が暗殺されたと言われている。さらに歩いてすぐの距離には、信長暗殺の本能寺もあるよ。当時と場所は少しズレてるけど。このわずか1km
ぐらいの範囲の中でも、ものすごいビッグネームが暗殺されてる。知名度が低い暗殺も

含めれば、まさに数知れず。ずっと日本の中心だったこの街は、暗殺の聖地でもあるんだ」

「なるほどなく。暗殺なんて縁のない場所かと思つてたが、こりや立派な暗殺旅行だ」

「渚、良く調べてるな」

「あはは、まあね」

渚の情報収集能力に、杉野と清麿が感心する。彼は結構マメな一面がある。実際には、殺せんせーの弱点を自分の手帳にまとめている。もちろんその手帳には、乗り物酔いも加えられていた。

「暗殺と言えばさあ、ガツシユ君」

「ウヌ？」

「君が魔界で王様になったら、暗殺されるリスクもあるんじゃない？」

カルマのその発言に、ガツシユは顔を真っ青にする。自分も将来暗殺されるのかと、気が気でない。カルマは時折ガツシユをからかう事がある。

「偉い人は基本、命を狙われやすいからね」

「ノオオオオオ！清麿オ、私はどうすれば良いのだー!!」

「こらガツシユ、あんまりくつつくんじやない！」

カルマの言葉にガツシユは怯え切つて、泣きながら清麿に抱き着く。ガツシユには泣

き虫な一面がある。そんな彼のリアクションを、カルマが面白そうに見ている。

「おいおい、あんまりいじめてやんなよー」

「そうだよお、ガツシユ君が可哀そうだって」

茅野と杉野が、苦笑いしながらガツシユをなだめる。しかしカルマは舌を出すだけで、ガツシユをからかう事を止めるつもりは無い。

「……でもガツシユ君が王様になったら、きつと素敵な国になるんだろうな〜」

「ガツシユ君が王様なら、多分暗殺なんて起こりませんよ」

「ウヌ、私は優しい王様になるのだ!」

そんな中で神崎と奥田がガツシユが王様になった場合の事を話をする。それを聞いたガツシユは、さっきまでの怯えが嘘のように堂々と宣言をする。清麿に抱き着いたままではあるが。そして一行が歩いていると、

「あら、高嶺君とガツシユ君?」

聞き覚えのあるのんびりとした声が、ガツシユペアを呼ぶ。

「ホントだ、高嶺達じゃねーか!」

「こんなところで会うなんて、奇遇だね〜」

「おおっ、お主達は?!」

「お、お前らも修学旅行だったのか?!」

ガツシユペアは驚きを隠せない。そこには清麿の前のクラスメイトの水野、山中、岩島、金山、そして水野の親友の仲村マリ子がいたのだから。偶然にも、彼等もまた同じ日にち、同じ場所での修学旅行だったようだ。

「高嶺君達の知り合い？」

「ああ、前の学校のクラスの奴らだ。こんな所で会うとは思わなかったがな」

「だったらさあ、高嶺君とガツシユ君。少し彼らと話していきなよ」

「いいのか、赤羽？」

渚が水野達のことを問う中で、カルマが意外な提案をする。いくら清麿の昔のクラスメイトとの遭遇とはいえ、今は修学旅行中。しかも殺せんせーの暗殺も絡んでいる。勝手に抜け出すのはいかなものか。清麿がそう考えていた時、カルマが清麿に耳打ちをしてきた。

（何かあったら呼ぶからさ。それに、俺らはもうすぐ殺せんせーと合流する。そのときに君達が後から合流すれば、あのタコを挟み撃ちに出来るからね）

「なるほど、わかった。じゃあ皆、俺とガツシユはあいつらと話をしてくる」

清麿はいったん渚達と別れて、水野達に合流する事を決めた。

「久し振りだな、皆」

「こんな所で会えるなんて、思わなかったよ」

「私もなのだ！」

近くの広場に場所を移した後、ガツシユと水野は抱き合う。他の皆も、嬉しそうな顔を見せる。軽く挨拶を済ました後、清麿達はお喋りを続ける。そして話題は、修学旅行前の中間テストの話となった。

「えー！高嶺君がテストで一位取れなかったの!？」

「ま、マジかよ。嘘だろ……」

「進学校はバケモノの巣窟だ……」

「ツチノコ取りに行つてる場合じゃねえんじやねえのか……」

清麿がこの前の中間テストで一位を取れなかった話を聞いて、水野達がこの世の終わりのような顔をする。彼等にとって清麿が学年トップを逃すなど、それほど予想外な出来事なのだ。とは言え清麿含むE組の場合、いきなりテスト範囲が変わった事が伝達されなかったり、アウエーな環境でテストを受けなくてはならないというハンデもあるのだが、水野達はそれを知る由も無い。

「皆、少し大袈裟じゃない？でも高嶺君が一位取れないなんて、やっぱり進学校はレベルが高いんだね」

「ああ、そうだな。テストの問題も難しかったぞ」

愕然とする水野達を見ながら、清麿は仲村と話す。そんな彼等の雑談が続く中、清麿の携帯電話に突如着信がかかってくる。彼等の平穏な時間は長続きしない様だ。

LEVEL. 7 救出の時間

「……なるほど、わかった」

清麿に電話を掛けたのはカルマだ。ガツシユペアと別れた後、4班は新幹線にいた不良に絡まれた。暗殺の訓練を受けていた渚達だったが、大人数相手に気絶させられてしまった。そして不良達は茅野と神崎を拉致した。これを聞いて清麿は怒りの感情に飲まれそうになるが、何とか堪えて殺せんせーのしおりを思い出す。それには、班員が拉致された時の対処法も書いてある。

「高嶺君、どうしたの?」

「清麿、何かあったのか?」

明らかに表情が変わった清麿に水野とガツシユが声をかける。他のメンバーも清麿を心配そうに見ていた。

「済まない皆、すぐに行かないといけなくなつた。せつかく久し振りに会えたのに申し訳ない。行くぞガツシユ、事情は走りながら話す!」

清麿は焦りを抑える事が出来ないまま水野達に別れを済ませます。そしてガツシユとともに走り去る。そんな2人の様子を水野達は何事かと思いつながら、訳を知る事は叶わ

ない。

「高嶺君、どうしたんだろう？何かトラブルに巻き込まれたのかな？」

「すごく急いでたもんね。心配だったら後で電話してみたらず？」

「うん、そうする」

「高嶺君なら大丈夫だって」

不安気な顔をする水野を仲村が励まそうとする。他の男子たちも怪訝に思いながらも、走り去るガツシユペアを見ている事しか出来なかった。

その一方で清麿は走りながらガツシユに事情を話す。訳を知ったガツシユもまた清麿と同様に怒りをこみ上げる。

「何だと、すぐに助けに行かねば！」

「ああ、殺せんせーへの連絡は赤羽達が済ましてくれてる。場所もいくつか心当たりがある。急ぐぞー！」

殺せんせーのしおりには、拉致があつた時の潜伏場所の候補まで書いてある。〃備えあれは憂いなし〃と言うが、これは気が利き過ぎであろう。そしてガツシユペアは候補の内、今一番近い場所に向かう。

そしてある廃墟に着くと、そこで不良達が屯していた。彼等は何か話している様子だが、残念ながら聞き取れる距離では無い。そこでガツシユペアは不良達の話が聞こえる距離まで近付く。

「今回さらった女2人、めっちゃ良くね？」

「ああ、特に黒髪ロングの方は好みだわ」

「俺は緑髪の小っちゃいのがいいと思うけどな」

不良達の話から、彼らが茅野と神崎を連れ去った事を清麿は確信した。清麿は今にも怒鳴り散らしたくなる気持ちを抑えてガツシユに指示を出す。

「ガツシユ、上を向いてくれ」

「分かったのだ」

「ザケル！」

清麿はガツシユに空中を目掛けてザケルを打たせた。狙いは渚達に場所を知らせる事だ。清麿は前にも一度、遊園地で魔物達の襲撃を受けた際に同じ方法でティオペアに居場所を知らせたことがある。そして突然の電撃に不良達は腰を抜かす。

「いきなり電撃が……な、何だ、お前たちは!？」

「お主達、今すぐカエデと有希子を開放するのだ！」

「は、俺らが攫った女の事か……あ!!」

電撃に動揺していた不良達は、茅野と神崎を連れ去ったことを図らずも自白してしま
う。それを聞いたガツシユペアは怒りを露わにする。

「お前等ふざけやがって！少し痛い目を見てもらう、ザケル！」

「「ぎやあああああつ!!」」

不良達に後遺症が残らない程度に加減した電撃をガツシユペアはお見舞いする。し
かし加減した電撃でも不良達を戦闘不能にするのは十分だ。

「清麿、早く救出に向かおうぞ！」

「ああ、わかつている」

先程の不良の話を聞く限り、このままでは茅野と神崎の身に何が起こるか分からな
い。彼等は早急に建物に突入しようとする。しかし救出に向かおうとする2人に近付
くいくつかの人影があった。

一方廃墟の中では神崎が自分の過去を茅野に話していた。

「神崎さん、そういえばちよつと意外。さっきの写真、真面目な神崎さんにもああいう時

期があつたんだね」

「うん。うちは父親が厳しくてね。良い学歴、良い職業、良い肩書ばかり求めてくるの。そんな生活から離れたくて知ってる人がいない場所で格好も変えて遊んでいたの……バカだよ、遊んだ結果得た肩書は「エンドのE組」。もう自分の居場所がわからないよ」

そうなるきっかけは、不良達が見せた一枚の写真である。そこには、今では想像できないような派手な格好の神崎がゲームセンターにいる所が写っていた。この不良達は以前から彼女に目を付けていたようだが、実際に攫う前に神崎はそこには来なくなつた。そして2人の会話に不良達が混じる。

「俺等と同類になりやいーんだよ。俺等もよ、肩書とか死ね！つて主義でさ。エリートぶつてる奴等を台無しにしてよ、なんてーか、自然体に戻してやる？みたいな。俺等そういう教育^{アソビ}沢山してきたからよ。台無しの伝道師って呼んでくれよ」

(……さいつてー、一緒にすんな)

不良達の聞くに堪えない話に我慢出来ず、茅野の心の声が漏れる。それを聞き逃さなかつたリーダー格のリユウキは、茅野を殴りつけて首を絞める。

「何エリート気取りで見下してんだ、ああ？お前もすぐに同じレベルまで墮としてやんよ」

そのまま怒りに身を任せて、リュウキは茅野をソファに投げ飛ばした。

「いいか。今からツレが来るから、俺等全員を夜まで相手してもらおう。そして宿舎に戻ったら涼しい顔でこう言え。『楽しくカラオケしてただけです』ってな。そうすりゃだくれも傷つかねえ。東京に戻ったらまた皆で遊ぼうぜ。楽しい旅行の記念写真でも見ながら……なア」

場面はガツシユペアに戻る。建物に突入しようとした瞬間、先程近付いていた人影達が2人に声をかける。

「あれえ、俺等待たずに行っちゃうの？」

「さっきの電撃、やつぱり高嶺君達だったんだ」

「こいつら、死んでないだらう……」

「ここに、茅野さんと神崎さんがいるんですね……」

電撃に気付いてここまで来た渚達がここまで来てくれた。しかし、奥田はどこか落ち込んでいる様子だ。

「すまん、急ぐことしか考えてなかった……あと奥田、大丈夫か？」

「すみません、私は大丈夫です。不良達が来た時に思いつきり隠れてしまっていましたの

で……」

奥田が申し訳なさそうにしているので、清麿が事情を聞く。不良達の襲撃を受けた時、その恐怖ゆえに奥田は別の所に隠れてしまったのだ。そして渚達は気を失い、茅野と神崎は連れ去られた。彼女はその事で責任を感じている。

「愛美、落ち込まずとも今から2人を助け出せばよい！よし、皆でカエデと有希子を助けに行くのだ！」

全員が合流したところで、一同は建物に突入する。

一方不良達は優越感に浸りながら茅野と神崎を見ていた。今から楽しい事が出来る。彼等は下衆な笑みを浮かべるが、突如建物の入り口の扉が開いた。

「お、来た来た。うちの撮影スタッフの登場だぜ……!!」

外での出来事を何も知らない不良が空いた扉を見ると、そこには仲間の不良ではなく清麿達が立っていた。

「皆！」

「なっ……てめえら、何でここがわかった?!」

不良達は明らかに動揺する。なぜ清麿達がこの場所を特定出来たかが分からない。

しかもこんな短時間に。仮に特定できたとして、見張りをしていた仲間は何をしていたのか。まさかその連中が、電撃を食らって全員気絶などという事態を想像出来る訳が無い。その傍ら、茅野と神崎は安堵の表情を浮かべる。

「……すごいなこの修学旅行のしおり！カンペキな拉致対策だ!!」

「いやー、やっぱり修学旅行のしおりは持つとくべきだわ」

「「ねーよそんなしおり!!」」

渚は拉致対策の書いてあるしおりを見せびらかしていたが、不良達はたまらずツッコミを入れてしまった。

「それで、お前等。こんな堂々と乗り込んできて、後のことは考えてねーのかよ?」

リュウキが得意げに言うと他の不良達はニヤリと笑う。そして茅野と神崎をつかんだ挙句、2人の喉元にナイフを突き付けた。

「バカが、これでお前らは俺らの言いなりだ。おい、こいつらを傷つけられなくなかったら」

「ラウザルクー!」

リュウキのセリフを遮って、清磨は肉体強化の呪文を唱える。強化されたガツシュは一瞬のうちに不良達に近付き、そのまま突き飛ばす。そして2人を抱えて清磨達の方へ戻り、彼女達の拘束を解いた。

「2人とも、大丈夫かの？」

「うん、ありがとう」

たつた今起こった出来事に対して、不良達は何が起こったか分からずに啞然とする。しかしリュウキだけは強気に清麿達にナイフを向けた。

「舐めたマネしやがって、テメー等ぶち殺す!!」

リュウキはナイフを持ってそのまま突っ込んできたが、一瞬足を止める。その一瞬を見逃さなかった清麿が、リュウキの顔を思い切り殴り飛ばす。その時の彼を見て、不良達のみならず渚達でさえ驚愕する。怒りのあまり清麿の表情は最早人間のそれでは無い。鬼そのものだ。リュウキが足を止めた理由も彼の人外のごとき表情に動揺した為だ。不良達の度重なる悪行に清麿の怒りのボルテージは限界を超える。

「テメエ等、好き放題やりやがって!!覚悟出来てんだろーな!!」

「「ひくくくくく!!」」

清麿は声を荒げて不良達を睨み付ける。それを見た不良達は恐怖で叫び声を上げる。場にいる大半の者を戦慄させる清麿の言動だったが、どうにか平常心を保つ者もいた。カルマだ。

「(うわあ、高嶺君かなりきてるね。ま……無理もないか、俺もコイツ等にはムカついてるし。ナイフとか出しやがって)……で、どーすんの?お兄さん等。2人は助け出した

けど、俺等ここで引く気ないよ。こんだけの事してくれたんだ……あんた等の修学旅行は、この後全部入院だよ」

カルマもまた怒りの表情を浮かべる。清磨ほどではないが、その凄まじい気迫は不良達を更に震え上がらせるのには十分だ。そして、

「ザケル！」

「「「ぎゃあああああー！」「」」」

清磨は呪文を唱え、電撃が不良達を襲う。外の不良へのザケルと同じく加減していたため不良達に命の別状は無いが、そのまま不良達の大半は気絶した。その後、外から足音が聞こえる。不良の仲間が来たのかと渚がつかさず後ろを振り向いたが、そこには不良はいなかった。

「黒焦げで気絶してた人達含めて、ようやく手入れが終わりましたねえー」

「「殺せんせー！！」「」」

先ほどまで不良だった者達はきつちりした学ランに着替えさせられ、髪は坊主にされ、ぐるぐる眼鏡をかけさせられたうえで、殺せんせーの触手に吊るされている。それではてるてる坊主の様だ。そして殺せんせーは、吊るされている不良だった者達をそのまま投げ捨てた。

「遅くなってすみません。しらみ潰しに探していたので」

「……で、何その黒子みたいな顔隠しは？」

「暴力沙汰です。この顔が暴力教師と覚えられるのが怖いのです」

「世間体を気にする」、殺せんせーの弱点がまた一つ露呈した瞬間だ。

「渚君がしおりを持つてくれていたから、先生にも迅速に連絡できたのです。この機会にちゃんと全員持ちましょう」

殺せんせーが分厚いしおりをカルマ・杉野・奥田にそれぞれ手渡すが、彼等は困惑の表情を見せる。そして殺せんせーは元の顔に戻った清磨の隣に来る。

（黒焦げの連中は、高嶺君達の仕業ですね。後遺症を残さない程度の絶妙な力加減は見事！と言いたいところですが、人に向かって電撃を放つ行為自体はあまり感心しませんねえ。今回に関しては、ことが事なので大目に見ますが……）

「わかったよ」

殺せんせーが清磨に耳打ちをした後、再び気絶していた不良達の方を向く。そこには1人だけフラフラになりながらも立ち上がろうとする不良がいた。

「……せ、先公だとオ!!ふざけんな!!ナメたカツコしやがって!!」

「あいつ、まだ立てたのか!!」

ザケルを浴びた不良達だったが、リーダー格のリユウキだけはどうにか起き上がる。次々起こる不測の事態に堪忍袋の緒が切れて、彼は怒りの感情だけで意識を保っている

状態だ。清麿は呪文を唱えようとしたが、殺せんせーは顔にバツテンを表示して阻止する。リュウキは殺せんせーに凶器を持って殴り掛かるが、殺せんせーに近づく前に触手が猛スピードでリュウキををひっぱたく。

「ふざけるな？先生のセリフです。」

「ハエが止まるようなスピードと汚い手で、うちの生徒に触れるなど、ふざけるんじゃない」

殺せんせーの顔が真っ黒に変貌する。ド怒りだ。先生のこの表情は渚の自爆以来だ。

それは清磨が転校する前の話であり、ガツシユペアがこれを見るのは初めてとなる。殺せんせーの顔を見たガツシユペアは冷や汗をかく。

「エリート共は先公まで特別製かよ。テメーも肩書で見下してんだろ？バカ高校と思っ
てんだろうが」

リュウキは虚勢を張りながら、身体を震わせながらナイフを構える。

「確かに彼等は名門校の生徒です。しかし学校内では見下され、クラスの名前は差別の対象です。ですが、彼等はそこで多くの事に前向きに取り組んでいます。君達のように、他人の足を引っ張るようなマネはしません。学校や肩書など関係ない。何処に住もうが、前に泳げば魚は美しく育ちます」

殺せんせーの言葉を聞いて、神崎は何かに気付いたような顔をする。その後彼女は少し笑みを浮かべた。

「……さて、手入れをしてあげましょう。修学旅行の基礎知識を、体に教えてあげるのです」

渚がしおりを持ってリュウキの後ろに立つ。一方で清磨は、何時でもガツシユが術を出せるように見張る。そしてリュウキが後ろの渚に気付いた時にはすでに手遅れ、鈍器しかりで思い切り殴られ、彼の意識はそこで途絶えた。

「彼等は建物の外に出る。しかし、その時の神崎の表情を見た殺せんせーが疑問に思う。」

「神崎さん。君はひどい災難に遭ったのにもかかわらず、何か逆に迷いが吹っ切れた顔をしていますね」

「何でも無いですよ……殺せんせー、ありがとうございます」

「いいえ、ヌルフッフ、それでは旅を続けますかねえ」

殺せんせーは満面の笑みを浮かべてしおりを読み込む。一方神崎も殺せんせーが言ったように、先ほどのトラブルが嘘のように明るい表情を見せる。茅野に自分の過去を話せたからなのか、殺せんせーの「肩書は関係ない」という言葉に思うところがあつたのか。今までよりも彼女は前向きになれたのだろう。

「ガツシユ君もすごかったよ。私達を助けてくれた時、とても恰好良かった」

「ウヌ、皆が無事で良かったのだ!!」

2人を救出した時のガツシユは、普段の言動からは想像出来ない凛々しきで神崎を感心させた。そんなガツシユが神崎に褒めた時、杉野は複雑な心境になる。しかし、

「まー、俺昨日偉そうなこと言ったのに、結局神崎さん達に怖い思いさせちまつたからなあ。それは本当にごめん」

「そんなことないよ。皆も、助けに来てくれて本当にありがとう!」

杉野は神崎達が連れ去られた事に責任を感じている。それ故に彼女達を助け出したガツシユに対して嫉妬の感情が出る事は無かった。そんな彼の思いを感じたのか、神崎はお礼で返してくれた。

「気にしなくていいよ、杉野。というか高嶺君で、怒ると凄く怖いんだね?」

「あれは僕もびつくりしたよ。怒った殺せんせーより怖いんじゃないかなあ?」
「そんなだったか? 殺せんせーのあの表情は大概だと思うが……」

どす黒い殺せんせーよりも怖いかもかもしれないと渚に言われた清麿だ。確かに清麿の怒り顔は、これまで多くの者達を怖がらせて来た。今回の不良達もまた然り。

「高嶺君は少し短気な一面がありますからねえ」

「清麿は怒ると怖いのだ」

「おい……」

杉野が真面目な話をしていたのだが、今は清麿と殺せんせーが怒るとどつちが怖いのかという話題になりつつある。場の雰囲気や和んでいる証拠だ。

「殺せんせーも中々だったのう」

「私のあの表情の話は避けていただきたい……」

突如自分の話題を振られてしまった殺せんせーは恥ずかしそうにする。しかし、1人

だけ肩の力が抜けていない生徒がいた。

「あ、あの……」

「ごめんなさい!!」

トラブルは解決した。しかし奥田は未だに不良の襲撃時に隠れた事を気にしている様子だ。

「私、不良達が来た時、とても怖かったです。そして、渚君達が殴られている時も、茅野さんと神崎さんが連れ去られている時も、私怖くてずっと一人で隠れていたんです。それが、本当に申し訳なくて……本当にすみませんでした!」

奥田は涙を浮かべる。恐怖故に一人で隠れてしまった事の罪悪感に苛まれ続けている。

「……なるほど。奥田さん、言いたいことはわかります。ですが、君が気に病むことは何一つない。確かに、初めに君は恐怖故に隠れてしまった。しかし、その後はどうでしょう。逃げずに仲間を助けに来たではありませんか。それで良いではないですか」

殺せんせーが優しく奥田を諭した。彼女もまた仲間を助けるために、不良達の溜まり場に乗り込んだ勇氣ある生徒だ。殺せんせーはそれを理解している。

「いや、隠れたのはいい判断だったと思うよ」

「奥田さんが謝ることなんて、無いんだよ」

「気にすんなって、奥田」

「そうだよ、悪いのは全部あいつらなんだから」

「もう、大丈夫だからね」

「はい……皆さん、ありがとうございます!!」

カルマ達の言葉に奥田は再び涙を浮かべる。しかし今度は感謝による嬉し涙だ。彼女はようやく罪悪感から解放された。

「まあ、そんなこと言いだすと、その場に居合わせずらしなかつた俺とガツシユはどうなるんだって話になるな」

「又オオオオオ、確かにそうなのだ……」

清麿が顔を赤くさせながら言う、ガツシユが顔を真っ青にして落ち込む。ガツシユペアがその場にいれば結果は変わっていたかもしれないが、それはたらればの話である。

「……ていうかき、何で反省会みたいになってんの？」

「「た、確かに……」」

カルマの発言によつて、反省会となりつつあった会話は途切れた。確かに誰かが失態を犯した訳でも無かったので、この話し合いは不毛ではある。

「ヌルフフフ、ここからは楽しく旅行を続けましょうー」

途中経過はどうであれ、彼等は一丸となつて攫われた仲間を救出した。殺せんせーにとつてはそれだけで充分で、それよりも生徒達との旅行が楽しみで仕方ない。そんな彼等の修学旅行はまだまだ続く。

LEVEL. 8 気になる女子?の時間

4班が不良に絡まれたトラブルにより、殺せんせーはその対処をしなければならなくなり、プロによる殺せんせーの狙撃計画は途中で中止となった。また今回の暗殺失敗を経て一人の狙撃手が殺し屋をやめたことなど、E組の生徒達は知る由も無い。

2日目の夜、4班は皆で宿のゲームコーナーで遊んでいた。清磨も神崎と格闘ゲームで対決するが、現状目も当てられない。

「清磨オ、全然勝っておらぬでは無いかア!!」

「ええいーやかましいぞ、ガツシユー!」

「ふふっ。恥ずかしいな、なんだか」

それは対決の体をなしていない。清磨は神崎に完膚なきまでに打ち負かされる。彼は冷や汗をかくしかなかった。

「高嶺君、まるで相手になってないねえ」

「……」

「おしとやかに微笑みながら、手つきはプロだ!!」

「すごい意外です。神崎さんがこんなゲーム得意だなんて」

神崎が誇るプロゲーマー顔負けの技術に他の4班は感心する。しかし神崎がゲーム好きである事を一同は始めて知り、意外であると感じた。清麿は相手が悪かったのである。

「……黙ってたの。遊びが出来ても、進学校じゃ白い目で見られるだけだし。でも、周りの目を気にしすぎてたのかも。服も趣味も肩書も、逃げたり流されたりして身に着けていたから自信が無かった。殺せんせーに言われて気付いたの。大切なのは、中身の自分が前を向いて頑張る事だっ」

神崎は日中の殺せんせーの言葉を思い出す。殺せんせーは不良達に手入れをしていて、一番手入れされていたのは彼女の心だったのかも知れない。

「私もゲームやってみたい。神崎さん、やり方教えて!」

「うん、いいよ」

茅野が格闘ゲームに興味を示す。神崎にやり方を教わっているが、中々難しそうだ。

(神崎さんの思わぬ一面。それに攫われた時、茅野と何か話したのかな。2人の空気が軽いような……高嶺君はドンマイ)

茅野と神崎の関係の変化において、渚には思うところがあるようだ。そして渚に内心

励まされていたことを、ゲームの前で遠い目をしていた清麿は知らない。

「あ、俺もやってみよう。茅野ちゃん、相手してよ」

今度はカルマがゲームに興味を示し、清麿と変わる形で席に着く。

「高嶺君、お疲れ様」

「お、おう。格ゲーは得意というわけではないんだが、ここまで歯が立たないと流石に落ち込むな……」

「いやいや、相手が悪かったただけだって」

カルマが清麿にフォローを入れる。彼が冷やかす事をしない程に、神崎の実力の高さは明らかだ。カルマとて相手にすればどうなるかわからない。そんな時、清麿の携帯電話に着信がかかってきた。

「すまん皆、ちよつと外で電話してくる。ガツシユも、ここで遊んでいいぞ」

「分かったのだ！」

「「おっけー」」

清麿が皆に伝えると、ゲームコーナーを出た。

通話の為に外の見える廊下まで出ると電話は切れていたため、再度清麿からかけ直し

た。

「もしもし、水野か……」

『高嶺くーん！昼間どうしちやったの!!電話を聞いて怖い顔してたから、気になってて……』

水野が清磨の身を案じて、電話をかけてくれたのだ。清磨はカルマからの電話を終えた後にかなり慌てており、水野達が何事かと思うのは無理もない。

「すまん、同級生がトラブルに巻き込まれてな。詳しくは言えんが、もう大丈夫だ」

『そっか、それは良かった……』

無事に解決した事を知った水野はホッとす。しかし彼女の言葉を遮るように、電話の相手が変わった。

『おい高嶺、大丈夫だったのか!!ガツシユもだけだよ……まったく無事解決したんなら、俺等に連絡くらいしてくれてもいいんじゃないかねーか?』

「悪い山中。だいぶバタバタしてたから、連絡しそびれた」

清磨の身を案じていたのは水野だけでは無い。山中は少し怒気を込めた声を出す。それだけガツシユペアを心配していたのだ。

『全くう、心配かけさせるんじゃないよ』

「岩島か……そうだな。すまなかつた」

『久し振り会えたと思つたのによー』

「ああ、金山。悪かった」

『あんまり無茶しないでよー』

「仲村、すまん」

電話の相手が次々と変わる。その都度清磨は連絡を入れなかつたことの謝罪を重ねる。例え清磨が転校しても、彼等との友情は途切れない。そして電話からは再び水野の声が聞こえてくる。

『こつちこそいきなり電話かけちゃつてごめんね。でも、大丈夫そうで本当に良かったよー』

「いや、いいんだ水野。お前等に連絡しなかつた俺が悪い。それから……ありがとうな、心配してくれて」

『そんな、お礼をいう事なんてないよ。それに、久し振りに高嶺君やガツシュ君と会えて本当に良かった』

彼女は心底安心している。水野が清磨を気にかけてくれるのは、彼が学校から離れても変わらない。しばらく2人は通話を続ける。そして、

『高嶺君、またね』

「そうだな、また会おう」

清麿と水野の通話は終了した。

(また水野に心配をかけてしまった。とはいえ、暗殺や魔物の話をするわけにもいかない……何か埋め合わせしないと。水野には世話になってるし)

水野は清麿がクラスに馴染めていない時期にも、とても親身に接してくれた。清麿が学校生活を楽しめるようになったのは、水野とガツシユのおかげである。清麿が彼女のことを考えていると、再び清麿の携帯に電話がかかってきた。

「(今度は……恵さん?!) ……もしもし」

『あ、清麿君。いきなりごめんね。今、大丈夫?』

「問題ないよ」

今度は恵からの電話だ。魔物絡みで何かあったのかもしれない。清麿は身構える。

『清麿君、今京都にいるんだよね?実は、テイオがどうしても生八つ橋を食べたいって聞かなくて……』

「や、八つ橋?」

『そう、偶然見てたテレビで八つ橋が取り上げられていて、清麿君にお願いできないかってことになって……』

しかし事は重大では無かった。彼女からのお土産のお願いを聞いた清麿の肩の力が抜ける。そのまま彼は話を続ける。

「丁度よかった。お土産は、生八つ橋を買っていたんだ」
『本当に☑️ありがとう。今、ティオに変わるね』

清麿は事前にお土産を準備していた。それを聞いた恵は喜ぶ。彼等は戦い以外でも気が合う場面が多い。そして彼女はティオに変わる。

「もしもし、ティオか？」

『ええ、清麿。八つ橋の事、ありがとう。ごめん、テレビで見てたらどうしても食べたくなっちゃって……後、ガツシユも今近くにいるの？』

「いや、問題ないよ。ガツシユは残念ながら一緒にいるのではない」

『そっか、分かった。ところで清麿、何かトラブルに巻き込まれてない？』

「い、いや。何にもないぞ……」

ティオの一言に清麿が驚く。実際にトラブルがあったのだから。しかしティオペアといえども、暗殺の事を話すのははばかられる。

『そう、それならよかった。ガツシユが何かしでかしてないかと思って。じゃあ、恵に代わるね』

電話の相手が恵に代わった後、通話を続ける。始めは対クリアの事について話していたが、段々とお互いの日常生活の話題等の雑談に話はシフトチェンジする。時にはリラックスする機会も必要だ。

『旅行中に長電話しちゃってごめんね。じゃあ、またね。おやすみなさい』
「わかった、おやすみなさい」

通話が終わり、清麿が物思いにふける。彼の頭にはいつも自分を心配してくれた水野と何度目も共に戦いを乗り越えた恵の顔が浮かぶ。その時、

「高嶺君、随分長電話だったね?もしかして彼女だったりする?」

「あ、赤羽!!?いきなり話しかけるんじゃない!!?びっくりするだろう……」

カルマが前触れもなく声をかけてきた。その発言に清麿は顔を赤くする。水野や恵を彼女と間違われた清麿は動揺する。

「あれえ、凶星?」

「そんなんじゃない!ったく……まあ、電話が長くなったのは事実か。俺を探しに来てくれたのか?だとしたら申し訳ない」

恵と水野。清麿がどちらを彼女と言われてテンパったのかは定かでは無い。そして彼はこれ以上事態をややこしくしないためにも、素直に謝罪して今の話題を切り上げた。

「いやあ、男子達が皆で話そうってさ。後、ガツシユ君が寂しがってたよ。探しても全然見当たらないって……」

「分かった。部屋に戻ろう」

こうして清磨とカルマが部屋に戻る。一方でガツシユは清磨を探していたのだが、一向に見つけることが出来ていなかった。

時は少しさかのぼる。清磨がゲームコーナーを出た後にしばらくして4班各々がゲームをやり尽した為、部屋に戻るようになった。しかし清磨が戻っておらず、ガツシユは彼を探すことにした。そんな時、

「あ、ガツシユ君だ」

「高嶺は一緒じゃないみたいだねえ」

「ウヌ、優月と莉桜ではないか!」

旅館の廊下で不破と中村がガツシユを見かける。

「聞いたよガツシユ君、不良達を懲らしめたんだって!」

「神崎ちゃんか、ガツシユの事カッコ良かったって言ってたよ」

「そうであつたか。しかし、皆が無事でよかつたのだ!」

不破と中村も昼間の出来事を聞いており、その話題には興味がある。そして3人はその事について話していた。

「あとさあ、高嶺君って怒らすと怖いんだね」

「鬼の形相で不良をぶっ飛ばしたんだってね〜」

彼女達は少し体を震わせながら、鬼の形相をしていた清麿の話をする。清麿のそれは、直接その光景を目にしていらない者でさえ怖がらせる事が出来るのだ。

「ウヌ、清麿は怒ると本当に怖いからのう……」

清麿が怒ると怖い事をガツシユは良く知っている。そして雑談をしている時、3人は浴槽の前を通りかかる。それを見た中村は何かを察したように足を止めた。

「莉桜、どうしたのだ？」

「おっと、ちよいと声の音量下げようか。今誰が風呂に入っているか、分かるよねえ？」

「これって、殺せんせーの」

不破が更衣室に脱ぎ捨てられている殺せんせーの服を見つける。そして中村は何かを思いついたかのような顔を見せる。

「ねえ、2人とも。殺せんせーの中身、知りたくない？」

中村の言葉に対して、不破とガツシユが固唾を呑んだ。殺せんせーの服の中身を知ることが、暗殺的にも知っておいて損はないという中村の考えの元、覗きは実行されようとする。そして偶然通りかかった渚と杉野と岡島も参戦したが、あえなく失敗に終わってしまった。

「中村、この覗き、空しいぞ」

「ぐぬぬ……」

「修学旅行で皆の事、色々知れたけど……」

「うん。殺せんせーの正体は全然迫れなかったな」

「大部屋でダベろっか」

「……結局清磨は、見つからなかったのだ」

殺せんせーの正体を探ることは諦めて、一同は男女それぞれの大部屋に戻ることにした。ガツシユも清磨の搜索を一旦やめて、渚達についていく。

そして男子の大部屋では、クラスの気になる女子について話し合われていた。中学歳男子らしい話題だ。

「なあ、ガツシユはクラスで気になる女子いるのか?」

「ウヌ、良くわからぬのだ。しかし……」

前原がガツシユに女子の事を聞く。しかしガツシユが冷や汗をかき始める。

「女の子を怒らせると、とても怖いのは知っておる……」

ガツシユの脳裏にはまず、テイオに首を絞められた事が浮かぶ。さらにパティの事を認識していないが故に逆鱗に触れてしまった事、ナオミちゃんに追いかけて回された事が

次々思い出される。

「どうしたんだ?ガツシユの奴……」

「おーい、大丈夫かー?」

男子達の声は、最早ガツシユの耳に届いていない。そして大部屋にいる男子が気になる女子ランキングの集計が終わった。

「やっぱ神崎さんが1位か」

「まあ、嫌いな奴いないわなー」

「で?うまく班に引き込んだ杉野はどーだったん?」

神崎はクラスのマドンナと称されるだけあって、男子からの人気も高い。そんな彼女を班に誘った杉野に対して前原が様子を聞く。しかし、

「色々トラブルあってさ、じっくり話すタイミングが少なかったわ」

「あー、なんか大変だったらしいな」

不良達とのトラブルで、杉野はそれどころではなくなっており、残念がっていた。

「トラブルと言えば、ナイフ持った不良を高嶺が鬼の形相で殴り飛ばしたんだろ?あいつばねーわ」

「うん、高嶺君を怒らせてはいけないことが良くわかった瞬間だったよ」

4班のトラブルにおいて清磨の話題が出る。クラスメイトが凶器を持った不良を容

赦なく殴り飛ばしたのだから、誰しも何事かと思うだろう。そして噂をすれば影が差す、とでもいうのか。清麿がカルマと共に大部屋に入ってくる。

「皆、高嶺君を連れてきたよー」

「清麿、時間かかったのう」

「悪い皆、何の話をしてたんだ？」

まさか先ほどまで自分の話題が出ていたとは考えていない清麿だ。

「お前等、クラスで気になる娘いる？」

「皆言ってるんだ。逃げらんねーぞ」

木村と前原が、清麿とカルマに気になる女子を聞く。そして先に答えたのはカルマだ。

「……うーん。奥田さんかな」

「お、意外。何で？」

「だって彼女、怪しげな薬とかクロロホルムとか作れそーだし、俺のイタズラの幅が広がるじゃん」

「……絶対くつつかせなたくない2人だな」

ここに來てのダークホースの登場だ。これほどまでに凶悪になりかねない組み合わせが他のE組にあるだろうか、いや、ない。他の男子達の顔が引きつる。てつきり恋愛

的な、そうでなくてもこういう女子が可愛いとか、そういう話題になる流れだったのにも関わらず、まさかの凶悪コンビの誕生である。しかしカルマが本当に奥田をそういう理由だけで選んだのかは定かではない。

「高嶺はどうなんだ?」

磯貝の言葉により、話題の矛先は清磨に向く。しかし、清磨の頭に浮かんだ女子は、E組の誰かでは無い。

「お、俺は……」

「高嶺君の場合、E組にはいないんじゃないかね?」

清磨が煮え切らない言動をすると、カルマが口を挟む。気になる女子について聞かれた彼は返答に詰まる。

「そう言えば高嶺、さっき長電話してたもんな。その相手の女子だったりして……」

岡島の発言に彼は顔を赤くする。完全に凶星を突かれた清磨だ。そんな彼の様子を見たクラスメイト達が清磨を冷やかかし始める。

「マジか、高嶺……」

「お前、やるな」

珍しく歯切れの悪い清磨は、他の男子達にとつてはいじられる対象になっている。そんなイジリで我慢の限界に達した彼は声を荒げた。

「ええいお前等、別に付き合っているとかそういう訳じゃないからな!!」

「それ、気になる女子がいるって認めたようなもんじゃね?」

「?!」

清麿が墓穴を掘った瞬間だ。図らずも彼の心境を他の男子達に知られてしまった。

(清麿が言っている女子は、スズメか恵のことであろうか……)

「うつつ、うおおお……」

ガツシユにまで内心を悟られてしまうとは。しかし、清麿が気にしていた女子が水野なのか恵なのかまでは分からない。彼は顔をさらに赤くしたのち、床に伏して泣き出す。男子達が哀れみの視線を清麿に送っていたとも知らずに。

「皆、この投票結果は男子の秘密な。知られたくない奴が大半だろーし、女子や先生に絶対に……」

磯貝が男子全員に口止めをする。しかし手遅れ。窓から殺せんせーが満面の笑みで覗いていた。

「メモって逃げやがった!!殺せ!!」

男子達は一斉に殺せんせーを追いかけたが、清麿が落ち込んでいた為にガツシユペアは乗り遅れる。そして殺せんせーは男子達を振り切り、女子部屋に入り込む。そこでピッチ先生含む女子間の恋話を盗み聞きしようとしたが、結局女子達に追い回されてい

た。

大半の生徒達が殺せんせーを追い回す中、大部屋には渚と茅野が残っていた。

「楽しかったね、修学旅行。皆の色んな姿、見れて……渚、どうしたの?」

「うん、ちよつと思っただんだ。修学旅行つてさ、終わりが近付いた感じがするじゃん。暗殺生活は始まったばかりだし、地球が来年終わるかどうかはわからないけど、このE組は絶対に終わるんだよね。来年の3月で」

「……そうだね」

「皆の事もっと知ったり、先生を殺したり、やり残す事無いように暮らしたいな」

どのような物事にも終わりはある。それはE組での生活とて例外ではない。渚と茅野はそのことを修学旅行を経て実感し、少し寂しそうにする。そんな時、

「あれ、お前等はここにいたのか」

「お主達、2人で何を話しておったのだ?」

ガツシユペアがその部屋に入ってくる。殺せんせーを探していたが、ここにはいない様だ。

「高嶺君、ガツシユ君!殺せんせーはどんな感じ?」

「修学旅行楽しかったねって話だよ、ガツシユ君！」

「ウヌ。カエデ、私も修学旅行は楽しかったのだ」

「殺せんせーはどこにいるかわからん。皆血眼になって探しているがな。それから渚茅野。悪いが俺とガツシユはまた少し部屋を抜ける。皆に伝えといてくれ」

「もつと皆と話をしていなかったが、私達は強くなるための特訓をしなくてはならぬのだ」

夜遅い時間だが、2人はデュフォーが課したトレーニングを行おうとする。旅行中에서도出来る事はある。

「……こんな時まで大変だね、2人とも」

「わかった、皆には伝えとくよ。高嶺君もガツシユ君も、あんまり無理しないでね」

2人が外に出る事を、渚と茅野は快く了承してくれた。修学旅行は終わろうとしているが、魔界や地球の未来まで終わらすわけにはいかない。そんな絶望に抗うために、ガツシユペアの特訓はまだ続く。

LEVEL. 9 転校生の時間

「清麿、今日は転校生が来るのだったな。楽しみなのだ！」

「ああ。ただ、嫌な予感がするんだよなあ」

昨日の夕方、鳥間先生から一斉送信メールが来た。メールの内容は「明日転校生がひとり加わる事」と「多少外見で驚くだろうが、あまり騒がず接して欲しい事」の2件である。

「外見で驚くってどういう事なんだ？俺等のような暗殺絡みか？」

「ウヌウ。どのような事情があろうとも、同じクラスに来るのだから友達になりたいぞ」
「……そうだな」

ガツシユペアが教室に入ると、渚と杉野と岡島が愕然としていた。

「皆、おはようなのだ！」

「何だ、どうしたんだお前等？」

「ああ。おはよう、高嶺君とガツシユ君」

「お前等、あれ見てみるよ……」

「あれが転校生だってよ……」

岡島が教室の後ろの席を指差す。ガツシユペアが何事かと思うと、そこには画面の付いた黒い機械の箱が置いてある。そして画面には少女の顔が写った。

「おはようございます。今日から転校してきました。自律思考固定砲台。よろしくお願
いします」

転校生とは人間では無く機械だったのだ。ガツシユは興味津々だが、清磨は言葉を失
う。

「皆知っていると思うが、転校生を紹介する。ノルウエーから来た自律思考固定砲台さ
んだ」

「よろしくお願います」

鳥間先生は何とも言えない表情を浮かべる。それを見た生徒達は、内心で鳥間先生の
気苦労を察した。自律思考固定砲台はA Iと顔を持ち、れっきとした生徒として登録さ
れている様だ。

「……なるほど。先生が生徒に危害を加えられない契約を逆手に取って、なりふり構わ
ず機械を生徒に仕立てたと。いいでしょう、自律思考固定砲台さん。あなたをE組に歓
迎します！」

転校生の紹介が終わった後の休み時間、クラスは異様な雰囲気包まれる。電撃を放
つガツシユペアの転入の時も多くのクラスメイトが驚いたが、担任が超生物と言う事も

あり、すぐに彼等と打ち解ける事が出来た。しかし、今回はそうはいかなそうだ。ガツシユは魔物とは見ええた目は普通の子供だが、今回の転校生は機械である。

「清麿、皆の様子がおかしいのう」

「いやガツシユ、お前はあれを見て何とも思わんのか？」

ガツシユ以外の生徒達は、自律思考固定砲台の存在感に飲まれかけていた。機械が転校生と言われても、どう接すればよいのが分からない。それは、今まで数多くの一癖も二癖もある魔物やパートナーを見てきた清麿とて例外では無い。しかし、

「例え生き物でなくても、クラスの仲間ではないのか？ 本当に仲良くはなれぬのか？ それなら、寂しすぎるではないか……」

「……ガツシユの言うことも一理あるか。あいつとの接し方は少し考えないといけないな」

ガツシユペアの会話を他の生徒達も聞き、クラスの雰囲気が変わろうとする。機械だとしても、クラスの一人なら暗殺のための協力は必須なのだから。そして授業開始のチャイムが鳴り、ガツシユは特訓のため裏山へ向かう。しかしガツシユのおかげで良い方向に変わろうとした雰囲気は、自律思考固定砲台のともない暗殺方法によりさらに悪化する。

授業が始まり、しばらくは自律思考固定砲台に変化は無い。しかし突如作動したかと

思えば、両脇から複数の銃口が出てきた。その銃口からは大量の弾幕が放たれたが、全て殺せんせーは見切る。

「授業中の発砲は禁止ですよ」

「気を付けます。続けて攻撃に移ります」

殺せんせーの注意を聞こうともしない自律思考固定砲台は次の攻撃のための演算を行った後、射撃を続ける。

（さつきと同じ射撃、しよせんは機械ですねえ。これもさつきと同じ。チョークで弾いて退路を確保……!!）

全ての弾幕を見切ったつもりになっていた殺せんせーの触手を銃弾が撃ち抜いた。生徒達はおろか、殺せんせーもまた明らかに動揺する。

（……隠し弾!! 全く同じ射撃の後に、見えないように1発だけ追加していた!!）

「右指先破壊、増設した副砲の効果を確認しました」

（暗殺対象の防御パターンを学習し、武装とプログラムに改良を繰り返し、少しずつ逃げ道を無くしていく!!）

「次の射撃で殺せる確率0.001%未満、次の次の射撃で殺せる確率0.003%未満、卒業までに殺せる確率……90%以上。よろしくお願いします、殺せんせー。続けて攻撃に移ります」

プログラム
入力済みの笑顔で微笑みながら、転校生は次の進化を始める。進化を続ける固定砲台に、廊下から見ていたビッチ先生も驚愕する。しかし隣にいた烏間先生は事前に話を聞いており、比較的冷静だ。

「……すごいわね」

「彼女」が撃つてるのはBB弾だが、そのシステムはれっきとした最新の軍事機能だ。確かにこれならいずれは……」

「フン、そんなに上手くいくかしら。この教室がそんなに単純な暗殺場（しごとば）なら、私はここで先生なんてやってないわ」

ビッチ先生も赴任当初は周りのことなど考えずに、殺せんせーの暗殺ばかりを重視した態度を取り、結果として失敗している。殺せんせーが規格外ということもあるが、ここでの暗殺においてクラスメイトとの連携は必須だ。それを彼女が理解していなかったが故に暗殺に失敗した。そして授業が終わり、教室には大量のBB弾が散乱する。

「掃除機能とかついてねーのかよ、固定砲台さんよお」

たまらずに村松が自律思考固定砲台に掃除するよう話しかけるが、返事は無い。

「チツ、シカトかよ」

「やめとけ。機械にからんでも仕方ねーよ」

機嫌を悪くする村松を、吉田がなだめる。今日の授業の時間はひたすら弾幕が撒き散

らされ、授業どころでは無い。

そしてE組は何とも言えない雰囲気のまま昼休みに入った。

「お弁当の時間なのだ！皆、ご飯を食べようぞ……ウヌ？」

午前中の授業が終わり、ガツシユが昼ご飯を食べに教室に戻る。しかし彼は教室中に散らかるBB弾を見て、怪訝な顔をする。

「ガツシユ、弁当を食べるのは教室を掃除した後だ。悪いがお前も手伝ってくれ……」
「分かったのだ、清麿。しかしこれは一体、何があったというのか……」

「ああ、ガツシユ君。それはね……」

渚が事情を説明してくれたが、それを聞いたガツシユは悲し気な顔を見せる。このままではクラスメイトと仲良くなれない。彼は頭を抱える。

「……そんなことがあったのか」

「このBB弾、俺らが掃除しねーといけねーんだもんなあ。やってらんねーぜ」
「ガツシユ君。今のままじゃ、あれと仲良くするのは無理そーだよ」

杉野とカルマも、自律思考固定砲台を見て眉をひそめる。否、クラスの大半が転校生に対して良い印象を持てなかった。そんな中、ガツシユは何かを考えている様子だ。そ

して、

「……皆。次の授業、私も見てて良いかの？」

ガツシユからは意外な発言が出てきた。

「いいでしょう、ガツシユ君」

「そうだな、ガツシユも直接見といたほうがいいかもな」

殺せんせーからも許可が降りる。こうして、午後の授業（として成立してるかわからないが）はガツシユも見学することになった。

しかし午後も変わらず、ひたすらに自律思考固定砲台が射撃を続ける。授業所では無い。

（せっかくの転校生なのだから友達になりたいところだが、あれではどう近付けばいいのかさっぱりわからぬのだ。考える必要があるな……）

その光景を見て、ガツシユはどうすれば良いのかわからないと言った表情をする。こうして自律思考固定砲台の転校初日は、非常に雰囲気が悪いまま終わってしまった。

次の日、自律思考固定砲台は何者かによってガムテープで拘束されていた。これでは自律思考固定砲台と言っても、銃を展開できない。

「殺せんせー、この拘束はあなたの仕業ですか？明らかに生徒に対する加害であり、それは契約で禁じられているはずですが」

「違げーよ、俺だよ」

自律思考固定砲台は冷たい視線を殺せんせーに向けるが、その発言はガムテープで持った寺坂に反論される。

「どー考えたって邪魔だろーが。常識ぐらい身につけてから殺しに来いよ、ポンコツ」

「ま、わかんないよ。機械に常識はさ」

「授業終わったらちやんと解いてあげるから」

「……そりやこうなるわ。昨日みたいのずっとされてちや授業になんないもん」

普段から横暴な一面のある寺坂だったが、今回の言動に関しては反対するものは誰もいない。考えてることは皆同じだ。毎日あの弾幕にさらされた挙句、掃除まで自分達で行わなくてはならないのだ。やってられない。

「こればかりは仕方ないことだが……どうしたガツシユ、浮かない顔してるな？」

「ウヌ、本当にこれで良いかがわからぬのだ」

ガツシユだけは、拘束された自律思考固定砲台に対して同情の目を向ける。彼はあく

まで仲良くする方法を探りたい様子だ。

「何だよ、俺が間違ってるってのか？」

「いや、そういうわけではないのだが……」

ガツシユの煮え切らない言動に寺坂が不満げな顔をする。

（私にはこれが一番良い方法とは思えぬ。しかし、ガムテープを外したらまた大変なことになってしまう。あの者の射撃で、誰かが怪我をすることだつて考えられる。どうすれば良いのか……）

この日、ガツシユは放課後まで自律思考固定砲台の事を考えていた。お互いが寄り添える関係になる為にはどうすれば良いか。そしてガツシユは1つの決断を下す。

今日の授業は終わり、生徒達は帰宅の準備を始める。そんな中、

「おーい、高嶺君とガツシユ君！」

「今日は宿題多くないし、帰りバツティングセンター寄つてかね？」

渚と杉野はガツシユペアを遊びに誘う。普段の彼等なら喜んで誘いに乗るところであつたが、今回はそうはならなかつた。

「悪い、渚、杉野。ガツシユがどうしても自律思考^あ固定砲台^いと話がしたいんだと。俺も付

き添うから、今日には行けない」

「済まぬのだ、2人とも」

ガツシユペアは自律思考固定砲台と話をするために、渚達の誘いを断った。ガツシユの決断、それは転校生と腹を割って直接会話をする事である。それを聞いた渚と杉野は、特に残念がる事も無かった。

「分かったよ。また誘うね」

「お前等も物好きだな。じゃあ、また明日な！」

「ウヌー！」

「ああ、また今度な！」

渚と杉野が外に出た後ら教室には自律思考固定砲台とガツシユペアだけが残っていた。これでゆつくり会話する事が出来る。

「お主、私と話してはくれぬかの？」

ガツシユが口を開くと、自律思考固定砲台が起動した。

「何でしょうか？あなた達と話すことなど無いのですが……」

（随分無愛想だな……本当に話し合えるのか？）

ガツシユに対する素っ気ない態度に清磨が不安を感じる。会話の幸先はよろしく無い。

「お主、まずは私と友達になってくれぬかの？」

「は？」

ガツシユの単刀直入な言葉に、自律思考固定砲台は困惑の表情を浮かべる。

「そもそも、あなたは座学の授業を一切受けてないですよ？一体何者なんですか？」

「私はガツシユ・ベルなのだ！」

「いやガツシユ、そういう事ではなくてだな……そうか、こいつにはそこから話さないといけないんだったな。ガツシユ、お前のことを話していいか？」

「構わぬのだ」

清麿はガツシユが魔物であることや、それに関係することを説明した。

「……という訳なんだが、E組の連中には話してある。ただし、それ以外の奴等には黙ってほしい」

「……わかりました。黙っておきます。あなた達も殺せんせーの暗殺のためにE組に来たのですね。ならば、なぜもつと積極的に攻撃を仕掛けないのですか？」

自律思考固定砲台はガツシユペアの事情にはそれ程関心を示さなかった。あくまで殺せんせー暗殺が第一にプログラムされている。

「俺達の力は、他の奴等を巻き添えにしかねない。だから、先生の暗殺には慎重になる必要があるんだよ」

「わかりかねます。そんな気遣いよりも、暗殺の方が大事だというのに……」
「私達は、皆で協力して暗殺を行いたいのだ！」

ガツシユペアの主張を自律思考固定砲台は理解出来ない。クラスで協力して暗殺を成功させようとしているガツシユペア、自らの能力だけで暗殺を成功させようとしている自律思考固定砲台の考えは相反していた。

「協力する事。それは、暗殺においても必要なことなのでしようか？」

「当然だ。みんなで力を合わせれば、先生をより確実に追い詰めることが出来る」

「ウヌ、そのためにまずは私や清麿と友達になつてほしいのだ！」

暗殺という共通の目的のために力を合わせる。自律思考固定砲台がE組の力になれば、殺せんせーの暗殺の成功率も格段に上がるだろう。しかしガツシユはそこまで考えているというよりも、単に仲良くなりたい気持ちの方が強い様だ。孤独はとても辛いことなのだから。ガツシユペアにはそれが良く分かる。ガツシユは育ての親から虐待され、清麿は自分の頭の良さ故にクラスから孤立した結果、家に引きこもってしまった時期があつたのだから。

「私も清麿も独りぼっちだつた時期があつたのだ。それはとても辛いことだからの、お主にはその気持ちを味わつてほしくないのだ」

「確かに、もうあの頃に戻るのは嫌だ。俺もガツシユと水野がいなければどうなつてい

たか……) そうだな。お前、ガツシユの言う事をよく考えてはくれないか?」
「どうして、私の事をここまで気に掛けるのですか?」

自律思考固定砲台は、自分の事をガツシユペアがここまで構ってくれる理由が理解出来ない。しかし2人の言う事には耳を傾け始めており、確実にコミュニケーションを取る事が可能になっている。

「ウヌ、それは同じE組の仲間だからなのだ。それに友達が出来れば、毎日が楽しくなるのだ。今日みたいにガムテープで縛られることもなくなる。どうかの?」

「……考えておきます」

「頼むのだ!」

「(あれ、意外に素直だな……) 良かった」

ガツシユの提案を突っぱねてくるかもしれないと予想してた清麿だったが、そうはならなかった。

「しかし、友達になるのにはどうすれば……」

「君達、まだ残ってたんですねえ」

自律思考固定砲台が友達になる方法を考えていると、突如として殺せんせーが現れた。

「おおつ、殺せんせー!」

「相変わらずの超スピードだな……」

「いやあ、*彼女*」の手入れのための準備をしましてねえ。しかし、君達の方からアプローチしてくれているとは、感心感心。ヌルフッフ」

殺せんせーは顔に縞々模様を浮かべる。ガツシユペアが自律思考固定砲台と友達になろうとしている様子を見て、余程嬉しかったのだろう。

「さて2人とも、ここからは私に任せてもらえませんかねえ。悪いようにはしませんので……」

殺せんせーは触手をうねらせながらそう言った。明らかに何か企んでいるようだ。だが、嫌な予感はしなかった。

「先生だけで大丈夫そうか？」

「ええ、問題ありません」

「ウヌ、では頼むのだ！」

殺せんせーならどうにかしてくれる。ガツシユペアはそう確信した。そして自律思考固定砲台の事は殺せんせーに任せて2人は帰ることにした。

LEVEL. 10 自律の時間

「おはよう！高嶺君とガツシユ君」

「オース、お前等！」

「「おはよう」なのだ！」

「なあ、昨日はどうだった？」

ガツシユペアが廊下を歩いていると渚と杉野が声をかけてくれた。そして杉野は、昨日のガツシユペアと自律思考固定砲台の会話について聞いてくる。

「ウヌ、それがだの……」

ガツシユが昨日の事を説明したが、殺せんせーの名前が出た瞬間に渚と杉野が困ったような表情を見せる。

「何か、嫌な予感がするんだけど……」

「あー、俺も」

「いくら殺せんせーがぶっ飛んでも、生徒相手にそうそう変なことはしないんじゃないのか？」

「皆、どうしたというのだ？」

清麿が渚と杉野の予感を否定しても、2人の不安は取り除かれない。そして4人が教室に入り自律思考固定砲台の方を見ると、画面の面積が明らかに広くなっていた。体積も大きくなっている。

「おはようございます、今日は素晴らしい天気ですね!!こんな日を皆さんと過ごせて嬉しいです!!」

自律思考固定砲台はおかしな方向へ進化していた。先日までの冷たい表情とは打って変わって、満面の笑みで清麿達に挨拶をしてくれる。そして画面が広くなっており、柵ヶ丘中の制服を着ている彼女の様子を見る事が可能だ。昨日の殺せんせーの改良のおかげだ。そのために殺せんせーは自腹を切り、今の財布の残高は5円だ。清麿達は大改造された彼女を見て、どう反応していいのかが分からない。

他の生徒も次々と登校してきたが、彼女の様子を見て清麿達と同様に反応に困る。ただ1人の生徒を除いて。

「何だマされてんだよ、おまえら。全部あのタコが作ったプログラムだろ。愛想良くても機械は機械。ドーせまた空気読まずに射撃するんだろ、ポンコツ」

寺坂のみ改良された自律思考固定砲台を見ても、疑いの目を向け続ける。ぶつきらばうではあるが、彼の言うことは的を得ている。どんなに愛想が良いとしても、授業中に射撃を行われてはこれまでと変わりはない。しかし、

「……おっしやる気持ちばかりです、寺坂さん。昨日までの私はそうでした。ポンコツ、そう言われても返す言葉がありません」

彼女の目からは大粒の涙が流れ、申し訳なさそうにする。また画面も雨模様になる。そんな自律思考固定砲台を見て、同情する生徒は少なくなかった。

「あーあ、泣かせた」

「寺坂君が二次元の女の子泣かせちゃった」

「なんか誤解される言い方やめろ!!」

片岡と原に寺坂がたしなめられてしまった。彼の言うことは間違っってはなかったが、言い方がきつかった。それゆえに寺坂が悪い流れが出来上がってしまった。女子達からの痛い視線が寺坂に刺さる。そして、

「いいじゃないか2D……Dを一つ失う所から女は始まる」

「「竹林それおまえの初ゼリフだぞ、いいのか!?!」」

眼鏡をかけた男子生徒、竹林孝太郎の本編における記念すべき初ゼリフは中々の名言（迷言?）となり、クラスの男子達はたまらずツッコミを入れる。彼にはオタク趣味がある。

「でも皆さんご安心を。殺せんせーに諭されて、私は協調性の大切さを学習しました。そしてガツシュさんと高嶺さんには、友達の大切さを教わりました。私の事を友達とし

て好きになつて頂けるよう努力し、皆さんの合意を得られるようになるまで、私単独での暗殺を控えるようにいたしました」

「そういうわけで仲良くしてあげて下さい」

「ウヌ、これでお主も皆と友達になれるのだ!!」

「はい、皆さんよろしくお願いいたします!」

彼女の変化により、クラスの空気は一気に明るくなる。

「ああもちろん先生は彼女に様々な改良を施しましたが、彼女の殺意には一切手をつけていません。先生を殺したいなら、彼女はきつと心強い仲間になるはずですよ」

殺せんせーはそう言つて授業の準備に入った。

協調性を手に入れた彼女は、クラスメイトと友達になるべく努力をする。それは授業中でも例外では無い。菅谷が先生に当てられた時に、自分の足に答えを書いて教えており、カンニングとサービスを一緒にしないよう殺せんせーから注意を受けてしまう。あざとい。そして彼女のサービスピスは精神は休み時間にも及ぶ。特殊なプラスチックを体内で自在に成型出来る自律思考固定砲台は、生徒達の目の前で像を作り上げる。

「おもしろーいーじゃあさ、えーと……花とか作ってみて」

「わかりました。花の形を学習しておきます」

それを見た矢田が、他のものも作ってもらうようにお願いする。そんな傍らで、

「王手です、千葉君」

「……3局目で勝てなくなった。なんつー学習力だ」

他の生徒達と喋りながら、千葉を将棋で打ち負かしていた。最新鋭のAIのなせる業だ。

「こーやって皆さんと仲良くなれているのは、協調性を教えてくれた殺せんせーと、私に友達になるよう言ってくれたガッシュユさんと高嶺さんのおかげです。本当にありがとうございますー！」

「ウヌ、良かったのだ！」

「俺は特に何もしてないんだがな……」

「……」

彼女がお礼を言ってくれているのにもかかわらず、殺せんせーは何とも言えない表情をする。そして、

「……しまった」

「?何が?」

「先生とキャラがかぶる」

「「被つてないよ、一ミリも!!」」

むしろどこがかぶっているのかを教えてほしい。クラス一同そんなことを考えていると、何を思ったのか殺せんせーは自分の顔面に人の顔を表示し始めた。その顔の気持ち悪さ故に、クラスから総出でツツコミを受けてしまった殺せんせーは教壇の上で泣き始める。そんな先生を見向きもせず生徒達は彼女と交流を深める。すると、

「ふう。しかし、やるじゃないか高嶺」

「何がだ、竹林?」

「君はこうなることを見越して彼女に語りかけたのだろうか?」

「いや、殺せんせーがこんな大改造を行うなんて、夢にも思わなかったぞ」

竹林が清麿に話しかける。そして、

「そういう事ではないんだ。ふつ、今の彼女はとても素敵だ。そんな素敵な彼女を見た
いがために、君は語りかけたのだろう。僕にはそれが出来なかつたが、君はやつての
けた。それは、君が二次元を愛するという事ではないのかい? 歓迎するよ、我が同志よ」
「な、何だつて?」

竹林は清麿が二次元に興味があるがゆえに彼女に語りかけたと考えた様だ。そんな
会話を周りは聞き逃さない。

「へえ。高嶺、アンタそういう趣味だったんだ?」

「おい中村、なんだそのニヤケ顔は！」

「そつかあ、あの高嶺がなー」

「木村、そういうのじゃないからな！」

「どんな趣味を持つてても、高嶺君は高嶺君です！」

「奥田、違うと言つてるだろーに……」

竹林の発言により、クラスの雰囲気がおかしくなる。清麿がオタク趣味であるというあらぬ噂が広まつてしまい、彼がいじられる流れが出来てしまった。

「そもそも、初めにあいつと友達になりたいと言つたのはガツシユだぞ!!」

「えー。ガツシユちゃんは高嶺ちゃんと違つて純粋にこの子と友達になりたかっただけだもんねー?」

「ウヌ、その通りなのだ!陽菜乃」

「こら倉橋、俺が良からぬことを考えていたみたいと言うんじゃない!!」

倉橋はガツシユを抱き上げながら、清麿に向けてそう言い放つ。彼は誤解を解こうとするが、聞く耳を持つ者はいない。クラスからの視線が辛い。そして清麿は限界に達したのか、机に突つ伏して泣き出した。

「うおおおつ、うおおおお」

「高嶺さん、泣いているのですか?」

そんな清磨を見かねて、自律思考固定砲台が声をかけてくれる。

「やべ、流石に言い過ぎた？」

「うーん、どーだろ……」

「すまない、高嶺。こんな事になるとは思わなかった……」

「泣くでない、清磨」

その原因を作った竹林を始め、多くの生徒が清磨に哀れみの視線を向ける。ダメージを受けた清磨を見てやり過ぎたと思ったのか、彼をいじる流れは止まった。そして、

「あとさ、このコの呼び方決めない？ 自律思考固定砲台 っていうくらいなんでも」

片岡の提案に皆が頷く。名前があまりにも長すぎるのだ。これでは呼び辛い。

「自……律……そうだ！じゃあ、〃律〃で!!」

不破が命名した名前だが、彼女はとても喜ぶ。こうして、自律思考固定砲台は律と呼ばれることになった。新たな呼び名が決まったことで律たちが喜んでいる一方で、ようやく泣き止んだ清磨は渚とカルマのいる方へ向かう。

「呼び名が決まったのはいいな。これで大分呼びやすくなった」

「そうだね。これなら、上手くやっていけそうかな？」

「んー、どうだろ」

呼び名が決まった事、律が協調性を手に入れた事によってクラスで上手くやれると

思った渚の考えに、カルマは賛成しない。

「寺坂の言う通り、殺せんせーのプログラム通り動いてるだけでしょ。機械自体に意志があるわけじゃない。あいつがこの先どうするかは……あいつを作った開発者もちぬしが決める事だよ」

「やっぱり、このままってわけにはいかんよな。変わり果てた彼女を開発者がどう思うか」

「2人とも、それって……」

カルマと清磨の話していることは渚には理解出来ていない。

「渚君。あいつって、あのタコを殺すためにここに来たよね？それなら、殺せんせーの付けた多くの機能は必要ない。というか邪魔でしかない。その意味、わかる？」

「……それってまさかー」

「そう、そのまさかだ。それに、自分が開発したものを好き勝手いじくられては、開発者にとつてたまつたものではない……」

渚は理解した。殺せんせーが付けてくれた多くの機能を開発者が必要とするとは思えない。それならどうすれば良いか。答えは簡単だ。それらの機能を取り除いてしまえばよい。自分で開発したのだから、そうする権利は持ち合わせている。というより、勝手に改造してしまった殺せんせーが責められる可能性すらある。

「とはいえ、俺達には何も出来ん」

「まあ、あとはあいつがどうするかだよな」

「律、どうなつちやうんだらうね……」

3人の表情が暗くなつた。しかし彼ら以外の多くの生徒はそんなことに気付くこともなく、無邪気に律との会話を楽しんでいた。

次の日、カルマ達の予想通りに律は殺せんせーが改良する前の姿に戻つていた。

「おはようございます、皆さん」

「律、お主……どうしてしまったのだ」

昨日の挨拶と比べると、ひどく機械的だった。律の目も笑っていない。生徒達は何事かと考えていたが、鳥間先生からの説明が入る。

「〃生徒に危害を加えない〃という契約だが、【今後は改良行為も危害と見なす】と言つてきた。君達もだ、彼女を縛つて壊れでもしたら賠償を請求するようだ。開発者の意向だ。従うしかない」

「開発者とは……これまた厄介で……親よりも生徒の気持ちを尊重したいのですがねえ」

元の姿に戻つた律を見て、鳥間先生と殺せんせーはため息をつく。他の生徒達も、再

び律の射撃にさらされると思うと、うんざりする。しかし、どうすることも出来ない。射撃を阻止するためにガムテープで律を拘束することはもう許されないのだから。烏間先生も寺坂が持つガムテープを取り上げる。そして授業が始まる。律の両脇のハツチから大量の銃口が出てくる……

と皆がそう思っていた。しかし律が展開したのは、銃口ではなく大量の花だった。

「……花を作る約束をしていました。殺せんせーは私のボディーに、計985点の改良

を施しました。そのほとんどは開発者^{マスター}が「暗殺に不要」と判断し、削除・撤去・初期化してしまいましたが、学習したE組の状況から私個人は「協調能力」が暗殺に不可欠な要素と判断し、消される前に関連ソフトのメモリの隅に隠しました。」

「……素晴らしい。つまり律さん、あなたは」

「はい、私の意志で産み^{マスター}の親に逆らいました。何よりも、皆さんと友達でいたかったので」

律は昨日の笑顔を失っていないなかった。本来意志を持たないはずの機械が自らの判断で開発者に反発した。これも優秀なAI故のなせる業なのだろうか。それとも、律に生命が宿ったとでもいうのか。それはクラスの誰もがわからないことであつた。しかし確かに言えることは、律は晴れてE組の暗殺者の仲間入りをした事だ。

「殺せんせー、こういうった行動を『反抗期』と言うのですよね？律は悪い子でしょうか？」

「とんでもない。中学三年生らしくて大いに結構です」

律の行動に殺せんせーは顔にマルを浮かべる。もう授業中に大量の弾幕にさらされた拳句に、後片付けをする羽目になる展開を恐れなくても良い。こんな当たり前のことが、E組にとっては非常に喜ばしいことだ。これからは、この29人で殺せんせーを殺すのだ。

LEVEL. 11 日常の時間

律がE組に加わった日の週末。ガツシユペアはデュフオーとのその日の特訓を終えて、明日の打ち合わせを行う。

「そうか。明日は午後からクラスメイトの交流を深める日にするんだな、清麿、ガツシユ」

「ああ、すまん。特訓は午前中と夕方以降で頼む」

「お願いするのだ」

ガツシユペアは明日、渚と杉野と共にこの前付き合えなかつた分の穴埋めもかねて、バッテリーセンター行く予定である。打倒クリアノートのために休日もフルで特訓に充てたいところだが、殺せんせーの暗殺のためにはE組とのコミュニケーションをはかることもまた重要だ。そんな中、清麿の携帯電話から少女らしき声が聞こえた。

「こんばんは、高嶺さんとガツシユさん。ようやくこちらの携帯電話へのダウンロードが終わりました！通称モバイル律です……お取込み中でしたか。ごめんなさい、てへっ」

「おおっ、律ではないか！これはどうなっておるのだ？」

「……は、ダウンロード？」

ガツシユは興味津々だったが、清麿はリアクションに困る。転校生A-Iが自分のスマホに侵入していたのだから無理もない。

「……清麿、お前達のクラスは何でもありだな。そいつもクラスメイトなのだろう」

デュフオーは即座に【アンサー答えを出す者】で律の事を調べ上げた。

「そちらの方は、高嶺さん達のお友達ですか？」

「……どうだろうな。お前の能力なら、調べられるんじゃないのか？」

「いえ、それをやるとプライバシーの侵害になってしまいますので……」

律がデュフオーの事を聞こうとしたが、彼は口を割らない。と言うよりはデュフオーには律のスペックが理解出来ており、自分が話すまでも無いと考えている様だ。

「おい律、俺の携帯に勝手に入り込んでる時点でプライバシーも何も無いんじゃないのか？」

「高嶺さんとガツシユさんはE組ですから！」

「理由になつてない……デュフオーも困ってるんじゃないか？」

律は清麿達の生活を覗く気満々だ。プライベートも何もあつたものでは無い。殺せんせーに次ぐ私生活の覗き枠の登場に清麿は頭を抱える。

「俺の事は気にしなくていい。さて、俺は部屋に戻つてこの休日の特訓のスケジュール

調整を行ってからもう寝る。お前達も、今日は自由にしていざ

「今日はずっともう夜だけだな。お休み」

「ウヌ、また明日なのだ！」

デュフオーは高嶺家に宿泊しているのだが、寝室は清磨の部屋とは別で準備してある。彼が部屋に戻ったのち、清磨がデュフオーとの関係を律に説明した。

「なるほど！その方はとてもすごいのですね！私の正体もすぐ見破っていたようですし」

「デュフオーはとても頭が良いからの」

「そうだな。ところで律、携帯に入り込んだものはどうにもならないが、あんまり人の私生活を覗くなよ？」

清磨はモバイル律に釘を刺す。クラスメイトとはいえ、プライベートが筒抜けになるのは避けたいところだ。そして2人は律と談笑したのち、次の日の特訓と渚達との約束に備えて寝る準備を始めた。

「明日、楽しんで下さいね、2人とも！それではおやすみなさい！」

「「おやすみ」なのだ」

次の日デユフォーとの午前中の特訓を終えたガツシユペアは、渚と杉野と合流してバッテリーングセンターに入る。

「しかし昨日はビックリしたよ。いきなり律が携帯に入ってくるんだもんな」

「ああ、俺もビビったわ」

「僕もだよ」

「律はすごいのだ」

4人は顔を合わせると、まずは律の話題を出す。最新のAIのなせる技だ。これでE組は常に繋がっている事になる。

「はい、これから私はモバイル律として、E組の皆さんをサポートしますー」

「「「で、出た!!」」」

律はE組の生徒全員の携帯電話に入り込んだそうだ。これでクラス間の連絡も取りやすくなり、暗殺の幅が広がるメリットはある。しかしプライベートのどこまでが律に覗かれてしまうのか、彼等はそれだけが気がかりだ。

「よーし、まず俺からなー!」

まず杉野が空いているバッテリーボックスに入る。球の速度はそこそ速かったが流石は経験者、空振りや見逃しは1球も無かった。そればかりか、何本かホームランクラスのヒットもあった。

「どんなもんよ」

「杉野、中々やるのう」

「経験者だけあつてかなり上手いな（山中とどっちが上手かな?）」

「じゃあ、次は僕が」

杉野と入れ替わる形で渚が入る。杉野ほど上手なヒットは打てていない。しかし殺せんせーの速度に目が慣れているせいなのか、球はほぼ捉えられており、空振りは一々2回程度だ。ガツシユペアも立て続けにバッターボックスに入り、球を打ち続ける。

そして何度かバツティングを楽しんだ後、一行はベンチで休憩する。

「ウヌう、楽しいのう!」

「ああ、けど大分やりつくした感あるかな……」

「次はどこ行こうか?」

「おっと、電話だ。ちよつと向こうで話してくる」

ガツシユ達が休憩がてら話していると、清麿の携帯電話に着信が来た。相手は岡島だ。

「もしもし」

『お、繋がった。なあ高嶺つてモチノキ町に住んでるんだよな?俺今からモチノキ町の植物園に行こうとしてるんだけど、急で悪いが付き合ってくれね?』

「なんだ、植物が好きなのか？」

『いや、植物園ならカメラの被写体が豊富だと思つてさ』

エロいことばかりが目ざされがちな岡島だが、彼はE組に来る前は写真部に属しており、写真撮影が趣味だ。しかも腕はかなりのものである。確かに植物園なら一部を除いて写真撮影が禁止されている訳でなく、珍しい植物など良い被写体も多い。

「ああ、モチノキ町の植物園なら何度も行つたことがある。ただし今はモチノキ町を離れているから、今すぐに行くことは出来ん。あと、ガツシユと渚と杉野も一緒にいる。行くなら皆も誘つておろが、どうだろうか？」

『時間なら大丈夫だぜ！渚達にも声かけといてくれよ！』

「わかつた、後でかけ直す」

清鷹が通話を中断して渚達の方に向かう。そして彼等に要件を話すが、渚達は快く了承してくれた。

「植物園で写真撮影か……」

「おおつ、つくしがいる所ではないか！」

「つくしさん？」

「植物園にいたら紹介するよ、植物園を管理してる人で、結構良くしてもらつてたんだ。そういう最近は行つてなかつたな……」

清麿は昔ことある事に植物園に入り浸り、つくしはそんなかれを見守ってくれた。久しぶりの植物園の訪問はガツシユペアも楽しみだ。清麿が岡島に電話をかけ直し、岡島が時間を指定すると、清麿達はバッテリーングセンターを出て植物園に向かった。

そして植物園の入り口の前にて、岡島が清麿達と合流した。そして植物園に入ったが、相変わらずたくさん植物が清麿達を出迎えてくれる。

「急で悪いな、お前等。この植物園の事を知ったら、どうしても写真を撮りたくなつてさ！」

「いや、俺も久しぶりにここに來れて嬉しい」

「つくしは元気かろう?」

「あたしを呼んだかい?」

女性の声を聞いた一同が振り返る。そのには白衣を着た管理人の女性、木山つくしが立っていた。彼女は清麿を植物園で見つけており、彼がが学校に行き始めてからはガツシユとも友達になった。

「久しぶり!清麿、ガツシユ!」

「ああ。そうだな、つくし」

「ウヌ、久し振りなのだ」

「この人が、つくしさん？」

渚達とつくしの初顔合わせである。

「あれ、清磨。今日は違う友達を連れているね」

「ああ、実はな……」

清磨はつくしに転校したことを説明し、渚達の事を紹介した。それを聞いた彼女は、清磨の交友関係が広がる事を素直に嬉しく感じた。

「「よろしくお願いします」」

「よろしく、ゆっくりしていつて！」

挨拶を済ませた後、各々が植物園で行きたいエリアへ向かう。渚と杉野は花のエリア、ガツシユペアと岡島は食虫植物のエリアの見学を行う。

「見ろよ渚、見たことない花がたくさんあるぜ！」

「ホントだ、これは珍しいね」

渚と杉野は植物園の珍しい花に夢中になる。その一方、岡島は早速カメラを取り出して植物の撮影を始める。

「いやー、見たことない植物だ！撮りがいがあるな！」

「良かったな、岡島。そしてここにまた来るきっかけを作ってくれて、ありがとう！」

「やっぱり植物園は楽しいのう。つくしも元気そうで良かったのだ！」

「礼を言うのはこっちだぜ、急だったのに付き合ってくれてサンキューな」

久し振りに植物園に来ることが出来たガツシュペアも、珍しい被写体をたくさん見ることが出来た岡島もとても嬉しそうだ。ガツシュは前に出てはしゃぎ始める。

「しっかし、岡島って本当に写真撮影が好きだよな。将来もそれ関係の仕事を目指すのか？」

「まあな！俺、フォトグラフィアー目指してるからよ。今のうちに色んな光景を撮影して腕を磨いときたいんだ！」

「やりたいことが随分はつきりしてるんだな」

将来のビジョンがしっかりと見えている岡島に清磨は感心する。しかし、

「へへっ。そしてグラビアアイドル専属のカメラマンにでもなれたら、グへへ……」

「お、おう……」

やはりというべきか、岡島とエロは切っても切れない縁である。先ほどの岡島への感心もどこかへ行ってしまった清磨だ。そんな彼をみた岡島は熱く語り始める。

「確かに俺はエロいぞ！だが、エロいのは殺せんせーも同じだ。高嶺、俺の言いたいことが分かるか？」

「いや、言葉のままの意味しか分からんのだが……」

岡島が何故か自信ありげに自分のエロさを誇る。しかし、清麿にはどうしてそれ程に自信を持てるのかが分からない。

「俺、今殺せんせーのエロの好みを研究してんだ。そして、殺せんせーの好みのエロ本を餌に奴の気を引き付け、殺す！これが今の俺の目標だ」

「……なるほどな。とは言えいくら殺せんせーでもそんな罠には……いや、引つ掛かりそうだな」

「そう思うだろ！そしてこんなエロい暗殺方法は、俺にしか出来ない！」

岡島が自信を持つていた理由はこれだ。エロ本をおとりにして殺せんせーを殺す。確かにこんな方法は、岡島しか思いつかないだろう。

「……成功するといいな」

「当然！」

岡島のエロの刃が暗殺を成功させるかもしれない。そんな岡島が殺せんせーの好みを研究し尽くした後に実行に移るのは、まだ先の話だ。そして岡島と清麿が話している時、家族連れれの客と鉢合わせする。

「あら、ガツシユじゃない。随分久し振りね！」

「何だこの子、ガツシユの知り合いか？誰かに似てるような……」

「そうだな、確かこの子は……」

「お、お主は……ナオミちゃん!」

公園などでガツシユをいじめていたナオミちゃんが、家族で植物園に来ていた。そしていつものように、ガツシユはナオミちゃんに追い回される。

「カカカカカカカカカカカカ」

「又オオオオオ、やめるのだー!!」

「こら、植物園で走り回るんじゃない!」

「あ、おい!高嶺! (とういかあの子、研ナ〇コに似てたな……)」

ガツシユとナオミちゃんを清磨が止めに向かう。それを見ていたナオミちゃんの両親も、呆れ顔でガツシユ達について行く。そして岡島は一人取り残されてしまったが、少しした後には渚と杉野の2人に合流した。

「あれ、岡島君。高嶺君達と一緒にじゃないの?」

「いや、ガツシユが研ナ〇コ似の女の子に追い回されててな。高嶺もそれについて行ってしまったんだ……」

「な、なんだそりや……」

岡島の話聞いても渚と杉野はしつくり来ない。そして渚達はしばらく雑談しながら植物園を見学する。そんな中、

「あれ、君達。清磨とガツシユは別行動?」

「そうですね。そう言えばつくしさんは、高嶺君達とどんな関係なんですか？」

渚達は見回りをしていたつくしと再び顔を合わせる。黙っているのも気まずいので、渚が彼女とガツシユペアの事について質問した。

「うーん、そうだね……」

つくしは清磨が学校に行っていない時期があり、そんな時は植物園に頻繁に来ていた事、学校に行くようになるとガツシユを連れてき始めた事、植物園を荒らす輩（スギナペア）からこの場所を守ってくれた事を話した。

「そうだったんですね……」

「高嶺にそんな時期があったのは意外だな」

「高嶺って優秀だから、ねたまれやすいんじゃない？」

まさか清磨に不登校だった時期があったとは、思いもしなかった3人だ。当時の清磨は別人の様にやさぐれていたが、今はそんな事は無い。

「清磨、やっぱり変わったよね。多分ガツシユのおかげだと思うけど……あたしは、見守ることしか出来てなかったなあ」

つくしの目に罪悪感が混じる。結果として清磨は変わることが出来、今も学校に通い続けている。しかし自分は清磨のことは見てるだけで何もしてあげられなかったことを気にしている。そんな彼女の心情を渚は見逃さない。

「おそらく高嶺君は、つくしさんにはすごく感謝していると思います。今日も植物園でつくしさんに会えると思つて、嬉しそうにしていましたので……だからつくしさんが申し訳なく思う事は、何一つないと思います」

「そうかな？ それなら良いけど。ありがとうね、会つたばかりなのに気にかけてくれて」「い、いえ。僕も知つたようなことを言つてしまつてすみません……」

「ハハハ、君の方こそ申し訳なく思う事は何一つないよ！」

渚の言葉のおかげか、つくしの目からは罪悪感が消える。渚は元々高い観察力を持ち、周りの人の気持ちを探察することには長けている。だからつくしの抱えていた思いにも気が付き、彼女を元気づけることが出来た。

「清麿が変わることが出来て良かったよ。こんないい友達にも囲まれてさ……昔だったら君達のような友人といふこともなく、ガツシュとはしゃぐこともなかっただろうからね」

「つくしさん、随分高嶺のこと気にかけてるつすね」

「高嶺は良い奴だよ、怒ると怖いけど……」

「初めて見た時から、放つておけないつて感じだつたんだよ。あと、怒るとアレなのはわかる……」

今度は杉野と岡島がつくしに話しかける。しばらく彼等は清麿とガツシュの話が続

ける。

「3人とも。これからも清麿とガツシユの事、見てもらっていいかな？」

「「もちろん！」」

「うん、ありがとう。あと、今日話したことは清麿達には内緒ね」

3人の快い返事につくしは満足気な顔をする。そんな時、清麿がガツシユを連れて彼女達の方まで戻ってきた。

「全く！あんなに走り回って、他の人や植物を傷つけたらどうするつもりだったんだ……」

「私が悪いというのか！追いかけてきたのはナオミちゃんだというのに！！」

「はいはい、わかったよ……ってあれ、つくしも一緒か。渚達と何話してたんだ？」

意外な組み合わせに清麿は少し困惑する。

「え？ちよつとした世間話だよ……」

「お、戻ってきたか高嶺！」

「……じゃあ、あたしは見回りに戻るよ。皆、植物園を楽しんでいつてね」

ガツシユペアが合流したと同時につくしは仕事に戻る。清麿は彼女達がが何を話していたのが気になったが、つくしは教えてくれなかった。

「ウヌ、何とかナオミちゃんから逃げられることが出来たのだ……」

「悪いな、はぐれちまつて」

「いや、大丈夫だよ。もう少し見て行ったら帰ろうか」

このような日常は、特訓で疲弊しているガッシュユペアの精神を癒してくれる。そして殺せんせーの暗殺のためのチームワーク形成にもつながる。こんな時間を大切にしていききたいと改めて思う清磨だった。

LEVEL. 12 克服の時間

放課後の空いた教室、ビッチ先生は一人空き教室で佇む。殺せんせーの暗殺が上手くいかず、内心かなり焦っている。しかし、中々暗殺のためのアイデアが浮かばない。ビッチ先生が思索にふけっていると、突如首にワイヤーがかかり、気付いた時にはそのまま吊るされていた。

(……ワイヤートラップ^{!!}なんで学校に^{!!}誰^{!!}どうして私を……!!)

「驚いたよイリーナ、教師をやっているお前を見て。子供相手に楽しく授業、生徒達と親しげな帰りの挨拶。まるで、コメディアンのコントを見てるようだった」

「……!!^{せんせい}師匠……」

師匠と呼ばれたこの男、【殺し屋屋】ロヴロ。ビッチ先生を日本に斡旋した張本人だ。腕ききの暗殺者として知られていたが、現在は引退している。後進の暗殺者を育てるかたわら、その斡旋で財を成している。彼女が吊るされてから少ししてそこに烏間先生が駆け付け、ビッチ先生はそのままワイヤーから降ろされた。

ロヴロは暗殺が上手くいってないビッチ先生に撤収を命じるためにE組に来たのだ。それを拒否しようとした彼女だがロヴロの意志は固い。そこで殺せんせーの提案によ

り、明日一日のうちに烏間先生に対先生ナイフをビッチ先生が当てられればE組に残り続けられることになった。ただし模擬暗殺にはロヴロも参加することとし、先に彼が烏間先生にナイフを当てられれば、彼女はE組を去ることになる。

次の日烏間先生が体育の授業をしている時、ビッチ先生とロヴロは彼に狙いをつける。生徒達は何事かと思つたが、烏間先生はそのまま授業を進める。そして授業が終わり、

「……というわけだ。迷惑な話だが、君等の授業に影響は与えない。普段通り過ごしてくれ」

烏間先生は生徒達に事情を話した。

「……それではもし成功しなければ、ビッチ先生がここからいなくなってしまうという事ではないのか？」

「そういう事になるな……」

話を聞いたガツシユは顔を青くする。彼は座学を受けておらず、それほどビッチ先生と絡みは無い。しかしクラスの前が去ってしまうのはガツシユにとつても寂しい事だ。

「ヌオオオオオ！どうすれば良いのだア！」

「どうすれば良いって言われてもなあ……」

「ビッチ先生が成功させることを祈るしかなくね？」

ガツシユは慌てていたが、生徒達にはどうすることも出来ない。その後もビッチ先生は鳥間先生に色仕掛けを試みてみるが、全てかわされる。そして午前中の授業は終わり、刻一刻と制限時間は迫る。

「清麿オ、このままではビッチ先生が……」

「ああ、かなりマズイな……とはいえ、俺達にはどうすることも出来ん」

ガツシユペアが廊下でビッチ先生の心配をしながら歩いていると、ロヴロと鉢合わせた。明らかに堅気ではない彼の気迫を2人は感じ取る。

「そう固くならなくて良い。さて、君達はイリーナにここにいて欲しいと思うかい？」

「ウヌ、当然なのだ！」

「そうですね。ディープキスと下ネタは勘弁だが、あの先生の授業は為になります」

「ホウ、為になるとは？」

ロヴロはビッチ先生の教師としての生活をあまり良く思っていない。それにもかか

わらず2人は彼女を教師として必要としている。そんな彼等の発言に対してロヴロは訝しげに尋ねる。

「あの先生の授業はかなり実践的です。発音の仕方から細かい英文の言い回しまで、先生の海外生活の経験が生かされているから、身になりやすい。色んな国を渡り歩いたからこそその授業で、他の先生ではこうはいかない」

「……なるほど、イリーナの経験がこんな所で生かされているとは。暗殺の方はからつきしなの」

現地の言葉を知っていれば、当然その国の人達と仲良くなりやすい。ピッチ先生は言語をも利用してこれまで暗殺を成功させて来た。ロヴロは何かに納得したように頷く。

「そんな君達に朗報だ。この模擬暗殺から俺は手を引く。後はイリーナが奴にナイフを当てられるかどうかだ。だがまあ、無理だろうがな」

「ウヌ、鳥間先生は手強いからのう……」

「確かに、ロヴロさんが引いたところでナイフを当てられなければ意味がない」

ロヴロは朗報と言ったが、実際に状況はそこまで良くない。このまま続けても成功する確率は低い。

「ところで、何か君達からは底知れぬ力を感じるな。只者ではなさそうだ」

（この者、私達の力に気付いておるな。油断出来ん……）

「明らかに俺達を見透かしている目……」さあ、どうでしょうかね？」

ロヴロの発言にガツシユペアは警戒を強めた。彼もまた、かつて殺し屋としていくつもの死線を乗り越えてきた猛者だ。同じく死線を乗り越えてきたガツシユペアに対して普通ではない覇気を感じ取る。

「警戒しなくても良い。別に君達の力を公にさらそうというつもりはない。ただ、君達は存在感が強すぎる。これは戦闘ではともかく、君達2人の暗殺では大きなマイナスになる。少し考えた方が良いかもしれんよ……」

「何と、存在感とな……」

「忠告ありがとうございます。しかし、存在感を消すことなんてどうすれば……」

ロヴロは忠告してくれたが、存在感を消す方法など一朝一夕に身に付くものではない。ガツシユペアはどうしたものかと考える。

「それに関しては、自分達で考えてみたまえ。さあ、君達も自分の教室に戻ると良い」
ロヴロは答えを教えてくださいなかつた。この問いもまた、ガツシユペアが強くなる為の試練なのだろう。そして彼はそのまま去っていった。

ガツシユペアはロヴロの言葉について考えながら教室に戻る。

「あ、高嶺君とガツシユ君。一緒にお昼ご飯食べようよ！2人ともどこ行つてたの？」
「ちよつとロヴロさんと話してたんだ」

「ロヴロ殿は、模擬暗殺から手を引くと言つておつたぞ」

まだ昼食が済んでいない渚がガツシユペアを誘つてくれる。ちようど今は昼時だ。クラスでもいくつかグループに分かれて仲間内で食事を楽しんでいる。

「へえ、じゃあ後はビッチ先生がナイフ当てるだけだね」

「ただだねつて、そんな簡単でもないだろうに……」

「まあね。お、見てみあそこ」

カルマは軽い口調でそう言うが、決して簡単な事では無い。そんな彼は外で昼食を取る鳥間先生を指差した。そして鳥間先生にビッチ先生が接近する。模擬暗殺の再開だ。

結論から言うとビッチ先生は模擬暗殺に成功し、E組に残留することが出来た。ビッチ先生の色仕掛けとワイヤートラップの見事な複合技術によつて鳥間先生を追い込むことが出来たが、あと一步及ばなかった。しかし鳥間先生の根負けによりナイフを当てる事が出来た。そんな光景を生徒達のみならず、殺せんせーとロヴロも見ていた。

「苦手なものでも一途に挑んで克服していく彼女の姿。生徒達がそれを見て挑戦を学べ

ば、一人ひとりの暗殺者としてのレベルの向上につながります。だから、私を殺すならば彼女は教室に必要なのです」

ビッチ先生は色々な国を渡り歩く為に、多くの外国語を習得した。それは挑戦と克服の繰り返しとも言える。そしてE組に来てからも、殺せんせーの暗殺のために必要な技術を自分で考え、挑戦と克服をしていた。今日のワイヤートラップはその成果の一つだった。殺せんせーの発言をロヴロは黙って聞いた後、ビッチ先生のもとへ向かう。

「師匠……」

「出来の悪い弟子だ。先生でもやってた方がまだマシだ。必ず殺れよ、イリーナ」

「……!!もちろんです、師匠!!」

ロヴロがビッチ先生を、暗殺者だけでなくE組の教師としても認めた瞬間だ。先生の残留は確定した。その事で生徒達は歓喜の声を上げる。そうして昼休みの時間も終わり、殺せんせーと生徒達は授業の準備に入る。一方でロヴロは今日一日E組の授業を見学することになった。

授業が始まったので、ガツシユは裏山で特訓を開始する。特訓の内容はデュフォーに教わった身体能力向上のトレーニング及びマントを使いこなすための訓練、そして烏間

先生に教わったナイフ術だ。この時間、ガツシユはナイフ術の訓練を行う。そんな時、授業を見学していたはずのロヴロが現れた。

「ガツシユと言ったか、君は授業を受けていないのだな……」

「ウヌ、私は体育の授業だけ受けることになっておる。それ以外の時間はこうやって特訓をしておるのだ！」

ガツシユが座学の授業を受けていない事に関しても、ロヴロは特に疑問にも思わない。

「そうか……しかし、魔物がナイフ術を学ぶのも変な話だとは思うがな」

「私が魔物だと知っておるのか?！」

「イリーナ達から聞いたよ。君達の底知れぬ力の正体が分かって良かった」

ガツシユの事に特に驚かなかったのは、ビッチ先生達からガツシユの事情を聞いていた為だった。

「清麿が心の力を切らした場合でも、ナイフがあれば殺せんせーに攻撃できるのだ!だからナイフの使い方も上手くならなくてはならぬ!」

ガツシユが烏間先生に教わったようにナイフ術の訓練を続けると、ロヴロが対先生ナイフを取り出す。

「烏間に借りたんだ。少し、ナイフ術について教えよう」

「ウヌ、良いのか？」

「ああ、ひとまずそこで立っていたまえ」

ロヴロがナイフを構えた。そしてガツシユにナイフを当てようとしたが、ガツシユは難なくかわした

かに思えた。しかし、ガツシユはナイフを避ける際にバランスを崩してしまい、そのままロヴロのナイフを当てられていた。

「ウヌ、これは……」

「フェイントだよ。そして素早くそれを行えば、攻撃をよけようとした相手のバランスを崩すことすら可能だ。烏間ならもっと上手くやるだろうがな」

現役を引退したとは言え、ロヴロは一流の殺し屋として名前を馳せた男だ。ナイフ術を始めとした武器の扱いには長けている。よってこのような離れ業も難なくやっつける。

「闇雲に力を振り回すだけではナイフは当たらない。攻撃を当てるための過程が大事だ」

「わかったのだ！」

そうしてロヴロはガツシユにナイフ術を指導する。しかし1時間程して、ロヴロは手を止めた。

「どうしたのだ、ロヴロ殿？」

「少し休憩にしようか」

「分かったのだ！」

小一時間もナイフ術の訓練をしていたのだ。いくらロヴロとは言え、疲労感は隠せない。彼等はその場にしゃがみ込む。

「さて少年。私はある事を危惧している」

「……それは何なのだ？」

ロヴロには一つだけ気がかりな事がある様だ。彼は話を続ける。

「イリーナは生徒達と触れ合う事で、優しくなりすぎたかもしれない」

「ウヌ、ビッチ先生は優しい先生だから。それは、良くないことであるのか？」

「そうだな……」

ロヴロはこれまで、ビッチ先生を一流の暗殺者として育て上げた。しかし彼女は今やE組の英語教師としての一面が強く出ている。その事で土壇場で殺意が鈍る可能性をロヴロは危惧する。

「しかし、ビッチ先生は見事にナイフを烏間先生に当てたではないか！だから大丈夫だと思っていたが……」

「いや、あれは烏間の温情故だろう。あのトラップは見事だったが、結局見切られていたからな」

結果としてビッチ先生は烏間先生にナイフを当てる事が出来たが、本番の暗殺の場合はあの場面で彼女が返り討ちに合うだろう。ロヴロはそれを理解していたが、E組の環境を見た上でビッチ先生の残留の判断を下した。

「イリーナは今、暗殺者としての自分とE組の英語教師としての自分と言う異なる立場の間で揺らいでいる状態に見えた。そこに付け込む輩がいなければ良いが……」

「……ウヌ？」

ビツチ先生はE組に来る前は何人もの要人を殺してきた非日常の生活を送ってきた。しかしE組に来てからは、人殺しとは無縁の生徒達との交流を深めている。そんなギャップを感じて先生は戸惑っている。ロヴロは考える。そして、それがビツチ先生の弱みになり得る事も。しかし、ガツシユはそれを理解出来ていない様子だ。

「分かり辛い話をして済まなかった。とにかく、イリーナは精神的にかなり脆い一面がある。その克服は俺には出来なかった。だが、君達生徒なら出来るかもしれない。頼りない教師だが、生徒達で支えてやってはくれないか？」

「もちろんなのだ！ロヴロ殿は、よくビツチ先生を見ているようだの！」

「まあ、師匠だからな」

ロヴロは表には出さないが、かなりビツチ先生の事を見てくれている。そして、生徒達ならビツチ先生を支えてくれる事を確信していた。それは自分には果たし切れなかった事だから。2人が話していると、下校時刻が過ぎていた。

「そろそろ帰るか。ではまたな、ガツシユ」

「ウヌ、またなのだ！」

ロヴロが山を下りていくのを見て、ガツシユは教室へ向かう。

そして教室では清麿が渚達と話していたが、ガツシユが入ってくる。

「清麿達、そろそろ帰ろうぞ」

「そうだな、帰ろうか」

ガツシユと合流した清麿達は帰り支度を始める。今日の帰りの話題はガツシユがロヴロにナイフ術を教わった事だ。彼はロヴロにナイフを当てられた事を話すと、渚と茅野はそれに驚く。

「ロヴロさんて、すごいんだね……」

「魔物であるガツシユ君にナイフを当てちゃうなんて……」

「ウヌ、ロヴロ殿のナイフ術は強力だったのだ！」

ロヴロの話題は中々尽きない。そして彼の話をしているうちに、渚と茅野との別れ道まで来た。2人と別れたガツシユペアは、ロヴロに言われた「存在感」についての言葉を思い出す。

「ガツシユ、俺は存在感の件はこういう事だと思っただが……」

清麿は自分の仮説をガツシユに話す。

「ウヌ、そういう事であつたか……」

「合ってるかはわからんがな。でもこれなら、より暗殺に役立てるかもしれん！」

「よし、もっと特訓をするのだ！」

ロヴロとの邂逅を経て、彼等には新たな課題が出現した。その克服を行う為にもガツシュペアはこれまで以上に特訓に励むよう意気込む。

LEVEL. 13 湿気の時間

雨の季節、梅雨の6月。教室内の湿度も高くなり、そのせいで殺せんせーが水分を吸ってふやける。律曰く、33%頭部が巨大化していたそうだ。それだけではなく殺せんせーの帽子が少し浮く。

「先生、帽子どしたの?」

そのことに気付いた倉橋が殺せんせーに質問した時、先生は自慢げに帽子を取る。

「よくぞ聞いてくれました。先生ついに生えてきたんです、髪が」

「「「キノコだよ!!」「」」」

湿気が多いからと言って頭からキノコが生えるとは、殺せんせーの体の構造はどうなっているのやら。クラス一同そんなことは知る由もなかった。

その日の帰り道、ガツシユペアは渚、茅野、杉野、岡野の6人で帰路に着く。杉野は茅野の食べているデザートのイチゴをねだっており、渚と清麿は雑談をかわしていた為、ガツシユと岡野が隣り合って話をする。

「ねえガツシユ、雨の日でも裏山で特訓してたよね？大丈夫、風邪ひかない？」

「ウヌ、心配してくれてありがとうなのだ。しかしひなた、私は魔物ゆえ、そんな心配はいらぬぞー！」

雨の日でも外に出ていたガツシユを彼女は気にかけてくれる。今日の様な悪天候でも、彼は特訓をやめるつもりは一切ない。

「魔物つて、体が丈夫なんだね……」

「ウヌ、その通りなのだ！」

「そんなこと言つて、前に熱を出してた時があつたじゃないか」

ガツシユが自信満々にしていると、渚と話してたはずの清麿が口を出す。

「そ、そんなこともあつたかの……」

「ガツシユ君、無理はだめだよ」

ガツシユは一度熱を出してしまつた事がある。そして熱を出したのにも関わらず清麿の学校に来てしまい、その日は保健室で休むことになってしまつた。ガツシユがとぼけていると、今度は渚に注意をされる。

「E組に来て、ここまで強い雨は初めてだ。悪天候の時ガツシユがどうすれば良いか、考えないとな。……つたく、今日はその話をしようとした矢先に外に飛び出しやがつて」

今日は雨模様の為、清麿がガツシユの外での特訓について考え直したかつた。しかし

ガツシユは聞く耳を持たない。結局彼はこれまで通り外で特訓を行った。

「心配はいらぬ。今まで通りで良い」

「そんな事言つて、風邪ひいたら特訓も出来なくなるぞ」

「高嶺君で、完全にガツシユ君の保護者だよ」

「確かに」

そんなガツシユペアのやり取りを見て、清麿は渚と岡野に保護者認定を受けてしまった。2人の関係は友・仲間・パートナーと色々な見方が出来るが、今の清麿は保護者のようにしか彼等の目には映らない。

「保護者つて……」

「清麿、問題ないぞ。それに私は毎日特訓して、もつと強くならねばならぬからの」

「つたく、風邪引かんようにちゃんと体拭いとけよ」

「ホント、2人つて仲いいよね！」

岡野は2人の会話を微笑ましく思う。そんな彼女がふと周りを見渡すと、前原が本校舎の女子と相合傘をしている所を見かけた。

「あれ、前原じゃんか。一緒にいるのは確か……C組の土屋果穂」

「はっはー、相変わらずお盛んだね、彼は」

「ほうほう」

岡野達が前原を見ていると、突如合羽を着た殺せんせーが姿を見せて、前原の相合傘についてメモを取る。生徒のゴシップに目がない殺せんせーだ。

「……アンタ、国家機密という自覚はあるのか？」

人目に付きかねない場所にもお構いなく出現する殺せんせーを、清麿は呆れ混じりの目線で見ると、前原はイケメンで、見た目通りのジゴロな性格だ。女子にもモテており、一緒にいる異性はしよっちゅう変わるといふ話だ。

そんな前原を清麿達は見ていたが、前原と土屋の方に別の本校舎の生徒達が数人近付いてきた。

「あれエ？果穂じゃん、何してんだよ」

「瀬尾君。ち、違うの、そーゆーんじゃなくて……たまたまカサが無くてあつちからさして来て……」

瀬尾と呼ばれた男子生徒が呼び止めると、土屋はいきなり前原を突き放して瀬尾の方へ駆け寄る。そんな土屋を見た前原は何かを悟ったように話し始めた。

「あー、そゆ事ね。最近あんま電話しても出なかったのも、急にチャリ通学から電車通学に変えたのも。で、新カレが忙しいから俺もキープしておこうと？」

「果穂、おまえ……」

前原の話聞いて、瀬尾は土屋に視線を向けた。土屋は言い訳を重ねていたが、一瞬明らかに人を見下したような表情を見せた。その後、攻撃的な目線で前原を睨み付ける。

「あのね、自分が悪いってわかってるの？努力不足で遠いE組に飛ばされた前原君。E組の生徒は櫛ヶ丘高校進めないから私達接点無くなるじゃん。E組落ちてシヨックかなと思つてハッキリ別れは言わなかったけど、言わずとも気付いて欲しかったなー。けど、E組の頭じゃわかんないか」

「「はははは」」

土屋のみならず、周りの男子生徒達も前原をあざ笑う。そんな土屋の理不尽な主張を聞いて前原は物申そうとするが、そんな彼を瀬尾が思い切り蹴飛ばす。

「わっかんないかなあ。同じ高校に行かないって事はさ、俺達お前に何したって後腐れ無いんだぜ」

そう言うと、瀬尾達男子生徒は前原を袋叩きに始める。土屋は笑いながら傍観する。そんな光景を見かねた清麿達は前原の方へ向かう。

「お主達、何をしておるのだ!!」

まずはガツシユが前原と瀬尾達の間に入り、暴力をやめさせた。

「前原、大丈夫か？」

「ほら、こういう事もあるから女遊びも程ほどにしなさい」

「お前等、見てたんかい……」

清麿が倒れている前原に手を差し伸べて立たせ、岡野は濡れてしまった前原にタオルを渡す。渚達も前原をかばうように駆け寄った。

「何だあ、E組の連中が次々と……」

「ていうか、このチビ何？邪魔なんだけど」

瀬尾達がガツシユ達を睨み付けるが、ガツシユはそれを気にも留めない。彼はただ、理不尽に暴力を振るう連中が許せないのだ。

「お主達、なぜこのようなひどいことをするのだ!!前原がE組だからなのか、E組には何をしても良いと思っておるのか!!」

「いや、E組の奴に彼女が付きまとわれたら、普通こうするでしょ?」

「そうそう、E組は底辺だからね、付きまとわれたくないよね!」

この認識こそ、彼等にとつての普通だ。E組の生徒に対してならどんな差別も侮辱も、時には暴力でさえも許される。この常軌を逸した差別待遇も、柗ヶ丘中学校では当たり前のことである。

「ていうか、こいつ何なの?生意気でむかつくんだけど」

「関係ないなら首突つ込まないでくれる？目障りなんだが」

瀬尾達はガツシユを不快に思い、暴言を吐いていく。そんな連中の言葉に対して、ガツシユは怒りの感情を露わにした。

「関係なくなどない！私は前原の友達だ！！いい加減にしろ、貴様ら！！」

ガツシユが声を荒げて言い放ち、瀬尾達を威圧する。そんな彼等はガツシユの視線に一瞬怯んだが、再び暴言を吐き始めた。

「何だよ、その目は！」

「E組が俺達に逆らおうってのか！！」

そんな連中にガツシユはさらに物申そうとしたが、今度は清麿が前に出る。そしてその時の清麿の表情は、周りを震撼させるのには十分なほど怒気に充ち溢れていた。

「さつきから黙って聞いてりや、何好き勝手言つてやがんだ！！いい加減にしがれ、コラア！！」

「！！ひくくくく！！！！」

怒りのあまり清麿の表情は、人外のそれへと変貌していた。瀬尾達は冷や汗を掻きながら体を震わせる事しか出来ない。

「E組になら何言つても、何しても許されると思つてんのか！！んなわけねーだろ！！オイ、とつとと前原に詫び入れろ、詫び！！」

「ハイ、ゴメンナサイ……」

「何で俺の方向いてんだ？前原に謝れつつてんだろーが!!」

清磨の気迫により、瀬尾達は完全に恐怖に支配される。先程まで好き勝手な言動を行つた連中と同一人物とは思えない。彼等だけでなく前原達も清磨の気迫で言葉を失う。そんな時、

「やめなさい」

彼等の近くの道路に1台の黒い高級車が停まっており、そこから理事長が降りてきた。

「高嶺君とガツシユ君。あまり本校舎の生徒達に齒向かわないよう言つたのだがね」

「しかし、理事長殿！あの者達が前原に暴力を振るつておつたのだ!!」

「なるほど、確かに暴力は良くない。しかしこのままでは危うく、君達は学校にいられなくなる所だつたんだよ。この意味が分かるね？」

E組が本校舎の生徒に立ち向かうことは、理事長の理想に反する。必要とあらば邪魔な生徒を退学に追い込むことさえいとわぬ理事長の強い意志によつて、場の支配権が清磨から理事長に移り変わろうとする。

「そ、そうだ！E組が俺達に逆らいやがつて」

「謝るのはお前等の方だ！」

理事長の力を後ろ盾に、瀬尾達は清磨に怯えながらもどうか反論が出来るようになった様だ。しかし、

「あ、———」

「「ひ~~~~」」

鬼の如き形相の清磨の威嚇によつて瀬尾達は再び恐怖し、そのまま逃げ去つてしまつた。場の支配権はまだ完全には理事長に移らない。その光景を見た理事長はため息をつく。

「やれやれ。そういうのをやめるよう言つてるんだがね……」

「お言葉ですが理事長、俺達は暴力を振るわれたクラスメイトを放つておけません」

「ならば、先ほどのように彼等が必要以上に脅かす必要はあつたのかい？」

「……カツとなり過ぎたのは認めます」

理事長は清磨をたしなめようとしたが、清磨の目は反骨精神に満ちている。そんな彼を見た理事長は、不快になるところか口元が笑つていた。

「……やはり君達との会話は面白い。それに、今君達を手放すのも惜しい。ふむ、今日はこの辺にしておこうか。それでは、あまり今回のような荒事は起こさないようにね」

理事長はそう言つて車に戻る。その場にはE組の生徒達のみが残された。

清麿達の間には何とも言えない雰囲気漂う。そんな中で初めに言葉を発したのは杉野だ。

「高嶺とガツシュ、あの理事長相手に一步も引いてなかったな。見ててヒヤヒヤしたぞ」「ホント、心臓に悪いよね。2人が退学とか勘弁だよ……気を付けてよね」

彼の言葉を聞いた後、ガツシュペアの退学の危機を茅野が心配してくれた。

「……悪い、心配かけたか」

「済まなかったのだ」

「マジそれな！俺をかばってくれたのは嬉しいけど、それでお前等が退学とかシヤレになんねー。まあ、助けてくれたのはサンキューな」

ガツシュペアの素直な謝罪を聞いて、前原達も安心する。しかし、

「……けどさっきの本校舎の連中、E組相手なら何しても許されるくらいの勢いだつた。俺、それ見て悲しくなつたし、何より怖かつたんだ。ヒトつて皆、相手が弱いと見たらあんなつちまうのになつて」

先ほどの表情とは打って変わり、前原は悲し気な顔を見せる。だが、

「何を言う、前原。清麿の方がよっぽど怖かつたであろう」

「あ、ガツシュ。俺の言いたいこと言うなよ！」

「お前等……」

悲し気な表情は、清麿の鬼の形相についての話題のための前振りに過ぎない。そんな前原達に清麿は呆れるが、皆の雰囲気は明るくなる。そして笑いが出てくる。また雨も止んできており、少しではあるが日が差していた。

「確かに高嶺君は怖かったですねえ。しかし、根本的に本校舎の生徒達とは違う」

先ほどまで姿を見せていなかった殺せんせーが出現する。安易に外を出歩いている所を理事長に見られる訳にはいかず、隠れていた。

「彼等は自分より弱いと判断したものにのみ、攻撃的だった。しかし高嶺君はそうではない。友達をかばうためにどのような相手にも立ち向かっていける、それは凄いことだと思います。もちろんガツシユ君や、すぐに前原君のもとへ駆けつけてくれた君達もです。暗殺を通して確実に絆が結ばれますねえ、ヌルフフ」

殺せんせーはかなり嬉しそうだ。クラス間に絆が芽生える、先生にとってこれ程嬉しいことはそうない。

「そういえば前原君、怪我とかしてない？」

「ああ、大丈夫だぜ渚。それに今は気分も悪くない。罵倒されたり蹴られた事も、高嶺にビビりまくってた連中見てたら、もうどうでも良くなっちゃった」

「そっか、怪我がなくて良かった」

ひどい目にあわされた前原だったが、どこか清々しい顔をする。他の生徒達も先ほどまでE組が罵倒されていたとは思えないような表情だ。

「E組って本校舎からは弱者として差別されてるけどさ、皆どこかに頼れる武器を隠し持ってるのを俺は見て来た。だから皆で色んな事に挑戦していけるんだ。そこには俺が持つて無い武器も沢山あって……」

「そういう事です。人の能力はひと目見ただけじゃ計れない。それをE組で暗殺を通して学んだ君達は、この先弱者を簡単にさげすむ事は無いでしょう。さて、この先本校舎の生徒達を見返す機会は多くある。皆の武器をふんだんに生かして彼等にぎゃふんと言わせてやりましょう、ヌルフッフ」

雨降って地固まるとでも言うのか、今回の事で清磨達はクラスの絆を強く実感する。そして雨は完全に止み、空は晴れてきていた。また後日、前原が他校の女子と遊んでいたことが発覚したのは別の話である。

その頃理事長は本校舎に戻り、自分の部屋にてある男と対面している。

「やれやれ、高嶺清磨とガツシユベル。あの2人はあくまで私の理想に逆らうのだろうね。困った生徒達だ。そうは思いませんか……」

ナゾナゾ博士！」

「ハハハハハ、學峯君。随分と彼等相手に手を焼いているようじゃないか！」
理事長と話していた相手はナゾナゾ博士だった。これまで何度もガツシユペアを助

け、今回はその彼等を殺せんせー暗殺のために理事長に紹介した張本人だ。

「手を焼いているという程でもないのですがね。ただ、彼らが私の理想とは決して相容れることは無いだろうことは非常に残念だ」

「ハハハ、私も彼等が誰かに屈する場面は想像出来んよ」

「さて、雑談はこの辺にして、本題に入りませんかね？」

気付けばガッシュペアの話題ばかりになっているところを理事長が遮る。

「そうだったね。今回はE組に暗殺のための助っ人を紹介しようと思ってる」

「ほう、それはどんな？」

理事長が尋ねると、ナゾナゾ博士は助っ人の写真を渡した。

「あまり強そうに見えませんがね……」

「見た目で判断してはいけませんよ。この者もまた、何度も死線を潜り抜けているからね」

「となると、魔物絡みですかね？」

「ああ、その通りだ。最も、魔物の方は魔界に帰ってしまったがね」

「なるほど、いいでしょう。E組の助っ人として歓迎します」

ナゾナゾ博士が紹介した助っ人は、理事長の許可によってE組の暗殺の手伝いをする
ことになった。それがE組にどのような影響を与えるのかは定かではない。

LEVEL. 14 助っ人の時間

前原が本校舎の生徒達に絡まれていた日の夜、清磨はナゾナゾ博士と通話する。

『久し振りだね、清磨君。ガツシユ君も元気かな？』

「ああ、こっちは相変わらずだ。何か殺せんせーについて分かったのか？」

『いや、その情報はまだ探ることが出来てない。それよりも君達E組に、暗殺のための強力な助っ人を要請しておいた』

「何、助っ人だと？」

ナゾナゾ博士は清磨に、助っ人についての連絡を行う。一体誰が助っ人になったのか。清磨は気が気でない。

『いかにも。ただし、転校生というわけではない。あくまでその者の都合が良い時だけに暗殺を手伝ってもらうことが出来るだけだ。正式にクラスに属してはいない』

「一体どんな奴なんだ？」

『それはね、君達も良く知る人物だ。それは、

【マジヨステイック12】だ！どうだ、強力な助っ人たちだろう！！」

「な、何だつて……！！」

清麿の顔から眼が飛び出しそうになる。「マジヨステイック12」、ナゾナゾ博士の僕達だ。度々魔物との戦いにも参加していたが、それ程活躍は出来ていなかった。意外過ぎる助っ人達の登場に清麿は驚きを隠せない。隣にいたガツシユは、清麿の表情に対してビツクリする。

「ほ、本当にあいつらが……」
『ああ、清麿君。それはね……』

ウ・ソ！』

ナゾナゾ博士お得意の嘘だった。ナゾナゾ博士は度々嘘を付き、パートナーのキッドをからかって来た。そんな嘘に対して清磨から何かが切れる音がする。

「おいアンタ、こんな時に嘘を付くんじゃない!!」

『ハハハ、冗談だよ。そう怒らんでくれたまえ』

「つたく、本当は誰が来るんだ？」

『どうしても聞きたいかい？それはね……』

ヒ・ミ・ツ!』

ナゾナゾ博士の悪ふざけに清麿の堪忍袋の緒が切れる。そして彼は怒りのままに電話を切ってしまった。そんな様子を見ていたガツシユは何事かと思う。そして彼は汗をかきながら清麿に訳を聞いた。だす。

「き、清麿。どうしたのだ?」

「ナゾナゾ博士からだ!! ったく、あの人の悪ふざけはどうかならんのか……」

ナゾナゾ博士はしばしばこのように清麿をからかう。その度に彼の逆鱗に触れ、ガツシユの電撃を浴びせられて来た。

「明日から、ナゾナゾ博士の紹介でE組に助っ人が来るんだと。誰かは聞けなかったが、恐らく俺達の知ってる人だろう……」

「おおつ、また転校生か?」

「いや、転校生ではない。あくまで助っ人であり、正式にE組に所属する訳ではない」

「一体、誰なのだろうな?!」

謎の助っ人の正体に関してガツシユは興味津々だ。E組にどの様な変化が訪れるのか。ガツシユは期待に胸を躍らせる。

次の日の学校。特に助っ人らしき人物は現れずにその日の学校生活が終わろうとしていた。また助っ人の話題をE組の誰も挙げておらず、何事もないまま授業が終わってしまった。

（結局、助っ人なんて現れなかったじゃないか……またナゾナゾ博士の悪ふざけだったのか？）

清麿がそんなことを考えていると、教室の扉が突然開く。そして対先生ナイフを持った何者かが殺せんせーに襲い掛かった。その光景にクラス一同、嘩然とする。

「……授業が終わるまで待つてくれたのですか、律儀な暗殺者ですねえ！」

殺せんせーは暗殺者の攻撃を尽くかわし、その暗殺者を触手でとらえてしまった。

「まさかこんな堂々乗りこんでくるとは。そしてこの独特な動き、ただのナイフ術ではない。別の格闘術との複合技でしょうかね。しかしとらえてしまえばこっちのもの。覚悟はいいですか、

「可愛い暗殺者さん？」

「………?! くっ、離すある!!」

「()()(ある?!)()()」

この暗殺者は中国人で、カンフーを使用していた。しかしその人物は清麿のよく知る

者だった。暗殺者を殺せんせーが投げ飛ばそうとした時、

「ちよつと待った、殺せんせー!! な、何でリイエンがここに?! (ナゾナゾ博士の言つてた助っ人は、リイエンだったのか?!)」

((高嶺君の知り合い?!))

あまりに意外な人物の登場に、清麿は思わず席を立つ。リイエンはかつて魔界の王を決める戦いに参加し、パートナーのウォンレイと共に清麿達にこれまで何度も力を貸してくれた。そんな彼女は、今度は殺せんせー暗殺の助力をしてくれることになった。

リイエンは投げ飛ばされることもなく、無事に殺せんせーから解放される。E組の助っ人の登場という事で、生徒と殺せんせーだけでなく、烏間先生とビッチ先生も教室に集まる。もちろんガツシユもそこにいた。

「清麿、ガツシユ! 久し振りある!」

「リイエンが助っ人なら、頼もしいのだ!」

「助っ人が来ることは聞いていたが、まさか君達の知り合いだったとは……」

リイエンが助っ人に来ること自体、烏間先生は聞いていた。しかし、その助っ人がガツシユペアと接点があるとは思ってもよらなかった。

「ええと、まずは自己紹介からあるね。私の名前はリイエン。E組の助っ人として中国から来たある。少しの間だけど、皆の暗殺の手伝いをするある、よろしく！」

リイエンが自己紹介を済ませた後、他の生徒達からの質問責めを受ける。そして数多くの質問が同時に彼女に投げかけられる。聖徳太子で無いのだから、当然彼女は返答に困る。そんな時、

「ちよつとアンタ達、がつつきすぎ。その子が困ってるじゃない、全く」

ビッチ先生がリイエンに助け船を出してくれた。

「というか高嶺、ガツシュ。アンタ達の知り合いなら、ガキどもに紹介してあげなさいよ」

「ビッチ先生。リイエンは知り合いじゃなくて、友達なのだ！」

「わかったよ、リイエンは……」

清磨は他の生徒達にリイエンの事を紹介する。彼女との出会い、魔物のウオンレイと一緒に清磨達と戦ってくれた事、ウオンレイとは固い絆で結ばれている事などを話した。清磨が一通り説明を終えるが、その後も生徒達の質問が止む気配は無い。

「リイエンさんはウオンレイっていう魔物とは恋人になったんスか？」

「あ、それ私も聞きたい！」

「気になる〜」

前原の質問に対して、他の女子達もリエンとウォンレイの関係に興味津々だ。

「ウォンレイとは恋人になったあるよ。私はウォンレイの事が大好きある。そんな彼は最後まで私達を守ってくれた。ウォンレイはいつも何かを守るために戦っていたある。私も彼の意志を継いで世界を守るために皆に協力するある！」

リエンの返答には迷いがなかった。ウォンレイはフェアワードでの戦いで強大な爆発からリエン達を守りぬいたのだ。そんな守る意思を彼女は継いでいる。

「……でも、魔界に帰ってしまったならウォンレイっていう魔物とリエンさんはもう会えないんじゃない？」

矢田が苦虫を噛み潰したような表情でそう言う。しかし、

「それはわかりきってたことある。それにどんなに離れていても、私達はいつも一緒にいるあるよ」

ウォンレイはリエンの心の中で生き続けるために、彼女に自身の戦う姿を焼き付けさせて来た。そんなウォンレイを彼女は常に思い続けている。そしてリエンは、彼が残してくれた髪留めを皆に見せる。そこには「ずっと一緒に」とメッセージが記されていた。例えば直接会う事が出来なくとも、2人の心は強い絆で繋がっている。

「2人の繋がりが、すごく素敵……あれ、目から涙が……」

「ウヌ！ 桃花よ、泣くでない」

リイエンの話を聞いて矢田は涙を流す。そんな矢田をガツシユがなだめていたが、彼もまた泣いている。それ以外にも多くの生徒が感動する。そんな中、

「種族も世界も超えた恋だつて?! くっ、3次元も侮れないな……」

「まずこんな純愛ラブストーリーが実在していたことに、驚きを隠せないわ」

竹林と狭間が独特な表現でリイエンとウオンレイの関係を褒め称える。しかし2人の言い方が言い方だったため、クラスが微妙な雰囲気になつてしまった。リイエンも困つたような表情をする。しかしそんな2人の発言など聞こえていないかのように、涙を流し続けていた人がいた。

「……でも、そんなのつて……悲しすぎるじゃない!! いくら心で繋がっているつて言つても、もうアンタ達は直接会つて会話をするこも、触れ合う事も出来ないのよ!! そんな、そんな事つて……辛いとは思わないの?!」

ビツチ先生は大粒の涙を流しながら声を荒げた。彼女はこれまで、暗殺のために数多くの男達を手玉に取つてきた。そしてビツチ先生に魅了された男達は、多くを貢いできた。しかし、そこには本物の恋愛感情など無かつた。対してリイエンはひたすら一途にウオンレイに恋していた。

多くの男達と触れ合つても本物の恋をしてこなかつたビツチ先生と、ただ一人の男を一途に思い続けてついに種族をも超えた恋愛関係を築いたリイエンは、ある意味対極

とも言えるだろう。そんな彼女に思うところがあつたのゆえに、ビッチ先生は取り乱したのかもしれない。

「イリーナ先生、落ち着いて下さい」

「人の恋愛事情にあまり口出しをするものではないと思うが？」

「!!…………ごめんなさい。私…………」

殺せんせーと烏間先生に指摘され、ビッチ先生は冷静さを取り戻す。そんな彼女を見て、レイエンは怒るどころか優しく微笑んでくれていた。

「気にしなくて大丈夫あるよ。私を心配してくれているのでしょうか？あなた…………とても優しい人あるね。でも大丈夫。直接会えなくても、心で繋がっているから辛いなんて思わないあるよ」

レイエンの目は優しくあつたが、それと同時に強い芯を感じさせる。そんな彼女を見て、ビッチ先生はそのままレイエンを抱きしめた。

「あ、あれ…………どうしたあるか？」

「…………少しこうさせなさい（この子の言葉に嘘はない。でも、それでも…………）」

「ふふつ、わかつたある」

ビッチ先生の突然の行為だったが、レイエンは満更でもない。そして少し経過した時、ビッチ先生は何か気付いたような顔をしてレイエンから離れた。

「……そうだ！こうすればいいのよ！ねえ高嶺、アンタ将来研究者になりなさい！アンタの頭脳があれば、魔界とこの世界をつなげる方法を思いつくんじやないの？」というか、考えなさい！これでこの子とその男が会えるようになるわ！これは命令よ！！」

「「「急にどうした？！」」」」

ビッチ先生の発言に、クラス一同ツツコミを入れた。

「イリーナさん。そんなこと言ったら、清麿が困ってるあるよ」

「……いや、いいんだリイエン。実は少し考えてたんだ、魔界と人間界をつなげること。俺もいずれはガツシユと別れることになるからな。それっきりでは寂しい。とは言え、取っ掛かりもない上にリスクも大きいことは容易に想像できる。簡単な話じゃあない」

清麿は魔界と人間界を繋ぐ事を考えている。その方法が思いつけば、別れてしまった魔物とパートナーが再び会うことが出来る。しかし方法が全く分からないうえ、悪いことを考える魔物が人間界に来てしまう可能性もある。

「そんなことが出来たら、色々な魔物を見ることが出来るな、面白そう！」

「でも、悪い魔物と遭遇したらどうしよう……」

「悪い魔物ばかりでもなくね？」

「魔界かあ、行ってみたいな」

クラスの反応も様々で、色々なリアクションを見せる。

「ウヌ！私も王になったら、そんな方法を探してみろのだ！」

「ふふつ、ありがとうある」

ガツシユも魔界と人間界を上手く繋げる方法に興味があるようだ。

「さて、リイエンさんも大分馴染めてきたことですし、私はこの辺で帰ります。新たな助っ人を交えた暗殺、楽しみにしてますよ！ヌルフフフ」

殺せんせーはそう言つて教室を出た。そして先生が退出した後、間もなくリイエンを交えた暗殺の作戦会議が始まる。そして1つの計画が立てられた。

「……これなら行けるんじゃないかね？」

「この作戦、私が責任重大あるね」

「リイエンさんに来てもらつて早々大役任せるようで申し訳ないような……」

「問題ないある！任せるある！」

今回はリイエンを中心にした暗殺となる。彼女に重役を任せる暗殺故に申し訳ないと思う生徒もいたが、リイエンは気にしていない。

「ウヌ、皆で頑張ろうぞ！」

「「「「オー！」」」」

ガツシユの一声でE組達はやる気を見せる。新たな助っ人を交えた暗殺は、明後日決行される事になった。

暗殺の当日、通常通りの学校生活が終わろうとしていた。そして放課後、殺せんせーに対して教室に残った生徒達がBB弾入りの銃を構え、銃弾が撃たれる。

「これでは出席の時と同じではないですか？何か仕込まれてるんですかねえ？」

大量の弾幕を殺せんせーは難なくかわす。ここまでは出席の時の射撃と同じである。しかし、急遽教室の扉が開かれ、ガツシユがナイフを振り回して殺せんせーに突撃した。「発砲に紛れてガツシユ君が突撃する作戦、前にも見たことがあるんですがねえ」

銃弾のみならず、ガツシユのナイフをも完璧に見切る殺せんせー。それを見た清麿が呪文を唱える。

「ザケル！」

殺せんせー目掛けて電撃が放たれたが、殺せんせーに避けられてしまった。そして生徒達も弾切れを起こす。

「ふむ、ここまでは既視感があるのですが……?!」

殺せんせーは身構えた。先ほどまで教室に存在していないはずの新たな暗殺者がどこからともなく現れたのだから。否、リイエンはガツシユと一緒にいた。ガツシユのマントに隠れていたのだ。

ガツシユのマントは形を変えることが出来る。リエンを隠すためにマントを拡大させていた。そしてリエンを包んだマントを殺せんせーに悟らせないようにしていた。リエンは片腕のみをマント越しに床につけたまま、腕立て伏せのような体制でガツシユに動きを合わせていた。

(なるほど、そういう狙いでしたか！)

(これで決めるある！ハイロー！)

リエンは心の中で叫び殺せんせーに向かって行つたが、殺せんせーはリエンの攻撃をかわして見せる。

「!!」

「なるほど、ガツシユ君のマントにそんな機能があつたとは……そしてこの暗殺はガツシユ君のマント操作、リエンさんの身体能力が合わさらないと成立しない方法ですねえ」

「全て完璧に見切られただと!!」

殺せんせーは特にテンパることもなく、全ての攻撃を回避した。清麿が驚きのあまり声を上げるが、殺せんせーはいつも通り笑みを浮かべる。

「ガツシユ君のマントがいつもと違うように見えましたねえ。ガツシユ君、そのマントは完璧には使いこなせていないのでしょうか？」

「ウヌウ、私の修行不足なのだ……」

今回の暗殺でガツシユのマントも計画に加えたが、まだまだマントを使いこなす為の特訓が足りていなかった。

「リイエンさんも、マントの中では動き辛かったでしょうね。しかし、ガツシユ君の特殊なマントとリイエンさんの身体能力を生かした面白い暗殺でした。他の生徒の射撃の腕も上達しており、各々が役割を果たせる良い方法でしたね。それでは後片付けはよろしくお願います！」

殺せんせー今回の暗殺を振り返った後、そのまま帰ってしまった。先生はこの暗殺方法を褒めてこそくれたが、暗殺には到底至らない。助っ人を交えた暗殺が失敗したE組一度は悔しさを噛みしめる。

「私がマントをもっと使いこなせていれば、上手くいったかもしれない。済まぬのだ！」
「ガツシユのせいじゃないある。私が上手く動けていれば……」

ガツシユとリイエンは申し訳なさそうにする。他の生徒が授業を受けている際に、ガツシユとリイエンは裏山で練習をしていたが、今回の暗殺も失敗してしまった。

「あれで気付ける殺せんせーがすごいだけだからドンマイだよ」

「今回はダメだったけど、リイエンさんの動きは凄かったよ〜！」

落ち込む2人を見て、矢田と倉橋が励ましてくれる。

「私、もっと修行するある！そしてまた殺せんせーを殺しに来るある！」

「私も頑張るぞ〜！」

彼女達の励ましを聞いて、リイエンとガツシユが気合を入れ直す。その時、余りにも場違いな表情を見せるビツチ先生が教室に入ってきた。

「ねえリイエン、それも良いけど、私もアンタに教えたいことがあるのよ」

「？それって、何あるか？」

ビツチ先生が少しいやらしい言い方をする。それを聞いたリイエンは当然警戒する。

「女の磨き方と男を喜ばせる方法。もっと良い女になって、魔界の男と再会したときに驚かせてあげるのよ〜！」

ビツチ先生がリイエンに弟子入りさせようとしていた。ちなみに矢田と倉橋はすでに弟子入りしている。

「えっと、私は……」

「それさんせー。リイエンさんも色々ビツチ先生に教わろうよ〜」

「リイエンさんも一緒なら、もっと楽しくなりそうだね」

リイエンが困っていると、倉橋と矢田が弟子入りを勧めてきた。彼女から断る選択肢

が失われつつある。

「フフツ、仕込み甲斐が有りそうね。色々教えてあげるわ」

「……お手柔らかにお願いするある……」

半ば強引ではあるが、レイエンのビッチ先生の弟子入りが決まった瞬間だ。彼女はあと数日で中国に帰ってしまうが、師弟関係に国境など無い。

「レイエン、これからどうなってしまうのかの？」

「さあ、わからん」

そんなレイエンをガツシユペアは何とも言えない表情で見つめる。そして彼女は数日でビッチ先生に色々仕込まれたようだ。

LEVEL. 15 転校生の時間・二時間目

リイエンが中国に帰った日の夜、清磨はナゾナゾ博士と電話していた。

『この前はひどいじゃないか、清磨君。いきなり電話を切ってしまうなんて……』

「アンタがふざけるからだ。それより、まさか助っ人がリイエンだったとは……」

『ハハハハハ、驚いたかい？』

電話の内容はもちろんリイエンの事である。

『初めは恵君に協力してもらおうと思ったのだがね、彼女は魔物との戦いで忙しいと思っただけはやめといたんだよ』

「そうだな、恵さん達に協力してもらえたら頼もしいが、頼むのは少なくともクリアを倒してからだな」

恵達は打倒クリアのための特訓で忙しい。クリアを倒すまではこちらに専念してもらわなければならないという事が清磨とナゾナゾ博士の判断だった。

『クリアとの戦いが終わったとしても、日本から離れているフォルゴレ君、サンビーム君、シエリー君達に頼むのは厳しいだろう。比較的日本の近くに住んでおり、魔物との戦いが続いているか？ 単体でそれなりに戦闘能力がある者という条件で考えて、

リイエン君はピッタリだった』

ナゾナゾ博士がリイエンを推薦した理由を説明した。

「ああ、暗殺には至らなかつたがとても頼もしい助っ人が来てくれた。博士もありがとう。アンタはいつも見えないところで俺達に力を貸してくれる」

『礼などいらんよ、落ち着いたらまた会おう。それでは！』

ナゾナゾ博士との通話は終了した。その後清磨はガツシユと少し雑談をしてからそのまま眠りについた。

次の日、ガツシユペアが登校すると、渚とカルマが映画の話をしていた。

「おはよう、2人とも。聞いてよ、昨日カルマ君と一緒に殺せんせーにハワイの映画館まで連れてってもらったんだ！」

「何と、すごいのだ！」

「……やっぱ殺せんせーはとんでもねーな」

渚とカルマが殺せんせーと共にハワイまで映画を見に行ったそうだ。それを聞いたガツシユペアは、殺せんせーが規格外であることを改めて思い知らされる。

「それよりその映画監督が面白い人でさ。挿入歌にやたらとベートーベンの曲入れたが

るんだよね。あと、今回の映画だと何故かいつも天が良く出てきてたっけ」

カルマの話聞いて、清磨はある男の顔を思い浮かべる。

「なるほど……なあガツシユ」

「ウヌ？」

「赤羽の話聞いて、何か思い出すことはないか？」

「そうだの……」

清磨に言われて、ガツシユはこれまでの出会いを思い出す。そして彼もまた清磨と同様に1人の男の存在を思い出す。その時、

「なあ、その映画監督ってベルンの事じゃないのか？お前等」

清磨達が映画の話をする最中、突如として三村が会話に加わる。三村は映像関係に詳しく、それに関しては映画監督の話題も例外ではない。

「あれ、三村もその監督のファン？」

「ああそうだよ！一時姿を消したと思ってたらまた復活し始めたんだ。ベートーベンともかく、何でいも天なんだろうな？というか、カルマがベルンのファンなのが意外過ぎるー！」

「あの監督、色々面白いからね」

三村とカルマが同じ映画監督のファンという事で、2人は共通の話題で盛り上がる。

彼等の新たな一面が露呈した瞬間だ。そんな時、

「やっぱりそうなのだ！その監督は、キースのパートナーではないか！」

ガツシュが何かを確信したように声をあげた。

「え、キースって？まさか……」

「ガツシュ君、それってもしかして、魔物絡み？」

「マジ？ベルンも魔物の戦いに参加してたの？」

ガツシュの言動を見て、渚達はベルンが魔界の王を決める戦いに参加していたことを察した。ベルンはかつてキースとペアを組み、ファウードを巡ってガツシュ達と壮絶な戦いを繰り広げた。

「ああ、その通りだ。やつらの魔物は戦いの最中にベートーベンを歌うようなバカだったが、かなりの強敵だった」

「いも天が好物だったようだが、あの者達は強かったのだ」

ガツシュペアはキース達との激戦を思い出す。初戦ではフォルゴレが死にかけ、2戦目ではバリーが助けに入ってくれなければどうなっていたか。

そんな話をしている中、殺せんせーが教室に入ってきた。それを見た生徒達は各々席に着く。

「おはようございます、皆さん。今日もまた転校生が来ることを聞いてますね？」

「あー、ぶっちゃけ暗殺者だろうね」

「ええ、先生も今回は油断しませんよ。いずれにせよ、暗殺者が増えるのは嬉しい事です」

今日もまた転校生が来るのだ。もちろん暗殺絡みで。昨日の烏間先生からの全体メールで行き渡っていた。しかし律を見た後という事で、生徒達はそれほど転校生の事を話題にはしていない、らまた暗殺者が来るのか、程度の認識だ。ところが律の話によると、その転校生は律よりも遥かに強力な暗殺者だそうだ。それを聞いたクラスの緊張感が一気に高まる。

そんな中、教室の扉が開き、全身白装束の男が入ってきた。その男は緊張している生徒達を見て、それをほぐすために手から鳥を出す手品をして見せた。しかし生徒達の緊張がほぐれる事は無い。

「ごめんごめん、驚かせたね。転校生は私じゃないよ、私は保護者……まあ白いし、シロとでも呼んでくれ」

シロと呼ばれた男に対して殺せんせーは余程驚いていたのか、奥の手のはずの液化化を使って教室の隅に逃げていた。この行動で先生は生徒達から響盛を買う羽目になる。

「初めまして殺せんせー。ちよつと性格とかが色々と特殊な子でね、私が直で紹介させてもらおうと思ひまして」

シロが殺せんせーに挨拶をしている時、ガツシユペアは小声でシロについて話す。
「清麿。あの者、何だか嫌な感じがするのだ……」

「ああ、俺もそう考えていた。あの男の目からは、並々ならぬ執念のようなものが感じ取れる。何を経験すればこんな事に……」

魔物達との戦いで多くの者を見てきたガツシユペアは、シロの異常性に気付く。しかし正体までは見抜くには至らない。そしてシロは生徒達を一通り見終えた後、寺坂とカルマの間の空いている席を指差した。

「席はあそこでもいいのですよね？ 殺せんせー」

「ええ、そうですが」

「では紹介します。おーいイトナ!! 入っておいで!!」

シロが転校生を呼ぶと、生徒達の緊張感が最大限に高まる。そんな時、転校生の席の後ろの壁が崩壊した。そして空いた穴からは小柄な少年が入ってきた。信じがたい光景ではあるが、この少年は難なく壁を破壊してしまった。

「(ドアから入れよ!! 殺せんせーも困ってるし!!) () () () ()」

「堀部イトナだ、名前で呼んであげて下さい。ああそれと、私も少々過保護でね。しばらくの間、彼の事を見守らせてもらいますよ」

生徒達の心の中のツツコミなど知る由もなく、シロは話を進める。何はともあれE組

に新たな暗殺者、堀部イトナが転入してきた。そしてイトナは他の生徒達を品定めするかのように教室を見渡す、らその後、イトナは殺せんせーの方に近付いて指を差す。

「このクラスにも強そうなのは何人かいるようだが、俺が殺したいと思うのは俺より強いかもしれない奴だけ。この教室では殺せんせー、あんただけだ」

「強い弱いとはケンカの事ですか、イトナ君？力比べでは、先生と同じ次元には立てませんよ」

「立てるさ。だって俺達、血を分けた兄弟なのだから」

((((き、き、き、兄弟!!)))

その言葉を聞いて、生徒一同は愕然とする。殺せんせーも何が何だか分からないといった表情で冷や汗をかく。生徒や殺せんせーの疑問を無視して、イトナは話を進める。

「兄弟同士小細工はいらない。兄さん、お前を殺して俺の強さを証明する。時は放課後、この教室で勝負だ。今日があんたの最後の授業だ。こいつらにお別れでも言っておけ」

そう言い残してイトナは教室を出て行く。その後、生徒達から殺せんせーが質問責めを受けたの言うまでもない。しかし、殺せんせーにもまるで心当たりがない。それでもシロはイトナが殺せんせーの弟であることを肯定している。また、その真偽は放課後になつたら分かるともE組一同に説明した。

そして昼休み、イトナは殺せんせー同様に大量のお菓子を食べ始める。彼も殺せんせーのように甘党だ。そんなイトナに対して他の生徒達は、どう接して良いか分からない様子だ。ただ一人を除いて。

「お主、随分たくさんのお菓子を食べておるのう！」

((((ガツシユ(君)が話しかけた!!)))

ガツシユがイトナに話しかけるが、イトナはそれを無視してお菓子を食べ続ける。それでもガツシユはめげずにイトナに話し続けた。

「ウヌ? そのお菓子の箱と割りばしがあれば、バルカン300を作れるぞ。清麿が作ってくれるから心配はいらぬ。私も同じものを持っておる。ともにバルカンで遊んで友達になろうぞ! さあ、バルカンも挨拶をするのだ!」

「よ・ろ・し・く・ね」

バルカン300、清麿がガツシユの為に作った友達である。ポツ〇—などのお菓子の箱と割りばしがあれば5分で作れる。のりもいらぬのでかなりお手軽だ。もちろん喋る訳がない。ガツシユがバルカン300を取り出すが、イトナはまるで興味を示さない。

（ガツシユが吹き替えているだけだろう……というか、あいつの分も俺はバルカンを作らなくてはならんのか？）

清磨がイトナのバルカンを作るかどうかを考えるが、クラスに妙な雰囲気の流れ始めた。

「え、あれ高嶺が作ったの？」

「高嶺達の趣味はよーわからん」

「何でバルカンなんだ？」

「その良くわからんものを見る目で俺を見るんじゃない、お前等……」

菅谷・千葉・三村を始め、多くの生徒達がバルカン300を見て首を傾げる。シンプルではあるが、清磨がそれを制作した事実が余計に生徒達を困惑させる。そんな彼等は何とも言えない表情で清磨の方に視線を向ける。しかし、

「でもガツシユ君のために何か作ってあげるのは、とても良いことだと思います！」

「ガツシユ君、とても喜んでるね。高嶺君、優しいなあ」

「……さあ、どうだろうな」

奥田と神崎のように、清磨がバルカン300を作ったことに対して好意的な発言をする生徒もいた。実際にガツシユにとってバルカン300はかけがえのない友達だ。それを聞いた清磨は照れ臭そうにする。

一方ガツシユは、一向に反応してくれないイトナに対して心が折れそうになる。それでも彼はめげずにイトナに話しかけた。

「な、何か喋ってほしいのだが……そうだ！お主は甘いものが好きなのだ。カエデも甘いものが好きだと言っておったぞ！ちなみに私はブリが好きなのだ！皆で何か食べに行くのはどうかの？」

（ガツシユ君が私の名前を出した！）

ガツシユは食べ物のお話をしたが、それでもイトナはガツシユに反応しない。そしてガツシユは我慢の限界に達した。

「又オオオオオ、あの者が私を無視するのだく！清麿オ、私は何か悪いことをしてしまったのかく!!」

「いや、そんなことはないぞ……」

（（（ガツシユ（君）の心が折れた!!）））

イトナの無視に耐え切れなくなったガツシユは、ついに泣き出して清麿に抱きつく。そんな彼に対して多くの生徒達が哀れみの目線を向ける。そして泣きじやくるガツシユに茅野が近づく。

「ガツシユ君はよく頑張ってたよ、偉い偉い」

「又オオオオオ、カエデく！」

清麿に抱きついていているガツシユの頭を茅野が優しく撫でる。その時ガツシユは、今度は茅野に泣きついた。

「何かそうしていると、茅野はガツシユのお姉ちゃんみたいだな」

「え……そ、そうかな？えへへ、お姉ちゃんかあ、そう見えるかなあ……」

「……満更でもなさそうだ！」「……」

（何だ？茅野が一瞬暗い表情をしてたような……気のせいかな？）

お姉ちゃんみたいと清麿に言われた茅野は恥ずかしそうに笑う。周りもそんな茅野を茶化する。しかし、清麿だけは茅野の表情の変化を気にした。一方でガツシユは相変わらず泣きながら茅野に抱き着いたままである。

「何だ高嶺、茅野にガツシユを取られて嫉妬してるのか？」

「そんなんじゃないぞ杉野。それより！」

清麿は杉野の言葉をすぐに否定する。そして彼はイトナの方を見た。

「なあお前、何でガツシユを無視するんだ？ガツシユはお前と友達になろうとしてくれてたんだぞ！」

あからさまにガツシユを無視するイトナに対して、清麿は苛立ちを感じる。そんな彼を見たイトナが席を立ち、ついに声を発した。

「………必要ないからだ」

「何?」

「あいつを殺すのに、お前達は必要ないと言ってるんだ。兄さんは俺が必ず殺す。そのために、お前等の力はいらないんだよ」

イトナは冷たく言い放つ。イトナは殺せんせーを殺すためにシロと共にE組に来た。今の彼にとつては、それ以外の事などどうでも良い。

「一人で殺せると思ってるのか?お前が壁を壊すほどの力をもつてしても、容易な事ではないと思うが?」

「そう思うのは、お前達が弱いからだろう。だが俺は違う。お前達は、俺が放課後にあいつを殺すのを黙ってみているがいい……」

「言いたい放題言ってくれるな、お前（コイツ）が強いのは分かるが、ムカつく言い方だな）」

イトナの発言に対して、清磨は怒りの感情が込みあがる。それを察したカルマが口を挟む。

「まあまあ、落ち着きなよ高嶺君。多分彼の言ってることはハツタリじゃない。何か強力な力を持っている。あと、ずっと聞きたかったことがあったんだ。ねえイトナ君、今日手ぶらで教室に入ってきたよね。でも外は大雨だ、全然濡れてなかったのは何でかな?」

カルマの質問を聞いたとき、他の生徒達は驚きの表情を見せた。今日の天気は大雨で、傘を差した状態でも体が濡れてもおかしくない天気である。それにも関わらず、イトナは傘を使わずして体が一切濡れていなかったのだ。

「その質問に答える意味もない。すぐにわかる」

イトナは興味なさげに言って、再び席に着いた。カルマの介入により、清磨の怒りの感情は収まりつつあった。そして当のイトナはどういう訳か、いきなりグラビア雑誌を取り出す。甘党のみならず、巨乳好きなのもイトナと殺せんせーの共通点だ。

(((((ここでグラビア雑誌、何で!! って殺せんせーとおんなじやつかよ!!)))

「……これは俄然、兄弟であることの信憑性が増してきたぞ」

グラビア雑誌を見た岡島の目の色が変わる。

「そうさ、巨乳好きは皆兄弟だ!!」

そう言って、彼はイトナや殺せんせーと同じグラビア雑誌をカバンから取り出す。岡島含めた3兄弟の誕生だ。

「……兄弟かあ、やっぱいいいなあ。巨乳は許せないけど」

「ウヌ、何か言ったかの? カエデ」

茅野が無意識に小声で漏らした発言をガツシユは聞き逃さない。しかし彼女はそれを誤魔化す。

「ううん、ガツシユ君みたいな弟がいたら楽しいんだらうなって思っただけ！」
「ウヌ、私にもお兄ちゃんがいるぞ！」

（（（ガツシユ（君）、まさかの弟キャラ!!））））

ガツシユに兄がいることがクラスで判明した瞬間だ。もちろんゼオンの事である。茅野はガツシユの質問に対して明るい表情で答え、2人は共にはしゃいでいた。

「茅野さん、その辺にしとかないと高嶺君が嫉妬しちゃうよ〜」

「そうそう、高嶺君寂しがつてるから！」

「だから、違うと言ってるだろーに！」

不破と原が清磨をからかう。一時ピリピリしてしまった昼休みだったが、通常通りの楽しい雰囲気では終了した。そして午後の授業も終わり、放課後を迎えるのであった。

LEVEL. 16 触手の時間

放課後、殺せんせーの暗殺が開始される。その光景は暗殺というよりも、決闘に近いかもしれない。教室の机を周りに並べてリングに見立て、リング内にてイトナが殺せんせーの暗殺を行う。そしてリングの外に出たら負け、そのまま死刑。シロが決めたルールだが、殺せんせーがこれを破ってしまうと先生としての信用が落ちてしまう。先生はルールに従うしかない。

「……いいでしょう、受けましょう。ただしイトナ君、観客に危害を与えた場合も負けですよ」

殺せんせーの提案に、イトナは黙って頷く。そしてE組一同とシロがリングの外で待機していると、ガツシュペアが口を開いた。

「殺せんせー。上手く言えないんだが……」

「あの者達からは良くないものを感じるのだ！」

これまで死線乗り越えてきた彼等には、シロから漂う異様な雰囲気を感じ取る事が出来ており、嫌な予感がしていた。

「ひどい言われようだね、君達。私はただの保護者だというのに、そう睨まないでくれ

たまえよ」

シロは柔らかな物腰で、彼等の警戒を解こうとする。しかし表面上どんなに穏やかでいても、内面まで感情を隠しきるのは容易ではない。彼等が警戒を解くことは無い。そんなやり取りを他の生徒達は黙って見ている。

「まあいいや。では、合図で始めようか。暗殺……開始!!」

シロの合図と同時に、殺せんせーの触手が一本切り落とされる。E組一同は驚愕するが、理由は別の所にある。何とイトナの髪から触手が生えていたのだ。

「ど、どういふことなのだ!!」

「何であいつまで触手を持つてやがる!!おい、これはどういう事なんだ!」

「君達く、あんまり私を邪険にしないでくれよ。これも世界をあのかげモノから守るためなんだからさあ」

ガツシユペアはシロを睨みつけるが、シロは飄々とした態度を崩さない。しかし、彼の目には明確な負の感情が見られた。シロの軽い言動とは裏腹に、殺せんせーに対する侮蔑や怨念と言った感情を持ち合わせている様だ。

(そりゃ雨の中手ぶらでも濡れないわ。全部触手で弾けんだもん)

髪から触手を生やしているイトナを見て、普段は不敵な態度をしているカルマでさえ冷や汗をかく。他の生徒達もまた、困惑、恐怖といった感情に飲まれかかっていた。

「……どこで手に入れたッ!! その触手を!!」

殺せんせーは触手を見て、顔を真っ黒にして激怒する。殺せんせーがこの感情を見せた事は何度かあったが、これほどまでの激怒は初めてだ。

「君に言う義理は無いね、殺せんせー。だがこれで納得したろう? この子と君は兄弟だ。しかし怖い顔をするねえ、何か……嫌なことでも思い出したかい?」

激怒した殺せんせーを見てもなお、シロは平気で先生を煽る。そしてシロの口ぶり
は、まるで殺せんせーについて心当たりがあるようにも見えた。

「おいアンタ! その言い方、殺せんせーについて何か知ってるんじゃないのか!!」
「どうだろうね、答える必要もないし。だって……殺せんせーはここで死ぬからね」

清麿はシロを睨みつけて問い詰めるが、シロは意に介さない。そして突如シロの裾から光線が放たれ、殺せんせーの動きが封じられる。

「この圧力光線を至近距離で照射すると、君の細胞はダイラント挙動を起こして一瞬全身が硬直する。全部知ってるんだよ、君の弱点はさ」

「死ね、兄さん」

シロが得意げに光線の機能を語ったのち、イトナの触手が動けなくなった殺せんせーを襲う。イトナの触手による連撃で、確実に殺せんせーを殺したかに見えた。しかし殺せんせーは脱皮した抜け殻をおとりにして、天井に逃げていた。

「でもね殺せんせー、その脱皮にも弱点があるのを知っているよ。その脱皮は見た目よりもエネルギーを消耗する。よって直後は自慢のスピードも低下するのさ。常人から見ればメチャ速い事に変わらないが、触手同士の戦いでは影響はデカイよ」

シロは脱皮の事さえも計算に入れて、暗殺の計画を立てていた。

「加えてイトナの最初の奇襲で腕を失い、再生したね。再生も結構体力を使うんだ。二重に落とした身体的パフォーマンス、私の計算ではこの時点でほぼ互角だ。エネルギー砲でも撃つてみるかい？生徒に危害を加えることになっちゃうけどねえ」

シロは殺せんせーの弱点を知っている。殺せんせーと何かしら関わりがあるようにしか思えないが、シロ自身が口を割る事は無いだろう。そんなシロの言葉通り、殺せんせーの体力はかなり落ちており、防戦一方となっていた。

「また、触手の扱いは精神状態に大きく左右される。予想外の触手によるダメージでの動揺。気持ちを立て直すヒマも無い狭いリング。今現在どちらが優勢か、生徒諸君にも一目瞭然だろうね」

殺せんせーの弱点の一つとして、テンパるのが意外と早い。突如として現れた自分以外の触手の使い手、着実に自分が追い詰められている事実、これらは殺せんせーの精神を揺さぶるのに十分すぎた。さらに追い打ちをかけるようにシロは、殺せんせー目掛けて動きを封じる光線を放つ。それに合わせてイトナも追撃する。殺せんせーは直撃

を避けるが、足の触手を損傷してしまった。

「……安心した。兄さん、俺はお前より強い」

イトナは勝利を確信する。あともう少しで殺せんせーを殺せる。そして殺せんせーが死ねば地球の滅亡の心配もなくなり、皆通常通りの日常生活を送ることが出来る。それははずなのに、E組の生徒達の中には現状を喜ぶものはいなかった。

「……清麿、こんな所で殺せんせーに死んでほしくないぞ!」

「当然だ!」

「君達は何を言ってるんだい? あいつが死ねば、世界が平和になるのに」

ガツシユの言葉や他の生徒の態度がシロには理解出来ない。これはE組の生徒達にしか分からない事であろう。

「それはな、俺達E組の手で先生を殺したいと思ってるからだよ!」

清麿はシロを見て言い放つ。他の生徒達も同意するかのように頷く。しかしそんな清麿達をあざ笑うかのようにシロは言い返す。

「自分達で殺したいって、君達はそれが出来ていないじゃないか。だからイトナが代わりに殺そうとしているといるんだ。そんな事を言うのは、的外れなんじゃないのかい?」

「確かに今は出来ていない。それでも、やり遂げて見せるさ!」

「ウヌー！」

シロの反論に対して、清麿はあくまで自分達の手で殺せんせーを殺す事を宣言する。そして彼はガツシユの肩を軽く叩く。そんな清麿を見たシロは苛立ちの感情を見せ始める。

「いやいや。やり遂げるも何も、今日イトナが殺して終わるんだって！」

「それはどうかな？殺せんせーの目を見てみな！」

清麿の言うことに従い、シロは殺せんせーの方を向き直した。そこには先程までテンパっていた様子とは打って変わり、勝ちを諦めないどころか勝利を確信さえしている殺せんせーがいた。そんな殺せんせーを見て、シロは呆れ返る。

「一見愚直な試合形式の暗殺ですが、実に周到に計算されてる。あなた達に聞きたいことは多いですが、まずは試合に勝たねば喋りそうにないですね」

「その自信はどこから出てくるのやら。まるで負けダコの遠吠えだね。殺れ、イトナ」

あくまで勝つ気でいる殺せんせーに対して、シロは止めを刺すように命じた。シロの命令と共にイトナは触手での打撃を繰り出す。しかしダメージを受けているのは殺せんせーではなく、イトナの方だった。

「おやおや、落とし物を踏んづけてしまったようですねえ」

イトナの攻撃を殺せんせーはかわしたが、触手をぶつけた床には対先生ナイフが落ち

ている。渚が持つていたナイフを殺せんせーが布を介してつかみ取り、床に設置したのだ。しかし殺せんせーは知らん顔をする。バレれば生徒への危害となりかねない。突然自分がダメージを受けたことに対して、イトナは動揺する。そんな彼を殺せんせーは自分の抜け殻で包み込んで持ち上げる。

「同じ触手なら、対先生ナイフが効くのも同じ。触手を失うと動揺することも同じです。でもね、先生の方がちよつとだけ老獪です」

そう言つて殺せんせーは、窓から抜け殻で包んだイトナを放り投げた。

「ダメージは無いはずです、よつて生徒への危害とは見なされない。しかし君の足はリングの外に着いている、先生の勝ちですねえ。ルールに照らせば君は死刑、もう二度と先生を殺れませぬえ」

殺せんせーは顔に緑の縞々模様を浮かべて勝ち誇る。そんな先生を見たイトナの触手は黒く変化し始めた。

「生き返りたいのなら、このクラスで皆と一緒に学びなさい。性能計算でそう簡単に計れないもの、それは経験の差です。君より少しだけ長く生き、少しだけ知識が多い。先生が先生になったのはね、経験を君達に伝えたいからです。この教室で先生の経験を盗まなければ……君は私に勝てませんよ」

「勝てない……俺が、弱い？」

イトナの触手の大部分が黒く変化し、イトナ自身もまた、目を赤くして殺せんせーを睨みつけた。その様子を見て、シロも焦りを見せていた。

「俺は強い、この触手で誰よりも強くなった。誰よりも!!」

今回の暗殺のルールなど、すでにイトナの頭には無い。彼はただ目の前の敵を殺すことしか考えていない。そしてイトナは殺せんせーに向かって行くが、何か彼に刺さり、そのまま気絶してしまった。

「すみませんね、殺せんせー。どうもこの子は、まだ登校できる精神状態じゃなかったよ
うだ」

シロの裾から麻醉銃が見られた。これで暴れようとしたイトナを眠らせたようだ。そしてシロは麻醉銃を引っ込め、気絶したイトナを肩で担ぎ上げた。

「転校初日で何ですが、しばらく休校させてもらいます」

「待ちなさい！担任としてその生徒は放っておけません。一度E組に入ったからには卒業するまで面倒を見ます。それにシロさん、あなたにも聞きたい事が山ほどある」

「いやだね、帰るよ。力づくで止めてみるかい?」

自分を引き留めようとする殺せんせーをシロは挑発する。殺せんせーの表情は顔がどす黒く染まっつてはいないが、明らかに怒りの感情が見えた。そして殺せんせーはシロの肩を掴もうとしたが、その触手は破壊された。

「対先生繊維、君は私に触手一本触れられない。心配せずともまたすぐ復学させるよ、殺せんせー。3月まで時間は無いからね」

シロが殺せんせー相手に強気に出ていた理由がこれだ。この白装束がある限り、殺せんせーはシロに手を出せない。そしてシロは、隙あらば電撃を繰り出そうとしていたガツシユペアを指差した。

「君達、私も国側の人間だ。迂闊に攻撃しない方がいいよ。その態度も今回は水に流すから、これ以上は大人しくしていたまえ」

シロは自分に反論してきた清磨に対して苛立っていた。シロの発言からもそんな感情は読み取れた。ガツシユペアはそんなシロを睨み返すが、

「2人とも、やめておけ」

鳥間先生が2人を制止した。それを見たシロは鼻で笑い、そのまま校舎を去り、山を下りて行った。

「あのクラス、フフ、面白い。降ったりやんだり、今日の空模様のような教室だな」

校舎が見えなくなる程度の場所で、シロは意味深なことを呟く。

一方校舎では生徒達が机を元の配置に戻していたが、教壇の上で殺せんせーが恥ずか

しがっていた。

「シリアスな展開に加担していたのが恥ずかしい。先生どつちかと言うと、ギャグキャラなのに」

「「「自覚あるんだ!!」」」

「カツコ良く怒ってたね。どこでそれを手に入れたツ!!その触手を!!」

「いやああ言わないで、狭間さん!!改めて自分で聞くと逃げ出したい!!」

狭間が殺せんせーをイジる。彼女はネガティブな一面があり、目立つ生徒ではないが、時折相手のメンタルをえぐるような発言をする時がある。

「しかしあの者、とても可哀そうな目をしていたのだ」

確かにイトナは強大な力を持つが、その力に支配されているようにも見えた。彼がが激怒したときの表情は、およそ正気の沙汰では無い。そんなイトナを見て、ガツシユは心配の表情を浮かべた。

「そうだな、あいつらをこのままにしておくべきではない。だが、その前に俺達には聞かなくてはならないことがある。前回は教えてくれなかった事だが、殺せんせー、アンタの正体についてだ」

清磨もまた、イトナに対して思うところがあつた。しかし、それよりもまずは殺せんせーの正体を知るべきだと判断した。前回の暗殺の時にも問いただしたが、結局教えて

もらえなかった。しかし明らかに殺せんせーについて何か知っているシロ、何故か触手を持つているイトナ、これらを見てしまい、殺せんせーに関する謎はより深まった。他の生徒達もまた殺せんせーについて問い詰めたが、殺せんせーは口を割らない。

「私達生徒だよ。先生の事、良く知る権利あるはずでしょ？」

沈黙を突き通してきた殺せんせーだったが、片岡の発言を聞いてようやく口を開いた。

「仕方ない、真実を話さなくてはなりませんねえ。実は私……」

人工的に造り出された生物なんです!!」

殺せんせーの自称衝撃告白に対して、生徒達はそれほど驚きを見せない。

「「「そんなの、見たら分かるよ……」」」

殺せんせーの規格外っぷりをいつも見ているE組一同には、それは容易に予測できた。

「知りたいのはその先だよ、殺せんせー。どうしてさつき怒ったの？イトナ君の触手を見て。殺せんせーはどういう理由で生まれてきて、何を思つてE組に来たの？」

渚が真つすぐな目で殺せんせーに問いかける。そして殺せんせーは、少し沈黙をした後、口元をニヤケさせながら話した。

「残念ですが、今それを話した所で無意味です。先生が地球を爆破すれば、皆さんが何を知らうと全て塵になりますからねえ。高嶺君とガツシユ君には前に言いましたが、私の事を知りたければ後から調べればいい」

殺せんせーは、あくまで自分の事を話すつもりは無い様子だ。

「もうわかるでしょう？ 知りたいなら行動は一つ。殺してみなさい。暗殺者と暗殺対象ターゲット、それが先生と君達を結びつけた絆のはずです。先生の中の大事な答えを探すなら、君達は暗殺で聞くしかないのです。ではまた明日！」

答えを知りたければ殺しに来なさいと、殺せんせーはそう言い残して教室を出た。

この出来事を機に、生徒達の意識が変わる。生徒全員で烏間先生に対して今以上に暗殺の技術を教えてもらえよう懇願し、希望者は放課後にも追加で訓練を受けられるようになった。

「では早速新設した垂直20mロープ昇降、始め！」

「！！！！！！！！」

なお追加の訓練はかなり厳しい物であった。

LEVEL 17 特訓の時間

梅雨明けの良い天気の下、モチノキ町の裏山でガツシユとティオは組手を行う。そんな中でガツシユの攻撃により、ティオはバランスを崩してしまう。

「隙ありなのだ！」

ガツシユがさらに攻撃を当てようとしたが、ティオは体を覆うようにバリアを作り出す。

「何と、本の術無しでバリアを張れるようになっていたとは。すごいのだ、ティオ！」

「けど、こんな弱いバリアじゃあクリアの攻撃は防げない。組手もバリアがなければ負けてたし……何だかガツシユ、相手の隙を付くのが上手くなってない？」

「そうであるか？（クリア打倒の特訓以外にも、暗殺の訓練が活きているのかもしれない。）」
「とは言えまだまだなのだ！」

ガツシユはティオとの組手でクリアを倒すための特訓だけでなく、暗殺の訓練もまた自分の身になってきていることを感じる。

「それに、マントも前より使いこなせているように見える……私も、もつと強くならなくちゃー！」

「しかし、これではまだまだなのだ。ゼオンはもつとうまくマントを操っておったぞ」
彼等はお互いに自分が修行不足だと考えている。そしてしばらく組手を続けた後、日が暮れ始めているのを見て今日の修行を切り上げる。その後2人で清磨の家に向かった。

その一方で清磨の家では、清磨と恵がデュフオーの指導を受ける。心の力を高める特訓だ。

「……2人とも随分心の力が強くなったな。今度からは、術の制度を上げる特訓も取り入れていく」

「成果が出ているのは素直に嬉しい。術の制度を上げるとなると、ガツシユ達も一緒にいる必要があるな。これからも気を引き締めていかないと!」

「そうね、皆で頑張らないと!」

清磨も恵も、デュフオーの特訓の成果が出ていたことに慢心することなく気合を入れ直す。

今日の特訓は終了してティオペアは帰路に着く。そしてデユフォーも自分が借りている部屋に戻る。ガツシユペアが自分達の部屋で一息ついていると、モバイル律が起動した。

「2人とも、特訓お疲れ様です!」

「おおつ、律ではないか!お疲れ様なのだ!」

「……律、プライベートを覗かないと言ったはずだが?」

「2人の頑張っている姿を想像したら、たまらず出てきてしまいました。てへっ」

相変わらずあざとい律である。そんな彼女に対して清磨は注意するが、半分諦めの表情を浮かべている。

「しかし、アイドルの大海恵さんが魔界の王を決める戦いに参加していたのはビックリでした!それから高嶺さん。前から聞きたかったのですが、大海恵さんとはお付き合いをしていたりするんですか?」

律の爆弾発言が炸裂した瞬間だ。清磨の顔は赤くなり、明らかに動揺する。ガツシユも何事かと思いつながら清磨の方を向く。

「……な、な、何を言いつすんだいきなり!!恵さんは、一緒に戦ってきた仲間だ!つ、付き合うとかそういうのは……」

「高嶺さん、顔が赤いです。大丈夫ですか?」

「どうかしたのか、清麿？」

「……なんでもない！恵さんの話題はここまで！」

清麿は焦りながら彼女の話題を終了させた。恵の方も彼に好意的である為、2人はお似合いなのかもしれない。清麿は照れ臭そうな顔を見せる。

「残念です、話題を変えましょうか……球技大会が近付いてきましたね」

「そうだな！私は参加出来ないのだが……」

「そうだな、男子は野球だったか。野球と言えば杉野が経験者だが、桐ヶ丘の野球部はかなり強いからな」

話題を変えるという事で、律は数日後に迫る球技大会の話題を出す。しかし球技大会ではガツシユは参加できない事、E組は野球部と戦わなくてはならない事が相まって、場の雰囲気は少し暗くなる。

「……すみません、他の話題にするべきでした……」

「律、落ち込むでない」

「いや、いいんだ律。球技大会は避けられない事だからな。明日からその練習も始まる。帰る時間が遅くなることもデュフォーには言つてある」

清麿は律にフォローを入れた。清麿はガツシユの術の特訓とともに、球技大会の練習もしなくてはならない。暗殺を成功させるにはクラスの絆が必要不可欠であり、こちら

も手を抜く事は許されない。

「頑張るのだぞ、清磨！」

「頑張つてくさいね！」

「……律、その恰好はなんだ？」

律が応援の言葉をかけてくれたが、突如チアガールの恰好に着替えていた。それを見た清磨は、何とも言えない表情をしながら彼女に問い詰める。律のあざとさは健在だ。

次の日の授業が終わり、球技大会についての話し合いが行われる。女子達は委員長の片岡を中心に順調に話し合いが進む。しかし男子の方は雰囲気重い。しかも晒し者は嫌だという事で寺坂グループは早々に帰ってしまった。杉野もまた元気が無いように、清磨が心配になって声をかける。

「どうした杉野？朝から元気がないようだが？」

「昨日、野球部の練習見たんだ。あいつら、俺が部活辞めた時より更に上手くなった。特に主将の進藤の剛速球は高校からも注目されてる、俺からエースの座を奪ったやつなんだけどさ。それに引き換えE組はほとんど野球未経験者」

杉野は初めは自信なさそうに話したが、途中からやる気を見せ始める。

「……だけど勝ちたいんだ、殺せんせー。善戦だけじゃなくて勝ちたい、好きな野球で負けたくない。E組とチーム組んで勝ちたい!!」

そんな杉野の決意表明を皆は真剣な眼差しで聞く。そして気付けば殺せんせーは野球のユニフォームに着替え、触手には野球で使う道具一式と竹刀が握られる。

「二度スポ根モノの熱血コーチをやってみたかったです。最近の君達は、目的意識をはつきりと口に出すようになりました。殺りたい、勝ちたい、どんな困難な目標に対しても揺るがずに。その心意気に応えて殺監督が勝てる作戦とトレーニングを授けましょう!!」

そしてE組の男子生徒は、帰ってしまった寺坂グループと野球部に偵察へ行った竹林を除いて殺監督と共にグラウンドで練習を始める。球技大会に参加しないガツシユは球拾いを行う。

「殺投手は300kmの球を投げ!!」

殺投手が投げる球を打てる生徒は誰一人いない。生徒はバッターボックスに立つても、バットを振るのが精一杯だ。魔物のガツシユでさえ300kmの球を取るのには苦労する。

「殺内野手は分身で鉄壁の守備を敷き!!」

今度はヒットを打った時に、守備をかくぐってベースを踏む練習。殺内野手の分身をくぐりぬけるのは至難の業だ。

「殺捕手はささやき戦術で集中を乱す!!」

バッターボックスに立つ生徒達に対して、自分の恥ずかしいことや野球に全く関係のない話題を振ることでの盤外戦術。三村は校舎裏でエアギターをしていたことをささやかれ、顔を真っ赤にする。そうして今日の練習は終了し、殺せんせーは帰っていった。

「何だよこの練習……」

「キッツ……」

練習はとてつもなくハードだ。大半の生徒は苦しそうにし、本当に身になっているのか疑問に思う生徒もいた。

「あのさ……この後個人練習に付き合ってくれる奴、いる?」

突然の杉野の言葉により他の生徒は驚愕する。これだけハードな練習をした後に、まだ個人練習をしようと言うのだから無理はない。しかし、

「……まあ、いいんじゃない?」

「そうだな。俺達は野球部と比べて経験が足りてないから、少しでも練習しておくに越したことはない」

カルマと磯貝の肯定的な言葉により他の生徒もやる気を出す。特に委員長の磯貝の発言は、疲労しきった男子生徒を奮い立たせる。ところが、

「悪い皆。俺とガツシユは帰らせてもらっていいか?」

本当は皆ともつと練習しなかったが、ガツシユペアはクリア打倒のための特訓もしくてはならない。特にこれからは術の精度を上げる特訓も行う予定で、なるべく長い時間を割きたいところだ。

「まあ、仕方ねーよ。高嶺達は魔物との戦いがあるもんな……また明日な!」

「そつちの特訓も頑張つてね」

ガツシユペアの事情を察してくれてか、杉野とカルマを始めとして彼等を止める生徒は一人もいなかった。

「皆すまない。個人練習頑張つてくれ!」

「またなのだ……」

ガツシユペアは申し訳なさそうに山を降りる。

ガツシユペアが家に着くと、デュフオーとテイオペアがすでに待機していた。まずはガツシユとテイオを先に裏山に行かせた後、清磨と恵はデュフオーの指導のもと、心の

力を高める特訓を行った。ある程度した後にはガツシユ達のいる裏山に向かい、術の精度を上げる特訓に入る。

「ガツシユのバオウ・ザケルガとテイオのチャージル・セシルドンを強くする特訓を始める。お互いに呪文を出し、ぶつけ合うんだ。本が燃えることのないよう、清磨と恵は離れている」

デュフォーの指示に従い、ガツシユとテイオの最大呪文がぶつかり合う。しばらく競争合った後にお互いの呪文は相殺され、ガツシユとテイオは後ろに吹き飛んでしまった。

「おいガツシユ、大丈夫か☒」

「テイオ、立てるぞ!!」

「問題ないのだ!」

「全然平気よ!」

ガツシユとテイオが何ともないようで清磨と恵は安心したが、デュフォーは眉に皺を寄せる。

「まだ、呪文の継続時間が短すぎるな。お互いに込める感情が足りていない証拠だ。これではクリアの呪文に太刀打ちできない。もう一度やれるか?」

「当たり前だ!」

「当然よー」

デュフォーは【アンサー答えを出す者】で2人の呪文を見ていたが、クリアの呪文には勝てないという答えを出す。そしてしばらくお互いの最大呪文の打ち合いが続いた後、清磨と恵の心の力が完全に切れた。

「今日はここまでだ。少しはマシになってきているが、まだまだ足りない。俺は先に戻るが、お前達は休んでいくといい」

ガツシユペアもテイオペアもかなり疲れている。デュフォーは先に裏山を降りたが、残りのメンバーは少し休憩した後、裏山を降り始めた。

「そっか……清磨君のクラス、球技大会が近いんだ」

「ああ、しかも俺達のクラスは野球部と戦わなくてはならん……」

山を降りながら清磨と恵は球技大会の話をする。特訓終わりの雑談もまた、彼等にとって大切な時間だ。

「なんだか大変そうね。でも清磨君なら大丈夫じゃない？ 何だかそんな気がするの。応援してるね！」

「まあ、やれるだけのことはやるよ（杉野や他のE組の皆の為にも、負けるわけにはいか

んからな)。応援ありがとう！」

恵の応援を貰った清磨は嬉しそうにする。アイドルからの応援は嬉しいものである。

次の日の放課後も、殺監督による厳しい練習が行われる。そして参加した男子生徒が息を切らす中、殺監督は一旦練習を切り上げた。

「先生のマツハ野球にも慣れた所で、次は対戦相手の研究です。野球部の練習を、竹林君に偵察してきてもらいました」

「……面倒でした」

竹林は運動が得意ではなく、球技大会本番も先発メンバーに入っていない。そこで彼は自分でも出来ることを考えた結果、野球部の偵察の役割を買って出た。口では悪態をつきながらも、彼はしっかりと仕事をやり遂げた。そして竹林が録画した練習の映像がノートパソコンの画面に映し出される。

「進藤の球速はMAX140.5km。持ち球はストレートとカーブのみ。練習試合も9割方ストレートでした」

「あの剛速球なら、中学レベルじゃストレート一本で勝っちゃうのよ」

140kmの球速は中学レベルを超えている。そんな進藤は、変化球を投げるタイミ

ングがほぼなかった。杉野の言う通り、それだけで勝ててしまうのだから。

「そう。逆に言えば、ストリートさえ見極めればこっちのもんです」

殺監督は簡単そうに言うが、野球未経験者が大半のE組にとっては容易ではない。しかし、それはE組がただの素人であればの話である。

「というわけでここからの練習は、先生が進藤君と同じフォームと球種で、進藤君と同じにとびきり遅く投げましょう。さっきまでの先生の球を見た後では、彼ら球など止まって見える」

殺監督がここまで無茶な練習を強いてきた理由がこれだ。確かに進藤の投げる球は速いが、それよりも更に速い球に慣れてしまえば、球を見極めるのはそれほど難しくない。進藤は強いが、殺監督はそのさらに上の次元を行くのだった。

「従ってバントだけなら充分なレベルで修得出来ます」

ヒットを打つのではなく、あくまで進藤の球に合わせてバントを行う。確かに球を見極められるようになれば、それ程難しいことではない。よってここからは、ひたすらバントを行う練習に入った。2人の生徒を除いて。

「……良いヒットですね、杉野君。これなら実戦でも通用するでしょう」

「みんなのバントを、俺のヒットで繋いでいくよー」

1人目は杉野だ。経験者であり、かつ殺監督の球に慣れた彼ならば、進藤の球が速く

てもヒットを狙う事は十分に可能だ。何よりも、全員がバントばかりを行う訳にはいかない。

そして2人目は、

「高嶺君のバントは精度が高いですね。野球の経験があるのですか？」

「部活動としてやったことは無い。だけど前の学校にいた時、野球部の友達から野球を教わったことは何度もある」

清磨は転校する前、山中の野球の練習に付き合ったことが何度もあった。その時にバントの練習もしていた。

「ところで殺監督、試したいことがあるんだがいいか？」

「ほう、何でしょうかねえ？」

殺監督は笑いながら球を投げる。そして清磨はバントの姿勢から一転、ヒットを狙いに行く。そしてバットに球は綺麗に当たり、その球は生徒達の頭上を越えた。ホームランとはならず、杉野程飛ばすことは出来なかった。しかし見事なヒットであり、これも山中との練習の成果である。

「……これが君の試したいことですか。ヌルフッフ、杉野君以外にもヒットを打てる選手がいるのは心強い！」

「まだマグレ当たりだ！このまま進藤のフォームを完璧に覚えて、確実に打てるように

してみせる！」

ヒットを打った清磨は満足していない様子だ。清磨は進藤の癖をすべて覚えて、どのタイミングでバットを振り、バットのどの位置に当てればよいかを完璧に頭と体で覚えようとしていた。

「凄いや、高嶺君！」

「バント以外も出来る奴が2人いるのは大きいね〜」

渚とカルマを始めとして、男子生徒達が喜ぶ。

「よっしゃ高嶺、俺等でヒット打ちまくって野球部にぎやふんと言わせてやろうぜ！」

「ああ、そして全員で勝つんだ!!」

「皆、私は参加出来ぬが応援しておるぞ！頑張るのだ！」

「[[[[「オーーーーー!!」[[[[」

全員で改めて気合を入れ直す。その後の殺監督指導の練習はより活気のあるものとなった。

LEVEL. 18 球技大会の時間

球技大会本番、野球部は試合に向けてのアップを始める。そこには一切の慢心もなく、ただ目の前のE組^{てき}を叩き潰すことだけを考えている。そんなアップを終えた後の整列で、杉野と進藤は向かい合う。

「杉野、お前は選ばれざるものだ。選ばれざる者が表舞台に立っているのは許されない。E組共々、二度と表を歩けない試合にしてやるよ」

進藤の言葉に杉野は言い返さない。すると遠近法でボールに紛れている殺監督が、顔色と表情でサインを出す。それを見た渚が、殺監督の出すサインの意味を書いたメモ帳を取り出して意味を調べる。

「…… 殺す気で勝て、つてさ」

「よっしゃ、殺るか!!」

「!!!おう!!!」

E組と野球部のエキシビジョンマッチが今、開始された。ちなみにガツシユはいつもの緑のバッグの中に入つての観戦だ。そのバッグは清磨の荷物としてベンチに置いてある。

E組の先攻で、一番の木村はバッターボックスに立つ。進藤は1球目から剛速球を投げるが、木村は棒立ちだった。

『E組木村、バットぐらいい振らないとカッコ悪いぞ〜!!』

そんな木村を見て本校舎の生徒達はあざ笑うが、彼は進藤の様子を見たに過ぎない。そして2球目が投げられる前、殺監督のサインが木村に出された。進藤は2球目も剛速球を投げるが、サインを見ていた木村はこれまで練習してきたバントで、内野手の意表をつける場所に球を転がす。そしてE組トップの俊足にて一塁に出ることが出来た。

『2番キャッチャー潮田君』

渚がバッターボックスに立ち、殺監督からのサインが出される。渚もバントを当てて、球は三塁の方に強く転がった。そしてノーアウト一、二塁。

(なつ、何イ〜〜!!)

この光景には進藤も動揺を隠せないもちろん他の本校舎の生徒や教師達でもある。まさかほとんどが野球素人の集まりであるE組が、これほどまでにバントが上手に出来るとは予想もしなかった。

『ま、満塁だー!!調子でも悪いんでしょうか、進藤君!!』

次の磯貝も難なくバントを決めて、ノーアウト満塁の状態で杉野に打順が回ってくる。杉野にも殺監督のサインが出され、バントの構えを取った。そんな杉野達を見た進

藤は混乱する。自分が本当に野球をやっているかどうかすら分からなくなる程に。しかし彼は脳筋というわけではない。頭を落ち着かせ、バント対策に内角高めのストレートを投げる。これが杉野の狙いだという事も知らずに。

(進藤、確かに武力ではお前になわねー。けど、たとえ弱者でも、狙いすました一刺しで巨大な武力を仕留める事が出来る)

進藤の球を見た杉野は、即座に打撃の構えに切り替える。彼が狙いに気付いたときにはすでに手遅れ、杉野は強力なヒットを撃つ。

(俺は今E組と、そういう暗殺やってんだ!!)

『(な、何だよコレ、予想外だ) E組3点先制ー!!』

E組相手に3点も先制点を取られる光景を見て、野球部一同は明らかに動揺する。それを見た野球部の寺井監督は立ち上がり、ベンチから野球部に指示を出そうとする。その時、

「顔色が優れませんね、寺井先生。お体の具合が悪いのでは?……すぐ休んだ方がいい。部員達も心配のあまり力が出せていない」

理事長が突如ベンチに入ってくる。寺井は自分が病気であることを否定しようとするが、

「病気で良かった。病気でもなければ……こんな醜態をさらすような指導者が、私の学

校に在籍しているはずがない」

理事長は寺井に自分の顔を近づけ、彼の額に自分の額を当てた。もちろん寺井の熱の有無を見るわけではない。理事長は無言の圧をかけ、寺井から今回の試合の指揮権を奪おうとしているのだ。そんな理事長のプレッシャーに耐え切れなくなった彼は、そのまま倒れてしまった。

「ああやはりすごい熱だ、だれか医務室へ。その間、監督は私がやります……審判タイムを。なあに、少し教育を施すだけですよ」

一方女子達のエキシビジョンマッチは、健闘空しく僅差で敗れてしまった。相手チームのキャプテンの巨乳を見た茅野が、試合中にも関わらずどうすれば良いか分からなくなったように申し訳なさそうにする。そんな女子達が応援に加わってくれた。

「皆、お疲れ様なのだ!!」

「お疲れ様、ガツシユ。男子達の方は勝ってるようだね」

「ウヌ！皆頑張っておるぞ、凜香。しかし、理事長殿が来てしまったのだ……」

男子達の健闘に感心している女子達だが、大変なのはここからである。野球部の監督は理事長が務める事になった。一回目表から早々にラスボスの登場である。ガツシユ

はたまらず顔を出してしまったが、清磨はそれを指摘することなく理事長の入ってきたグラウンドを凝視する。

「さて、とりあえず空気をリセットしてあげたよ」

理事長の言う通り、E組に流れが来ている空気は一瞬で変わってしまった。野球部達も冷静さを取り戻す。

「E組も彼らなりの努力で、先制点を取ったんだね。だが、それがどうした？君達選ばれた人間は、そんな努力をする弱者を踏み潰して進まなくてはならない。これからは『野球』ではなく、弱者を踏み潰す『作業』に入る。さあ円陣を組んで、作業の手順を教えよう」

タイムの時間が終了して試合は再開されたが、そこには異様な光景が広がる。理事長の指示のもとに野球部員が、バント対策で守備を内野に集めていた。

「又オオオオオ、あんなのがあるだとか!?」

「ルール上ではフェアゾーンならどこ守つても自由だね。審判がダメだと判断すれば別だけど、審判の先生はあっち側だ。期待できない」

「ウヌウ……」

ガッシュが相手の守備に異論を唱えるが、竹林の言う通りで野球部は別に反則はしていない。そんな前進守備に対してバントは効かず、前原と岡島はアウトを取られる。そ

して次の打順が清磨に回ってきた。

「おおっ！清磨、頑張るのだぞー！」

「ガツシユ、あんまり顔を出すなよ。本校舎の連中に色々言われると面倒だ（本当は裏山で留守番させておけば間違いは無いんだがな。でも球技大会の練習にも付き合ってくれたし、それはさすがにかわいそうか……）」

清磨はバッターボックスに立ったが、先ほどまでと観客の雰囲気が変わる。

（なあ、あいつつてあの転校生だよな……）

（バカ、目を合わせるな。何されるか分からん）

（そ、そうだな。なんだって奴は……）

((((“E組の鬼磨”だ!!)))

清磨は以前、前原に絡んでいた本校舎の生徒達を鬼の形相で怒鳴り散らしたことがある。その出来事は本校舎で話題となり、清磨は本校舎の生徒達から差別されるどころか、“E組の鬼磨”として恐れられている。もちろん彼本人はそんな事知らない。また、そのことを理事長が煩わしく思っているのは別の話だ。

(観客が俺から目をそらしているような……まあいい。今は試合に集中しなくてはい！)
清磨が集中力を高めていると、殺監督のサインが来た。

(なるほど、了解！)

理事長に教育された進藤が投げた剛速球を清磨は見逃す。もちろん殺監督の指示だ。『E組高嶺、見逃しだ！(もっとバカにしてやりたいが、後でどうなるかわからんからや

めておこう)』

(何だ？俺が見逃したのに、解説役が煽ってこない。まあ、集中できるからいいが)

そして進藤が2球目を投げてきたが、今度は清麿が球をバットに当てて見せた。しかし球は逸れて、ファールとなってしまった。

「おい、高嶺まで2ストライクになってるぞ……」

「殺監督が指示出してたっばいけど、大丈夫か？」

(清麿、頑張るのだ！)

岡島と前原が清麿を見て不安になるが、彼は笑みを見せる。清麿は自分が確実にヒットを打てるように、進藤を観察していたのだ。そして3球目が投げられた。

(よし、狙い通り！これなら打てる！)

清麿はヒットを当てて、3塁にいた杉野と同じタイミングで走り出した。すぐに守備が球を取りに行くが、前進守備があだとなり、球を取るのが遅れてしまった。そして杉野と清麿はそのままホームベースまで走り、追加で2点取ることが出来た。

『E組高嶺まさかのヒット！そしてホームベースまで帰ってしまったー！』

(おい、マジかよ！杉野以外にまで撃たれるなんて……)

(ふむ、進藤君に“教育”が足りてなかったかな?)

先ほどまで野球部優勢の雰囲気だったが、清麿のヒットで流れが変わった。野球部は

再び動揺したが、理事長は冷静に見守る。そして次の打者はアウトとなり一回表は終了した。現状は杉野と清磨の奮闘により、E組にとって良い雰囲気の流れている。

そして一回裏に入り野球部の攻撃が始まったが、E組がペースを掴んでいる。杉野の変化球が炸裂し、三者連続三振となり野球部の一回裏は終了した。

「しかしさすがだな、杉野は。このまま勝てるんじゃないか？」

「どーだろう？ 見ろよ、野球部のベンチ」

磯貝の発言を聞いた前原は、野球部のベンチに目を向ける。そこでは理事長が再び進藤を「教育」している。

「大変なのは、これからだろうな。進藤はさらに強敵となる」

「……そうだな。気を引き締めていかないと！」

清磨の言葉で磯貝は気合を入れ直す。そして二回表はカルマの打順であり、殺監督から指示を受けた様だ。

「ねーえ、これズルくない、理事長センサー？ こんだけジャマな位置で守ってるのにさ、審判の先生何にも注意しないの。一般生徒おまえらもおかしいと思わないの？……あーそっかあ、おまえ等バカだから守備位置とか理解してないんだね」

それを聞いた一般生徒はカルマに怒鳴りつけるが、彼はそれを無視して殺監督の方を向く。すると殺監督は顔を浮かべていた。

(ダメみたいよカントク)

(いいんです。口に出してはつきり抗議することが大事なんです)

カルマの煽りもまた殺監督の指示だ。この煽りが後々聞いてくることをまだ、殺監督以外は知らない。二回表は理事長に教育された進藤の剛速球により、三者三振で終了した。二回裏は進藤が打撃でも火を吹き、3点を取られてしまった。E組は守備の練習が間に合わずら集中打を受けてはどうしようも無い。

そして三回表に入るも、やはり教育された進藤を止める事は出来ず、三者凡退で終わってしまった。三回裏、理事長が指示を出す。

「橋本君、手本を見せてあげなさい」

『あーつとバント!!今度はE組が地獄を見る番だ!!』

野球部がバントを連発し、ノーアウト満塁となってしまった。普通であれば野球部が素人相手にバントは使いにくいだが、E組が先にバントを使用したために、野球部は「手本を見せる」という大義名分を手に入れた。そして次の打者は、野球部の主将の進藤だ。

(最後を決めるのは小技^{バント}ではない。主役である強者の一振りだ)

この状況を演出する為に、理事長は進藤を教育し続けたのだ。

E組のとして絶体絶命と思われるこの時、殺監督がカルマの下から出てきた。

「カルマ君、さっきの挑発が活きる時が来ましたよ」

「……なるほどね」

「相手は、磯貝君か高嶺君が良いと思うのですが、どうしますか?」

「高嶺君は一回表で頑張ってくれたし、磯貝に頼むことにするよ」

殺監督の指示を聞くまでもなくカルマは意図を理解する。そしてそれを磯貝に伝えた。その後、会場は異様な雰囲気にも包まれる。

『っ、これは?!』

「さっきそっちがやった時は審判は何も言わなかった。文句ないよね、理事長?」

カルマと磯貝は進藤の前に立った。2人による前進守備である。

「なるほどな。さっき私にクレームをつけたのは、同じことをやり返しても文句を言わせぬ布石だったか。小賢しい」ご自由に、選ばれた者は守備位置で心を乱さない」

理事長の許可をもらったカルマと磯貝はさらに近付く。彼等はほぼゼロ距離での守備位置に着いた。

「おい、いくら何でも……」

「大丈夫ですよ、高嶺君」

カルマと磯貝がバットで怪我をする可能性を清磨は危惧する。その時、地面から出てきた殺監督に声をかけられる。

「高嶺君。君がやるように言われても、同じことをしたでしょう？それに、彼等の度胸と動体視力があれば問題ないですよ。ヌルフッフ」

殺監督の言葉を聞いた清磨は言い返せない。他に良い方法はすぐには思いつかず、また清磨が指示を受けた時もそれを引き受けるだろうという言葉が決定的だった。そして2人のゼロ距離守備で冷めてしまった進藤が撃った球は簡単に取られてしまい、そのままトリプルプレーでE組の勝利となった。

試合が終わってE組一同が喜ぶ中、杉野は座り込んでいる進藤に駆け寄る。

「進藤。ゴメンな、ハチャメチャな野球をやっちゃまって。これでお前に勝ったなんて思ってたねーよ。けど、ちよつと自慢したかったんだ。昔の仲間なかまに、今の俺のE組のこと」
「なんだそりや……つたく覚えとけよ。いいか杉野、次やる時は高校だ」

(その時に地球があればな……)

進藤が杉野を1人の野球選手として認めた瞬間だった。杉野のE組とチームを組んで野球部に勝ちたいという願いは、無事に果たされた。杉野から進藤が離れると、今度は清磨と渚が杉野に駆け寄った。

「勝ってたな、杉野！」

「杉野の変化球、練習の時以上に曲がってたね。すごかった！」

「ああ、皆のおかげだ。本当にありがとな！」

彼等がそんな話をしていると、クラス全員が杉野の所へ向かう。そして殺監督も顔を
出していた。

「さて、今回は大きな勝利です、おめでとうございます！この調子で本校舎の生徒達を見
返していきましよう、ヌルフッフ」

「皆ありがとう！俺、今すげー嬉しいよ！」

今日のMVPである杉野はクラス一同からもみくちやにされる。その時の彼の表情
はとても生き生きとしていた。

LEVEL. 19 親愛と恐怖の時間

外の気温は上がってきているが、暑さに関係なく暗殺の訓練は行われる。しかし烏間先生の絶妙な采配により、熱中症で倒れる生徒は出ていない。烏間先生は無愛想に見られがちではあるが、生徒達のことをよく見てくれている。そんな彼はガツシユペアと対峙する。

「赤い本を持っているのは、より実戦に近い状況にするためだな？高嶺君」

「そうです。烏間先生に電撃を撃つようなことはしない。俺もガツシユも使うのは対先生ナイフだけ！」

「ナイフを当てて見せようぞ！」

清磨は本を手持っているが、呪文は使わない。まずはガツシユが烏間先生に突撃する。ガツシユは小柄な体格とスピードを生かしてナイフを当てようとするが、彼が上手くさばくのでナイフは中々当たらない。しかし烏間先生がガツシユの攻撃を受け流す際も、清磨に対する警戒は怠らないが、

「又オオオオ、全然当たらぬのだ！」

「まだまだ攻撃が直線的すぎるぞ！変則的な攻撃を行うんだ！」

「いや、そこだ！」

「!?、何と！」

これまで直線的な攻撃を仕掛けていたガツシユが一転、突如フェイクを入れてきた。ガツシユの身体能力を生かしたフェイクなら、対応するのは烏間先生とて容易ではない。そこで一瞬のスキが出来てしまったが、それを清磨は見逃さず、烏間先生にナイフを当てた。

「よし、次！」

次の生徒が烏間先生との訓練を開始した。

(高嶺清磨・ガツシユベルのコンビ、見事な連携だ。しかも2人にはナイフに加えて呪文まであるからな)

ガツシユペアのコンビネーションに、烏間先生は感心していた。

(先ほどの彼等を始め、「可能性」のある生徒が増えてきた。同じくコンビネーションで攻めてくる磯貝悠馬と前原陽人、目に悪戯心を宿す赤羽業、女生徒なら元体操部の岡野ひなた、リーチの長い片岡メグあたりが優秀だ。それ以外の生徒達も、確実に進歩している)

烏間先生は生徒達とナイフ術の相手をしながら、生徒達の観察と評価も欠かさない。

そんな時、烏間先生は背後から強い殺気のようなものを感じ取り、後ろから攻撃を仕掛

けた生徒を強く突き飛ばしてしまった。

「すまん、立てるか？」

「はい、大丈夫です……」

「ばっかでー、ちゃんと見てないからだ」

（潮田渚……気のせいか？今感じた得体のしれない気配は……）

突き飛ばされた生徒は渚だ。そんな彼を見て杉野が冷やかすが、烏間先生は渚に対して言い知れぬ不安を感じる。そうして今日の訓練の時間は終了した。

「烏間先生——放課後皆でお茶してこーよ!!」

「……ああ。誘いは嬉しいが、この後は防衛省からの連絡待ちでな」

倉橋の誘いを烏間先生は断る。私生活でもスキがない。しかしそんな先生の態度を見て、少し冷たく思ってしまう生徒もいた。

「烏間先生って、私達との間に壁っていうか、一定の距離を保ってるような……」

「厳しいけど優しくって、私達のことを大切にしてくれてるけど、でもそれってやつぱり……ただ任務だからに過ぎないのかな」

矢田と倉橋は寂し気に烏間先生の後姿を見る。そんな2人の話を聞いて、殺せんせー

が割り込んできた。

「そんな事ありません。確かにあの人は先生の暗殺のために送りこまれた工作員ですが、彼にも素晴らしい教師の血が流れていますよ」

殺せんせーも同じ教師として、烏間先生の事をとても評価している。殺せんせーも烏間先生も、どちらも生徒を本当に大切に思ってくれる良い先生だ。

「ずいぶん烏間先生への評価が高いんだな、殺せんせー」

「もちろんです、高嶺君。このクラスの体育教師は、彼以外有り得ないと思っています」

「やっぱり烏間先生は、良い先生だの！」

殺せんせー含めてE組が烏間先生の話をしていると、たくさん荷物を抱えた大男が近付いてきた。

「やつ、俺の名前は鷹岡明!! 今日から烏間の補佐としてここで働く! よろしくな、E組の皆!」

鷹岡と名乗るその男は親し気に生徒達に話しかけて、荷物の口を開ける。そこには、高級そうなケーキなどのスイーツが多く入っていた。茅野を始めとした女性陣の多くは、美味しそうなスイーツに目がくらむ。

「さあ、食べ食べ! モノで釣ってるなんて思わないでくれよ。おまえらと早く仲良くなりたいんだ。それには……皆で囲んでメシ食うのが一番だろ!」

そう言つて鷹岡は自らもケーキを食べ始める。そして数多くのスイーツを見て、甘党の殺せんせーはよだれを垂らしていた。

「おく殺せんせーも食え食え!! まあいずれ殺すけどな」

そんな殺せんせーに対しても鷹岡はスイーツを差し出す。

「同僚なのに、鳥間先生とずいぶん違うスね」

「なんか鷹岡先生、近所の父ちゃんみたいですよ!」

「ははは、良いじゃねーか父ちゃんで! 同じ教室にいるからには、俺達家族みたいなもん
だろ?」

木村と原の言葉に対して、鷹岡は大きな声で笑う。そして自分達は家族同然だと言つて、近くにいた三村と中村の肩を組む。そんな鷹岡を、ガツシユペアは何かを疑うような目で見ていた。

「清麿。あの者、私達を家族だと言つておつたが何か嫌な気がするのだ。上手くは言えないのだが……」

「そうだな、ガツシユ。あいつからはこの前のシロとはまた違う良くない感じがする。警戒が必要だろうな」

鷹岡を警戒していたガツシユペアだが鷹岡と視線が合う。そして鷹岡は肩を組んでいた三村と中村から離れて、スイーツの入った箱を持って2人のもとへ近付いた。

「よっ！お前等が理事長の推薦で転入してきた生徒達だろ？なあお前等の力、父ちゃんに見せてくれないか？実力を見ておきたいんだ！」

「こんにちは、鷹岡先生。お言葉ですが、俺達の力はとても危険な物です。安易に見せびらかすのは控えたい」

「……そつか、まあいいや！お前等も辛気臭い顔してないで、食べ食べ。少しは明るくなるだろ！」

清麿は鷹岡を信用していない。よって鷹岡に呪文を見せる事を断った清麿だったが、鷹岡は特に気にも留めずにガツシユペアにスイーツを勧めてきた。

一方職員室では、鳥間先生が部下の園川雀と鷹岡について話している。

「まさか鷹岡さんが暗殺の訓練を一任することになるとは。これで良かったのでしょうか？」

「良いも悪いも上の決定だ。従うしかない」

何とこれからの暗殺の訓練は全て鷹岡が行う事に決定したのだ。園川さんは怪訝な顔をしたが、上の決定に逆らう訳にはいかない。

「防衛省での鷹岡さんの評判、あんまり良くないんですよね。悪い話もかなり聞きます。

大丈夫だとは思いますが、我々も極力生徒達を見守つてた方がいいかもしれません」

「……そうか。俺も鷹岡の事は調べておく。今は様子を見よう」

園川さんの言葉を聞いた烏間先生は何とも言えない表情をして、外で生徒と仲良さげにしている鷹岡を見ていた。

一方外では、倉橋と矢田がガツシユペアと話していた。

「ねえガツシユちゃん和高嶺ちゃん。これからの訓練、あの人が全部担当するらしいよ？」

「……そうみたいだな。鷹岡の指導で皆の調子が狂わなければ良いんだが（どうもあの人は嫌な感じがするんだよな）」

「私は烏間先生が良いぞ……」

「ねー、私も烏間先生じゃなくなるのは嫌だな」

清磨は教官が変わる事による不和を恐れており、鷹岡自身に対する警戒を強めていた。またガツシユと倉橋は、担当が烏間先生でなくなるのを残念がる。特に倉橋は烏間先生に気があり、その落胆は一段と大きい。

「んー、でも鷹岡先生も悪い人には見えないけどなー。案外楽しい訓練になるかも。実

際始まらないと何とも言えないけど……」

一方で矢田は鷹岡の訓練も悪くないのではと考える。現状鷹岡も生徒達に親しみを持とうとしてくれている。清磨達がそんな話をしていると、鷹岡が近寄ってきた。

「何だあ、父ちゃんに隠れて内緒話か？」

「……………そんなんじゃないよ、鷹岡先生」

「さっきのデザート、とっても美味しかったです」

「そうだろそうだろ！…これからの訓練は厳しくなると思うが、また美味しいもん食わしてやるから」

鷹岡の突然の出現に驚いたガツシユペア。彼等が返答に困っていると倉橋と矢田が愛想よく鷹岡をはぐらかしてくれた。そのおかげでその場は事なきを得て、鷹岡は上機嫌なままその場を離れた。

「明日以降、どうなってしまうのかの……」

(ここで【答えを出す者】を使えば鷹岡の本性を見抜けるのだが、まだ安定してないからな。しかし万が一の事態になれば、使うしかない！)

清磨は、いざとなれば【答えを出す者】の使用も辞さないつもりでいた。そして彼等の不安は見事に的中してしまう。

翌日、遂に鷹岡の指導が開始された。当初は烏間先生が訓練の担当から外れる事に対して不満げに思う生徒もいた。しかし鷹岡は父親のようなフレンドリーな態度で確実に生徒の心を掴んでいく。そんな様子を烏間先生は職員室から見ており、安心したような表情をする。

（確かに鷹岡の事を調べた結果良くない噂も聞いたが、見た限りでは軍隊とちゃんと区別も出来ている。あれなら大丈夫そうだ……俺のやり方が間違っていたんだろうか？プロとして一線を引いて接するのではなく、あいつのように家族の如く接した方が……）

烏間先生はそう思いながら、軍隊での鷹岡とその部下達の仲の良さそうな写真を眺めていた。

その一方で鷹岡は、自分が新たに担当になるという事で訓練内容も変更してもらったことを生徒達に話し、新たな時間割を生徒達に配布した。

「訓練内容の一新だ。厳しくはなるが、一緒に頑張ろうな！」

しかし、その時間割を見た生徒達は顔色を変えた。それも無理はない。なぜなら授業

の半分以上は訓練の時間となっており、月々金曜日までは夜九時まで訓練が行われるのだから。

「このぐらいは当然さ、理事長にも話して承認してもらった。地球の危機ならしやうがない」って言うってたぜ」

鷹岡は昨日までと変わらないフレンドリーな表情で話を進める。そんな鷹岡の表情が、より生徒達の恐怖心を煽る。その時、前原が物申そうと立ち上がる。

「……無理だぜこんなの!! 勉強の時間これだけじゃ成績落ちるよ! 理事長もわかつて承諾してんだ!!」

「よせ、前原! 今口答えをしてはいかん!!」

鷹岡に反論するために前に歩み寄る前原を、清麿が制止する。清麿は【^{アンサー}答えを出す者】を使い、これ以上前原が鷹岡に逆らうと大変な事になるといって答えを出していた。清麿は不安定ながらも、どうにか【^{アンサー}答えを出す者】を発動出来た。ところがそんな事を知る由もない前原は、清麿の制止を振りほどいて更に鷹岡に近づく。

「何言つてんだ高嶺! こんな時間割じやあ遊ぶ時間もねーし、出来るわけねーだろ、こんなのだ!!」

「やめろお!!」

清麿の制止も空しく、前原は鷹岡に頭を掴まれ、そのまま腹を蹴られた。前原に鷹岡

が暴力を振るおうとしても、清麿がいる距離では止めることが出来ないという答えを、
 【答えを出す者】は出していた。そして悶絶する前原に対しては、磯貝・岡野・ガツシユ
 が駆け寄る。

「できない」じゃない。「やる」んだよ。言つたら？俺達は「家族」で、俺は「父親」
 だ。世の中に、父親の命令を聞かない家族がどこにいる？」

鷹岡の目は狂気に満ちていた。

「まあ、厳しいけど頑張れよ！終わつたらまた美味しいスイーツ食わしてやるからよ！」

これが鷹岡の教育方針だ。暴力でとことん恐怖を味合わせ、それが終わつた後
 にはわずかな親愛。こうして部下を洗脳し、自分に忠実な兵士を今まで作り上げてき
 た。これこそが彼の本性だ。鷹岡の表した本性によつて多くの生徒達が恐怖する。し
 かし、

「お主、どういうつもりなのだ!!」

ガツシユは鷹岡を睨みつける。

「あ？罰だよ罰。父親に逆らつた事に対するな。あと、父ちゃんに向かつて「お主」呼
 ばわりはねーんじゃねーか、チビ？」

前原に暴力を振るつた事に対して、鷹岡は悪びれる様子も無い。さらにガツシユのお
 主呼びを咎めて来る。

「何が父親だ！アンタは恐怖で俺達を束縛しようとしているだけじゃないか!!」

「ああ？お前か。そーいや昨日から俺を警戒してたっけなあ。理事長からの推薦か知らんが、俺に逆らうとどーなるか教えてやるよ！」

鷹岡は清磨の方に近付き、思い切り殴ろうとする。しかし、その一撃はかわされる。攻撃をかわした清磨に対して鷹岡は今度は蹴りを入れようとしたが、【アンサー答えを出す者】を使用した清磨がこれを回避するのは容易だった。

「コイツ、俺の二段攻撃をかわしただと!!」テメエ、調子に……!!

攻撃がよけられた事が気に食わない鷹岡は清磨に暴言を吐こうとするが、鷹岡を睨みつける清磨の気迫に怯んでしまった。

「何だこの気迫は!!ただの中学生がこんな……」ふっ、まあいい。俺のやり方が気に入らないなら、出てけばいいだけだからな!その時は俺の権限で新しい生徒を補充する」

清磨に怯みながらも、鷹岡はそう言い放つ。

「ガツシュ! (赤い本を持ってきてくれ!)」

「ウヌ! (本を持ってくるのだな)」

清磨はアイコンタクトで、ガツシュに赤い本を持ってこさせる。清磨は初めから鷹岡を信用しておらず、ガツシュが魔物であることがばれない様注意していた。そのために本も教室において来ていたが、これ以上暴力を振るおうとする鷹岡を止めるために、呪

文の使用を決意した。

「けどなあ、俺はそんな事をしたくないんだ。お前等大事な家族なんだからな。家族みんなで地球の危機を救おうぜ!!」

清麿の気迫に驚いていた鷹岡は平常心を取り戻す。そして初めてE組と会った時と同じくフレンドリーな表情で生徒達に声をかける。そんな鷹岡は清麿から離れて、今度は神崎の頭に手を乗く。

「な? おまえは父ちゃんについてきてくれるよな?」

神崎は怯える。鷹岡から目を逸らして、細身な体を震わせていた。それでも、「は、はい。あの……私は嫌です。鳥間先生の授業を希望します!」

彼女は言い切った。体を震わせながらも、体中に冷や汗をかきながらも、恐怖に抗い、自分の意見を口にした。そんな神崎を見た鷹岡は口元に笑みを浮かべて、彼女を殴ろうとした。しかし鷹岡は後ろから強い怒気を感じ取る。そして鷹岡は肩を叩かれ、後ろを振り向いた。

「てめエ、いい加減にしやがれ!!」

鷹岡の後ろには、鬼の如き表情をした清麿が立っていた。

LEVEL. 20 才能の時間

鬼の如き表情をした清麿が鷹岡を威嚇する。そして殴られそうになっていた神崎には、渚・杉野・茅野が駆け寄る。

（な、何なんだコイツは!? 何でただの中学生がこんな表情デキんだよ!! くそ、軍の精鋭である俺がガキ相手にビビっているだど!? ……どーなってるやがる）

今度は鷹岡が体を震わせて冷や汗をかく。神崎が鷹岡に怯えていたように、鷹岡もまた清麿に怯えていたのだ。しかし鷹岡は神崎と違って、自分の意見を口にする事が出来ていない。

「オイ、今神崎に何しようとした!? それから前原の事も、痛めつけてくれたよなア!!」

清麿の表情がさらに変貌した。鬼と形容するにも足りない程の恐ろしい表情だ。角以外にも頭から何かが大量に生えており、今にも鷹岡を食い殺さんとする顔だった。大魔王、今の清麿にはその言葉が相応しい。そんな彼を見て、鷹岡は体を震わせる事しか出来なかった。

「どーした、声を出すことも出来んのか!? 神崎はテメーに圧をかけられながらも自分の意見を口に出してたぞ!! それすら出来てねー輩が父親だと!? 笑わせんな!!」

「グ……………」

清麿の表情はさらに変化し、何と顔が三つになった。顔はそれぞれ猿・猪・河童を模していたが、それぞれが角と牙を見せて凶悪な表情をしており、その顔は破壊神と呼ぶべきだろう。鷹岡は恐怖でE組を支配しようとしたが、今は逆に恐怖で清麿に支配されている。そんな時、

「そこまでだ、鷹岡！」

ガツシユを連れた鳥間先生が走ってきた。鷹岡の異常性に気付いた先生が外へ出て鷹岡を止めようとしたとき、ガツシユと鉢合わせた。そこで先生はガツシユが赤い本を取りに来たことを察して、本を持って来させないように彼も連れてきたのだ。

「前原君、大丈夫か!!」

鳥間先生はまず、腹を蹴られてうずくまり、磯貝と岡野に支えられている前原を心配した。前原はどうにか手をあげ、無事であることをアピールする。それを見た鳥間先生はホツとため息をついたのち、異形の表情から元に戻った清麿に耳打ちをした。

(高嶺君、気持ちは分かるがここは抑えてくれ!それから電撃を奴に浴びせるのも無しだ!)

「は、はい。しかし、このままでは……………」

(ここは俺に任せてくれ)

「……わかりました」

清麿は烏間先生からにじみ出る強さと暖かきを感じ取り、この場は烏間先生に任せることを決めた。そして彼は怯えている鷹岡の前に立つ。

「鷹岡、お前は俺に強い対抗心があるようだ。そしてお前が活路を見出したのは教官としての道。家族のように近い距離で接する一方、暴力的な父親のような独裁体制で短期間で忠実な精鋭を育ててきた。そして今回もそうするつもりだな？俺から生徒を奪うために。だがお前は失敗した！」

「……な、何だと？」

烏間先生は鷹岡を否定した。それを聞いた鷹岡は怒りの表情を浮かべる。

「お前は高嶺君に怯え切ってただろう!!それにガツシユ君や神崎さんを始め、多くの生徒はお前を拒絶している!!今までのお前のやり方はここでは通用しない!!」

「烏間、お前……」

鷹岡は凶星を付かれた。鷹岡は清麿に怯えた時点で恐怖による支配に失敗していたのだ。本人も心のどこかでそれが分かっており、悔し気な顔をする。

「俺に対抗心を抱くのはいいが、それに生徒達を巻き込むな!お前がこれ以上権力を振りかざし続けるようであれば、同じ防衛省の人間である俺が相手になる!」

「……好き勝手言ってくるじゃねーか、烏間!!」

鳥間先生の鋭い眼光に鷹岡はまたも怯んだが、同時に声を荒げた。これ以上恐怖し続けるのは、鷹岡の軍人としてのプライドが許さない。

「だったらコイツで勝負だア!!」

鷹岡は自分の胸のポケットから対先生ナイフを取り出す。

「鳥間、お前が育てたこいつらの中でイチオシの生徒を一人選べ!! そいつが俺と闘い一度でもナイフを当てられたら、お前の教育は俺より優れていたのだと認めよう。その時はお前に訓練を全部任せて出てってやる!!」

鷹岡の発言を聞いた生徒達は希望を見出す。そしてナイフ術に自信のある生徒達は、闘志を目に宿す。しかし次の鷹岡の言動で、生徒達の希望と闘志は簡単に崩れる事になる。

「ただしもちろん俺が勝てばその後、一切口出しはさせないし……使うナイフはこれじゃない。殺す相手が人間オレなんだ、使う刃物も本物じゃなくちやなア」

鷹岡は対先生ナイフを床に放り投げた後、自分のカバンから本物のナイフを取り出す。それを見た生徒達の多くは戦慄する。

「よせ!! 彼等は人間を殺す訓練も用意もしていない!! 本物を持ってても体がすくんで刺せやしないぞ」

「安心しな。寸止めでも当たった事にしてやるよ。俺は素手だし、これ以上無いハンデ

だろ」

鳥間は止めようとするが、鷹岡はあくまで自分の意見を突き通すつもりだ。鷹岡の目は狂気に満ち満ちており、その口から舌を出す。鷹岡は自分が場のペースをつかみ始めているのを感じた。

「軍隊でもこの手はよく効いたぜ。初めてナイフ持ってビビりあがる新兵を、素手の俺が完膚無きまでに叩きのめす。その場の全員が格の違いを思い知り、俺に心服するようになる」さあ鳥間!!ひとり選べよ!!嫌なら無条件で俺に服従だ!!生徒を見捨てるか生贄として差し出すか!!どっちも残酷い教師だなお前は!!」

鷹岡は勝ちを確信してあざ笑う。自分が中学生に負けるはずがない、そして鳥岡が勝負を降りた瞬間勝ちが確定する。自分の優位性を疑わない。しかし、

「やかましい筋肉ダルマ!!お前など私が簡単にねじ伏せた後、ナイフをお前の体に当てて見せよう!!」

ガツシユが叫んで、鷹岡を睨みつける。鷹岡が鍛えられた軍隊の精鋭とは言え、ガツシユ魔物の身体能力があれば、術を使用しなくても殴り合いを制することは難しくない。さらに鷹岡は素手であるため、一度ナイフを当てられて負けと言う事もない。

「相変わらず口が悪いなあ。別に俺はお前が相手でも良いが、お前は正式に生徒として登録されてないだろう?」

鷹岡がガツシユの方を向いて嫌味な笑いを浮かべた。理事長の一存により、ガツシユは暗殺の為にE組への登校を許されてはいるが、表向きは生徒として登録はされていない。

「落ち着け、ガツシユ。今回は烏間先生に従おう」

「ウヌ、しかし……」

「ガツシユ君。気持ちはありがたいがここは引いてくれ」

「……わかつたのだ」

清麿と烏間先生になだめられて、ガツシユは鷹岡に勝負を挑むことを辞めた。

「俺はまだ迷っている。確かに、鷹岡相手にナイフを当てられる可能性がある生徒はいら。しかし、生徒をこんな危険にさらしていいものなのか……それでも、時には教師として生徒を守るだけではなく、信用することも大事なかもしれない。このような非常事態には特に）……渚君、やる気はあるか？」

鷹岡からナイフを受け取った烏間先生は渚の目の前に立つ。その光景に渚自身はもちろん、他の生徒達も驚きの表情を見せた。

「清麿、なぜ渚なのだろうな？」

「……ガツシユ、集会の時に渚が自分に絡んできた本校舎の連中を怯ませたときの事、覚えてるのか？」

「そういえば、そんなこともあったのう」

「あれはな、渚が殺気を出していたんだよ」

ガツシユはどうして渚が選ばれたのかが分からない。しかし清麿は【答えを出す者】アンサーカーを使うまでもなく、その理由を理解していた。

「渚は殺気をコントロールすることが出来るんだ。その能力は暗殺において、とても大きな武器となる。そんな事は、おそらくここにいる誰にも出来ないことだ。後は渚を直接見ての方が分かりやすい。あいつはこの勝負を引き受けてくれる」

「……ウヌ、分かったのだ」

どんなに強い力を持った殺し屋と言えども常に殺気がダダ洩れであれば、すぐに相手に気付かれて逃げられてしまう。故に一流の殺し屋にとっては殺気を隠す、つまりはコントロールすることが必須となる。そのまま殺気を相手に悟らせないまま殺すにしても、強い殺気を出して相手を怯ませてから殺すにしても、この能力は大きな武器となる。清麿は渚がこの能力を持つ事を確信していた、烏間先生もまた然り。そして彼の言う通り、渚はこの勝負を引き受けた。

「お前の目も曇ったなあ烏間、よりにもよってそんなチビを選ぶとは」

渚の秘めたる能力に鷹岡は気付きもせず、明らかな慢心を見せる。そんな鷹岡に対しては目もくれず、烏間先生は渚に小声で助言する。

「いいか、鷹岡にとってのこの勝負は『戦闘』だ。二度と皆を逆らえなくする為には、攻防ともに自分の強さを見せつける必要がある。対して君は『暗殺』だ。強さを示す必要もなく、ただ一回当てればいい。そこに君の勝機がある」

「……わかりました」

鳥間先生のアドバイスを聞いた渚は、ナイフを持って鷹岡と対峙する。そしてE組一同は緊張感を持って渚を見守る。ただ一人、場違いな笑みを浮かべていた殺せんせーを除いて。そんな殺せんせーを見て、隣にいたピッチ先生は訝しげな表情を見せる。

「アンタ！いつもと変わらさずニヤニヤしちゃって、渚が心配じゃないの？」

「渚君なら問題ありませんよ。勝負は一瞬で決まるでしょうね」

殺せんせーもまた、渚の秘めたる能力に気付いていた。それだけではなく、殺せんせーは渚の勝利をも確信している様子だ。

「さあ来い!!（公開処刑の時間だア!）」

渚と対峙している鷹岡は、慢心を隠すつもりすらない様子だ。自分が中学生相手に負けるはずがないと。そんな鷹岡に対して、渚は鳥間先生の助言を思い出す。そして、
「そうだ、戦って勝たなくていい。」

「殺せば、勝ちなんだ」

渚は笑いながら普通に歩いて鷹岡に近付く。そんな渚に対して、鷹岡は何もしなかった。否、何も出来なかつた。渚からは恐怖も闘気も、まして殺気など少しも感じられない。だから鷹岡は渚の接近に反応出来ない。そして鷹岡の腕に渚が触れられる距離まで近付くと一変、渚はナイフを鷹岡目掛けて振り回す。

ここでようやく、鷹岡は自分が殺されかけていることに気付く。しかし、気付いたときはもう手遅れ。渚のナイフに驚き、鷹岡の体は後ろに重心が偏ったため、渚は鷹岡の

服を後ろに引っ張り転ばせる。そして渚は鷹岡の後ろから回り込み、ナイフを軽く当たった。

「捕まえた」

渚は軽く汗をかきながらも見事にやり遂げた。しかも驚きのあまり体を動かさせないでいる鷹岡に対して渚は平然としている。そんな様子にクラス一同は驚愕する。

「き、清麿、何が起こったというのだ?!」

「く……渚の奴、これ程までだったのか?!」

(予想外だ!!こんな事が……)

そしてこの光景を見た烏間先生は確信していた。渚には殺気をコントロールする才能、*“本番”*に物怖じしない才能、つまり暗殺の才能があることを。

「そこまで!!勝負ありですよね、烏間先生。まったく、本物のナイフを生徒に持たすなど、正気の沙汰ではありません。ケガでもしたらどうするんですか?」

「フン、ケガしそうならマツハで助けにはいったらどうだろうか」

「当然ですわね、ヌルフフフ」

先生同士で会話している最中、渚は生徒達にもみくちゃにされる。生徒達の間には、もう恐怖の感情は払拭されていた。しかし、先程まで腰を抜かしていた鷹岡が怒りの感情をあらわにして渚の後ろに立ち上がる。

「このガキ、マグレの勝ちがそんなに嬉しいか？もう一回勝負だ!!今度は油断しねえ!!」
そんな鷹岡を見た生徒達だったが、一瞬の驚きを見せても再び鷹岡に恐怖することは無い。そして鷹岡の前にガツシユが出てくる。

「いい加減にしろ!!貴様は渚に負けたのだ、なぜ認めん!!これ以上ここで暴れるのなら、私が貴様をひねり潰す!!」

「コイツ、いい加減に……」

「大丈夫だよ、ガツシユ君」

ガツシユと鷹岡の怒気がぶつかり合うが、その間に渚が割り込んだ。

「確かに、次やったら絶対に僕が負けます。でもはつきりしたのは鷹岡先生、僕等の“担任”は殺せんせーで、僕等の“教官”は鳥間先生です。これは絶対に譲れません。父親を押し付ける鷹岡先生より、プロに徹する鳥間先生の方が僕はあつたかく感じます。出て行って下さい」

渚が鷹岡に対して頭を下げた。そしてこの渚の言葉こそが、生徒達の総意だった。それでも鷹岡は納得しない。そして鷹岡は渚に殴りかかったが、すぐに間に入った鳥間先生に肘打ちを喰らわされ、そのまま気絶した。一方ガツシユは鷹岡に殴りかかろうとする前に清磨に抑えられていた。

「又オオオオ、何故止めるのだ、清磨!!」

「落ち着け！鳥間先生に任せておけば、問題は無い」

そして鷹岡を気絶させた鳥間先生は少し沈黙した後、頭を下げた。

「俺の身内が迷惑をかけてすまなかった。後の事は心配するな、俺一人で教官を務められるようにと交渉する。いざとなれば、銃で脅してでも許可をもらうさ」

鳥間先生の言葉を聞いて生徒達は安心するが、鷹岡が目覚ます。

「く、させるかそんな事。俺が先にかけあつて……」

「交渉の必要はありません」

しかし、鷹岡の発言は突如遮られる。いつからかE組の校舎に訪れていた理事長の言葉によつて。予想外のタイミングでの理事長の出現に、多くの生徒達は驚く。そして理事長は自身の理想の為に、鷹岡の続投を望むのではないかと不安になる者もいた。

「新任の先生の手腕に興味があつて見に来たのですが鷹岡先生、あなたの授業はつまらなかつた。確かに教育に恐怖は必要ですが、暴力でしか恐怖を与えることが出来ないのなら、その教師は三流以下だ。自分より強い暴力に負けた時点で、その授業は説得力を完全に失う」

意識は戻つても起き上がれていない鷹岡に理事長はまたがる。そして自分の荷物から紙を取り出し、何かを書いたのちにその紙を鷹岡の口にねじ込んだ。

「解雇通知です。生徒一人の気迫に押し負けてビビりまくつた挙句、自らが定めた生徒

との決め事も守れないような輩はこの学園には必要ない。それから、櫛ヶ丘中の教師の任命権は防衛省には無い。全て私の支配下だという事をお忘れなく」

理事長にクビにされた鷹岡は悔し気に啞えさせられた解雇通知をそのまま飲み込み、そのまま校舎を出て行つた。鷹岡が逃げていく様を見届けた後、理事長もまた裏山を降りた。

「ウヌ、理事長殿は良いことをしてくれたの！」

「というよりは、鷹岡を辞めさせることで自分がこの学園の支配者だと俺達に分かるためだと思うぞ。鷹岡を切つた瞬間の理事長を見て、背筋がゾツとしたよ。俺達はこの学園に入つてから、とんでもない人に逆らつてきたのだろうな」

「しかし、やはりE組が差別されるのは嫌なのだ……」

「まあ、それとこれは別問題だからな」

ガツシユペアは理事長の恐ろしさを改めて思い知らされたが、あくまでE組が差別される環境には抗い続ける事を決めていた。とは言え理事長の決定的な発言により、鷹岡の恐怖政治は一日にして終わりを告げたのも事実だ。そしてガツシユペアの元には、神崎が近付いてきた。

「高嶺君、さつきはありがとう。おかげで殴られなくて済んだよ。凄く怖かつた……」

高嶺君が」

鷹岡の手から助けしてくれたのは嬉しかったが、神崎はそれ以上に清麿の表情が怖かったようだ。それは他の生徒も同じようだった。

「お、おう……ケガが無くて良かった。あと、礼なら渚にも言つといてくれ。渚のおかげで、鷹岡が理事長に追い出されることになったんだからな。まあ、理事長に関してはおも

とから奴を追い出すつもりだったかもしれないが」

今日の出来事も、下手すれば全て理事長の思惑通りの可能性すらある。理事長の手強さを清磨は改めて実感する。

「とにかく有希子が無事でよかったのだ！」

「ガツシユ君も鷹岡先生相手に、一歩も引いてなかったね！」

「ウヌ、あの者は許せなかったからの」

ガツシユペアが神崎と話していると、今度は渚と杉野が駆け寄る。

「あ、渚君、丁度良かった。お礼が言いたかったの。鷹岡先生との勝負に勝ってくれて、本当にありがとう。気持ちが入ったよ」

「はは、偶々上手くいって良かった。でも、神崎さんこそ鷹岡先生に対して自分の言いたいことちゃんと伝えてて、すごかった！」

「えへへ、そうかな？」

渚の暗殺の才能もすごかったが、神崎もまた、鷹岡相手に怯えながらも自分の意見をしっかりと述べた。目上の怖い人間相手に対して、これは中々出来ることではない。そんな渚と神崎の会話を聞いて、杉野は少し嫉妬したような表情を見せる。

「杉野君も、駆け寄ってくれた時は嬉しかった」

「え、そうかな、神崎さん？ いやあ、神崎さんが無事で良かったなあ」

突然神崎にそう言われた杉野は顔を赤くしていた。そんな杉野を見て渚と清麿は苦笑いを浮かべていたが、彼女はどうしたのか分からないといった表情だ。

そして今日の放課後は、烏間先生が生徒の努力で体育教師に返り咲けたお礼として、先生が色々ご馳走してくれる事となった。なお、殺せんせーはそれに土下座しながら付いて行った。

LEVEL. 21 夏の時間

本格的な夏の季節で、クーラーのないE組の校舎は地獄のような暑さだ。また今日はプール開きの日だがプールは本校舎にしか無い。E組の生徒は本校舎の往復だけでも夏の暑さによる体力の消耗がバカにならない。そんな環境故にE組の生徒達は授業どころでは無い。それを見かねた殺せんせーは口を開く。

「仕方ないですねえ、全員水着に着替えてついてきなさい。涼みに行きましょう」生徒達を全員水着に着替えさせ、沢のある避暑地に連れて行くことにした。そして生徒達は水着の上からジャージを羽織り、殺せんせーの後を追った。

そして清磨が歩いていると、カルマが話しかけてきた。

「聞いたよ高嶺君、鬼の形相で軍人黙らせたんだったって？やるねえ」

「鷹岡の事か？あいつは許せなかったからな。それより、俺は渚にビックリだった」
「あくそれも聞いた。渚君の暗殺見とけば良かったかな」

「そーいやお前、その時いなかったな。サボりか？全く……」

「うん、あのデブ嫌だったし」

清磨とカルマは、先日の鷹岡の授業の事を話していた。鷹岡をビビらせた清磨も見事にナイフを当てた渚も大したものだ。そして他の生徒達も雑談しながら進んでいると、殺せんせーが移動の足（触手？）を止める。

「さて君達、これを見なさい。これなら夏の暑さも乗り切れるでしょう！」

殺せんせーの後ろには、先生手作りのプールが広がる。そしてそのプールでは、ガツシユが一足先に泳いでいた。

「ガツシユ、ここにいたのか！」

「ウヌ、特訓で汗を掻いた後の水泳は気持ち良いのだ！」

「さてガツシユ君、皆を連れてきましたよ！」

プールとそこで泳いでいるガツシユを見た生徒一同は、一斉にプールへ飛び込む。25mプールで泳ぐ者、広いプールでボール遊びをしている者、休憩スペースで本を読む者など、各々がプールを楽しむ。なお岡島は二枚目面で盗撮カメラを取り出していたが、殺せんせーに没収されてしまった。

「清磨、隙ありなのだ!!」

「うわっ、ガツシユ！やりやがったなっ！」

渚達と雑談している清磨にガツシユが水をかけたが、清磨はすぐにやり返す。そして

水の掛け合いは、お互い少しづつヒートアップしていく。

「そうしていると、2人って本当の兄弟みたいだよね！」

「そうだね！前も思ってたけど、ガツシユ君みたいな弟がいたら毎日が楽しそう！」

水掛けをしているガツシユペアを見て、渚と茅野が微笑ましく思う。そして水の掛け合いが一段落着いたガツシユペアは、お互いに様子を伺うように睨み合う。その時清磨は、ふと茅野の方に視線を向ける。

「……そう言えば、茅野はずっと浮き輪を使っているな？」

「うん、実は泳ぐの苦手なんだ……」

清磨が浮き輪の事を聞いたが、茅野は泳ぎが苦手なようだ。

「なるほど……ってブフォあ！ガツシユ、テメー！」

「ははは、余所見していた清磨が悪いのだ！」

「つたく、油断も隙もありやしねー」

茅野と話す清磨に対して、ガツシユは容赦なく水を御見舞いする。そしてそれを見ていだ渚も2人の方に向かう。

「楽しそう、僕も混ぜてよ！」

「ウヌ！渚、どこからでもかかってくると良いぞ！」

「皆、しようがないなあ」

プールではしゃぐガツシユペアに渚も混ざり、水の掛け合いが再開される。そんな3人を茅野は少し離れた所で遠い目で見ていた。そんな時、

「きやんっ」

倉橋に水をかけられていた殺せんせーが奇声を上げる。それを見たカルマは殺せんせーのいる監視台まで近付き、それを揺らした。

「きやあ、揺らさないで！水に落ちる!!」

それを見た生徒達は察した。殺せんせーって実は泳げないのではないだろうか。そしてこの弱点は、暗殺において大きな情報となりえるかもしれない。

生徒達がそんな事を考えて殺せんせーを見ている。その一方で茅野が浮き輪の上でバランスを崩してしまった。彼女は溺れかけている。

「茅野、大丈夫か!!」

「大変だ、すぐ助けないと!!」

しかし清麿達は茅野から離れており、救出に向かうのが遅れてしまった。それでも懸命に泳いで茅野に近付くが、気付けば茅野はすでに救出されていた。

「はい、大丈夫だよ茅野さん。すぐ浅いとこ行くからね」

「助かった……ありがとう、片岡さん!!」

「ふふ、水の中なら出番かもね」

片岡はE組に来る前までは水泳部に属しており、学年代表に選ばれたことさえある優秀な水泳選手だった。そんな彼女にとって、それほど深くない水中で溺れかかっている同級生を助けることは容易い。こうして一波乱あつた水泳の授業は終了した。

その日の放課後、片岡は他の生徒達をプールの前に集めて、水を使用した暗殺計画を立てる。

「……だからね皆、私の考える計画はこう。この夏の間、どこかのタイミングで殺せんせーを水中に引き込む。それ自体は殺す行為じゃないから、ナイフや銃よりは先生の防御反応も遅れるはず。そしてふやけて動きが悪くなった所を、水中で待ち構えてた生徒がグサリ！夏は長いわ、じっくりチャンスを狙ってこう！」

「「「おおー！」「」」」

片岡はここでもリーダーシップを発揮し、その場の生徒達をやる気にさせる。水と言う新たな殺せんせーの弱点が発覚したこともあるが、それ以上にここにいる生徒達の士気が高まっているのは、やはり片岡の存在が大きい。ところが、その中でも清磨だけは浮かない顔を見せる。

「……どうしたの、高嶺君？」

「水という新たな弱点がわかったのはいいが、水中ならガツシユの電撃がかなり使いづらくなると思つてな」

「そうであるのか？ 清磨」

「ああ。水は電気を吸収するからな。それで殺せんせー目掛けて術を放った結果、近くにいた奴等を巻き添えにしたではシャレにならん。これについては考えなくてはいけない」

「……た、確かに……」

水中とガツシユの電撃の組み合わせによるリスク、これを清磨は危惧した。そして電気を吸収する水の特性を生かされて、かつてガツシユペアはパーティペアに苦戦を強いられたことがあった。

「属性攻撃の特性によるデメリット、能力バトル漫画あるあるだよーね！」

「不破さん、ちよつと落ち着こうか……」

清磨の説明を聞いて、不破は真つ先に漫画の事が頭に浮かぶ。そして彼女は相変わらず目を輝かせていた。そんな不破を片岡がなだめる。

「まあ、最悪ガツシユの呪文はラウザルク一本で行くか……」

「ウヌ、皆をケガさせてはならぬからの」

ラウザルクは肉体強化の術であるため、水のある所でも他の生徒達を巻き添えにする

心配はない。それに水中では殺せんせーの動きが鈍るため、強化されたガツシユが優位に立てる可能性は高い。

「じゃあ今日はここまでにしようか。私はもう少し泳いでいくから、皆先に戻ってて！」

片岡の一声によって今日は解散となる。そして多くの生徒達が戻っていく中、ガツシユはプールを見つめていた。

「ガツシユ、まだ泳ぎ足りんのか？」

「ウヌ。そうなのだが、デユフオーとの特訓もあるからの」

もっと泳ぎたいガツシユだったが、時間を気にしていた。それを見た清麿は口角を上げる。

「まあ、少しくらいならいいんじゃないか？ある程度時間たったら迎えに行くよ」

「やったのだー!!夏のプールは気持ちが良いからの！」

「待ったガツシユ。片岡が見えないところで着替えるんだぞ」

「わかったのだ！」

そして清麿が校舎に戻ると、ガツシユは速攻で着替えを終わらせてプールに飛び込む。また彼と同じタイミングで、片岡も水に浸かる。

「あ、ガツシユ君も泳いでいくんだ！」

「ウヌ！」

ガツシユはそのまま手足を大きくばたつかせて泳ぎ始める。

「待った、その泳ぎ方疲れない？」

「……あまり気にしたことはなかったの」

「そんなに手足を動かさなくても大丈夫だよ。こういうのはね……」

ガツシユの泳ぎ方を見た片岡は、ガツシユに対して疲れにくい泳ぎ方を教え始める。彼女は面倒見も良い。そしてガツシユもまた飲み込みが早く、すぐに片岡の教える方法を覚えた。

しばらくガツシユと片岡が一緒に泳いでいると、彼女の携帯でモバイル律が起動した。

「片岡さん、多川心菜という方からメールです」

「わかった、ちよつと待って」

片岡はプールから上がり、メールの確認をした。そしてすぐにメールを返した後にガツシユの方を向く。

「ごめんガツシユ君。友達からのメールでね、すぐに行かないといけなくなっちゃった」
「……そうであるか」

片岡はそのまま自分の荷物を回収して校舎の方へ戻る。しかその時の彼女の表情はどこか辛そうで、ガツシユはそれを見逃さなかった。

「メグ、何かあったのかの……」

ガツシユは片岡の事が気がかりな様子だ。そんな時、彼女と入れ替わりで清麿が渚・茅野と一緒にプールの方へ向かってきた。

「ガツシユ、そろそろ帰ろう……どうかしたか？」

「皆、さつきメグとすれ違わなかったか？」

ガツシユは片岡の事が気になる様子だ。先程の彼女の表情が、ガツシユの頭から離れない。

「さつき会ったよ。友達と会うって言ってた」

「でも片岡さん、何か暗い顔してたよね」

「そうなのだ。メグは友達と会うのに、どうしてあんな元気がなさそうだったのか……」
片岡の元気のなさそうな表情に気付いたのはガツシユだけでは無い。しかし片岡本人はもうそこにはおらず、真相は分からないままだ。そして一同はガツシユが着替え終わるのを待ち、帰路に着く。

ガツシユペアは渚と茅野と別れた後も、清麿宅を目指して歩く。しかしガツシユの顔色が優れない。原因は片岡の事だろう。そんな彼を見かねた清麿が声をかける。

「ガツシユ、ひとまず明日片岡に事情を聞いてみるか？それとも」

「片岡さんの居場所を特定しました！」

清磨の発言を遮る様に律が起動する。片岡が心配なのは律も同じの様で、彼女の位置情報を探っていた。

「流石なのだ、律！」

「しかもこの場所って……」

清磨は律の示す場所を確認する。そこはモチノキ町のファミレスだ。また、そこは彼等の帰り道に寄れる場所でもある。ガツシユペアはそこに向かう事を決めた。

ガツシユペアがファミレスに辿り着くと、片岡の顔が窓から見えた。そして彼女の相席には、知らない女生徒が座っている。

「メグ、やはり何やら困ったような顔をしている気がするのだが……」

「考えてても仕方ない。行ってみよう」

「ウヌ、そうしよぞ！」

2人は片岡のいるファミレスへと入る。

ガツシユペアがファミレスに来る前、片岡は本校舎の多川心菜に勉強を教えていた。否、教えさせられていたというのが正しい表現であろう。

「……あのさ心菜、私今やりたいことあつてさ。もうクラスも違うんだし、こうしよつちゅう呼び出されると……ね」

「何それどーゆー事？めぐめぐを頼りにしてるのに、もう呼ぶなって事？」

ひどい、私の事を殺しかけたくせに！」

多川はそう言うのと、怒りの表情を見せて席を立つ。

「あなたのせいで死にかけてから、私怖くて水にも入れないんだよ。支えてくれるよね？一生」

片岡と多川の勉強会が再開されて少しした後、ガツシユペアがファミレスに入ってきた。

「片岡、期末テスト勉強か？」

「あ、高嶺君とガツシユ君！奇遇だね。この子に勉強教えてたんだよ」

「そうであつたか」

2人は店に入って片岡の席に向かう。そして清麿が多川の方を見ると、何故か多川は体中を震えさせて冷や汗をかき始めた。

（ななな、何でここにあの『鬼麿』がいるのよ!!せっかくコイツに会わないように柵ヶ丘から少し離れたモチノキ町まで来てたのに!）

多川は片岡を家庭教師代わりにこき使おうとしたのだが、その時に清麿と遭遇する可能性を恐れた。そしてモチノキ町のファミレスを選んだのだが、清麿がモチノキ町在住だという事を多川は知らなかった。

（ややや、ヤバい！私がめぐめぐを良いように使つてることがバレたら何されるか分か

らない!! どうしてこんなことに!!)

本校舎で「鬼磨」として恐れられていることなど知らない清磨は、どうして多川がこれほどに怯えているのかが分からない。多川の怯える様に、ガツシユペアと片岡は心配の眼差しを向ける。

「なあアンタ、大丈夫か?」

「(ひくひく!!) だ、大丈夫だから!! 私、もう平気だから!! めぐめぐに頼って勉強教えてもらおうとか思っていないから!! じゃあねめぐめぐ、お金ここに置いとくね!!」

清磨は何事かと思つて声をかけるが、多川を更に怖がらせる。そして彼女は手を震わせながらも自分の分のお金を机に置き、荷物を片付けて店を出てしまった。

(えーんーこれ以上めぐめぐをこき使ったら、鬼磨に殺されるよー!)

多川は自分勝手な理由で清磨に怯えながら、そのまま自分の家まで走つて帰つていった。そんな多川をガツシユペアと片岡は、窓から何とも言えない表情で見つめる。

「……ひとまず2人とも、そこ座つたら?」

「ああ、そうだな」

「ウヌ」

そしてガツシユペアは片岡と相席をして、飲み物を注文した。

「なあ片岡、あの子どうしたんだろうな?」

「何だか清麿を見て、怯えていたように見えたのだ」

「ああ、実はね……」

片岡は多川から本校舎の生徒達から、清麿が「E組の鬼麿」として恐れられている事を聞いていた。彼女はそのことを清麿に話す。

「……前原の時の事か。そういや球技大会の時も、俺に打順が回ってきたときの本校舎の連中の様子がおかしかった気がしたんだ。そういう事だったのか」

「清麿、他のクラスの者達に嫌われておるのか？」

片岡の話聞いたガツシユは心配そうに清麿を見る。しかし彼は特にその事を気にした様子もなく、ガツシユの頭に自分の手を置いた。

「心配はいらんぞ、ガツシユ。もう昔とは違う。俺には信用できる仲間がたくさんいる。だから本校舎の奴等がどう思おうが、知った事ではない！」

清麿はこれまで出会ってきた仲間や、共に暗殺を行うE組のクラスメイト達を思い浮かべる。多くの人々が彼を思ってくれており、清麿にとって本校舎内での評価などどうでも良い。

「ウヌ、そうであるか……」

「ふふ、高嶺君ダメじゃない。ガツシユ君に心配かけちゃ」

「……そういうつもりはなかったんだがな」

それでもガツシユは清麿を気にかける。そんな様子を見た片岡は冗談混じりに清麿をその事であしなめる。その後ガツシユは、今度は片岡に心配の眼差しを向けた。

「メグこそ、何か悩んでることがあるのではないのか？最近のメグは、元気が無いように見えるのだ」

「あちゃー、私もガツシユ君に心配かけちゃってたか。えーとね……」

片岡が自分と多川の関係を話し始めた。去年彼女達は同じクラスで、多川は水泳部の片岡に泳ぎを教えてもらうようお願いした。そして一回のみの練習でそのまま海に行き、多川は海で溺れてしまった。それ以降片岡の事を逆恨みするようになり、片岡に勉強を教えてもらうために付きまとった結果、片岡は自分の勉強がおろそかになり、E組へ行くことになった。

「何だそれ、許せねー話だな！」

「メグは何も悪くないではないか！」

片岡の話聞いたガツシユペアは憤慨する。多川の言動は理不尽極まりない。

「しかし片岡、そういう輩にはガツンと言ってやった方がいいんじゃないのか？」

「いいよ、こういうのは慣れてるから」

清麿の助言に対して、片岡は諦めたような表情を見せる。片岡は真面目で責任感が強い。そんな彼女の性格に付け込む輩は多川以外にもいたようだ。清麿は話を続けよう

としたが、ガツシユがデユフォーとの特訓の時間が近付いていた事に気付いた。

「ウヌ、そろそろ特訓の時間ではないか……」

「おつといけない。悪い片岡、俺達は人を待たせているからそろそろ帰らないといけない。話は後日でもいいか？」

「うん、大丈夫だよ。あと2人が注文した飲み物のお金は、私が出しておくよ。話を聞いてくれたお礼でことごとく」

サラツとこのような発言が出来るあたり、流石イケメグである。そしてガツシユペアは、片岡のお言葉に甘えさせてもらおう事にした。

「サンキューな！じゃあ学校で」

「メグ、またなのだ！」

片岡と別れの挨拶をしたガツシユペアは、そのまま外に出た。

「……ところで、その不審者達は何をしているのかしら？」

片岡達を見張っているサンガラスをかけた4人組がいた。殺せんせー、渚、茅野、磯貝だ。悩んでいる片岡の様子を見るため、彼等も律に片岡の居場所を聞いてついてきた。しかし尾行がバレてしまい、渚と茅野は苦笑いをする。

「あ、バレちゃった……」

「ハハハ」

一行はファミレスを出て外を歩く。

「全く、磯貝君まで何やってるのよ……」

「すまん片岡。同じクラス委員長として、お前が悩んでいる事に気付いてやれなかった自分が許せなくて、居ても立っても居られなくなった」

片岡だけではなく、磯貝もまた真面目なクラス委員長である。相方の事が心配だったのだ。

「しかし片岡さん、今の君とあの本校舎の生徒との関係はまさしく“共依存”でしたねえ。高嶺君に対する異常な怯え具合から、もう彼女が君に付きまとう事は無いとは思いますが、まだ根本的には解決していない」

「でも殺せんせー、どうすれば……」

片岡が殺せんせーに尋ねるが、殺せんせーはとんでもない方法を実践するのだった。

後日学校で清磨は、殺せんせーの片岡と多川の共依存に対する手入れの方法に驚愕する。夜中に寝ている多川を片岡、渚、茅野、磯貝と共に裏山の水場に連れてきて、多川

にこの光景を夢だと思わせて泳ぎの特訓をさせた。その結果、多川は無事に泳げるようになった。そして片岡も責任を感じる必要がなくなり、多川を突き放すことが出来たのだ。

「それ、犯罪じゃないか……」

「荒療治と呼んで下さい、高嶺君！」

「物は言いようだな……まあ、片岡も吹っ切れてるようだし良しとするか」

「メグが元気になってよかったのだ！」

片岡は他の女子と話していたが、ガツシユペアと目が合い、彼等に手を振ってくれた。それを見たガツシユペアは、安心したような表情で手を振り返すのだった。

LEVEL 22 交流の時間

とある日曜日、ガツシユペアはデュフオーとともにモチノキ町の裏山で特訓を行う。そし昼時になり、休息の為に特訓は中断された。

「そういえば清麿、アンサーカード【答えを出す者】の力が前より安定してきたな」

「そうだな。だがこの程度では、実戦では使い物にならない！」

「ガツシユも身体能力が上がっている。俺の出したメニュー以外にも、暗殺の訓練が生きてきているな。マントの活用も形になってきている」

「ウヌ、まだまだ頑張るのだ！」

ガツシユペアの特訓の成果は確実に出てきてはいるが、まだまだクリア打倒には至らない。デュフオーと話していると、2人の物影が近付いてきた。その2人は、ガツシユペアと関わりのある人物だ。

「！菅谷と三村じゃないか」

「おおつ、お主達も来ておったか！」

「いや、柵ヶ丘から離れた所にスケッチに来てたんだが……」

「何か音がしてたからな。見に来たんだが、お取込み中だったか？」

何と菅谷と三村が裏山に来ていた。菅谷は美術が得意で、休日は絵を描いたりもしているようだ。三村は菅谷の付き添いをしながら、風景の映像を撮影している。

「今は特訓の休憩中だったのだ！」

「清磨達のクラスメイトか」

「ああ、そうだ。まさかこんなところで会うとは思わなかった」

デュフオーが菅谷と三村を見ると、何かを考えるような素振りをした後に口を開いた。

「……お前達の今日の特訓はここまでだ。クラスメイトとの交流を深めておけ」

「え、いいのか？」

デュフオーの意外な言葉に清磨は戸惑う。午後からは特訓に本腰を入れるものかと思っただが、そうはならなかった。

「特訓の成果が思ったよりは出ている。だから今日の午後からは、ティオ達の特訓に専念させてくれ。では、俺は先に戻る」

「ウヌ、分かったのだ……」

デュフオーはそう言うと、一人で山を降りてしまった。彼にも考えがあるのだと思いい、ガツシュペアはそれ以上デュフオーには何も聞かなかった。菅谷と三村はそんなやり取りを見ている。

「なあ高嶺、あの人がお前の言ってた特訓を見てくれる人か？」

「何か、ちよつと怖そうだったな……」

「ああ、そうだ。時間が空いている時は基本ここか自分の家で特訓を見てもらっている」
菅谷と三村が清麿にデュフォーの事を聞いてくる。清麿がそれについて答えていると、突然ガツシユの腹の音が鳴り始めた。

「まあ、ひとまず飯でも食おうぜ！」

「清麿、母上殿の作ってくれた弁当を食べようぞ！」

「何だ、お前等も弁当持ってきてたのか。丁度いい」

ガツシユペアだけではなく、菅谷と三村も弁当を持って来ている様だ。そして4人はその場にビニールシートを敷いて、昼食を取ることにした。

「それにしても偶然だな。こんな所で出会うとは……」

「ああ、俺も三村も休日には自分の好きな分野に取り組んでいる。俺は美術で三村は映像撮影。岡島が一緒にいる時はあいつ、写真の撮影をしているぞ。今日は気分を変えてモチノキ町の方まで来てたが、そういうや高嶺の家はモチノキ町だったな」

4人は昼食を取りながら雑談を行う。せっかくの休日、暗殺や学業以外の趣味に没頭

するのでも己の刃を磨く良い機会だ。そして、

「なあお前等。この後に菅谷とモチノキ町の美術館行くんだけど、一緒にどうだ？」

「おおつ、美術館と言えばシエミラ像を思い出すのう！」

「何つ、お前等シエミラ像知ってんのか!？」

三村からの美術館同行の誘い。それを聞いたガツシユペアの脳裏にはある出来事が浮かぶ。そしてガツシユはシエミラ像の名前を出す。すると、菅谷がその話題に食いつく。

「そうだ、俺達はシエミラ像を見たことがある。そして……」

清麿はシエミラ像の事、そしてそれを通しての魔物のダニーとそのパートナーの資産家ゴールドーとの出会いを話した。

「マジか、あの資産家ゴールドーまで戦いに参加していたのか!？」

「しかも自分の魔物の本を燃やすリスクを冒してまでシエミラ像を守り切ったなんて……」

菅谷と三村はゴールドーの話聞いてとても驚いたが、それと同時にシエミラ像を守りぬいたことに感動した。自分達の戦いを放棄してでも守るべき物を守る。ダニーペアはプロの鑑だ。

「ダニーとは友達になったからの!？」

「そうだな！ゴールドーさんも元気にしていれば良いが」

「つーか、魔物の戦いつて結構有名人も参加しているんだな！ベルン然り」

「そう言えば、リイエンさんも戦いに参加してたんだもんない！」

（あと、恵アイドルさんとフォルゴレス。それに理事長もだからな……）

確かに魔物の戦いには多くの人々が参加した。そしてガツシユペアは多くの魔物とそのパートナーと戦い、時には仲間になって協力してきた。そんなこれまでの戦いをガツシユペアは思い出す。

「んじゃ、食い終わったら美術館に行こうぜ。結構楽しみにしてんだー」

一行は昼食を済ませた後に裏山を降りて、モチノキ町の美術館に向かった。

そしてガツシユペアは、菅谷と三村と共にモチノキ国際美術館にたどり着いた。そこには多くの有名な芸術家の作品が展示されている。

「いや、どれも実物で見るとやっぱりすげー」

「ウヌ、あまり良くわからんのだがの……」

「ガツシユにはまだ早いかな」

菅谷は多くの芸術品に魅了されていたが、ガツシユにはそれらの凄さが全く理解出来

ない。シエミラ像を見た時も、ガツシユはブリの方が良いと言いつつた。

「さつき美術館のパンフレット見たんだが、ここ、ゴルドーさんが出資してたな」

「そうなんだよ。あと、櫛ヶ丘の美術館もあの人が出資してるぜ。一回会ってみてーわ」

「私もまた会いたいのだ！」

美術品の良さは分からないガツシユだったが、ゴルドーの話題に関しては目を輝かせている。短い付き合いだったが、ガツシユとダニーペアの出会いには忘れられないものになっていた。自らの魔本を犠牲にしてまで守るべきものを守り通したダニーの姿は、今でもガツシユは鮮明に覚えている。

「シエミラ像が前にここにあった時に俺、見に来れなかつたんだよな。さて、シエミラ像が次に日本に来るのはいつになるやら。見学できたお前等が羨ましいぜ」

「まあ、タイミングが良かったんだ」

「ダニー達のおかげなのだ！」

菅谷がシエミラ像を見れなかつたことを残念がる。美術分野に深い関心を持つ彼は、何としてもその目でシエミラ像を見たいと考えている。

そして一行がさらに歩き進むと、腕に刺青らしきものをしていたカップルとすれ違つた。

「なあ、あのカップルの腕の刺青がスゲー派手なんだが」

三村が彼等の腕に書かれた模様を気にする。確かに通行人の誰かが目立つ模様を体に入れているのを見れば、印象に残りやすい。そして三村の発言を聞いた菅谷は得意げに口を開く。

「いや、多分あれは刺青じゃないぞ。メヘンディアートだな」

「確か、インドとかで有名な奴だったか？」

「ああ、そうだ。それはな……」

メヘンディアは、ヘナと言う植物の葉を粉末にしたものを使ったペーストを肌塗るもので、刺青と違って痛みもない。清磨も名前は聞いたことがある様だ。そんなメヘンディアートの話を菅谷が続ける。関心のある話題という事で菅谷が語り続けるが話が長くなってしまい、清磨は何とも言えない表情を見せた。

「お、おう。流石だな、菅谷」

「ウヌウ、あまり良く分からなかったのだ」

菅谷の長い説明を聞いても、ガツシユは理解することすら出来なかった。菅谷は美術関係の事ならクラス随一だ。彼が迷彩を塗れば暗殺にも役立つだろう。

「夏に入る前に一度、俺も塗って見たかったんだけどな」

「何で夏の前なんだ？」

菅谷の夏の前にといい言葉に対して三村が疑問に思う。

「いや、夏だと制服が半袖になるだろ？流石にあの模様を堂々と学校でさらすのは抵抗がある。まあ、E組なら大丈夫だとは思うが」

「……確かに初見はビビるよな」

「殺せんせーなら、生徒が非行に走ったとか言いそうだよな」

一行はメヘンディアートを施した菅谷を見て、殺せんせーが慌てる様を想像する。そんな時、菅谷が何かをひらめいたかの如く指を鳴らした。

「どうしたのだ、菅谷？」

「いや、面白い暗殺方法を思いついたんだよ」

「マジか？」

菅谷の考えた暗殺方法はこうだ。まず菅谷が殺せんせーにメヘンディアートの話をする。生徒の話には基本興味を持ってくれる殺せんせーなら、話を聞いてくれる。そしてメヘンディアートに興味を持った殺せんせーに対して、実際に染色を施す。しかし染色に使うペーストに対先生物質を混ぜれば、それを知らない殺せんせーはダメージを受ける。そしてその隙を付いて暗殺するという手はずだ。

「おおつ、良さそうだよ！」

「いかにも菅谷らしい方法だな！俺達も協力するよ」

菅谷の暗殺方法を聞いて、ガツシユペアは殺る気を見せる。

「確かに、殺せんせーならすぐにダメせそうだよな」

三村は笑いながら、対先生物質入りのペーストでテンパる殺せんせーを想像していた。

そして一行は次のエリアに来た。そこは美術品に関する歴史の映像が見れる場所で、小さな映画館のようになっていた。しかし映像が始まって間もなく、ガツシユは眠りについてしまった。そして映像が終わり、清磨がガツシユを起こす。

「起きろガツシユ、お前ほとんど寝てたじゃねーか」

「ウヌ、もう終わってしまったのか？」

「ああそうだ……つたく、ちゃんとよだれ拭いとけ」

「わかったのだ」

映像が流れている時にほとんど爆睡しており、よだれまで垂らしていたガツシユに対して、清磨は呆れた表情でティツシユを渡した。

「随分面倒見が良いんだな、高嶺」

「全く手のかかるやつだよ」

三村の言うことに対して、清麿は満更でもないような表情で言葉を返した。手のかかる程可愛げがあるのだろうか。

次のエリアに移ろうとしている時、ガツシユは菅谷と並んで歩く。その一方で清麿は三村と話していた。

「三村つて、映像関係の事に目がないよな」

「ああ、将来もそれ関係の仕事に就こうと思ってる。高嶺もこういう業界どうよ？」

「そうだな。将来やりたいことは詳しく決まってるが、こういうのも面白そうだよな」

清麿も三村の好きな分野に興味を示す。

「まあ、高嶺なら何やっても上手く出来そうだけどな。それか、やっぱり人間界と魔界を繋ぐ研究者になったりしてな！」

「ははっ、どうだろうな……」

三村の将来の夢の話聞いて、清麿も先の事を考える。三村は将来の話をしていたが、岡島と違ってエロの話題などで脱線することはなかった。しかし、

「それにしても、さっきの映像は本当によくできてた。特に……」

三村は先程の映像について話し始めた。ナレーションの声質や抑揚、使われたBG

M、演出、映像の角度などについて彼は評論家の如く熱く語る。

（三村がこんなに熱くなるのは初めて見るかもしれない……こいつも好きな事にはとことんハマるタイプか？）

三村の意外な一面を見た清磨であった。また三村はエアギターにもハマっており、その動きは普段の彼からは想像出来ない程にアグレッシブだ。このお熱い一面こそ彼の本性かもしれない。

そして雑談しながら美術館を回るな、気付けば一周し終わった。

「いやー、楽しかったぜモチノキ国際美術館。少し遠出したかいがあったよ」

「ああ、ここで流れてた映像は色々参考になりそうだ」

「俺もお前等と色々見れて良かった」

「芸術は難しかったが、皆と一緒にいた時間は楽しかったのだ！」

一行は美術館巡りをそれぞれ楽しむことが出来た。

「映像の時はほとんど寝てたけどな」

「う、ウヌウ……」

ガツシユペアは菅谷と三村との関わりは、これまでは菅谷がガツシユの付け鼻を作っ

てくれた事、三村はベルンの話で盛り上がった事以外それほど絡みは無かった。しかし今日の美術館巡りで彼等の好きな分野に触れられ、2人との交流が深まった事を感じた。

この調子でE組との交流を深めて、より良いチームワークを築いて暗殺につなげる。デュフォーが特訓を午前中で切り上げたのも、この事が理由かもしれない。

そして一行は美術館を出て一緒に帰り道を歩いていた。すると、

「俺、美術の事になると周りが見えなくなる時がしばしばあつてさ、それが原因で素行不良扱いされてE組行きになつたんだよな」

菅谷は自分がE組行きになつた経緯を話し始めた。菅谷は元々成績が良くない方だったが、それに加えてテストの裏に絵を描いてしまう事が何度もあつた。そのように悪目立ちしてしまい、同じくらい成績が良くない生徒が本校舎に残れたにも関わらず、菅谷はE組行きとなつたのだ。

「ま、正しいんだけどね。答案の裏に落書きなんかしようものなら、スルーされるか怒られるかのどつちかが普通だ。だけど殺せんせーは安っぽい絵を加筆して来る、むしろ喜々としてさ」

菅谷の話をも三人は真剣に聞く。

「ちよつとぐらい異端な奴でもE組では普通だ。いいクラスだよな、ホント」

「E組の皆は個性があつて面白いのだ！」

「皆それぞれ武器を隠し持つているからな、俺達も負けてられん」

ガツシユペアは菅谷の言う事に賛同した。E組は異様な環境ではあるが、それ故にそれぞれ生徒達が思う存分に個性を活かしている。

「クラスの皆の役に立てるよう、俺の映像も何かの暗殺で生かしたいぜ！」

三村は自分の作る映像を暗殺に生かす方法を考えた。三村の映像に関しては、後ほど暗殺において大きな役割を果たすことになる事は、まだ彼等は知る由も無い。そして各々の別れ道についた。

「じゃあなお前等！」

「今日は付き合つてくれてありがとうな」

菅谷と三村はガツシユペアに手を振る。

「こつちこそありがとうな！楽しかったよ」

「またなのだ！」

そうしてガツシユペアは菅谷・三村と別れ、清麿の家を目指した。

「菅谷も三村も、とても楽しそうだったのだ！」

「そうだな。あいつ等がイキイキしているのは、殺せんせーのお陰だ」
彼等が自分のやりたい事を存分にやれているのは、殺せんせーの存在が大きい。本人は地球を滅ぼすなどと言っているが、生徒達の事を本当によく見てくれている。何故先生がそこまでしてくれるのかは謎のままだ。

後日、菅谷が提案した暗殺方法を彼等は実施した。しかし殺せんせーの顔が対先生物質で崩れるだけで本命の攻撃も避けられてしまい、暗殺には至らなかつた。ちなみにその時の殺せんせーの顔はとても気味が悪く、多くの生徒達を戦慄させた。

LEVEL. 23 寺坂達の時間

（このクラスは大したクラスだ。あのタコが来てからだな、色々変わったのは。どいつもこいつもやる気に満ち溢れた目しやがって。だからこのクラスは、居心地が悪い）

底辺だったはずのE組が変わりつつある状況を面白くないと思うのは、本校舎サイドの間人だけでは無い。寺坂竜馬もまた今のE組を快く思っていない。実際に彼は暗殺において乗り気ではない。寺坂は今日も自分の席でふんぞり返りながら、クラスメイト達を不満げに見渡す。そんな時、

「おい皆来てくれ!!プールが大変だぞ!!」

岡島が大慌てで教室に駆け込む。それを見た生徒達は何事かと思いつつプールへ向かった。3人の生徒を除いて。

プールには大量のゴミが捨てられ、休憩スペースにあった木のイスも壊されていた。実行犯はE組に対して恨みでもあるとしか思えない。

「これでは泳げないのだ……」

プールの惨状を見たガツシユが泣きそうな顔をする。彼にとつては遊び場の一つを壊された様な物だ。皆と遊べる場所が無くなるのは悲しい。そんなガツシユを見かねて、茅野が彼の頭に優しく手を置いた。

「ガツシユ君。プールが壊されたのは大変だけど、そんな泣きそうな顔しないの」
ガツシユを茅野が慰めてくれたが、彼は泣き止むどころかささらに目から大粒の涙を流し始めた。

「又オオオ、カエデ〜！誰がこんな酷い事を……」

「もう、泣かないでつて言ってるのに……」

泣き出したガツシユは茅野に抱き着く。それはまるで、泣きじゃくる弟が姉に甘える様子そのものだ。

「よしよし（しようがないなあ、ガツシユ君てば……でも弟や妹がいるお姉ちゃんて、こんな感じなのかな？エヘヘ）」

茅野はそんな事を考えながらガツシユの頭を撫でる。そんな光景を他の生徒達は暖かい目で見守る。気付けばクラス内ではプールを荒らされた事に対する負の感情が消えている。

「また茅野つちがガツシユのお姉ちゃんみたいになつてる。高嶺、ガツシユを取られちゃったね！」

「ドンマイだな！嫉妬すんなよ！」

「そう言うんじゃないぞ、お前等……」

清麿自身は嫉妬の感情を抱いた訳では無いが、彼は岡野と前原にからかわれてしまった。それ以外の生徒達の何人かも2人と同じ事を思つてた様子だ。清麿は誤解を解く方法を考えながら頭を抱える。

ガツシユは少しして泣き止んだ様子だが、寺坂・村松・吉田の3人が遅れてプールへやつてきた。

「あーあー、こりや大変だ」

「ま、いいんじゃない？プールとかめんどいし」

吉田と村松が話しており、寺坂はそれを見て嫌味な笑みを浮かべる。まるでこの事について、彼等は何か知っている様子だ。清麿が彼等を睨み付ける。

「おい、お前等がやったのか？」

「はあ、違げーよ。つかそんな事言うなら、証拠持つてこいや。犯人捜しはそれからだろーが！」

寺坂は強く反発したが、後ろの吉田と村松のバツの悪そうな顔をする。それを見た清麿が彼等が犯人だと確信した。そして、主犯は寺坂であることも。しかし、証拠がまだない。何か探せば見つかるかもしれないが、現時点では明確な証拠は見当たらないの

だ。そんな中、殺せんせーが清磨と寺坂の間に入る。

「犯人捜しなんてしなくていいですよ」

殺せんせーがそう言うのと、プールは一瞬で元通りになった。その工具達はどこから持ってきたのやら。しかし状況が状況であったため、誰もツツコミは入れ無い。

「おおっ、これでまた遊べるのだ!!」

「良かったね、ガツシユ君!」

「ウヌー!」

修繕されたプールを見て、ガツシユが茅野と共に嬉しそうにした。

その日の放課後。ガツシユペアが帰ろうと校舎から出た時、村松がしゃがみ込んでいるのが見えた。

「村松、どうしたんだ?」

「大丈夫かの?」

「ああお前等か、ちよつと寺坂とな……」

村松は事の顛末をガツシユペアに話した。寺坂グループで殺せんせーの課外授業をバックレようとしたが、村松はそれをこつそり受けていた。その結果模試の成績がかな

り上がったが、それが寺坂にバレて突き飛ばされてしまったのだ。

「寺坂、何という事を……」

「そういや最近アイツ、かなりイラついてるよな。何かトラブル起こさなけりやいいんだが」

清麿は胸騒ぎがしていた。寺坂グループは元から暗殺にも勉強にも積極的ではなかったが、特に最近の寺坂の態度があらさまだ。吉田と村松とも、一緒にいる時間が減ってきているようにも思えた。そして清麿の嫌な予感は当たってしまう。

「……まあそんな事言っても仕方ねーだろ。そういや高嶺、この前勉強教えてもらった礼をしてなかったな。おかげで前の小テスト、助かったぜ。なあお前等、家のラーメン食ってけよ。金はいいいからよ！」

清麿は村松に、小テストに備えて勉強を教えたことがある。その時の礼をしたいとの事だ。

「良いのか？村松よ！」

「そんな、礼なんていいのに……」

「そういうなよ！食ってけって！」

喜ぶガツシユの隣で遠慮している清麿に対して、村松はラーメンを勧めてきた。そしてガツシユペアは村松の言葉に甘えて、村松家のラーメンをご馳走になる事にした。

「おい親父、ダチ連れてきたぞ！世話になった連中だから、タダでラーメン作ってくれや」

「あー？たくしよがねくな」

村松家のラーメン屋に着いたとき、村松が自分の父親にラーメンを作るよう催促する。そして数分後、ラーメンがガツシユペアの前に出された。

「へいお待ち。ゆっくり食ってくれ！拓哉が世話になつてらしいしな！」

「あ、ありがとうございます」

「いただきますなのだ！」

村松の父親はラーメンを出すと、彼は厨房の奥に戻る。そしてガツシユペアはラーメンを口に入れたが、箸が止まってしまった。村松自身の料理の腕は凄いのだが、実際にラーメンを作る彼の父親がイマイチなレシピを変えようとしなない為、ラーメンの味は微妙だった。

「家のラーメン、不味いだろ？」

「いや、そんな事は……」

清磨は村松の言葉を否定しようとする。タダ飯を頂く身として彼は気を遣おうとす

る。しかし、

「ウヌ、母上殿の料理の方が美味しいのだ……」

「おいガツシユ。ご馳走してもらったのに失礼な事を言うんじゃない」

「いやいいって、高嶺。まったく親父の奴、俺の話をちつとも聞きやがらねーからな」

ガツシユは思っている事をそのまま口にしてしまった。しかし村松自身にも自覚はあり、特に気にしていない様子だ。

「……あと、プールの事なんだが……」

「やったのは、やっぱりお前等だったか」

「まあ、分かるよな……」

村松が申し訳なきような顔をして、プールを自分達が壊した事を白状した。内心かなり反省している様だ。

「プールの件は殺せんせーがすぐに直してくれまし、お前等が懲りてるんなら、それでいいんじゃないのか？」

「また皆で泳ごうぞー！」

プールは壊されたが、殺せんせーが簡単に直してくれたこともあり、ガツシユペアは気にしていない素振りだ。殺せんせーの規格外さが改めて露呈した。

「というかお前等、あんまり箸進んでねーな……まあ、このラーメン屋は俺が継いだ時

に一新してやるよ」

「村松、店を継ぐ気なんだな！」

「頑張ってほしいのだ！」

村松は将来店を継ぐつもりだ。そんな彼の目には熱意が宿っている。

「けどラーメン屋継ぐのにも、料理の腕だけ磨いてもダメだからな。これからはあのタコに店の経営の事を聞こうと思ってる。クラスに来た当初は俺のバカさ加減じゃ無理だと思ってたが、最近イケソーな気がしてな！あのタコはスゲーよ。ソーいや、吉田も店を継ぎたいって言ってたな」

村松の当初の学力は芳しくなかったが、殺せんせーの授業や補習のおかげで成績が伸びている。その事は村松の自信にも繋がっている。

「そうか。村松、頑張れよ！」

「ツたりめーよ！」

殺せんせーがE組に来た事で多くの生徒達が手入れされ、将来に希望を見出している。村松もまた、そんな生徒達の一人だった。

次の日、ガツシユペアが登校してくるとクラスは大盛り上がりだ。その理由は殺せん

せーがバイクの模型を作っており、吉田がとてもはしゃいでいた為だった。

「よお、高嶺とガツシユ!! 見ろよこれ、殺せんせーがこの写真に写ってるバイクの模型を作ってくれたんだよ! しかも等身大で、まるで本物みてーだろ!!」

「ヌルフッフ、大人な上に漢の中の漢の先生の手にかかればこの通り!」

吉田の実家はバイク屋だ。そんな吉田がバイクに興味を持つのは自然なのだが、同じクラスにバイク趣味を持つ生徒はいない。しかし、殺せんせーとはバイクの話が出来、先生がバイクの模型を作ってくれる事になった。

そんな吉田がガツシユペアに携帯に保存してあるバイクの写真を見せたが、その写真には吉田と一緒にナイスミドルな白髪の男が写っていた。

「清麿、この者は?」

「ジードさんじゃないか! また日本に来てたのか。しかし、何で吉田と一緒に?」

吉田と一緒に写っていたバイクの持ち主は、かつてリーゼントヘアの魔物のテッドと共に魔界の王を決める戦いに参加していたジードだった。このペアは清麿の家にも泊まった事もあり、共にファワードでの激闘を乗り越えた。バイクよりも、ジードと吉田のツーショットに驚きを隠せないガツシユペアである。

「ああ、それはな……」

吉田はジードとの出会いを話し始めた。

回想

吉田が学校から一人で帰宅している途中、彼は一台のバイクを見かけた。

「あれ、このバイク日本製じゃねーな。外国人観光客がいるのか？にしても、かつけーバイクだな！」

吉田はそのバイクに見とれていたが、バイクの持ち主であるジードが駆け寄る。

「おいガキ！何人のバイクをジロジロ見てやがんだ?！」

「いや、そんなつもりじゃねーっすよ！このバイク、カッコいいと思って……」

「ああ?！」

ジードは怒りの表情を見せる。吉田がバイクにちよつかいをかける可能性を危惧しているのだ。そして吉田は慌てふためきながらも、自分のバイクの知識を生かしてジードのバイクを褒めちぎる。

「……何だお前、わかってるじゃないか！」

「ウツス、どうも」

それを聞いたジードは上機嫌になり、そのまま吉田と仲良くなった。そして彼のバイクをバックに、ツーショットを取ることになった。

「そうだお前、清磨とガツシュって奴を知ってたらよろしく伝えといてくれ。俺はもう行かなきゃいけないーから、直接会う時間はねーんだ！」

「あいつ等の事なら知ってるっすよ。伝えとくぜ！」

そしてジードはバイクを走らせ、また新たに旅立つのだった。

回想終わり

「……てな訳だったんだよ。いやー最初怒鳴られた時はどうなるかと思っただけで、良い人だったなー！」

「ウヌ、ジード殿も私達と共に戦ってくれたからの！」

「ああ、ジードさんが元気そうで良かった！」

「とうか、この人も魔物の戦いに参加してたんだな！どんな魔物とペアだったんだ？」
吉田はジードが魔物の戦いに参加していたことを知る。そして彼の魔物の事を聞くと、ガツシュペアは吉田達にテッドの事を話した。

「……なんだよそれ。自分の大切な女の為に体張るなんて、かつこよすぎるだろ!!」

「彼もまた、漢の中の漢なのですねえ!!」

テッドは自分の家族同然のチェリツシュをゼオンの電撃から救うために自ら体を

張って敵を倒し、自分も魔界へ帰っていった。そんな話を聞いて、吉田と殺せんせーはもちろん、多くの生徒達は感動する。そんな中、寺坂が登校してきた。

「……何してんだよ、吉田」

「あ、寺坂……」

殺せんせーと仲良さそうにしている吉田の事が気に入らない様子だ。

「まあまあ寺坂君。このバイク、良くできているでしょう？先生、一度本物に乗ってみたんですよね〜」

「何言ってるんだ。アンタならバイクに乗るよりも、抱きかかえて飛んだ方が速いだろう！」

「確かに！」

「「「ハハハハハ」」」

機嫌の悪い寺坂を殺せんせーがなだめようとして、吉田と一緒にギャグを言った。それに釣られて、他の生徒達も笑い出す。しかし寺坂の機嫌は直るどころか、さらに悪化した。そして寺坂は我慢できなくなり、殺せんせーの作ったバイクの模型を蹴とばして壊した。それを見た殺せんせーはそのまま泣き出してしまった。

「何てことすんだよ、寺坂!!」

「謝ってやんなよ!!大人な上に漢の中の漢の殺せんせーが泣いてるじゃんか!!」

吉田や中村を始めとして、周りの生徒達も寺坂を攻め立てた。初めは苛立つてた寺坂

だったが、すぐに落ち着いた表情を見せて、自分の机に向かう。

「……てめーらブンブンうるせーな、虫みたいに。俺が駆除してやるぜ！」

「待て寺坂、何をするつもりだ?!!」

寺坂は殺虫剤のスプレー缶を取り出す。そして清磨の制止を無視して、それをそのまま床に叩きつけた。そこからは白い煙が出てきたが、体調を悪くする生徒はいなかった。どうやら中身は殺虫剤ではないようだ。

「寺坂君、ヤンチャするにも限度つてものが……」

「触んじゃねーよ、モンスター!」

寺坂の度を過ぎた行動に対して、殺せんせーも怒りの表情を見せて触手で寺坂の肩に触れる。しかし寺坂は冷たくそれを振り払った。

「気持ちわりーんだよ、どいつもこいつも!」

寺坂の言動に対して、E組一同は沈黙する。寺坂がそこまで不機嫌になる理由が分からなくて困惑する者、寺坂に対して冷たい視線を送る者も多い。

「寺坂、お主何故このようなことを……」

「待った、ガツシュ君」

寺坂に対してガツシュが物申そうとしたが、カルマがそれを止めた。

「寺坂の言ってることも全部が間違ってる訳じゃない。このタコが地球を滅ぼそうとし

ているモンスターなのは事実だし」

多くの生徒が寺坂に対して反発の視線を向ける中、カルマだけは寺坂の言う事を受け入れていた。

「要是殺せんせーが気に食わないんでしょ？……だつたら殺せばいいじゃん。せつかくそれが許可されている教室なのに」

カルマは寺坂に対して挑発の視線を向けた。暗殺に参加しようともせず、ただ文句ばかり言う寺坂を明確に煽る。

「何だカルマ、テメー俺にケンカ売ってんのか？上等だよ、だいたいテメーは最初から……」

カルマの挑発に乗ってしまった寺坂はカルマに反論しながら近付くが、カルマの手が寺坂の口をふさいだ。

「ダメだよ、寺坂。ケンカするなら口より先に手を出さなくちゃ」

「……放せ!!くだらねー!!」

寺坂はカルマの手を振りほどいて、そのまま教室を出てしまった。多くの生徒が今の寺坂とどう接すれば分からない様子だ。殺せんせーも、何か考えているような素振りを見せる。

夜の裏山に、寺坂は1人で来ていた。そして彼はプールに昼間にばらまいた薬物と同じ物を垂れ流す。

(俺はただ、その日その日を楽しんで適当に生きていただけだ。だから俺は)

そんな寺坂に対して、1人の男が10万円を渡していた。

「ご苦勞様。プールの破壊、薬剂散布、薬剂混入、君のおかげで効率良く準備が出来た。また次も頼むよ」

(……こつちの方が、居心地が良いな)

寺坂に報酬を渡していた男の正体はシロだ。もちろんイトナも隣にいる。そしてイトナは急に寺坂に近付いた。

「お前の目にはビジョンが無い。勝利への意志も手段も情報もない。だからお前は弱いんだ」

「んだと、テメー!!」

「イトナ、やめなさい」

言いたいことだけ言って離れて行ったイトナに対して、寺坂は憤慨する。そんな寺坂をシロはなだめていた。

LEVEL. 24 ビジョンの時間

次の日の昼休み、殺せんせーは大量の鼻水を流す。しかし殺せんせーの鼻の穴は目のすぐ隣にあり、傍から見ると泣いているようにしか見えなかった。

「殺せんせー、大丈夫かの？」

「心当たりがあるとしたら、昨日寺坂がぶちまけてたスプレー缶だが……」

ガツシユは殺せんせーを心配する。一方で清麿はその原因を昨日のスプレーであると考えた。

「俺もそー思うな。寺坂の奴、何かたくらんでそうだよね。バカのくせに」

カルマも清麿の考えに賛成する。最近の寺坂の様子は明らかにおかしく、カルマもまた何かを予測していた。

「でも、寺坂君がやったって決まった訳じゃない？」

「そもそも、あいつが暗殺の作戦を考えるつてのが想像出来ねー」

しかし渚は寺坂を疑っておらず、杉野に至っては寺坂が暗殺に関わる事自体考えられないといった様子だ。

「まあ、そうなんだけどね……おっと、噂をすればつてやつだ」

午前中は学校に来ていなかった寺坂が、昼時になって登校してきた。

「おお寺坂君!!今日は登校しないのかと心配しましたよ!!」

寺坂に殺せんせーが駆け寄り、寺坂の顔を自分から出る汁で濡らしていく。最近の寺坂の横暴さは目に余るが、こればかりは寺坂に対してクラス全員同情の目を向ける。しかし寺坂はそんな事を気にもせず、シロの言葉を思い出す。

『昨日、君が教室に撒いたスプレー缶はね、奴だけに効くスギ花粉みたいなものだ。触手生物の感覚を鈍らす効果がある。そうした上で誘い出しなさい』

清磨とカルマの予感当たっていた。昨日の薬物は殺虫剤などではなく、殺せんせーを弱らせるための物だった。殺せんせーの液体で顔が濡れてしまった寺坂は、先生のネクタイで自分の顔を拭く。そして、

「おいタコ!そろそろ本気でブツ殺してやるからよ、放課後プールへ来いや。弱点なんだろ、水が。てめーらも全員手伝え!!俺がこいつを水の中に叩き落とす!!」

寺坂がそう言うと、殺せんせーが教室から出ようとした。そんな殺せんせーを寺坂が睨み付ける。

「何だテメー、逃げようつてののか?」

「とんでもない。君達の暗殺の作戦会議を盗み聞きする訳にはいきませんからねえ」

殺せんせーはそのまま、高速で教室を出てしまった。しかし今のクラスは、これから

暗殺の話し合いをしようと言う雰囲気には思えない。そんな中、前原が立ち上がった。「寺坂、お前ずつと皆の暗殺には協力して来なかったよな。それをいきなり命令されて、皆がお前の言う事を聞くと思うか?」

前原以外の生徒達も同じ事を考える。今の彼等は、寺坂の暗殺計画に対して乗り気では無い。それは普段彼と一緒にいる村松と吉田も例外では無い。そして次に清麿が口を開いた。

「殺せんせーを水の中に落とすと言つても、どうやってやるんだ? 相手はマツハ20の超生物、一筋縄ではいかない。何か考えがあるんだろ? お前が協力を求める以上、俺達にはそれを知る権利がある」

「ああ? んなもん俺に任せとけば問題ねーよ! てゆーか、お前等来たくないなら来なくてもいいんだぜ。ただし、賞金は独り占めしてやるがな!」

清麿は寺坂の企みを暴こうとする。しかし彼は口を割らない。そして寺坂は捨て台詞を吐いて教室を出ようとするが、今度は渚が彼を引き留めた。

「待つてよ寺坂君! 本気で殺るつもりなら、やっぱり皆に具体的な計画話した方がいいと思うんだ。これじゃあ皆、納得出来ないよ」

「うるせえよ! 弱くて群れるばっかの奴等が、本気で殺すビジョンも無いくせによ!」渚の言葉に逆ギレするかの如く、寺坂は渚の胸ぐらを掴む。そんな寺坂に対してガツ

シユが止めに入った。

「寺坂！お主何をしておるのだ!!」

「うっせーよ、チビ！」

ガツシユに睨まれた寺坂は若干怯みながらも、虚勢を張りながら渚から手を離す。他の生徒達の中にも寺坂を白い目で見える者達もいる。

「渚、大丈夫かの？」

「うん、ありがとうガツシユ君」

ガツシユに駆け寄せられた渚は苦しそうにするが、再度寺坂の方を向いた。

「上手く言えないんだけど、寺坂君。僕には寺坂君がまるで、自分とは別の何かに期待しているようにしか思えないんだ」

「……はあ？どーゆー意味だよ、渚！」

寺坂は渚を威圧するが、渚の発言を聞いて明らかに動揺していた。そんな寺坂の動揺を清麿は見逃さない。そして彼は寺坂のやろうとしている事に対して【アンサー答えを出す者】で答えを導きだそうとしたが、残念ながらそれは発動しなかった。

「(クツ、こんな時に！仕方ない……)寺坂、お前何か危ないことをやろうとしてるんじゃないのか？最近のお前の言動は目に余る。それに嫌な予感がするんだ。寺坂、プールに何仕込んだんだよ!!」

「だから、それは暗殺をする時に分かるって……」

「それでは俺達は納得出来ない。やむを得ん。ガツシユ、先にプールへ行つて辺りを調べてくれないか？」

清麿は取り返しの付かない出来事が起こる前に寺坂の企みを知りたがった。しかし彼は情報を共有しようとしめない。そして中々口を割らない寺坂に対して清麿は強硬手段に出た。

「おい、お前等何を……」

「ガツシユ、昼休みも時間が限られているからコイツを使う。ラウザルク！俺達も後でプールに向かう」

「ウヌ、行つてくるのだ！」

寺坂の制止を無視して清麿は術を使用する。強化されたガツシユは教室を飛び出してプールへ向かった。そんなガツシユを見た寺坂は、苛立ちながら清麿に近付く。

「おい高嶺、何勝手な事してんだよ!!」

「やかましい！先生を殺すんだろ？だったらお前の仕込みを事前に分かった方が成功する確率が高い！とやかく言われる筋合いはない！」

「……ケツ、勝手にしろ！」

清麿の胸ぐらを掴んだ寺坂だが、清麿が睨み返したために彼はすぐ手を放してしまっ

た。そして寺坂は教室を出て行く。

教室には気まずい雰囲気の流れたが、清麿がそれを強引に断ち切った。

「すまない。皆にもプールの探索を手伝ってほしいんだけど、いいか？」

「うん、僕は問題ないよ」

清麿の言葉に対して渚が賛同する。そして渚の言葉に便乗して、他の生徒達も準備に取り掛かってくれた。

「……しゃーねー。寺坂に賞金独り占めされんのは嫌だしなー」

先程まで寺坂に対して否定的だった前原も、プールの探索をすることに決めた。そして一行は水着に着替えてプールをを目指す。

プールに着いた一同だったが、プールから上がっていたガツシユが手に何かを持っていた。それが何かをガツシユは知らない。

「清麿〜！プールの中に、こんなものがあつたぞ！これは一体、何かの？」

しかしガツシユの持っている物を見て、クラス一同驚愕する。

「え……これって……」

「まさか、何で？」

クラスからは動揺の声が聞こえた。何故ならガツシユが手に持っているそれは、プラステック爆弾だったのだ。爆弾に関しては鳥間先生の授業で教わったが、実用には至らない。それ程に火薬は危険な代物だ。それを見た清磨の顔から目が飛び出そうになる。

「ガツシユ!! 落ち着いて聞け、お前の持っているそれは爆弾だ!!」

清磨は大声を出す。そんな彼の発言を聞いて、今度はガツシユの目が飛び出そうになり、大粒の涙を流す。

「又オオオオオ!! 清磨オ、どーすれば良いのだア!!」

「バカ、振り回すんじゃない!!」

ガツシユが泣きながら爆弾を振り回していると、一瞬風が走る。気付いたらガツシユの手元から爆弾が消えていた。そしてそこには、先程の爆弾を持つ殺せんせーがいた。

「これはプラスチック爆弾。起爆する前に発見出来て良かった」

「[[[[[[、殺せんせー!!]]]]」

生徒一同安心したように座り込んだが、今度はそこに寺坂が現れる。

「おいタコ、何だよそれは……」

寺坂が殺せんせーの持つ爆弾を指差したが、殺せんせーはそれを食べてしまった。彼自身、まさかシロがプールに爆弾を仕込むとは思ってもよらなかった。流星の彼も顔色が変わる。

「なるほど、寺坂君が爆弾を仕掛けるとは思えない。となるとこれは、寺坂君の協力者の仕業でしょうね。そして寺坂君、君はその協力者に何かを渡されませんでしたか？」

殺せんせーがそう言うのと、寺坂は一丁の銃を取り出した。

「その銃の引き金が起爆スイッチと言ったところでしようねえ。いやあ、大惨事にならなくて良かった。差し詰め協力者は何も知らない寺坂君に起爆させ、爆発に巻き込まれた生徒達を私が救出している間に暗殺を仕掛けようとしたんでしよう」

「おい、マジかよ寺坂……」

「こんなの、ひどい……」

他の生徒達が寺坂を軽蔑と恐怖を含んだ目線で見つめる。しかし寺坂は謝罪する所か、自分は何も知らなかったの一点張りだ。彼自身、内心かなり焦っている。あと少しで殺しの片棒を担ぐハメになったのだから。

「な、何だよ爆弾って……俺、聞いてねーぞ。こんな事、あいつらが悪いんだ。そうだ、俺は……」

「デメエ、いい加減にしやがれ!!」

そんな寺坂の態度に、清磨は怒りの表情をあらわにして寺坂の胸ぐらを掴んだ。寺坂が直接爆弾を仕掛けていない事は分かっている、責任転嫁を繰り返す彼の言動は清磨の逆鱗に触れた。

「自分が何しよーとしたか分かってんのか!!危うくクラスの皆の中で、死人が出るかもしれないなかった!!?それをお前、自分は知らないで済ませようとしてんじゃねー!!」
「だって、仕方ねーだろ。俺は利用されただけなんだ。俺はただ、楽にあいつを殺せると思ってる……」

寺坂の煮え切らない言動に対して、清磨の怒りのボルテージは限界を超えて寺坂を殴ろうとしたが、突如寺坂の横から別の拳が飛んできた。とつさの事で清磨は寺坂から手を放してしまい、寺坂はそのまま倒れ込んだ。寺坂を殴り飛ばしたのはカルマだ。

「ねえ寺坂、高嶺君が違和感に気付いてくれて良かったね。でなきやお前、大量殺人の実行犯になってたかもしれない。まあ、殺せんせーなら誰も死なせないと思うけど。人のせいにするヒマがあつたらさ、自分の頭で何したいか考えなよ」

「赤羽、お前……」

突然のカルマの乱入により清磨の怒りは収まる。一方で殴られた寺坂は中々起き上がろうとしない。

そして気を抜いた一瞬、殺せんせー目掛けて触手が飛んできた。清磨達は反応出来てなかったが、ガツシュが触手を受け止めた。

「ガツシュ、大丈夫か!!」

「ウヌ、問題ないぞ!!」

清麿は真正面から触手を受けたガツシユの身を案ずる。ガツシユ自身は何ともない様子だ。そして彼が目線を向ける先には、シロとイトナが立っていた。

「そっか、寺坂君失敗しちゃったようだねえ。一応見に来ておいて良かったよ」

シロはこれまで通りの飄々とした態度を崩していないが、自分の作戦の失敗の事実に対して苛立ちを完全には隠せていない。

「なるほど、あなた達の仕業でしたか。シロさん、イトナ君」

「今度こそ決着を付けよう、兄さん」

イトナの髪型が変わっている。もちろん触手も変化しており、数は減ったがその分スピードとパワーを集中させるようにシロが改造したのだ。E組一同がそれに注目していた時、倒れていた寺坂が立ち上がる。

「(何のビジョンもないまま生きてきた結果がこれか……) ったく、ザマあねーな」

「お、寺坂君起きたね。君のせいで失敗しちゃったじゃないか。どうしてくれるんだい？」

シロは怒りと軽蔑の目線を寺坂に向ける。しかし寺坂も負けじとシロとイトナを睨み返した。

「うるせーよ、テメー等よくも俺をダメしてくれたな！おいイトナ、俺とタイマンはれや！」

寺坂がそう言うと、彼は制服のシャツを脱ぎ始めた。

「寺坂、触手持ちにそれは無茶だ……」

「待った高嶺君。寺坂、何か考えがあるみたいよ。バカのくせに」

「おいカルマ、聞こえてんだよ!!」

寺坂を止めに入ろうとする清磨をカルマが制止する。カルマの目には、寺坂にも勝算がある様に見えた。ちなみに寺坂は、彼が自分をバカ呼ばわりしていたことを聞き逃さなかった。

「そのチビにもお前の触手を受け止めることが出来たんだ。だったら俺にも出来ねー道理はねえ。それとも何か、俺が怖いのかよ?」

寺坂はガツシユを指差しながらイトナを挑発する。そしてイトナは寺坂の挑発に乗るがごとく、触手の狙いを寺坂に定める。

「寺坂君! やめなさい!!」

「うるせータコ! どうせお前は水がある場所じゃ上手く身動きとれねーだろーが!! 他のテメー等も、間違つても手エ出すんじやねーぞ」

殺せんせーの制止を寺坂は効かなかった。寺坂がここまで一人で勝負を挑むのは、彼なりに責任を感じていた為だ。そんな寺坂の目には、明確な自分の意志が宿っている。

「はあつ、仕方ないイトナ。受けてやれ、殺さない範囲で」

イトナから放たれた強烈な触手の一撃を、何と寺坂はシャツ一枚で受け止めた。寺坂は今にも吐きそうになりながらも、顔に笑みを浮かべる。

対してイトナは次の一撃を放つことなく、くしゃみをしていた。寺坂のシャツと接触したイトナの触手からは、体液がにじみ出ていた。

「そういう事ね、寺坂。あいつ昨日と同じシャツ着てやがる。それには、今日殺せんせーがおかしかった原因になった成分がたっぷり染み込んでいる。そしてイトナの一撃は、殺せんせー以外を殺すつもりはない。自分が殺されることのないが故に寺坂は、イトナの触手を受けられたわけだ」

「だが、余りにも無茶だろ……」

「高嶺君の言う通り、これは無茶だねえ。まあ、寺坂はバカだから仕方ない」

「だからカルマ、聞こえてんだよ!!」

(寺坂、叫ぶ余裕まであるのか……)

大勢が決した。イトナは寺坂の機転で本来の力は出せない。対して殺せんせーは万全とまではいかないにしても、大分薬物の効果は切れかかっている。そして人数の差、いざとなればガツシユペアの呪文もある。シロサイドにはまず勝ち目はない。

「……」までかな。退却だ、イトナ!」

「チッ!」

シロは悔しがるイトナを連れて退却した。多くの生徒達が安堵する中で、ガツシユペアとカルマは寺坂に駆け寄る。

「おい寺坂、大丈夫か!」

「寺坂、お主……」

「あ? 問題ねーよ」

「どうだろうね。いくら寺坂の服が薬物にまみれてるからって、自分から触手受けに行くとか……」

ガツシユペアは寺坂を心配するが、寺坂は平気そうだ。そんな寺坂をカルマは相変わらず煽る。

「あ、薬物? それがどーしたんだよ?」

しかし寺坂は、自分の服が触手生物に効く薬物にまみれていることなど考えていない。ただがむしやらにイトナの触手を受け止める事しか頭になかったのだ。

「お前、マジか……」

「寺坂、バカ過ぎるでしょ……でも俺、そういうバカは悪くないと思う」

「うるせー……」

相変わらず寺坂はカルマにバカにされたが、最後の発言を聞いた寺坂は満更でもない様子だ。そしてこれにて一件落着であると思われたが、今度は殺せんせーの顔が真っ青

だ。

「どうしたのだ、殺せんせー？」

「にゅやあ!!授業の時間が過ぎていきます!世間から授業を放棄する先生としてのレッテルが張られたら大変です!!皆さん、急ぎましょう!!」

「(ここでも世間体を気にするのな……)」

「殺せんせーの弱点だから仕方ない」

授業の時間が過ぎている事に気付けなかった殺せんせーが世間体を気にする。そんな殺せんせーに杉野と渚を始め、多くの生徒が呆れる。そして一行は殺せんせーに連れられて教室に戻った。

そして放課後、クラス全員の前で寺坂が教壇に立つ。

「お前等、濟まなかつた。俺のせいだ、お前等の命を危険にさらすところだった」

寺坂が謝罪と共に頭を下げた。そんな寺坂を見て、クラス一同はどうすれば良いか分からないような顔をする。しかしカルマはそうでは無い。

「まあ、寺坂は懲りてるみたいだしいいんじゃない?この辺で許してやっても」

「カルマ、お前……」

カルマからの意外なフォローに対して、寺坂は安堵の表情を浮かべる。

「ウヌ、これで寺坂も独りぼっちじゃなくなるのう！」

ガツシユが嬉しそうに寺坂の元へ駆け寄る。素直になった寺坂を見て、ガツシユも喜ばしく感じている。そして彼に続いて、村松と吉田も寺坂の方に向かった。

「俺等からも頼むわ。寺坂を許してやってほしい」

「俺達もこれからは暗殺に協力するからよ」

「おめえらまで……」

村松と吉田の言動に対して、寺坂はかなり嬉しそうだ。友が自分の為に頭を下げたのだからそうなるのも無理はない。これを見たクラス一同は、寺坂のした事は水に流すことにした。

「これも殺意が結ぶ絆ですねえ、ヌルフッフ」

その光景を殺せんせーが満面の笑みを浮かべて見つめる。

「まあ何だ。俺みたいなの目標もビジョンも無かった奴は、頭の良い奴に操られちゃうんだ……だがな、操られる相手ぐらいいは選びてえ。おいカルマ、高嶺！何か面白そーな暗殺の計画が思いついたときは、お前等が俺を操って見ろや！」

「……分かった。寺坂、頼りにしてるぞ！」

「おう、ほんと来いってんだ！」

寺坂の言葉を聞いて、清麿は嬉しそうに同意した。寺坂は自信満々の顔を見せるが、カルマの煽りがそれを台無しにする。

「寺坂く。俺等に操られるのはいいけど、それって自分が指示待ち人間ですって言うてるようなもんじゃね？」

カルマのこの発言を聞いて、寺坂の怒りは頂点に達した。

「んだと、カルマテメー!!こつちが下手に出てりやあ好き勝手言いやがって!!だいたいお前は普段サボってばつかのくせにスカしてんじゃねーよ!!ふざけんな!!」

「あれえ、寺坂逆ギレ?」

カルマがいつも通り寺坂をさらに煽ろうとしたが、クラスの雰囲気は妙だった。そして何人かの生徒がカルマの方を向く。

「あー、それ私も思ってた」

「どつかで泥水飲ましてやりたいよねえ」

片岡と中村が、寺坂に賛同するような発言をした。他の生徒達も似たようなことを考えているようだった。

「あれ、これ俺がいじられる流れ?」

珍しくカルマがクラスメイトにいじられており、そんな光景を殺せんせーは笑いながら見ている。今回の一件で寺坂がクラスに馴染んできた。彼の体力と実行力は暗殺の

大きな戦力となる。クラスの皆は寺坂の変化をととても嬉しく思っていた。

LEVEL. 25 期末の時間

期末テストの時期が近付く。そして中間テスト前と同様に殺せんせーが分身を作り、生徒達の苦手科目を重点的に教えていた。

「殺せんせー、また今回も全員50位以内を目標にするの?」

「いいえ」

渚の質問を殺せんせーが否定する。

「先生あの時は、総合点ばかり気にしていました。生徒それぞれに合うような目標を立てるべきです。そこで今回は、この暗殺教室にピッタリの目標を設定しました!」

殺せんせーの提案はこうだ。総合1位のみならず、各教科で学年1位を取ったものには触手1本を破壊する権利を与える。そして殺せんせーは、破壊される触手1本につき自らの運動能力を20%失うとも説明した。

「総合と5教科全てでそれぞれ誰かがトップを取れば、6本もの触手を破壊出来ます。これが、暗殺教室の期末テストです。賞金100億に近付けるかどうかは、皆さんの成績次第なのです」

それを聞いて生徒達の殺る気が一気に出て来る。殺せんせーは生徒を殺る気にさせ

るのが上手い。そんな時、清磨が手を挙げた。

「先生、質問があるんだが……」

「何でしょう、高嶺君？」

「総合や各教科で学年1位を取った生徒は触手1本破壊出来る訳だが、本校舎の奴等と同率1位になった場合はどうなるんだ？」

確かに学年1位を取っても、本校舎の生徒との同率ならどう扱われるのかが不明だ。清磨はそれをハッキリさせたかった。そんな彼の質問を聞いて、殺せんせーは考えるような素振りを見せる。

「そうですね。本校舎の生徒と同率1位の場合には、100点での同率の場合に触手を破壊する権利を与えることにしましょう。もちろんE組内での同率1位なら、1人1本触手を破壊出来ますよ」

「了解した」

殺せんせーの答えに対して、清磨は納得した素振りを見せる。そして丁度その日の授業の時間が終わり、号令の後に殺せんせーは教室を出た。

授業終わりも多くの生徒達が自主勉強に励む中で、清磨の前の席の奥田がいつになく殺る気を見せていた。

「珍しく気合入ってんじゃない、奥田さん」

「はい！」

そんな奥田にカルマが声をかける。

「理科だけなら私の大の得意ですから！ やつと皆の役に立てるかも！」

奥田は理科が得意な生徒だ。彼女だけではない。E組には1教科限定なら上位ランカーは多く、生徒達は本気で1位を取りに行っている。そんな中、寺坂が清磨の席に近付いた。

「おい高嶺、ちよいつら貸せや」

「何だ？別に構わんが」

寺坂が清磨を連れて隣の空き教室へ移動する。そこには寺坂グループである村松・吉田・狭間が待ち受けていた。

「狭間までいるのか。そういやお前、やけに寺坂達と仲良いよな」

「そうね。こいつ等の行動は、見てて面白いのよ。それにこの前みたいな暴走がないように、誰かがコントロールしてあげないと」

「……なるほどな」

狭間の発言に清磨はかなりしつくりきた様子だ。狭間も元は寺坂達同様やさぐれて

いたが、今は彼等の行動をこき下ろすのが楽しくなっているみたいだ。

「そろそろ本題に入るぞ、いいか？」

「おっとそうだな。話してくれ」

「俺等の作戦はよ……」

寺坂が自分達の作戦を清麿達に伝えた。それを聞いた清麿は初めは驚いたように目を見開くが、すぐに口元に笑みを浮かべた。

「どうよ？これならあのタコを殺せる確率が一気に高まるぜ！」

「いいと思う、確かにこれは盲点だった。俺もその作戦に乗るよ。寺坂が考えたのか？」
「あたりめーよ！あのタコに一泡吹かせるのも目的だが、カルマの野郎、人を指示待ち人間とか言いやがって！」

寺坂の考えた作戦に清麿が感心する。これまで楽をしようとしてきた寺坂とは違う。殺せんせー暗殺の為にとんでもない作戦を思いつき、実行しようとしているのだから。準備もあるから本格的にやるのは明日からだ。まあ高嶺、お前を誘ったのは俺等に勉強を教えて欲しいってのもある」

「いいだろう。俺は自分の席に戻るぞ」

清麿がそう言うと、寺坂達は無言で手を振ってくれた。

清麿が自分の教室に戻ると、カルマが自分の席でダラダラしていた。彼の勉強はあまり進んでいない様子だ。

「高嶺君、寺坂達と悪だくみ？」

「そんな所だ」

「寺坂君達もすごい殺る気ですよ！私も負けてられません！」

勉強に対するやる気あまり見られないカルマと対照的に、奥田はかなり張り切っている。そんな時、ガツシユが教室に入ってきた。

「清麿、そろそろ帰ろうぞ……ウヌ？」

「お、ガツシユか。期末テストが近いからな。皆それに向けて勉強しているんだ」

「清麿もまだ残っていくのか？」

「いや、デュフォーも待つてるし今日は帰るよ。ただし、明日からは帰るのは遅くなる」
クリア打倒の特訓の為に清麿は帰り支度を始めた。そして教室にいる生徒達に帰りの挨拶を済ませると、ガツシユペアは校舎を出た。

一方本校舎では、烏間先生がピッチ先生と共に理事長に中間テストのような小細工を

しないように釘を刺していた。しかし理事長は、自分から直接何かを仕掛けるつもりはない様子である。そして先生2人と入れ替わる形で、1人の本校舎の生徒が理事長室に入っていった。

「良く来てくれたね」

「理事長、あなたの意向通り……A組成績の底上げに着手しました。これで満足ですか？」

「浅野君、必要なのは結果だよ。実際にトップを独占しなくちゃ、良い報告とは言えないな」

浅野君と呼ばれたA組の生徒、彼からは只者ではない雰囲気が出ている。彼の名前は浅野学秀、理事長の一人息子だ。そして彼は今、E組がテストで上位を取れないように自らがA組の生徒達に勉強を教え、A組の成績を伸ばそうとしている。

「そんな君に、ノルマを与えようか。そうだな……A組全員がトップ50に入り、5教科全てをA組が1位を独占するのが合格ラインだ」

「分かりました……ではこうしましょう、理事長。僕のでその条件をクリアしてみせます。もしたら生徒ではなく、息子としてひとつおねだりしたいのですが」

「ほうっ？」

浅野の目は明らかに何かを企んでいる目だ。理事長の息子と言う事で、彼もかなり強

かな生徒である。

「僕は知りたんです。E組の事で、何か隠していませんか？」

理事長はほんの一瞬ではあるが目を見開く。まるで凶星を付かれたかのように。その理事長の仕草を浅野は見逃さない。

「E組の高嶺清磨、彼は何者なんです？」

理事長が何かを隠していると浅野は確信し、立て続けに理事長に聞いた。だした。

「高嶺君かい？彼は私が推薦した極めて優秀な転校生だよ」

「なるほど、では何故その様な極めて優秀な生徒がE組に在籍しているんですかね？」

確かに清磨の学力ならE組から抜け出すのは容易だ。カルマのように素行が悪い訳でもない。そんな彼がどうしてE組にいるのか、しかも理事長自らが推薦した生徒なのに。浅野はこの事が甚だ疑問であり、理事長の度の過ぎたE組への介入も相まって、E組には何か秘密があるのではと予測していた。浅野がその秘密を暴くための第一歩が、清磨の正体を知る事だ。

「彼の事を知りたいのなら、君が彼を直接支配して聞き出せばいいのではないかい？最も、他の生徒と同様に高嶺君が怖いのなら話は別だがね」

「言つてくれますね、理事長。確かに彼は今、多くの生徒達に恐れられている。そうですね、彼の事は僕が支配して直接聞き出すことにしましょう。このまま本校舎の生徒がE

組の生徒を恐れているというのも、示しが付かないですからね」

浅野は清麿に目を付けた。この会話の最中、清麿が背筋から寒気を感じたのは別の話である。

「そして理事長からのノルマを達成し、高嶺清麿から多くを聞き出し、私はあなたを支配して首輪をつけて飼う事にしましょうか」

「フフフ、さすがは最も長く教えてきた生徒だよ。社畜として飼い殺してあげよう」

お互いにお互いを支配することしか考えていない。これは傍から見れば極めて歪な親子関係ではあるが、彼等にとつては普通の事である。彼等の間に親子としての愛情があるのかは、彼等にしか知りえない。

次の日の放課後、清麿は寺坂グループに混じって期末テストに励んでいた。

「何だ、そういう事だったのか」

「時間取らせて悪いな高嶺」

「気にしなくていい。他の奴に勉強を教えていると、自分の復習にもつながる」

吉田と村松が清麿に勉強について聞いていたが、清麿はそれすら自分の学力向上に繋げるつもりだ。そして、

「悪い高嶺、ここ教えてもらいたいんだが？」

竹林が清麿に勉強を聞きに来た。清麿は寺坂グループ以外の生徒達にも、勉強に関して分からない箇所を教えていた。

「寺坂、高嶺達との計画は順調かい？」

清麿に勉強を聞くために寺坂達の近くに来ていた竹林が、メガネを指で上げながら聞いた。そんな彼の問いに寺坂は笑いながら答えた。

「へっ、まーな！っーか竹林、お前も総合1位目指してかなり気合入れてるよーじゃねーか。俺の誘いを断りやがって！」

「まあね。殺せんせーの教え方が良いから、総合1位も狙う気が起きる程度には学力向上を自覚しているよ。申し訳ないが、僕はそっちに専念したいんだ」

（寺坂の奴、竹林にも声かけていたのか。あれ、寺坂と竹林ってこんなに仲良かったっけ？そーいや修学旅行も同じ班だったか）

寺坂と竹林が仲良さげに話している光景を見て、清麿が疑問に思う。ガキ大将気質の寺坂と真面目系インドア男子の竹林。まるで正反対の2人が仲良さそうにしているのだから。その時清麿は、まさか彼等があのような共通の趣味を持ち合わせていたことを知る由も無かった。

「なるほど、ありがとう」

「礼には及ばん」

「済まん高嶺、俺もいいか？」

清麿は竹林に問題を教えた後に元の席に戻ろうとしたが、新たに木村が清麿に勉強を聞いて来た。多くのクラスメイトに勉強を教える清麿を、寺坂グループは見ていた。

「高嶺の奴、忙しいわね。本命の方は大丈夫かしら？」

狭間はそんな清麿を見て、自分達の計画が上手くいくかどうかを心配していた。

「まあこればかりは仕方ねーだろ。俺等だけでアイツを独占する訳には行かねエ。俺等も高嶺に助けられてるしな」

「お、寺坂の口からそんな言葉が聞けるとはよ」

「あー、それは思ったぜ」

「うるせーよ、お前等！」

寺坂の口から周りを気遣う発言が出た事を、吉田と村松が冷やかす。かつては周りの気遣いなど考えていない寺坂だったが、彼もまた成長しているのだ。

一方清麿は他の生徒達に通り勉強を教え終わって一息付いていたところを、片岡に話かけられる。

「高嶺君、大変そうね。大丈夫?」

「いや、全く問題ないぞ。片岡こそ、他の女子達によく勉強を教えているじゃないか」

多くの生徒達に勉強を教えている清麿に対して、自分の勉強がおろそかになつていなか心配する片岡だ。しかし清麿は何ともない様子だった。

「ふふつ、そうね。皆が自分のやれることに最大限取り組んでる。高嶺君も無理せず頑張つてね!」

殺せんせーの暗殺に向けて、E組が一つの事に真剣に取り組む。清麿にとって今のE組の環境はかなり居心地の良いものだった。

「まあ、今日忙しいのは奥田を始めとした各教科の上位ランカーが、本校舎の図書館に行つてるのもあるがな」

清麿と片岡が席を見渡すと、何人かの生徒の席が空いている。各教科のスペシャリストがいない状況なので、総合的に学力の高い清麿は特に頼りにされていた。またこの時、本校舎の図書館でA組とひと悶着あったことを清麿達はまだ知らない。

「まあ、赤羽に関してはサボリだろうがな……」

「私もそう思う。なんかカルマ君、勉強に力が入つてない感じするよね」

カルマが勉強に積極的ではないことは、清麿だけではなく片岡も気付いていた。そんな時、

「メグー、ちよつといい？」

「いいよひなた。じゃあ高嶺君、私は席に戻るね！」

「分かった、お互い頑張ろう！」

岡野に呼ばれた片岡が自分の席に戻って行く。それを見た清麿も元の席に着いた。

「よ、お疲れさん」

席に着いた清麿に対して、村松が労いの言葉をかけてくれる。

「悪い待たせた。寺坂、そろそろアレに入るか？」

「そうだな、そうするか！おめーら、場所変えるぞ！」

寺坂の言葉に従い、清麿達は隣の空き教室に各自の荷物を持って移動した。

そして別室に移った彼等は、再び勉強を始める。しばらく彼等が勉強を続けていた時、ガツシュがそこに入ってきた。

「清麿がここで勉強しておると聞いたからの。そろそろ帰ろうぞ」

「ガツシュか、もうこんな時間か。そうだな」

ガツシュが教室に入ってきたので、清麿は帰り支度を始める。

「悪い皆、今日は帰らせてもらう。また明日な！」

「おう、特訓の方も頑張れよ！」

寺坂グループも清麿の事情を知っていたため、彼を引き留める事をしない。そしてガツシユペアはそのまま家を目指す。

次の日、本校舎の図書館で勉強していたE組の生徒達から、A組の生徒達とかけをすることが話された。その内容は5教科でより多くの学年トップを取ったクラスが、負けたクラスにどのような命令も出来るというものだった。これはE組と、浅野率いるA組の5英傑との全面戦争に他ならない。

「ヌルフフフ、いいんじゃないですか？私も勉強の教え甲斐がありますねえ！」

殺せんせーもそのかけにはかなり乗り気だ。各教科の上位ランカーの腕の見せ所である。その中でも特に理科なら奥田、英語なら中村、社会なら磯貝、国語なら神崎、数学なら清麿とカルマが中間テストでE組トップクラスの成績を誇っている。

「さて皆さん、かけに勝った時はこれをよこせと命令するのはどうでしょう？」

殺せんせーが提案した戦利品を見たクラス一同は一瞬驚きの顔を見せる。そして彼等はすぐにやる気になる。

「君達は一度どん底を経験しました。だからこそ次は、バチバチのトップ争いを経験し

て欲しいのです。先生の触手、そしてコレ、ご褒美は充分に揃いました。暗殺者なら狙ってトップを殺^とるのです!!」

殺せんせーは教室から出ていき、生徒達は自主勉強の準備を始める。

「A組の出した条件、なんか裏で企んでる気がするんだよね。そう思わない? 高嶺君」

「まあ、何か裏がある可能性は考えられるな。だが俺達が勝負に勝てば問題ないだろう」
カルマはA組の事を勘ぐっているようだ。確かに浅野率いる5英傑が相手なら、裏で何が起こるか予測もつかない。しかし清磨は、A組に打ち勝つことしか考えていない。

「というか赤羽、少しだらけ過ぎじゃないのか?」

「大丈夫だつて。ちゃんと結果は出すからさ」

「つたく……」

期末テストが近付き、多くの生徒達がやる気を見せる中でカルマは不真面目だ。それを咎めようとする清磨だが、カルマは態度を改めようとしなない。

そして期末テスト当日。多くの生徒達がやる気を見せる中、人工知能の参加が認められなかった為に律はテストに参加出来なかった。そこで律役の生徒が代わりにテストを受けることになり、その存在はE組の生徒に動揺を与える。また理事長の指導によ

り、テスト問題の難易度も例年を上回る。そんな中、それぞれの利害が交錯する期末テストが始まった。

LEVEL. 26 終業の時間・一学期

2日間の期末テストは終了した。そして3日後、学年内順位と答案が一緒に届けられた。ついにA組との勝負、触手を壊せるかの勝負の結果が明らかになる。普段は外にいるガツシユも含めてE組一同、緊張感が漂う。

「さて皆さん、全教科の採点が届きました。では発表します。まずは英語から……E組の1位、そして学年でも1位!! 中村莉桜!!」

英語では中村が100点満点で学年トップを取った。クラスは歓声が沸き上がり、彼女は自信満々な顔で下敷きを仰ぐ。しかしまだ1勝で触手の破壊も1本のみ、これからの結果に期待だ。また渚も英語で上位を取っていたが、スペルミスが目立っていた。

「続いて国語、E組1位は神崎有希子と高嶺清麿の同率1位!!……がしかし、学年1位はA組浅野学秀!! 神崎さんと高嶺君も、よく頑張りましたね」

E組での1位は神崎と清麿の98点だったが、学年で見ると2位だ。そして1位の浅野は100点満点だった。

「清麿、残念だったのう……」

「そうだな。だが、まだ他の教科の結果も残っている」

清磨と神崎は残念そうにする。これで現状1勝1敗、クラス一同緊張の表情がハッキリ出ている。勉強に関してE組に立ちはだかる最大の壁、浅野学秀。彼を倒さない限りは学年トップを取ることは出来ない。

「……では続けて返します。社会!! E組1位は磯貝悠馬97点!! そして学年では……おめでとう!! 浅野君を抑えて学年1位!!」

「よっし!!」

磯貝が社会で学年1位を取り、勝負は2勝1敗。この結果に磯貝も声をあげてガッツポーズをする。そして次は理科。ここで奥田が学年1位を取れば、5教科の勝ち越しが決定である。

「理科の1位は奥田愛美!! そして……素晴らしい!! 学年1位も奥田愛美!!」

A組との勝負の勝ち越しが決まった瞬間である。また、ここまでで3本の触手の破壊の権利を生徒達は得られた。クラス一同喜びの表情を見せる。

「さてこれでA組との勝負の勝ちが決まった訳ですが、まだ先生の触手をかけての結果発表は続きます。次は数学、E組1位は高嶺清磨100点満点!! 浅野君と同率ですねえ」

数学の1位は清磨だったが浅野も100点を取っていた。しかし100点満点での同率1位であるため、無事に清磨も触手を破壊する権利が得られた。

「清磨、やったのう!」

「ああ、触手は多く破壊出来るに越したことは無いからな!」

ガツシユペアは喜ぶが、残念ながら清磨は総合1位は得られなかった。総合点の学年1位は浅野の491点で、清磨は490点で学年2位だった。柗ヶ丘中学校の試験は難易度が高く、高得点を取るのには容易ではない。実際にトップの浅野も500点満点は取れていない。

浅野と清磨も僅か1点差で、彼等の学力には差はない。ただ3年間柗ヶ丘中学校に属している浅野の方が自分の中学のテスト問題に慣れており、清磨はアウェイな環境でテストを受けていた。それだけの差である。こうしてテストの返却は終了した。

「さて私は少し外に出ます。待つててください!」

殺せんせーが超スピードで教室を出た。一瞬あつげに取られたE組一同だったが、すぐに自分達の勝利と成長に対して喜びの感情が沸き上がる。

そして多くの生徒が、席を立てて他の生徒と話したりした。特に社会1位の磯貝の周りには多くの生徒が集まる。エンドのE組はA組との勝負に勝つことが出来たのだ。

「私やりましたよ!!高嶺君、ガツシユ君!!」

「ウヌ!愛美、すごいのだ!!」

「ああ、よく頑張った奥田!!」

清麿の前の席の奥田が喜びのあまり席を立つ。そんな彼女はガツシユと手を握り、しやいでいた。多くの生徒が喜んでいた中、そうではない生徒を清麿は見かけた。

「よっ、神崎」

「あ、高嶺君」

多くの生徒が喜んでいる中、神崎は国語で学年1位を逃した為に悔しそうな表情を見せる。そんな彼女に清麿が近付いて話しかけた。

「私、触手破壊する権利を手に入れられなかったなあ。やっぱり悔しいよ」

「ならば、次頑張ろう！今度こそ浅野に一泡吹かせてやろうぜ！」

元気のない表情をしていた神崎に清麿が活を入れる。彼もまた今回のテストの結果に思うところがあり、神崎の気持ちを察する事が出来た。

「そっか……高嶺君、総合で1位取れなかったのが悔しいんだね」

「その通りだ、中間でも負けてるからな。次こそは勝ってみせる」

神崎が国語で学年トップを取れなかった事と同様に、清麿もまた総合で1位を取れなかった事を悔しがる。そんな清麿が自分を励ましてくれて、先程まで浮かない表情をしていた神崎は元氣を取り戻すことが出来た。そして彼女は1人の生徒が教室にいない

事に気付く。

「……そういえば、さつきからカルマ君がいないね」

「アイツなら外にいます。殺せんせーと何か話しているな」

清麿が窓を指差すと、カルマと殺せんせーが一緒にいた。赤羽業、数学85点、総合469点で、中間よりも大きく順位も点数も落としていた。彼が期末テスト勉強に真面目に取り組んでいなかったが故の結果である。そんなカルマを殺せんせーが煽りながらも手入れを施すが、彼は先生の触手を振り払い、校舎に近付いてきた。

そして殺せんせーは、今度は烏間先生と話しを始める。そんな様子を2人はしばらく見ていたが、清麿が口を開いた。

「それから、神崎に謝らなくてはいけないことがあるんだが……」

「え、何？」

「それはだな……」

清麿が申し訳なきさそうにする。神崎は何事かと思っただが、清麿が話している途中でカルマと殺せんせーが同時に教室に戻ってきた。

「さて皆さん、嬉しい気持ちわかりますが席について下さい」

殺せんせーの言葉を聞いて、生徒達は自分の席に戻った。そんな様子の中、清麿は話の続きが出来なくなってしまう。

「話の途中で悪いが、俺は席に戻るぞ」

「うん。ありがとうね、声かけてくれて」

清磨もまた自分の席に着く。また彼が神崎に話しかけたことにより、彼女の表情は大分柔らかくなっていった。

「さて皆さん、素晴らしい成績でした。早速暗殺の方を始めましょうか。トップの4人は自由」

殺せんせーは緑の縞々模様を浮かべる。例えば先生の触手が4本破壊されたところで、生徒達の暗殺から逃れるのは難しくないと言っていた。しかし、

「おい待てよタコ、5教科のトップは4人じゃねーぞ」

寺坂グループの4人が殺せんせーの前に出てきた。彼等は何か企んでいる様子だった。

「?4人ですよ、寺坂君。数・英・社・理・国合わせて……」

「はア、アホ抜かせ。5教科つつつたら数・英・社・理……あと家だろ!!」
(か……家庭科ア……!!)

寺坂グループの悪だくみの正体がこれだ。グループ全員で家庭科100点を取り、触手を破壊する権利をより多く得る。確かに殺せんせーは5教科と言ったが、どの5教科とは言わなかった。その盲点について、寺坂グループ4人は見事に触手を破壊する権利

を得た。ちなみに同じく計画に参加した清麿は、予想外の範囲からの出題及び自身の料理スキルの無き故に1000点は取れなかった。

「おい高嶺、家庭科1000点逃してんじゃねーよ!」

「すまんお前等!」

「つたく、まあオメーは数学で触手破壊できるからいいけどよ」

家庭科で満点を取れなかった清麿だが、数学で1位を取っており、寺坂グループからのお咎めは無かった。

(そう、これは詭弁ギリギリの作戦。学年1位を逃した科目と家庭科を入れ替えて5教科と主張すること。これがあいつ等の作戦だったわけだが……)

しかしこの方法では、入れ替えられた教科において例え学年で1位を取れなくても、必死でその科目で1位を目指して勉強してきた生徒の努力を蔑ろにする事にも繋がりがねない。清麿はそれを危惧していた。そして今回の場合は、入れ替えられた科目は国語。つまり神崎の努力を無にしてしまうと清麿は考えたが、神崎は清麿の方を向いて微笑む。

(高嶺君が気にしてたのは、この事だったんだ。でも、私が1位を取れなかったのは事実だから仕方ない。次は負けない!)

神崎は清麿の考えを察してなお、清麿達を責めようとは思わなかった。それどころか

今回の事で、より勉強に対してやる気を見せる。おしとやかに見られがちな神崎だが、彼女はとも強かだ。そんな神崎と目が合った清麿は申し訳なさそうに両手を合わせるが、彼女は気にしていない様子だった。

「竹林もだ！俺等の誘い断つときながら総合1位逃してんじやねーよ！」

「ああ。面目ない、寺坂。僕が甘かった」

寺坂の誘いを断つて総合1位を狙っていた竹林だが、成績は片岡と同率で学年8位のクラスでは2位だった。そんな竹林の目にも、神崎同様に闘志が宿っている。

「クラス全員でやればよかったかしら、この作戦」

狭間達は笑みを浮かべるが、殺せんせーは家庭科での触手破壊を認めようとしなない。そんな殺せんせーを見かねた千葉は、後ろの席のカルマの方を見て殺せんせーを指差した。そんな千葉の意図をカルマはすぐに察した。

「……それ、家庭科さんに失礼じゃね、殺せんせー？5教科の中じゃ最強と言われる家庭科さんにさ」

カルマは先ほど殺せんせーに煽られたことを根に持つており、ここぞとばかりに殺せんせーを咎めた。そんな彼の発言に便乗して、他の生徒達も寺坂グループの主張を殺せんせーが受け入れるよう口を出した。

「こういう時はさすがだな、赤羽」

「そりやどうも、高嶺君」

殺せんせーに痛い所を付かれたカルマだったが、落ち込んでいる表情は見られなかった。すでに彼は吹っ切れているのだろう。清麿は安心する。

「ところで高嶺君」

「どうした赤羽？」

カルマの口元から突如笑みが消えた。清麿もそれを見て何事かと思い、身構る。

「次は絶対負けないよ。浅野君にも、高嶺君にも！」

「……ああ、上等だ！それに俺も、浅野には勝ててないしな」

テストにおいて、カルマからの宣戦布告だ。清麿も堂々とそれを受けとった。今回で悔しい思いをしたカルマはもちろん、浅野相手にテストで一度も勝てていない清麿もまた、気合を入れ直す。カルマから慢心が消えた瞬間である。

そして彼等が決意を新たにしていると、殺せんせーが怯えながらも寺坂グループの主張を飲んでいった。

「ウヌ、これで殺せんせーの触手を沢山破壊できるのだ！」

「これで暗殺がかなり有利になるぞ」

喜んでいいるガツシユの頭に清麿が手を乗せて、彼を撫でる。かくしてE組は今回の期末テストで8本もの触手を破壊出来る権利を得られたが、暗殺はすぐには開始されな

かった。

「それと殺せんせー。これは皆で相談したんですが、この暗殺に……今回のかけの『戦利品』も使わせてもらいます」

触手を8本も破壊されることになり、怯え切っている殺せんせーに磯貝が提案する。

そして期末テストも無事終わり、終業式の日となった。E組一同はA組に約束を守ってもらうべく、浅野率いる5英傑と対面する。

「浅野、かけてたよな。要求はさっきメールで送信したけど、あれで構わないな？」

「……良いだろう」

磯貝の要求を浅野は、顔を強張らせながら了承した。

「……それから高嶺清磨はいるか？」

「ん、俺がどうかしたのか？」

浅野の突然の指名に、清磨は何事かと考える。

「話がある。終業式が終わったらここで待っていてくれ」

「……分かった」

浅野はただならぬ表情をして清磨を睨み付ける。それを察した清磨は返事と共に浅

野を睨み返した。

今回の終業式にはカルマが来た。彼も期末テストで思うところがあり、珍しく式に顔を出したのだ。また偽律も式に参加していた。彼女の隣でテストを受けた菅谷は、試験に集中できずにクラスで最下位となっていた。しかし学年で見れば中位の成績で、烏間先生は感心する。そしてE組が期末テストでトップ争いをした事で、いつものE組いじりはウケが悪かった。

終業式終了後、清磨は浅野と体育館の裏の誰もいないところで対面した。

「まずは自己紹介からかな？浅野学秀だ、よろしく」

「ただ自己紹介しに来た訳じゃないんだろ？どういうつもりだ？」

清磨は浅野を警戒する。理事長の息子が直接E組である自分を呼び出したのだから。彼が何かを企んでいるとしか思えなかった。

「そうだな……まずは君、A組に来る気はないかい？」

「はっ。」

浅野の意外過ぎる提案に、清磨の頭には疑問符が浮かぶ。なぜか理事長の息子が直々に自分をA組に入れようとしているのだから、無理もない。

「君がA組にいる方が、色々と都合が良いんだよ。本校舎の生徒の中には君を恐れている者が多い。しかし、E組を本校舎の生徒が恐れる構図は良くない。そこで君がA組に来てくれれば問題は解決するし、君も不遇なE組から抜け出せる。お互いwin-winじゃないか。どうだろうか？」

「断る」

浅野の提案を、清磨は速攻で断った。そもそも清磨はガツシユと共に理事長の推薦で地球を滅ぼす超生物を殺すためにE組に来ているのだから、E組を抜けるという選択肢は初めから無い。しかし浅野は、その事を知る由も無かった。

「まさか即答とはな、残念だ。確か君は理事長の推薦で編入してきたのだろうか？しかもわざわざE組に入るとは」

「それがどうしたと言うんだ？」

「でははつきり聞こう。」

今のE組では、何が起こっているんだ？」

浅野の直接的な質問。数少ない手掛かりを元に、浅野はE組では普通ではない何か起こっていることを確信した。理事長には否定されたが、その理事長が推薦してきた清磨なら何か聞き出せるのではない、彼を呼び出したのだ。

「……何もないぞ。何でそんな事聞くんだ？」

清磨は一瞬の沈黙の後、浅野の言葉を否定した。また清磨は浅野の手強さも思い知った。E組の成績向上、自分達の編入、理事長の必要以上の介入というヒントからE組で何か起こっているという答えにたどり着いたのだから。

「それは本当かい。それなら良いが……」

(コイツ、内心ではまだ疑っているな。気を抜いたら殺せんせーの事がバレる可能性が高い。要注意だな)

清麿の考え通り、浅野はまだE組に何かあると言う疑問を捨てていなかった。清麿は浅野に対しては特に警戒する必要性を感じた。

「(僕を勘ぐっている目、隙を付くのは容易ではなさそうだ) まあいい。そうだ、これはE組全員への伝言だが、良いかな？」

「何だ？」

「この借りは必ず返す」

「……………伝えておこう(理事長の息子だけあって、油断すると吞まれかねんな)」

今回のテストでE組とのかけに破れた浅野も辛酸を嘗めていた。そんな彼の気迫とE組に対する明確な敵意を清麿は感じ取って、場の緊張感が一気に高まる。さすが理事長の息子と言うべきか、浅野もただならぬ雰囲気醸し出していた。

「(僕の気迫に少しも怯えていないな。警戒心も申し分ない。ふむ、コイツは手強い) 話以上だ。E組を抜けたくなったら何時でも連絡してくれ」

「俺がE組を抜けることは無いぞ！」

浅野は清麿の最後の言葉を聞かずにそのまま去ってしまった。清麿と浅野の初対面だが、お互いを手強い相手だと認識する結果となった。

(高嶺清麿、やつを支配するのは容易ではなさそうだ。理事長の推薦だけあって厄介だ。だが僕は全てを支配する。今回のような失態は許されない！)

浅野はE組に対して、強い敵対心を持ち始めていた。

そして清麿がE組の校舎に戻ると、他の生徒は全員席についており、ガツシユと先生達も全員教室にいた。

「やつと清麿が帰ってきたのだ！」

「お、高嶺君も戻りましたか。それではこちらを」

「……これはアコーデイオンか何かか？」

殺せんせーが清麿に夏休みのしおりを渡したが、清麿はあからさまに困惑の表情を見せる。修学旅行よりも更に厚く、全てに目を通すのは容易では無い。清麿がそれを持つて席に着いたのを見て、殺せんせーが話を続けた。

「皆さんがかけでもらった沖繩離島リゾート2泊3日！これは夏休みのメインイベントになりますねえ」

A組からもらった物は、成績優秀クラスに与えられる離島への合宿の特典だった。そしてE組は見事にA組に打ち勝ち、これに行ける権利を勝ち取ったのだ。

「……君達の希望だと、触手を破壊する権利はこの合宿中に使うという事でしたね。ただ触手を破壊するだけでなく、四方を先生の苦手な水で囲まれたこの島も使い、万全に

貪欲に命を狙う。正直に認めましょう、君達は侮れない生徒になった」

殺せんせーは成長した生徒達に感銘を受ける。そして殺せんせーは大量の紙に二重丸を書いて、それを通知表だと言って教室にばらまいた。この二重丸は、殺せんせーから生徒達への嬉しい評価に他ならない。

「暗殺教室、基礎の一学期……これにて終業!!」

殺せんせーの言葉と共に、生徒達は教室を出た。

「清磨、旅行楽しみだのう!」

「ガツシユ、気持ちは分かるが暗殺の為の合宿でもあるんだ。気を抜くなよ!」

「ウヌ!!」

2泊3日の合宿で彼等は大規模な暗殺計画を行うのだが、その結果や如何に。ちなみに、アコーディオンの如く厚い夏休みのしおりは全生徒が教室に置いていったため、殺せんせーが直接生徒の家に配りに行った。

夏休み編

LEVEL. 27 科学館の時間

夏休みに入った。しかし、ガツシユペアにとってはやる事が山積みだった。離島での暗殺及びその訓練、打倒クリアの為の特訓、学校の課題及び受験勉強（水野達が勝手に聞きに家まで来る）、円滑に暗殺を進めるためのクラスメイトとの交流など、ある意味充実した夏休みになるかもしれない。そんな彼等は今日、櫛ヶ丘にある科学館を訪れていた。

「しかし、奥田が皆を誘うのは珍しいな」

「やっぱり愛美は、こういうのが好きなのだな？」

「はい。今まで1人でしか来たことが無かったので、今度はE組の人達と来てみたかったです！」

ガツシユペアは奥田の誘いに乗り、科学館に来ていた。

「やっぱり奥田さんと言えば科学だよね」

「思ってたより広そうだね」

「色々あつて楽しそう！」

「夏休みまで理科三昧なんて、安定の奥田ちゃんだ」

他にはカルマ・渚・茅野・中村が同行している。奥田は初め、修学旅行の同じ班の生徒を誘ったのだが、神崎と杉野はそれぞれ別の予定があるため参加出来なかった。そんな中、カルマから話を聞いた中村が面白そうという理由で参加する事になったのだ。

「そう言う中村こそ、夏休みは洋書を読み漁ろうとか言つてたじゃないか」

「いやあ、殺せんせーが読み切れない程勧めてくるからさ。まあそのおかげで期末は助かったから、無下にも出来んよ」

「『ライ麦畑でつかまえて』だったな。あんな問題、公立中学校のテスト問題じゃまず出ないだろうからな」

中村が英語で満点を取れたのも、この本を読んでいたお陰である。櫛ヶ丘中学校は定期テスト勉強1つですら一筋縄ではないかない。

「そんな事より……ひどいじゃないか、奥田ちゃん。なぜ最初に私を科学館に誘つてくれなかったんだい？」

「え？ いえ、そういうつもりでは……」

中村は自分が奥田から科学館への誘いを受けなかった事を話に持ち出して、奥田をからかう。カルマにしろ中村にしろ、しょっちゅう他の生徒をイジる事が多い。奥田は返答に困っている様子だ。

「冗談だから、そんなにビクビクしないでもいいよ。全く、テスト前に図書館でA組の連中相手に派手に啖呵を切つてた君はどこへ行ったんだい？」

期末テストの前、A組の5英傑が図書館でE組にいちやもんを付けてきた時があった。その時に真つ先にテストで科目ごとに1位を取ると宣言したのが奥田である。その様子に他のE組も感心していた。しかし今の中村は、奥田をからかうつもりでその話題を出した。

「あー、その話俺も聞いたよ。すごいね奥田さん、A組にケンカ売っちゃうんだから」「えつと、ケンカ売つたなんて……」

中村に便乗してカルマも笑いながら奥田イジリに参戦した。すると奥田はさらに顔を赤くして、恥ずかしそうにする。

「お前等、その辺にしといてやれよ……」

「ええ〜」

奥田が不憫に見えた清麿が助け船を出す。しかし中村とカルマはからかい足りないといった様子だ。

「でもあの時の奥田さん、すごかったよ！」

「いつになく強気だったよね」

「何と！愛美、そうであったか」

カルマ・中村と違って、渚・茅野・ガツシユは素直に感心したような言い方をする。

そして一行は科学館の薬品のエリアに辿り着いた。

「ここでは薬品の歴史や種類、どうやって薬品が作られるか、体にどのように薬品が効いていくのかなどについて説明されています」

この科学館に来たことがある奥田が、このエリアについて説明してくれた。

「何か面白い薬は置いてないかな？ 見つけ次第作り方調べて、寺坂にでも飲ませてやろうっと」

「あ、それ楽しそー」

カルマと中村が悪戯の為の薬探しの為に、薬品コーナーの先陣を切る。この2人はE組内でも特に地頭が良く、悪だくみの時（主に渚イジリ）には気が合う。

「いや、それはさすがにマズインじゃ……」

「2人は相変わらずだねー」

2人の言動に対して苦笑いしながら渚と茅野が後に続く。この2人も気が合う様子だ。そしてその場にはガツシユペアと奥田のみになった。

「ウヌ……皆行ってしまったのだ」

「そうだな、俺達も進もうか」

「そうですね」

そのエリアを歩いて行くと、周りには数多くの薬品のレプリカが展示されている。またそれらについての説明もなされていた。

「これは、ペニシリンじゃないか。イギリスで発見された世界初の抗生物質で、見つけた人がノーベル賞取ったんだよな」

「はい、抗生物質としてはかなりメジャーですよ。対象となる細菌の酵素と結合して活性を阻害する静菌作用と、細菌の細胞壁の生成を阻害することで最終的に菌を殺す殺菌作用がありますね」

「ウヌ、ペにしりんとは何なのだ？」

清麿と奥田は展示されていたペニシリンの事を話していたが、ガツシユは理解出来なかった。ガツシユが知らないのも、これが人間界で発明された抗生物質なので無理もない。

「まあガツシユ、簡単に言えば体に悪い菌を退治してくれる薬の一種だ。」

「薬にも、色々な種類があるのだな……難しいのだ」

（ガツシユ君にも分かるように説明するには、どうすればいいんでしょうか……よし、これなら……）

薬品の説明はまだガツシユには早いと清磨は内心思った。しかし、奥田はそう考えなかつた。

「薬と言えばガツシユ君、魔界にも病気に効く薬はあるんでしょうか？」

「ウヌ、魔界にも薬はあるのだ。しかし、こつちの世界の物と同じかどうかは分からぬが」

ペニシリンはひとまず置いておいて、奥田は別の切り口でガツシユと薬品の話を始める。魔界の事を絡めていけば、ガツシユも話しやすいと奥田は考えた。こうすることで奥田はガツシユとも、薬についての話題で話すことが出来ている。

「何だガツシユ。さっきまでの分からなそうな表情とは打って変わって、薬の事を楽しく話しているじゃないか」

「愛美がとても分かりやすく話してくれるからの！私も聞いてて楽しいのだ」

「えへへ、そうでしょうか……」

自分の話をガツシユが楽しく聞いてくれて、奥田は顔を赤くしながらも嬉しそうだ。自分の興味のある話を、相手が楽しそうに聴いてくれる事ほど嬉しいことはあまりない。

「私、昔から理科は好きだったんですけど国語は本当に苦手だったんです。でも、殺せんせーが教えてくれました。得意な理科を生かすためにも、相手に物事を伝えられる国語

力は必要だと。それが分かっているなければ、私は今ガツシユ君と葉について楽しく話せていませんでした」

「ウヌ！殺せんせーは色々な事を教えてくれるのう、愛美！」

奥田は殺せんせーが教えてくれた事をすっかりと実践した。E組に進学した当初はかなり内気だった彼女だったが、暗殺教室を通して成長している。

「やっぱり奥田って、随分自分の言いたいことを言えるようになったよな」

「そうですね。E組で色々な事を経験出来た事が大きいんだと思います」

奥田が自分に自信を持ち始めている事に清麿は感心する。そして一行は雑談をしながらエリア内を歩き回り、そこを一周し終えた。

次に彼等は機械のエリアに来た。そこには多くの機械やそのパーツとなる歯車・ゼンマイ・バネ・ネジ等が展示されている。

「清麿、沢山の機械とそのパーツがあるのだ！これらを使えば、新しいバルカンも作れるかもしれないぞぞ！」

「こんな時までバルカンって……まあ、こういうのを使って何か作るのも面白いかもしれないな」

ガツシユは機械のパーツに興味津々だ。これらのパーツを使えば、確かにより頑丈なバルカンを作ることが出来る。そして清磨の器用さがあれば、その実現も難しくはないだろう。清磨もまたパーツを見て、何かを作れないか考えてみる。その時、カルマが清磨に話しかけてきた。

「そう言えば高嶺君、何でバルカン300つてのを作ろうと思つたの?」

「ああ、それはだな……」

清磨はバルカン300を作るきっかけを話した。ガツシユは寂しがり屋な一面があり、何度もモチノキ第二中学校についてこようとしてきた。しかし今と違つてガツシユを学校に連れて行く訳にはいかず、ガツシユの気を引く為にバルカン300を作つただ。

「……なるほどね。ガツシユ君、随分バルカンを大事にしてるよね」

「そうだな、ガツシユにとってはバルカンも大切な友達だから」

ガツシユはバルカン300を持ち出して展示物を楽しそうにする。そんな光景を清磨とカルマは微笑ましく見守る。そしてガツシユには渚と茅野が近付いてきた。

「あ、ガツシユ君がバルカン300を持つてる」

「ウヌ、バルカンも友達だからの!」

「ガツシユ君、楽しそうだね!」

「ここにがある部品と同じ物を使えば、バルカンをさらにカッコよく出来るかもしれないのだ！」

話題はバルカン300についてだ。その話は更に続く。

「そして改造をすれば、空気ミサイル300発撃てるバルカンが更に強くなるのだ！」

バルカン300は空気ミサイルを300発撃てる設定だ。ガツシユが得意げに話し続ける。

「そうなんだ、300発は凄いな」

「バルカン300って強いんだね！他にも必殺技とか持つてるの？」

「ウヌ、バルカンはとても強力なのだ！他の技はだの……と、とにかくバルカンは凄いのだ！！」

渚と茅野はバルカンについて興味津々だ。と言うより、ガツシユに合わせて彼との会話を楽しんでいる様に見える。そして3人はバルカン300の話題で盛り上がり、茅野は特に楽しそうだ。そんな様子を清麿とカルマは見ていた。

「茅野ちゃんて、結構ガツシユ君にぐいぐい行くよね。高嶺君大丈夫、嫉妬してない？」

「してないぞ」

茅野がガツシユに構う頻度は日に日に増しているが、清麿は嫉妬については頑なに否

定している。そして清磨とカルマは、先に進んで次のエリアまで来ていた中村と奥田と合流した。少し遅れて、渚達もバルカンの話をしながら次のエリアに来た。

このエリアではただ展示物を見るだけではなく、実際に自分達も科学館の職員の指導の元、実験に参加出来たりものづくりをする事が出来る場所だった。

「ガツシユ君、向こうでシャボン玉の中に入ってみようよ！」

「ウヌ、そんな事が出来るのか!」

茅野はガツシユを連れて、人が入る事の出来る大きなシャボン玉を作れる装置のある方へ向かって行った。茅野もガツシユも興味津々の様子だ。装置はとても大きく、小柄な2人なら同時に入れそうなシャボン玉を作る事が可能だ。

「ねえ奥田さん、あそこの化学実験がやれる所に行こうよ。面白い薬が作れるかも」
「あそこの実験はとても楽しいですよ!私もよく参加してるんです」

カルマと奥田は、化学実験が出来るコーナーの方に向かった。ここで新たな薬が出来れば、カルマの悪戯の幅が広がるかもしれない。実際カルマは意地の悪そうな笑みを見せる。カルマ・奥田コンビは、カルマ・中村コンビとは違った意味で凶悪になり得るだろう。

「高嶺君。やっぱりあの2人はくつつかせちゃダメだね……」

「そうだな、渚」

カルマと奥田のコンビの凶悪さを考えて、清麿と渚は冷や汗を掻く。そして彼等もまた、どこかのコーナーに行こうとしたが中村に呼び止められた。

「ちよつと待った2人とも」

「どうしたの、中村さん？」

「ちよつと向こうで休んでいられない？」

「まさか、体調が悪いのか？」

中村は休憩スペースを指差す。清麿は中村の事が心配になったが、具合が悪い様子では無いみたいだ。

「いや、体調は大丈夫だよ。はしやぎすぎたのはあるけどね」

「そうか。それなら良いんだ。俺は構わないぞ。渚はどうする？」

「僕も大丈夫だよ」

中村の提案で、彼等は休憩スペースで休む事を決める。彼等はそのソファに腰をかけるが、その場所からもガツシュ・茅野・カルマ・奥田がそれぞれ楽しそうに見える様子が見て取れた。

「茅野って、結構ガツシュ君とはしゃぐ時あるよね。姉弟みたいに……」

「渚もそう思うか？」

ガツシユと茅野がシャボン玉の中で楽しそうにしている様子が彼等の目に入る。茅野はガツシユを弟のように可愛がっている節が見られる。

「何高嶺、嫉妬してるの？」

「そうじゃない。全く、その会話の流れはどうかならんのか……」

「え、本当かな？」

茅野がガツシユに構う事について清磨が嫉妬していると思う生徒は多い。最近はこのやり取りは恒例になりつつある。中村は清磨に疑惑の眼差しを向けながらも話を続けた。

「いやー、本当に今日は楽しかった。こうやってクラスで出かけるのはやっぱりいいもんだ」

「そうだね！」

「ああ、日々の暗殺のプレッシャーから解放されるようだ」

「アンタは暗殺以外にも、魔物の戦いもあるもんね。大変だ」

地球を守るための殺せんせー暗殺という使命は、中学生が背負うには大き過ぎる。E組の生徒は殺せんせーと楽しく過ごしているが、やはり精神的なプレッシャーは大きい。このようなりフレッシユする時間はとても大事である。

「さて2人とも、ここからの話は内密にしてもらいたいんだけど、良いかな？」

「それは構わんが、どうしたんだ？」

「悩み事？」

中村の真剣な表情を見て、清麿と渚は身構える。

「私さ、小学生のころはいつも勉強で1番だったんだよね。周りからは天才小学生って呼ばれてた」

中村は自分の過去を話し始めた。しかし彼女の表情はどこか暗そうだ。

「でも、他の友達みたいに普通になりたかった。だから中学に入ったらバカばかりやるようになったんだけど、そのせいで成績は下がってく一方。それで、E組行きが決まった時の親の涙は今でも忘れられない。失って初めて気付けることもあるからね……」

中村は頭が良い故の悩みを抱えていた。頭が良い故に周りから孤立した清麿とは別ベクトルの苦悩であるが、彼女もまた思い詰めていた様子だ。清麿と渚は真面目な表情で耳を傾ける。

「また頭良くなりたかった。けど、皆とバカな事や楽しい事もやりたかった。E組ならその両方が出来る。だから、殺せんせーにはすごく感謝してるんだ。そして、E組の皆にも」

殺せんせーの名前を出した中村は晴れ晴れとした表情を見せる。彼女の相反するや

りたい事は、殺せんせー有するE組によつて両立が出来たのだ。

「そうだったんだ」

「しかし、何でその話を俺達に?」

中村は自分の過去を彼等に話した。しかし何故自分達に打ち明けられたのかが彼等
は分からなかった。

「ホントは心に留めとくつもりだったんだけどねえ。今日皆で遊んで、この気持ちが強
まって誰かに話したくなつちやつた。アンタ達ならこういう話を簡単に広めたりしな
いでしょ。だから、絶対に誰にも言わないでよね! チョット恥ずかしいんだから」

普段の中村はカルマと同様に不敵な笑みを浮かべている事が多い。しかし今回だけ
はその様な素振りを見せず、少し顔を赤くしながら2人に口止めをした。あつけらかん
とした言動を取りがちな彼女だが、内心ではE組の事をとても大事にしている。そんな
中村は清麿と渚を信用した上で、自分の心の内を話したのだ。

「分かった、絶対言わないよ」

「おう!」

「頼むからね!」

2人の返事を聞いて、中村は嬉しそうに渚の肩を叩いた。そして少しした後、ガッ
シュ達が休憩スペースに來た。

「ウヌ、3人はずっとここにいたのか？」

「疲れてしまったのでしようか？」

奥田が心配そうな顔をして尋ねたが、3人はそれを否定するように首を横に振る。

「良かった。3人が休憩スペースにいるのを見た時、誰かの具合が悪くなつたのかと思つたよ」

茅野が安心したようにそう言った。それを聞いた清磨と渚は申し訳なさそうな顔をしたが、中村はニヤけていた。

「心配はいらんよ。それよりも茅野ちゃんはずっとガツシユと楽しそうにしてるから、高嶺が寂しそうにしててさあ……」

「……そうだったんだ、高嶺君しようがないな」

中村の清磨イジリにカルマが便乗する。

「違うわー！」

「清磨、怒るでない……」

2人の言う事を全力で否定した清磨だったが、ガツシユになだめられてしまう。そんな光景を渚・茅野・奥田は苦笑いをする。そして彼等は再び別のエリアを目指して歩き始める。

一行は全てのエリアを周ったのちに、科学館を出た。

「今日は私の誘いに乗ってくれて、ありがとうございます」

「そんなにかしこまらなくていいのに」

奥田は今日集まってくれたことに対して礼を言う。中村を始めとしてそんな様子を見た一行は、彼女の態度が少し固いのではと考えていた。

「大分勉強になったよ。誘ってくれてありがとうな、奥田」

「愛美、また薬の事を教えて欲しいのだ！」

科学館での時間を経て、ガツシユペアは新たな知見を得られたようだ。

「奥田さんの好きな事を僕等も知れて、良かったよ！」

「またどこか行こうね！」

「楽しかったよ。今度もいろんな薬を作ってみようか」

渚・茅野・カルマも今日一日を楽しめた様子だった。夏休みはまだ始まったばかりで、各々が楽しい思い出を作っていきたいと考えている。

そして一行はお喋りをしながらそれぞれの帰路に着いた。今回もまた、ガツシユペア

はクラスメイトとの交流を深める事が出来た。

「今日も楽しかったのう、清磨」

「ああ、リフレツシユも出来たところで特訓も頑張ろう」

クラスメイトと遊んだ直後でも、ガツシユペアの特訓は行われる。やる事が多い夏休みで、彼等が無駄に過ごせる時間は少しも存在しないのだから。

LEVEL. 28 策謀の時間

E組一同は離島での殺せんせー暗殺の為の訓練を行う。ちなみに殺せんせーはエベレストで避暑中の為、ここにはいない。生徒達は鳥間先生指導の下、ナイフ術の訓練を始める。その時、

「皆、こんにちはある!」

何とリイエンがE組の裏山にやってきた。彼女は鳥間先生の補佐の為に、はるばる中国から来てくれたのだ。

「来てくれたか、リイエンさん。早速で悪いが生徒達とナイフ術で相手をしてくれないか?俺1人では一度に相手に出来る人数の限りがある」

「分かったある、鳥間さん!」

リイエンもまたナイフ術の修行をしている。元々の戦闘能力の高さも相まって、短期間でみるみるうちにナイフの技術が上達した。さらにリイエンの場合はナイフ術にカンプーの要素も取り入れており、全て見切るのは容易ではない。

「リイエンさん来てくれたんだ!なら、まずは俺と手合わせしてもらっていい?」

「カルマ、勝負ある!」

レイエンのナイフ術とカンフーの合わせ技に対して、E組トップクラスの戦闘能力を持つカルマが勝負を挑む。勝敗は如何に。

「おい、カルマとレイエンさんが対決するぞ」

「どうなるんだろうね」

2人の手合わせは岡島と倉橋を初め、多くの生徒達の注目の的だ。

そしてその様子を少し遠くで、派手な私服姿のビッチ先生が見ている。

「全くレイエンたら、暗殺よりも女を磨いてほしいだけど……」

ビッチ先生はため息をついた。レイエンはビッチ先生の弟子となったが、女を磨くことよりもナイフ術の方に精を出している。それはビッチ先生の悩みの種だ。先生はレイエンと予定が合う時にでも、彼女をコーディネイト出来ないかを考えている。そんな時、ビッチ先生の後ろに1人の男が近付いた。

「イリーナ、何だその恰好は？落第が嫌ならさっさと着替えろ!!」

「ハイ喜んで!!ロヴロ師匠!」

ビッチ先生は校舎内に着替えに行った。師匠には頭が上らない様子だ。

「全くあいつは……おや?あの2人が見当たらないが」

ロヴロはこの場にガツシユペアがいらないことに気付いた。

「ああ。高嶺君とガツシユ君なら、新しい呪文が出たと言つて別の所で特訓中だ。会いたいなら場所を教えるが？」

「頼もうか」

ガツシユペアに会いたがつているロヴロを見て、鳥間先生が2人の場所を教えた。ロヴロは既に魔物の事を知っており、鳥間先生もガツシユペアの呪文について彼に隠すつもりは無い。そしてロヴロは一人でそこへ向かった。

その頃ガツシユペアは、新たな呪文の特訓に励んでいた。それが出たのは昨日の特訓中で、新呪文を使いこなす為のメニューは事前にデュフォーが考えてくれた。ガツシユペアはそのメニューのお陰で、殆ど術をマスターしている。そんな時、

「やあ、君達」

突如気配を消したロヴロが、彼等の後ろに出現した。

「な……ロヴロさん!!」

「来てくれておつたのか!!」

ロヴロの接近にガツシユペアは全く気付くことが出来ず、彼の姿を見た2人は冷や汗

を掻いた。

「気付いてなかったのか。まあ、それだけ特訓に夢中だったという事かね。君達、常に周りには気を付けた方がいい」

ロヴロは冗談交じりにそう言ったが、気配も殺気も完全に消した状態での彼の接近に気付くのは至難の業である。

「さて、聞きたいことがある。この前私が君達の存在感は大きすぎると言ったことは覚えてるね？」

「……もちろんです」

「その事が、どうかしたのかの？」

「覚えてくれていて良かった。それについての対処法は、何か考えたかね？」

ロヴロはガツシユペアを始めて見た時、彼等に秘められる大きな力を感じ取ったと同時に、その大きすぎる存在感は暗殺ではマイナスになると言った。ロヴロは2人に、その事についての対策をしているかどうかを聞いたのだ。それだ。

「それについては考えました。それは……」

清麿がその事について、自分達なりに出した答えをロヴロに伝えた。

「そしてこれは、今回の暗殺に組み込む事になっています」

ガツシユペアはロヴロに言われたことをしっかりと考えて、尚且つ今回の暗殺に生か

そうとする。しかし話を聞いていたロヴロは、どこか不満げな顔を見せた。

「なるほど、それは間違いではない。半分正解と言ったところだ。だが、俺の言った事についてちゃんと向き合い、さらに実践に取り入れようとする姿勢は評価出来る。頑張りたまえ」

ロヴロはガツシユペアの出した答えが不完全だと言った。しかし、その事を責めるような発言はせずに、むしろ次の暗殺の事を激励してくれた。

「ウヌ、頑張るのだ！」

「……もう半分の答えも、考えてみます」

ガツシユはロヴロの激励を素直に受け取ったが、清麿はもう半分の答えを出せなかった事を悔しがる。そんな2人を見た後にロヴロは後ろを向く。

「では俺は行く。少し気になる生徒がいたんでな」

「気になる生徒？ 誰なのだ？」

「それってまさか……」

ロヴロはガツシユペア以外にも、目を付けていた生徒がいた。ガツシユはそれが誰なのか予想がつかなかったが、清麿は思い当たる節があるようだ。

「黒髪の少年は心当たりがあるようだね。誰か言ってるらん」

「……潮田渚」

ロヴロは清麿を試すかのように、その答えを聞いた。そして清麿は少し考えた後、渚の名前を出す。

「正解だ。君も彼の才能には気付いているようだね?」

「はい。恐らくは暗殺の才能が、渚にはあります」

「……渚であったか。確かに渚からは、何かを感じることがあるのう」

清麿の答えは正しかった。そしてガツシユペアは、渚が鷹岡にナイフを当てた事を思いつく。他の生徒の大半が臆するであろう行動を、彼は難なくやってのけたのだ。

「彼の才能は素晴らしい。彼なら『死神』にも匹敵する暗殺者になれるかもしれない」

「……しにがみとは、何なのだ?」

「それは、最高の殺し屋のみ名乗る事が許される名前だよ。今でも、殺せんせー暗殺の機会を狙っているかもしれない」

突如ロヴロの口から、『死神』と呼ばれる暗殺者の話が出てきた。死神とは、その字の如く生命の死を司る神の名前である。そして人の死を扱う彼等の業界でその名を名乗る事は、確かに生半可な実力では許されないだろう。

「そんな奴がいるのか。油断出来んな」

「然り。手柄を取られたくなければ、早いうちに奴を殺すことだ……おっと、話が長引いてしまった。今度こそ行くよ」

そう言つてロヴロは、ガツシユペアの前から離れて行つた。

そしてガツシユペアが死神の事を考えていると、今度は2人の生徒が彼等に近付いてきた。

「お前等、もうすぐ射撃の訓練に入るぞ」

「烏間先生に言われて、あんた達を呼びに来た」

千葉と速水がガツシユペアを呼びに来たのだつた。

「分かつた。すぐ向かう」

「今行くのだ！」

ガツシユペアは、千葉と速水の2人と共に皆のいる所に向かう事にする。そして4人が歩いていると、千葉が口を開いた。

「そういやお前等、新しい呪文の特訓してたんだよな。どんな感じだ？」

「ああ、大分使いこなせるようになってる。後は皆との連携だけだ」

普段は寡黙な千葉であるが、ガツシユペアの新しい呪文には興味がある様だ。そしてそれは、速水も同じである。

「そう、それは本番が楽しみね。どんな術なの？」

「ウヌ、それはだの……」

ガツシユが新たな呪文についての説明を始めた。千葉と速水はそれを真剣な表情で聞く。

「なるほど、良い術だな。それなら辺りが水びたしでも、周りの奴等を巻き込まずに済みそうだ」

「そうね。あと、その術なら日ごろの暗殺の訓練も活きてきそう。頼りにしてる」

術の話聞いた千葉と速水の期待値が上がる。それ程に暗殺向きの術なのだろうか。

「ああ。この術かお前等の射撃が、今回の暗殺のトドメになるだろうからな」
「皆で暗殺を成功させようぞ！」

ガツシユペアがプレッシャーを押し返すかのように意気込む。そして千葉と速水もまたその目に闘志を宿す。

「そうだな、頑張ろう」

「私達のうちの誰かが、殺せんせーにトドメを差す」

4人は暗殺の話しながら、鳥間先生達のいる校庭に迫り着く。そして暗殺について語り合っていたためか、彼等の間にはかなりの緊張感が漂っていた。

「おい、あいつ等から感じる気迫は何だよ？まだ本番じゃないってのに……」
「まさに仕事人のそれだよな。ガツシユもめつちや気合入ってるし……」

思っていることが口に出た杉野と三村を初め、多くの生徒達がその気迫を感じ取る。数多くの戦いを乗り越えてきたガツシユペアと、常に結果で語る仕事人タイプの千葉と速水。特にガツシユのオンとオフの差は激しい。そんな彼等のストイックさは、E組でもトップクラスだろう。そんな時、4人に漂う雰囲気は断ち切るようにリイエンが彼等に声をかけた。

「4人とも、肩に力が入りすぎあるよ。緊張感は大それただけど、本番前からそれじゃあ疲れてしまうある」

気合が入り過ぎている4人を、リイエンは落ち着かせようとしてくれた。そんな彼女を見た清麿達の表情は柔らかくなる。

「ウヌ、リイエンも来てくれていたのだな!!」

「当然ある、私はE組の助っ人だから！」

「リイエンか、久し振り！暗殺の事を考えるとついな……」

「程々にしておいた方が良くあるよ」

リイエンは日本にいない為に頻繁にはE組に顔を出せないが、彼女の格闘技術は暗殺の大きな戦力となる。またリイエンはピッチ先生からも接待術を習ったことがあり、そ

れもまた何かの役に立つときが来るかもしれない。そんな彼女の介入により、清麿達から漂う緊張感は消えていた。

「……肩に力を入れているつもりは無かったんだけどな、無意識にそうなっていたか」

「確かにリイエンさんが声をかけてくれて、気持ちが悪くなったかも」

「それなら良かったある！」

千葉と速水も、リイエンのお陰で気が楽になったようだ。

「さて！皆揃った所で、射撃の訓練を開始しよう！」

そして烏間先生の一声により、それぞれが訓練の準備に入る。その一方で烏間先生とリイエンが会話を始めた。

「リイエンさん、さつきは見事に高嶺君達の緊張を解いてくれた。気合が入るのは良いことだが、彼等は少し度が過ぎてたからな」

「そうあるね。本番前からあんな調子じゃあ、清麿達の集中力が持たないある」

烏間先生もリイエンと同様に、清麿達が根を詰め過ぎている事を気にかけていた。しかし彼女のおかげでその心配も無くなる。

「では烏間さん、私はイリーナさんに挨拶に行ってくるある」

「ああ、そうしてやってくれ」

生徒達が射撃の訓練を始めたので暇が出来たリイエンは、師であるビッチ先生の方に

向かった。

ビッチ先生の方にリイエンが駆け寄ると、先生が手を振ってくれた。ビッチ先生もリイエンとの再会が嬉しいようだ。

「イリーナさん、挨拶が遅れて申し訳ないある」

「久し振りね、リイエン。そんな事は気にしなくていいわ、と言いたい所だけど……そうね。申し訳ないと思っているなら、訓練後に付き合っただけなのよ」

「?それって……」

ビッチ先生は何かを企んでいる様子だ。それを察したリイエンは警戒心を強める。

その一方で生徒達の射撃の訓練は、対先生BB弾入りの銃を使用して殺せんせーを使用した風船に弾を当てる練習をしていた。ハンドガンを使用する生徒もいれば、ライフルを使用する生徒もいる。ふわふわと動く風船に弾を当てるのは容易ではなく、多くの生徒達が苦戦する。しかし、千葉と速水は百発百中で弾を当てていた。

「クラス全体の射撃能力が前に見た時よりも向上しているな。特にあの2人は素晴らし

い」

千葉と速水の射撃を見てロヴロは感心する。

「……そうだろう。千葉龍之介は空間計算に長けている。遠距離射撃で並ぶ者の無い狙撃手だ。そして速水凜香は手先の正確さと動体視力のバランスが良く、動く標的を仕留める事に優れた兵士。射撃の成績は彼等がトップクラスだ」

千葉と速水、タイプは違えど彼等の射撃は暗殺において大きな戦力になる。烏間先生も、射撃においてかなり彼等を信用している。

「ふむ、俺の教え子に欲しいくらいだ」

千葉と速水の射撃の腕は、実際に殺し屋業に関わっているロヴロを以ってそこまで言わせるほどに優秀だ。

「それから、あの少年は赤い本を持って射撃をしているな」

「高嶺君か。彼とガツシユ君はあの本を使って呪文を出しているからな。彼等の場合は片手がふさがるのが基本になるから、実戦と同じ形で取り組んでいるんだ」

ロヴロは、清磨が赤い本片手にハンドガンの練習をしている様子に注目する。

「片手が塞がっているにしては中々の命中率だな。ただ、あの2人には及ばない」

「だが、クラス全体で見れば上位の成績だ。彼も器用だからな」

「なるほど。彼等も呪文に頼り切りと言う訳ではなさそうだ」

清磨も百発百中とまではいかないが、片手ながらにそれなりの命中率を誇っている。ガツシユも射撃の腕は並だが、高い身体能力を生かしたナイフ術は強力だ。そしてロヴロは他の生徒達を見渡し、満足気な表情を浮かべた。

「良いレベルで纏まっている。短期間でよく見出し育てたものだ。それに彼等の考えた作戦も、聞いた限り複雑であるが素晴らしい。合格点を与えよう。彼等なら充分に可能性がある」

E組の暗殺技術及び作戦は、人生の大半を暗殺に費やしたロヴロが合格点を出す程だった。

「ところで烏間先生」

「何だ？」

「少し潮田渚を借りたいのだが、構わないか？」

「……分かった。彼の射撃の番も終わりそうだから、その時に呼び出せば良い」

烏間先生もまた渚の才能に気付いており、何かを察するようにロヴロに許可を出した。射撃が終わった後に渚は、ロヴロと共に別の特訓に取り組む事になる。

今日の訓練が終わり、ピッチ先生がリエンに対して自分と買物に付き合うよう誘

う。

「ビッチ先生、やっとリイエンさんとシヨッピングに行けるね〜!」

「あ、私達も参加したい!」

「あら、ノリが良いのは嫌いじゃないわよ。付いてらっしゃい!」

倉橋と矢田が会話に加わり、彼女達も2人のお出かけへの同行が決まる。そうして彼女は女子会を行う事になった。

「陽菜乃と桃花も一緒あるね……」

ビッチ先生は更にリイエンの女子力を高めるつもりだ。その事に彼女は薄々感づいていたが、師匠の誘いを断る訳には行かない。

「リイエンさんがどんどんビッチ先生に染まっていくね……」

「そうだな」

「ビッチ先生はリイエンの師匠になったからの」

そんな様子を渚やガツシユペアを始め、他の生徒達も見ていた。この後リイエンはビッチ先生に色々な店に行き、散々おしやれを仕込まれたようだ。

そうして夏休み中の訓練の日程も全て終わり、E組一同は本番である南の島の暗殺ツ

アーに参加する。

LEVEL. 29 決行の時間

南の島での暗殺旅行当日、E組一同は船にて目的地に着いた。殺せんせーは乗り物酔いを起こしていたが、生徒がナイフを当てられる事は無い。まず一行は自分達が宿泊するリゾートホテルにて昼食を取る事にした。

「ようこそ普久間島リゾートホテルへ。サービスのトロピカルジュースでございます」
小太りの中年の店員が彼等にジュースを配る。

「ついに来たのう！清麿!!」

「そうだな。暗殺の事もあるが、皆楽しそうだ!」

先程配られたジュースを飲みながら、ガツシユペアは周りを見渡す。生徒達のテンションもかなり上がっていた。

全員が昼食を食べ終わった後、生徒達は修学旅行の班に分かれた。1つの班が殺せんせーとレジャーに参加している間に、他の班の生徒が現地のチェックと下準備を行う手はずだ。そして1班が殺せんせーと暗殺を絡めたグライダーを楽しんでいる際、4班は

実際に暗殺を行う海上付近のチェックを行う。

「ウヌ、ここにはブリはいないかの?」

「おい、ブリを探している暇は……って何で裸なんだ、ガツシユ!!」

「その水着は動き辛そうだからの……」

「……そういう問題!!」……」

海に潜るという事で、4班は泳ぎが苦手な茅野を除いてシュノーケル用の水着に着替えていたが、その水着をガツシユが着たがらなかつた。

「だったらその水着じゃなくて良いから何か着ろ!!」……」

「……分かつたのだ」

清麿に言われてガツシユは渋々家から持って来た水着を着て、海の中に入る。

「相変わらずだね、ガツシユ君は」

「はは、そうだね」

「あの年頃だから許されてるよな……」

そんなガツシユを見て、カルマ・渚・杉野は呆れた表情で苦笑いをする。こうして付近の海のチェックを一通り終わらせた4班は、殺せんせーの相手をする番が回ってきた。

「さて、君達4班はイルカを見るようですねえ」

「うん、船だけ大丈夫？」

4班は船の上でのイルカの見学を殺せんせーと共に行う。レジャーを楽しみつつ、乗り物酔いで殺せんせーの体力を奪うはずだ。しかし殺せんせーは完全防水の先生用水着を準備しており、何とイルカと共に泳いでいた。

「ウヌ、殺せんせーは泳げないのではなかったかの？」

「……あの水着のおかげなんだろうな」

魚を模した水着を着た殺せんせーを、ガツシユペアは何とも言えない表情で見ている。この水着の存在を知っていたのは4班の中では渚と茅野だけであったが、彼等も先生がそれを使ってイルカと共に泳ぎ始めるとは予想外だ。

「今回の暗殺の時は、あれを持ち込ませないようにしないとね……」

「そうですね。あれでは水の弱点が生かせませんので」

神崎と奥田は、殺せんせーの水着で暗殺に支障が出る可能性を危惧する。

「暗殺の時は殺せんせーのボディチェックを行うから大丈夫だよ」

「あの水着は使わせたらダメだからね」

事前に水着の存在を知っていた渚と茅野は、当然暗殺の時は水着を持ち込ませないよ

うにするつもりだ。

「でも、船酔いで体力を奪う狙いはかわされちゃったね」

「隙だらけに見えて何やかんや俺等の事、ちゃんと警戒してるからな」

狙いの1つを外されたことを、カルマと杉野は残念がる。しかしそれは、自分達が殺せんせーに暗殺者として認められたからに他ならない。それを内心分かっている4班一同は、複雑な心境だった。

「イルカがこんなに沢山いるのだ！楽しいのう、楽しいのう！」

「ガツシユ君。イルカ鑑賞を楽しむのもいいけど、暗殺の事も忘れちゃだめだよ！」

「ウヌ！カエデ、それは分かっておるぞ！」

「ホントかな〜？」

イルカを見ていたガツシユはとてもはしゃいでいた。それを見た茅野はガツシユに対して暗殺についても言及するが、結局彼女もガツシユと共にイルカ鑑賞を楽しんでいた。

「そう言う茅野も、随分楽しそうだな」

「茅野って、最近はガツシユ君がいるといつも楽しそうな気がする」

ガツシユと茅野がはしゃぐ様子を、清磨と渚は暖かい目で見ていた。茅野がガツシユの姉みたいだと言われて以来、彼女がガツシユに構う頻度は増している。

今この時も、他のE組の生徒は殺せんせー暗殺の仕込みを完了していく。このようにして各班は自分達の役割に励み、今日の暗殺に備える。その頃、烏間先生とビッチ先生は今回の暗殺の作戦について話し合う。

「イリーナ、聞きたい事がある。プロの殺し屋であるお前は言ったな。〃仕事は計画通り行く事の方が少ない」と

「その通りよ。計画書見たけど、こんな複雑な計画だったら1つ2つはどこかズレるわ」
「やはりそう思うか……」

烏間先生は生徒達の計画について心配している様子だったが、ビッチ先生は意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「ねえカラスマ、この私が遊んでるだけに見える？これでも真剣におこぼれを狙っているのよ。生徒の計画がズレた時、その結果私にチャンスが回ってきたら、決して逃がさないようにね」

ビッチ先生もまた一流の暗殺者。E組に来てからは英語教師として生徒達との交流を深めてきたが、彼女の暗殺者としての冷徹な一面がこの時は露わになる。

「お前がトドメを刺す分には俺は構わないがな」

ビッチ先生の悪巧みを、鳥間先生は気に留めていない様子だ。それよりも、彼には悩み種の多くが存在した。

(……不安要素が多すぎるな。連絡が取れなくなった殺し屋や、一方で防衛省内にも問題が発生している。さらにこの島そのものにも怪しい噂をちらほら聞く。暗殺を取り巻く空気が不穏になってきた。晴れている間に暗殺が終わればいいが、胸騒ぎがする)

そして夕食時、殺せんせーを船酔いさせるために船上レストランで一行はディナーを楽しむ。

「……まずはたっぷりと船に酔わせて、戦力を削ごうというわけですね」

「当然です。これも暗殺の基本ですから」

殺せんせーの接待は磯貝を中心に行う。彼等にとって今日が、殺せんせーとの最後の晩餐にするのだ。

「水着を使って海に逃げると、殺せんせーは空腹の状態で俺達を相手にすることになりますよ。あと殺せんせー、その黒い顔をどうにかしてもらえませんかね？」

今の殺せんせーは日焼けにより、全身真っ黒になっている。顔色を変えて表情を示す殺せんせーだが、これでは何も分からない。磯貝を始めとして、今の黒い顔をどうにか

して欲しい生徒は多かった。

「ヌルフフフ、お忘れですか皆さん。先生には脱皮がある事を、黒い皮を脱ぎ捨てればホラ元通りです！」

殺せんせーは脱皮をした。これで先生の表情が分かるようになる。しかし生徒達の狙いはそこではない。

「あ、月一回の脱皮だ」

不破が殺せんせーに哀れみと呆れを含んだ目で見ていた。しかし、そんな不破の目線など殺せんせーは気にしていなかった。

「こんな使い方もあるんですよ。本来はヤバい時の奥の手ですが……!!」

殺せんせーはようやく自分の失態に気付いた。月に一度の奥の手を、このような場面で浪費してしまっただから。先生は触手で顔を覆うように落ち込む。それもまた生徒達の狙いだった。

「清麿、殺せんせーは随分簡単に脱皮を使ってくれたのう」

「ああ、ドジだ。機貝の誘導があつたとはいえここまで上手くいくとは。だが俺達はそんな抜けている殺せんせーを今まで殺すこと出来なかつた……」

狙い通りとは言え、ここまでドジな殺せんせーに清麿は呆れる。そして生徒一同は、どうしてこんな先生を殺せないのかが疑問だった。

食事を終えた一行はホテルの離れにある水上パーティールームに来ていた。殺せんせーは船酔いを起こす。またそこは四方が海に囲まれており、殺せんせーが小屋を脱出する選択肢は無い。一行が小屋に入ると、テレビの画面の前で三村と岡島が待ち構えていた。

「さ、席に着いてくれ殺せんせー」

「まずは楽しい映画鑑賞から始めようぜ」

暗殺の計画はこうだ。まずは映画鑑賞で精神的ダメージを負わせる。その後、テストで勝った8人が触手を破壊した上で一斉に暗殺に入る。

「セッティングごころーさん。お前等のメシ、船から持って来たぜ。動画が流れてる時にでも食つとけ」

「お、サンキューな菅谷！」

「頑張ったぜ。皆がメシ食ってる間もずっと編集だったよ」

これから流れる動画は三村が編集を行い、岡島がそれを補佐して作り上げたものである。三村の映像が暗殺の場面で使われる時がついに来たのだ。2人は夕食を取る時間が無かったので、菅谷が気を利かせて食べ物を用意してくれていた。

「全力の暗殺を期待しています。君達の知恵と工夫と本気の努力、それを見るのが先生の何よりの楽しみですから。遠慮は無用、ドンと来なさい」

殺せんせーの言葉を聞いた岡島は、映像を流すために小屋の電気を切る。その後、例の映像が流れた。電気を切ることにより、殺せんせーが周りの生徒達の動きを把握させない狙いもある。しかし、殺せんせーはその狙いに気付いていた。

（2人の匂いがしない……なるほど、あそこの窓からですか。E組きつての狙撃手、千葉君と速水さんの匂いがします。しかし、それがフェイクの可能性もある。油断できませぬねえ）

殺せんせーは顔に笑みを浮かべながらも、生徒達を最大限警戒していた。そんな時、『まずはご覧いただく、我々担任の恥ずべき姿を』

大量のエロ本に囲まれた殺せんせーの映像が流れた。ちなみにこの時のエロ本の下には罨が仕掛けてある。岡島が殺せんせーの好むエロを分析し、エロ本を餌に殺せんせーをここまで誘導していたのだ。しかしその暗殺もまた、失敗に終わったのだった。

（にゅやああああ!!）

これには殺せんせーもビックリである。三村の映像による精神攻撃とは、これまで殺せんせーの恥ずかしい行いをひたすら生徒達の前で流すことだった。先生のメンタルは順調に削られていく。

「ウヌ、殺せんせーは何を読んでおるのだ？」

「ガツシユ君は見ちやダメ！」

そつち方面にまだまだ疎いガツシユが問いたのだが、それすらも殺せんせーの精神攻撃になり得る。当然ガツシユはその事に気付いていない。そんな彼の目を茅野が塞いだ。

（これが岡島の暗殺計画だったのか。思ってた以上にヒドいな……）

清麿は植物園で岡島が言っていた暗殺計画を思い出した。岡島のエロさがこんな場面で生きてくるとは、クラス一同予想出来なかった。そして映像は切り替わり、女装してケーキバイキングの行列に並ぶ殺せんせーの映像が流れていた。

「あらあら。エロ本に女装に恥ずかしくないのかしら、このド変態？」

ここに来て狭間の毒舌が生かされる。恥ずかしい映像に加えて狭間の言葉責めにより、殺せんせーは精神的大ダメージを受けた。そして映像は1時間近く流れ続け、ようやく完結した。

『さて秘蔵映像にお付き合ひ頂いたが、何かお気づきでは無いだろうか？殺せんせー』

映像は全て流れ終わった時、満潮により殺せんせーの足元には水が流れており、その水を触手が吸収してしまっていた。船酔い・精神攻撃・海水により、殺せんせーの機動力はかなり削られていた。そして触手を破壊する8人が殺せんせーの前に出た。

「ここからが本番だ、約束通り避けんなよ」

寺坂の言葉を皮切りに、8人がハンドガンを使ってそれぞれ触手を破壊した。殺せんせーダメージはかなり大きい。そして触手の破壊後に小屋の壁が外側に倒れ、殺せんせーの周りは海水に囲まれた。またそれだけではなく、何人かの生徒が水圧で空を飛ぶフライボードを駆使して水圧の檻を形成させた。

（ふむ、これでかなり動きが制限されますね。千葉君と速水さんの事も気になる、どうしたものか……）

しかし殺せんせーを閉じ込める水の檻は、フライボードだけでは無かった。

「そうそう、もつといっぱい飛び跳ねて!! 下から逃げられないようにね」

動物のスペシャリストである倉橋がイルカ達を誘導して、水をはねさせて殺せんせーの逃げ道を塞ぐ。彼女はこの時の為に昼間から練習をしていた。イルカの高い知能と倉橋の生き物に対する愛情の成せる業だ。

（殺せんせーは急激な環境の変化に弱い、木の小屋から水の檻へ!! 弱った触手を混乱させて反応速度をさらに落とす!!）

渚が水中でホースを使って殺せんせーの逃げ場をさらに減らす。そして水が苦手な茅野は、木の橋の上からホースを使用した。それだけではなく、殺せんせーの後ろからは何と律の本体が出現した。

「射撃を開始します」

律の合図とともに残りの生徒達が逃げ場を塞ぐように射撃を開始した。また烏間先生とビッチ先生も銃を構えて殺せんせーの逃げ道を潰す。そして、

「ラウザルク!!」

清磨が肉体強化の呪文を唱えたと同時に、ナイフを持ったガツシユが殺せんせーの懐に飛び込んだ。

（ガツシユ君のスピードが上がっている！それに、何という存在感！気を抜くと一瞬で飲まれてしまいますねえ）

強化されたガツシユの攻撃をギリギリで避ける殺せんせーだが、かなり劣勢だ。そして清磨も赤い本を片手に、ハンドガンで殺せんせーの逃げ場を塞ぎつつガツシユに指示を出す。今の清磨は【アンサー答えを出す者】を発動出来ていないが、クラスが一丸となる事で、確実に殺せんせーを追い込む事が可能だ。

「ガツシユ、そろそろアレを使うぞ!!」

「分かったのだ!!」

（一体何を?! ラウザルクの使用中は他の呪文を使えないはず……）

ガツシユペアの合図に殺せんせーが身構えた。

「行くぞ！第13の術、ナイブス・ザケルガ!!」

清磨が新たな呪文を唱えると、ガツシュの持つナイフは高密度の電撃を纏った。そのナイフは一撃は通常のナイフとは比べ物にならない程に強力だ。

(バカな、新しい呪文だと!! ラウザルクを使っているのに!!)

殺せんせーの疑問は必然だ。ラウザルクには、その術の使用中は他の術を使えないという欠点がある。しかしどういふ訳か、このナイブス・ザケルガはラウザルクとの併用が可能だ。もちろんガツシュは気絶しない。その原因は分からなかったが、清磨はこの術がラウザルクと一緒に使う事前提の術であると考えた。

「又オオオオオオ!!」

電撃を纏ったナイフが殺せんせーを襲う。ラウザルクの使用中には関わらず何故か他の呪文を使われたという予想外の出来事に、殺せんせーはさらに動揺する。電撃のナイフは殺せんせーにダメージを蓄積させていく。そして、殺せんせーの動きが止まった。

(体が動かない!! これは……)

ナイブス・ザケルガは攻撃の範囲は狭いが、長所はその高密度な電撃を術者が自由に操れる事にある。それによりナイフから敵の体に電撃を流して動きを封じるスタンガンのような使い方も可能であり、また自在に電撃を操る事で水浸しの環境でも周りを電撃させるリスクもない。ちなみにナイフを持っていない状態でも、この術を唱えれば電

撃のナイフが形成される。

ガツシユは電撃のナイフで殺せんせーにダメージを与え続けたが、トドメを刺すには至らないままラウザルクの継続時間は切れた。

「ガツシユ!!」

「ウヌ!!」

ガツシユは殺せんせーから距離を取ったが、彼等には別の狙いがある。2人の狙撃手によつてB B弾が、殺せんせー目掛けて放たれようとしていた。そして殺せんせーにトドメの一撃が放たれば何が起こるか分からないため、この場面で清麿はガツシユに距離を取らせるよう事前に指示したのだ。そしてガツシユが動くと同時に2発のB B弾が放たれる。

(この銃弾、千葉君と速水さんか!!)

(もらった!!)

ナイブス・ザケルガで殺せんせーを麻痺させた後、トドメの銃弾が先生を襲う。ガツシユペアは自分達でトドメを刺すことは出来なかったが、彼等は満足気な表情を見せる。

(くっ、ガツシユ君の存在感が大きすぎて千葉君と速水さんの警戒が途中から出来なかった!!そして水によつて2人の匂いも発砲音も消されていた!!)

千葉も速水も初めから水中に潜んでおり、殺せんせーのスキを伺っていたのだ。しかし水とガツシユの存在感がそれを先生に悟らせなかった。

(そう、これが俺とガツシユが出したロヴロさんの問いに対する答え！ガツシユの存在感で他の攻撃を悟らせないようにする事!! これでもまだ半分と言うが、もう半分とは一体……)

ロヴロから得た助言を清磨はここで導入した。文字通りクラス一丸となって実行された今回の暗殺計画、クラスの誰が欠けていてもこの計画は成り立たない。そしてこの計画に殺せんせーは敬意を示す。

(よくぞ……(ハ)まで!!)

殺せんせーに銃弾が当たろうとした瞬間、先生の全身が閃光と共に弾け飛んだ。

LEVEL. 30 伏魔の時間

突然の閃光により生徒達の多くがバランスを崩し、海に落ちた。殺せんせーも海面に浮かび上がって来ない。

「油断するな!! 奴には再生能力もある、片岡さんが中心になって水面を見張れ!!」

「はい!!」

鳥間先生の指示に従い、片岡を中心に再び生徒達は警戒心を強める。その時、海水から泡が出てきた。それを見た生徒達は銃を構えるが、そこには殺せんせーの顔が入った透明とオレンジの球体が出現した。

「これぞ先生の奥の手中の奥の手、完全防御形態!!」

「!!」
「!!」
「!!」
「!!」

生徒が一齐に突っ込んだ。先生曰く、外側の透明な部分は高密度に凝縮されたエネルギーの結晶体で、あらゆる攻撃を結晶の壁がはね返すとの事だ。恐らくはガツシユの電撃でさえも。そしてこの形態は24時間ほどで自然崩壊する。

「しかしこの24時間、先生は全く身動きが取れません。最も恐れるのはその間に高速ロケットに詰め込まれ、はるか遠くの宇宙空間に捨てられる事ですが、その点は抜かり

なく調べてあります。24時間以内にそれが可能なロケットは今世界のどこにも無いです」

このような良くわからない方法で生徒達の暗殺は防がれてしまった訳だが、殺せんせーの方が更に上手である事は紛れもない事実だ。

「清麿、本当にどうにもならないのか？」

「そうだな。【答えを出す者】^{アンサーサートーカー}を使えれば何か策は出てくるかもしれないが、殺せんせーのあの自信から察して打つ手無しの可能性が高い」

「ウヌウ……」

殺せんせーの奥の手と言う事で、これを破るのは現状不可能に近いだろう。しかもこの形態では核爆弾でも傷一つ付かないと先生は豪語した。ガツシユペアの落胆も大きかった。そんな時、

「そつかく、打つ手無いんじゃないね」

得意気にしている殺せんせーに対して、カルマはスマホの画面を先生に見せた。

「にゅやー……!!」

そこにはエロ本を読み漁っている殺せんせーの姿が映されていた。殺せんせーの恥ずかしい姿だが、手を使って顔を覆う事すら出来ない殺せんせーはそれを直視するしかない。

「あと先生、そこで拾ったウミウシもひっ付けとくね」

「ふんにゅああああ!!」

24時間動けないという事で、今の殺せんせーはイジリ放題だ。誰かをイジる時のカルマは天才的で、その様子を見た生徒達は呆れた表情を見せる。そんな現状を見かねた烏間先生は、カルマから殺せんせーを取り上げた。

「……とりあえず解散だ、皆。上層部とこいつの処分法を検討する」

「ヌルフフフ、対先生物質のプールの中にも封じこめますか？無駄ですよ、その場合はエネルギーの一部を爆散させて、さっきのように爆風で周囲を吹き飛ばしてしまいいす。今先生を殺す事は諦めて下さい」

烏間先生は苦虫を噛み潰したような顔をする。要するに、打つ手無しの状況だ。

「ですが皆さんは誇って良い。世界中の軍隊でも先生をここまで追い込めなかった。これは皆さんの計画の素晴らしさを物語っています」

殺せんせーは生徒達を褒めてくれたが、誰一人としてそれを好意的に受け取る者はいなかった。

そして生徒一同、疲労感を感じながらホテルへ戻った。4人を除いて。

「悔しいのだ、清麿」

「ああ、まさか殺せんせーがあんな奥の手を持っているとは思わなかった。そこまで読めなかった。すまん（「答えを出す者」^{アンサーカード}）を使いこなせるようになっていれば、また違う結末になっていたかもしれないのに。チクシヨウ……）」

「何を言う、私が先生を殺し切れていればこんな事にはならなかったのだ。私がつと強ければ……」

ガツシユペアはお互いが自分自身の責任で暗殺に失敗したと決め打っている。しかし彼等以外にも同じ事を考えている生徒がいた。

「アンタ達のせいじゃない」

「そうだな。それに俺、撃った瞬間分かったんだ。『ミスった、この弾じゃ殺せない』って」

「……同じく」

速水と千葉もまたホテルには戻っておらず、自責の念を感じていた。普段あまり感情を表に出さない2人だが、今回はかなり落ち込んでいる。

「そんな、お主達のせいだなんて……」

「待ったガツシユ。2人とも、何か心当たりがあるのか？」

自分を責める2人を見かねてガツシユがその発言を否定しようとする。しかし清麿

がそれを制止した。

「律、記録は取れているか？」

「はい、一部始終取れています」

律は今回の暗殺を全て録画していた。そして録画を元に、律が今回の暗殺についてフィードバックを始める。

「断定は出来ませんが、千葉さんの射撃があと0.5秒早いか速水さんの射撃があと標的に30cm近ければ、気付く前に殺せた可能性が50%ほど存在します」

「やはりか。自信はあったんだけど、撃つ前のあの瞬間、指先が硬直して視界も狭まった」

「私も同じ。そして絶対に外せないというプレッシャー、こんなに練習と違うとはね」

千葉と速水は自分達がプレッシャーに押し負けていた事を察した。清麿は黙って彼等の話に耳を傾けるが、ガツシユは我慢出来ずに口を開く。

「……それでも、お主達はよく頑張ったではないか!!それに、清麿だって……私がつと殺せんせーにダメージを与えることが出来ていれば、こうはならなかったかもしれぬ!!
そうであろう、律!!」

(ガツシユ……)

「……否定は出来ません。ですが、確実に私から言える事があります」

彼等の話を聞いてもなお、責任は自分にもあるとガツシユは考える。そして大声を出すガツシユを落ち着かせるように、律が言葉を発した。

「クラスが力を合わせて全力で暗殺に取り組んだ結果、殺せんせーに奥の手を出させる事が出来ました。そして今回皆で力を合わせた経験は、必ず次回以降の暗殺に生きてきます。これはとても大きな前進です」

律は笑みを浮かべた。確かに彼女の言う通りで、殺せんせーがあのような奥の手を持つている情報を得られた事は大きい。

「……これは律に一本取られたかな」

律の言葉を聞いてもなお落ち込んだ表情を浮かべているガツシユ・千葉・速水と異なり、清磨は口角を上げる。

「律の言う通り、俺達は力を合わせてここまでやったんだ。それから殺せんせーも言っていたが、これは誇っていいことだ。この経験は次回に活かすとして、まずは皆の所に戻ろう！」

「……ウヌ、それもそうなのだ」

清磨はそう言うのと、ガツシユを連れてホテルに戻った。しかし千葉と速水は、ガツシユと話しながらホテルに戻る途中の清磨の口が、先程と異なり笑っていない事に気付いた。

「なあ、高嶺つてああ言つてたけど……」

「うん。かなり内心引きずってるね」

2人は今回の暗殺の結果において、清磨が虚勢を張っている事に気付いた。律の発言を聞いて、清磨は少しでも3人を元気づけようとしてくれたのだ。

そしてガツシユペアは外の景色が見えるホテルの休憩室に来ていた。そこには千葉と速水以外の生徒と先生達が揃っていたが、皆疲労が溜まっている。

「皆、やけに疲れておるのだ……」

「無理もない、あれだけの規模の暗殺をした後なんだから」

ガツシユは疲れている皆が心配だったが、清磨はそれが暗殺終わりのせいだと考える。清磨自身も疲労を感じていた。

「千葉と凛香は、まだ戻っていないようだの……」

「そうみたいだ、あの2人は特に責任を感じてたからな。今はそつとしておくべきだろう」

千葉も速水も表情をあまり表に出すタイプではなく、それ故に苦勞した経験も多々ある。そんな彼等が明確に落ち込んでいるのだ。そして律と清磨は彼等に必要な言葉を

かけた。となれば、後は何かきつかけさえあれば2人は自信を取り戻せる。清麿はそう確信していた。

それから千葉と速水も戻ってきて少しした後、何人かの生徒の体調が目に見えて悪化し始めた。

「フロント、この島の病院はどこだ?!!」

それを見た烏間先生はホテルの従業員に病院の事を聞くが、診療所の当直医は夜にはもういない。そして高熱を出した中村を渚が部屋の近くまで運ぼうとしていたが、清麿がそれを止めた。

「待った渚、発熱が見られる奴等は全員この場所で休ませた方がまとめて看病をしやすい。まずはここで1人1人が横になれるスペースを作るんだ!」

「分かったよ、高嶺君!」

清麿の指示を聞いた渚は中村を壁にもたれかけさせた後、他の生徒達と共にテーブルを運び始める。

「高嶺……そんな事言つて、私達女子に何かしようって魂胆じゃないのかい?」

「今無理して冗談を言わなくて良い。少しでも自分の体を休めとけ」

「……相変わらずお堅いねえ」

中村はこれまで通りの口調で笑みを浮かべて清麿をからかうが、明らかに無理をして

いる。それを見かねた清磨は、あえて強気な口調で中村を休ませた。

「ガツシユ！俺達はまず、患者の負担を少しでも減らせるように布団を持って来るぞ!!」
「ウヌ、了解なのだ!」

清磨はホテルの従業員に余った布団の有無を聞いた後、ガツシユや職員と共に布団を運ぼうとした。その時、

「布団以外にも、氷水が必要だね。あとは、給水用のスポーツドリンクでもあれば望ましい」

竹林がガツシユペアの方に近付いてきた。彼の実家は医者をやっている為、応急処置などの医療関係の知識に詳しい。

「熱を出したメンバーは他の生徒達に任せて、僕等はホテルの人と共に布団・氷水・給水用の飲み物を準備する事にしよう」

「そうだな。まずはあいつ等の休息と応急処置が最優先だ」
「分かったのだ!」

ガツシユペアと竹林はホテルの従業員達に混じって布団などの準備を始めた。その時、清磨は烏間先生が青ざめた顔で何者かと電話をしている所を目撃した。

患者を休ませるための準備が終わり、熱を出した生徒達を全員横にさせた後、烏間先生が電話を終わらせて戻ってきた。

「皆、聞いてくれ……」

烏間先生が電話の内容を生徒達に伝えた。熱を出している生徒達には人工的に作られたウィルスが盛られている事、その治療薬を渡す代わりに殺せんせーを山頂のホテルまで1時間以内までに持つて来る事、そのための人員は正式にE組に登録されている生徒の中でも最も背の低い男女2人（つまりガツシユは除外）を指定した事、これらの約束を破れば治療薬をすぐに破壊する事が相手の要件だった。

「烏間さん、やっぱりダメです。政府としてあのホテルに宿泊者の事を問い合わせても、プライバシーだから教えられないと……」

「そうか、分かった」

園川さんが指定されたホテルに連絡してくれていたが、宿泊者の情報を聞き出すことは出来なかった。そして烏間先生もそれは予測していたようだった。

この島は別名「伏魔島」とも呼ばれており、山頂のホテルはカタギでない人々が入りしていたり、違法な商談やドラッグパーティーが開かれている。そのホテルは政府とのパイプもあり、警察も手を出せず、こちらに味方する可能性も無い。

「おい、何でこんな事になってんだよ!!」

吉田を始め、事情を知って多くの生徒達がこの光景を見て動揺していた。

(最悪だ、第三者が介入するなんて！しかも今の殺せんせーは身動きを取れない!! こうなったら……)

清磨は現状の解決策を導き出す為に【アンサーカード答えを出す者】を発動させようとしたが、失敗に終わった。

(くっ、ダメなのか!! こんな時に……)

肝心な時にそれは発動しなかった。清磨は自分の無力さとこの事態を引き起こした黒幕に対する怒りの感情に飲まれそうになっていた。また怒りの感情故か、清磨は自分の体が熱くなっているのを感じた。そんな時、

「おい高嶺、顔怖えーよ。落ち着こーぜ……」

「そうだよ、簡単に人は死なないんだから」

「!! その通りだ、すまない。杉野、原」

清磨の表情を見かねた杉野と原が、自身の体調も優れない状態で清磨をなだめてくれた。

「だから吉田君も慌てないでさ……」

「そうだよな、原」

原の大切な性格はこのような非常事態でも周りを落ち着かせてくれる。先程まで

慌てていた吉田も、原のお陰で冷静さを取り戻せた。

（熱を出した2人に諭されるとは……とにかく落ち着いて状況を整理しないと。黒幕の正体はクラスで背の低い男女と指名した事、ガツシユを除外するような言い方をしてきた事からE組と関りがある人物の可能性が高い。それから状況を打破する方法は……）
清磨は杉野達の応急処置の準備をしながら、黒幕の正体を探りつつ対抗策を考え始めた。しかし、策を考えていたのは清磨だけでは無かった。

「良い方法がありますよ。律さんに頼んだ下調べも終わつたようです。元気な人は来て下さい、汚れても良い恰好でね」

殺せんせーの策は単純明快。患者と看病のために残る生徒を除いた全員でホテルに侵入し、最上階を奇襲して治療薬を奪い取る事である。そのために律がホテルのコンピュータに侵入し、突入ルートを作成してくれていた。そして動ける生徒は外出の準備を開始した。

「清磨、私達も行くのだ!!」

「ああ、だが……」

ガツシユの言う通りにホテルの突入に参加したい清磨だったが、応急処置及び看病を竹林1人に任せる事に抵抗がある。しかし、

「皆の看病は私と竹林君が引き受けます!だから高嶺君とガツシユ君も行つて下さい

！」

マスクを装着した奥田が、強気な口調でガツシユペアの突入を促す。彼女は本当に、自分の言いたいことをハッキリと言えるようになっていた。

「そうだね。僕1人なら流石に大変だけど2人なら大丈夫だ。それに奥田さんの理科の知識が生きる可能性もある。だからここは僕等に任せとくれ」

「……分かった、ここはお前等に任せよう。そして今回の黒幕は絶対に許さん!!」

「もちろんなのだ!! それでは愛美、竹林!! 皆を頼むぞ!!」

竹林もまた自信ありげにそう言う。そうして2人の熱意を察したガツシユペアは、外に出る準備に取り掛かる。

看病の為に残った2人を除く感染していないE組一同が山頂のホテルを目指す一方で、竹林と奥田は今回のウイルスについて話していた。

「竹林君、これだけ強いウイルスならこの島中に広がってしまうんじゃない?」

「多分それは無い。犯人は『感染力が低い』と言ってたそうだし、恐らくは空気感染の危険は少ない。経口感染、飲食物等に混入されたと見るべきだね。赤の他人にそう簡単に感染させる心配はないと、皆にも伝えただけ……」

(E組を狙って盛られたウイルス、一体いつどこで?)

E組だけにピンポイントで感染したウイルスだが、その発生源は分からずじまいだった。

そして外に出たE組一同はホテルの前に辿り着いたが、警備されていない唯一の入り口は崖を登ったところにある。そして今回の奇襲が危険であると判断した烏間先生が渚と茅野に殺せんせーを持って行かせようと考えていた時、生徒達が一斉に崖を登り始めた。

「こんな崖、大したことないぞ!!」

「相変わらず早いねー、ガツシユ!でも負けないよ!!」

「ウヌ!ひなた、競争なのだ!!」

特に生徒達の中でも身軽なガツシユと岡野が先頭争いを開始する。そして他の生徒達も負けじと崖を登り始めた。

「俺だつて負けてたまるか!」

「おおつ、木村も競争するのだな!!」

(アスレチック訓練ではいつもあいつ等がトップクラスだったな。今回の崖登りも流石

だ)

俊敏さに自信のある木村も先頭争いに加わった。トップの3人を見た清磨は感心していたが、他の生徒も難なく崖を登る。ただの崖登りなど、日々暗殺の訓練を受けている生徒達には造作もない事である。

「彼等はただの生徒ではない。今は16人の特殊部隊なのですよ。どうしますか、烏間先生？時間は無いですよ」

殺せんせーは相変わらず笑みを絶やささない。そして烏間先生は少し考えた後、ホテルの突入を決断した。

「注目!!目標は山頂ホテル最上階!!隠密潜入から奇襲への連続ミッション!!ハンドサインや連携については訓練のものをそのまま使う!!いつもと違うのは標的のみ!!3分でマップを叩き込め!!19時50分作戦開始!!」

「「「おう!!」」」

烏間先生の指揮の元、ミッションが開始された。

LEVEL. 31 潜入の時間

全員がホテルの潜入に成功はしたが、通過しなくてはならないロビーには大勢の見張りが待ち構えている。それを見た烏間先生は一同に廊下で待機するよう指示を出した。(いきなり最大の難関だ。ガツシユ君の電撃を使うか? いや、音で気付かれて増援に來られたら面倒だ。どうするか……)

「何よ、普通に通ればいいじゃない」

烏間先生が対抗策を考えるが、ドレス姿のビッチ先生は緊張感もなくワイングラスを振り回す。しかも彼女はこんな時に少量のワインを口にしていたので。当然生徒達がそれを咎めるが、ビッチ先生はそれを聞き流して、ロビーに置いてあるピアノに目を付けた。

「いいから見てなさいガキ共。普通に通るのよ」

ビッチ先生は少し体をふらつかせながらロビーに入り、警備員の1人と肩をぶつめた。

「ごめんなさい、部屋のお酒で悪酔いしちゃって」

顔を赤くしたビッチ先生の妖艶な表情に、警備員達は鼻の下を伸ばす。そして先生

は、ロビーのピアノを指差した。

「来週そこでピアノを弾かせて頂く者よ、早入りして観光してたの。酔い覚ましついでにね、ピアノの調律をチェックしておきたいの。ちよつとだけ弾かせてもらっていいかしら？」

ビッチ先生は近くにいた警備員にそう頼むが、その男はフロントに確認を取ろうとした。しかしビッチ先生はそれを防ぐために、警備員の腕を握ってその男を上目遣いで見る。

「そんな事しないでいいじゃない。あなた達に聞いて欲しいの」

そしてビッチ先生はピアノを弾き始めた。その美しい音色は従業員の頭からフロントの確認を忘れさせるには十分だ。それ故に警備員のみならず生徒達まで曲に聴き入りそうになるが、ビッチ先生が生徒達にハンドサインを出した。

（20分稼いであげる、行きなさい）

その場にいた警備員たちは全てビッチ先生に釘付けで、E組一同はそのままロビーの突破に成功した。このような事が可能なのは、ビッチ先生が世界でもトップクラスの色仕掛けの達人だからだ。

ロビーの警備を突破した後は、彼等は客のフリをする事が可能になる。烏間先生が生徒達を普段着で来させたのはそれが理由だ。またその事は、敵もまた客のフリをして襲つてくる可能性を示唆している。

「前衛は俺とガツシユ君で務める。その後ろは近接戦闘が強い寺坂君と吉田君、そしてすぐにガツシユ君の呪文を唱えられるように高嶺君が続いてくれ」

「「了解」」

「ウヌ、分かつたのだ！」

ホテルの侵入には成功したが、どこに刺客がいるか分からない。烏間先生指示の元、常に警戒しながら一行は進む。しかし敵が襲つてくる気配が無かつたため、寺坂と吉田は先走つて烏間先生よりも前に出てしまった。

「へっ、楽勝じゃねーか」

「時間ねーんだから、さっさと進もうぜ」

寺坂と吉田が速足で進むが、その前には1人の男が口笛を吹きながらこちらに歩いく。多くの生徒達はその男も通常の客だと思つていたが、男の顔が見えた瞬間に不破の顔色が変わる。

「寺坂君!!そいつ危ない!!」

不破の声を聞いた烏間先生が咄嗟に寺坂と吉田の服を引っ張り、後ろに投げ飛ばす。

また。またそれと同時にガツシユが鳥間先生より前に出て、先生と男の間に割り込んだ。その男は何かをマスクを着けた上で何かを取り出そうとしたが、その前に清麿が呪文を唱えた。

「ザケル!!」

ガツシユの口から放たれた電撃が男を襲い、彼を戦闘不能に追い込んだ。

「間一髪だったな。呪文が少しでも遅ければ、俺は奴の攻撃を喰らっていただろう。これで黒幕に気付かれた可能性もあるが、やむを得まい」

「不破がすぐに気付いてくれたのが大きいですね。それが無ければ、俺も呪文を唱えられなかったかと……」

「優月のおかげなのだ!」

今回は不破の気付きにより暗殺者の1人の攻撃を受けずに済んだが、それは本当に幸運だ。タイミングがほんの少しでも遅ければ、あの男の攻撃を許していたのだから。鳥間先生とガツシユペアはそれが分かっており、冷や汗をかく。そしてガツシユの電撃の音を聞いて、黒幕とその護衛が侵入者に気付く可能性も高まった。

「ぐう、何故分かった? 殺気を見せずに、すれ違いざま殺る。俺の十八番だったのに……」

流石は一流の暗殺者。フルパワーでは無いとは言え、ザケルをモロに受けてもなお意

識がある。立ち上がる事は敵わないが、やはり一般人とは鍛え方が違う。

「だっておじさん、ホテルで最初にサービスドリンク配った人でしょ？」

「「「「……あ!!」」」」

不破に言われて、一同は男が従業員に紛れてドリンクを配っていたことに気付いた。そして不破は、そのドリンクから感染したと決め打つ。

「断定するには、証拠が弱いぜ……ドリンク以外にも、ウイルスを盛る機会はあるだろう」

「皆が感染したのは飲食物に入ったウイルスから、そう竹林君は言ってた。クラス全員が同じものを口にしたのは、あのドリンクと船上でのデイナーだけ。けど、デイナーを食べていない三村君と岡島君も感染していた。2人とも動画に注意を払ってて、菅谷君の持ってきてくれてた分も食べてなかったし」

「あいつ等、食わなかったんかい……」

せつかく用意した食べ物を2人が食べておらず、それを菅谷は残念がる。

「だから感染源は昼間のドリンクに限られる。従って、犯人はあなたよ！おじさん君!!」
不破の推理は正解だ。彼女は多くの漫画を読んでいる為に不測の事態においても対応力が高く、また漫画によって観察眼も鍛えられていた。今の不破の様子は、名探偵そのものだ。

「……やるな、おかつぱちゃん。だが、電撃の音を聞きつけてすぐに仲間がここに大勢来る……全員倒せるか？」

そう言い残して毒使いの暗殺者“スモッグ”は気絶した。暗殺者を一人突破出来たが、油断は禁物。そしてスモッグの言う通り、すぐに大勢の黒服を来た男達がこのエリアまで辿り着いた。

「大人しくしろ！ポスの命令だ！」

「くっ、数が多すぎる!!」

烏間先生が生徒を庇う様に出るが、男達は銃を構える。多くの生徒達が青ざめていた中、ガツシユペアが呪文を唱えた。

「ジケルド！」

「「「！何だこれは!!」」」

突如として出現した動きの遅い球体に男達の注目が集まる。そして球体は突如として消えた瞬間、男達のうちの1人の体に全ての銃がくつついた。

「どうなっている、銃が!!」

「お前等の仕業か!!高嶺清磨とガツシユ!!」

銃を封じる事には成功したが、男達の1人はガツシユペアの名前を呼んだ。

「俺達を知っているのか!!」

「お主達は一体?」

向こうはガツシユペアを知っているようだが、彼等は男達の事は知らなかった。すると、1人の男が喋り始める。

「ボスからの命令でな。ここで高嶺清麿とガツシユを戦闘不能にするよう言われている。トドメはボスが刺したいんだと。それ以外の連中はここを通して別の殺し屋に殺させると言ってたな、ただ1人を除いて。お前等、ボスに何をしたんだ?」

今回の黒幕は殺せんせー以外にも、ガツシユペアに狙いを定めていた。そしてもう1人にも。黒幕はE組一同が契約を破って突入する可能性を視野に入れており、契約が破られても治療薬を爆発させることなく彼等を招き入れる事にしたようだ。

「清麿、あの者達はまさか魔物が関係しているのか?」

「いや、直接は関係ないだろうが、あいつ等の仲間に魔物を知っている者がいる可能性は高いな。そして、今回の黒幕には心当たりがある」

清麿はここに来る途中、今回の黒幕について考えていた。殺せんせーを知っている政府ないしは防衛省の人間、そしてE組に恐らく恨みを持った人物だ。清麿がその人物の名前を口にする。

「防衛省の鷹岡明だな。そして狙っているもう1人の生徒は、潮田渚か?」

「何と、見事だ」

自分達のボスの正体が割れてもなお、男達は平然としていた。男達とは対照的にE組の多くは愕然とする。

「鷹岡！防衛省からも姿を消したと聞いていたが……!!」

「……なるほどね。鷹岡は殺せんせーを殺すついでに渚君にリベンジしたい訳だ。そして自分に対して特に反抗的だった高嶺君とガツシユ君の事も、自らの手で殺すつもりか」

焦りと怒りの表情を見せる鳥間先生だったが、隣のカルマは冷静に鷹岡を分析する。

「ふむ、中々察しの良い連中が多いな。だが、お前達はこのホテルからは生きては出られない。しかし治療薬を失いたくばこの2人を置いて先に進むしかない。お前等が言う事を聞かなければ、ボスが治療薬を爆発させるぞ」

「くっ、どうすれば……!!」

E組を指揮する鳥間先生は2択を迫られる。彼等の要求を飲めば、ガツシユペアが危険に晒される。いくら銃を封じているとはいえ、敵の数は多い。しかし断れば、治療薬は失われる。先生が苦悩している時、

「……は俺とガツシユに任せてくれ!!」

「ウヌ!!」

鳥間先生と敵の間に、ガツシユペアが立ちはだかる。

「何言ってるんだ、んな事したらテメー等が……」

「いや、それしかないかもね。現状かなりヤバイ」

寺坂の心配の言葉をカルマが遮る。確かに敵の数は多いがガツシユの術は強力だ。凶器を持った人間達を抑え込める可能性は高い。何より要求を飲まなければ治療薬が手に入らない。しかし、相手がさらに援軍を送ってくる可能性もある。烏間先生は少し考えた後に口を開いた。

「……済まない2人とも。持ちこたえられるか？」

「大丈夫です！」

「任せるのだ!!」

烏間先生は苦渋の決断を下した。しかしこの判断は、ガツシユペアの実力を信じた上での決断でもある。ガツシユペアはそれを受け入れた。

「そんな、烏間先生！」

「いくら何でも……」

渚と茅野がガツシユペアを心配する。2人が強いとは言え、クラスメイトが危険に晒されるのを見過ごす事は出来なかった。

「こんな事を言うのは無責任かもしれないが、2人を信じてあげてくれないか？彼等に何かあれば、俺を恨んでくれて構わない。今回の事で生徒が危険に晒された時は、全て

俺が責任を取る」

烏間先生の意志は固い。治療薬が失われれば感染した生徒が死に至る。それを防ぐ為にガツシユペアを危険に晒してしまふ事になるが、彼等もまた高い実力を誇る。彼等ならこの場面を突破できる可能性を持ち合わせている。そう判断した先生の覚悟に対して、E組一同誰も言い返せなかつた。

「やむを得ませんね、烏間先生。しかし、生徒に何かあつた場合は先生にも責任を取らせ下さい。そして高嶺君とガツシユ君にアドバイスを……」

殺せんせーはこれから危険に晒されるであろうガツシユペアに対して、助言を送る。

「2人は自分達の安全を最優先に動いて下さい。間違つても、自分を犠牲にしてもなどとは考えないように」

「ああ、心得た!」

「了解なのだ!」

この決断は殺せんせーにとつても辛い事である。自分の見えない所で生徒を危険に晒すのだから。そんな殺せんせーからの助言を受けたガツシユペアは、先生の言葉の重みを感じた後に黒服の男達の方を向いた。

「やつと決断できたようだな。他の奴等はずつとと進みな」

黒服の言う通りにガツシユペアを除くE組一同は、2人に心配の眼差しを送りながら

も先へ進んだ。

ガツシユペアを置いた一行は先へ進む。烏間先生の決断で彼等を残してきたが、やはり皆2人が心配だった。

「あの2人、大丈夫かな？」

「あいつ等が強えーのは知ってるけど、それは心配しなくて良い理由にならねーからな」生徒達の中でも荒事が苦手な矢田は特に辛そうな顔を見せる。ガツシユペアの強さはE組一同分かっている。だが生き死にかかっている以上、木村の言うようにどうしても不安は残る。しかし、

「あの2人なら問題ない。絶対に無事に戻ってくれる」

速水がいつも通りの強気な口調で言い放つ。速水は暗殺後に清麿が、自身の気持ちを抑えた上で自分と千葉を元気づけようとしてくれた事を思い出す。彼等の強さは呪文の力だけではないことを、速水は確信していた。

「そうだな、あいつ等が生半可な事でやられるとは思えない。俺達は俺達のやれる事をやらないと」

千葉もまた速水と同じ事を考えている。今回の暗殺で2人はガツシユペアとともに

訓練をする機会が多く、その時に彼等の強さを実感した。その強さはガツシユの呪文や清磨の頭脳だけではなく、彼等の心の強さから来るものだった。

「そ、そうだよ！2人なら大丈夫だって！（ガツシユ君、大丈夫かな？それに、高嶺君も……）」

「茅野……」

体を震えさせながらも、茅野がそう言った。しかし彼女は内心かなり2人を心配しており、渚にはそれが分かっていった。

「ていうか渚君も、人の心配してる場合じゃ無くね？」

「う……確かに」

カルマの言う通り、渚もまた鷹岡に目を付けられている。最終的に鷹岡と渚が戦わないといけなくなる事を、皆予測した。

「でも僕は、高嶺君とガツシユ君と違って皆が一緒だからね」

「お、強気じゃん」

渚は自分が1人では無いと分かっていた為、それ程自分の心配はしていない。

「2人や渚君が心配なのは皆同じだ。それでも俺達は先に進まない……」

烏間先生が言いかけたが、突然膝をついた。先生は尋常ではない程の汗をかいている。

「え、鳥間先生何で……」

「大丈夫ですか?」

それを見た菅谷と磯貝が先生に駆け寄る。何と鳥間先生もウイルスに感染していたのだ。

「そんな、鳥間先生まで感染してたなんて……」

片岡を初め、多くの生徒達の顔が青ざめる。殺せんせーが動けない今の状況で、最も頼りになる指揮官が戦闘不能になったのだから。しかし殺せんせーは、初めは鳥間先生に対して心配の表情を浮かべていたものの、次第にその顔は緩み、その顔には太陽マークが浮かび上がる。

「いやあ、いよいよ夏休みって感じですねえ」

殺せんせーのお気楽な態度に対して、多くの生徒達が怒りを露わにした。そして殺せんせー入りの袋を、渚は振り回す。

「ていうか殺せんせー、何でこれが夏休み?」

散々振り回されて酔い始めていた殺せんせーに渚が尋ねる。

「先生と生徒は馴れ合いではありません。そして夏休みとは、先生の保護が及ばない所で自立性を養う場でもあります……大丈夫です。普段の体育で学んだ事をしっかりやれば、そうそう恐れる敵はいない。君達なら必ずクリア出来ます、この暗殺夏休みをね。」

ヌルフフフ」

これは明らかな無茶振りにも見えるが、殺せんせーは生徒達を心から信頼しているからこそ言えるセリフでもある。どのような困難が待ち受けていても彼等にはもう、進む以外の選択肢は無いのだ。

その頃ガツシユペアはザケルで黒服の男達を倒そうとしたが、彼等に増援が来ていた。

「数が多いな……」

「ウヌ」

大人数の敵を見た清磨は汗をかきながらも、黒服たちを睨み付ける。

「ははは、時間稼ぎは成功だ。いかにお前等がすごい力を持っていようが、この人数を相手にはどうしようもなかるう」

黒服の人数が始めに来たメンバーを含めて30は超える。人数の差が圧倒的なので、黒服たちは優越感に浸っていた。

「さあ、大人しくタコ殴りにされるがいい」

男達は一斉にガツシユペアに殴りかかるが、2人は強気な態度を崩さない。

「ガツシユ、範囲の広い術を使うぞ！」

「分かったのだ！」

「SET、テオザケル!!」

「「「ぎやああああ!!」」」」

大人数の黒服達は瞬く間に戦闘不能となった。テオザケルは範囲が広くて強力な術だが、手加減していたために男達の命には別状は無い。黒服が全滅した後、新たに1人の中華風の服を着た男が部屋に入ってきた。

「成程、強力な電撃だ。しかも全力では無いと見た。これじゃあザコ共が何人いても勝てる訳がねえ。くくつ、奴に付いて正解だったな。この戦いは楽しめそうだ」

「誰だ、お前は?」

「……そうか、お前等とは一応初対面になるんだったな」

「お主の言い方、私達を知っておるのか？」

その男の口ぶりは、まるでガツシユペアの事を分かっている様だ。

「一応自己紹介しとくか。」

俺の名は玄宗！もう弱い人間相手では、拳が満足出来なくなった男よ！！」

ガツシユペアの前に立ちはだかつた玄宗と名乗る男は、かつてデボロ遺跡でウォンレイペア及びティオペアと交戦した千年前の魔物のパートナーだった。彼はツアオロンとペアを組み、ゾフィイスに操られることなく自らも肉弾戦に参加し、ウォンレイペアとティオペアを追い詰めた。

「確かお前等、デボロ遺跡でゾフィイス達に立ち向かった連中だよな？」

「何故それを……そうか、お前はウォンレイ達と戦った魔物のパートナーか？」

「正解だ。ウォンレイって魔物は元氣かい？」

清麿はウォンレイ達から話を聞いていた。魔物にも匹敵しかねない戦闘能力を持つ

パートナーの存在を。

「ウォンレイは魔界に帰ったぞ」

「そうか、そいつは残念だ。まあ、お前等が楽しませてくれそうだからいいけどよ」

玄宗はより強い相手と戦う事を求めている。彼はウォンレイに負けた後も修行を重ねており、デボロ遺跡の時よりも更に力を付けていた。

「清麿、この者は強いぞ」

「ああ、分かっている。今までの黒服とは比べ物にならないだろうな」

玄宗と対峙するだけで、ガッシュユペアは彼の實力の高さを察することが出来た。そして清麿は強敵を見て、体が熱くなっているのを感じた。魔物にも引けを取らない強さを持つ武闘家との激闘が、今始まる。

LEVEL 32 戦いの時間

ガツシユペアと玄宗は一步も動かない。お互いに隙を伺っていたのだが、攻撃を仕掛ける前に清磨が口を開いた。

「玄宗って言ったか。アンタに聞きたいことがある」

「何だ？」

「何で鷹岡に組しているんだ？アンタ程の実力者なら、鷹岡相手にも後れを取らないんじゃないのか？」

清磨は疑問に感じていた。確かに精鋭軍人である鷹岡は強いが、戦闘能力なら玄宗も負けていないだろう。金で雇われている殺し屋という訳でも無いのに、どうして玄宗が鷹岡の言いなりになっているのが清磨は気がかりだった。

「その理由は簡単よ。あいつといれば、強い奴等と戦う事が出来るからだ！」

玄宗が鷹岡に力を貸す理由は、前回の戦いと同じだ。彼はひたすら強い者と戦う事に喜びを感じている。

「そうか。ならお前、鷹岡がやっている酷い事に対して何とも思わないのか？」

「別に何も、そもそも興味がねえからな。俺はただ、お前等のような強い奴等と戦えれば

それで良い!!」

鷹岡がしでかした事は決して許される事では無い。人の命を弄んでいるのだから。しかし玄宗はその行為に対して興味が無いと言い放った。自分が鷹岡に手を貸せば、多くの生徒達が死に至る可能性があるというのに。それを聞いた清麿は、自分の体が熱くなっているのを感じた。

「デメエ、ふざけんじゃねーぞ!!」

「清麿、この者は絶対に倒すぞ!!」

玄宗の発言はガツシユペアの逆鱗に触れた。そして2人は臨戦態勢に入るが、既に玄宗が動き出していた。

(何というスピード!だが、これは……)

玄宗が清麿に殴り掛かったが、その拳はギリギリでかわされる。

(ほう、この一撃を見切るか!)

玄宗は中国拳法の使い手だが、動きは一直線であったため清麿はその動きを見切る事が出来た。清麿は今この時、**【答えを出す者】**を発現させている。

「清麿オ!!」

「ガツシユ、俺は大丈夫だ! (奴は強い。この力が無ければ危なかった。あまり俺に近づけさせないようにしないと……)」

今の一撃はどうかかわることが出来たが、玄宗の強力な体術は何度も避けられるような代物ではない。【答えを出す者】を使う事が出来ても、清磨と玄宗の格闘技術の差を完全に埋める事は出来ない。今の攻撃をかわすだけでも、清磨の体は疲労感を覚えた。「何だアイツの動きは？俺の攻撃を先読みしているように思えたが……」次行くぞオ

!!」

玄宗は先程の一直線な動きではなく、ガツシユの電撃を警戒した変則的な動きを見せる。そしてガツシユペアを攪乱させたいうえで一撃を叩き込もうとする。

「この者のスピード、魔物にも負けておらぬぞ！」

「(何という速さ！だが、ここだ!!) S E T、ザケル!!」

「ぐあああー！」

【答えを出す者】で攻撃を当てるべき場所の答えを出した清磨は、玄宗に電撃を浴びせる事に成功した。しかし、ザケルを喰らっても玄宗は倒れない。

(バカな、今ので立っていられるだど!!)

「この者、ザケルをモロに喰らったと言うのに！」

「お前等、何だその腑抜けた電撃は？」

玄宗は彼等を挑発する。その発言は全力では無かったとはいえ、王族の力に目覚めたガツシユの電撃をまともに受けた人間のそれとは思えない。

「この一撃には俺を殺そうという気概が感じられねえ。こんな電撃をいくら浴びても、俺は倒せねえぞ！」

玄宗はさらにガツシユペアに接近したと同時に、清麿は呪文を唱える。

「(ザケルがダメなら……) ザケルガ!!」

一直線の電撃が玄宗を襲うが、なんとザケルガはかわされた。玄宗の攻撃が清麿に届く直前で、その蹴りをガツシユが受け止める。

「清麿、大丈夫か?!」

「ああ、済まないガツシユ!! (今度はかわされた、どうして……)」

「……やっぱり魔物は強えな! この距離でパートナーを守り切るとは!」

間一髪で清麿を守れたガツシユに対して、玄宗は感心する。そしてガツシユが反撃に移ろうとすると、玄宗はすぐに回避と防御への専念に頭を切り替えた。

「ラウザルク!!」

「清麿には指一本触れさせぬぞ!!」

(この状態のアイツ相手に攻め込むと負ける、仕方ねえ!)

清麿は肉体強化の術を唱える。ラウザルクの発動中はさすがの玄宗も防戦一方だ。ガツシユの攻撃を玄宗がギリギリで受け流す。魔物であるガツシユの攻撃を受け流せるのは玄宗の身体能力の高さ故だが、ダメージをゼロにする事は出来ていない。しか

し、ガツシユが玄宗を倒す事が出来ないままラウザルクの継続時間が切れた。
「ぐぬぬ、ダメージが足りてなかった！」

ラウザルクの継続時間中に玄宗を倒し切れなかった事を、ガツシユは悔しがる。しかし玄宗は、ガツシユでは無く清磨の方に視線を向けた。

「……そういう事か。残念でならねえよ」

「お主、何を言っておるのだ!!」

玄宗が哀れみを込めた目でガツシユペアを見る。その理由をガツシユはすぐに理解する事は出来なかったが、何かが倒れるような音がした。

「くっ、体が……」

倒れたのは清磨だ。彼は体中から大量の汗をかいており、発熱が酷い。清磨もまた、ウイルスに感染していたのだ。何度か彼は自分の体が熱くなっているのを感じていたが、この戦いの途中でついに倒れてしまった。

「お前、スモッグの毒にやられてたのか……つまらん幕引きだ」

鼻で笑う玄宗を睨みつける清磨だが、満足に体を動かす事は出来ない。まともに呪文を唱える事すら叶わない。初めのザケルで玄宗を仕留めきれなかった事やザケルガがかわされた事も、これが原因だ。

「そんな、清磨……」

ガツシユは動揺する。そんなガツシユの隙を見逃さなかった玄宗は彼を蹴飛ばす。

「又オオツ！」

「パートナーが心配か？ あいつの所に駆け寄りたいたんだったら俺を倒してみな！」

清麿の感染と言う予想外の出来事に、ガツシユは平常心を保てない。『清麿が死んでしまう』という不安がガツシユの思考と体を鈍らせ、玄宗相手に苦戦を強いられる。ガツシユはリオウ戦で清麿が死にかけた事を思い出していた。

「お、おのれえ！」

「動きが鈍ってるぞ！」

先程までとは形成が逆転した。今度はガツシユが防戦一方だ。清麿はその光景をどうにかしたかったが、体を動かす事が出来ない。

（ガツシユ！ 濟まない、俺のせいだ。だが！）

清麿は深呼吸をする。高熱の体を少しでも休ませる為に。そして、

「ガツシユ、俺は死なないから心配いらんぞ!! だから全力でそいつを叩きのめせ!! ラウザルク!!」

清麿は出せる限りの大声でガツシユを激励し、ラウザルクを唱えた。清麿は【^{アンサー}答えを出す者】でウィルスの正体を見破った。そんな清麿の声を聞いたガツシユの目には再び闘志が宿り、彼の迷いは無くなる。

「ウヌ、分かったのだ!!」

「コイツ、さつきとは比べ物にならない動きじゃねーか!」

ガツシユと玄宗の格闘戦はガツシユが再び盛り返し、玄宗は守備に徹する。

一方で清磨の脳裏にはE組の皆の顔が浮かぶ。皆の為にもここで倒れる訳にはいかないと、自分を奮い立たせて立ち上がる。しかし、清磨の後ろには別の男が現れた。

(!!新手か!!)

その男は清磨の本を持つ腕を後ろから掴もうとしたが、アンサートリガー【答えを出す者】のおかげでそれに気付き、回避する事が出来た。

「お前、なぜかわせたぬ?」

その男は疑問だった。清磨はウィルスのせいで体が満足に動かせない状況で、かつ死角からの攻撃をかわされたのだから。

「……俺はこんな所で、やられる訳にはいかないんだよ」

清磨はふらふらになりながらも立ち上がる。その光景は、先程まで格闘戦を繰り広げていたガツシユと玄宗も見ていた。ガツシユと玄宗もまた、新手の存在に気付いたのだ。

「清麿、大丈夫か!!」

「……ああ、攻撃は喰らっていない!」

清麿は症状が治っていないにも関わらず、段々と動けるようになっていく。仲間を思えば限界を超えられる。ガツシユペアはこうして何度も逆境に立ち向かってきたのだから。

「玄宗、苦戦しているようだね? ボスに言われて助太刀に来たぬ」

「へっ! そうかよ…… ヽグリッヅ!」

グリッヅと呼ばれた男もまた、殺し屋の1人である。しかし彼は武器を持っていない。

「……お前の武器は、その素手だな?」

清麿は【アンサー答えを出す者】でグリッヅの特技を見破る。グリッヅはこれまで素手で何度も暗殺を成功させてきた。素手での暗殺には持ち物検査で引つ掛からないというメリットがあり、武器を持たない事で相手が油断する事もある。

「よくわかったぬ、少年。しかし分かったところで今のお前には何も出来ぬ。お前はボスが直接殺すと言ってたから、お前の両手両足を握りつぶしてからボスに差し出すぬ」
グリッヅの握力があれば、人間の骨をそのまま潰す事は容易だ。実際に彼は武器を使用するまでも無く、これまで多くの人間を殺めてきた。

「玄宗、お前は金髪の子供の相手をするぬ。こつちの本を持った方は俺がやるぬ。呪文は唱えさせぬ」

「わかったよ」

グリップの提案に玄宗は乗る事にし、ガツシユとの肉弾戦が再開された。ガツシユは清磨を助けたかったが、彼の前に玄宗が立ちはだかる。

そして清磨はグリップと対峙する。グリップが攻撃を仕掛けようとした瞬間、清磨が口を開いた。

「なあ……アンタのような手練れまで、ここに来ちまって良かったのか？」

「……どういう意味だぬ？」

清磨の発言の意味をグリップは分かっていない。そして清磨は得意げに話を続けた。

「俺とガツシユばかりに構いすぎて、お前等のボスの警備がおろそかになっていないのかって意味だよ」

「なるほど、そういう事か。それなら心配はいらぬ」

清磨の言いたい事を察したグリップの口角が上がる。彼の余裕ある態度はハツタリでは無い。

「まだ殺し屋が残っているぬ。他の連中はそいつに殺らせるぬ。それに、お前等の指揮官はウィルスに感染して満足に動けないぬ（ガストロがいれば、指揮官のいないガキ共は楽勝ぬ）」

「何だと!? 烏間先生が……」

清麿の顔が青ざめる。まさか烏間先生まで感染していたとは、思いもよらなかった。それを見たグリップは得意気な表情を浮かべる。

「もうお前達は終わりぬ、諦めるぬ!」

グリップは攻撃に出たが、清麿は動かない。

（ふん、諦めたぬか……）

清麿が諦めたのだとグリップは油断したが、それは違う。清麿が強気な笑みを浮かべると同時に、鉢に植えられた観賞植物がグリップを襲う。しかしその一撃は避けられる。

（何だぬ!?!）

「あれ、感染してたんだ。もしかして、これは結構マズイかな?」

「いや、心配はいらんぞ、

赤羽!!」

清麿は【アンサー答えを出す者】で助っ人でカルマが来ると言う答えを出した為に、グリツプとの会話で時間を稼いでいたのだ。

「何だ、もう一人来てたぬか。だが、お前一人でこの状況をどうにか出来ると思っているぬか？」

「んー、どうだろうね？でも、アンタを足止めするくらいは出来るかな？」

（何が足止めだ！赤羽の奴、アイツを倒す気満々のくせに！）

清麿はカルマの油断のない真つ直ぐな目に気付いていた。今のカルマには慢心が無い。彼は格上の相手を観察した上で倒す算段を立てる。

「高嶺君。コイツは俺が何とかするから、ガツシユ君の所に行つてあげなよ！それとももう動くことすら出来ない感じ？」

「バカ言え、全く……コイツはお前に任せるぞ！」

「オツケー」

カルマには油断は無かったが、他人を煽る言動は変わらない。そんなカルマを見て、清麿は「アンサー・トゥー・カ答えを出す者」を使うまでもなく彼に任せて問題ないと判断出来た。

「行かせないぬ」

グリップは清麿を追いかけようとするが、カルマはさっきの鑑賞植物を振り回す。結果グリップをそこに留める事には成功したが、観賞植物は握りつぶされた。

「ねえ。俺が相手じゃダメ、おじさんぬ？」

「仕方ない、お前の相手をしてやるぬ……ところで、その呼び方は何だぬ？」

「だつておじさん、ぬ多くね？」

緊張感漂う戦場で平気でのこのような発言が出来るあたり、カルマは流石である。油断はしなくとも、彼の根本的な性格は変わっていない。

「ぬ」をつけるサムライっぽい口調になると小耳に挟んだぬ」
「何それ……」

「まあ、好きに呼ぶといいぬ。どうせお前はここで殺すぬ」

グリップがカルマに掴みかかるが、カルマは鳥間先生の防御テクニクとリエンのカンフーによる受け流し駆使し、グリップの攻撃を避けるか捌いて見せる。

（コイツ、中々出来るぬ！）

（避けれるけど、こっちから攻めたら捕まるからなく）

カルマの戦闘の才能はE組でもトップクラスだ。彼は鳥間先生やリエンの技術を目で見て盗み、オリジナルには及ばないものの実戦に取り入れていた。

その一方、清磨は体を引きずるようにガツシユに近付く。

（赤羽が来てくれたのは、殺せんせーの指示か？だとしたらありがたいが、鳥間先生が感染していたとは……殺せんせー達の方は鳥間先生と赤羽という戦闘力トップクラス欠いている状態だが、今は皆を信じるしかない！）

そして清磨はガツシユと玄宗のいる近くまで来る事が出来た。そしてそこには、うづくまる玄宗と平然と立っているガツシユがいた。

「ぐう、まさかお前のマントまで攻撃手段になるとは……」

玄宗は呪文が使えないガツシユ相手に、殴り合いで勝負を挑むことしか考えていなかった。しかしガツシユには、呪文以外にもマントという強力な武器がある。もちろんガツシユ自身完璧に使いこなせている訳では無いが、殴り合う事しか考えていない相手の腹部に不意打ちを喰らわせる事は容易だ。

「……ガツシユ、マントを使ったんだな」

「ウヌー！清磨も、あの者を倒したのか？」

「いや、赤羽が来てくれたんだよ。今はあいつが戦ってくれてる」

「何と、そうであつたか！」

カルマの参戦にガツシユも驚く。

「……そうか、お前等の味方が来ちまったのか」

玄宗は苦しそうな表情をしながらも立ち上がる。もちろん彼には諦めると言う選択肢は無い。

「お主、まだ立てたのか！」

「当然だ、さつさと続きをしようぜ。呪文使つても構わねえぞ？」

ガツシユと玄宗は再び向き合う。そしてお互いの最後の一撃が繰り出されようとしていた。

「……ガツシユ。コイツは確実に動きを封じなくてはならんから、あの術を使うぞ」
「分かったのだ」

「行くぞ、どおとおおお!!」

玄宗がガツシユに殴り掛かると同時に清麿は呪文を唱えた。

「ナイブス・ザケルガ!!」

ガツシユの右手に電撃のナイフが握られ、向かってくる玄宗の攻撃をかわした上でカウンターの要領でナイフを用いて攻撃をした。そしてナイフから流れる電流により、玄宗の動きは封じられた。

「ぐはあ!こんな術を持つてやがるとは……」

「……俺達はこんな所で、負けてられないんだよ」

「くそつたれ、体が動かねえ(それにあいつ等の目、これが覚悟の違いって奴なのか……)」

電撃のナイフを受けた玄宗の意識はそこで途切れる。玄宗は前回の戦いと同じ理由で負けた。それは、戦いに対する覚悟の違いである。そして気絶した玄宗を、ガツシユペアは所持していたガムテープで縛り上げた。

「……勝てたな。よくやった、ガツシユ……」

「清麿、大丈夫か?」

「ああ、早く赤羽の方に行かないと……」

清磨は歩こうとするが、明らかに無理をしていた。

「何を言う！ 清磨は少し休んでおるのだ！ 殺せんせーが言ってたではないか、自分達の安全を優先しろと！ だからカルマは、私に任せるのだ！」

フラフラになりながらも動き続けようとする清磨を、ガツシユが叱責する。そんなガツシユに清磨は根負けしたように動きを止めた。

「……分かった。赤羽の事は任せる」

「ウヌー！」

ガツシユは清磨を横にさせた後、カルマの方へ向かった。

その一方、カルマはグリップに頭を掴まれている。グリップは何とスモッグのガスを隠し持っており、それをカルマに浴びせたのだ。

「至近距離のガス噴射、予期してなければ絶対に防げぬ」

グリップは勝ち誇る。カルマは体を動かす事も出来ず、後はその頭を握り潰すだけだと、そう確信した。しかし、カルマの手にはグリップが使用した物と同じ物が握られていた。そしてガスがグリップ目掛けて噴射される。

「奇遇だね、同じ事考えてた」

カルマはグリップの行動を予測し、ガスを吸わずに済んでいた。そして自らもスモッグの毒を使用し、グリップを弱らせる事に成功した。グリップはナイフを取り出してカルマに攻撃を仕掛けたが、カルマがそれを抑え込む。それと同じタイミングで、ガッシュがカルマの方に駆けつける。

「ガッシュ君、丁度良かった。コイツの拘束手伝つてよ、俺一人じゃキツイから」
「カルマ、分かったのだ！」

グリップの怪力は毒を喰らっていてもカルマー人では抑え込めない程強力だ。しかしガッシュの身体能力があれば、それも可能になる。そのままグリップはガムテープで拘束された。

「何故ガス攻撃を見切れたぬ？」

グリップは自分が素手しか使わなかったのに、カルマがどうしてガスを対策出来たかが分からない。

「素手以外の全部を警戒してたからね。アンタがプロである以上、どんな手段を用いても俺を倒しに来ると思ってた。アンタのプロ意識を信用してたから、警戒出来た」

（カルマ、前とは変わった気がするのだ）

「完敗だね……」

ガツシユの思う通り、カルマは変わった。期末テストでの敗北から、相手を見くびらないようになった。今の彼には隙が無い。グリップは自分の負けを認める。

「ガツシユ君。高嶺君の所に行こうか」

「ウヌ！」

彼等は見事に2人の強力な刺客を倒した。そしてガツシユとカルマは、横になっている清磨の方へ向かう。

LEVEL. 33 黒幕の時間

ホテルの一室。そこで今回の事件の黒幕である鷹岡は頬を掻きむしる。

「おい、玄宗とグリップまで何をしている？まさか……」

鷹岡は刺客たちがやられた事に感づいた。その時鷹岡は2人からの連絡が来ない事に苛立ちながら、玄宗との出会いを思い出す。

「特に玄宗の奴、あれだけ大口を叩いておきながら……」

回想

E組に復讐するための手駒を揃えるために、鷹岡は多くの殺し屋や武道の達人を探していた。そんな鷹岡は玄宗の噂を聞きつけ、彼が修行している山まで足を運ぶ。

「……と言う訳なんだが、力を貸してくれねーか？」

「はあ？俺は殺しには興味ねーぞ。つーか、ただの人間相手ではもう俺の拳は満足出来ねえ」

魔物との戦いを知った玄宗にとって、今更人間の相手など気が乗る訳が無い。

「まあ、お前は誰も殺さなくて良い。ただ、コイツ等をぶっ飛ばしてくれればな」
「あ?」

鷹岡は玄宗にガツシユペアの写真を見せた。すると、それを見た玄宗の口角が上が
る。

「(コイツ等は確か……) ああ、良いぜ。気が変わった」

「助かるぜ! コイツ等には地獄を見てもらう!」

「これなら楽しめそうだ! くくつ、ハハハハハ!!」

玄宗はまさか再び魔物と相まみえる日が来るとは思っていなかった。こうして玄宗
は鷹岡と手を組み、今回の事件に関わっていく。

回想終わり

「クソ! だが、まだガストロがいる。それにこの治療薬がある限り、あいつ等は俺に逆ら
えない。ハハ、ハハハハ」

鷹岡はプラスチック爆弾が貼られた治療薬入りのスーツケースを抱えながら、狂気に
満ち溢れた表情を浮かべる。

その頃、ガツシユとカルマは横になっている清麿に駆け寄った。

「清麿、大丈夫か?!」

「この敵は全員倒したし、高嶺君の為にも少し休んだ方がいいかな?」

ガツシユとカルマは清麿の身を案じる。それほどに彼の顔色が悪かったのだ。しかし清麿は立ち上がる。

「いや、ここで休んでいても俺の体調は戻らん」

「何を言う?!これ以上無茶してどうすると言うのだ?!」

「待った、ガツシユ君」

無理して体を動かそうとする清麿に対して、ガツシユは怒りの感情を見せる。しかしそんなガツシユを、カルマが何かを察した様に落ち着かせた。

「この敵は全員倒したし、少しくらい休んでも良いと思うけど……それとも何か考えがあるのか?」

カルマは、清麿が考えも無しに無茶をするとは思えない。彼は清麿の事を信用している。

「そうだ、どうしてもここでやらなきやいかん事がある」

「へえ?」

「それは一体何なのだ？」

清磨はこのまま無理に進もうとは考えていない。この場で一番にやるべき事を彼は行おうとする。

「ガツシユ、赤羽。毒を操る殺し屋が向こうで倒れている。そいつをここに連れてきてくれないか？」

「ウヌ？」

「……ああ、そういう事ね」

清磨のやりたい事がガツシユには分からなかつたが、カルマにはすぐ理解する。そしてガツシユとカルマは、ザケルで気絶しているスモッグを清磨の元に連れて来た。

「悪いな、さて……」

「まずはこの人を起こさないかね」

「どうすれば良いのだ？」

スモッグを連れて来たが、彼は気を失ったままだ。

「えーとね……」

カルマは意地悪そうな笑みを浮かべながら袋を取り出す。その袋の中には奥田作製の悪戯の為の道具が入っている。その中から何を取り出そうかと悩んでいる途中に、スモッグが意識を取り戻した。

「……お前等、この状況は……」

スモッグは意識を取り戻したが、まだ立ち上がれる状態では無い。そんなスモッグを見て、清磨が起き上がった後に口を開いた。

「おい、アンタに聞かなきゃならん事がある……嘘を付いたら、また電撃を浴びせるぞ」「ぐっ……」

清磨がスモッグを睨みつけた。

スモッグに必要な事を聞き出した後、ガツシユペアとカルマは階段を上がり続ける。ちなみに清磨はカルマに肩を貸してもらいながら進んでいた。

「いやー、まさか今回のウイルスの正体がそんなだったとはねー」

「しかし、これで一安心なのだ！」

「……ああ、これで心置きなく鷹岡をぶっ飛ばせる！（本当は【アンサーカード答えを出す者】でウイルスの正体がかかっていたが、毒使いに直接口を割らせた方が皆にとつて信憑性がある。それにこの力はまだ安定していないから、あんまり言いたくない）」

清磨はこの力をあまり皆に知られたくなかった為、あえてスモッグに直接ウイルスの正体を吐かせたのだ。ウイルスの正体を知った2人は安心する。

「そう言えば赤羽……お前が俺達の所に来てくれたのは、殺せんせーの指示か？」

「そうだよ、付近の監視カメラは律が全部ハッキングしたから俺が助けに行く様子も見られないし。それに高嶺君達が敵を引き付けてくれてるお陰で、俺達は結構楽に進めた。だから殺せんせーが俺に2人の助太刀に向かわせたんだよね」

「律、すごいのだ……」

律のスペックと殺せんせーの判断により、清麿が感染した状況でも彼等は無事に困難を乗り越えられた。E組はこのようにお互いを助け合い、今後もいかなる困難を乗り越えていくだろう。

そして3人は6階のテラスに着いた。そこはパーティが行われており、多くの客が楽しんでいる。

「ん、あそこの扉を抜きたいんだけど、警備の人がいるね」

「清麿、どうするのだ？」

「他の客が大勢いる所で騒ぎは起こしたくない。俺が感染しているから逃げ出すのも困難。どうしたものか……」

ザケルで警備員を倒す事自体は容易だ。しかし、人が大勢いる所でそんな事をすれば

注目の的だ。他の警備員や刺客がここに来る可能性もある。迅速に仲間の元に辿り着くためには、目立たないように警備員の目を騙して扉の先に進む必要がある。

「あれ、君達が渚ちゃんを知り合い？」

1人の帽子をかぶった中学生くらいの少年が、3人に話しかけてきた。

「……お前は誰だ？」

「俺、ユウジって言うんだ。実はね……」

E組の女子達がこのエリアを下見する時に、渚も女装させられて下見に参加していた。その際にユウジが渚に声をかけてきた。そして紆余曲折を経て2人は仲良くなり、渚はユウジにカルマとガツシユペアの特徴を伝えた上で、彼等が楽にこのエリアを通れるように手引きする事をお願いしてくれたのだ。

「ウヌ？渚はおと……」

「ガツシユ君、ストップ（……そういう事ね）」

ユウジは渚を女の子だと思ひ込んでいる。しかし、それが功を奏して彼も協力してくれる事になった。ガツシユが本当の事を言いそうになったが、カルマがそれを止める。

「いや、渚ちゃん可愛かったな」

「……そうだな」

渚が男だと知っている清磨は、ユウジに哀れみの視線を送りながら話を合わせる。

「うんーあの娘のお陰で俺、麻薬を辞めようと思えたんだ」

「（麻薬って……まあ、これから辞めるなら何も言うまい）……それは良かったな」

ユウジは親の権力や財産を使って無理に格好つけていたのだが、渚の女装はそんなユウジが変わるきっかけとなった。それが分かった清麿は、ユウジに対して先程のような哀れみの視線は送らないようにする。

「あと、君かなり体調悪そうだけど、大丈夫なの？」

「ああ、問題ない……心配かけて悪いな」

ユウジは清麿の体調が心配だった。誰の目から見ても清麿は顔色が悪く、尋常ではない程の汗をかいている。しかし清麿達はここで立ち止まる訳にはいかない。

「いや、渚ちゃんやさんの友達だから心配になるよ……じゃあ、ここからは俺に任せて！あの警備員を何とかすれば良いんだよね？」

「……頼んだぞー！」

ユウジはそう言うと、警備員の方へ向かい、何か話しかけた。そして警備員はユウジのみに注意が行き、ガツシユペアとカルマは容易に扉の先に進めた。これは渚がユウジを変えるきっかけを作ってくれたから起きた事である。無意識にここでもE組は助け合いを行っていた。

扉の先にも階段が続いており、3人は進む。

「あのユウジと言う者には、お礼を言わなくてはならないのだ」

「……そうだな、アイツのお陰で楽にここを突破出来た」

ガツシユペアはユウジに感謝の気持ちを持つ。彼のお陰でスムーズに6階を抜け出したのだから。しかし彼等の感謝の気持ちなど気にも留めず、カルマは意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「おい……赤羽、どうしたんだ？」

「……いやあ、この写真見てよ。律が撮ってくれてたんだ」

カルマは渚の女装姿の写真をガツシユペアに見せびらかす。その時の渚はかなり恥ずかしそうにしている。知らない人が見れば、本当の女子にしか思えないだろう。

「渚、大変だったな……」

「……確かにこうして見ると、渚が女の子に見えるような気がするのだ」

「さて、これで渚君を弄る楽しみがまた増えたよ」

カルマの頭は渚をどうやって弄るかでいっぱいになりつつある。これにはガツシユペアも、内心渚に同情する。

「渚さんの恰好が余りにも似合っていた為、僭越ながら撮影させていただきました！」

「ナイスだよ、律」

「……つたく」

カルマが意地の悪い表情を浮かべる。また律の悪気の無い笑顔に、清麿は何とも言えない気持ちになった。そんな緊張間の欠片の無い会話をしながら、彼等は最上階を目指す。

その頃他のE組一同は最後の殺し屋「ガストロ」を銃撃戦の末に戦闘不能にし、ついに鷹岡と屋上のヘリポートで対面していた。

「計画ではな、茅野って言ったっけ？ そいつを使う予定だった。部屋のバスタブには対先生弾がたっぷり入っている。そこに賞金首を抱いてもらい、セメントで生き埋めにする。対先生弾に触れずに元に戻るには、生徒ごと爆裂しなきゃいけない。だが、生徒思いの先生はそんな事出来ないから、大人しく溶かされてくれると思ったのだが」

鷹岡の口から明かさされる非人道的な計画。まさに悪魔の所業である。それを聞いたE組一同の顔は青ざめた。

「だがお前等は全員で乗り込んできた。だからお前等の中の1人だけ残して皆殺しにする計画にシフトチェンジしたが、殺し屋共は全滅。それでも俺には治療薬があるし、茅

野を生き埋めにする計画も使える。お前等の命は俺の手の平の上さ」

「……許されると思いますか？そんな真似が」

鷹岡の正気の沙汰では無い言動に、殺せんせーが怒りを見せる。それでも鷹岡は、自分が正しいと思ひ込んでいた。

「これでも人道的な方さ。お前等が俺にした非人道的な仕打ちに比べればな！」

渚に負けてE組を追い出された鷹岡の上からの評価は大きく下がった。それから鷹岡は、防衛省からの屈辱の目と渚に負かされた時のナイフが頭から離れ無くなり、日々苛まれていたのだ。

「落とした評価は結果で返す。受けた屈辱はそれ以上の屈辱で返す。特に潮田渚、俺の未来を汚したお前は絶対に許さん!!」

鷹岡は渚を指差す。それは完全な逆恨みでしかなく、他の生徒達からは侮蔑の目を向けられた。

「そしてお前等が無様な目に合う光景を見た高嶺清磨ともう一人のチビは、自分の無力さに苛まれるだろうなあ。そんなあいつ等は、俺が自ら殺す」

鷹岡は渚を倒した様子をガッシュペアに見せようともしている。絶望に打ちひしがれる彼等を自分の手で殺す算段だ。

「さあ、潮田渚……このへりポートまで登ってこい!!」

「……はっ」

鷹岡は渚との決着の場を屋上から少し離れたヘリポートに選んだ。茅野を初め多くの生徒達が渚を止めようとするが、治療薬の爆破を防ぐために渚はヘリポートに行く決断をする。渚がヘリポートに登った後、鷹岡はヘリポートに掛かるハシゴを屋上から落とした。これで誰も援護には来れない。そこには2本のナイフが置いてあった。

「ナイフを使ったりターンマッチだ。だがその前に謝罪しろ、土下座だ。実力が無いから卑怯な手で奇襲した、それについて誠心誠意な」

理不尽ここに極まれり。鷹岡の主張は支離滅裂だ。しかし治療薬の為には言いなりになるしか無い。そう思つて渚が膝を付こうとしたその時、

「皆!!俺達には治療薬は必要ない!!だからもう、鷹岡の言いなりにはならなくて良いんだ!!」

ついに屋上にガツシユペアとカルマが辿り着いた。しかし清麿の言う事にE組一同は戸惑う。

「ああ!!テメエ何言って……」

「こいつを聞いて欲しい。律、準備できるか?」

「はい!」

清麿は鷹岡の言葉を遮り、律が録音したスモッグの話の流れを流す。話の内容はウイルスについてだ。生徒達に盛られた物は食中毒菌を改良したもので、残り3時間もすれば菌は無毒になるとの事だった。

「高嶺君、それは本当なのか!!それより、君まで感染してたとは……」

「俺の事は心配いりません……それに毒物の事はスモッグと言う殺し屋から直接聞いたし、あの場面で奴が嘘を付くメリットも無い」

鳥間先生が形相を変えて問いたですが、清麿は冷静に答えた。清麿の話聞いたE組一同の目には希望が宿る。そんな清麿はカルマの肩に支えられながら、ガツシユと共にヘリポートに近付いた。

「……おい高嶺。その話、マジなんだよな？」

吉田に肩を借りながら、寺坂が念を押してきた。彼もまた感染者の1人だが発症が遅く、ホテルに乗り込んでしばらくするまで感染に気付かなかった。さらにクラス足を引つ張りたくない、発症後も無理をしていたのだ。

「そうだ……というか、鳥間先生だけでなく寺坂まで感染してたとは。大丈夫なのか？」
「バカが、お互い様だろうが」

寺坂が自分が感染してもなお人の事を心配した清麿に対して、呆れの表情を見せる。

「なんだと……ふざけんじゃねーぞ……」

鷹岡の体が震える。彼の目論見が全て崩れた瞬間だ。そんな鷹岡に対して、清麿・カルマ・寺坂がさらに追い打ちをかける。

「……諦めろ鷹岡、お前はもう何の価値も無いただのクズだ!!」

「大人しく投降したら？ 許して下さい」 って

「……土下座してくれたら、考えてやっても良いぜえ？」

カルマはいつもの事だが、発熱している清磨や寺坂でさえも鷹岡を煽る。そんな彼の言動に対して、鷹岡の怒りは頂点に達した。

「ふざけんなア!!もういい、テメー等はここで全員ぶつ殺してやる!!」
 「そんな事はさせないのだ!!」

鷹岡は懐から銃を取り出し、清磨達の方に銃口を向ける。清磨は【アンサートリーカー】で銃を鷹岡が隠し持っている事を見抜いて、鷹岡にそれを出させて、渚に向けてない為に挑発した。銃を見たガツシユがすぐにマントで防ごうとしたが、鷹岡には2発の銃弾が放たれる。それは鷹岡の持つ銃を弾き飛ばした。

「ぐっ、バカな……」

鷹岡は一瞬、何が起こったのか理解出来なかった。

「アンタ達、煽りすぎ」

「全く、見ててヒヤヒヤしたぞ」

本物の拳銃を持った速水と千葉が清磨達の前に出た。今の2人の表情は、殺せんせー暗殺直後に見せていた萎縮なそれとはまるで異なっている。

「何だお前等、随分吹っ切れた顔をしているじゃないか……」

「まあ、殺し屋との戦いで成果を上げられたからな。それに俺達には皆がいる」

「別に、落ち込んでなんかないし……」

千葉と速水の自信にあふれた顔を見て、清磨は安心した。彼等は殺せんせー暗殺失敗の事を特に気にしており、自分の苦悩を表に出さない性格だ。しかしガストロとの戦いで彼等には仲間がおり、プレッシャーを一人で感じる必要は無いと殺せんせーが教えてくれた結果、2人の銃撃は見事にガストロを戦闘不能にした。その経験を以って彼等は自信を取り戻した。

「速水、誰も落ち込んでいるとは言ってなかったと思うぞ」

「……うるさい、バカ」

「2人が元気になって良かったのだ！」

速水の言葉に千葉が突っ込む。確かに誰も速水が落ち込んでいるとは言ってなかった、彼女自身を除いて。速水は素直ではない一面があり、そのような弱みを見せたくなかった。しかしうっかりと自分の気持ちに口に出してしまい、顔を赤くする。そんな2人を見て、ガツシユも嬉しそうにした。

「おいお前等、調子に乗ってんじや……」

鷹岡は自分を無視して話を進める清磨達に物申そうとするが、後ろから感じた殺気に恐れをなす。

「鷹岡先生、油断しすぎじゃないですか？ 僕が後ろにいるのに」

渚はナイフを構えながら強烈な殺気を放つ。それも、精鋭軍人を怯ませる程に。それ

を見た寺坂が口元をニヤケさせながら、渚にスタンガンを投げ渡した。

「おい渚！いくらテメーでも、精鋭軍人相手にナイフ一本じゃ心許ないだろ。コイツでも使つとけ。せいぜい殺さねー程度に痛めつけてやれや」

「ありがとう、寺坂君！」

渚はそれを難なくキヤツチし、寺坂に礼を言った。

「待て君達、治療薬が必要ない以上渚君一人に戦わせる理由は……」

「……鳥間先生、あんな奴は渚一人で十分です。ガツシユが電撃を浴びせる必要すらない」

「そうだね、渚君何か隠してるっほいし」

「何だカルマ、サボってばっかのくせにそういうのはちゃんと把握してんだな……まあ、見てれば分かるぜ」

もう渚一人が鷹岡に挑む理由は無いので鳥間先生が止めさせようとしたが、清麿・カルマ・寺坂は渚の勝利を確信していた。

「清麿、本当に渚一人で大丈夫なのか？私は心配だぞ！」

「ガツシユ君の言う通りだよ！渚一人じゃ……」

「いや、心配はいらん。渚の顔を見てみな」

「おや、渚君が笑ってますねえ。なるほど、確かにこれなら大丈夫そうだ。ヌルフフフ」

ガツシユや茅野を初め、多くの生徒達は渚が心配だったが、それでも清麿の意志は揺るがない。渚は顔に笑みを浮かべて鷹岡に対峙する。そんな彼の表情を見て、殺せんせーもまた、渚の勝利を確信した。

「おい、お前舐めてんのか？何だその笑みは？何故俺に恐怖しない!!」
「皆が見てくれているから、安心できるんです。鷹岡先生には一生分からなと思いますけど」

渚はそのまま笑いながら鷹岡の方に近付く。そして渚は何とナイフを捨てた。捨てられたナイフに意識がいった鷹岡に対して、渚は猫だましを喰らわせる。不意を突かれた時のその威力は絶大で、のけぞり返った鷹岡にスタンガンの電撃を浴びせて、鷹岡を跪かせた。

「や、やめろ……」

「鷹岡先生、ありがとうございます」

必死の懇願にも聞く耳を持たず、渚はそのまま鷹岡の首に電流を流す。鷹岡の意識はそこで途絶えた。これがロヴロから渚に伝授された必殺技だった。

LEVEL 34 休息の時間

渚が鷹岡を倒した少し後に、E組一同は殺し屋3人及び玄宗と屋上にて対峙する。しかし彼等には戦う意志はなく、改めて今回使われた毒物についての説明がなされた。彼等はカタギの中学生を大量に殺した実行犯になるのを避けるために、命に別状のない毒物を使用したのだ。そしてスモッグは患者に飲ませるための栄養剤を渡してくれた。

「俺は殺しには興味ねーからコイツ等の好きにさせたんだが、お互いの命を懸けた戦いってのも悪くねーかもな！」

元から今回の一件にそれほど興味はなく、ただ強い者との戦いを求めていた玄宗だが、彼は今回の経験を経て命を懸ける事のスリルの味を占めた様子だ。

「まあ何だ、ガキ共！本気で殺して欲しかったら偉くなれ!!」

ガストロが生徒達を激励した後、殺し屋達と玄宗は防衛省のヘリコプターに乗って去って行った。彼等はしばらく拘束される。そしてホテルに潜入したE組一同は宿泊用のホテルに戻り、患者達に大丈夫な事を伝えて、それぞれが泥のように眠った。

次の日の朝、清麿は目覚めた。彼はガツシユと同じ部屋なのだが、ガツシユは見当たらない。

「ガツシユの奴、どこに行つたんだ？」

ひとまず清麿はジャージに着替えた後に朝の支度を終わらせて、朝食のバイキングに向かう。そしてそこには、ブリの料理ばかり食べているガツシユがいた。

「ほほ！ひひよはほ、ほひはほ!!（おお！清麿、起きたか?!）」

「こらガツシユ！口に物を入れて喋るんじゃない!……つたく」

ガツシユの口には大量の食べ物が入っており、何を言っているのかは聞き取れない。そんなガツシユを叱りつけた清麿が、彼の前の席に座る。

「ウヌ、ここのご飯は美味しいのだ！お腹が空いて目が覚めたのだが、皆寝てたからの。食べ物匂いに釣られてここまで来たら、烏間先生がここで朝ご飯を食べて良いと言ってくれたのだ！」

「烏間先生も起きてたのか」

「私よりも早起きだったのだ！何だか忙しそうだったの……」

「あれだけの戦いの後に早起きして、しかも仕事って……あの人は凄いな」

烏間先生は感染していたにも関わらずE組の誰よりも早起きして、今現在も仕事中有る。烏間先生の底知れぬスタミナに清麿は凄いと思う反面、呆れる気持ちもあった。

そんな時、ビッチ先生が彼等の近くを通りかかる。

「いや、今起きてるアンタ等も大概でしょ。他のガキ共は皆寝てるわよ?」

「ビッチ先生、おはようなのだ!」

「おはよう、先生も起きてたのか?」

確かに烏間先生の体力は人間離れしていると見えるが、感染していたのにも関わらず朝から動いているのは清磨も同じだ。そしてガツシユにいたつては昨日の疲れがほぼ残っていない。ビッチ先生の言う通り、ガツシユペアの体力もかなりの物だ。

「ま、私はただ普通にしていただけだからね。アンタ等程疲れぢやないわよ」

ビッチ先生は平気そうな顔でそう言うが、長時間複数の敵を惹きつける事は容易には出来ない。それを平然とやってのけて、かつ次の日に疲労が残っていない彼女もまた一流の仕事人である。

「で、アンタ達は今日どうするの?寝てる連中を起こすわけにはいかないでしょ」

「そうだな。朝食後はまず、烏間先生に挨拶に行こうと思う。それで何か手伝える事があれば手伝うし、無ければ術の特訓でもしようと考えてた」

「烏間先生、忙しそうだったからの」

「ちよつと真面目過ぎない?もつと楽しんでる良いと思うけどね。どうせ他のガキ共は皆寝てるんだし」

ビッチ先生は呆れた表情でガツシユペアを見て、その後ため息をついた。

「まあ好きにすると良いわ。さて、私はこの島の観光でもしてようかしらね。折角の離島なんだからアンタ達も少しは羽を伸ばしなさい、休息は大事よ」

そう言い残してビッチ先生は外に出て行く。こんな時まで暗殺や特訓の事を考えているガツシユペアに対しての、彼女なりの最大限の気遣いだ。

「……確かにビッチ先生の言う通りかもしれないな」

「まずは朝ご飯を食べようぞ！」

「相変わらずよく食うな（……そういやガツシユもウエルカムドリンク飲んでたんだよな。なのに発症しなかったのは、ガツシユが魔物で体が丈夫だからか？）」

清麿はそんな事を考えながら朝食を済ませる。ここでも魔物の丈夫さが発揮されていた。

朝食を食べ終わったガツシユペアは、鳥間先生が浜辺で何やら防衛省の人達に指揮していた様子を見かけた。

「鳥間先生、おはようございます」

「おはよう、高嶺君も起きてたとは。体は大丈夫なのか？」

「はい、今は何とも」

鳥間先生は清麿の事を心配してくれた。そして清麿は鳥間先生達の仕事の様子が気になったが、その答えが頭に浮かんだ。

「（この感覚、今でも【答えを出す者】が使えている！）……あの中に殺せんせーを閉じ込めるんですね」

「ああ、その通りだ」

「これで成功すれば良いがの……」

「例え殺せなくても、君達がここまで奴を追い込んでくれたんだ。我々大人が何もしい訳にはいかない」

この方法では恐らく成功しない。鳥間先生は薄々そう感じていた。そして清麿もまた【答えを出す者】でこの方法が失敗する答えを導き出したが、言い出せずにいた。それどころか今の殺せんせー相手にダメージを与える方法は、【答えを出す者】をもつても分からない。

「鳥間先生、私達にも何か手伝える事はあるかの？」

「いや、今回は我々に任せてくれ。恐らく他の生徒達も夕方くらいまで目を覚まさない。それまでは君達も自由時間だ、休息には丁度良からう……いや、君達の場合は特訓でもするつもりか？」

鳥間先生はガツシユペアに対して自由に過ごすよう言ってくれた。しかし、彼等が特訓をしようとしていた事はお見通しだ。

「ウヌ、どうして分かったのだ？」

「今の君達の目はやる気に満ち溢れているからな。昨日の疲れもあるだろうから、特訓の方は程々にな」

「……分かりました」

「行ってくるのだ!!」

こうしてガツシユペアは鳥間先生と別れた後に特訓が出来る場所を目指し、彼等の特訓は昼頃まで行われた。ちなみに今回のホテルでの戦いを経て、清麿は特訓中でもアンサー・トゥー・カー【答えを出す者】を自由に使えるようになっていた。

昼食時、離島のとあるレストランの近くを2人組の少女が訪れていた。

「私、お腹空いちやった。ここでお昼にしない？」

「……分かったわ。ここで食べましょうか、

「テイオ」

何と離島にはテイオペアも来ていた。そして彼女達は店に入り、空いた席に着く。

「今まで特訓続きだったから、こういうのも楽しいね！恵」

「そうね。デユフオーさんがたまには休むよう言ってくれたから思い切って遠くに来ちゃったけど、綺麗な所で良かった」

テイオペアは特訓に励んでいた最中に、デュフォーに休息をとるよう言われてこの離島に遊びに来たのだ。恵はアイドルの仕事でお金を稼いでいた為、遠くに出かけられる分の旅費は持ち合わせている。

「そう言えばガツシユ達も、学校で出かけているって言ってたわね」

「ふふ、実は同じ所に来てたりして……」

「まさかあ！」

彼女達はそんな他愛の無い会話をする。その後、2人組の少年が店に入ってきた。

「清麿、ここにブリの料理はあるかの？」

「さあ、どうだろうな？」

相変わらずブリを食べたがっているガツシユと共にどの席に座ろうか考えていた清麿だが、そこに見知った2人組の少女が座っているのを彼等は見かけた。

「おおつ、テイオ達ではないか!!」

「え、嘘!!ガツシユ達なの？」

「恵さん達まで来てたなんて！」

「あら、偶然ね！」

まさかの出会いにガツシユペアとテイオは驚きを隠せなかつたが、事前に予測していた恵だけは平常心だ。そして4人は相席することになる。

「何だかテイオと恵には、久し振りに会った気がするのだ！」

「久し振りつて、この前一緒に特訓したばかりじゃない」

夏休みに入ってからガツシユペアとテイオペアはデュフォー指導の下、共に特訓を行う日はあった。しかし昨日の離島での一日が非常に濃い物となり、テイオペアとの特訓が昔に感じてしまったガツシユだ。

「まさか、こんな所で会えるとは思わなかったよ」

「そうね、特訓以外でこうやって皆と話せるのはいつ以来かしら……」

確かにガツシユペアとテイオペアは、特訓の為に顔を合わせる機会が多い。しかし、それ以外で会う事は激減した。クリア打倒及び殺せんせーの暗殺の為、ガツシユペアはかなり多忙な日々を送っている。テイオペアもまた、日々の生活に余裕が無くなりつつある。

「こうやって清麿君達と話していると、やっぱり落ち着くわね」

恵は戦いが始まる以前から、アイドルとして忙しい毎日を過ごしていた。ガツシユペアや他の仲間たちとの談笑は、そんな彼女がリラックス出来る数少ない機会である。

「仕方ない事とは言え、最近は戦いの事ばかり考えてるからやっぱり疲れちゃう。でも、弱音を吐いてはいられない。恵、ガツシユ、清麿。絶対クリアに勝つわよ！」

「分かっているわ」

「ウヌ、その通りなのだ！」

「当然だ！」

クリアノート打倒の使命の重圧はかなり大きい。しかし魔界の滅亡を防ぐためにも、彼等はそれを乗り越えなくてはならない。そして打倒クリアの決意表明を終えた時、恵が別の話題を話し始めた。

「そうだ……私ね、少しの間実家に帰る事になったの。それで2人とも、その期間はテイオの事を頼めるかしら？ちよつとバタバタしそうだから、テイオは残った方が良くと思つて……」

恵は家の用事で帰省する事になっていた。その間テイオを清麿宅に泊めて欲しいとお願いだ。

「そうだったのか。お袋に聞いてみるよ！」

テイオは前にも一度、恵が仕事で一緒にいられない時に清麿宅に泊まった時がある。これまで清麿宅には多くの戦いの関係者が出入りしていたが、華は詮索をせずに快く皆を受け入れてくれた。

そして昼食を終えた一行は、離島の服屋を訪れた。そこにはいかにも夏っぽい服が多

く売られている。そんな服達を恵が試着する。

「清麿君、この服はどうか？」

初めに着たのは白のワンピースだ。肩が半分くらい見えておりスカートも膝が露出する程度には短めだったが、清楚な雰囲気が出ていた。

「うん。とても似合ってるよ、恵さん！」

「そう？良かった」

清麿に褒められて嬉しそうな表情を浮かべて顔を赤くした恵が、次の服の試着を始める。そんな2人の様子は、側から見ればデートに来たカップルにしか見えない。

その頃ガツシユとティオは別のエリアにいた。そこには帽子やサングラスなどが置いてある。

「じゃーん、どうガツシユ。この変装用の眼鏡良いでしょ！」

「おおつ、恵とお揃いではないか！」

恵は変装用に伊達メガネを身に付けて外に出る事が多い。そんな恵を見て、ティオも伊達メガネを付けたがっていた。そしてたまたま同じ物を彼女は見つけたのだ。

「ウヌ、ならば私はこれでどうかの？」

「きやはは、何それ〜」

ガツシユはティオの伊達メガネに対抗してサングラスを試着した。しかしガツシユとサングラスはミスマツチであり、ティオに笑われる。

「又オオオ、笑うでない……」

「だって、全然似合ってないんだもん！」

ガツシユもティオも、魔物である以前にまだまだ子供だ。戦いのとき以外は、こうして遊んでいる時がとても好きなのだ。このような時間のみ、戦いの重圧を忘れられる。時には休息を挟んでいかなければ、彼等の精神力はすぐに擦り減ってしまうだろう。そしてはしやいでいる2人の元に、清麿と恵が向かってきた。

「ガツシユ、ティオ。そろそろ他の所へ行こう！」

「ウヌ、分かったのだ！」

「ねえ恵、この眼鏡買ってよ〜」

「もう、仕方無いわね……」

ティオは先程の伊達メガネを恵に買ってもらえる事になった。そして恵も、先程の白のワンピースを購入した。

一行は離島での観光を楽しんだ後、浜辺で海を眺めていた。海は鮮やかなコバルトブルーで、見る者を魅了するのには十分な美しさだ。

「やっぱりこの海は綺麗なのだ！今から泳ごうぞ！」

「泳ぐつてもな、今は水着を持って無いぞ」

「私も持つて無いわよ、ガツシユ」

「部屋に置いて来ちゃったからね」

「ガツシユが海で泳ぎたがっていたが、残念ながら4人とも水着を持ち合わせていない。

「ならば、裸で泳げば良いではないか！」

ガツシユは皆の前で裸になる恥ずかしさが分かっていない。それを聞いたティオの顔はみるみる赤くなる。

「裸つて、アンタ何言つてんのよ!!」

「又オオオオオ、やめるのだー!!」

ティオは怒りの形相で思いつきガツシユの首を絞める。その際にガツシユの首が伸びてしまった。ガツシユは苦しそうで、今にも目が飛び出そうだ。

「ティオ、落ち着きなさい……」

「やれやれ……」

そんな光景を恵と清麿は呆れながら眺める。そしてガツシユは解放されたが、しばらくは首が伸びたままだった。

「今日は清麿君達に会えて良かったわ。とても楽しかった!」

「俺達もだよ、恵さん。またこうやって、皆で出掛けたいな」

彼等にとつて今日の観光は、とても良い思い出となった。この日常がいつまでも続けば良いと4人は考える。

「必ずクリアを倒して、皆で出掛けようぞ!そしてウマゴンやキャンチヨメ達ともまた遊びたいのだ!!」

「私もそうしたい!その為にも戦いを皆で勝ち残らなくっちゃ!」

今日のような日をまた過ごせるように、2人がクリアに勝つことを改めて宣言した。

「ああ、向こうに戻ったらまた特訓の日々だ!」

「帰省中でもやれる事はある。私も頑張るわ!」

清麿と恵もまた気合を入れ直す。そんな4人を見ている人影がある事に、彼等は気付いてなかった。

「高嶺君とガツシユ君だ。一緒にいる女の人達は……」

「うっ！あの人、中々の巨乳」

「はは、確かに。でも、どつかで見た事あるような」

「あと、あの赤い髪の女の子は魔物だったりして……」

その人影達は渚・茅野・カルマだ。彼等も残りの生徒達が目を覚ますまでの間、離島の観光をしていた。そして偶然にも、清麿達が浜辺にいる所を目撃したのだ。

「……と言うか、隠れる必要あるのかな？」

「いや、高嶺君とガツシユ君のダブルデートだからね。もう少し様子を見てたいかな」
「相変わらずだね……」

カルマはガツシユペアの決定的瞬間を撮影し、彼等をイジろうとしていた。そんな彼を渚は呆れ混じりの視線を向ける。

「あ、思い出した！あの女の人って、アイドルの『大海恵』だ！」

茅野が気付く。恵は国民的アイドル故に、正体がバレないように伊達メガネをかけて行動している。しかし彼女はそれでも正体を見破った。

その頃、相変わらず清麿達は海を眺めながら雑談をする。しかし、ガツシユの嗅覚が茂みに隠れている3人に気付いた。

「ウヌ、あの植物に隠れている者がおるのだ！」

「何だって!!」

ガツシユに気付かれてしまったので、渚達は苦笑いをしながらも素直に出てきた。

「……ガツシユ達の知り合いかしら？」

「清麿君と同じジャージ着てるし、そうだと思う」

「2人共、その通りだ。コイツ等は俺のクラスメイトだよ」

清麿は渚達に呆れ混じりの視線を送りながら、ティオペアに彼等を紹介した。

「と言うか、お前等何してんだ……」

「高嶺君がアイドルとデートしてるんだから、ついね」

「デートって……」

カルマが意地の悪い笑みを清麿に向けるが、清麿は顔を赤くしながら目を逸らす。それを聞いた恵の顔も、少し赤くなっていた。

「お前等、恵さん達だって困ってるだろうに……」

清麿にとつてはやや気まずい状況になったが、それを断ち切るように恵が口を開く。

「まあまあ、清麿君。皆も悪気がある訳じゃなさそうだし……」

「恵さんがそう言うなら……」

カルマ達に物申したかった清麿だったが、恵になだめられた。そして改めて渚達と

テイオペアはそれぞれ挨拶を交わした。

LEVEL. 35 下世話の時間

ガツシユペアがアイドルと面識があつた事に渚達は驚きを隠せない。しかし、そんな中でもカルマが堂々と口を開いた。

「ねえガツシユ君。ティオちゃんとはどんな関係なの？」

「おい赤羽、そういう事は……」

「!!」

このような発言を容赦なくできるカルマは流石だ。そんな彼の質問に対して清磨がたしなめようとする。しかしそれを聞いたティオが顔を赤くして、自分の頬に手の平を当ててる。

「え、ガツシユと私は……やだ、そういうんじゃない……えつと……」

「(この子、分かりやす!!)」

ティオはかなり恥ずかしそうにする。ガツシユへの好意を全く隠せていない。そんなティオを彼等は暖かい目で見守る、ただ一人を除いて。

「ウヌ！ティオは私の……大切な友達なのだ!!」

「(あ……)」

ガツシユはハッキリと言い切った。彼は恋愛感情を全く持ち合わせていなかった。ガツシユの答えは決して間違ではないのだが、テイオの受けたダメージは大きく、清磨達はテイオに哀れみの視線を送る。

「ムキーーーー!!」

「又オオオオオ!! ティオ、やめるのだー!!」

テイオは涙を流しながら、怒りを露わにしてガツシユの首を思い切り締める。ガツシユの首は再び伸びており、今にも目が飛び出そうになる。

「こらテイオ、手を放しなさい!」

恵がテイオをたしなめる様子を、清磨達は何とも言えない表情で見っていた。テイオの気持ちにガツシユは一切気付いていない。

(テイオちゃん、頑張れ……)

渚・茅野が心の中でテイオにエールを送る。彼女の恋路は先が思いやられる。そんな時、カルマが清磨に話しかけた。

「テイオちゃんて、可愛い見た目しながら怒ると怖いんだね」

「ああ、くれぐれもテイオを刺激する発言は控えるように」

テイオはかなり短気な一面がある。ガツシユの無自覚な言動は、これまで何度もテイオの逆鱗に触れた。それを見て来た清磨はカルマに忠告をする。

(ティオちゃんが高嶺君、どっちが怖いかな?)

「何か言ったか、赤羽?」

「いや、何でも」

カルマの小声にも清磨が気付きかけていた。清磨とティオ、両者共に怒ると大変な事になるが、果たしてどちらの方が怖いやら。

少しして一行は、清磨・恵・カルマと、ガツシユ・ティオ・渚・茅野の4人に分かれて喋っていた。

「しかし、高嶺君達がアイドルの大海恵さんと交流があつたなんてビックリだよ」

「カルマ君、恵で大丈夫よ。清磨君達とは色々あつて仲良くしてるのよ」

「なるほどね(まあ、十中八九魔物絡みだろうね。となると、やっぱりティオちゃんは魔物か)」

カルマはすぐに恵が魔界の王を決める戦いにティオと共に参加している事を見抜く。

「清磨君達ってクラスで夏休みに南の島に来るなんて、クラスの仲はかなり良いみたいね」

恵はE組の人間関係に興味がある様だ。しかし彼女は暗殺の事を知らない為、清磨と

カルマは迂闊な事を話せない。

「そうだな、クラス間の仲は良い方だと思う。ガツシユもE組の皆に良くして貰ってるし」

「結構楽しく過ごしてるよね」

「そうなんだ。清麿君からたまにクラスでの出来事を聞いてるけど、楽しそうよね」

清麿とカルマは絶妙に暗殺の事がバレないように、恵に対してE組の事を話す。クラスでの話題は彼女も興味津々だ。少しして、カルマは清麿の方を向く。

「高嶺君の人間関係どうなってるの？マジで……」

「一言でいえば、ガツシユのお陰だ」

ガツシユペアは魔物の戦いを経て、多くの人脈を築いてきた。そんなきつかけを作ってくれたのもガツシユであり、清麿はガツシユにはとても感謝している。彼等の広すぎる人脈にカルマは驚きを隠せない。

（で、高嶺君は大海さんとはどこまで行ったの？）

（バカ、恵さんとはそう言うのじゃない……）

（へえ、ホントかなあ？）

カルマは小声で清麿と恵の関係性を耳打ちで聞こうとする。しかし清麿はハッキリとは答えず、小声でぼかす。

一方でガツシユ達の会話では、茅野が恵のスタイル見て悔しがる。彼女のアンチ巨乳は健在だ。そんな茅野を見て、渚は苦笑いする。

「う〜！大海さんてアイドルだけあって、かなり巨乳だよ。はああ……」

「はは……（茅野は相変わらずだね）」

茅野は胸に大きなコンプレックスを持っている。そんな茅野の様子を見かねたティオが口を開いた。

「えつとカエデさん、少し落ち着こう？恵は国民的アイドルなんだから……」

「はっ、ごめんねティオちゃん。つい……」

ティオの言葉を聞いた茅野が落ち着きを取り戻す。そして、

「あと、私を呼ぶ時は『カエデ』で良いよ、ティオちゃん。これからもよろしくね！」

「分かった！よろしく、カエデ!!」

ティオと茅野が友達になった瞬間だ。茅野は誰とでも親しくなれる性格であり、ここでもすぐにティオと仲良くなれた。

「それから、渚さん……」

「僕の事も『渚』で良いよ、ティオちゃん！」

「うん！よろしく、渚!!」

「おおつ、テイオが2人と友達になったのだ!!」

茅野だけでなく、無事に渚ともテイオは友達になれた。渚もまた、親しみやすい性格だ。2人とテイオが友達になった事を、ガツシユが自分の事のように喜ぶ。そして茅野とガツシユが喋り始めた時、テイオの頭には疑問符が浮かんでいた。

「あれ？渚って今、自分の事を『僕』って……」

「どうしたの、テイオちゃん？」

渚は内心嫌な予感がした。

「だって渚って女の……あつ！」

「……僕は男だよ」

渚の予感的中した。テイオは渚を女の子だと思い込んでいたのだが、間違いに気付いてバツの悪そうな顔を見せる。

「ごめんなさい！」

「気にしなくて良いよ、よくある事だから……」

そう言いながらも渚は涙を流す。そして渚が泣き止んだ後も、2人は雑談を続けた。

「でも、テイオちゃんのプロテクト者が大海恵さんだなんて……」

「私、恵達に会えなかったらどうなってたか分からないわ」

ティオは恵との出会いを思い出す。マルスに裏切られて心を閉ざしていたティオは、恵やガツシユペアに会って前を向くことが出来たのだ。1人で人間界にいた時の事が頭に浮かび、ティオの顔が少し暗くなる。

「詳しい事は分からないけど、大変だったんだね。ティオちゃん、本当にお疲れ様」
「渚……ありがとう」

ティオが自分の過去を話すまでもなく、渚は彼女の苦勞を察した上で労いの言葉をかける。それがティオには嬉しかった。

こうして渚達はティオペアと交流を深めた後、それぞれの宿舎に戻るために別れた。そんな中、カルマは複雑な心境で渚の方を見る。そんなカルマの様子にガツシユが気付いた。

「カルマ、渚がどうかしたかの？」

「いや、何でもないよ（昨日の渚君は衝撃的だったな）」

「……そうであるか」

カルマは昨日の渚の猫だましを鮮明に覚えていた。ただし、カルマが渚をすごいと思っているのはその後だ。鷹岡相手に勝利を収めたのにも関わらず、渚は何事も無いか

のように皆の輪に溶け込んだ。その事が、カルマにとっては衝撃的だった。

そして一行が宿舎周辺の浜辺に戻ると、他の生徒達も目を覚まして集まっていた。熱を出していた生徒達の体調も完治している。浜辺では烏間先生指導の下、防衛省の人達がコンクリートで殺せんせーを閉じ込めようとする。

「あ、お前等も戻ってきたか」

「チクショー！今日は寝てばっかで、結局南の島でちゃんねーのナンパ出来なかったぜ！」

清麿達の方に岡島と前原が駆け寄る。

「皆、元氣そうで良かった」

「それ、お前は人の事言えないんじゃないのか？」

熱が下がって元氣になったクラスメイトを見て清麿は心底安心する。そんな彼に対して、前原を始めそこにいる生徒一同が訝し気な表情をする。清麿もまた感染していたのだから。

「魔物の戦いに参加すると、体が丈夫になるのかもしれないね」

昨日高熱を出しながら潜入していた清麿が朝から起きている様に対して、竹林が冗談

交じりにそう言った。

「お前等、観光してたんだよな。どこ行ってたんだ？」

「ああ、それはね……」

機貝の質問に清麿が答えようとしたが、カルマがそれを遮る。そして彼はガツシユペアがテイオペアと一緒にいた事を暴露した。

「「「ま、マジかよ!!」」」

E組一同愕然とする。クラスメイトがアイドルと仲良くしていたのだから。勿論清麿はそれについての質問攻めを受けるハメになる。そんな様子を渚・茅野・ガツシユは側から見ていた。

「皆、清麿が恵と友達だと聞いて驚いているのだ」

「はは、そうみたいだね……」

ガツシユは他人事のようにそう言ったが、テイオの事もクラスで話される。清麿と同様にガツシユもクラスメイト達に問いただされた。しかし彼はテイオの事を「友達」だと言い切った。その間にも殺せんせーが元の姿に戻り、その話を盗み聞きしていた。殺せんせーは下世話だ。

「ガツシユ君には早い話ですが、高嶺君が大海恵と仲が良いとは！色々調べる必要がありますねえ！ヌルフッフ」

「……元に戻って一言目がそれか？」

清麿の言葉には怒りの感情が込められている。彼は本を取り出す。そして何かを察するかのようには他の生徒達がその場から離れた。

「SET、ザケルガ!!」

「にゅやあ!!」

殺せんせーがニヤニヤ笑う様を見かねた清麿は呪文を唱えるが、ザケルガは避けられた。E組内にガツシユペアとティオペアと共に戦いに参加している事が認知された瞬間だ。

「君達は本当によく頑張りました……さて皆さん、今夜は暗殺肝試しとしゃれこみましようか」

「『暗殺、肝試し?』」

殺せんせーの提案にE組一同は戸惑う。

「先生がお化け役を務めます。久々に分身して動きますよお。もちろん先生は殺してもOK!!暗殺旅行の締めくくりにはピツタリでしょう」

こうしてE組一同は男女2人1組(ガツシユペアは1人換算)をくじ引きで決めて、決

まったペアで海底洞窟を抜ける事になった。しかし殺せんせーの狙いは、肝試しを通しての吊り橋効果でカップルを成立させる事である。

男女のペアが次々と入っていく中、残りはガツシユペアと矢田、竹林、村松、岡島のみとなった。

「ちくしよー、何で俺は女子とペアじゃないんだよー!!」

「うるせーな岡島、クジで決まったんだから仕方ねーだろー!早く行くぞ!!」

まずは岡島と村松のペアが洞窟へと入っていく。岡島は女子とペアになれなかった事を心底悔しがる。少し時間が経過した後、竹林が動き始めた。

「では、次は僕と律が行くよ。フフ、殺せんせーは何か企んでいるような気がしてならないけど、そんな事は僕と律には関係ないことさ」

「肝試しが楽しみですね、竹林さん!」

何とくじ引きの結果、竹林は律と組むことになったのだ。そんな2人をガツシユペアと矢田は見つめる。

「竹林君、律と一緒に嬉しそうだったね……」

「ああ、そうだな」

「竹林と律は仲良しだからの」

竹林と律が入って少し待った後、彼等も洞窟に入っていく。

洞窟の中はかなり暗く、いかにも幽霊が出てきそうな雰囲気だ。そんな中、ガツシユペアと矢田は前日のホテル潜入の話をしながら歩く。

「聞いたぞ矢田。ビツチ先生から借りたヤクザのバッジをちらつかせて、しつこい客をビビらせたそうじゃないか」

「ちよつと高嶺君、言い方……まあ、間違つてないんだけどね」

ホテルのテラスを抜ける時に女生徒達が質の悪い客に絡まれたが、矢田がヤクザの代紋を見せつける事で退けることに成功した。これもビツチ先生が矢田に仕込んだ技術の1つである。

「ビツチ先生から教わったのか？」

「うん。接待術も交渉術も、社会に出た時に最高の刃になりそうだからね」
「なるほどな」

矢田は将来の事をしつかりと見据える。そんな彼女を見て、清磨は感心する。

「ウヌ、桃花は凄いのだ!!」

「私、戦いは苦手だけどこういうのならやれそうって思ったんだよね。本当は争い自体無くなって欲しいんだけど……」

心優しくて血生臭い事が嫌いな矢田は、戦いを避ける為にピツチ先生から交渉術等を積極的に学んでいる。そして矢田はガツシユの方を見た後、彼を抱き上げた。

「だからガツシユ君。魔界で王様になったら、誰も争わないで良いような世界を作つてね！」

「もちろんなのだ!!」

矢田の話を聞いて、ガツシユは改めて優しい王様になる決意を固めた。ガツシユの目指す理想は、彼女にとっても嬉しい物である。

そして一行が進んでいると、一本のポツキーがぶら下がっていた。E組の男女にポツキーゲームをやらせる為に殺せんせーが準備した物だったが、肝心の先生が見当たらない。

「え、これって……」

「殺せんせー、何考えてんだか……ガツシユ、このポツキーはお前が食べていいぞ」

「清麿、桃花！ 本当に良いのか!!」

「大丈夫だよ、ガツシユ君」

殺せんせーの目論見に気付いた清麿と矢田はため息をつく。一方で何も知らないガツシユはポッキーを美味しそうに食べていた。

「ごちそうさまなのだ！次に進もうぞ！」

「……そうだな」

彼等が進んでいると、突然何かの気配を感じた。そして3人が振り向くと、唇を真つ赤にした女の顔が突如として現れた。

「きゃあああああア!!」

ガツシユと矢田は大声で悲鳴を上げて、顔を真つ青にしてお互いに抱き合った。清麿も叫び声は出さなかったが、目玉が飛び出そうな勢いで驚愕する。

「アンタ達、良いリアクションね。脅かし甲斐があるわ」

女が聞き覚えのある声で話し始める。その正体は、口紅を塗って顔を下からライトで照らした狭間だった。

「……って狭間か！お前が俺達を驚かしてどーすんだ!!」

「ビックリさせないでよ〜」

「フッフ」

清麿と矢田は狭間に気付いて落ち着きを取り戻したが、ガツシユはまだまだ震えてい
る。

「ガツシユ、大丈夫だ。コイツは狭間だ」

「ウヌ、本当に綺麗々であるか……」

ガツシユが清麿の言葉を聞いて、勇気を持つて狭間の方を見た。しかし狭間は再び自
分の顔の下からライトを当て、顔をニヤケさせる。

「又オオオオオ!!」

正体が狭間と分かっていながらもガツシユは恐怖に抗えず、そのまま泣きながら矢田に抱
き着いた。矢田は苦笑いをしながらガツシユの頭を撫でる。そんな時、もう一人の人影
が現れた。

「おい狭間、その辺にしといてやれよ」

「寺坂か！　そういやお前等はペアを組んでたな」

狭間とペアを組んでいた寺坂が、呆れ混じりの顔をして現れた。寺坂と狭間は、当初
は殺せんせーを狭間が脅してその隙に暗殺を行うつもりだったが、それには失敗した。
しかしその事で誰かを怖がらせる事の味を占めた狭間が、ここで後から来た生徒達を驚
かしていたのだった。

「ミス肝試し日本代表」の名は伊達じゃないわよ。言っても驚かせたのは村松と岡島の男2人組とアンタ達だけなんだけどね」

「この肝試しを一番楽しんでるのは、間違はなくコイツだろうよ」

狭間の顔は闇に紛れると非常に怖くなる。その事を変なあだ名をつけられてしまったようだが、彼女は特に気にしていない。

「村松と岡島って、その後には竹林と律が来たんじゃないのか？」

「あ、確かに。竹林君達とは会わなかったの？」

狭間の話を聞いて、何故か標的にされなかった竹林達の事を清磨と矢田は気にする。そして竹林の事に関しては、寺坂達が説明してくれた。

「あーその事なんだけどよ、竹林の奴、肝試しそちの気で律にずっと話しかけてやがった。何っーか、律に悩みを聞いてもらってるような感じだったな」

「そうね。何を話してたかは聞き取れなかったけど、あのペアを驚かす気にはなれなかったわ……」

寺坂と狭間は竹林の様子気がかりだった。それを聞いた清磨が少し表情を暗くする。

「竹林、何か抱え込んでなければ良いんだがな……」

「まったくあのメガネ、何かあるんだったら律だけじゃなくて俺等にも相談しろってんだ

!

「寺坂君、結構竹林君の事を気にかけてるよね！」

「そんなんじゃないよ」

寺坂は竹林が自分に相談してくれない事を不満に思っている。竹林は寺坂グループに属している訳ではないが、寺坂と一緒にいる頻度が高い。口には出さないが、竹林の事を心配している。そしてこの時は、竹林が2学期にあのような事になるとは誰も思わなかった。

「……ところでガツシユ、お前はいつまで怯えているんだ？」

「ウ、ウヌウ……」

竹林の話をしている最中、ずっと矢田から離れようとしめないガツシユに清麿が話しかける。そしてガツシユは矢田から降りようとしたが、狭間が再び怖い顔をしていた。

「いやああああ!!」

「もう、しょうがないなあ」

恐怖のあまり、ガツシユは矢田から離れる事が出来なかった。矢田は少し困り顔を見せながらガツシユの背中をさする。

「だから、やめてやれって……」

「ううつ、桃花」

相変わらずな狭間を寺坂がたしなめる。結局ガツシユは洞窟を出るまで、泣きながら矢田に抱き着いていた。そして他の生徒達と合流する際、彼女にくつつくガツシユを羨ましそうに見ていた男子生徒が何人かいたのは別の話だ。

生徒全員が洞窟を出た後、下世話な殺せんせーを生徒達が責め立てる。この肝試しを通してE組でカッブルを成立させようとしていた事を生徒一同、あまり良く思わなかった。一方で殺せんせーは泣き言を言いながら逆ギレをする。そんな時、ビッチ先生が烏間先生の腕に捕まりながら出て来た。

「くつつくだけ無駄だと言っただろ」

「うるさいわね!!美女がいたら優しくエスコートしなさいよ!!」

それを見た生徒達の表情が一変し、教師2人をくつつけようと各々が動き始めた。下世話なのは彼等も同じみたいだ。

E組一同あの手この手を使ったが、烏間先生の鈍感さ及びビッチ先生の意外なまでの奥手さ故に、あまり進歩は見られなかった。そんな事をしている間に、2泊三日の旅

は
終
わ
り
を
告
げ
る
。

LEVEL. 36 再会の時間

離島から戻ってきたガツシユペアとテイオは、再び打倒クリアの為の特訓に励む。ガツシユとテイオは裏山で体を鍛える特訓、清磨はデュフオーと共に自宅で【答えを出す者】を安定させる特訓をそれぞれ行う。

「離島から戻って以降、【答えを出す者】の力がかなり安定したな」

「ああ。殺せんせーの暗殺は失敗に終わったが、この力をほぼ自在に出現させられるようになった。先生の暗殺はクリアを倒す特訓にも繋がっている」

「だがトレーニングを継続しなければ、また力が封印されてしまう。特訓は続けていくぞ」

離島での一件を経て、清磨は自由に【答えを出す者】の力を引き出せるようになっていた。清磨とデュフオーが特訓を中断させていると、清磨の携帯電話に着信がかかる。

「！サンビームさんからか、もしもし」

『清磨、今大丈夫か？』

「ああ、大丈夫だけど」

『実はな、仕事の都合で急遽一週間程日本に帰る事になったんだ。ウマゴンも一緒だ』

「な、何だって!!」

サンビームからの電話の内容に清麿は驚く。何とアフリカからはるばる日本に来ると言う。清麿とサンビームの通話が終わると同時に、デュフォーが口を開いた。

「ウマゴン達が日本に戻ってくるのか。特訓の進捗状況を確認するのに丁度良いな」
「それもそうだな。ガツシユ達が帰ってきたらこの事を知らせないと!」

その日の夕方にガツシユとテイオが帰ってきたため、清麿は2人にウマゴンペアが帰って来る事を話した。

「清麿、本当にウマゴン達が帰って来るのだな!!」

「それは楽しみね!ウマゴン達、元気かなあ」

ガツシユもテイオも、彼等との再会をとても楽しみにしていた。

ウマゴンペアが日本に帰って来る日。ガツシユペアとテイオが空港までウマゴンペアを迎えに行く。そして久し振りに彼等の再会は果たされた。

「皆、迎えに来てくれたのか!」

「メルメルメー!!」

ウマゴンはガツシユとテイオの顔を舌で舐めながらじゃれつく。その一方でサンビームは久し振りに会えた清磨と握手を交わした。

「サンビームさん、久し振り……って前よりも少し髪が伸びてるような」

「ああ、仕事と特訓が忙しくてね。中々髪を切る機会が作れなかったんだ」

サンビームの髪は元々かなり短かったのだが、今は少し伸びている。一方で久し振りにウマゴンを見た清磨は、彼の体が以前より大きくなっているように感じた。

「何だか、ウマゴンが大きくなったように見えるが……」

「気付いたか。特訓でウマゴンの体も鍛えられたからな！グルービーだろう?」

「ははは……」

ウマゴンもまた日々の厳しい特訓を乗り越えており、着実に力をつけていた。ウマゴンはアフリカにて日々野生動物に追われる生活を行っており、着実に彼に眠る才能を伸ばし続けている。

そして一行は空港を出て清磨宅に向かう。ガツシユはウマゴンに乗せてもらう。ウマゴンとガツシユはとても仲が良い。日本にいる時は殆ど一緒の時間を過ごしていた。

「こうやってウマゴンに乗るのも久し振りなのだ！」

「メルメルメー！」

「私もウマゴンに乗ってみたいーい」

ガツシユがウマゴンと共にいる時は、彼の背中に乗っている事が多い。ガツシユはそれを懐かしがる。そんな様子を見たテイオが、自分もウマゴンに乗せてもらいたがる。

その一方で清磨とサンビームが話していた。

「そう言えば、テイオと恵は一緒にいないんだな」

「恵さんは実家に帰っているんだ。その間、テイオは家に泊っている。」

「なるほど、恵とは入れ違いになってしまったか。それは残念……ところで、清磨の特訓の方はどうなんだ？」

「そうだな……」

清磨とサンビームはお互いの特訓の進捗状況について話す。完璧とまでは行かないが、共に成長を続けている。また各々で励まし合い、士気を高める事が出来た。

そんな話をしながら一行は清磨宅に着くと、デュフォーが外で待機していた。

「デュフオーも久し振りだな。清麿達の特訓は順調に進んでいるそうじゃないか」

サンビームは清麿宅に向かう途中、清麿から特訓の進捗状況を聞いた。そして清麿が、【アンサー「答えを出す者」カード】を使いこなせている事が分かり感心する。

「そうだな。さて、少し休んだらウマゴンの新術を見せてくれないか？」

「おっと、そこまでお見通しだったか。【アンサー「答えを出す者」カード】は凄いな」

デュフオーはウマゴンが新しい術を会得した事に気付いた。そして一行はサンビームが清麿宅に荷物を置いて少しした後、ウマゴンの術を見るために裏山を目指す。

「行くぞ、ウマゴン!!」

「メルメルメー!!」

裏山に辿り着いた後、サンビームが新たな術を唱えた。新術を見たガツシユとティオは驚きの表情を見せる。

「ウマゴンがこんな術を覚えていたなんて」

「凄い術なのだ。これなら……」

しかし、【アンサー「答えを出す者」カード】でその術を見ていた清麿とデュフオーは苦虫を噛み潰したような顔をする。

「凄い術だが、代償が大きすぎる」

「そうだな。ウマゴンの体が新術に耐えきれしていない」

その術の威力は確かに絶大だが、ウマゴンにかかる負担がとても大きい。また、今の術の完成度では実戦では使えないと言う答えをデュフォーが出した。

「メ、メルう……」

「ウマゴン、大丈夫か？」

術の反動で、ウマゴンの体力がかなり消耗している。恵がいればサイフォジオが使えたが、今はそれが出来ない。ウマゴンは疲労のあまり、そのまま眠りについてしまった。そしてウマゴン以外のメンバーで、今日の特訓が開始される。サンビームは横になるウマゴンの隣で、心の力を高める特訓を行う。

特訓を終えた一行は山を降りる。しかしウマゴンは、術を出した後直ぐに動けなくなってしまうた事を気にしている。彼は涙を流した。

「メ、メルメル……」

「ウマゴン、落ち込むでない！」

「そうよ、これから頑張っていけばいいじゃない」

元気を無くしていたウマゴンを、ガツシユとテイオが慰める。そんな時、サンビームが口を開いた。

「そうだな、ウマゴン。まだ実戦まで時間はある……ところで、私は日本にいる間は会社が手配してくれたホテルに泊まる事になる。そこではウマゴンは一緒にはいられない。私がアフリカに戻るまでの間、ウマゴンを清磨の家に泊めてやってくれないか？」

ペットも一緒に泊れるホテルは多くない。サンビームが泊まるホテルも、残念ながらペットを同伴させる事が出来ず、ウマゴンと共に過ごす事は叶わなかった。

「もちろん、お袋にも言っとくよー！」

「テイオだけでなくウマゴンまで来てくれるとは、楽しくなるのだー！」

「また賑やかになるわねー！」

「メルメルメー！」

ガツシユペアとテイオはウマゴンを歓迎する。ウマゴンも再びガツシユ達と一緒にいる事が出来て、嬉しそうにした。

「良かった。ウマゴンの事をお願いするからには、華さんにも挨拶をしておかないと。だが……」

サンビームはウマゴンが清磨宅で過ごせる事に関しては喜ぶが、すぐに不安気な表情を浮かべた。

「確かにアフリカでの特訓と同じ事は出来ない。だが、日本でも出来る事はある」

デュフォーが口を開く。サンビームが仕事で日本に来たことにより、アフリカでの特訓が出来なくなる事を気にする様子を察した。

「ウマゴンと離れている間、心の力を高めるトレーニングに専念すれば良い。そしてウマゴンには、ガツシュやテイオと共に体を鍛える特訓をしてみよう」

デュフォーは即座にウマゴンペアの特訓の方法を考え出す。そしてこれは、デュフォーなりのサンビームへの気遣いでもあった。

「そうだな。どんな状況でもやれる事はある。ウマゴン、ガツシュやテイオと共に頑張るんだぞー!」

「メルメルメー!!」

デュフォーからの特訓内容を聞いたウマゴンペアは気合を入れ直す。どのような状況でもやれる事はあるのだから。

そして一行は清麿宅に着いた。

「ただいまなのだー!!」

「あら皆、お帰りなさい」

ガツシユの声を聞いて、華が玄関まで来てくれた。華がサンビームの顔を見ると、何かを察したように口を開く。

「サンビームさん、またウマゴンを家で預かるって事でいいのかしら？」

「はい、よろしくお願ひします」

「ウマゴンは、責任を持って預かるわ」

「ありがとうございます！」

正式にウマゴンは高嶺宅で預かれる事になった。しかしウマゴンの過ごしていた小屋は、ウマゴンの体が大きくなっていた為に窮屈だった。よって清麿が作り直す事になる。そしてサンビームは新たな小屋の制作を手伝った後に、そのまま自分の宿舎を目指した。

次の日、魔物組は体を鍛える特訓の為（テイオは心を鍛える特訓も行う）に裏山に向かった。その一方で清麿はデュフォーと共に心の力を高める特訓及び【アンサー答えを出す者】を安定させる特訓を行う。その最中、清麿の携帯電話に着信がかかってきた。

「しまった、マナーモードにし忘れていた」

「電話に出ていいぞ」

「済まん、話してくる」

清磨は廊下に出て電話した。相手はナゾナゾ博士だ。

『清磨君、急で悪いが直接会って話がしたいんだ。構わないかね?』

「随分急だな。ちよつと待っていてくれ」

『済まない、大事な話なんだ。場所は……』

ナゾナゾ博士が今いる場所を教えてください、通話は終了した。そして清磨はデュフォーのいる場所に戻る。

「外に出るのか。中々大事な用件みたいじゃないか」

「(また【^{アンサー}トーカー】^{トーカー}を出す者】を使ったのか) そうなんだ、ナゾナゾ博士が直接会って話したいんだと」

「それなら、行ってくるがいい」

事情を察したデュフォーはすぐに承諾する。そして清磨は特訓を中断し、ナゾナゾ博士の指定した場所へ向かった。

指定した場所とはあるホテルの一室だったが、サンビームが宿泊しているホテルとは別の場所だ。

「来てくれたね、清麿君。直接会うのはいつ以来だったか」
「確かに、電話でなら何度も話していたんだがな」

ナゾナゾ博士が出迎えてくれたが、いつになく真剣な表情だ。それ程に大事な話なのだと言察する。

「ガツシユ君は一緒じゃないんだね。まあ、後で彼にも伝えといてくれ」

「分かった、話つてのは……」

「いや、その前に一人清麿君に会ってほしい人物がいるんだ」

「それって一体……」

清麿が本題に入ろうとしたがナゾナゾ博士がそれを遮る。そしてノックと共に、一人の青年が入ってきた。

「久しぶりだね、清麿」

「な……」

アポロじゃないか！まさか、このホテルはアポロの財閥の一角だったりして……」

何とそこにはアポロが入ってきた。彼は財閥の社長だ。かつてはテントウムシのよな姿をした魔物のロップスとペアを組んでいたが、ゼオンとの戦いに敗れてしまった。しかし彼は自分の財力を活かして、清麿達の戦いを何度もサポートしてくれた。そして今いるホテルもまた、アポロの財閥が経営している。

「その通りだ、ちなみに僕もナゾナゾ博士と同様に超生物の調査を行っている。僕の財閥にも、日本の防衛省と繋がりがある企業は結構あるからね」

「マジか、アポロも殺せんせーの事知ってたのか」

「私だけで国家機密を探るのは容易では無いからね。アポロ君には助けられている」

ナゾナゾ博士が殺せんせーの存在を知った情報網もアポロ経由である。防衛省の情報まで仕入れる事が可能なほどに、アポロの財閥は規模が大きい。

「そうだったのか。そして、今回俺が呼ばれた理由ってのは？」

「そうだね。清麿、君は『死神』と呼ばれる殺し屋を知っているかい？」

「し、死神だと?! 何故その名が……」

『死神』はかつてロヴロが名前を出していた最強の殺し屋の名前だ。その名前が、何故かアポロの口から語られた。

「名前は知っておるようだな、清麿君。話は死神についてなのだが、ついに彼が超生物暗殺の為に動き出したんだよ」

「何だって?!」

清麿は驚きを隠せない。ついに殺せんせー暗殺の為に、最強の殺し屋が動き出したのだから。

「だが、話はそれだけに収まらない。何でも、超生物暗殺の為に動いていた凄腕の殺し屋が何人も何者かに襲撃を受けているようなんだ」

「それって、まさか……」

「そう、死神は自分が超生物を殺す為に同業者から潰していると私は考えている」

清麿の顔から血の気が引く。死神は殺せんせーの暗殺を自ら成す為に、他の殺し屋を

襲撃しているかもしれないのだから。それはつまり、E組が死神の標的になる可能性を示唆していた。

「そんな事が、一体どうすれば……」

「今は情報が少ないからね、僕等も死神については調べている所なんだ。清磨達も気を付けてくれ」

アポロとナゾナゾ博士は今、死神についての調査を行っているという。それを聞いた清磨は、更に別の可能性に気付いた。

「それなら、俺達に手を貸してくれたリイエンもヤバいんじゃないのか!!（それに、ロヴロさんも……）」

「そう、だからリイエン君にはしばらく故郷で大人しくしてもらおうようにした。たまに連絡を取るが、被害は受けていない。また、襲撃された殺し屋達は全員死んではないと思うだ」

「そうか、それなら良かった」

リイエンとロヴロが無事である事を知り、清磨は一先ず安心した。

「あと清磨君、死神の事は不確定要素も多い。下手な混乱を防ぐためにも他のE組の者達には黙っていてくれないか?」

「ああ、俺もそれが良いと思っていた」

死神が動いている事は確かだが、確実な情報を得られていない。クラスメイト達に余計な不安を与えない為にも、清麿は死神の事を内密にするつもりだ。

「さて、2学期からの暗殺生活は過酷なものになるだろう。それに君は、魔物の戦いも残っている。自分達の身を守りながら、励んでくれたまえ」

「僕も応援している。協力できる事があれば何時でも言ってくれ。頑張れよ」

「2人とも、ありがとう。では俺は、特訓に戻る」

ナゾナゾ博士とアポロが清麿を激励してくれた。2人はパートナーの魔物が魔界へ帰った後も、清麿達に力を貸してくれている。激励を聞いた清麿は2人にお礼を言った後に特訓に戻る。

そして特訓が終わった後、清麿は家の前でガツシユに昼間の出来事を話した。

「清麿、ナゾナゾ博士とアポロに会っていたとは……」

「そうだ、2人は暗殺に関係する事を色々調べてくれてるからな」

「しかし、死神とやらの事が気になるのだ。皆が無事でいてくれればいいのだが」

ガツシユも死神の存在が気がかりだった。最強の殺し屋、死神。その殺し屋はE組にどのような影響を与えていくのか。ガツシユペアの暗殺教室は波乱に満ち溢れそうだ。

LEVEL. 37 動物園の時間

今日ガツシユペアは、渚の誘いでテイオ・ウマゴンと共に動物園に行くことになった。サンビームは仕事で忙しく、またデユフオーも了承してくれたので、彼等はE組の生徒達と共に出かけの事にしたのだ。E組からは、渚・茅野・杉野・倉橋が参加する。そして全員が合流した後、杉野・倉橋とテイオは初対面になるので、まずはテイオが挨拶を済ませた。その後、ガツシユがウマゴンを皆に紹介する。

「さあウマゴン、皆に挨拶するのだ！」

「メルメル、メルメル、メルメルメル!!」

ウマゴンが渚・茅野・杉野・倉橋の順にそれぞれ抱き着いて、彼等の顔を舌で舐める。そしてウマゴンは特に倉橋に懐いている様子だ。

「きやはは！くすぐつたいよ、ウマゴンちゃん！」

「メルメルメル！」

「陽菜乃が凄く懐かれているのだ！」

倉橋は生き物に対して深い愛情を持っている。ウマゴンがそれを感じ取ったのかもしれない。生き物の扱いに関しては、E組において彼女の右に出る者はいない。

「流石だな、倉橋。いくらウマゴンが人懐っこいとは言え、ここまで気に入られるとは」
「エヘヘ、生き物の事なら任せてよ〜」

倉橋のウマゴンの扱いに清磨も感心する。

「でも、ウマゴンが倉橋さんから離れないから先に進めないね……」
「ウマゴン、いつまでも陽菜乃にくっついていていいでない……」

渚の言う通り、一行は動物園に入れないでいた。そしてガツシユは、ウマゴンが倉橋にばかり構う事に関して少し嫉妬する。

ウマゴンがようやく気が済んだようで、倉橋から離れてくれた。そして一行は動物園の中に入り、ウマゴンはガツシユを背中に乗せる。

「メルメル、メルメルメ〜！」

「ウヌ、今日は皆で楽しもうぞ！」

「恵がないのは残念だけど、いっぱい遊びましょ〜！」

動物園に来て楽しそうにしているガツシユとウマゴンと同様に、テイオもまた満足気な表情でガツシユ達の隣を並んで歩く。そんな彼等を清磨達は後ろを歩いて見ていた。

「ガツシユちゃん達、皆仲良しなんだね〜」

ガツシユ・ティオ・ウマゴンが仲良さそうにしている様子を倉橋は微笑ましく思う。「そうだな。特にガツシユとウマゴンはこっちに来る前から仲が良かったと言つてたぞ」

ガツシユとウマゴンは魔界時代から仲が良く、魔物の戦いが始まってからもウマゴンはガツシユとはずっと親しい。ティオもまたガツシユとは交流があつた様子で、人間界で出会つてからは厳しい戦いを乗り越えながら、より絆を深めた。

「でも、ガツシユ君がティオちゃんの思いに気付く日は来るのかな？」

「うーん、どうだろうね？」

「ガツシユはそう言うのにぶいからなく」

お互いの交流を深めていくうちに、ティオのガツシユに対する好意は日に日に明確になつていく。しかしガツシユはそれに気付く気配は無い。そんなティオを茅野・渚・杉野は心配する。

その一方でガツシユ達はレッサーパンダの檻に来たが、レッサーパンダは高い木の上におり、彼等は直接見る事が出来ない。

「ウヌ、あれでは見れないのだ……」

「メルメルウ」

「……困ったわね」

彼等が困っている様子は清麿達からも見て取れた。そしてレッサーパンダを見れずに落ち込んでいる3人を見かねて、清麿が彼等の方に駆け寄った。

「皆、どうしたんだ？」

「清麿、あの子が見れないよ」

事情を聞いてきた清麿に対して、ティオは甘えるような目つきで彼に助けを求め。そして清麿は少し考えた後に、彼女を肩車に乗せる事にした。

「ティオ、これで見えるか？」

「うん、ありがとう！あ、あの子がこっち見てくれた！おーい」

清麿のお陰でティオが高い所も見れるようになった。レッサーパンダと視線が合ったティオは手を振って喜ぶ。

「ウヌ、私も見たいのだ！」

「メルメルメ〜！」

そんな2人を見たガツシユとウマゴンは羨ましが。そんな彼等を見た清麿は笑みを浮かべながら口を開いた。

「分かっている、お前等にもしてやるよ」

そして清磨はティオだけでなく、ガツシユとウマゴンにも交互に肩車をして、彼等が木の上の動物を見れるようにしてくれた。そんな様子を少し離れた場所で渚達が微笑ましく見ている。

「高嶺君、完全に彼等の保護者だよな」

「そうだね、私達も行こっか!」

そして渚達も清磨達の方に合流したが、ティオがすぐにアライグマのいるエリアを指差した。

「今度はこっちに行ってみたい!」

「待つのだ、ティオ!」

「メルメル!」

そう言うと、ティオ・ガツシユ・ウマゴンはそのまま走って行ってしまった。彼等はたくさんの動物を見る事が出来て、とても嬉しそうだ。

「そんなに慌てなくても……」

少し呆れ気味の清磨を始め、一行は完全に元気いっぱいな魔物達に振り回される。

そして昼時になり、一行はビニールシートを広げてそれぞれ食事を取る。

「……高嶺の弁当、スゲー気合入ってんな！」

「ああ、皆で動物園に行くって話をしたら、お袋とテイオが朝早くから作ってくれたんだ。テイオ、本当にお疲れ様」

「華さんが色々教えてくれたお陰で、上手く作れたわ」

清麿が出した大きな重箱に、杉野が感心した。テイオの料理の腕はそれほど上手ではないが、華の監修の下、見事なお弁当が作られていた。

「メルメルメ〜！」

「テイオ、ありがとうなのだ！」

弁当を見たウマゴンとガツシユも、嬉しそうな顔をする。そしてガツシユの感謝の言葉聞いたテイオは、顔を赤くした。彼女は照れている。

「べ、別にガツシユの為だけに作った訳じゃないし……」

（（何という分かりやすいツンデレ！））

テイオの分かりやすい様に渚達がツツコミを入れる。テイオは特にガツシユに食べて貰う為に張り切って弁当を作っていたが、ガツシユはそれを知る由もない。一行がそれぞれ昼食を食べ始めて少ししてから、渚が口を開いた。

「テイオちゃん、お弁当のおかずを少し貰っていい？」

「もちろんよ、渚！」

渚がティオからおかずを貰っており、とても美味しそうに食べた。

「ウヌ、皆で食べるお弁当は格別なのだ!!」

「そうだよね、ガツシユ君!」

ガツシユや茅野の言う通り、皆での食事はとても楽しい。そんな中でティオは、自分も作るのを手伝ったお弁当をガツシユが楽しそうに食べる様子を見て、嬉しそうな表情を見せた。一行は会話を弾ませながら昼食の時間を過ごす。

ある程度食べ進んだ後、倉橋が動物園で買った干し草をウマゴンに差し出した。

「はい、ウマゴンちゃんにあげるね!」

「メ、メルメルメ〜!」

干し草を差し出されたウマゴンが目を輝かせており、再び倉橋に懐く。それを見た清麿は、少し申し訳なさそうにした。

「倉橋、ウマゴンの為に済まない!」

「気にしなくて良いよ、私もウマゴンちゃんに喜んで欲しかったし!」

物で釣る訳でも無く、素直にウマゴンを思って倉橋は干し草を買ってあげたのだ。倉橋の生き物に対する愛情はウマゴンに対しても注がれている。そして彼女はウマゴン

を抱きかかえた。

「ウマゴンちゃんて馬らしく干し草は好きなのに、ニンジン嫌いなんだよね」
「ウマゴンの言う言葉が分かるのか？」

倉橋はウマゴンの食べ物の好みを把握していた。それは彼女がウマゴンの言いたい事を理解出来るからに他ならない。

「完璧に理解できる訳じゃないけどね。ただ、言いたい事は大体分かるよ」

「メルメル、メルメルう……」

「あれ、今度は眠たくなってきちゃったかな？」

倉橋の言う通り、先程まで元気そうにしていたウマゴンが眠り始めた。彼女はウマゴンの気持ちをほとんど理解出来ている。

「ウヌう、ウマゴンが寝てしまったのだ」

「そうみたいね（ウマゴン、昨日の特訓で張り切ってたから疲れちゃったのかな？）」

ウマゴンはサンビームが仕事している時も、新術に耐えられる体づくりの為の特訓に對して一生懸命に励んでいた。ガツシユとテイオはそれが分かっている。

「俺はウマゴンが起きるまでここで休んでいる。皆はどうする？」

「僕も残るよ。食休みがしたかったし」

「私もそれで良いよ」

清麿はウマゴンが起きるのを待つ事を決める。しかし渚と茅野を始め、他の皆もそれに付き合ってくれる事になり、一行はこの場で休憩することにした。

しばらくしてウマゴンは目を覚ましたので、彼等は休憩を終わらせて園内の昆虫館に辿り着いた。

「わー！あの青色の蝶、凄く綺麗!!」

テイオが蝶を見てはしゃぐ。それを見た渚がテイオに近付いた。

「これは『モルフオチヨウ』だね。アメリカ原産の蝶で、『世界で最も美しい蝶』とか『生きた宝石』とも呼ばれているんだ。青色の大きくて綺麗な翅が特徴なのは雄なんだよ」

「渚、詳しいのね!」

「動物園に来る前に、調べておいたんだ。でも倉橋さんの生き物の知識はさらに豊富だよ!」

ここでも渚は情報収集能力を活かしてテイオの興味を引く。そして彼等は蝶のいるエリアを周り始めた。渚とテイオが2人で歩いていたら、彼女が口を開く。

「そう言えば私、渚の事をあまり聞けてなかったな。渚の家族の事とか……」

「……確かに皆にもそう言う話はしてなかったね」

テイオの言葉を聞いた渚の顔が少し暗くなる。渚の表情を見たテイオは、何か聞いてはいけない事を聞いてしまったと感ずる。そして彼女は申し訳なさそうな顔を見せた。

「ごめん、あんまり聞かれたくなかった？」

「いやまあ、大丈夫だよテイオちゃん。それより、あの蝶も綺麗だね！」

気不味い雰囲気になる前に、渚は話題を変えた。テイオもそれを察して蝶の話を楽しむ。

一方、ガツシユはカマキリに興味を示していた。

「ウヌ、向こうにはカマキリがいるではないか！ “カマキリジョー” は正義の味方だからのー！」

カマキリジョー、子供達に大人気のヒーローである。ガツシユはそれを頭に浮かべて、カマキリのいるエリアに向けて走り出す。

「あつ、ガツシユ君。そんなに走ったら危ないよー！」

はしやぐガツシユを見かねた茅野が、彼の後について行く。また茅野のガツシユに構う癖が出てきた様子だった。

「メルメル、メルメルメ〜！」

「ウマゴンちゃん、私達も行こっか！」

ウマゴンはガツシユの方を見て、彼等のいる場所に行きたがる。それを察した倉橋は、ウマゴンを連れてカマキリのエリアに向かった。

「俺達もどっか周ろうぜ、高嶺！」

「そうだな、杉野」

そこには清磨と杉野が残っていたが、彼等も直ぐに昆虫を見学するために歩き始めた。

カマキリを見学しているガツシユは、目を輝かせながら茅野にカマキリジヨの話をする。彼は毎週TVで見えており、ウマゴンや水野と共にデパートのショーを見に行った事もある程のファンだ。

「カエデ、カマキリジヨはとても強い正義のヒーローなのだぞ!!どんな悪者でも、倒してしまおうのだ!!」

「そっか。それなら、ガツシユ君みたいだ！」

「ウ、ウヌ?!」

自分が大好きなヒーローみたいだと突然言われたガツシユは、少し驚いたのちにとても嬉しそうな顔をする。

「だってガツシユ君、優しい王様になる為に多くの悪い魔物達と戦って来たんだよね。それに修学旅行の時も私達の事を助けてくれたし、本校舎の生徒から前原君を庇つたりもしてくれた。それは正義のヒーローそのものだよ！」

今までのガツシユの言動に対して、茅野は彼をヒーローと重ねる。確かに今までの戦いでガツシユペアに助けられた人々や魔物は数多く存在する。また、そんな彼等に助けられたE組の生徒も多い。そして茅野はそのままガツシユを抱きかかえた。

「カエデ、どうしたのだ？」

「エへへ、こうした方がカマキリの事が良く見えるでしょ？高嶺君のようにには行かないけど」

「ウヌ、ありがとうなのだ！」

茅野の身長はかなり低いのが、ガツシユ程では無い。茅野のお陰でガツシユは、カマキリの見学がしやすくなり、とても嬉しそうな様子だ。

（弟や妹がいる時の姉って、こんな気持ちだったんだろうな。私にもいつも優しくしてくれたよね……）

お姉ちゃん！)

茅野は亡き姉の事を思い出す。茅野がガツシユを弟のように可愛がる理由も、自分も姉のようになりたい気持ちがあるからかもしれない。彼女の目からは涙が流れ出そうになっていたが、ガツシユはそれに気付かない。そして彼女が涙をこらえていた時、倉

橋とウマゴンが2人に追い付いた。

「お〜い、カエデちゃんとガツシユちゃん！」

「メルメルメ〜！」

倉橋は2人の名前を呼びながら、ウマゴンと共に走って行った。それを見たガツシユもウマゴン達に手を振る。茅野もすぐに何事もなかったかのような明るい表情を見せて、倉橋達の名前を呼んだ。

「あ、倉橋さんとウマゴン！」

「お主達もカマキリを見に来たのだな！」

合流した彼等は一緒にカマキリを見学する。また倉橋はカマキリに関する知識も豊富であり、それによってガツシユ達を感心させていた。

その頃、清磨と杉野はクワガタを見ていた。様々なクワガタが展示されており、杉野は目を輝かせながら清磨と会話する。

「高嶺、最近のクワガタってオオクワガタよりもミヤマクワガタの方が高く売れるらしいぜ！倉橋が言ってた」

「確か、オオクワガタの繁殖法が確立されたんだったか。そういやお前等、早朝から学校

の裏山で昆虫採集に行つてたんだよな」

「ああ、殺せんせーが白い目をしたミヤマクワガタを見つけてた」

杉野は渚・前原・倉橋と共に昆虫を取りに行つた事がある。そこに岡島が合流し、殺せんせーにエロ本を使った暗殺を仕掛けたが失敗に終わる。その時に殺せんせーが、アルビノで目が白くなったミヤマクワガタを発見した。

「そういう話は変わるけど、今戦おうとしている魔物つてスゲー強敵なんだろう？」

「そうだ、そしてその魔物は絶対に倒さなくてはならない！魔界を滅ぼさせない為に！」

杉野は魔物の話を持ち出す。テイオとウマゴンと会つた事で、杉野の魔物に対してこれまで以上に関心が高まっていた。

「頑張つてくれよーっても、俺には応援くらいしか出来る事はねーけど」

杉野は清麿達が厳しい状況に身を置いておいているにも関わらず、自身が何も出来ない事を歯痒く感じていた。

「いや、皆の応援は励みになる！」

「そうか、それは良かった。俺は魔物の事はよく知らないけど、今日テイオちゃんやウマゴンを見て思ったんだ。魔物つて、こんなにいる奴等がいるんだって。だから絶対に魔界を守つてくれよー！」

「当然だ！」

杉野は魔物達と交流を深めた事で、彼等の無事を改めて願うようになった。そして杉野の言葉を聞いた清磨は、改めてクリアを倒す決意を固める。

そして夕方になり一行は動物園を出たが、入り口の前に一台の車が止まっていた。そこには仕事を終えたサンビームが来てくれたのだ。

「サンビームさん、お待ちせー！」

「ハハ、問題ないさ」

サンビームは車で動物園に向かうと事前に清磨に連絡をしていた。仕事の時間はウマゴンの面倒を見れず、少しでもウマゴンの様子を見る時間を確保したいとの事である。

「今日一日、ウマゴンの面倒を見てくれた皆にお礼が言いたかったんだ」

「そんな、お礼だなんて」

「俺等も楽しく過ごせたし」

サンビームが車から降りると、ウマゴンは彼目掛けて走り出し、抱き着きながら舌で舐める。そしてわざわざ仕事終わりに来てくれたサンビームに対して、渚と杉野が少し

申し訳なさそうにする。

「私はウマゴンのパートナーのカフカ・サンビームだ。皆、今日は本当にありがとう。ウマゴンもとても喜んでいいる」

サンビームは渚達に自己紹介をした後、ウマゴンと遊んでくれた彼等に礼を言う。ウマゴンと仲良くしてくれた事を非常にありがたく思っているのだ。

「メルメル、メルメルメルう！」

サンビームの顔を舐めていたウマゴンだったが、今度は倉橋を見て手を振る。それを見たサンビームは、自分の顔をハンカチで拭いた後に、倉橋の方にウマゴンを抱えて向かう。

「君、随分ウマゴンが懐いているそうじゃないか。ウマゴンが別れるのを寂しいと言ってたよ」

「そう言ってくれると嬉しいですよ。ウマゴンちゃん、とても可愛いですよね！」

「そうだな。それから、君はウマゴンの言ってる事が分かるようだね！」

「はい、何となくですけど」

サンビームと倉橋との会話が弾む。お互いにウマゴンの言いたい事が分かる者同士、気が合う様子だ。

「あの、サンビームさん！」

「ん、何かな?」

「また、ウマゴンちゃんに会いに行っていていいですか?」

倉橋もまたウマゴンとの別れを惜んでいる。折角仲良くなれたのだから、一日で会えなくなるのは寂しい物だ。

「ああ、もちろんだ。まだ数日はこっちにいるから、都合が合えばウマゴンの事を可愛がってくれると嬉しい」

「はい、ありがとうございます!」

「メルメルメー!!!」

またウマゴンと会えるを知って、倉橋はとても嬉しそうな顔をする。ウマゴンもまた倉橋に手を振っており、彼女と再び会いたがっていた。

そしてウマゴンペアがアフリカへ戻るまでの日、倉橋は清麿達の特訓の時間をかいくぐって毎日ウマゴンに会いに来てくれた。特訓を終えて疲れた表情をしているウマゴンも、倉橋が干し草を持って来てくれると、嬉しそうな表情を見せた。

LEVEL. 38 夏祭りの時間

ウマゴンペアがアフリカに旅立った数日後には恵も戻ってきて、テイオは再び彼女に引き取られた。その日の夜、清麿はナゾナゾ博士と通話する。

「ナゾナゾ博士、何か分かったのか？」

『それが困った事に、死神に関する情報が全く入って来なくなっただよ』

「な、何だって……」

ナゾナゾ博士はアポロと共に引き続き死神についての調査を行うが、情報網が遮断されていた。

「なあ。これ以上嗅ぎまわるのは、博士やアポロにとってもヤバいんじゃないのか？」

清麿は彼等の身を案ずる。自分が調査されている事を死神が知れば、何をしでかして来るか分からない。

『何を言う、君達の命も危ないかもしれないんだ。我々が何もしない訳にはいくまい』

「……分かった、無理するなよ」

『了解した、ではお互いに気を付けよう。君達の健闘を祈る』

清麿と博士の通話は終了した。清麿は電話の内容をガツシュに伝えた後、そのまま眠

りについた。

夏休み最終日の夕方。特訓を終えたガツシユペアが家で一息ついていると、玄関のチャイムが鳴った。

「清麿とガツシユちゃん、今手を離せないから出てくれる？」

「分かった」のだ！」

ガツシユペアが扉を開けると、水野・山中・岩島の3人がそこに立っていた。そして水野は空色の浴衣を着ている。

「高嶺君とガツシユ君、櫛ヶ丘のお祭り行こーよ〜」

祭りの誘いだ。水野達にとっても夏休みは最終日で、皆で遊ぼうとの事である。モチノキ町からは少し離れてはいるが、彼等にとってはそんな事は関係ない。

「もちろん行くよな、お前等!?!」

「中学最後の夏休み最終日だからね、遊ばない手はない!」

山中と岩島も乗り気だ。水野に至っては浴衣を準備するほど楽しみにしている様子だった。

「ウヌ、行きたいのだ!!」

「それは構わんがお前等、課題は全部終わってるのか？」

「もちろん！」

中学3年生の夏休みは受験に大切な時期だが、時には遊ぶことも大事だ。水野達の勉強事情を心配しつつも、清磨も誘いを了承した。

「高嶺君が教えてくれたから、課題はバッチリだよー」

水野が自信ありげにそう言う。しかし清磨は、そんな水野達の後ろに変装しているとは言え、堂々と殺せんせーが立っている事が気がかりだった。ちなみにガツシユは山中・岩島と話していた為気付いていない。

「高嶺君、どうしたの？」

「いや、なんでもないぞ……（おい、国家機密がどういうつもりなんだー）」

（是非、お祭りに来て下さいね〜！ヌルフフ）

心の中でツツコミを入れた清磨をよそに、殺せんせーは夏祭りの誘いについて書いてある木の板を持っていた。殺せんせーはE組の生徒を片っ端から祭りに誘っている。そしてガツシユペアが祭りに来てくれる事を察した殺せんせーは、超スピードでその場を去る。

「よし、そうと決まれば早く行こーぜ!!」

「分かったのだ!!」

山中の言葉を皮切りに、彼等は柵ヶ丘の夏祭りを目指す。夏休み最終日の夜くらいは、暗殺も特訓も勉強も忘れて遊んでも罰は当たらない。

時は少し遡る。殺せんせーは生徒達以外にも、ロヴロをも夏祭りに誘っていた。

「……標的からの誘いは有難いが、あいにく今は別の仕事で日本国外だ」

『にゅやッ!!』

しかしロヴロは日本を離れており、祭りに参加する事が出来ない。そんな彼が歩いていると、突如目の前に男が立っていた。

(いつの間に!!俺に気配を気付かせずこの距離まで……この殺気で!!)

ロヴロは直ぐに男から離れたが、男はロヴロを指差す。

「生まれた時から、私はいつも君の隣に。畏れるなかれ、*“死神”*の名を」

その男、死神がそう言うと、ロヴロは血まみれになりながら地に伏した。

時は戻って、清麿達は夏祭りに来ていた。彼等は射撃の屋台の前で、2人組の男女が景品を大量に抱えている光景を見かける。

「見てー、射撃だよ……ってあの人達凄ーい！」

水野がその2人組を見て感心するが、彼等はガツシユペアとも馴染みのあるクラスメイトだった。

「清麿、あの者達は……」

「千葉と速水じゃないか！」

「……高嶺とガツシユか」

「アンタ達も射撃やりに来たの？」

千葉と速水も彼等に気付いたようで、2人はガツシユペアの方に駆け寄る。彼等は大量に景品を手に入れたのだが、どこか浮かない顔を見せる。

「お前等、相変わらずの射撃スキルだな……」

「そのおかげで出禁くらっちゃったがな」

「同じく、イージーすぎて調子に乗った……」

「ウヌ、そうであつたか」

彼等の射撃の技術を持つてすれば、止まっている景品に弾を当てるなど朝飯前だ。それ故に多くの景品は2人によつてかつさらわれてしまった。それを見かねた店員が千葉と速水を出禁にした様だ。

「お前等もやり過ぎない様気をつけろよ……」

「じゃあ、私達は行くから……」

「お、おう」

「またなのだ」

2人共バツの悪そうな顔をしたままその場を去って行く。そんな2人に対してガツシユペアは哀れみの視線を向けた。

「何だ、お前等の知り合いだったのか？」

「今のクラスメイトだ。あいつ等、射撃が得意だからな」

千葉と速水がその気になれば、彼等だけで店じまいまで追い込む事すら可能であろう。清磨が呆れ混じりの表情で山中の質問に答えていると、水野とガツシユが射撃の景品に興味を示した。

「あ、〃洋ナシちゃん〃のぬいぐるみがある！」

「私はカマキリジョーの人形が欲しいのだ！」

〃洋ナシちゃん〃はナシの姿をした魔法使いで、大人気らしい。彼等は自分の好きなキャラクターのグッズを見つけた。その時、山中が清磨の肩を組む。

「おい高嶺、水野に良い所見せるチャンスじゃないのか？」

「ガンバレ〜」

「え、これ俺がやる流れなのか？」

岩島も便乗して清麿を応援する。そして水野とガツシュもまた清麿に期待の眼差しを向けて来た。

「はく、しゃあない。一回分だけだぞ」

「お、いらつしやい……景品の取り過ぎは勘弁な」

仕方なく清麿は射撃を行う事になる。そして店員は、景品を大量に取られる事がトラウマになっている様子だ。

（ライフル型か。暗殺の訓練ではハンドガンばかり使っていたからな、どうしたものか……【^{アンサートリガー}答えを出す者】を使う訳にはいかんよなあ）

清麿にとっては扱いに慣れていないライフル型だが、そんな事を水野達は知る由もない。

（取り敢えず1発撃ってみるか）

清麿は洋ナシちゃんのぬいぐるみ目掛けて弾を撃つ。命中こそしたが、標的を落とす事は出来なかった。

「惜しいのだ、清麿!!」

「行けるよ、高嶺くん!!」

「お前等、声がかいぞ!」

大声で応援する水野とガツシュを清麿は黙らせる。そして彼は次の発砲の準備に

入った。

(なるほど、ライフル型の使い勝手はこんなもんか。千葉や速水のようにはいかんだろうが、あいつ等が欲しがった景品を落とすことくらいは出来そうだ。暗殺の訓練がこんな所で活かされようとは)

清磨は洋ナシちゃん目掛けて発砲し、景品を落とすことに成功した。

「よくやった、高嶺!」

「流石だよ」

洋ナシちゃんのぬいぐるみをゲットした事に関して、山中と岩島が感心する。

「凄いよ、高嶺君!」

「ウヌ、次はカマキリジョーなのだ!」

水野はとても喜ぶ。その隣では、ガツシユは自分の欲しい景品が手に入るのを心待ちにする。

(さて、次はあれか……)

清磨はカマキリジョーの人形に狙いを定める。そして難なく景品を撃ち落とす事に成功した。

「良かったね、ガツシユ君!」

「ウヌ!」

ガツシユが目を輝かせる。清麿は無事に2人が欲する景品をゲットした。

(よし、狙いの物は全部取ったな。後は特に欲しい物も無いし、出禁も嫌だから適当に流すでしょう……)

そして清麿は、残りの弾は全て外すか景品が落ちないように当たるようにした。その後、彼は水野とガツシユが欲しがっていた景品を持ち帰る。

「ほれ、水野。これで良いか？」

「うん！ありがとう、高嶺君！」

清麿からぬいぐるみを貰えるという喜びのあまり、水野は涙を流す。そんな光景を、山中と岩島はニヤニヤしながら見ていた。

「清麿、私にもカマキリジヨウを……」

「お前にはあげない」

カマキリジヨウの人形を受け取ろうとしたガツシユだが、意地の悪そうな顔をした清麿に拒否される。

「又オオオオオ!!」

ガツシユは絶望感に溢れた顔を見せた後、泣きながら水野に抱き着いた。そんなガツシユに水野達は哀れみの視線を送る。

「高嶺君、そんな事言ったらガツシユ君が可哀そうだよ」

「つたく、冗談だよ。ほれ、ガツシユ」

清麿は本気でガツシユにあげないつもりではない。そしてカマキリジョーの人形をガツシユに渡した。

「ウヌ、ありがとうなのだ！」

ガツシユは完全には泣き止んでいなかったが、人形を貰えたことはとても喜ぶ。

そして一行は屋台を見て回っていたが、ガツシユが立ち止まった。

「ウヌ、お腹が空いたのだ」

「そーいやここに来てから何も食ってなかったな！」

「何か食べようよ」

「何が良いかの……」

ガツシユが空腹を訴えたが、山中と岩島も同じく腹を空かせる。屋台にはたくさんの食べ物があり、彼等は何を食べようかと悩む。そんな時、

「清麿、あれは……」

「ああ、あのあたりの屋台は全部殺せんせーの分身が店を回しているな」

焼きそば・フランクフルト・タコ焼き・かき氷等のお店を殺せんせーが一人で経営し

ていた。そんな先生を見て、ガツシユペアは殺せんせーの方に駆け寄る。

「凄いのだ、全部先生がやっておるのか……」

「来てくれましたか！ 良い小遣い稼ぎですよ、ヌルフフー！ さあ、何にしますか？」

「やれやれ……」

こうしてガツシユペアは殺せんせーの店から色々な品を購入して、水野達と共にそれらを食べた。その後、ガツシユが何かに気付く。

「カレーの匂いがあるのだ……美味しそうな匂いだの！」

近くにカレーを出す店は見当たらなかったが、鼻の利くガツシユはカレーを嗅ぎ付けた。

「ガツシユ君の話聞いてたら、また食べたくなつてきちゃった」

「まだ食うのか……まあ良い、そこにも行ってみるか」

水野もカレーを食べたがっており、清麿達はカレーを食べる事に決めた。

そしてガツシユの嗅覚を頼りに、カレーの屋台を見つけた。しかし屋台の中には、意外な人物がいた。

「あ、高嶺君とガツシユ君も来てたんだ。いらっしやい」

「ウヌ、寿美鈴ではないか！」

「原、お前店出してたのか？」

「このお店、親戚がやっているからね。私も手伝いをしてたんだよ」

何とそのカレーの屋台では、原が接客をしていたのだ。これにはガツシユペアも驚きである。

「そうであつたか！ 寿美鈴がカレーを作つたのか？」

「まあね。全部一人でやつた訳じゃないけど」

「随分いい匂いのするカレーだな。見事に食欲をそそつてくる……」

原が作つたカレーを前に、食事を取つたはずの彼等は再び空腹に見舞われた。そして清麿達はここのカレーを食べる事に決める。

「どうも、まいどあり！」

「それじゃあ原、明日学校でな」

「またなのだ！」

ガツシユペアが原に挨拶を済ませると、彼等は屋台の近くの休憩スペースに座る。そして彼等はそこでカレーを美味しそうに食べる。

「凄く美味しい！ 高嶺君のクラスメイトの人、料理が上手なんだね！」

「ああ、原は家庭科に関する技術に長けてるからな」

原は料理などの家事全般が得意だ。そんな彼女のスキルが屋台でも活かされている。

「カレーと言えば、林間学校を思い出すよね」

「あん時のカレーは酷かったよな、ハハハ！」

「おおつ、懐かしいのだ！」

岩島・山中・ガツシユが林間学校の話をする。奇しくも今いるメンバーはそこでカレー係になった面子だが、カレーの味は悲惨だった。

カレーを食べ終えた一行は、屋台巡りを再開する。ここでは磯貝が数多くの金魚をすくっていたり、渚と茅野が水風船を大量にゲットしたりしていた。暗殺技術の繊細な部分が活かされている。

「高嶺君のクラスメイト、凄いな……」

「ああ、中々キヤラの濃い連中が揃ってるじゃねーか！」

「面白そうな人達が多いね〜」

それらの光景を見ていた水野達が、清磨のクラスメイトに感心する。E組は個性豊かなメンバーが集まっている。

「E組の皆は色んな事が出来るのだ！」

「キャラの濃さなら、お前等も負けてないと思うがな」

確かにド天然の水野・超熱血野球少年の山中・UFOマニアの岩島と、前の清磨のクラスメイトもキャラが立っている。そんな時、ガタイの良い男が近付いてきた。

「ちくしよー、ここら辺にもツチノコいなかったかー!」

何と金山がツチノコを探して、夏祭りの会場近くをうろついていたのだ。

「あ、オメー等も来てたのかよ!」

「金山、相変わらずだな」

不良にしてツチノコマニアの金山も、かなり個性豊かと言える。ガツシユペアの周りには、愉快な人材が集まりやすいのかもしれない。

そして一行には金山も加わり、彼等は花火を見ていた。

「わー、綺麗だよ!高嶺君」

「ああ、そうだな。水野」

水野と清磨は花火を見ていたが、それ以外のメンバーは少し離れている。彼等は清磨と水野を2人にさせたがっていたが、ガツシユはその目的に気付かない。

「ウヌ、何故清磨とスズメから離れるのだ?」

「ま、いいからいいから」

それを不思議に思ったガツシユだが、山中達にはぐらかされてしまう。一方水野は、清麿がくれたぬいぐるみを取り出した。

「高嶺君、洋ナシちゃんありがとうね！あと、今日はとても楽しかった」

「ああ、俺もだよ！」

「またこうやって、遊びに来ようね！」

「そうだな。俺もこういう時間は大切にしたい」

清麿と水野は花火を見ながら話す。水野は少し顔を赤くしていたが、清麿がそれに気付いていたかは定かではない。

2人が共に花火を見ている光景を、ガツシユ達以外にも見ている者がいた。

「高嶺君、恵さんとは違う女子と仲良さそうにしてるね〜」

「あのカチューシャの子、もしかして高嶺君の事が……」

「あんまり覗き見ない方が良くないんじゃない？」

今回も清麿が女子と仲良さそうにしている様子をカルマ・茅野・渚が見ていたが、それは彼等だけでは無い。

「高嶺の奴、女の子を引つ掛けてやがる……」

「前原、言い方……」

そこには前原と、袋に入った大量の金魚を抱えた磯貝も一緒にいた。そして彼等は水野の事は何も知らないにも関わらず、彼女の清磨に対する好意を察する事が出来た。

「高嶺も結構モテるのな」

「これはイジリ甲斐がありそうだね」

前原とカルマの言葉を、他の3人は苦笑いをしながら聞いていた。

「高嶺君と彼女、良い雰囲気ですねえ。そうは思いませんか？」

変装している殺せんせーもまた、1人の生徒と共に彼等を見ていた。しかしその生徒からはとんでもない言葉が発せられる。

「え……E組を抜ける？」

その生徒からの驚愕の一言。2学期の暗殺教室は大波乱から幕を開ける。

二期編前半

LEVEL. 39 竹林の時間

二期の始業式、折り返しの9月。殺せんせーの暗殺期限まであと6ヶ月である。

〔竹林がない。新学期早々に体調不良か？だとしたら災難だ……〕

清磨は始業式に竹林が出席していない事を気にしていた。そして式が始まり、5英傑の荒木鉄平が進行を務め、部活の表彰などが行われた。

『……さて、式の終わりに皆さんにお知らせがあります。今日から、3年A組に1人仲間が加わります。昨日まで彼は、E組にいました』

荒木の説明を聞いて、E組の生徒達は愕然とした。誰かがE組を抜けるなどという話は、彼等は誰も聞いてはいなかったのだから。

（1人仲間って、まさか!!）

清磨は今ここにいないクラスメイトの顔を思い浮かべていた。その者こそが、E組を抜けた張本人である。

『竹林孝太郎君です!!』

竹林はA組に編入した。そして彼はE組を地獄と断言した上で、本校舎に戻る事を

嬉しく思うと壇上にてスピーチで述べた。それを聞いていたE組一同、何が起こったか分からないといった様子だった。

始業式が終わり、E組は裏山の校舎に戻るが、竹林の話題で持ち切りだった。

「清麿オ!!竹林がE組を抜けたとは、どういう事なのだ!!」

「ガツシユ、落ち着け!俺にもどうしてアイツが急にE組を抜けたのかはわからん!」

彼の事を聞いたガツシユも、焦りの表情を見せていたが、そんなガツシユを清麿がなだめていた。清麿自身もどうしてこうなったかは理解出来ない。しかしガツシユだけではなく多くの生徒が動揺しており、中には怒りの感情を表す生徒もいた。

「竹林、ここを地獄とかほざきやがった!!」

「言わされたにしても、あれはないよね」

木村と岡野が、竹林のスピーチを批判していた。自分達が大切だと思ふ居場所を散々に言われたのだから無理もない。

「竹林君、どうしてこんな事に……」

奥田が今にも泣きそうな声を出していた。彼女は竹林と共に離島での看病を行っていた他、理系の話で盛り上がる事も多かった。そんな彼がクラスを抜けたショックは大

きい。

「竹林の話を書かない事には何とも言えない。皆で放課後、アイツに会いに行こう」

「そうですね、高嶺君。竹林君にも何か事情があるのかもしれない！」

こうして彼等は放課後、竹林に事情を問いただすことにした。清麿には【^{アンサー}答えを出す者】を使用する選択肢もあつたが、彼は本人に直接話を聞くべきだと判断した。

放課後、竹林が本校舎から出てくるのをE組一同は待ち構えていた。そして竹林が校門を出て来たと同時に、磯貝が彼を呼び止めた。

「待ってくれ竹林。説明してもらおうか、どうして一言の相談もないんだ？」

磯貝の言葉に続いて、他の生徒達も彼に声をかけた。どうしてE組を抜けてしまったのか、何故あのようなスピーチをしたのか、と。少しの沈黙の後、竹林が口を開いた。

「僕の家はね、代々病院を経営している。出来て当たり前」の家なんだ。勉強の出来ない僕は家族として扱われない」

その話を聞いた後、彼に不満の視線を向ける生徒は誰もいなくなった。竹林の家庭の事情は、落ちこぼれとして扱われてきたE組達にも思うところがあつた。

「E組を抜けられて、ようやく家族の仲間入りが出来そうだよ……僕にとつては地球の終わりよりも、百億よりも家族に認められる方が大事なんだ。裏切りも恩知らずも分かつている。君達の暗殺が上手くいく事を祈っているよ」

家族から認識されない事、それは自分が産まれてきた事の否定と言つても過言ではない。竹林は今とても苦しんでいる、E組一同それがよく分かつていた。そして竹林は彼等に背を向けた。

「……竹林、本当にそれで良いのか?!お主、とても辛そうにしておるではないか!!」

「そうだよ竹林君、こんなの……」

「2人とも待つて!」

背を向けて帰ろうとする竹林は、まるで自分の気持ちを押し殺すようだった。そんな彼を見かねたガツシユと渚が駆け寄り寄りとしたが、神崎が2人を呼び止めた。

「親の鎖つて、凄く痛い場所に巻き付いて離れないの。だから、無理に引つ張るのはやめてあげて」

「神崎さん……」

神崎もまた仕事一筋の厳しい親に育てられてきた為、竹林の苦悩を理解する事が出来た。そんな彼女は辛そうな顔をしながらも、竹林の意志を尊重したのだ。それを察した渚は、何も言い返せなかった。

「ウヌう、しかし……」

ガツシユは納得いつてない様子だったが、清麿が彼の頭の上に優しく手の平を置いた。

「竹林が自分で決めた以上、俺達にあいつを止める権利はない。それに、竹林がE組を嫌いになって抜けた訳ではない事が分かった。今は様子を見よう」

家庭の事情を踏まえた上での竹林の決断を、誰も責める事は出来ない。親の鎖と言う重すぎる問題に立ち向かう術を、彼等の多くは知らない。そしてE組一同はそれぞれ帰路に着くのだった。

家に着いた後、ガツシユペアはデュフォーと共に裏山で特訓を行ったが、ガツシユは少し元気が無い様子だった。小さな変化ではあるが、デュフォーはそれを見逃さなかった。そして特訓終わりの帰り道、

「ガツシユ、学校での出来事を引きずっているな」

「ウヌ、そうなの……」

ガツシユがデュフォーに竹林の事を話した。【アンサー者トーカー】でデュフォーは事情を分かっていたが、それでも彼はガツシユの話に耳を傾け、顔をしかめながら口を開いた。

「どこにでもいるんだな、その手の親は」

竹林の話聞いて、デュフオーは自分の親の事を思い出し出していた。お金欲しさに自分を研究所に売った母親の事を。今の彼はゼオンを家族のように思う事が出来て救われているが、親に苦しめられた経験は簡単には忘れられる物ではない。

「いわゆる『毒親』と言う奴だ。自分の理想を勝手に押し付けた挙句、思い通りにならない子供を叱責したり拒絶したりする。頭が悪いとしか言いようがない」

(デュフオー、容赦ないな……)

彼の辛辣な言葉を聞いて清麿は困ったような表情をしていたが、その一方ガツシユは今にも泣きそうな顔をしていた。そして、

「そんなの、酷すぎるではないか!! 親とは、家族とはお互いを大切にするものではないのか!! 家族からそんな扱いを受けるなんて、辛すぎるではないか!!」

ガツシユは激高した。彼も親とは離れて暮らしていたが、それは王族である親にとつても、魔界の平和の為の非常に辛い決断だった。ガツシユの中のバオウ・ザケルガを暴走させる訳にはいかない。共に暮らせなくとも両親は実の子を愛しており、彼にはそれが分かっていて。

「ガツシユ……」

そんなガツシユを見て、清麿は自分の両親の事を考えていた。父の清太郎は清麿と

ガツシユを会おうきつかけを作っており、それは清麿を思つての事だった。母の華は厳しい一面もあるが、ガツシユペアやその周りの人々の事を大切にしてくれている。

（俺は恵まれた家に産まれる事が出来たんだな。でも、そうじゃない人達も沢山いる。恐らく、竹林以外のE組にも。どうしたものか……）

清麿がそんな事を考えていると、気付けば自分達の家に着していた。

扉を開けて家に入ると、華が玄関に立っていた。

「3人共、お帰りなさい、まずはお風呂に……」

華がそう言いかけると、ガツシユが大粒の涙を流しながら彼女に抱き着いた。竹林の件は、実の両親と一緒に暮らせていなかった彼にとっては耐え難い出来事だったのだ。

「母上殿……!!」

「どうしたの、ガツシユちゃん?……まさか清麿、アンタがガツシユちゃんに意地悪を……」

「そうでは無いのだ!!」

ガツシユが大声を上げた。それを聞いた華は何かを察したようにそれ以上言葉を話さずに、ガツシユを抱きしめながら頭を撫でていた、まるで実の子供をなだめるように。

「母上殿！親と言うのは……家族と言うのはとても優しく、暖かいものでは無いのか？！家族に自分の事を認められないなんて、そんな冷たくて悲しい事が、許されても良いのか？！」

ガツシユは声を荒げているが、華は彼とは対照的に穏やかな表情で話を聞いていた。清麿とデュフォーも、その光景を無言で見ている。

「取り敢えず、リビングに行きましようか」

華はガツシユを抱きかかえながら、リビングに向かった。清麿とデュフォーもそれに付いて行った。

「……そう、そんな事が」

「ああ、そして竹林はとても苦しそうにしていたよ」

リビングにて清麿が事情を話したが、それを聞いた華は苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「確かに家庭の事情はそれぞれ違うけれど、それはとても辛いことだと思うわ。竹林君のご家族を実際に見てはいないから突っ込んだ事は言えないけど」

「そんな……そんなのは、間違っておる！」

「ガツシユは未だに泣き止んでいなかった。そして彼は頑なに竹林の家族の現状を認めようとは出来ず、ガツシユの叫びを聞いた華は再び口を開いた。

「清磨とガツシユちゃんはその事に関してどうしたいと思っているの？」

それを聞いたガツシユペアは少し考えた。確かに現状を嘆いているだけでは何にもならない。そしてまずは清磨が考えを口にした。

「家庭の事情に首を突っ込む事は出来ない。それに、アイツが決めた事を否定する事も違う。けど、クラスの間が悩んでいるなら力になりたい。今は竹林を見守ろうと思う」

「……そうね、私もそれが良いと思う。ガツシユちゃんは？」

清磨の意見に華も賛成していた。いくら納得の行かない出来事でも、安易に家庭の事情に口を出すのは得策ではない。そして華は、ガツシユにも考えを聞いた。

「……私は、このまま竹林が辛い顔をしながらE組を離れるのは絶対に嫌だ。しかし、どうすれば良いかが分からぬ！私は……」

「ならば、他のクラスメイトの力も借りれば良いんじゃないのか？お前達だけで全てを解決など出来ないのだから」

ガツシユが方法を見つけれないと、デュフォーが会話に入ってきた。彼の言う通り、この問題はガツシユペアだけではどうにもならない。だからこそ、人の力を借

りるべきなのだ。

「今までもそうして来たんじゃないのか？ 自分達だけで限界があるのなら、他の者の力を借りて補ってきただろうに」

デュフオーの言葉を聞いて、ガツシユは落ち着きを取り戻した。非常事態で考えがまとまらずに思いつけなかったが、仲間に頼る。事は今まで彼等が当たり前のようにしてきた事である。それを聞いたガツシユの顔は先程よりも明るくなった。

「ウヌ、その通りなのだ！ 清麿、明日皆に相談してみようぞ!!」

「そうだな、それが良い！」

ガツシユペアは答えを出した。E組の仲間が困っているならば、他のE組の仲間と共に支えてあげれば良いのだと。それを聞いた華も、嬉しそうにしていた。

次の日、ガツシユペアが竹林の事をクラスで相談するまでもなく、E組の何人かで竹林の様子を殺せんせーと共に見に行く事に決定した。

「清麿、皆同じ事を考えていたみたいなのだ！」

「そうだな、全員が竹林を心配してくれてる」

「殺意が結ぶ絆ですねえ」

そんなクラスの様子を見て、殺せんせーは嬉しそうだつた。

そして放課後、殺せんせーとE組の何人かでカモフラージュの技術を活かして本校舎の竹林の様子を見に行つたが、彼はそれを見破つていた。

(なんかいる……)

竹林は外を気にしながらも、A組の生徒達と話していた。クラスに馴染めている彼を見て、E組一同は安心していた。

「うまくやつてるみたいだな。だから放つとけつて言つたんだ、あんなメガネ」

寺坂は悪態をつきながらも竹林の様子を見に来ていた。寺坂は竹林とは何度もメイド喫茶に行つた程仲が良く、内心も彼が心配だったのだ。

一方竹林は、何故彼等が自分の事を見に来てくれたのかが分かつていない様子だつた。

(みんなはどうしてここまで……今まで僕は暗殺の役に立つてなかつたのに。しかもA組になった僕を見て、何を学ぶ価値がある?……逆に僕は、何を学びに本校舎に戻つてきたんだっけ?)

E組を抜けた自分を気にかけてくれるクラスメイトを見て、竹林はこれからどうすれ

ば良いかが分からなくなっていた。そんな竹林に浅野が話しかけていたが、距離が遠くて会話の内容を聞き取る事は出来なかった。

「今の竹林君には迷いが見られますねえ。皆さん、今日はこの辺で帰りましょうか。後は先生に任せて下さい」

殺せんせーの言葉に従い、彼等はそれぞれ帰宅した。生徒達は殺せんせーなら竹林を任せられると容易に判断出来た、それ程に殺せんせーに信頼は厚い。そしてこの日の夜、殺せんせーは親の鎖に縛られている竹林に対しての手入れを施したことは、本人達しか知らない。

次の日、本校舎での集会にて竹林が再び壇上に立っていた。A組に入って、改めて決意表明を行うようだった。これは理事長の指示だったが、彼の思惑は外れてしまった。

「E組は弱い人達の集まりですが、僕にとってはメイド喫茶の次に居心地良いです」

彼は親の呪縛に打ち勝ち、E組に残る道を選んだのだった。そして竹林は理事長室からくすねて来た盾を粉々に砕き、晴れてE組に逆戻りとなった。

「救えないな、強者になれるチャンスだったのに」

壇上から降りた竹林に浅野が心底呆れた表情で声をかけたが、彼には後悔は無かつ

た。そして、

「強者？怖がつているだけの人に見えたけどね、君も皆も」

竹林の言葉を聞いた浅野は、まるで凶星を付かれたような顔をしていた。強がつてはいても、浅野は心のどこかで理事長を恐れている。その事を竹林に見透かされてしまったのだ。

（竹林、大きな決断を下せたな。その心の強さと度胸は、俺も見習わなくてはならん）
清磨も嬉しそうな表情で竹林を見ていた。

そしてE組一同は竹林と共に裏山に戻ったが、ガツシユが待ち構えていた。

「竹林、戻ってきてくれたのだな!! 本当に良かったのだ!!」

「ガツシユにも心配をかけたね。皆も、本当に済まなかった」

竹林は一度E組を抜けた自分を改めて迎えてくれる事を嬉しく思う反面、少しの罪悪感に苛まれていた。

「何辛気臭せー顔してんだ。テメーはまたここに戻ってきた、それだけで充分じゃねーか」

そんな竹林を見て、寺坂が声をかけた。彼は同じ趣味を持つクラスの仲間の帰還を心

待ちにしていたのである。E組一同、竹林が戻ってきて喜ばしい様子だった。

その日の体育の授業で、鳥間先生からこれからの暗殺には火薬を組み込む事が説明された。そして先生は分厚い火薬のマニュアルを取り出し、それを生徒一人に覚えてもらうよう説明した。

「ウヌ、難しそうなのだ。しかし清磨なら出来るのではないか？」

「まあ、大丈夫だとは思いますがそれは俺の役割ではない」

清磨の頭脳を持つてすれば全て暗記するのは不可能ではないが、彼は引き受けるつもりは無かった。他に適任がいる事を知っていたから。そして多くの生徒が嫌がる表情を見せる中、竹林が鳥間先生からマニュアルを受け取った。

「全て暗記できるか？竹林君」

「ええ、アニソンの替え歌にすればすぐですよ」

彼は殺せんせーに勉強を教わった時、数式などをアニソンの替え歌にしてもらい、テストを乗り切った事があった。それを活かせば全て覚えるのは苦ではない。またこれを引き受けたのは自らも今まで以上に暗殺の役に立ちたいと言う意志表示でもあった。E組の戦力が増加した瞬間である。

LEVEL. 40 フリーランニングとプリンの時間

「2学期から教える応用暗殺訓練、火薬に続くもう1つの柱が『フリーランニング』だ」
鳥間先生が少し離れた一本松を指差しながらフリーランニングの説明をした。百聞は一見に如かずと言う事で、鳥間先生が実際にそれを行って一本松まで10秒程で辿り着いた。

「道なき道で行動する体術、熟練して極めれば、ビルからビルへ忍者のように踏破する事も可能になる」

これを見た生徒一同は興味を示した。自分達もこのようなフリーランニングの会得が可能なら、厳しい訓練にも楽しみが出来る。しかし口元が緩む生徒達とは対照的に、鳥間先生の表情がいつも以上に真剣になった。

「だがこれも火薬と同じ。初心者の中に高等技術に手を出せば、死にかねない危険な物だ」

先生がフリーランニングの危険性を説明した。皆がいきなり先生のように上手にやる訳が無いのだから。

「危険な場所や裏山以外で試したり、俺の教えた以上の技術を使う事は厳禁とする。い

いな！」

フリーランニングは習得出来れば便利な能力だが、リスクは大きい。気を抜けば自分や周りの人の怪我に繋がる。そしてフリーランニングの基本となる受け身の練習をひたすら行い、今日の体育の授業は終了した。

授業が終わって生徒達が教室に入っていく中、ガツシユペアはまだ外にいた。

「清麿、鳥間先生はフリーランニングが危ない物と言っておったな」

「ああ。これもまた火薬や俺達の呪文と同じで、誰かの命を奪う可能性がある代物だ。使う場面は選ばなくてはならん」

彼等は自分達の持つ力について話していた。その力で関係ない人々を巻き込む事は許されない事である。

「清麿。私が公園で電撃を呼び出そうとしたのがきっかけで、私達が喧嘩をしてしまった事を覚えておるかの？」

「……あつたな、そんな事」

ガツシユは自分の電撃の事で清麿と揉めた事を思い出す。その時清麿は安易にガツシユが術を人前で使おうとした事に怒ったが、ガツシユにとっては自分が「人より優れている」事をアピールしたかっただけであった。そしてすれ違いが起こってしまったのだ。

「あの時は反発してしまったが、今なら清麿がどうして怒ったのかが分かるのだ。私達の方で関係のない人々を傷つけるなど、あつてはならないのだ」

「……そうだな。だがあの時はガツシユなりに前を向こうとしていたんだろ？それを分かつてやれなかつた俺にも責任がある」

この一件を経て彼等はお互いに歩み寄る事が出来た。その絆の力は、当時のブラゴのギガノ級の術を相殺する程に強力な物である。

「私達はこの力を、誰かを守る為以外に使つてはならぬのだ。烏間先生もそれが分かつていて、裏山以外でのフリーランニングの使用を禁止したのであろう」

「その通りだ。自分の力に溺れるなど、あつてはいけない」

人とは違う力を持った彼等には、烏間先生がフリーランニングに関して厳しい制限を設けた理由が分かっている。しかしフリーランニングをめぐるあのような事件が起こるなど、今のガツシユペアには知る由も無かつた。彼等がそんな話をしていると、

「2人で何の話をしてるの〜？」

倉橋がガツシユペアに後ろから話しかけた。彼女は他の生徒が校舎に戻る中で烏間先生を放課後にお茶の誘いをしたのだが、断られてしまったようである。

「おおつ、陽菜乃ではないか！」

「今日のフリーランニングについてだ。使いこなせれば暗殺において便利な技だが、か

なり危険な物だからな」

「成程ねー、確かに失敗したらって考えるとちよつと怖いかも」

清磨の話聞いた倉橋もフリーランニングに対する恐怖心を持ち合わせていた。そんな彼女は一瞬だけ険しい顔を見せたが、直ぐにいつも通りの明るい表情に戻り、少し顔を赤くして微笑んだ。

「でもフリーランニングしてる烏間先生、いつも以上にカッコよかったな」

倉橋は烏間先生に恋心を抱いているが、ビッチ先生の彼への思いにも気付いている為に複雑な心境である。そんな彼女は今日の烏間先生に感心していた。

「ウヌ、烏間先生は凄いいからの！」

「あの人の身体能力は、人間離れしてるところがあるからな……」

彼等は烏間先生の話をしながら校舎に入って行った。

烏間先生の話題で盛り上がった彼等だったが、下駄箱を通り抜けた辺りから倉橋は別の話題を持ちかけた。

「ねえガツシユちゃん和高嶺ちゃん、ウマゴンちゃんが次に日本に来るのっていつになりそう？」

彼女はウマゴンに会いたがっていた。動物園で顔を合わせてからかなり仲良くなっており、次にいつ再会出来るかが気になっている様子だ。

「そうだな、少なくとも今俺達が倒そうとしている魔物との戦いが終わって以降だろうが、サンビームさんの都合もあるからいつになるかは分からない」

「そっか、残念だな。でもしようがないよね」

「ウマゴン達も強くなる為に頑張っておるからの」

今この時もウマゴンはアフリカで野生動物に追われる生活を送りながら、実力を伸ばしている。事情を知っている倉橋は、ウマゴンにいつ会えるか分からなくてもそれ程落ち込む様子は見せなかった。

「戦い、頑張ってるね！」

「勿論」なのだ！」

倉橋が笑みを浮かべて2人を激励してくれた。天真爛漫な彼女との会話は、ガツシユペアの日々の疲れを紛らわせてくれる。そして彼等は教室に戻った。

学校も終わって裏山での術の特訓の帰り道。デュフォオーは先に戻っており、ガツシユペアとテイオペアが共に特訓について話していた。

「テイオの盾が日に日に強くなっていくのだ、私も負けてられん」

「それはお互い様でしょ？でも、クリアの術はもつと強力なのよね……」

彼等の術も強くなっているが、クリアはその上を行く。それでも魔界の滅亡を防ぐために抗わなくてはならない。

「2人共、気合が入っているわね……って、あれ？あの子達は……」

意気込んでいるガツシユとテイオを微笑ましく思っていた恵だったが、彼女は前にも会った事のある2人組を見かけた。

「あれ、あの2人って……」

「渚とカエデじゃないの!!」

「おおつ、本当なのだ!!」

彼等の帰り道で、偶然渚と茅野がいる場面に出くわした。2人はモチノキ町在住では無かったが、どこかに遊びに来ていたのだろうか。

「あ、高嶺君達!」

「それに……大海さんまで!」

まさかの出会いに渚と茅野も驚いていた。

「こんにちは。渚君、カエデちゃん。南の島以来かしらね」

6人は近くの公園に来た。ガツシユとティオは砂遊びを始め、残りの4人はそれを見ながら雑談を始めた。その話の中で、渚と茅野がモチノキ町のレストランに行つてた事が分かった。

「あそこつて、前に俺達も一緒に行つた所だったか?」

「そうだよ。茅野が新作のプリンを食べたいつて言つててさ……」

「うん、凄く美味しかったよ!」

(となると、ウルルさんが働いている店か。元気にしているだろうか……)

茅野の甘党は健在だ、スイーツの為なら隣町に出向くことさえ厭わない。一方で清磨は以前にその店で再会したウルルの顔を思い出していた。

「カエデちゃんて、本当に甘い物が好きなのね」

「はい! 大海さんも、甘い物はどうですか?」

「恵〴〵で良いわよ。そうね……私は甘い物ならシフォンケーキが好きかな。後、ティオはケーキ全般が好きつて言つてたわ。皆でスイーツを食べに行くのもいいかもしれないわね」

恵も茅野が甘い物の話に食いついた。スイーツが好き女子は多く、それはティオペアとして例外では無い。しばらくその話を続けた後、恵は別の話題を取り上げた。

「話は変わるけどカエデちゃんって、ガツシユ君の事を弟のように可愛がっているみたいね。テイオが言ってたわ」

「そうですね。ガツシユ君みたいな弟がいると、毎日が楽しいんだらうなって思つて。何だか、ガツシユ君を見てると、つい構いたくなつちやうつて言うか……」

「それは分かる気がするわね」

恵はテイオからガツシユと茅野の關係性を聞いている。そしてガツシユの事を楽しんでに話す茅野を、彼女は微笑ましく見ていた。

「でも、程々にしておかないと清麿君が嫉妬しちやうんじやない？（それに、テイオも……）」

「ハハハ、そうかもしれない」

「恵さんまでそんな事を……」

「高嶺君、このネタは恒例になつてゐるね」

茅野がガツシユを可愛がる事で、清麿が嫉妬する可能性を誰かが言及する。何度このやり取りが行われた事か。それを見てきた渚も苦笑いを浮かべた。しかし恵がテイオから聞いていたE組の話題は、それだけではなかつた。

「あと渚君は、随分テイオと仲良くしてくれたみたいね。動物園に行つた時、色々教えてもらったつて。あの子、楽しそうに話してたわ」

「テイオちゃんがそう言ってくれて嬉しいですよ。また皆でどこか出かけたかったですね」

テイオと渚が仲良くなれた事を、恵が喜ばしく感じていた。テイオが心を閉ざしていた時期を知っている恵にとって、彼女の交友関係が広がるのは嬉しい事である。

「そうね。今ちよつと忙しい時期なんだけど、時間が出来たらそうしたいわね」

「確かに動物園には、恵さんは来れなかったからな」

今はクリア打倒の特訓故、恵達は忙しい。しかしそれを乗り越えた後は、皆で楽しい時間を多く過ごしたいと思う恵達だった。

「高嶺君とガツシュ君のお陰で、恵さんやテイオちゃんとも話す事が出来て良かったです。恵さんもお忙しいと思いますが、頑張ってください」

「ふふ、ありがとう」

ガツシュペアを通して、渚茅野はテイオペアとも仲良くなれた。友達が増える事は、ここにいる全員にとって素直に嬉しい。そんな時、ふと時計に目を向けた恵が慌てた表情を見せた。

「あ、いけない。もうこんな時間。テイオー！そろそろ帰りましょー！」

「分かった、恵！」

恵がテイオを呼んで、帰り支度を始めた。もう時計の針は夕方の6時を過ぎていた。

「じゃあね、皆。またお話ししましょう！」

「皆、またねー！」

テイオペアが清磨達に挨拶をすると、そのまま帰って行った。そして清磨達も2人 hands を振った。

「ウヌ、渚とカエデもテイオだけでなく恵とも友達になれたのだな。良かったのだ！」
恵が渚・茅野と楽し気に話す様子を見て、ガツシユも満足気だった。

「テイオがまた今度皆で出掛けたいと言っておったぞ！」

「奇遇だな、ガツシユ。こっちでも同じ話をしてんだ」

考える事は皆同じだったようだ。それぞれが今まで以上にお互いに交流を深めたいと思っている。

「私は皆で甘い物を食べに行きたいかなー。今日のプリンみたいな」

「茅野、相変わらずだね」

ここに来てもプリンの話を持ち出す彼女。しかし、彼女の表情が変わった。

「ねえ皆、プリンを作る時って卵を使うよね」

「それがどうかしたのか？」

「昨日、こんなニュースを見たんだけど」

茅野がスマホを取り出した。そこには鶏卵の過剰供給によって廃棄される卵についての記事が掲載されていた。

「これ、暗殺に使えると思うんだ！」

「カエデが殺る気に満ち溢れておるのだ！」

「茅野、これって……」

「おい茅野、まさか……」

茅野が卵のニュースとプリンを見て思いついた暗殺計画。清麿は察しが付いたが、それは余りにもぶっ飛んだ暗殺計画だった。

9月の3連休、生徒一同は校舎に集合した。もちろん暗殺計画の為である。

「と言う訳で!! 廃棄される卵の救済もかねて暗殺の為の巨大プリンを作りたいと思います! 名付けて、プリン爆殺計画!!」

巨大プリンを作る下準備は烏間先生指導の下で事前に行われており、茅野の暗殺計画を聞いた生徒一同は驚愕としていた、ただ1人を除いて。

「おおっ、楽しそうなのだ!!」

事前に計画を聞いていたガツシユは、楽しみのあまり目を輝かせていた。巨大プリンに興味津々な様子だ。

「ガツシユ君、これは暗殺の為なんだからね!! 浮かれてちやダメだよ!!」

「ウヌ!!」

そういう茅野自身もかなり浮かれていた。これは殺せんせーの暗殺のみならず、甘党の茅野自身にとつてもやりたい事の1つである。それを分かっていた清磨と渚は苦笑いをしていた。具体的な計画はこうだ。巨大プリンの底に対先生弾と爆薬を密閉しておく。殺せんせーが底の方まで食べ進んだら、竹林が起爆させる。もし殺せんせーが逃れたら、別の場所で隠れているガツシユペアの電撃が先生を襲う。プリンの匂いで2人の場所が紛れる寸法だ。

巨大プリンの制作が開始された。そこには茅野が考えた多くの工夫があった。プリンが崩れないようにする為の凝固剤に融点が高い寒天の使用、飽き防止の為の味変わりなど、プリンを熟知している彼女だからこそ出来る工夫が多くなされた。

「やるねー茅野ちゃん、これ全部手配したの?」

「かなり手が込んでるね」

茅野の手際の良さに、カルマと渚も感心していた。

「うん、前から作ってみたかったんだ。諸経費も防衛省が出してくれる、最高の機会だと思つてさ。こうと決めたら一直線になっちゃうんだ、私」

自分の好きな事を活かした暗殺はこれまで何度か見られたが、サポートタイプかと思われていた茅野がここまで大規模な暗殺計画を行うとはクラスの誰もが考えていな

かった。その諸経費を見た鳥間先生が頭を抱えていたのは別の話である。

「茅野、プリンについて随分勉強しているじゃないか」

「カエデ、凄いのだ!!」

「エへへ、甘い物の事なら任せてよ!!」

茅野のプリンに関する知識は、ガツシユはおろか多くの分野に詳しい清磨ですら舌を巻いていた。

そして3連休を全て費やし、生徒一同は巨大プリンを完成させた。それを見た殺せんせーがよだれを垂らしていた。

「これ、全部先生が食べて良いんですか?」

「勿論!」

茅野の言葉を聞いた殺せんせーがプリンに飛び込んだ。それを見た生徒達が校舎に入っていく中でガツシユペアはプリンが見える森に隠れた、暗殺の為に。プリンに夢中の殺せんせーはそれに気付いていない。

「清磨、どのタイミングで攻撃しようかの?」

「二応竹林が起爆した後だと言う事になっているが、俺達が行けると判断した時にも電

撃は撃って良いとは聞いている。中途半端な時に攻撃して気付かれるのが最悪だ」

最高のタイミングで呪文を唱える為、清麿は【答えを出す者】^{アンサーカー}を発動させた。そこで最善のタイミングを見計らっていたのだが、突如着信がかかってきた。

「おっと茅野か、どうしたんだ？」

『ダメー！高嶺君とガツシユ君、プリンに電撃放つなんて、絶対ヤダー!!』

清麿が電話に出ると、茅野が泣き叫んでいた。彼女は自分達で作ったプリンに愛着が湧いてしまった様子である。清麿は言葉を失った。

『ちよつ、落ち着け茅野!!』

『プリンに感情移入してんじゃねー!!』

荒ぶる彼女を、杉野と寺坂が抑え込んでいた。それを聞いた清麿は、呆れた表情を見せながら電話を切ってしまった。

「清麿、カエデからなのだろうか？切ってしまったって良かったのか？」

「ああ、問題ない。ガツシユ、プリンと殺せんせーから目を離すな」

茅野の懇願を無視して呪文を唱えるタイミングを見計らっていたガツシユペアだったが、殺せんせーと目が合ってしまった。

「清麿、殺せんせーがこつちを見ているのだ。そして何か持つてるようだの」

「ああ、俺達は殺せんせーに気付かれたんだ。そして先生が持っているのは竹林が作っ

た爆弾……つて起爆装置まで外されてんじゃねーか！」

「ヌルフフフ、そこにいましたか。抜かりが無いですねえ、君達は」
こうしてプリン爆殺計画は失敗に終わった。

殺せんせーとガツシユペアは校舎に戻るが、何と殺せんせーがクラス皆でプリンを食べられるように綺麗な部分を切り分けてくれていた。

「プリンは皆で食べるものですよ……ただし廃棄される予定の卵を食べてしまうのは、厳密には経済のルールに反します。食べ物の大切さと合わせて、次の公民で考えましょう」

「[[[[[はーい!!]]]]」

各々はプリンを美味しくそうに食べ始めた。

「これは美味しい！流石だな、茅野！」

「いくら食べても飽きないのだ！」

「皆のお陰だよ……つてガツシユ君、口にプリンついてるよ」

「う、ウヌウ……」

茅野は相変わらずガツシユに構っており、彼の口のプリンを拭きとった。そんな彼等

に渚とカルマが近付いた。

「おつ、高嶺君の嫉妬の時間かな？」

「だから、違うと言ってるだろう」

「またこのパターン……」

この流れはやはり恒例になっていた。清麿と渚は「またか」と言った表情を浮かべた。

「でも惜しかったね、茅野……むしろ安心した？」

「あはは」

大切なプリンに電撃を放ったり爆破したりせずに済んだ茅野は、どこかホツとしていゝる。その事を渚に見透かされて、顔を赤くした。

「でも、茅野がここまでやるなんて思わなかった。意外だね」

「ふふ、本当に刃は親しい友達にも見せないものよ」

茅野は得意げな表情をして、殺せんせーにプリンを突き付けた。

「また殺るよ、殺せんせー。ぷるんぷるんの刃だったら、他にも色々持つてるから」

そんな茅野を見た殺せんせーは、触手で〇マークを作っていた。次はどんな暗殺方法が行われ、誰が刃を露わにするのかは誰にも予想が付かない。クラス全員がプリンに夢中になる中、清麿は顔をしかめていた。

(何だ、一瞬茅野から違和感みたいなものが……気のせいかな?)

殺せんせーに暗殺の宣言をした茅野を見て清麿が何かを感じ取っていたが、その正体には気付けなかった。その答えを「^ア答^ンえ^を出^ス者^ト」^カで導き出さなかった事を清麿が後悔するのは、まだ先の話である。

LEVEL. 41 偽物の時間

ガツシユペアはデュフォーと共にテレビを見ながら朝食を取っている時、テレビのニュースではとんでもないニュースが取り上げられていた。

「随分頭の悪い事をする奴がいるな」

「……あ、ああ。世も末だ……」

「ウヌ？」

柵ヶ丘で下着泥棒が出現したのだ。モチノキ町では被害が出ていないようだったが、犯人は「ヌルフフフ」と笑いながらFカップ以上の女性をターゲットにしていた。

「どうしたのだ、清磨？」

「いや、何でもないぞ（……まさか、そんなはずは無いと思いたい）」

ニュースで取り上げられていた犯人の特徴が殺せんせーと一致している。ガツシユは気付いていなかった為、清磨は適当にはぐらかしておいた。

ガツシユペアが登校すると、殺せんせーが生徒達から汚物を見る目で見られていた。

「皆、どうしたと言うのだ？」

「ガツシユ、ニユース見てないの？」

何も分かっていないガツシユに対して、速水が下着泥棒の記事を見せながら解説した。生徒の大半が殺せんせーが犯人だと決め打っている。

「この犯人、殺せんせーみたいなのだ！」

「いや、殺せんせーしかないでしょ」

「殺せんせー、悪い事をしておったのか？」

速水に断言されて、ガツシユは泣きそうな顔を見せる。一方殺せんせーは、冷や汗を掻きながら無実を訴えていた。

「待てよ皆、決めつけるなんてひどいだろ!!」

その中でも、磯貝は殺せんせーの無実を信じていた。彼は今までの殺せんせーの言動を振り返るが、その脳内には先生のこれまでのエロい行為ばかりが浮かんでしまった。そして、

「自首して下さい!!」

「そんな、磯貝君!!」

磯貝も先生が犯人だと決め打った。さらに殺せんせーの机から女性下着が入っていたり、クラスの出席簿に女子のカップ数の記入が見られたり、次々と証拠が出ていた。

「私の『永遠の0』って何なのよー!!」

「カエデ、落ち着くのだ!」

「茅野さん、今はそれどころじゃ……」

自分のカップ数を見た茅野が荒ぶっていたが、ガツシユと奥田に取り押さえられていた。ただでさえ胸の事をコンプレックスに感じている彼女に対して、Aカップ扱いすらされない事の屈辱は計り知れない。

「知りません!!先生は……」

殺せんせーはなおも無実を主張するが、大半の生徒達はそれを聞き入れようとしなかった。ここまで証拠が出てきているのだから、無理もない。

「こんな、こんなのは……」

「殺せんせーは無実だ」

殺せんせーが狼狽している中、清磨が口を開いた。侮蔑の目を向けられる先生を見かねた清磨が、【アンサーカード答えを出す者】を使って殺せんせーが無実だと言う答えを出したのだ。

「いや、高嶺。殺せんせーを信じたいんだろーけどさ、それは無理じゃ……」

「そうだね。殺せんせーがE組ぼくらを裏切るような真似はしらないと思う」

清磨の発言を岡野が否定しようとしたが、渚がその発言を遮った。どんなにエロい殺せんせーでも、渚は信じ続けている。

「ま、こんな事して先生として死ぬのは殺せんせーは避けたいでしょ。そうでなくても、マツハ20の下着ドロがこんなに証拠を残すとは思えないんだよね」

「私もそれは考えてた。何か、話が上手く出来すぎてる感じがするんだ」

カルマと不破もまた現状を疑っている様子である。自分を信じてくれている生徒がいる真実に、殺せんせーが感銘を受けて涙を流した。

「高嶺君、渚君！カルマ君に不破さんまで！先生は嬉しくて、ううっっ！！」

「ウヌ、殺せんせーは悪くないのだな！！」

「でも、殺せんせーじゃないなら、一体誰が？」

号泣する殺せんせーの隣でガツシユが喜んでいた。信用する先生が無実であるのだから。しかしこれは誰の仕業なのか、茅野はそれが気になっていた。

「……にせ殺せんせーよ！！ヒーロー物のお約束だよね！！」

不破は目を燃やす。やはり彼女は物事を漫画で例えるきらいがある。それを聞いた殺せんせーが顔を真っ赤にした。偽物の存在は殺せんせーの逆鱗に触れたのだ。

「何て卑劣な！！先生の偽物だなんて！！放課後、とっ捕まえに行きましょう！！」

「偽物なんて、許せないのだ！！」

一先ず殺せんせーの疑いは晴れた。しかし授業の時間が迫ってきており、話の続きは放課後に行われる事となる。

そして放課後、にせ殺せんせーを捕まえる為の作戦会議が始まった。

「考えられるのは、犯人は殺せんせーの情報を得ている何者かって事ね。律と協力しながら、手掛かりを探してみるよ」

「どういうつもりか知らないけど、俺等の手で真犯人をボコつてやろうじゃん？」

不破とカルマがやる気を見せていた。そして他の生徒達も意見を出していく中、渚が清麿に聞いたのだした。

「ごめん。今聞く事じゃないかもしれないんだけど、何で高嶺君は殺せんせーがやってないって分かったの？」

「渚、それはだな……（殺せんせーの無実を主張したかったが、迂闊だったか）」

清麿は彼等に「アンサーカード答えを出す者」の事を話すかどうか決めかねていた。この力は不安定な物であり、暗殺に使えるかどうか確証が無い為である。そんな中、渚は話を続けた。

「僕は口では言ったけど、殺せんせーが無実だって確証は無かった。カルマ君や不破さんにしたって、不自然な状況から殺せんせーの無実を証明した。でも高嶺君の場合は、まるで初めから殺せんせーがやってないって分かりきつてたような感じだったんだ」

渚の話に清麿は言い返せなくなる。彼は清麿が何か能力を持っている事を確信して

いた。そんな時、殺せんせーが口を挟んでくる。

「まさか高嶺君。君の持つ力は、【^{アンサー}答えを出す者^{カード}】では無いですか？」

「!?」

殺せんせーがその名を口にした時、清麿は顔色を変えた。まさか殺せんせーがそれを知っていたとは、思いもよらなかつた。

「清麿……」

「はあゝ（誤魔化するのは無理そうか……）」

ガツシユが清麿に心配の眼差しを向けるが、清麿はため息をついた後にこの力の事をE組一同に話した。これ以上は隠せないと彼は判断した。

「本格的に扱えるようになったのは最近だったから、皆には黙ってたんだが……」

清麿は申し訳なさそうな表情を見せた。

「オイ何だよ、そのチート能力!!」

「高嶺、呪文だけでなくそんな力が……」

前原と磯貝を始めとして、多くの生徒がそれを聞いて驚愕した。あらゆる答えを瞬時に出せる能力など、規格外も良い所である。

「何その漫画みたいな能力は?! 私と律の活躍が……」

不破は自分達の活躍が奪われる事を心配していた。その力があれば、彼女自身の役割

も無くなりかねないのだから。そして、

「そんな能力があるんなら、学校のテストも満点取り放題なんじゃねーのか？」

岡島がそう言った。実際にそれは可能であり、清麿の頭脳なら答えだけでなく、それが出るまでの過程までしつかり説明する事も出来る。

「コラー！ 岡島君、何を言い出すんですか！ 高嶺君、絶対ダメですよ！ そんなのはカニンングと同じです！！」

殺せんせーが顔を真っ赤にして清麿に絡みついた。教育者としては、生徒が謎の能力を使用して楽々テストで満点を取る行為など見逃せない。岡島の発言は殺せんせーを怒らせてしまった。

「分かってるよ、殺せんせー！！この力は暗殺と魔物絡み以外では使う気は無い！！これでいいだろ！！」

「！！……満点回答です、高嶺君！」

うっとおしいと思いつながら、清麿が殺せんせーを突き放して答えた。この回答に殺せんせーは満足したようで、顔をオレンジ色にして○マークを浮かべながら清麿から離れた。

「そろそろ話を戻さないか？ 最もその能力があれば、にせ殺せんせーの正体や居場所も分かりそうだが……」

気付けばにせ殺せんせーの捕獲から、清麿の【アンサートーカー答えを出す者】に話題がシフトチェンジしていた。そして千葉が話を戻そうとしたが、同時にその能力で偽物を探る事も考えている様である。

「いや、俺自身偽物の正体を直接は見てないから完璧には把握で出来ない。だが現れそうな場所の候補はある」

「よし！そういう事なら私と律の努力は無駄にならなそう！」

「そうだな。俺一人だけの力では限界がある」

【アンサートーカー答えを出す者】も全ての完璧な答えを出せる訳ではない。しかしその事実を知って、自分にも出来る事があると不破はむしろ喜んでいた。そして不破・律が集めた情報と清麿の能力で、偽物が巨乳を集めたアイドルグループが使用している合宿施設に現れると答えを出した。

場所の見当は付いたがクラス全員でそこを見張る訳にはいかず、ガツシユペア・渚・カルマ・茅野・不破・寺坂がその施設に侵入する事になった。殺せんせーは別行動でそこを見張る。そして残りの生徒はその施設の近くでいくつかの班に分かれて待機する手はずである。

「皆で協力して偽物を捕まえましょう!! そんな奴は許せません!!」

作戦会議が終了した後、殺せんせーが退室した。

教室には生徒だけが残り、それぞれが帰り支度を始めていたが、寺坂が口を開いた。「なあ高嶺。そんなチート能力があるんなら、あのタコの弱点や正体も分かるんじゃないか?」

他の生徒達もそれを聞いて頷いていた。確かに【アンサー答えを出す者】を使えば、殺せんせーの弱点も発見できるし、先生が何者かを突き止める事も可能だ。しかし、清麿は首を横に振った。

「この力で殺せんせーの正体を探る事はしない。その答えには、皆で協力して辿り着きたいんだ。そうでなくては意味が無い」

清麿はデュフォアの言葉を思い出す。この力を使って殺せんせーの事が分かってても意味をなさない。クラスで力を合わせて答えを出すべきだと。清麿は寺坂の提案を否定した。

「ま、そーだよ。いきなりこんな能力引つ提げられて殺せんせーの正体が分かってても、俺は納得出来ない。今までの暗殺の為の努力を否定された気にすらなるよ」

カルマが清麿の肩に手を置いた。清麿とカルマの言葉には寺坂を始め、誰も言い返せなかった。

「ウヌ、クラスの皆で力を合わせて答えを出して見せようぞ!!」

ガツシユの言葉に皆は賛同し、この力の話題は終了した。そして生徒一同は帰り支度

を済ませて、作戦の準備に入るのであった。

その日の夜に全身黒の服に着替えた清麿達が、フリーランニングを使用して施設の近くに侵入した。そして少し離れた場所で殺せんせーが黒い忍者の恰好で待機していたが、その様子が余りにも怪し過ぎる。

「あれでは、殺せんせーが泥棒みたいなのだ」

「そうだね、ガツシユ君……」

「もうアイツが犯人で良いんじゃないかねーか？」

ガツシユの言葉に茅野が賛同しており、寺坂からはほぼ犯人扱いされていた。しかも殺せんせーは偽物を捕まえようと意気込んでおり、それが下着を見て興奮しているようにも見える。そんな時、壁から黄色いヘルメットを着けた大男の出現に清麿達が気付いた。その男を殺せんせーが捕えようとしたが、清麿は何かに気付いた。

「殺せんせー、そこから動いてはいかん!!これは罠だ!!」

「にゅやっ、高嶺君!それってどういう……」

「ガツシユ、奴を捕まえろ!!」

【アシンスー答えを出す者】を使用した清麿が、偽物がいる場所の近くで殺せんせーを狙う罠が仕掛

けられている事を見抜いた。それを知る由もない殺せんせーは動揺するが、清麿はそれを無視してガツシユに指示を出した。

「ウヌ、分かったのだ!!」

「ラウザルク!」

肉体強化されたガツシユは一瞬の内にその男を捕えた。男が取り押さえられた拍子にヘルメットが外れたが、偽物の正体は意外な人物だった。何と彼は烏間先生の部下の1人、鶴田博和だったのだ。

「お、お主は……」

「鶴田さん、何で?」

ガツシユや渚を始め、その正体に生徒一同と殺せんせーは驚いた。鶴田さんは非常に申し訳なさそうな顔を見せる。そして清麿はこの出来事の黒幕が近くにいる事にも気付いた。

「隠れている黒幕、お前の企みは見破った!! 大人しく出てこい、シロ!!」

「へえ、よく気付いたねえ。どうして分かったんだい?」

これはシロが殺せんせーを殺す為の罠だったが、清麿の【アシンスァー答えを出す者】に見破られてしまった。シロを見て、他の生徒達も苦虫を噛み潰したような顔をした。

「お前の質問に答えるつもりは無い」

「またアンタか。殺せんせーは俺等の標的なんだけど」

「テメーは直ぐに人を操ろうとするよな」

特に清磨・カルマ・寺坂はシロに強い敵意を見せる。寺坂は中でもシロに利用されかけた事もあり、より一層不快な表情をしていた。

「やれやれ、これは地球を滅ぼす超生物を殺す為の暗殺計画なんだけどな。鶴田かれとイトナに偽物を演じてもらってあのタコをおびき寄せて捕えるつもりだったのに、どうして邪魔をされなくてはならないのか」

シロはため息をついた。顔の表情は分からないが、シロが明らかに不快な気持ちになつている事を生徒達は感じ取れた。他人を利用し、殺せんせーを貶めるような方法は褒められたものではないが、シロの言う事にも一理ある。そんなシロの言葉を聞いた殺せんせーが口を開いた。

「ふむ、イトナ君もいるのですか。ならばシロさん、

先程の毘を、私に仕掛けて下さい」

「!!……何を企んでいる?」

殺せんせーの驚きの発言に対して、生徒達はおろかシロまで怪訝な顔を見せた。

「ちよ、殺せんせー何言ってるの!!」

「何でそんな事を!!」

渚と茅野は驚きのあまり大声を上げたが、殺せんせーはいつも通りの不敵な笑みを浮かべていた。

「イトナ君もE組の生徒ですからねえ。彼が仕掛ける暗殺なら、私は受けなくてはならないのです」

E組の生徒が自分を暗殺しようとしている。よってその暗殺を自分には受ける義務がある。それが殺せんせーの考えだった。

「大丈夫なのか、殺せんせー?」

「心配いりません。さあ、イトナ君も出てきて下さい。先生を殺したいのでしよう?」

清麿が心配の言葉をかけても、何ともないと云った様子で殺せんせーはイトナを煽つた。ここまで云つたからには後には引けない。

「どういうつもりかは知らないが、それなら好都合だ。君達はそこを離れたまえ」

「そういう事なら、止むを得んか」

殺せんせーがそこまで言うのなら、生徒達にも止める事は出来ない。彼等はシロの指示に従つた。

「オイ、少しでもヒキヨーだと思つたら直ぐに止めに入るからな!」

「巻き添えを喰らいたければ好きにしたまえ」

寺坂はシロを睨み付けたが、彼はそれを何とも思わなかつた。そしてシロが持つスイツチを押すと、殺せんせーの周りを白い布が覆つた。布は金属が骨組みに使われ、四角の縦に長いテントのようだった。

「これは対先生繊維で出来た布。これで殺せんせーを動揺させる作戦だったが、まあいい。殺れ、イトナ!」

シロがイトナを呼ぶと、何処からかイトナが出現し、先生のいる布で出来たテントに入つていった。

「今度こそお前を殺す、兄さん」

イトナは触手を出現させていたが、触手に何かを装備させていた。

「驚いたかい？イトナの触手に装着させているのは対先生グローブ。これで触手同士がぶつかる度に奴にダメージを与えられる。そしてイトナは常に標的の上から攻撃する。計画通りには行かなかつたが、それでもイトナの優位は揺るがない」

シロは得意げに清磨達に自分の暗殺計画を話した。もう勝った気であるようだった。顔は隠れているが、優越感に浸っている様子は想像出来る。

「ぐ、上からの命令とは言え私がこんな事をしたばかりに……」

鶴田さんは申し訳なさそうにしていた。そんな彼の方をシロは向いた。

「まあ、彼を責めないでやってくれ。彼は職務を全うしたただけだ」

口ではそう言うが、シロは鶴田さんを労っているようには思えなかつた。しかしシロは、殺せんせーの暗殺が成功しかけているので機嫌は良さそうである。そんな彼を清磨は鼻で笑った。

「フン、少し安心しすぎじゃないのか？まだ決着はついてないだろーに」

清磨の言葉を聞いたシロは首を横に振った。

「いやいや、この状況でどうやって奴が勝てるのかを知りたいのだが」

シロは自分の優位を疑っていない。綿密に立てた計画、多少のズレはあつたがイトナに有利になるよう状況を持っていった。だから殺せないはずが無いと思っっている。そ

んな矢先に何かがはじけるような音がし、それと同時に布で出来たテントが吹っ飛んだ。

「ヌルフフ。エネルギー砲の力をコントロールすれば、イトナ君を傷付ける事無く障害物を吹っ飛ばせます。それに、イトナ君の触手で攻撃は全て見切った」

殺せんせーは余裕の表情で立っていた。殺せんせーは何度もイトナの触手を見ており、その動きに目が慣れた様子だ。一方のイトナは座り込んでおり、触手の装備もコントロールされたエネルギー砲で消し飛んでいた。殺せんせーは不利な状況にも関わらず、イトナに勝利した。

「イトナ君、そろそろE組に来ませんか？それからシロさんは私が下着ドロじゃないと言う情報を広めておくように！」

殺せんせーはイトナを改めてE組に勧誘したが、イトナの様子がおかしい。彼は頭を抱えていた、まるで激しい痛みに耐えるかの様に。

LEVEL. 42 クラスメイトの時間

「ぐ……頭が痛い。脳が裂けるようだ……」

イトナは尋常でない頭痛に苦しんでいる。生徒達は何事かと思いイトナの方を見ており、清麿はその原因を「アンサーカード答えを出す者」で調べ上げた。

「これは、触手に精神が蝕まれているのか!？」

「ご名答、良くわかったね」

シロはまるで他人事のような態度だった、かつてイトナの保護者を名乗ったのにも関わらず。触手を植え付けられた人間は力を得るが、副作用は大きい。常に触手の知識のある者が管理をしなくてはならない。

「イトナ、とても苦しそうなのだ!お主、早く何とかしてやらねば……」

「いや、イトナはここで見限るよ。後は君達の好きにすると良い。触手の維持にもお金がかかるから、結果を出せない彼とはお別れだ」

ガツシユの言葉を遮って、シロはイトナを見捨てると言い切って背を向けた。シロにとってイトナは、自分の為の駒に過ぎなかったようだ。その発言を聞いて、そこにいる者全員がシロに怒りの感情を向けた。

「テメー!! ぶざけた事言ってんじやねエ!!」

「待ちなさい!! それでも保護者ですか!?!」

シロの非情な言動に対して清麿と殺せんせーが声を荒げるが、それでもシロはイトナの方を向こうともしなかった。

「教育者ごっこしてんじやないよ、モンスター。私はお前が死ぬ事だけを望んでいる。それよりも、大事な生徒をどうにかした方が良いんじゃないのかい?」

シロはそう言っただけでその場から立ち去ろうとした。そんなシロを殺せんせーが止めようとしたが、頭痛に苦しむイトナが大声で叫ぶ。そんなイトナに気を取られたE 組一同は、シロを逃がしてしまった。

「ぐあああああつ!!」

イトナは叫び声と共に超スピードでその場を離れてしまった。咄嗟の事で、殺せんせーやガツシユペアも何もする事が出来なかった。だが清麿は【^{アンサー}答えを出す者^{トーカー}】でイトナの次に何をするかの答えを出していた、そしてイトナの容体も。

「イトナをこのままにしてはいかん、殺せんせー!!」

「それはもちろんですが、イトナ君がどこに行っただか……」

「ここから遠くない○○携帯ショップにイトナは向かっている!!」

【^{アンサー}答えを出す者^{トーカー}】の力ですね! 直ぐに向かいます!」

清磨からイトナの場所を聞いた殺せんせーが超スピードで向かった。居場所さえ分れば、弱っているイトナに殺せんせーが追い付くのは容易い。

「私達も早く行くぞぞ!!」

ガツシユの一声により、清磨達もそこに向かう事を決めた。そして彼等は律を介して他のクラスメイトとも連絡を取り、クラス全員で目的地を目指した。

その頃、携帯ショップの前にてイトナと殺せんせーが対峙していた。彼は携帯ショップを破壊しようとしたが、その直前に殺せんせーに呼び止められ、先生の方を向いた。

「兄さん、勝負だ……今度こそ……勝つ……」

「殺せんせーと呼んで下さい。勝負も良いですが、君の触手は早急に抜かなくてはならない。このままでは君の命が危ない」

「そんな、事は……どうでも、良い……」

イトナは触手に蝕まれている状態で、このままではあと2、3日で激痛に苛まれて死んでしまう。それでもイトナは殺せんせーに攻撃を仕掛けるが、彼自身かなり弱っており、殺せんせーに全て攻撃は受け止められた。そんな中、E組の生徒達が駆け付けた。

「イトナ君、クラスメイトの仲間が君を心配してここまで来てくれました」

殺せんせーは優し気にそう言った。イトナとE組は敵対していたが、多くの生徒はシロに見捨てられて苦しんでいる彼を見て放っておけない様子である。

「おいイトナ、今までテメーがした事は水に流してやるからついてこいや」
「うる……さい……」

寺坂がイトナに声をかけるが、それを彼は聞こうとしない。他の生徒達もイトナに心配の目を向けるが、清磨が何かに気付いた。

「皆、伏せろー!!」

清磨が叫んだ瞬間に爆発が起こり、あたり一面が白い何かに覆われ、それによってイトナと殺せんせーがダメージを受けていた。爆弾に対先生物質の粉が含まれていたのだ。

「イトナの触手が公になる危険性に備えて、彼を捕える準備をしようと正解だった」

シロが見捨てたはずのイトナを捕える為に部下と共にトラックでここまで来たのだ。そしてダメージを受けている殺せんせー目掛けて部下達是对先生弾をライフルで撃ち始めたが、突然の襲撃で動揺しながらも殺せんせーはどうか弾をかわしていた。

「そしてこれが第二の矢だよ。イトナ、君の最後の奉公だ」

トラックの助手席に座るシロが何かを押すと、荷台の大砲から対先生繊維のネットが発射され、悶えているイトナを捕えた。

「追ってくるんだろ？殺せんせー」

シロは殺せんせーを挑発した後、イトナを引きずりながらトラックを発進させた。イトナは触手の侵蝕に加えて、先程の粉による爆撃と対先生ネットでのダメージで苦しんでいたが、シロはそれを意にも介さなかった。

「皆さん、大丈夫ですか!!」

「……何とか」

生徒達の無事を確認すると、殺せんせーはシロ達の後を追った。そして生徒達は全員起き上がったが、シロに対して怒りの感情をむき出しにしていた。

「高嶺君はガツシユ君のラウザルクとマントを使って先に行つてよ。俺等もすぐ追いつくからさ」

「ああ、そうさせてもらう！ラウザルク!!」

「苦しんでいるイトナにあんな事をするなんて、絶対に許せないのだ!!」

カルマの言葉を聞いて、清磨はシロへの怒りを込めて術を唱えた。そしてガツシユが広げたマントに乗って、先生とイトナの元へ向かった。

「俺等もシロのヤローをボコりに行こうぜ!!」

寺坂の言葉に、生徒達が頷いた。考える事は皆同じである。

一方殺せんせーはイトナの救出に向かったが、そこでもシロは罫を仕掛けていた。まず対先生繊維のネットのせいでイトナの開放は困難だ。そしてトラックや木の上には対先生繊維を身に付けたシロの部下が対先生弾入りのライフルを持って待ち構えている。それだけではない。

(この光は……私の動きを一瞬止める圧力光線!!)

木の上には光線も準備され、殺せんせー目掛けて放たれる。そしてBB弾がイトナ目掛けて発射され、光線で体が自由に動けない中でどうにか先生はイトナの方に向かったが、弾はイトナに当たる事は無かった。

「へえ、変わったマントだねえ」

「お主達、イトナを殺すつもりなのか!!」

ガツシユペアが到着し、ガツシユがマントを使ってイトナをBB弾から庇っていた。

「ガツシユ君と高嶺君!!来てくれましたか!!」

「当然だ、皆シロに怒っているんだ!」

生徒一同、シロには業を煮やしていた。そして清磨の目にもシロに対する怒りがこもっていた、奴は許せないと。

「分かりました、それではイトナ君を捕えてるネットを何とかして下さい!それは対先

生繊維で出来ています！」

「よし、ガツシユ。その網を引きちぎるぞ、ラウザルク!!」

「又オオオオ!!」

肉体強化されたガツシユはイトナを捕えるネットを引きちぎった。そしてイトナは自分を助けてくれる彼等を、不思議そうな表情で見ていた。

「お前等……何で俺を……」

「お主、とても辛そうにしておるではないか!!見捨てるなど出来ぬ!!」

ガツシユは優しい王様を目指している。よって、目の前で辛そうにしているイトナをそのままにする選択肢は無い。

「どういうつもりだい?あのタコを殺せるチャンスだと言うのに。君達のその行動は、地球の滅亡に協力しているような物だよ?」

シロは明らかに苛立った口調でガツシユペアを睨んだが、それを見た清磨は笑っていた。彼は自分達が正しい事をしてしていると確信がある。

「勘違いをしているようだな、シロ」

「どういう意味かな?」

「俺達は殺せんせーを助けるんじゃない。クラスメイトであるイトナを助けに来たんだ

!!」

確かに殺せんせーを殺さないと地球は滅亡する。しかし、その為にイトナが傷付く事をガツシユペアは見過ごせせない。同じクラスの仲間なのだから。

「まあ、アンタに言っても分らないだろう。他人を駒としか考えていないような輩には」

「いい加減に……!!」

清麿の挑発を聞き流せなくなったシロだが、ふと周りを見渡すと予想外の光景が繰り広げられていた。

「ぐああつー!」

木の上にいたシロの部下が、カルマ・前原・寺坂などの身体能力に自信のある生徒達に突き落とされていた。落とされた部下達は、他の生徒達に布で巻かれて捕えられている。後から来るだろうクラスメイトの存在をシロに悟らせないように、清麿はシロの注意を引いていたのだ。

「ガキ共が、返り討ちに……」

部下の1人が銃を下にいる生徒に向けたが、上から現れた岡野が部下の頭を両腿で挟んだ。

「こつちも散々アンタ達に好き勝手されたからね!!」

そのまま岡野がアクロバティックな動きで、部下の1人をそのまま足で下に投げ飛ば

した。

「おおっ！凄いや足技なのだ、ひなた!!」

「当然！こういうのならガツシユにだって負けないよ!!」

女生徒の中でも特に接近戦に自信のある岡野は、度々ガツシユに対抗心を燃やしている。そんな彼女は今回も見事な技を披露した。

こうしてシロの部下は全員捕えられ、光線も止められた。そんな光景を見たイトナが言葉を発した。

「お前等……どうして」

イトナは自分と敵対してきたクラスメイトが自分を助ける理由が分からなかった。

「勘違いしないでよね、シロの奴にムカついていただけなんだから。殺せんせーが行かなければ、放っておくつもりだったし」

速水は強気な口調で言った。彼女はイトナを本当にどうでも良いと思っっている訳ではないが、素直ではない一面が出てしまっていた。

「速水が、勘違いしないでよね、って言ったぞ」

「これが生ツンデレか、良いね」

岡島と竹林の会話のせいで、シリアスな場面が台無しになりかけていた。それを聞いた速水も、2人に呆れていた。

「ウヌウ。凜香、冷たい事を言うでない……」

「……………ガツシユ、それは……………」

「ぷっ」

速水の言葉をそのままの意味で受け取ってしまったガツシユは、悲しそうな顔をしていた。彼にはツンデレの概念が分からない。それを見た速水は少し気まずそうな顔をしており、千葉に笑われた。

（千葉、覚えてなさい！）

「！！」

千葉の笑いを速水は聞き逃がさず、彼を睨み付けて怯ませた。そんなシリアスが崩壊しつつある場面で、殺せんせーが口を開いた。

「去りなさい、シロさん。イトナ君はこちらで引き取ります」

しかしこの圧倒的不利と思われる状況下でも、シロは負けを認めてはいない様子だった。シロにはまだ手段が残されているようだ。

「やれやれ、アレは使いたくなかったんだが……」

シロはトラックからスーツケースを取り出した。それをシロが開くと、中から緑色の

スライム状の物体が出て来て、それは2 m程の人型に変化した。

「コイツは触手細胞を培養させた物だね。生き物を媒体にしているから知能は無いが、疲れを知らない、よってどんなダメージを受けても攻撃を続けられる」

「な……シロさん、それは一体?!」

その物体からは何本もの触手が伸びて、そこにいる者を無差別に襲い始めた。

「コイツは試作段階だね、私でも制御が出来ないんだ。生徒達も被害を受けたくなかつたら、大人しく帰った方が良いよ。コイツがタコを殺して仕舞い……」

「ガンレイズ・ザケル!!」

シロは得意げに言いかけたが、ガツシユペアの呪文にそれは遮られた。そしてガツシユから放出される電撃の弾は、清麿が触手の弱点を見抜いた上で確実に撃ち抜いていた。

「また邪魔をするのかい? 地球を救う為なのに」

「アンタ言ったよな、自分でも制御出来てないって。ならばそんな物体に対して安易に背は向けられない。ここからは自分達の身を守るために戦わせてもらう!!」

シロの難癖に清麿は言い返した。殺せんせーを殺す為なら何しても許される訳では無いのだから。

「! 清麿、アレは……」

ガツシユが触手細胞を指差したが、それは先程の傷を高速で治していた。殺せんせー並の再生能力であるが、疲れを知らないそれは再生で力を使っても速度を落とす事は無い。そして再び触手が伸びてきて、ガツシユに迫った。

「ザケルガ!!」

清磨が呪文を唱えたと同時に一直線の電撃が触手を破壊し、細胞の本体にも直撃したが、やはり傷の修復を始めていた。

「さつきも言ったがこれは疲れを知らない。よつて再生の速度も他の触手生物よりも早いし、体力の制限も無い」

「つまり、一撃で消し飛ばす必要があるんだな」

「そうなるね。それが出来れば、だけど」

この触手細胞相手に生半可な攻撃は無意味だ。そして戦いが長引くほど、周りが被害を被る可能性が高くなる。それは阻止しなくてはならない。他の生徒達を守りたい、そんなガツシユペアの意志を汲み取ったかのように、本の光が増した。

「ウヌ、バオウを使うべきなのか……」

「いや、それはしない。たった今新しい術が出た、今から俺の言う通りにしてくれ」

赤い本には新たな術が出現した。そして清磨はガツシユに耳打ちをして指示を出した。

「皆、下がっててくれ!!」

清麿がそう言うのと、生徒達がそれに従った。しかし、

「高嶺君、ガツシユ君!ここは私が……」

「いや、殺せんせーはまだダメージが残っているから俺達に任せてくれ。それに新しい術にも慣れておきたい」

殺せんせーが生徒達を守る為に自分で戦おうとしたが、清麿は自分とガツシユで戦うと言った。シロによる爆発を受けた殺せんせーも万全の状態では無いのだ。

「高嶺君とガツシユ君だけであれをどうにか出来るの!?!」

渚を始め、生徒達が心配の眼差しでガツシユペアを見ていた。それでも、清麿の顔には余裕の笑みが浮かんでいた。

「分かりました。ただし、少しでもピンチになったら、私達も参戦します」

「そうしてくれ」

「頼むのだ」

殺せんせー達との話し合いが終わると、ガツシユペアは触手細胞と対峙した。そして、

「ラウザルク!!」

肉体強化されたガツシユは触手細胞に向かった。その時、細胞から再び触手が出てき

てガツシユを襲ったが、ガツシユは足を止めなかった。

「ナイブス・ザケルガ!!」

「うおおおお!!」

ガツシユの持つ対先生ナイフが電撃を纏い、迫りくる触手を清磨の指示を聞きながら弱所を切り裂いた。

「ガツシユ君のナイフ術もさることながら、高嶺君も良い支持を出すね」

「凄い！触手細胞相手に負けてないどころか、むしろ優勢だ！」

その光景を見て、カルマと茅野を始め、多くの生徒が感心していた。

「感心ばかりしてないで、俺達もいつでも援護出来るようにしないと」

「そうね。それにまたシロが何か横やりを入れてくる可能性もある」

そんな中で千葉と速水はシロの妨害を警戒しながら、シロの部下から奪ったライフルを構えた。

その一方でガツシユは触手細胞の目の前まで来ていた。

「ガツシユ！そのままソイツを空中にブン投げろ!!」

「ウヌ!!」

ガツシユは自分より大きい触手細胞を力いっぱい投げ飛ばした。その後ガツシユはラウザルクをといた。

「ガツシユ、奴の方を向け！第14の術、エクセレス・ザケルガ!!」

清磨が新たな術を唱えると、ガツシユからはX状の巨大な電撃の光線が発射された。その電撃は触手細胞に直撃した。

「そのまま細胞を消し飛ばす!!」

清磨は声を上げてさらに心の力をつぎ込んだ。そして術を出し終えた時には、清磨の言う通りに触手細胞は跡形もなくなっていた。

「な、バカな……いくら試作段階とは言えこれ程一方的に……」

それを見たシロは明らかに動揺していた、余程この触手細胞には自信があったようだ。しかし、この術に驚いていたのはシロだけでは無かった。

「「「な……何あれ!!」」」

E組一同、エクセレス・ザケルガの威力を見て目が飛び出そうになっていた。ガツシユペアが生徒達の前で初めてディオガ級以上の術を使った瞬間だった。殺せんせーは体を震わせていた。

(何という術を……あれをモロに喰らうのはヤバイ!!)

殺せんせーがテンパリながら冷や汗を掻いている中で、動揺していたシロがようやく口を開いた。

「……君達、何者なんだい?」

「答える義理は無い。もしこれ以上俺達の詮索を続けるようなら、お前の非人道的な実験の事を全世界に広めてやる！」

ガツシユペアの術についての言及を辞めさせるために、シロに清磨は脅しをかけた。触手の事が知られたくないのは関係者全員同じである。勿論清磨にもリスクのある事だが、シロを黙らせる為に強気な態度に出た。

「まあいい、これは少し考えないといけなくなつたね……イトナはくれてやるよ、殺せんせー。どの道2〜3日の命だ」

シロはそう言つてトラックでこの場を去つた。

苦しそうにしているイトナを、E組一同は取り囲んでいた。

「イトナ君に力や勝利への執念がある限り、触手細胞は離れません。このままではイトナ君は死んでしまう。力の執念を消す為には、そうなつた原因を知らなくてはいけません」

殺せんせーは困つた表情でそう言つた。まずはイトナの事を知り、執念を無くさせて触手を抜き取る。その方法を考えていた。

「とは言え、どうすれば……」

「高嶺の【答えを出す者】^{アンサーカー}なら、原因を調べられるんじゃない？」

三村と菅谷が清麿の方を向いた。確かに短期間で原因を調べるのはそれが確實である。

「ふむ。人の個人情報を見てみようで気が引けるが、そうは言ってもらえんからな」

「ちよつと待つて」

清麿が調べようとしたが、不破がそれを遮った。

「イトナ君がどうして携帯ショップを襲ったのか、律とやり取りしてたんだ。そうしたら……」

不破は事前に律と共にイトナの事を調べていた。そしてイトナが倒産したスマホの部品を取り扱う町工場の社長の息子だと言う事が判明し、その社長夫婦は雲隠れをした様である。それを経験して親が力で負けたと考えたイトナは、誰にでも勝てる力を求めるようになった。それを聞いて多くの生徒が悲し気な視線をイトナに向けていた、1人の生徒を除いて。

LEVEL. 43 仲間入りの時間

多くの生徒が哀れみの目をイトナに向けるが、寺坂はそうはしていない。それどころか、呆れ返るような表情を彼は見せている。そんな寺坂は吉田と村松の肩を叩いたのち、狭間と目を合わせた。

「ケツ、それでグレただけかよ。悩みなんて誰にもあるだろうが……けどな、そんなのはバカやってりや割とどうでも良くなったりするもんだ。オイ、コイツは俺等んとこで面倒見させろや」

寺坂グループで何かをやるうとしてしているようだ。そして彼はイトナの首根っこを掴み、ガツシユペアの方を見た。

「ガツシユと高嶺も付き合え。ガツシユはイトナとダチになりたがってたからな」

「ウヌ、分かったのだ!!」

「お、俺も行くのか？まあ、構わんが」

「アンタはガツシユの保護者なんだから付き合いなさい」

寺坂はガツシユペアにも声をかけた。彼はガツシユが始めにイトナに話しかけ、友達になろうとした事を覚えている様である。そしてガツシユの保護者枠で、狭間に清磨も

同行するよう言われた。

こうしてイトナの触手への執着を無くすために、寺坂グループの4人とガツシユペアが連れまわすことになった。触手の暴走を防ぐ為にイトナには対先生繊維のバンドナを付けさせた。当の彼は意識が朦朧としており、清麿に負ぶさっている。

「さて……おめー等これからどうするべ？」

「寺坂、お前……」

なお、どうすれば良いかを寺坂は何も考えていなかった。それを聞いた清麿は呆れた表情で涙を流していた。

「何も考えてねーのかよ!!」

「無計画にも程があるだろ!!」

寺坂の言葉に吉田と村松がたまらずツツコミを入れた。堂々と何かしようと思せた矢先に何も考えていない発言である為、無理もない。そんな時、ガツシユの腹の音が聞こえた。

「お腹が空いたのだ」

「それは同感……そう言えば村松んちってラーメン屋でしょ？取り敢えず腹ごしらえで

良いんじゃないの？」

狭間の提案により、まずは村松宅のラーメン屋に行くことになった。しかしガツシユは少し嫌そうな顔を見せる。ガツシユペアは村松宅のラーメンを前に食べたが、残念ながら口に合わなかったのだ。

「こらガツシユ、そんな顔をするんじゃない。何か食って、イトナには少しでも元気になるってもらわないといけないんだからな（……まあ、気持ちは分かってもらえないが仕方ない）」

そんなガツシユの表情を見かねた清磨が注意をしたが、清磨もあまり気は進んでいない様子だった。そんな彼等の様子を、殺せんせーと他のE組の生徒達も見守っていた。

一行は腹を満たす為村松家のラーメン屋に訪れた。イトナはフラフラになりながらも、どうにか麺をすすっている。

「どうだ、不味いだろ？親父にはレシピ改良するよう何度も言ってるんだがな……」

「ああ、不味い。手拔きの鶏ガラを化学調味料で誤魔化しているな（……こんな店、チエーン店が来たらずぐに潰れるぞ。家の工場のように）」

イトナは意外とラーメンについて詳しくかった。そんな彼は無愛想ながらも、村松宅の

ラーメン屋を心配する。そして食事を取ったイトナの顔色が、先程よりは生気を取り戻しており、それを見てガツシユが口を開いた。

「さつきよりイトナが元気になった気がするのだ！次はバルカンで遊ぼうぞ。清麿、イトナの分のバルカンを作るのだ！」

「ああ、言うと思ったよ」

ガツシユが始めにイトナに話しかけた時、イトナにバルカン300を紹介した。その時はイトナに無視されてしまったが、今ならどうか。

「とは言え、お菓子の箱が無いなら……」

「今持ってきてやるよ。割り箸は店にあるのを使えばいいだろ」

清麿の言葉を聞くまでもなく、村松は奥からお菓子の箱を持って来た。

「オイ、これで良いかよ？」

「ああ、構わんぞ。村松、やけに準備が良いな」

「偶々だよ」

村松が持つて来てくれたお菓子の箱と割り箸を使って、清麿は5分でバルカン300を作り上げた。その手慣れた作業を寺坂グループはラーメンをすすりながら見ていた。

「ホレ、これでどーだ？」

「……貰っておく」

前回はまるで感心を示さなかったイトナだが、今回はそれを素直に受け取ってくれた。イトナは貰ったバルカンをしばらく眺めていた、彼は興味を持ってくれた様である。

「ウヌ!!これで遊べるのだ、イトナ!!」

「……どうやって遊ぶんだ?」

「それはだの……」

ガツシユはイトナにバルカンでの遊び方を説明した。お互いのバルカンを使って空き缶を転がし合うと言う遊び方である。テイオも「バルンルン」と言うバルカンの壺種を清磨に作ってもらっていた為、2人はその様に遊ぶ時があった。それを聞いた村松が奥から空き缶を持って来てくれた、準備の良いラーメン屋である。

「さあ、行くのだ!!イトナ!!」

「……ああ」

2人はバルカンでの遊びを始めたが、何とも言えない雰囲気漂っている。しばらく彼等が遊んでいた後、その雰囲気断ち切るように吉田が口を挟んできた。

「次は家に来いよ!現代の技術を見せてやる!」

そして吉田は口角を上げながらガツシユからバルカンを取り上げたが、ガツシユは悲壮感に溢れた顔を見せた。

「もつと楽しい遊びを教えてやるぜ!!」

「又オオオオオ、バルカンを返すのさー!!」

吉田にバルカンを取り上げられたガツシユは泣き叫んだ。友達を取り上げられたのだから無理もない。そんな光景を清磨と狭間は呆れ混じりの表情で見ている。

「……まあ。バイクのスピードでイトナの気が晴れるなら、それに越した事はないからな」

「次は吉田の家で決まりかしらね」

「清磨! 綺羅々! バルカンを取り返して欲しいのさー!!」

ガツシユは懇願するがそれは無視され、そのまま一行は吉田の家に向かう事になった。

吉田は実家の敷地内でイトナを後ろに乗せてバイクを走らせているが、彼はバイクの免許は持っていない。

「無免なのに大丈夫かしら?」

「家の敷地内だし、大丈夫じゃね? 吉田の奴、サーキットにも行ってるみたいだし」

「まあ。あれだけバイクに詳しいんだから、問題ねーだろ」

無免の事を狭間が心配するが、村松と寺坂は特に気にも留めていなかった。乗せてもらっているイトナも満更でもない顔つきである。吉田のバイクがこのような場面で活かされようとは、誰も思いも寄らなかった。

「おおっ！ジード殿の時も思ったが、バイクはカッコいいのう!!」

「ああ。吉田の奴、見事に乗りこなしている。流石だ」

吉田の運転技術にガツシユペアも感心していた。

「ビーよイトナ、テンション上がったか?!」

「……悪くない」

「よっしゃー、もっと上げていくぜ!! 必殺高速ターンブレーキだ!!」

バイクに乗る事で、イトナ以上に吉田のテンションの方が上がっていた。そんな彼が勢いづいてバイクでターンをしたが、何とイトナは茂みに投げ飛ばされてしまった。

「又オオオオオ！イトナ、大丈夫か?!」

「おい、何やってんだ?!」

「吉田テメー!! ショックで触手が暴走したらどーすんだよ!! 早く助け出せ!!」

「いや、流石に大丈夫じゃね?」

ガツシユペアと寺坂が直ぐにイトナに駆け寄ったが、彼は気を失っていた。口では平気だと言う吉田も冷や汗を掻いており、村松と共にイトナに水をかけて、意識を取り戻

そうとさせていた。

「イトナ、目を覚ますのだから!!」

ガツシユがイトナを呼ぶ声の木霊する。ガツシユ・寺坂・吉田・村松がイトナの目を覚まさせようとする光景は他のE組も見ていた。

「遊んでるようにしか見えないんだけど……」

「あいつ等基本バカだから仕方がない」

矢田とカルマを始め、生徒達の多くは呆れた表情をしていた。こんな事で本当にイトナの執着を無くせるのかと、気が気でない様子だ。

場面は清磨達に戻る。何とか目を覚ましたイトナを見て、狭間が大量の本を取り出した。

「……狭間、まさかその本達は?」

「これ以上バカ共には任せておけないからね」

狭間は邪悪な笑みを浮かべてイトナに本を薦めていた。しかし本の中身が分かっている清磨は、嫌な予感が頭をよぎる。

「今のイトナには刺激が強すぎないか?」

「だから良いんでしようが……さあイトナ、シロに復讐しましょう。この本を読んで暗い感情を増幅しなさい」

狭間は復讐を題材とした小説をイトナに読ませようとしていた。狭間は読書家ではあるが、読んでいる本の内容はえげつない物が多い。

「綺羅々は何の本を持っておるのだ？」

「ああ、それはな……」

清磨はガツシユに本の内容を教えた。暗い復讐劇はガツシユには耐えられなかった様子で、彼は体を震わせていた。そんな時、

「『難しいわ!!』」

寺坂・吉田・村松がツツコミを入れた。確かに中学生が読むにしては、この本は難易度が高いかもしれない。

「狭間、小難しい上に暗いんだよ!! 何かねーのか、簡単にテンション上がるやつ!! コイツ頭悪そうだから……」

寺坂が言いかけると、イトナが体を震わせ始めた。触手の発作が始まり、頭の触手はバンダナを簡単に破いた。

「イトナ、どうしたと言うのだ!!」

「おい、何か震えてんぞ……」

「寺坂が頭悪いとか言うから、切れたんだろ」

ガツシユ・吉田・村松がイトナの豹変を見て動揺していた。そうしている間にもイトナの触手は伸びてきており、真っ黒に染まっていた。

「ぐうう……」

「違う、触手の発作じゃないの」

「いかん、暴れ出すぞ!!皆下がれ!!ガツシユ、俺達でイトナを抑え込む!!」
「ウヌ!!」

狭間と清磨は触手の発作に気付いた。そして清磨はガツシユ以外を下がらせ、自分達でイトナを抑えようとして赤い本を取り出した。しかし、

「下がるのはおめー等だ、高嶺、ガツシユ。俺に任せろや」

「寺坂、何を言っておるのだ!!」

「今のイトナは弱っているが、タダでは済まないぞ!!」

「うるせー!!大丈夫だって言ってるんだろ!!」

敵意をむき出しにするイトナに対して、寺坂がガツシユペアよりも更に前に出た。そして彼は2人の制止も聞く耳を持たない様子だ。

「寺坂、本当に大丈夫なんだな?」

「そんなに心配なら、テメーのチート能力で俺が大丈夫かどうか見てみろよ。最もどん

な答えが出たとしても、下がる気はねーがな」

「……分かったよ」

寺坂の意志は固かった、彼は引く気は一切ない。それを察した清麿はため息をついて、寺坂に任せる事にした。

「良いのか？ 寺坂……」

「ガツシユ、今はアイツに任せよう。だがあんまりヤバそうなら援護する。2人から目を離すな！」

「分かったのだ！」

「だから助太刀は要らねーよ、俺だけで十分だ」

ガツシユペアの助けも不要だと言い張る寺坂は、あくまで1人でイトナを止める気だった。そしてイトナと寺坂、それぞれシロに利用されていた者同士が対峙する。

「俺は、適当にやってるお前等とは違う。今すぐ、アイツを殺して……勝利を……」

「俺だつて考えてたよ、イトナ。あんなタコ、すぐにでも殺してやりたいってな。けど今奴を殺すのは無理だ」

寺坂はかつて殺せんせーのよるクラスの変化が気に食わず、楽しんで暗殺を成功させる為にシロ達に協力した事があつた。しかしその結果、クラスメイトの命を危険に晒す事となつた。早まつた結果として失敗した寺坂は、先生暗殺の為に焦るイトナに対して思

う所があつた。

「イトナ、無理のあるビジョンは捨てちまいな。楽になるぜ」

「うるさい!!」

寺坂目掛けて触手が放たれたが、彼はそれを受け止めていた。そして前回と同じく寺坂には吐きそうになる程の痛みが襲っていた。

「おい寺坂!!」

「大丈夫かの?!!」

「スゲー痛てーけど、問題ねえ。2回目だしイトナの奴が弱ってるから、捕まえやすいぜ」

ガツシユペアは寺坂を心配するが、彼は無事な様だ。触手を捕まえながら寺坂が話を続けた。

「村松も吉田もよ、家の仕事継ぐ為に、あのタコに経営の勉強教わってんだわ。そんな時に言われたんだと、今は儲かつて無くても、いつか繁盛させりや良い”ってな」

今すぐは駄目でも、いつか成功させれば良い。殺せんせーの村松と吉田への教えを、寺坂は焦るイトナに伝えた。そして彼は触手を受けた痛み能耐えながらもイトナに近づき、げんこつを喰らわせた。

「だからイトナ、一度や二度負けたぐらいでグレてんじゃねー! いつか勝てばいいじゃ

ねーか！タコの暗殺だって何度失敗しようが、3月までに一回成功させれば俺等の勝ちだ！その賞金で工場を買い戻せば、親も帰って来るだろ!!」

寺坂はぶつきらぼうながらも、彼なりにイトナを諭す。それを聞いたイトナは再び口を開いた。

「だったら、次のビジョンが見えるまではどうすれば……」

「そんなの今日みたいにかみみたいに過ごせばいいだろ！その為のE組だろうが!!」

寺坂の一言を聞いてイトナは目を見開いた。そんな過ごし方は、かつての自分には考えられない事である。そして寺坂の後ろには、ガツシユペア・村松・吉田・狭間が口角を上げながら集まっていた。

一方でそんな彼等のやり取りを見たカルマは、満足気な笑みを浮かべて口を開いた。

「あのバカって、ホント適当な事言うよね。けどバカの一言ってのは、こーいう時に力抜いてくれるのよ」

カルマの言う通り、寺坂の一言でイトナの触手から力が抜けた。

「俺は、焦ってたのか……」

「だと思っぜ」

イトナから執着の色が消えた事を見た殺せんせーがイトナの触手を引き抜き、イトナの命の危機は去った。

「イトナ君、明日から殺してくれますね？」

「……良いだろう」

「これでイトナと友達になれるのだ!!」

「そうだな！」

こうしてイトナはようやくE組の仲間に加わった。そんな光景をガツシユペアを始め、E組一同は嬉しそうに見ていた。

そして次の日から早速イトナが登校してきたが、彼は寺坂グループに属する事となる。

LEVEL. 44 ラジコンとコードネームの時間

「清麿、そろそろ帰ろうぞ……ウヌ？」

イトナが登校するようになってから数日経った日の放課後、ガツシユが清麿と帰ろうと教室に来たが、男子一同はイトナの席の周りに集まっていた。

「お、ガツシユか。今はイトナが暗殺に使う為のラジコンの戦闘車を作ってるんだ。これが中々ハイテクなんだよ」

「何とーイトナ、凄いのだ!!」

イトナは父親の工場で基本的な電子工作は大体覚えており、見事にオリジナルのラジコンの制作を進めていた。その技術は、手先が器用な清麿が舌を巻く程である。

「こんなのは、寺坂以外なら誰でも出来る」

彼は口ではそう言うが、容易な事では無い。ちなみにその発言に寺坂は頭に来ていた。

「いや、これは誰にも出来る事じゃないぞ」

「そうだね……（イトナ君、触手を持ってた時と全然違う）」

イトナが手慣れた様子でラジコンを開発する様子に、磯貝と渚も感心する。そして彼

は自分の父親の言葉を思い出した。

『最初は細い糸で良い、徐々に紡いで強くなれ。それが“糸成”、お前の名前に込めた願いだ』

(……何で忘れていたのかな、自分のルーツを)

イトナはそんな事を思いながら、完成させたラジコンを操作して見せた。手作りのラジコンは、多くの男子生徒が見入るのには十分魅力的である。

「そうだ、お前等に教えないといけない事がある。殺せんせーの弱点、シロから聞いた標的の急所。奴の“心臓”、位置はネクタイの真下。そこに当たれば一発で絶命出来るぞうだ」

イトナの持つ重要な情報、殺せんせーの弱点がまた一つ露呈した瞬間である。

その頃、殺せんせーは空を飛んで別の場所に移動していた。

「恐らく知られたでしょうねえ、私の急所も。イトナ君の加入、高嶺君の【アンサートリガー答えを出す者】。ますます暗殺が楽しくなってきましたね、ヌルフフフ」

自分が不利になるのにも関わらず、殺せんせーは相変わらず笑みを絶やさない。

場面は再び教室に戻り、イトナが自分のカバンから何かを取り出した。

「そうだガツシユ、お前に渡したい物があるんだ」

「ウヌ、それはまさか……」

それは全身が金属で出来たバルカン300だった。更にイトナはリモコンを取り出し、それを操作して見せた。

「人型のラジコンは複雑な動きが必要になるからな、制作の難易度が高い。それもまだ試作段階だ」

「イトナ……本当に良いのか？」

実際に動くバルカン300を見て、ガツシユは目を輝かせる。そして他の生徒も、バルカン300が動く様子に驚きを隠せなかった。

「構わない。お前達からも貰っているからな」

イトナはそう言って、清麿が作ったバルカンを取り出した。それを見たガツシユは更に嬉しそうな表情を見せた。

「本当にありがとうなのだ!!」

「良かったな、ガツシユ」

「リモコンの操作方法なら、高嶺にでも教えてもらえ」

イトナはガツシユにラジコンを渡した。口には出さないが、内心では転入当初からガツシユが友達になろうとしてくれた事に感謝している。それと同時に、ガツシユを無視してしまった事を申し訳なく思っていた。

「俺はこれを始めて見るんだが……」

「お前ならこれくらい、初見で扱えるだろう」

「清麿、これはどうやって使うのだ？」

「あー、これはだな……」

なお、ラジコンの操作については清麿に丸投げである。しかし清麿も持ち前の器用さを活かしてラジコンの操作を難なく行い、使い方をガツシユに教えた。そしてイトナは、先程の戦闘車のラジコンの操作に戻った。

「凄い、バルカンが動いている！」

「こんな物まで作れるのか……」

ガツシユペアがバルカン300のラジコンを操作する様子に渚と磯貝が興味を示すが、他の男子生徒は戦闘車の方に夢中だった。イトナはこれを暗殺に使おうとしている。

「ウヌー！渚と磯貝も、使ってみると良いぞ！」

「何でお前が得意気なんだ？」

「ハハハ」

ガツシユに言われて、渚と磯貝もラジコンの操作を始めた。バルカン300が動く光景は、ガツシユを更に興奮させる。しばらく動くバルカン300を見物した後、清磨が時計に目を向けた。

「おっと、もうこんな時間じゃないか。ガツシユ、そろそろ帰ろう」

「そうだの。もつとバルカンで遊んでいたいのが、特訓もしないといけないのだ」

清磨が帰り支度を始めた。それを見たガツシユも残念そうな表情をしながら帰る準備に取り掛かる。

「2人共忙しいな。頑張れよ！」

「また明日ね！」

帰ろうとする2人に渚と磯貝が帰りの挨拶をしてくれた。ガツシユペアはそれに返事をした後、イトナの方を向いた。

「イトナ、本当にありがとう！俺達は帰る……」

清磨がイトナに礼と帰りの挨拶を言おうとしたが、彼を取り囲む男子生徒の雰囲気がいっぴきなくシリアスな物になっていた。

「お前等、帰るならラジコンはそこに置いていってくれ。それはまだ試作段階だから、改良点は多々ある」

「分かったのだ！」

「ところで、皆どうしたんだ？」

イトナはまだまだバルカン300のラジコンを改良するつもりである。ガツシユペアは言う通りにしたが、清磨は他の生徒達の気合の入りようが気になっていた。

「2人共、帰つちまうのか。残念だ」

「……最も、ガツシユには早い話だろうから仕方ないさ」

岡島と竹林が何かを企んでいる様な素振りを見せる。そして他の生徒達も帰ろうとするガツシユペアを見て、残念そうな顔を見せた。

「……皆、どうしたのだ？」

「気にしなくて良い、お前達も忙しいんだろ？本番の暗殺の時に力を貸してくれればそれで問題ない」

（まあ、何か良くない事を考えてるのは確かだな……巻き込まれないようにするか）

イトナを始め、ガツシユペアに真相を教えようとする生徒は誰もいなかった。そんな彼等の様子を見た清磨は、嫌な予感がしていた。

「お前達の戦力は大きい。ラジコンの力と合わされば、あのタコをより殺しやすくなる」
「そうだな、協力して暗殺を成功させよう！」

「皆、頑張ろうぞ！」

イトナはかなりガツシユペアを信用している様子だ。彼等が殺せんせーと同様に、率先して自分を助けてくれた事が嬉しかったのだ。そんなイトナにガツシユペアは手を振った後、2人は帰路に着いた。

次の日ガツシユペアが登校すると、片岡を始めとした女生徒が、岡島等の男子生徒を物凄い勢いで責め立てていた。2人は何事かと考えていると、片岡が近付いてきた。

「高嶺君とガツシユ君!! 2人はこの事に関わって無いのよね!!」

「待て、片岡! 何の話をしている!!」

「メグ、どうしたのだ!!」

片岡が言う「この事」について、ガツシユペアは何も知らない。そんな素振りを2人が見せていると、今度は中村が彼等の方に向かってきた。

「まあ、アンタ等が何も知らないのは本当みたいだね! それなら良いわ!!」

「ウヌウ、莉桜まで……」

彼女はそれだけ言うと、再び片岡や他の女子と共に男子生徒を怒鳴り始める。何が何だか分からない2人は、近くにいた渚と磯貝に事情を聞いた。

「ああ、2人共。実はな……」

磯貝が訳を説明してくれた。イトナは昨日ラジコンの操作をしていたが、そのカメラでクラスの女子達のスカートを覗かないかと言う話になった。男子生徒と律がそれぞれ役割を果たしていたが、結局女子達にそれがバレてしまい今に至る。盗撮に手を貸さなかつた渚と磯貝はお咎めが無い様子だ。

「そんな事があつたとは……」

「お前等、何で止めなかつたんだ？」

清麿が呆れ混じりにそう聞いた。

「まあ、あくまで暗殺の為と言う事だつたから……」

「それに、イトナ君がクラスに馴染んでる様子が嬉しくて……」

渚と磯貝が苦笑いをしながら答えた。イトナは男子生徒と共に悪巧みを楽しんでいたようだが、肝心の本人がその場にはいない事にガツシユペアは気付いた。

「イトナがいないじゃないか……」

「何処に行つてしまったのだ？」

「イトナならサボリだぞ」

「カルマ君と一緒にどっか行つちやつた」

イトナはこんな状況にも関わらず、平然と女生徒達の説教から逃れていた。なかなか強かである。それを聞いた清麿はため息をついた。

「やはり、女の子を怒らせてはいけないのだ」

激怒する女子達を見たガツシユは誓っていたが、何処か他人事な様である。

「ガツシユ、言ってる割に平気そうな顔をしてるじゃないか」

「ウヌ、テイオやパティの方が怖かったからの」

「それ、本人達の前で絶対に言うなよ……」

直接自分が怒られていないのもあるが、ガツシユにとっては今の女生徒達よりもテイオとパティの方が怖い。そして女子達の叱責は止まる気配を見せなかった為、渚が仲裁に入った。

ラジコン騒動の次の日、ガツシユペアが教室に入ると茅野の大声が聞こえた。

「え!! 木村君の名前って『正義』ジャスティスなの!! 『正義』まさよしじゃないんだ……」

「そうなんだ、皆には『まさよし』って読んでもらってる」

木村の名前の話をしている様だ。彼の両親は警察官で、正義感で舞い上がってこの名前を付けられた。これにより木村は何度もからかわれて来たが、名前の文句を彼の親は許さなかった。

「何と、そうであったのか……」

「俺もそう読むのは知らなかった。所謂『キラキラネーム』と言う奴か……」
「そうなるな」

ガツシユペアもこの話題に入っていた。彼等がその話をしていると、狭間が近付いてきた。

「キラキラって私に対する当てつけかしら？ 全く……私なんてこの顔で『きらら』だからね。ちつとも名前に合っていないやしない」

「え、えつと……」

狭間の母親はメルヘン脳な面があり、彼女はその名前を付けられた。しかし親はヒステリックを起こしやすく、狭間の人格にも多少なり影響を及ぼしている。そんな彼女の話を聞いて、木村は何と言ったら良いか分からない様子だった。そんな時、

「大変だね、皆。親にへんてこな名前付けられて」

「『え』」

カルマがまるで他人事のように会話に混ざってきた。クラスでも特に珍しい名前をしていいる彼がこのような態度をしており、クラス一同驚愕していた。

「俺は結構気に入ってるけどね、この名前……と言うか、高嶺君の『清麿』ってのも中々珍しいと思うんだけど」

「『た、確かに……』」

「言われてみればそうだな。気にした事も無かったが」

カルマの言う通り、清麿の名前もほとんど見かけない。その事には本人も納得していた。

「名前と言えばガツシユ君。魔物の名前って、どんなのがあるの？」

「それはだの……」

この話題を聞いて、茅野はガツシユ以外の他の魔物の名前にも興味を示した。そしてガツシユは自分の知っている名前を上げていった。

「ティオ、ウマゴン、キャンチョメ……」

「待てガツシユ、ウマゴンは本名じゃないだろう」

「ウヌ、そうなの」

ガツシユはナチュラルにウマゴンの名前を出したが、彼の本名は“シユナイダー”である。しかしガツシユはウマゴンの本当の名前を思い出せていない。

「他にも兄のゼオンにコルル、ブラゴ、ウォンレイに……」

「魔物の名前はカタカナ読みが基本になるのかな。イマイチ法則性が分からないや」

「他にも色んな名前の魔物がおるぞ」

ガツシユは引き続き他の魔物の名前を出した。多くは彼が友達となった魔物である。

「ガツシユ君、魔物の友達がたくさんいるんだね！」

「ウヌ！また皆とも会いたいのだ！」

ガツシユは様々な戦いを経て、数多くの魔物と友達になった。そんな彼に茅野が感心しており、2人は仲良く話を続ける。それを清麿が見ていたのだが、

「お、高嶺。また嫉妬してるのか？」

「またとは何だ、またとは。嫉妬なんて一度もしてないぞ……それより木村、お前の名前の話をしてたんじゃなかったか？話が逸れるような……」

木村に嫉妬の疑惑を向けられてしまった。やはりこの流れは恒例になりつつある。クラスが名前の話で盛り上がっている時、清麿の頭にはある名前が浮かんだ。

(名前と言えば、アイツを思い出すな)

清麿が思い浮かべていたのは、ファウードの体内魔物「ウ○コティンティン」である。名前の話題を聞いて、印象に残る名前として奴の事が頭に浮かんでしまったのだ。

(恵さん、災難だったな……)

恵はアイドルにも関わらず、人前で奴の恥ずかしい名前を大声で呼ぶハメになってしまった。その時の彼女の精神的ダメージは計り知れない。清麿がその時の事を思い出している。

「名前は先生にも不安があります」

殺せんせーが会話に混ぜてきた。『殺せんせー』の名前は茅野に名付けてもらっ

たのだが、鳥間先生とビッチ先生がこの名前を呼んでくれない事に不満がある様子だ。「それが先生悲しくて……」

殺せんせーは顔を触手で隠しながら鳥間先生とビッチ先生に視線を送る。それを見た2人は何とも言えない表情を見せた。

「じゃあさ、皆の事コードネームで呼び合うのはどう？」

そう言い出したのは矢田だ。南の島の殺し屋達のような異名があればカッコいいのは、との事である。

「良いアイデアですね、矢田さん！コードネームが決まり次第、今日一日それ以外で呼ぶのは禁止で！」

「何だか、面白そうなのだ!!」

こうしてE組一同、全員でお互いのコードネーム候補を考え、殺せんせーのくじ引きによつて各々のコードネームが決定した。そして体育の授業が始まった。

今日の体育は逃げ回る鳥間先生を標的に、生徒が銃のインクを命中させると言う内容だ。勿論授業中もお互いにコードネーム呼びである。ちなみに鳥間先生は「堅物」と呼ばれていた。

(「中二半」と「鬼磨」に退路を塞がれたか！そして……)

「又オオオオ!!」

「行け、ガ……」
「電気ネズミ!!」

「電気ネズミ」ことガツシユが堅物に近距離から銃で狙い撃ちしていた。「鬼磨」こと清磨が指示を出していたが、全てかわされる。

「電気ネズミ、自分の身体能力に頼って走り回るだけでは銃は当たらんぞ!!もつと狙いを定めるんだ!!」

「ウヌ!!」

電気ネズミの身体能力はかなりの物だが、射撃の成績はあまり芳しくなかった。しかし堅物相手に逃げられる事無く食らいついていた。その時、別の方向から堅物目掛けて銃のインクが放たれたが、それは木の板で防がれた。

(コイツ等の連携まで防ぐとは……)

(やっぱ堅物つてとんでもないわ)

「(なるほど、本命はそっちか!だが……)」
「ギャルゲーの主人公!!君の狙撃は常に警戒されていると思え!!」

電気ネズミに追い回されながらも、「ギャルゲーの主人公」こと千葉の射撃を防ぐ堅物は規格外と言えるだろう。鬼磨と「中二半」ことカルマは一瞬だけ驚いた表情を見

せたが、直ぐに不敵な笑みを浮かべた。

(そうですね、だからトドメは俺じゃない……)

(そろそろなのだ!!)

「「ジャステイス」!!」

堅物の後ろには「ジャステイス」こと木村が回り込んでいた。本命は電気ネズミでもギヤルゲーの主人公でもなく、コードネーム呼びの発端となった彼である。鬼麿達がジャステイスの名を呼ぶと同時に、彼の銃から放たれるインクが堅物に命中した。

体育の後、癖のあるコードネームで呼ばれ続けたE組一同は疲れが溜まっていた。

「殺せんせー、何で俺だけ本名なんだよ」

「さつきみたいにカツコよく決めた時、「ジャステイス」呼びもしつくり来たでしょ」

確かに、インクを命中止させたときの彼は見事だった。

「木村君。もし君が先生を殺せたのなら、世界はきつとこう思います。」まさしく正義

だ。世界を救った英雄の名に相応しい」と。名前が人を作る訳では無く、人の生き様に名前が残るのです。もうしばらくその名前を大事に持っておいてはどうでしょう?」

「……そうしてやつか」

名前にコンプレックスを抱えていたジャステイスだが、殺せんせーの話聞いて、自分の名前にも自信を持てるようになった。殺せんせーは生徒の悩みを、授業を通して解決してくれた。そんな授業に感心する生徒一同だったが、

「ちなみに先生のコードネームは、『永遠なる疾風の運命の皇子』をお願いします」

「『『『やかましい』』』』』」

殺せんせーの格好つけたコードネームのせいで良い雰囲気が出来た。その後先生は『バカなるエロのチキンのタコ』と呼ばれ続けた。

LEVEL. 45 イケメンの時間

今日は土曜日、授業は午前中で終わる。昼前にガツシユペアが裏山から降りようとしていると、殺せんせーと磯貝が話しているのが見えた。

「殺せんせーと磯貝、何をしておるのだ？」

「お、2人共帰りか？実はな……」

磯貝が事情を説明してくれた。殺せんせーは磯貝を連れて、中間テストの社会の勉強の為に砂漠付近の貧しい村に行こうと言うのだ。磯貝は何度かその経験をしており、社会の成績は学年トップクラスである。

「……随分気合が入っているな」

「家も貧乏だからさ、貧困の問題は結構調べてたんだ。そしたら殺せんせーに現地に連れていかれたんだよな。そこでさらに興味が広がってさ」

「百聞は一見に如かず」ですからねえ、ヌルフフ」

殺せんせーは相変わらず規格外だ。授業の為に生徒を現地に連れまわす教師など、恐らくは他にはいないだろう。清磨も呆れた表情をしていた。

「良かったら、君達も来ませんか？ガツシユ君は小さいですし、3人を運ぶのは容易で

す」

「な、俺達もか？」

殺せんせーはガツシユペアを現地調査に誘った。清磨はどうしようかと考えていたが、横ではガツシユが目を輝かせていた。彼は外国に興味津々である。

「行つてみたいのだ！しかし……」

ガツシユは行きたそうな顔をしていたが、この後の特訓の事が頭に浮かんでしまった。

「時間はそんなに取りませんよ。磯貝君のバイトもありますからね」

「そう言えば磯貝、バイトしてるんだったな」

「結構家計がピンチでさ……」

磯貝は父を無くしており、今は母子家庭である。家の稼ぎを補うために、校則違反を承知でアルバイトをしているのだ。その事を殺せんせーは、磯貝のバイト先のハニートースト食べたさ故に許可している。

「磯貝、大変なのだな……」

「そんなに心配しなくても大丈夫だぞ、ガツシユ。それより、お前等も暇が有ったらうちのバイト先来てくれよ。サービスするからさ」

心配の眼差しを向けるガツシユをフォローしつつ、バイト先でのサービスの提供。磯

貝は気の利くイケメンで良いクラスメイトだ。

「そうだな、時間見つけて顔出すよ。それから、現地調査には俺達も同行させてもらおう！」

「ウヌ!!」

こうしてガツシユペアも彼等と共に現地に付いて行くことになった。

流石はマツハ20、ほとんど時間がかからずに砂漠の村まで来てしまった。

「相変わらずの超スピードだな」

「ウヌウ、あつという間だったのだ」

「おや、2人はこの速度に慣れているように見えますね」

マツハ20の速度に慣れていなければ、いかに殺せんせーがマツハの風圧から守ってくれようと多少なりの疲労感が残るはずだが、ガツシユペアはそうでは無かった。

「ああ、音速を超える魔物の背中に乗せてもらった事はあるからな」

「殺せんせーも速かったが、アシユロンも速かったのだ」

「殺せんせー並みの速度って、魔物の力はとんでもないんだな……」

「速度なら殺せんせー以上かもしれん」

「何と、先生と速度で争える魔物がいるとは!! 負けてられません!!」

ガツシユペアはアシユロンがシン級の術を使用した状態で背中に乗った事があつたため、速い移動には慣れている。それを聞いた磯貝は魔物の力に感心し、殺せんせーは対抗心を燃やしていた。スピードに自信のある殺せんせーにとっては、アシユロンの話題は聞き捨てならないようだ。

「さて、先生は国家機密なので一旦姿を隠します。時間が来たら迎えに来ます。磯貝君が友達になつた村人とは、一度話してみたいのですがね。彼も磯貝君に負けず劣らずのイケメンですので」

そう言い残して殺せんせーはまた何処かへ行つてしまった。

「磯貝、この村で友達を作つておつたのか!!」

「そうだな。この村の人達は皆良い人なんだが、特に話の合う人がいたんだ。主に彼が村の案内をしてくれたり、ここでの生活の事を教えてもらつてる」

磯貝の人徳の高さはE組の外でも活かされていた。彼は調査に来た村でも、友達を作つていたのだから。そして3人が村に入ろうとした時、1人の銀髪で色黒の青年が彼等に近付いてきた。

「悠馬、また来てくれたんだね……つて、清磨とガツシユじゃないか!!」

「おおつ、お主は!!」

「なっ……」

「アリシエ!!」

磯貝が村で友達になった青年は、角を持つ小柄な魔物のリーヤと共に魔界の王を決める戦いに参加していたアリシエだった。まさかのイケメンコンビの誕生である。

回想

期末テスト前、磯貝は殺せんせーと共に砂漠の村に来た。そして殺せんせーと別行動となり、磯貝が村を歩いていると、重たい食料を運んでいる子供達が見えた。

「あの子達、あんな年で働いてるのか……」

子供達は10歳にも満たないくらいなのに、村の為に働いている。そんな彼等を見た

磯貝は、複雑な心境だった。彼も家の為に働いているが、子供達の苦労は自分以上では無いかと感じていた。

「この時間まで働くって事は、あんまり勉強も出来てないんじゃない……って、危ない!!」
食料を運んでいた子供の一人がバランスを崩してしまい、転びかけた。しかしそれに気付いた磯貝がその子供と食料を支える事で、その場は事なきを得た。

(ふー、危なかった……)

「大丈夫か!」

磯貝が何事も無く安心していると、一人の青年、アリシエが声を上げて走ってきた。これが磯貝とアリシエの初対面である。

村の子供を助けてくれたと言う事で、アリシエは磯貝を自分の家に招き入れた。

「さつきはありがとう、この子供達が怪我しなくて済んだのは君のお陰だ……えっと」

「磯貝悠馬です。でもあの子達、あんなに大きな荷物を……」

「ああ、悠馬。荷物に関しては彼等が無理をしてただけだ。もつと少ない量で少しづつ運ぶように、何度も言ってるんだけどね……」

彼等は先程の子供達の話をしていたが、その子供達がアリシエの家に入ってきた。彼等も磯貝に興味がある様子だ。

「だってアリシエ兄ちゃんは、もつと大きい荷物を運んでるじゃんか!」

「俺達も、もつと頑張つて村の役に立たないと……」

「だからつて無理したら、さつきみたいにな事になるだろ？ 偶然彼が来てくれたから良かったものを……」

アリシエは子供達を注意していたが、村の為に頑張る彼等に対して強く言う事が出来ていなかった。ここの村人達は協力して日々の生活を送っている。

「随分子供達に好かれていきますね、アリシエさん」

「『アリシエ』で構わないよ。そんなに固くならなくても良いのに……そうだね、この村は皆で力を合わせて生活しているんだ。だから貧しくても、皆で楽しく生活が出来る」

アリシエの話聞いて、磯貝は難しい顔を見せる。この話を聞いて、彼等の生活の大変さが分かった為である。磯貝もまた貧しい生活しており、思うところがあつた。

「悠馬、難しい顔をしているね。どうしたと言うんだい？」

「それは……」

磯貝は自分がテスト勉強も兼ねて村に貧困についての調査をしに来た事を話した。そして、自分の生活の事も。それを聞いたアリシエは立ち上がった。磯貝もまた家族の為に苦勞をしており、その事を彼は共感した様だ。

「……そうか、日本でも皆が裕福な生活を送れている訳では無いんだね。君も苦勞して

いる様だ。よし、僕が教えられる事があれば教えてあげるよ！村を案内しよう！」

「ありがとう、アリシエ！」

「礼には及ばないよ、悠馬！」

磯貝の苦勞を察したアリシエは、彼の為になろうとしてくれた。こうして磯貝はアリシエに村の案内をしてもらう内に、仲良くなれたのだ。

回想終わり

「何と、そんな事があったとは……」

アリシエは清麿達を自分の家に招き、自分と磯貝の出会いを話してくれた。ガツシユペアにとつても予想外の出来事である。

「驚いたよ、悠馬が清麿達とも友達だったなんて。しかも、魔物の事も知ってるんだね」
「俺もビックリだ。高嶺とガツシユの人間関係ってどうなってるんだ？」

「魔物の戦いで、多くの仲間と出会えたからな。アリシエもその1人だよ」

「ウヌ、またアリシエに会えて嬉しいぞ!!」

アリシエはかつてファウードを巡る戦いで、リーヤと共に清麿達に力を貸してくれた。彼の戦闘能力は魔物を怯ませる程に凄まじいが、ザルチム達と交戦して本は燃えて

しまった。

「悠馬、またここに来たってことは、テストが近いのかい？」

「そうなんだ。また色々と教えてくれると嬉しい」

「そうだね、それなら……」

アリシエは自分達の生活の事を話してくれた後に、再び村を回る事になった。今度はガツシユペアと共に。

彼等が村を回っていると、磯貝が殺せんせーとの約束の時間が近付いている事に気付いた。

「もうこんな時間か……」

「お、今日は帰ってしまうのかい？残念だ」

「ごめん、アリシエ」

「仕方ないよ、君は家族の為に働いているのだから」

アリシエは磯貝の事情を知っており、それに関しては思うところがある様だ。そして彼は、今度はガツシユペアの方を向いた。

「君達ともまた会えて嬉しかった。魔物の戦い、頑張ってくれよ！そしてリーヤが喜ぶ

魔界を作つて欲しい！」

「ウヌ！もちろんなのだ！」

「ああ、絶対にガツシユと共に勝ち残るさ!!」

アリシエはパートナーのリーヤの身を案じており、共に戦つた仲間が魔界の王になる事を願っている。そんな彼は磯貝・ガツシユペアとそれぞれ別れの挨拶を済ませた後に、自分の家に帰つて行つた。

その後、殺せんせーが間もなく迎えに来てくれて、彼等を各々の目的地まで運んでくれた。今日の磯貝のバイト先でひと悶着が起こる事を、ガツシユペアは知らない。

そして月曜日、ガツシユペアが登校するとクラスでは重苦しい雰囲気の流れている。磯貝は昨日バイトをしていた所を浅野達に見られたのだ。バイトは校則違反だが体育祭の棒倒しにE組がA組に勝つ事が出来れば、彼等は目を瞑つてくれるとの事だ。「ならば、棒倒しで勝つしかないのだな。私は参加出来ぬが……」

球技大会と同様、正式に生徒として登録されていないガツシユは体育祭にも参加出来ない。彼は悲しそうな顔を見せる。

「とは言え、そんな簡単な話じゃないだろう。浅野の奴、何か企んでそうなんだよな」

棒倒しは男子のみの参加で、E組男子はガツシユを除いて16人に対してA組男子は28人だ。しかし勝負に挑まなくては、磯貝が退学になる可能性まである。そして清麿は、終業式の日の浅野のE組に対する敵意を思い出していた。

「皆、やる必要は無いよ。これは俺の問題だからさ、退学になつても学校外から暗殺を仕掛ければいい」

クラスの皆がA組に傷つけられる可能性を危惧して、磯貝は自らが犠牲になろうとしていた。しかし彼の言動は、他の生徒達から反感を買う。そんな中で、前原が対先生ナイフを持った手を磯貝の机に置いた。

「難しく考えすぎだぜ！要は棒倒しでA組のガリ勉共に勝てば良いんだろ？やってやろうぜ！」

磯貝の親友である前原は、特に殺る気に満ち溢れている。そんな彼の言葉に便乗して、他の男子生徒も前原の持つナイフを握った。ここまでクラスが殺す気を見せているのは、磯貝の人徳の高さ故である。

「皆ありがとう！やってやるか！」

「「「おう！！」」」

こうしてクラスの男子達は気合を入れていたが、渚は浮かない顔をしていた。

「どうしたのだ、渚？」

ガツシユが渚に声をかけると、男子達が彼の方を向いた。ガツシユ以外にも、渚の表情に気付いている生徒も何人かいる様だ。

「高嶺君も言つてた事だけど、浅野君の狙いが棒倒しで勝つだけとは思えないんだよね。何か裏がある気がするんだ」

「その事か。何かA組の連中を探れる手段があれば良いんだがな……」

浅野はE組に対して強い敵対心を持つている。清麿と違って渚は直接彼と対峙した訳では無いが、薄々その事を感じていた。それを聞いて清麿が策を考えるが、イトナが小型のラジコンを取り出した。

「コイツには録音機とカメラが搭載されている。気になるんだったら、今日の放課後にもコイツをA組の教室の近くに配置すれば良い」

「おーイトナ、やるじゃねーか!!」

「確かにこのサイズなら、本校舎の奴等に気付かれる事もなさそうだね」

イトナのラジコンを見て、寺坂とカルマが感心する。戦いを制する為の情報戦は、既に始まっているのだ。

そして放課後、イトナのラジコンは無事にA組の教室まで辿り着き、彼等の作戦を盗

み聞きする事に成功する。そんな事に気付かないA組の生徒達は、棒倒しについての話し合いを始めていた。

「皆、体育祭の棒倒しでE組と戦う事になった。僕等は期末テストで彼等に負けているからね、今回は負けられない。そこで強力な助っ人達に協力をお願いしたんだ」

浅野は確実にE組を倒す為に策を考えた結果、外部から力を借りる事にした。そして彼が召集した助っ人達が教室に入ってきたが、彼等を見た他のA組の生徒達は顔色を変え、この助っ人達は年齢こそ15歳であるが、4人共外国人で体格が異様に大きいのだ。

「彼等は世界クラスのスポーツマン達さ。今回は留学と言う形で櫛ヶ丘に来てもらった。彼等の力を借りて、調子に乗っているE組に反省してもらおうじゃないか」

浅野は今回の棒倒しでE組を潰そうとしている、次の中間テストにも影響が出るくらいに。そして浅野達A組は場所を体育館に移してしまった為、これ以上は作戦の盗み聞きは出来なかった。

「……………こんな事になってたなんて」

場面はE組に戻り、磯貝は不安気な表情を浮かべる。このままでは自分のせいでクラ

スメイトが傷つくのではないかと、心配になっていた。

「あいつ等、好き放題やりやがって！」

A組の作戦会議を聞いた前原も憤りを見せるが、寺坂が何かを思いついたように口を開いた。

「向こうが助つ人外国人を呼んでも、高嶺の【アンサートーカー】つて奴で一網打尽にしてやれば良くね？」

寺坂は清麿の能力に期待していた。そんな彼の言葉に多くの生徒が賛同する。それは磯貝も例外では無かった。

「そうだな。確かに高嶺の能力があれば、戦力差があつても有利に……」

「いや、この力は使わないつもりでいる」

「『『『えっ』』』』」

清麿は能力の使用を拒否した。【アンサートーカー】に期待していた生徒達は、たまらずツツコミを入れてしまった。

「何言つてんだ高嶺、こんな時じやなきやいつ使うんだよ？」

「そうだけ！相手は助つ人外国人呼んでるんだからさ！」

菅谷と岡島を始め、多くの生徒達が清麿に問いただしたが、清麿は意見を変える気は無かった。

「あのなあ、この能力は暗殺と魔物絡み以外で使う気は無いと言っただろう。それに俺一人が【答えを出す者】を使ってA組に勝てたとして、皆はそれで満足なのか？」

清麿の言葉を他の生徒達は黙って聞く。彼の言葉が、【答えを出す者】頼りに勝負を挑もうとする男子達に突き刺さる。

「それから、これは磯貝が浅野に売られた喧嘩でもある。だつたら磯貝がクラスのリーダーとして浅野に勝つてこそ、意味があるんじゃないのか？ クラス全員で協力するが、あくまで磯貝が中心として勝負するんだ！」

「……そうだな、その通りだ。高嶺の能力の事は今は忘れよう。よし、今から作戦会議だ！」

「[[[[[[「オー!!」]]]]]]」

磯貝が高嶺の意見に賛同した。そして彼の掛け声でE組の作戦会議が始まる中、カルマが小声で清麿に話しかけた。

「本当に良かったの？ 使わなくて」

「使う時は、誰かが怪我をしそうになつてどうにもならなくなつた時だけだ。それにE組がこの力に頼りすぎる流れは、良い傾向とは言えない」

「まあ、そうだよね」

【答えを出す者】として万能ではない。その能力は不安定な物であり、安易に頼りすぎるの

は良くないと言える。カルマもそれが分かっており、それ以上の言及はしなかった。そして彼等も作戦会議で意見を出していく。

LEVEL. 46 リーダーの時間

体育祭当日、E組にとつては相変わらずアウエーな環境である。木村が1000m走でトップを走ると、観客の大半が面白くなさそうな顔をしていた。そんな中、

「木村君!!速いです、こっち向いて!!」

「ウヌー!!ガンバレなのだー!!」

殺せんせーとガツシユだけは思い切りE組の応援をしてくれる。殺せんせーはフードをかぶり、ガツシユは緑のカバンに入って各々の正体が分からないようにしており、そんな彼等をE組の生徒達は困ったような顔で見ている。ちなみに清磨も1000m走でトップだった。

「高嶺、一位おめでとう!」

「お互いにな、木村!」

清磨と木村がお互いの拳を軽くぶつけた。そんな時、同じく1000m走を終えた矢田と不破が彼等の方に来た。2人共上位だったが、トップは取れていない。烏間先生曰く、「開けた場所を走るのは、その訓練をした者が強い。暗殺の訓練も万能ではない」との事である。

「2人共、一位取るなんて凄いや」

まずは矢田が労いの言葉をかける。

「足の速さなら、誰にも負けたくないからな!」

木村はかつて陸上部に属しており、走る事に対しては自信がある。また彼は負けず嫌いな一面もあり、身体能力に関してはガツシユや岡野に対抗心を燃やす事も多い。

「うんうん。木村君は陸上部で、高嶺君は魔物との戦いでそれぞれ鍛えられたんだよね」
「そうだな。辛い場面も多かったが、魔物との戦いは間違いなく自身の成長に繋がっている」

「やっぱり高嶺君が少年漫画の主人公にしか思えない!」

「そ、そうなのか……」

あらゆる事を漫画に例えがちな不破は、しばしば清麿を漫画の主役だと考える事があつた。ガツシユペアのこれまでの戦いの話は、彼女にとってはとても刺激的だ。

100m走が終わり、次はパン食い競争が始まった。E組からは原が出場するが、彼女は足が速くない。途中までは最下位で走っていたが、パンが見えた瞬間彼女は豹変した。一瞬の内にパンを口に加えたのだ。他の参加者はパンを加えるのに苦戦しており、その間に原は一位に躍り出た。

「原さん、流石です!!」

殺せんせーがハイテンションで原を応援していたが、彼女はパンを食べ終えていない。完食しないとゴール出来ないルールなのだが、気付けば原の口からパンが消えていた。

「飲み物よ、パンは」

見事に彼女は一位でゴールした。

「「「原（さん）スゲー!!」「」」」

「寿美鈴のパンが消えたのだ!!」

これを見た多くの生徒が原に駆け寄り、労いの言葉をかけた。ガツシユもたまらずバッグから出てきた。

この様に他のE組の生徒も自分の個性を活かして、良い結果を出した。そして棒倒しの時間となり、E組とA組の男子はそれぞれ準備を始めていた。多くの生徒がやる気を見せる中、磯貝は浮かない顔をしていた。

「大丈夫か、磯貝？」

「ああ、高嶺。俺のせいで皆が傷ついたらって考えるとな……」

磯貝は未だに棒倒しの勝負を受ける事になった責任を感じている。加えて浅野は

助つ人外国人に現地の言葉で指示を出しており、彼に自分が劣ると考えていた。

「高嶺つて魔物との戦いで、格上の相手とも何度も戦ってきたんだよな？」

「そうだな。どれも大変な戦いだつたし、何なら負けた事だつてある。どうして今その話を……いや、続けてくれ」

磯貝は魔物の戦いの事を口に出した。清磨は何故彼がその話を始めたのかが分からなかったが、真剣な磯貝の表情を見て話を聞き続ける事にした。

「高嶺は仲間と一緒に、何度も危険な戦いを乗り越えている実績がある。高嶺は俺がリーダーとして浅野に勝つてこそ意味があるつて言つてくれたけど、お前がリーダーとして頑張つた方が浅野に対抗できるんじゃないかつて思えて仕方ないんだ」

磯貝は浅野だけでなく、清磨に対しても劣等感を感じている。厳しい戦いを仲間と勝ち抜いた経験を持つ清磨こそが、リーダーに相応しいのではないかと彼は考えているのだ。しかし磯貝の話を聞いて、清磨は首を横に振つた。

「それは魔物との戦いでの話だ。だが今回は違う。クラス対抗での戦いで、E組のクラス委員長は磯貝だ。これは揺るがない。それにお前は、常にクラスの中心として頑張つてきたじゃないか。皆それが分かっているから、今回の棒倒しも引き受けてくれたんだ。違うか？」

「高嶺……」

磯貝は常に自分よりもクラスの調和を第一に考えて行動してきた。そんな彼の最大の長所は“人徳”である。E組を率いて戦う力なら磯貝が勝ると清磨は考えていた。そんな時、

「その通りです、2人共！」

2人が話していると、ガツシュが入ったバッグを持った殺せんせーが近付いてきた。「磯貝君の人徳があれば、君がピンチの時でも皆がフォローしてくれる。その点で君は浅野君にも勝っている。先生も磯貝君の担任になれた事は誇らしいです」

殺せんせーが磯貝を諭してくれた。そして気付けば磯貝の周りには他の男子生徒が集まってきており、皆何処か楽しそうである。皆磯貝の人徳に惹かれているのだ。

「磯貝は良き委員長ではないか！それに清磨と違って、鬼になる事も無いからの！」

「高嶺君がクラス委員とか、恐怖政治待ったなしでしょ」

「おい……」

ガツシュとカルマの冗談を聞いて、E組の男子達は笑っていた。そんな光景を見て、磯貝は吹っ切れたような表情をする。

「よし皆、いつも通り殺る気で行くぞ!!」

「「「「オー——!!」」」」

男子達は改めて気合を入れ直す。

「頑張れなのだ!!?」

「磯貝君、皆……負けないでね!」

ガツシユと片岡が彼等に応援の言葉をかける。こうして棒倒しの幕は切って落とされた。

E組とA組が整列した後、ルールの説明がなされた。チームの区別の為にA組はヘツドギアと長袖の着用が許されており、ここでもE組はハンデを背負う事になった。そして試合は始まったが、両者守りの姿勢を崩さない。

(攻めてこい、浅野!)

(「誘い出そうと言う事が、良いだろう) ……攻撃部隊、指令F!」

浅野が指示を出すと、アメリカ人のケヴィンが数人のA組の生徒を率いて攻めに出た。

(A組の目的はE組を全員潰すこと。まずはケヴィンを攻めさせてお前等の反応を見る。そしてビビって陣形を崩した隙を付いて包囲殲滅。さあ、どうする?)

浅野は初めからE組を潰すことを前提に作戦を立てていた。そんなA組の挑発に吉田と村松が痺れを切らし、ケヴィン達の方に向かってしまった。それを見たケヴィンが

前に出てタツクルをかまして、2人を10m程離れた客席に吹っ飛ばした。

『お前等、少しは攻めたらどうだ?』

ケヴィンは英語でE組を更に挑発した。それに乗って攻めてくる彼等を一網打尽にする狙いだ。しかしE組はそれが分かっている為、攻めようとはしなかった。それどころか、カルマが英語で逆にA組を挑発し始めた。

『お前達の狙いは分かっている。さっきの2人はE組最弱だから我慢出来なかったみたいだけどもね。そんなに言うなら、そっちが攻めてこれば良いじゃん』

『そうか。ならば、お言葉に甘えさせてもらおう!!』

カルマの挑発に乗ったケヴィン達が攻撃の体勢に入った。そして浅野も合図を送り、彼等はE組に攻め入った。それがE組の狙いだとも知らずに。

「今だ皆!!」
「触手!!」

磯貝の掛け声とともに棒を守っていたE組が全員ジャンプした。咄嗟の事に気を取られたA組達はジャンプしたE組達にのしかかられ、棒を支えていたメンバーは何と棒を半分倒してA組を抑え込んだ。棒を凶器に使うなど言うルールは無い。

(巧みな防御だ、やるじゃないか。だが……)

それを見た浅野は、まだまだ余裕の表情を浮かべていた。

「(A組5人の動きが封じられても、E組はそれ以上の人数で抑え込む必要がある。これ

で数の優位はさらに拡大した) 両翼遊撃部隊、指令Kだ」

浅野が指示を出すと、手の空いたA組達が攻撃に加わった。だがA組達は両サイドからの攻撃を行ったため、真ん中に隙が出来た。それを磯貝は見逃さなかった。

「行くぞ攻撃部隊!! 作戦は『粘液』!!」

「!!! おう!!!」

磯貝の指示に従い、清麿、カルマ、前原、木村、杉野、岡島が中央突破を狙った。しかし、これは浅野の罠だった。何と攻撃を仕掛けたと思われたA組達が磯貝達を狙って戻ってきたのだ。

「!! つて、フエイクかよ!!!」

岡島と木村がたまらずツツコミを入れる。彼等は棒を守るA組達にも狙いを付けられ、挟み撃ちにされた。

(ふつ、作戦通りだ。これで少人数を大人数で潰せる。そして包囲網には、格闘の名手のジョゼとカミーユがいる。どうする、リーダー君?)

ブラジルの世界的格闘家のジョゼと、フランスの有名レスリングジムの次期エースであるカミーユを中心に、E組の攻撃部隊を1人1人潰すのが浅野の狙いだった。

「皆、ハハハは引こう!!!」

磯貝の指示に従い彼等は逃げた、観客席に。それを見た席にいた生徒達は当然驚愕す

る。そしてA組達もつかさず観客に向かったが、E組の生徒達は椅子を使つて器用に逃げ回つた。場外と言うルールは存在しないのだから。

『上等だ』

ジョゼとカミーユは現地の言語でそう言つた後、先ずは清麿に狙いを定めた。

(あの2人、俺を真つ先に潰そうとしてんじやねーか!!)

『待てよ、"E組のオニマロ"』

『アサノはお前をまず潰すように言つてたんだ』

ジョゼはポルトガル語で、カミーユはフランス語でそう言つた。清麿から初めに、他のE組を1人1人潰すよう浅野から指示を受けていたのだ。それを聞いた清麿は彼等の方を振り向いた。

『鬼麿って言うな、デカいの。それに』

『潰すつてのは、スポーツマンシップにのつとつて無いんじゃないのか?』

清麿はポルトガル語とフランス語で言い返した。清麿は外国人助っ人の存在を知つた後、彼等の現地の言葉を勉強したのだった。英語はビッチ先生の授業でマスター出来ているので、ポルトガル語、フランス語、韓国語を学んだ。助っ人達とあえて彼等の言語で会話をする為だ。これによって彼等の注意を清麿に引きつける狙いだったが、そうするまでも無く2人は清麿を潰しにかかつてきた。

『へえ、俺達の言語を流暢に話すんだな』

『やるじゃねーか、お前』

清麿はファワードで魔界の言語を覚えた事もあり、人間界の他国の言葉をマスターするのはそう難しい事では無い。そんな事を知らない2人は清麿に感心していた。そして、

「潰せるものなら潰してみな、デカブツ!!」

『待て、コラー!!』

清麿は笑みを浮かべて言い放った。それを聞いた2人は怒りを表し、血相を変えて清麿を追いかけ回した。これがE組の狙いだとも知らずに。

「ちっ、全然捕まらねー!!」

「どーなってやがる!!」

清麿は助っ人外国人相手に見事に逃げ回っていた。彼の身体能力は、魔物との戦い及び暗殺の訓練のお陰でかなり高いレベルまで鍛えられている。

(……そろそろか)

ある程度走り回った所で、清麿は周りを見渡した後に足を止めた。

「何だ、堪忍したのか?」

「大人しく潰されな」

「いや、周りを見てみろよ」

清磨は逃げ回っていた、否、彼は2人を誘導していたのだ。お互いの棒から離れて、直ぐに援護には行けない場所まで。助つ人外国人2人は、清磨1人によって無力化された。

「俺を潰しても構わんが、もうお前達の援護が間に合わない所まで勝負は終盤に差し掛かっている」

「な、あれは!!」

「A組の棒がE組の奴等に捕まれている!!」

吹っ飛ばされたと思われた吉田と村松が客席から回り込み、A組の棒を掴んだのだ。予想外の奇襲を受けてA組には隙が出来てしまい、そこを付かれて清磨以外の攻撃部隊が一斉に棒に向かって飛びかかったのだ。

「おい、サンヒョクは何をやっているんだ☒」

ジョゼがもう1人の助つ人外国人の名前を出した。韓国バスケット界の期待の星、サンヒョク。彼は助つ人の中で唯一棒の守りに徹していたが、棒をE組に掴まれてしまえば、彼の身体能力は活かされない。むしろ彼が無理やりE組を引つ?がそうとすれば、

棒まで倒れかねない。

(さて、これで終われば楽なんだがな……)

E組の勝利が確実だと思われる中、清磨は不安を抱えていた。それは、浅野自身の存在。彼の持つ力がどれ程のものかは未知数である。そして清磨の不安は的中するのだった。

「皆は棒を支えてるのに専念しろ。E組は僕が片付ける」

何と浅野はE組の生徒達を全員蹴り落としてしまった。それを見たジョゼとカミーユは笑みを浮かべた。

「どうだ、これがアサノの力だ!!」

「あいつがいる限り、俺達に負けは無い!!」

(浅野の奴、これ程までとは!!だが……)

浅野の予想外の實力に清磨は一瞬肝を冷やしたが、すぐに平常心を取り戻した。

「そうだな、浅野は強い。あいつ一人に二対一で勝てる同級生はそう多くないだろう」

「ああその通りだ、諦めな!!」

「さて、テメーの事もどうやって潰すか……」

「だが、勝つのは浅野じゃない。俺達だ!!」

清磨は自分達の勝利を確信しており、A組の棒を指差した。それを見た2人は怪訝な

顔をしながら清麿の指さす方を見たが、予想外の出来事が起こっていた。何とE組の守備部隊が攻撃に加わっていたのだ。一方でE組の棒は竹林と寺坂の2人にのみ支えられており、ケヴィン達も2人だけに抑え込まれていた。

「おい、どうなつてやがる!!」

「何故ケヴィン達は反撃しない!!」

「反撃しないんじゃない、出来ないんだよ」

ジョゼとカミーユは驚愕していた。何故2人如きに数で勝るケヴィン達が押さえられているのかを。その答えを清麿は分かっている。

「お前等の目的はE組を潰す事なんだろう?だがここであいつ等が反撃してE組の棒を倒してしまえば、その目的は果たせなくなる。だから浅野の指示が出るまであいつ等は動けない」

浅野から棒を倒す指示は出ていない。よってケヴィン達は動くことが出来ないのだ。その事を竹林も分かっており、抑え込んでいるA組達を煽っていた。そして浅野は攻撃しているE組の相手で忙しく、指示が出せない。

そんな状況で、磯貝は最後の指示を出した。

「来い、イトナ!!」

イトナを呼んだ磯貝はバレーのレシーブの体勢を取り、彼は走りながら磯貝の手の平

を踏み台にした。イトナの足が磯貝に乗ったタイミングで、彼はA組の棒を目掛けて投げ飛ばされた。イトナは触手の影響で、高い身体能力が残っている。しかし彼はその手をA組に悟らせないように、個人種目では手を抜いていたのだ。よって浅野もイトナはノーマークだったが、それを付く為にトドメの一撃を彼に任せた。そして狙い通りイトナがA組の棒を掴み、棒はそのまま倒れてE組の勝利となった。

期末テストに続いて棒倒しでも、E組はA組相手に勝利を収める事が出来た。その事により、本校舎の関係者がE組を見る目は明らかに変化している。E組の生徒達も、そんな変化を感じて自信を持つようになっていた。E組が後片付けをしながら話していると、先程まで理事長に呼び出されていた浅野が校舎から出て来た。

「流石だったよ、浅野の采配。また勝負しような！」

「ふん、次はこうは行かない」

磯貝が浅野に労いの言葉をかけたが、浅野の機嫌は明らかに悪い。そんな浅野に、今度は清磨が声をかけた。

「なあ浅野、もう必要以上にE組を敵視して潰すような真似はやめないか？」

それを聞いた浅野は眉を潜めた。

「……そうだな、今回の敗因はまさにそれだった。初めから棒を倒す事に専念していれば、僕等が勝っていた。少し、考えを改める必要があるか」

浅野は清磨に反論するどころか、むしろ負けた原因を素直に認めた。確かに今回の棒倒しでは、A組はE組を潰す事に固執しすぎていたのだ。

「高嶺清磨、もう一度だけ聞く」

「何だ？」

浅野は清磨を睨み付けた。

「A組に来る気はないか？」

「無い」

「……そうか」

清磨は即答した。浅野は清磨に断られると、そのままE組から離れようとした。浅野は清磨をA組に誘った事が何度かあるが、全て断られている。

「俺からも聞きたいことがある、浅野」

「何かな？」

「何で救急車が来てるんだ？誰かが倒れたって話は聞いてないが？」

清磨の言う通り、何故か救急車が校舎に止まっていた。しかし体育祭では特に誰かが体調を崩した様子は無かった。つまり体育祭が終わった後に、何かが起こった事にな

る。

「教える義理は無い、だが忠告はしておいてやろう……理事長は化け物だ、高嶺。これ以上あの人に逆らうのなら覚悟を決めておけ」

浅野はそう言つて他のA組の生徒達に合流した。浅野の言葉に恐怖の感情がこもつていた事に、清磨は気付いていた。

「何があつたんだ？浅野の奴……まさか?!」

「彼もかなり苦労していると言う事さ」

清磨は何かに気付いたようだが、竹林の言葉が彼の言動を遮つた。

「浅野君も、磯貝のように境遇の中でもがいている。それから、救急車の件は僕等が関わらない方が良さそうだ」

竹林はかつて本校舎に戻つた事がある。そこで浅野が理事長に対して恐怖している事に気付けた。竹林自身が家族間で辛い思いをした事があり、彼には浅野の苦悩が理解出来た。

「あいつの方がよっぽど苦労してゐるって事が分かつたよ、竹林、高嶺。浅野はいつも一人で戦つているけど、俺は皆に助けられてゐるからな。仲間には感謝してる」

磯貝は常に皆を助け、皆に助けられている。そんな彼は気付けば上でも前でもなく横にいる。彼はE組のリーダーとして、見事に勝利を収めた。

「お疲れ様なのだ!! やっぱり磯貝は良きリーダーだの!!?」

「ガツシユも応援ありがとうな!」

「ウヌ!」

ガツシユもまた磯貝のリーダーとしての資質に気付いて、労いの言葉をかけた。彼はその後、清磨の方へ近づいた。

「清磨、校舎の方から血の匂いがあるのだ」

「多分理事長が何かしたのだろう。あの人がこれ以上でかさなければ良いんだがな……」

救急車・浅野の忠告・血の匂い。これらの要素からガツシユペアは理事長に対する警戒を更に深めた。理事長が一人で外国人留学生たちを血祭りにあげた事など、E組一同は知る由も無い。まだまだ暗殺教室は波乱に満ちている。

LEVEL 47 間違いの時間

体育祭が終わりE組は中間テストに向けて勉強に励んでいるが、生徒達は何処か落ち着かない様子だ。期限は着々と近付いてきているのに、一向に暗殺は成功しない。このままで良いのかと考える生徒達は多い。

その日の放課後、生徒達の大多数と一緒に裏山から見える街の景色を見ていた。勿論、ただそれを眺めているだけではない。岡島が腕を組みながら得意げに話し始めた。

「俺、良い事思いついたんだよ」

彼は何か企んでいる様子だ。そんな岡島を他の生徒達が見ていたが、丁度裏山での特訓を終わらせたガツシュが彼等と鉢合わせた。

「ウヌ、皆で集まって何をしておるのだ？（清麿はここにはいないようだよ）」

「おーガツシュ、良い所に来たな。実はな……」

岡島の話はこうだ。この場所からフリーランニングで建物の屋根を伝って行くと、殆ど地面を降りずに隣駅の前まで到達が出来る。よってただ通学するだけで訓練が可能

になるとの事だ。

「危険じゃないのか？それ……」

「そもそも、鳥間先生に裏山以外でやるなって言われてたじゃない」

片岡や磯貝を始め、それに反対する生徒もいたが、岡島の自信は揺るがない。駅までの道の下見の結果、人通りも殆ど無く、難しい場所も無かったようだ。それを聞いた多くの生徒は岡島の考えに賛同し始めたが、ガツシユの体は震えていた。

「これなら勉強と暗殺力向上を両立出来る!! 2本の刃を同時に磨けて……」

「それをしてはならぬ!!」

岡島の言葉をガツシユが遮った。その時のガツシユの表情は、戦闘や暗殺の時と同じかそれ以上に真剣な物だった。

「おい、どうしたんだよ……」

そこにいる彼等は、ガツシユの豹変を見て動揺していた。ここまで彼が激昂する理由が、生徒達には分からなかった。そしてガツシユは両手を握りしめながら、大声を上げた。

「フリーランニングは危険な物ではないのか!! それによつて関係ない人達が傷付くことは、あつてはならないのだ!!」

ガツシユは初めてそれを習った後の、自分と清麿との会話を思い出していた。フリー

ランニングを行う事で誰かを傷付ける可能性がある為、使う場面は選ばなくてはいけないのだと。

「……ガツシユ君の言う通りね、フリーランニングはリスクのある物だから」

「そうだな、誰かとぶつかりでもしたらシャレにならない。皆、やっぱりやめよう！」

「メグ、磯貝……」

片岡と磯貝はガツシユに賛成してくれた。クラス委員長として彼等は、クラスメイトが危険な事をやろうとしているのは見逃せない。そんな2人を見て、ガツシユの顔が和らいだ。しかし、

「万が一の事が無いように、下見はバッチリさ。大丈夫だつて！」

「俺も良さそうだと思うんだけどな！」

岡島と前原を始め、それ以外の生徒達はフリーランニングの決行に前向きな様子である。また、寺坂が口を開いた。

「つーか、お前等の呪文をもつてしてもあのタコは殺れてねーんだろ？それ程にあいつは手強いって事だ。だったら、やれる限りの事はした方が良いんじゃないのか？」

確かに殺せんせーは強敵だ。これまで、あらゆる暗殺計画を尽くかわしてきたのだから。それなら今まで通りではダメだと言うのが彼の主張だ。寺坂の発言に、他の生徒達も頷いた。

「そういうこつた！俺が先導する、ついて来てくれ!!」

「[[[[「おう!!」]]]]」

「ダメだ、行つてはならぬ!!」

ガツシユの制止も空しく、岡島を先頭に多くの生徒達がフリーランニングを始めてしまった。暗殺が成功せずに焦る彼等に対しては、ガツシユの思いは届かない。

「おい、お前等!!」

「皆、待つてよ!!」

最後までフリーランニングに反対していた磯貝と片岡も、彼等を止める為に飛び出してしまった。その光景をガツシユは悔しそうな顔で見っていた。彼は皆を止められなかった事に、自責の念を感じている。

そんなガツシユを見て、フリーランニングに参加せずにその場に残っていた生徒達は、自分達が間違っているのではないかと気付き始めた。

「……確かに、ガツシユ君の言う通りかもしれない。絶対に安全なんてこと、言い切れなからね」

茅野が申し訳なさそうにそう言った。その一言をきっかけに、残った生徒達は彼等を止めるべきだったと判断した。生徒達の心情の変化に気付いたガツシユは再び口を開いた。

「皆はこの事を、すぐに殺せんせーと鳥間先生に伝えて欲しいのだ!! 私は、清磨の所に
行ってくる!!」

今すぐに殺せんせー達に連絡すれば、彼等を止められるかもしれない。ガツシユはそ
う考えて茅野達に頼み、自らは清磨の元へ向かった。

その頃、清磨は一人校舎に残って、ガツシユを待ちながら中間テスト勉強をしていた。
彼は柵ヶ丘中のテストで二度も浅野に負けている。そのリベンジを果たす為に、暗殺や
打倒クリアの特訓の合間に上手く時間を見つけないが、日々予習復習に励んでいるの
だ。

「さて、少し休むか……ってあれは!!」

「き、清磨……!!」

清磨が休憩をしようと窓の方を見た時、ガツシユが尋常じゃないスピードで今にも目
が飛び出そうな顔をして、泣きながら自分の方に向かってくるのが見えた。

「おいガツシユ!! どうしたんだ!!」

「た、大変なのだ……!!」

清磨はつかさず窓を開けて、ガツシユに事情を聞いた。

「……済まぬのだ、清麿。私は皆を止める事が出来なかった。もつと上手く、説明を出来ておれば……」

ガツシユは今回の件が自分のせいだと考えて、申し訳なさそうな表情を見せる。そんな彼の心情を察した清麿は、怒気を帯びた顔付きをした。

「ガツシユ、今すぐにあいつ等を止めに行く。時間が惜しいから、お前のマントの力を使って山を降りるぞ」

清麿は声を荒げる事は無かったが、内心はらわたが煮えくり返っていた。また校舎には、先生達は誰もおらず、彼等に相談する選択肢も存在しない。

ガツシユのマントに乗って山を降りた後、清麿は【アンサートーカーカー】を使って生徒達を探そうとしたが、ガツシユが校舎とは反対方向を指差していた。

「清麿、向こうからE組の皆の匂いがするのだ!!」

「ホントか?!」よし分かった、すぐ向かうぞ!!」

ここでもガツシユの嗅覚が活かされる。そして彼等はフリーランニングを始めた皆を止めるべく、走り回るのだった。

ガツシユペアが彼等を探し回っている事など知る由もない他の生徒達は、フリーランニングを楽しんでいた。

「よっしやー！一番乗りー！！」

フリーランニングで先頭を走る岡島と木村が、小道に降り立とうとする。しかしそこには、大量の荷物を積んだ自転車走らせる老人がいた。その老人は急に上から降りて来た彼等に驚いてバランスを崩してしまい、そのまま転んでしまった。

「ぐ……………う……………」

接触こそ無かったが、転んだ拍子に足を地面にぶつけた老人はとても痛そうな表情を見せる。しかし生徒達は、青ざめた顔をしてそれを見ている事以外出来なかった。

「今の音は何だ！！大変だ、救急車！！」

偶々近くにいた花屋の男がそれに気付き、病院への電話と老人の応急処置を済ませてくれた。ガツシユペアの奔走空しく、彼等は間に合わなかったのだ。

救急車が呼ばれた少し後のタイミングで、ガツシユペアは彼等を見つめる事が出来たが、あと一步遅かった。

「清麿……」

「間に合わなかったか……」

2人は彼等を止められなかった事と、自分達が間に合わなかった事に対して無力感に苛まれる。そんな2人はクラスメイト達の方は見向きもせずに、倒れている老人に駆け寄った。

「大丈夫かの?!!」

ガツシユは老人に声をかけたが、清麿は患部に応急処置が施されている事に気付いた。その時、先程の花屋が彼等の方に来た。しかし花屋の接近に、ガツシユペアは気付く事が全く出来なかった。

「恐らく骨が折れている。応急処置はしたし、救急車も呼んでおいたけど……」

「何だ?この男、只者ではないような。いや、今はそれより……」そうだったのか、色々済まない」

「礼には及ばないよ。おじいさん、後遺症が残らなければいいけど……じゃあ、僕は仕事に戻るね」

花屋の男はそのまま自分の屋台に戻ったが、清麿は胸騒ぎがしていた。今回の件とは別の何か、良くない事が近くで起こりそうな気がしてならない。しかし今は、目の前の事故に向き合う事が最優先である。ガツシユペアは痛みで苦しむ老人に意識を向けた。

老人が自分のクラスメイト達によって怪我をさせられた。しかも、自分達の力に酔いしれたが故に。どんな理由があろうとも、無関係な人々に被害を与える事はあつてはならない。

これまでの魔物の戦いにおいてもガツシユペアは、無関係な人々が戦いに巻き込まれるのを何度も見て、それを阻止するよう尽力してきた。優しい王様を目指す為に。今回の出来事は、そんな彼等の逆鱗に触れた。

「……お前等ツ!!」

怒りが頂点に達した清磨は鬼の表情となり、クラスメイト達を睨み付けたが、彼等は清磨から目を背ける事しか出来なかった。ガツシユは怒りのあまり体を震わせており、生徒達と顔を合わせようとしなかった。その時、

「……その2人、頼みがある……」

「……どうしたのだ?」

老人は痛みをこらえながらも、道路の端にどけられた自転車を指差した。そこにはいくつかのビニール袋が置いてあつた。

「これらの荷物を、〃わかばパーク〃という所に運んでほしいんだ……これらは仕事で、必要な物だから……」

この老人は〃わかばパーク〃と呼ばれる施設の職員である。仕事に必要な物品の買

い出しの帰りに、事故が起こってしまった。彼は自分が怪我しているのにもかかわらず、職務を全うしようとしている。そんな老人を見たガツシユペアは罪悪感に苛まれながらも、彼の頼みを聞き入れた。

「わかりました……ガツシユ、すぐに持って行こう」

「ウヌ」

清磨はわかばパークの場所を調べた後、倒れた自転車を起こしてその籠に荷物を積んだ。乗り切らない荷物はガツシユが持ち運び、2人は目的地へ向かった。

老人は救急車に運ばれ、2週間程入院する事になったが、後遺症は残らない様である。烏間先生と殺せんせーも駆け付けてくれたが、殺せんせーは真つ黒の激怒の表情で、生徒達をビンタした。そして彼等が力の使い方を間違え、弱い物の立場に立って考える事を忘れてしまった事を叱責した。その後、律から彼等の居場所を聞いたガツシユペアが病院に到着した。

「おや、君達も来ましたか。折角連絡を貰ったのに、間に合わなかったのは済みませんでした。それから、おじいさんの怪我は2週間くらいで完治しますよ」

説教を済ませた殺せんせーの顔色は元に戻っていた。そんな先生と落ち込む生徒達

を見た2人の顔からは、怒りの表情が消えている。彼等の言いたい事は殺せんせーが言ってくれたのだと、ガツシユペアは察する事が出来た。

「まずは被害者を穏便に説得してきます。高嶺君とガツシユ君もここで待って下さい」

「了解した」

「分かったのだ」

殺せんせーがそう言うと、超スピードでその場から消え去った。ただ謝るだけでなく、何かの準備に向かった様子だ。

「高嶺君、ガツシユ君……」

渚がバツの悪そうな顔をして2人に声をかけた。生徒達はようやく、自らの間違いに気付いたのだ。それを見た清麿は少しの沈黙の後、ため息をついた。

「……まあ。俺とガツシユの言いたい事は、殺せんせーが言ってくれたみたいだからな。それに、あの人に後遺症が残らないようで良かった」

老人の怪我が取り返しのない物では無い事を、清麿は心底安心している。

「フリーランニングのリスクをクラスで共有しておかなかった時点で、今回の事はE組全体の責任と言える。そして起こった事は取り返しがない以上、俺達皆で誠意を見せるしかないだろう」

「ウヌ、私も皆を止める事が出来なかったからの」

今回の事故は直接関わった生徒達だけの問題ではない。クラス全体で責任を取らなくては、前に進む事は出来ない。殺せんせーが戻ってきた後、ここにいるE組一同は、改めて老人に謝罪に向かうのだった。

生徒達が怪我をさせてしまった老人は松方さんと言う方で、わかばパークの園長先生である。しかし今回の件で2週間現場を離れる事になり、その補填をE組の生徒達が全員で行い、彼等の働きぶりが認められるようになれば今回の件を許してくれる事になった。ちなみにこの期間は、テスト勉強禁止である。

「皆――園長先生がおケガでお仕事出来なくなっちゃった間、この人達が世話をしてくれるって！」

「「「「はーいー」」」」

わかばパークの職員の女性が彼等をそこに通う子供達に紹介すると、子供達は彼等一群がった。特に彼等と背丈が近いガツシユは、すぐに子供達と打ち解ける事が出来ていた。

「ガツシユちゃんって言うんだー、よろしくねー！」

「ウヌ、よろしくなのだ！」

ガツシユは早速子供達の遊びに混じった。彼は楽しそうな顔を見せるが、今回はボランティアとして来ている。そんなガツシユに清磨が耳打ちをした。

（ガツシユ。子供達と遊ぶのも良いが、俺達の目的を忘れるなよ。お前は子供達と心を通わせつつ、もし何かあったらすぐに俺達やここの職員の人に連絡をするんだ）

「分かっておるぞ、清磨！ 私達は園長殿の代わりに、子供達を喜ばせなくてはならぬ！」
清磨が忠告するまでもなく、ガツシユは自分のすべき事が分かっている。それを察した清磨はガツシユから離れた。その時、先程の女性職員が再び口を開いた。

「それから、今日はもう一人の子が来てくれます。その子とも皆、仲良くしてくれるかなー？」

「「「はーいー」」」」

子供達は元気いっばいに返事をした。今日から3日間、職場体験で女子高生が来るそうだ。松方さんがいない今、E組に混じっての仕事の手伝いが彼女の役割となる。これを聞いたE組一同の罪悪感が増した。自分達のせいで、その人の職場体験にも影響を及ぼしてしまったのだから。そして、

「おはようございまーす！」

1人の制服姿の女子高生が挨拶と共に入ってきた。そして彼女の顔を見たガツシユ

ペアは驚きを隠せなかった。彼等はその女子高生と面識があつたのだ。

「あ、あなたは……」

「お主……」

しおりちゃんではないか!!」

「あれ、ガツシユ君と清磨君?!」

((((またこの2人の知り合い?!)))

何と職場体験に来た女子高生は、ガツシユが優しい王様を目指すきつかけとなった魔物コルルのパートナー、しおりだった。

LEVEL. 48 ボランティアの時間

わかばパークにはお金が無く、建物の修繕すらままならない。さらに、人手も足りない様である。それに気付いたE組一同は、磯貝を中心に作戦会議が行われた。これだけの人数と時間があるのだから、淡々と仕事をこなす以外にも色々出来るのではないかとこの事である。その間の子供達の遊び相手は、ガツシュとしおりが務める事になる。

「じゃあ皆、私の友達を紹介するね。『ティーナ』って言うんだ、仲良くしてあげてね！」

「『可愛いー！』」

しおりはティーナと呼ばれた手作りの人形を取り出した。裁縫が得意な彼女がコルルの為に一週間もかけて作った代物である。ティーナは子供達、特に女の子達に大人気だ。

「(あの人形を見ると、コルルを思い出すのだ……)ならば、私も友達を紹介するのだ！バルカン300だぞ！」

「『おぉー！』」

ガツシュはしおりのティーナに対抗して、バルカン300を取り出した。男の子達に

は人気な様だが、女の子達は微妙な表情を見せる。そんな子供達の中で、輪に入つてこようとしなない女の子がいた。

「何よ、人形遊びなんて下らない！」

「そ、そんな事を言わずとも……」

ピンク髪の女の子、鬼屋敷さくらはとんがった性格をしている。落ち込むガツシユの隣では、しおりが苦笑いをしていた。彼等がさくらへの対応に困っていると、作戦会議を終わらせたE組一同が来た。

「しおりさん、済まない。俺等が話し合っている間に、子供達の世話を丸投げする形になつてしまつて……」

「気にしないで大丈夫だよ、清麿君。何だか皆、色々やつてくれるみたいだし。私は君達より早くいなくなつちゃうけど、協力出来る事があつたら言つてね！」

作戦会議の結果、主に施設の改修を行う班・子供達の世話を行う班・食事や洗濯などの準備を行う班の3つに分かれる事に決まつた。そして1日目は、改修や子供達を喜ばせる為の計画や準備に時間を費やしつつ、業務をこなした。こうしてE組のボランティアとしての職場体験の初日は終了した。

「しおりさん、この後空いてるっすか？」

「前原君、だっけ。どうしたの？」

「一緒にどつか食べに行きませんか？」

業務終了後、他の生徒達が見ている中で前原はしおりにナンパをしていた。前原はかつて、E組の片岡を除く女生徒全員にナンパした過去を持つ。そんなプレイボーイな彼がしおりを誘うが、

「ごめんね、帰ったら家族で外食する事になってるんだ。また今度ね〜」

「あ、ハイ……」

軽くないなされてしまった。しおりはかつて親との関わりが極端に少ない時期があったが、今は改善されている。そしてこの場は解散となり、モチノキ町在住のしおりはガツシユペアと帰る事になった。

「『しおりおねーちゃんとガツシユちゃん、また明日ねー！』」

「もう一人のお兄ちゃんも〜」

ガツシユとしおりは初日にして多くの子供達の心を掴んでいたが、清磨はあと一歩及ばなかった。そして3人は子供達と職員に挨拶をした後、わかばパークを出た。他の生徒も帰り支度を始める中、しおりを誘う事が出来なかった前原は、まだナンパを諦めていない様子だ。

「前原、アンタここに来た目的忘れてないでしょうね？」

「それはねーよ、岡野。誘うのは業務時間外だから！」

「いや、そういう問題じゃ……」

彼のナンパ癖を見かねた岡野が忠告するが、前原がちゃんと聞いているのかは分からなかった。そんな様子を多くの生徒が呆れ混じりに見ていたが、岡島が口を開いた。

「けどお前、リエンさんの事は誘ってなかったよな？」

「バカ！リエンさんのあんな話を聞いた後じゃ、ナンパなんて出来ねーよ！」

前原をもってしてもナンパは不可能だと判断する程、ウォンレイペアの絆は固い。そんな話をしながら彼等は帰路に着いた。

その頃、ガツシユペアとしおりは帰宅しながら今日の仕事について話していた。

「しおりさんもガツシユも、見事に子供達の心を掴んでいたな」

「コルルにしてあげたように他の子達にも接するようになったの。上手くいって良かった。でも……」

「さくらちゃんとは仲良く出来なかったのだ」

「あの強気な性格の子か」

しおりとガツシユは多くの子供達と仲良くする事が出来たが、さくらとだけは上手くコミュニケーションを取る事が出来なかった。彼女はイジメが原因で登校拒否をしており、心を閉ざしているようだ。

「そういえばあの子、渚以外の者とは喋って無かったのだ」

「渚も随分手を焼いているみたいだがな」

「ハハハ、そうだね」

そんなさくらに対して、渚が積極的にコミュニケーションを図ろうとしていたが、一筋縄では行かない様子だ。そして3人は少しの間無言で歩いてしたが、しおりが別の話題を出してきた。

「魔界の王様を決める戦いって、まだ続いてるんだよね……今、どんな感じ？」

しおりは魔物の戦いが気になっていた。コルルの為にも彼女はガツシユが勝ち残り、優しい王様になって欲しいと願っている。コルルは魔物の戦いに参加したことにより、とても悲しい思いをしてしまったのだから。

「今はとても強くて危ない魔物との戦いに備えて、日々特訓をしておるぞ。その魔物にも勝って、優しい王様になってコルルとの約束を果たすのだ!!」

「ああ、今日も帰ってからすぐに特訓だ!」

「そっか……大変だと思うけど、コルルの為にも頑張つてね!」

クリアに勝つ事が出来なくては、全ての魔物が消されてしまう。ガツシユ達は勿論、コルルでさえも。そんな事は決して許されない。絶対に勝たなくてはいけないのだ。そしてガツシユペアとしおりは、それぞれの家の分かれ道まで来た。

「それじゃあ私はこっちだから、また明日ね！」

「さようなら」

「ウヌー！」

しおりと別れた後、ガツシユペアは魔物の戦いについて考えていた。そして、

「清麿。私は、分からなくなってきたおる」

「何がだ？ガツシユ」

ガツシユが口を開いた。そして少しの沈黙の後、彼は再び話し始めた。

「魔界の王を決める戦いが本当に間違っておるのかどうか……確かにこの戦いでは多くの者が傷付いたし、コルルもしおりちゃんもとても辛い思いをした。しかし、この戦いを通して私は、自分の成長を感じておるのだ。それに戦いが無ければ、私は清麿と会う事も無かったからの」

魔物の戦いは厳しい場面も多かったが、それを乗り越えて成長する人や魔物も確かに存在する。それはガツシユペアも例外では無かった。

「そうだな、俺もガツシユと出会って変わる事が出来た。それにこの戦いの正体がどん

な物であれ、一つの目標に向けて努力する事は、確実に成長に繋がる。E組だつて殺せんせー暗殺に向けて努力した結果、変わる事が出来たんだから……最も、行き過ぎは良くないがな」

清麿は魔界の王を決める戦いと、E組での殺せんせー暗殺の日々を重ね合わせた。共にそれぞれが目標の為に最大限頑張り、成長していく。ただし、目標の為に無関係な人々を傷付ける事は決して許されない。

「とは言えガツシユ。この戦いがどんな物であろうとも、俺達は勝ち残らなくてはならないんだ」

「ウヌ！戦いを乗り越えれば、答えが見えてくるかもしれぬ！そして私は、何としても優しい王様になるのだ!!」

しおりとの再会を果たし、優しい王様になる事を改めて決意したガツシユである。

「しかしその前に、わかばパークでの仕事をきっちりこなさないとな。明日から、もっと忙しくなるぞ！」

「そうだのー！」

今日立てられたわかばパークでの計画は、明日から本格的に動き出す。明日以降の業務に向けて、彼等は気合を入れ直した。

次の日、子供達を喜ばせる活動の一環として、E組の何人かが劇を行う事になった。参加者は短い練習時間内にも、見事に自分の役を演じていた。

「やめて騎士カルマ!!これ以上誰かを傷付けてはいけない!!」

「茅野姫、この魔物を倒さない事には平和は訪れませんので」

「おい、本当に当てるのは無しだつて……」

茅野が姫役、カルマが騎士役、寺坂が悪い魔物役を演じる。台本では攻撃を当てるのは禁止されていたが、カルマは初めから寺坂を殴る気満々だ。その時、ガツシュとしおりは後ろで子供達を見守る係を務めている。

「皆すごいね。アクシオンも本格的だし、カエデちゃんの演技なんかは役者さん顔負けなんじゃないかな?」

「カエデ、本当のお姫様みたいだったのだ」

2人は茅野の演技力に感心していた。そして演劇は無事終了して後片付けが開始される中、先程の演技力も相まって茅野が子供達に懐かれていた。演劇を見ていた子供達は茅野・ガツシュ・しおりと共にはしゃいでいた。

その頃清磨は、杉野・菅谷・磯貝と共に施設改修に必要な材料を運びながら、3人が子供達と楽しくしている様子を外から見ていた。ちなみに建物の設計図は、建築関係が得意の千葉が仕上げしており、鳥間先生の部下で建築士の資格を持つ鵜飼健一が指導してくれている。

「あの3人の子供受けが良いな、空気の掴み方をよく分かっている」

「そうだよな。ガツシユと茅野は体型が近いからだとして、しおりさんは妹か弟でもいいのか？」

「……高嶺。しおりさんは魔物の子と一緒にいたから、子供と接する事に慣れているんじゃないのか？」

杉野と菅谷が3人の子供達と仲良くする様子に感心している中、磯貝はしおりが魔物の戦いに参加していた事を感じていた。

「その通りだ。そしてしおりさんは、その魔物を自分の妹のように可愛がっていたんだ」
コルルペアは一緒に過ごした時間は短かったが、本当の姉妹のように仲が良かった。だからしおりは、小さな子供と接する事に慣れているのだ。

「とても心の優しい魔物だったよ……」

清磨はコルルとの別れを思い出す。そしてコルルの事をさらに話そうとしたが、清磨は渚がさくらと楽しそうにしている様子を見かけた。

「なあ3人共、渚って随分あの子と仲良くなったんだな」

彼は驚いたような声でそう言った。そしてそれを聞いた3人が渚の方を向いた。

「ホントだ、渚の奴やるな！俺まだあの子と一言も話せてねーよ！」

「俺もだわ。ていうかさくらちゃん、何か顔赤くなってる？」

菅谷の言う通り彼女は顔を赤くしながら渚と話していた。さくらが渚に気があるようにしか思えないのだが、渚の方は通常通りの様子である。

「なあ、多分渚って無自覚だよな。結構恐ろしい事かもしれないぞ」

「渚は親しみやすい奴だが、まさか……（そーいやテイオも、渚とはかなり親しくなってたな）」

渚が無自覚でさくらを口説き落としかねない事を想像した磯貝と清麿は、冷や汗を掻いた。この事をきっかけに、多くの生徒が渚の怖さに気付き始める。

「俺達も施設の子と仲良くしないとな！さあ、まずはこれを運んでしまおう！」

「「おう！」」

清麿の一声により3人は気合を入れ直し、材料運びに取り組んだ。

今日はしおりの職場体験の最終日で、彼女は皆の前で挨拶を行った。

「それでは皆さん、ありがとうございます！E組の皆も、頑張つてね！」

「しおりちゃん、3日間お疲れ様」

「しおりおねーちゃん、行っちゃだー」

職員の方が労いの言葉をかける中、多くの子供達はしおりとの別れを惜しんでいた。彼女は3日と言う短い期間で、見事に子供達と心を通わせる事が出来た。そして挨拶を終えた彼女はそのまま帰宅した。その後子供達も家に帰って行き、今日は解散となった。

E組一同が帰り支度をしていると、前原が明らかに落ち込んだ表情を見せる。

「前原、どうしたんだ？」

「……結局、しおりさんを誘う事が出来なかった。ガード固すぎるだろ」

前原の発言を聞いて、E組の多くがズッコケた。3日間しおりに声をかけてきたが、彼女は理由を付けては、前原の全ての誘いを断つたのだ。

「アンタ、良い加減にしなさいよ!!」

「ぐはっ!!」

前原のナンパ癖は遂に岡野の逆鱗に触れ、彼女は飛び蹴りを喰らわせた。

「ウヌウ、前原はしおりちゃんと友達になれなかったのだな……」

「ガツシュ、そういうのじゃないから！」

そんな光景を生徒達は呆れながら見ていた。そんな中、不破が口を開いた。

「高嶺君とガツシユ君、しおりさんと知り合ったきつかけは魔物絡みだよね？だとしたら、しおりさんのパートナーの魔物ってどんな子だったの？」

彼女は持ち前の推理力を活かして、しおりが魔物の戦いに参加していたと予測した。不破の発言を聞いて、クラス一同がガツシユペアの方に注目する。それを見た清磨は、コルルペアの事を話し始めた。

「……しおりさんのパートナーの魔物“コルル”との出会いが、ガツシユが優しい王様を目指すきつかけなんだ」

清磨は彼等にガツシユとコルルの出会いを話した。コルルは術を出すともう一つの人格が出てしまい、そのせいで戦いから逃れる事が出来なかった。その事を辛く感じた彼女の意志によってガツシユペアに本を燃やしてもらい、コルルは魔界へ帰った。その時にガツシユは優しい王様になる約束をしたのだ。その出来事によって、ガツシユは強い意志を持って戦いに臨む事が出来た。そうでなければ何処かで負けて、彼は魔界に帰っていたかもしれない。

「そうだったんだ。それがガツシユ君が優しい王様に拘る理由なんだね……」

「だからお前等は、俺達がした事にあんなにも腹を立てていたんだな」

渚と寺坂を始め、多くの生徒達が暗い表情になった。自分達が力に溺れた結果として

松方さんを傷付けた事は、ガツシユの理想に相反する。自分達は許されざる事をしてしまった事を、改めて感じた。

「だが皆反省して、今回のボランティアにも積極的に励んでいる。後は松方さんや子供達に喜んでもらえるよう、頑張るしかないさ」

「ウヌ！皆でやり遂げて見せようぞ！」

ガツシユペアは明日以降の業務に向けて気合を入れた。その時、茅野がガツシユの前まで来て彼の頭に優しく手を置いた。

「ガツシユ君。その魔物の子の為にずっと、一直線に頑張ってきたんだね。それは凄い事だと思うよ」

「カエデ、私は優しい王様にならねばならぬからの！」

「うん、ガツシユ君ならなれるよ！」

ガツシユの真つ直ぐな目を見た茅野は、顔に笑みを浮かべながらその頭を撫でた。そんな光景を見て、今度は神崎が口を開いた。

「高嶺君もガツシユ君も、その目標の為に色んな逆境を乗り越えてきたんだよね。2人のそんな姿を考えると、こっちまで元気が出てくるよ」

彼女が優しく微笑んだ。ガツシユペアが如何なる困難にも立ち向かう様子は、直接それを見ていなくとも、厳しい家庭で育てられた神崎にとって励みになっていたのだ。

「そうだな、だがまだまだ苦難は残っている。これから戦うべき魔物は今迄の敵とは比べ物にならない程の強さだからな」

「頑張つてね！」

神崎の一言に、クラスの皆が頷いた。彼等は魔物の戦いに力を貸す事は出来ないが、ガツシユペアの事を応援してくれている。そんなE組の仲間に対して2人は、感謝の気持ちを伝えた。

E組全員が別れた後、茅野は1人家まで歩いていった。

(ガツシユ君はあんなにも真つすぐな目で、自分の目標に向けて頑張っている。それに高嶺君も。私だつて負けてられない。何としても、やるべき事をなさない！)

茅野のやるべき事、それが何なのかはクラスの誰も知らない。

(私のやる事はガツシユ君を裏切る事になるけど……それでも、やらなくちゃいけないんだ！それでしょ……お姉ちゃん！)

彼女が本性を現すのは、まだ先の話である。

しおりが帰ってからでもE組のボランティアは続き、学校では出来ない勉強を沢山行えた。そして各々が役割を果たしつつも、子供達と心を通わしていく。ボランティアの人数が残りわずかになった時、女性職員が生徒達と子供達を集めた。

「何と明日はわかばパークに、特別ゲストが来てくれます!!」

「えー、誰だろー?」

ゲストの存在を聞いて、子供達がざわめきだした。一体誰が来るのか、E組一同も皆目見当が付かなかった。

「その方の名前は……」

「パルコ・フォルゴレ」!! 世界的大スターです!!」

((((な、何だつてー!!)))

E組一同、心の中で叫ぶ。何と明日来る特別ゲストは、キャンチヨメのパートナーのフォルゴレである。事前に松方さんが、子供にもファンが多い彼が来れば皆が喜ぶと考えて、フォルゴレに手紙でお願いをしていたのだ。フォルゴレはそれを快く了承してくれた。

「すごい!あのフォルゴレが来るなんてー!」

「今から楽しみだよー！」

子供達は大喜びだ。

「え、フォルゴレって……」

「これは驚いたね」

普段は感情を表に出す方ではない狭間や竹林でさえも、フォルゴレの名前を聞いて驚愕する。それ程に彼の来日は衝撃的だ。

「本当にフォルゴレが来るのだな!! 楽しみなのだ!! (と言う事は、キャンチヨメとも会えるのだ!!)」

ガツシユが目を輝かせる。共に戦ってきた仲間との再会は、とても喜ばしい事である。彼は非常に舞い上がっていた。

「な……な……」

その隣で清磨は目が飛び出そうになる。まさかわかばパークにて、キャンチヨメペアとの再会を果たすとは思っても寄らなかつた。

「アンタ達、流石に大袈裟じゃない?……まさか!」

2人のオーバリーアクションを見かねた速水が声をかけたが、彼女はガツシユペアとフォルゴレに接点がある事を察した。

((((パールコ・フォルゴレまで2人の知り合いなの?!)))((

フルゴレの来日以上に、彼とガツシユペアに面識がある事に驚きを隠せなかつたE組一同である。

LEVEL. 49 スターの時間

女性職員の言う通り、本当にフォルゴレはキャンチョメを連れてわかばパークまで来た。E組一同、世界的大スターがこの場にいる事を信じられないと言った様子である。女性職員に挨拶を済ませたフォルゴレは、早速子供達に囲まれていた。

「本物のフォルゴレだー！」

「カッコいいー！」

「ハツハツハー！皆、よろしくなー！」

そんな彼とガツシユペアの目が合った。しかしフォルゴレは子供達に囲まれており、身動きが取れない。そんな彼の状態を察したキャンチョメが、ガツシユペアの方に挨拶に来てくれた。

「やあガツシユ、清磨！久し振りだね、調子はどうだい？」

「ウヌ！特訓を重ねてもっと強くなっておるぞ、キャンチョメー！」

「そっちは元気そうだな」

元気そうなキャンチョメペアを見た2人は安心したと同時に、仲間との再会を嬉しく思っていた。その時、三村が彼等の方まで来た。彼は目を輝かせている。

「本物のパルコ・フォルゴレだ……サイン貰えるかな？」

テレビっ子である三村はフォルゴレのファンであり、彼を生で見れる事に喜びのあまり体を震わせている。しかしE組の生徒でフォルゴレを見てテンションが上がっているのは、彼だけでは無い。

「パルコ・フォルゴレって女子にモテモテなんだから！俺もそーなりたいたいぜ！！」

「全くだぜ！！それに『チチをもげ！』は、特に名曲だからな！！」

女性への関心が特に強い岡島と前原にとっては、毎日女性ファンに囲まれているフォルゴレは憧れそのものだ。『絶世の美男子』を自称するフォルゴレだが、それは誇張表現などではない。

「君達、フォルゴレのサインが欲しいのかい？」

そんな彼等にキャンチョメが声をかけた。フォルゴレを好いてくれる前原達を見て、彼も嬉しそうである。

「『欲しい！！』」

「分かった！僕がフォルゴレに言ってきてあげよう！」

3人は即答した。世界的大スターのサインが貰えるのだから、迷う必要性は無い。そしてキャンチョメがフォルゴレの方に向かおうとしたが、すでにフォルゴレは彼等の近くに來ていた。

「話は聞いたよ、キャンチョメ！はい、君達へのサインだ！」

「「あ、ありがとうございませす!!」」

サービス精神旺盛のフォルゴレは、早速色紙に書いた3人分のサインを彼等に手渡ししてくれた。それを見た3人の目の色が変わる。その後、フォルゴレはガツシユペアの方を向いた。

「久し振りだな！清麿、ガツシユ！2人はクラスメイトとボランテニアに来てるんだろ？」

「ウヌ！フォルゴレも元気そうだな！」

「ああ、事情は昨日電話で話した通りだ。今日はよろしくな」

「よろしく！お互いのやるべき事を、しっかりと果たそうじゃないか！」

ガツシユペアに挨拶を済ませたフォルゴレはキャンチョメと共に、今日のスケジュールを女性職員に確認する。フォルゴレの存在感に圧倒されながらも、E組一同は今日の仕事に取り掛かるのである。

今は子供達が絵を描く時間で、皆は動物の絵を描いている。子供達に混ざってガツシユ・キャンチョメも絵を描いており、その様子を矢田と速水が見守る役割となった。

「皆、上手にかけてるね！」

「ちゃんと動物の特徴を捉えられている」

動物の特徴を上手くとらえた子供達の絵を見て、2人が感心した。

「ウヌ！私はブリを描いたのだ!!」

「それ、動物と言うよりガツシユの好きな食べ物の絵じゃないか」

ガツシユは相変わらずブリが好きである。そんな彼の絵を見たキャンチョメが呆れ混じりにツツコミを入れた。

「おっと、お絵かきの時間かい？」

彼等が絵を完成させた後に、フォルゴレが輪の中に入ってきた。彼は子供達の絵を嬉しそうに見ている。

「上手じゃないか。ところでキャンチョメは、ライオンを描いたのか？」

「そうだよ。僕の一番好きな動物さ！ライオンは強くてカツコいいからね。フォルゴレもそう思うだろう？」

キャンチョメが得意げにそう尋ねたが、フォルゴレは首を縦には振らなかった。そして彼は少し遠い目をして、自分が最も好む動物の名前を口にした。

「私の一番好きな動物は、カバさんだ」

フォルゴレが意外な動物の名前を出すと、キャンチョメは首をかしげる。フォルゴレ

がカバをライオンよりも好きだと言う事を、信じられない様子だ。

「カバさんより、ライオンの方がカッコいいフォルゴレらしいのに。皆もライオンの方が良いと思うだろ？」

キャンチョメはそこにいる全員に尋ねた。その事について子供達は考える。そして少しの沈黙の後、彼等は口を開いた。

「やっぱライオンは強くてカッコいいよなー！」

「僕もライオンの方が好きだよ！」

数人の男の子達はライオンの方が良いと主張した。キャンチョメがそれを聞いて嬉しそうにするが、そうは思わない子供達もいるようだ。

「でも、ライオンって何か怖いよね……」

「うん。カバさんの方が、のんびりしていて可愛いと思う」

女の子を中心に、ライオンよりもカバが好きなお子もいる。ライオンは確かに強くてカッコいいが、怖いと思う子供達も多いようだ。

「そうかなあ。ガツシユはどう思う？」

「ウヌ……私はライオンもカバさんも好きなのだ！」

「そう言うと思ったよ……」

ガツシユの返答を聞いて、キャンチョメは肩を落とす。しかし彼は、ガツシユの答え

をある程度予想していた。ガツシユなら、ライオンとカバの優劣を付けようとはしないだろうと。

「桃花と凜香はどっちかの?」

そんなガツシユは、矢田と速水に話を振る。

「私はどっちが良いかなあ? 強くてカッコいいライオンか、可愛げのあるカバさんか……凜香はどう思う?」

矢田はどちらかを決めかねていた。そんな彼女は、同じく考える素振りを見せる速水の方を向く。

「いざ言われると悩むね。でもフォルゴレさんのイメージは、ライオンよりカバさんの方が合っていると思う」

「ええ、そうなのかい?」

「確かにフォルゴレは、ライオンみたいに怖くはないのだ!」

キャンチョメは速水の言う事に納得していない様子だったが、ガツシユは同意した。普段のフォルゴレのイメージでは、怖くて凶暴なライオンは似合わないと言うのが、速水とガツシユの考えである。そんな時、

「おっと君、嬉しい事を言ってくれるじゃないか」

「え、カバさんが似合うって嬉しいの?」

フォルゴレが速水を見て微笑んだ。そして彼は、それが信じられないと言った表情をしているキャンチョメの頭に手を置いた。

「嬉しいことだよ。何たって……カバさんの牙には小鳥が止まるんだ。ライオンだとそうはいかない」

フォルゴレはそう言うが、それを聞いた皆はあまりしつくり来ていない様子だ。フォルゴレのこの発言の意味が分かるのは、まだ先の話である。そして先程まで遠い目をしていたフォルゴレが、いつも通りの表情に戻った。

「ところで今日は私が皆の前で歌ったり踊ったりするんだが、E組の誰かにバックダンサーをお願いしたいんだ。良いかな？ 勿論キャンチョメとガツシュは参加決定さ！」

フォルゴレから意外な依頼が来た。確かにフォルゴレ1人だけよりも、何人かが前に踊ってくれた方が盛り上がる。ちなみにキャンチョメとガツシュには、断る選択肢すら無かった。

「ダンスなら経験ありますよ！ 私達で良ければ……」

「私も大丈夫です」

「ウヌ！ 2人ともそうだったのか！」

奇しくもここにいた矢田と速水はダンスの経験者だ。それを聞いたフォルゴレはさらにテンションを上げる。

「こんなに可愛いバンビーナ達に踊ってもらえるなんて光栄だ!! 早速ダンスの動画を見てくれ!!」

フォルゴレは自分のスマホで、これから踊るダンスの振り付けの動画を矢田と速水に見せた。しばらく2人はそれを真剣な表情で見続けるが、*“チチをもげ!”*のそれを見た彼女達の顔が真っ青になる。

「すみません、これはちよつと……」

「男子にお願いしても良いですか?」

矢田と速水はバックダンサーの依頼を断ってしまった。

「……そうか、ならば仕方ない。やれる子が見つかったら教えてくれ、ハッハッハ!」

依頼を断られたのにも関わらず、フォルゴレはいつも通りのテンションでその場を離れる。それを見た矢田と速水は、罪悪感に苛まれながら代役の男子を探すのだった。

一方さくらは、自分の描いた絵を渚に見せていた。

「さくらちゃん、凄いでしょ!」

「へへ、どんなもんよ!!」

彼女は渚に対しては、満面の笑みを見せる。

「さくら姐さんがあんなに笑っている!」

「渚って人、やるな!」

さくらに懐かれた渚に対して、子供達が尊敬のまなざしを向けていた。

フォルゴレ達が生徒の相手をする中、清磨は外での力仕事に励む。とは言え施設の改修自体はほぼ終了しており、残りは最終チェックや施設内で不足している物品の運搬等だけで、山場は過ぎている。そんな彼が一息付いていると、カルマが話しかけて来た。

「高嶺君。フォルゴレさんと一緒にいたキャンチョメ君、彼は魔物だよな?」

「ああ、そうだ。あいつ等も共に厳しい戦いを乗り越えて来た仲間だ」

「成程ね。だったら彼等の事を殆ど知らない俺がこう言うのは良くないかもだけど、話を聞いてくれるかな?」

「随分かしこまっているな。一体どうしたんだ?」

カルマはキャンチョメを一目見ただけで、彼を魔物だと決め打った。そんなカルマは、キャンチョメを見て思うところがある様だ。

「キャンチョメ君の目つてさ、凄く自信に溢れているように見えたんだよ。けど何だか危なっかしいと言うか……まるで今回の事故を起こす前のクラスの皆と、似たような目をしてる」

弱者だったE組は力を持つ事で弱い物の目線で考える事を忘れた結果、松方さんを怪

我させてしまった。そんな彼等のような目を、キャンチョメがしているとカルマは考えていた。確かにキャンチョメも最初は弱かったが、今は強力な術を手に入れて、練習試合でガツシユペアを負かせる程に成長した。そんなキャンチョメの境遇は、E組に似通う所もあるかもしれない。かつて力に溺れて期末試験で失敗したカルマだからこそ、キャンチョメの事に気付き、失礼を承知でそれを清磨に伝えたのだ。

「……赤羽もそう思うか」

「何だ、気付いてたんだ」

カルマと同じことを清磨も考えていた。彼はキャンチョメが力を持つことによる変化を内心危惧している。キャンチョメが力に溺れて、大切な物を見失ったりしないかと。

「フォルゴレが一緒だから滅多な事は無いとは思いますが、警戒するに越した事はない。大切な仲間が間違つた方向に行くのは、もう見たくないからな」

「高嶺君、今回の件はかなり堪えたみたいだね」

自惚れた結果、思いやりを欠いた行動をする事は許されない。今は引きずつてないが、事故が発覚した時の清磨はかなり激怒した。そんな彼の前で、別の仲間が同じ失敗をする事は何としても避けたい。カルマは清磨が考えている事をすぐに察した。そして2人がそんな話をしてしていると、

「お前等、丁度良かった！手が空いてそーだな！」

「悪いがこれ運んどいてくれねーか？」

岡島と前原が施設に運ぼうとしていた何冊かの本を、清磨とカルマの前に差し出した。施設改修の際に図書室を作り、そこに置くための本である。

「別に構わないが、別の仕事でも入ったのか？」

「実は、俺等が急遽フォルゴレさんのショーのバックダンサーを務める事になってさ！その練習をしなくちゃならねーんだ！」

「最初はダンス経験者の矢田と速水がやる予定だったんだがな。俺達に代わってくれて頼まれたんだよ！そういう訳だ、じゃあな！」

「そう言い残して前原と岡島は去って行った。矢田と速水の代役は、この2人に決まった様だ。」

「まあ、あの振り付けを女子がやるのは抵抗があるな……」

「〃チチをもげ！〃は、結構アレな歌だからね」

この曲の歌詞及び振り付けは中々な物であり、女子2人が断るのは仕方ないと清磨とカルマは考えていた。

そしてダンス本番、フォルゴレが中心になってガツシユ・キャンチョメ・前原・岡島が後ろに立つ。まずは「無敵フォルゴレ」の曲が流れ、フォルゴレが歌いながら、ガツシユ達は踊り始めた。それを見た子供達も一緒に踊っていた。さくらは恥ずかしそうにしている。そんな様子を後ろからE組一同と女性職員は楽しそうに眺めていた。

「皆、ダンス上手いな……」

「前原と岡島、フォルゴレさんの動画でかなり勉強してたよ」

清磨とカルマを始め、彼等のダンスの技術に感心していた。

しかし、場の雰囲気は「チチをもげ！」が流れ出した時に変わり始める。

「あ、あれはちよつと……」

片岡を始め、女生徒の大半がフォルゴレ達から目を逸らす。子供達は相変わらず踊っていたが、さくらはそれを見て愕然とする。ちなみに茅野がその曲を聞いて、とてつもない殺気を出していたが、渚と奥田になだめられていた。

今日の仕事が終わわり、ガツシユペアはキャンチョメペアと帰り道を歩く。

「フォルゴレ、キャンチョメ、ガツシユ、お疲れ様」

清磨以外が前に出ていたメンバーであり、彼は3人に労いの言葉をかけた。

「ハハハ、私はスターとして当然の事をしたまでさ」

「2人と踊れて、楽しかったのだ！」

「今日一日、楽しかったよ。次会う時は、クリアと戦う時かな」

キャンチョメが早々にクリアの話題を出した。それを聞いた一同の緊張感が高まったが、清麿はキャンチョメに対する不安感をぬぐえずにいた。

「そうだな。ところでキャンチョメ、何か変わった事はあるか？」

「え？特にないけど……」

そんな清麿はキャンチョメに尋ねたが、キャンチョメは心当たりが無い様だ。しかし清麿が考えている事を、フォルゴレは察した。

「心配はいらないよ、清麿。キャンチョメの事は私に任せてくれ」

「フォルゴレ、僕だっていつまでも守られているだけじゃないぞ！」

「ハハハ、それもそうだな！」

キャンチョメは強気な口調でそう言ったが、フォルゴレは笑いながら聞き流した。笑みを見せるが、彼は心の中で力を入れたキャンチョメの事を案じている。そしてフォルゴレは、これまでとは比べ物にならない程の真面目な表情で口を開いた。

「とにかく、私達は負ける訳には行かない。お互い全力を尽くして戦おう！」

「当然だ！俺達は勝たなくちゃいけないんだ、魔界を滅ぼさせないように！」

「どんな相手でも、僕の呪文があれば大丈夫さ！」

「私もさらに特訓を重ねておるぞ！」

一同がクリアとの戦いに向けて気合を入れ直す。敗北イコール魔界の滅亡、それは何としても防がなくてはならない。

そして彼等は戦いについての話をしながら、それぞれの分かれ道まで来た。

「なあ2人共、本当に恵さん達やデユフォーに会わなくていいのか？」

「そうしたいのは山々だが、皆忙しいだろう。私達の特訓は早々に終わっているが、皆の時間を取らせる訳には行かない。まあ、よろしく伝えておいてくれ」

「忙しいのは、フォルゴレもじゃないか！明日も仕事なんだろう？」

フォルゴレは今日にでも帰国するようだ。恵達に気を使ったのもあるが、自分の仕事の忙しさもある。

「2人共、また会おうぞ！」

「元気でな！」

キャンチヨメペアと挨拶を済ませた後、ガツシユペアは帰路に着いた。

今日は松方さんの退院の日だ。殺せんせーに連れられた松方さんは、初めは生徒達を

認めようとはしなかったが、改修された施設を見て驚愕する。千葉が設計図を鵜飼さんの指導の下で書き（律の計算込み）、施設は見事にリフォームされていた。

「何ということでしょう!!」

古くなったそれは一新され、E組の裏山で手に入れた木材が使用された。それ以外にも多くの工夫が施されており、松方さんを驚かせる。しかし、

「ただし、お前達が子供達と心を通わせていないようなら働きは認められんな」

松方さんからの厳しい言葉である。E組一同緊張間が高まる。そんな中、

「おい、渚—!!テストでクラス2番取ったよ—!!」

さくらが学校から帰ってきた。彼女は学校にしばらく行ってなかったが、渚の言う通り数学のテストの時間だけ登校して、テストで高得点を取った。いじめっ子達も、テストの時間では手の出しようが無い。

「こうやって戦える武器を増やしていこうね、さくらちゃん!」

今は数学だけだが、少しづつ勉強を渚に教わっていけば、勉強の遅れを取り戻しつついじめっ子達を見返す事も可能になる。そんな戦い方を渚から教わったさくららは、彼と心を通わす事が出来ていた。

「ガキ共、やるじゃないか。お前等はさっさと学校に戻れ、やる事があるんだろ?」

松方さんはE組を許してくれた。生徒一同、事故の賠償責任を果たす事が出来た。し

かし、翌日には中間テストが控えていた。

テストの結果は、E組の大半はトップには入れずにA組の勝利に終わる。そして本校舎の敷地内にて浅野以外の5英傑が渚達に好き勝手言っていたが、カルマと清磨がそこに現れた。

「だったら、アンタ等は俺達に文句言えなくね？」

カルマは合計492点で学年3位だ。浅野を除くどのA組よりも点数が上である。

「ふう、ようやく浅野に並ぶ事が出来た。だが次は追い越して見せるー！」

清磨は合計493点で、浅野と同率で学年1位だ。

「ねえ、今回本気だったのは俺等だけなんだけど。でも次はそうはいかない、2学期の期末テストで決着を付けようよ」

「……いいだろうー！」

結果はA組の勝利だったが、浅野は何処か悔しそうだ。清磨とカルマの点数を見て、自分達の完全勝利とは思えなかったのである。清磨もカルマも期末テストでは悔しい思いをしており、受験勉強も兼ねて勉強の予習を行っていた為、2週間のハンデはそれほど気にならなかったのだ。そして彼等の努力と成果は、他のE組をフォロウする事に

も繋がった。

(ヌルフフフ。あの2人にとっては、2週間のハンデなど、何てことなかったようですねえ。そして敗北を知る者は、敗者を気遣う事が出来る。この事は、皆の成長の源となる)

その光景を、校舎の上から殺せんせーが見ていた。この件ですら、殺せんせーにとつては授業の一環なのである。

LEVEL. 50 プレゼントの時間

E組一同は職員室にて、フリーランニングの件で迷惑をかけてしまった事を烏間先生に謝罪をしたが、先生は気にしていない様子だ。

「今回の件で、何か学べたか？」

「はい、自分達が付けた力は誰かの為に使える事が改めて分かりました」

烏間先生の質問に渚が答える。そして彼に続いて、力の使い方を間違えないよう気を付けると他の生徒達も述べる。今回の一件は、浮かれ気味の彼等を戒めるには十分すぎる出来事だ。

「なるほどな、そんな君達にプレゼントだ！」

しっかりと反省している生徒達を見て、烏間先生は安心したと同時に嬉しそうな顔をする。その後、部下にいくつかの段ボールを持って来させた。そこには、衣類のような物が入っている。

「それより強い体操着は地球上に存在しない、これからの体育はそれを着て行おう」

この体操着は軍と企業が共同開発した強化繊維で出来ており、衝撃等にも耐性があり、防御力はかなりの物である。それにも拘らず通常のジャージよりも軽く、靴も良く

跳ねられるように作られている。さらに特殊な揮発物質をかければ服の色を一時的に変える事が可能だ。

「おお、凄いのだ!!」

生徒達がそれを受け取る中、ガツシユは通常の体操着とは一線を画す“超体操着”を見て目を輝かせる。しかし、

「済まない、ガツシユ君の分は無いんだ……」

烏間先生の絞り出したような声を聞いて、ガツシユは顔を真っ青にする。超体操着1つ作るのにも莫大な費用が掛かる為、正式に生徒として登録されていないガツシユの分は作られなかったのだ。

「又オオオオオ!!」

ガツシユは大声で泣き出す。多くの生徒がガツシユに憐みの目を向ける中、清麿がため息をついた後に彼をたしなめる。

「ガツシユ、烏間先生を困らせるんじゃない……これが無くともお前には、その特殊なマントがあるじゃないか」

「う、ウヌウ……」

確かにガツシユの変幻自在のマントがあれば、超体操着が無くてもハンデにはならな
いだろう。しかしガツシユは、自分だけが除け者にされたように感じてしまい、何処か

納得が行つてない様子だ。

「ガツシユ君、申し訳無いとは思っているんだ……」

ガツシユの悲壮感溢れた表情を見て、烏間先生は罪悪感に苛まれる。この事は、彼にとつても心苦しいのだ。しかし先生の謝罪を聞いてもなお、ガツシユの目から涙が止まる事は無い。そんな彼の頭を茅野が困つたような顔をして撫でる。

「しようがないなあ、よしよし……」

「ウヌウ……」

その光景を、教室にいる者達は苦笑いをしながら見ている。そんな中、矢田が口を開いた。

「高嶺君。このまま行くと本当に、ガツシユ君をカエデちゃんに取られちゃいそうだね……」

彼女は冗談交じりにそう言うが、それを中村が聞き逃さなかつた。彼女は口元をニヤケさせながら、清麿の方を見る。

「まあ、高嶺がガツシユに冷たくするからしやーない」

中村の発言を聞いた生徒達の多くが頷く。そして職員室内には、何故か清麿が悪い雰囲気が出来始め、生徒達の視線が彼に突き刺さるのだった。

「おいお前等、そんな目で見るんじゃない……」

清麿は頭を抱える。強く反発したいところだが、鳥間先生のいる手前、大声を出す訳にもいかない。それを見た茅野は、すこし申し訳なさそうにしながらガツシユの頭を撫で続けた。

生徒達に超体操着が配布された後、それを使用した暗殺が早速決行され、バーベキユーを楽しむ殺せんせーが生徒達の襲撃を受けるが、暗殺には至らなかつた。しかし彼等の狙いは、暗殺を成功させる以外のところにあつた。

「約束するよ、殺せんせー。この『力』は、誰かを守る以外では使わないって」

殺せんせーに新しい力の使い方を見せた上での約束。それを聞いた殺せんせーは、満足気な表情を浮かべた。

「満点回答です。明日からは通常授業に戻りましょう」

先生の言葉を聞いた生徒達は、元氣一杯に返事をしてその場を去つた。そんな彼等を見て、殺せんせーはE組の変化を感じていた。

(私が来た当初とは違う、今のここは暖かい殺意に溢れている)

そして先生は、自分が教師になるきっかけを作つた一人の女性の顔を思い浮かべていた。

次の日にガッシュペアが登校すると、下駄箱にて見たことのないネックレスを付けたビッチ先生と鉢合わせた。

「アンタ達、おはよう」

「ビッチ先生、おはようなのだ!!」

「おはよう……先生、そのネックレスどうしたんだ？」

「聞きたい？それはね……」

ビッチ先生が新たなアクセサリを付けている。それは7mm程の大きさの翡翠の珠が紐に通され、さらにオールノット加工で珠と珠の間に結び目が作られている。清麿は何事かと考えていたが、彼女はその理由を話してくれた。

「……リイエンが先生に誕生日プレゼントを贈ってくれたのか」

「良かったの、ビッチ先生！」

「そうなのよ。あの子、やってくれるわね！」

生徒達がわかばパークのボランティアに励んでいる間、ビッチ先生の誕生日が過ぎてしまった。身近な人間が自分の誕生日を祝ってくれない中、リイエンが中国からプレゼントを贈ってくれたのだ。プレゼントはビッチ先生からすればそれ程高級ではない代

物だったが、弟子からのプレゼントは嬉しい物である。

「そんなに高い物では無いのだけれどね。さて……」

ビッチ先生は得意げな表情をして、何かを求める様に手を差し出した。

「ウヌ？」

「……その手は何だ？」

「アンタ達は何か無いの？」

ビッチ先生が差し出す手を、清麿は何とも言えない表情で見ている。確かに先生の誕生日の事が頭から抜けていたは良くないかもしれないが、生徒にプレゼントを求めるとは。清麿がそんな事を考えていると、ビッチ先生が口元をニヤケさせながら手を引いた。

「冗談よ、ガキ共にそこまで求めてないから。悪かったわね、長話に付き合わせて」

「あ、ああ……」

ビッチ先生はそのまま職員室に向かおうとした。しかし先生が小さなため息を付いていた事を、ガツシユペアは見逃さなかった。2人も教室に向かおうとした時、ビッチ先生が振り返った。

「そうだ。アンタ達、今日の放課後空いているかしら？」

「どうしたのだ？」

ビッチ先生からの突然の誘いだ。用事はそれ程遅くならず、かつ清麿宅周辺まで送ってくれるとの事で、ガツシユペアは彼女の用事に付き合う事になった。ちなみに先生の勤務時間は放課後も続くが、時間給を使ってその用事を済ませるそうだ。

ビッチ先生の言う用事とは、リイエンへのお返しのパレゼントを用意する事である。そこで彼女は、リイエンとの交流が深いガツシユペアもパレゼント選びに同行させたかったのだ。そして今彼等は、先生の車で柵ヶ丘にあるショッピングモールで向かっている。

「ビッチ先生とのお出かけは、南の島以来なのだ！」

「ガツシユ、遊びに行く訳じゃないからね？」

浮かれているガツシユを見て、ビッチ先生が釘をさす。パレゼントを置かせてくれたリイエンに対して、誠意を見せる必要があるのだから。

「ビッチ先生、放課後とは言え抜け出して良かったのか？」

「だから、時間給って言うてるでしょうが！すぐに終わらせなきゃいけない仕事はもう済ませてあるし、終わったらちゃんと学校にも戻るわよ！」

（今日烏間先生がため息をついていたのは、これとは別件だと思いたい……）

突然の時間給取得のせいで鳥間先生が困っている可能性を危惧する清麿だったが、ビッチ先生は一切気にしていない様子である。

そして一行はショッピングモールに到着し、ギフトのコーナーを見ていた。周りのプレゼントを見渡した後、ビッチ先生が口を開いた。

「ねえアンタ達、リエンの好きな物とかって聞いてない？」

「そうだな……」

ビッチ先生からガツシユペアへの質問。リエンが喜びそうな代物について、清麿は真剣な表情で考える。しかし、

「ブリを使った料理が売っておるぞ！これはどうかの？」

「それはお前が好きな物だろ!!」

「アンタ等ねえ……」

ガツシユはブリの刺身や缶詰の詰め合わせを見つけて、よだれを垂らしながら目を輝かせる。そんな光景を見たビッチ先生は頭を抱えながら、連れてくる相手を間違えたのではないかと考える。

「食べ物と言えば、リエンは杏仁豆腐が好きだと言ってたな。いざとなれば、そこにあ

る杏仁豆腐の詰め合わせを送る手もあるにはあるが……」

「そう、候補としては考えておこうかしら」

清麿はビッチ先生にリイエンの好物を教えたが、先生はあまり納得いつていない。食べ物以外の贈り物を本筋で考えている。そして一行は、しばらくギフトのコーナーを周っていた。

「どうしたものかしら。あの子カンフーやつてるから、アクセサリーとかは危ない気がするのよね」

ビッチ先生達はリイエンへの贈り物を決めかねている。

「贈り物とは難しいのだ」

「そうだな、サンビームさんの時みたいにならないようにしないと……」

ガツシユペアはかつて、サンビームの引越祝い祝いの為の贈り物を買うために出かけたが、同行したティオペア及び水野と共に贈り物を探した結果、水野が勝手に開けてしまった？発見器を渡す事になってしまった。清麿がその時の事を思い出していたが、ある事を考えつく。

「なあ、ギフトコーナー以外も見てみないか？」

「奇遇ね。私も同じ事を考えていたのよ」

贈り物だからと言って、ギフトコーナーだけに固執する必要は無い。そして彼等は今

いるエリアを出た。

「何処に行こうかの？」

「俺に考えがあるんだが……」

「あら、言ってみなさいよ」

清磨は贈り物の候補を一つ思いつく。彼の意見を聞いた後、一行は靴のエリアに来た。

「カンフーシューズね。考えたじゃない、高嶺」

「普通の靴とは、何か違うのかの？」

「そうだな……」

清磨はカンフーシューズの説明をした。これは中国で愛用されている布製の靴で軽く、その名の通りカンフーを使用する際によく使用される。

「おおつ、リイエンにピッタリではないか!!」

これにはガツシユも感心する。この靴は日々カンフーを嗜むリイエンには、必須のアイテムでもある。

「レディースのコーナーはあっちね。デザインは私が選ぶわ」

「分かったよ、ビッチ先生」

一行はカンフーシューズを贈り物に決定した。ビッチ先生が選んだ物は黒に近い赤色の靴で、白い花の模様が施されていた。

ビッチ先生がそれを買った後、一行は清麿宅まで車で向かっていた。

「無事に贈り物が決まって良かったのだ!!」

「そうだな、後はリイエンが喜んでくれれば良いんだがな」

「何言ってるの、この私が選んだのよ？あの子が喜ばない訳が無いじゃない!」

ビッチ先生が得意げにそう言う。確かに師匠からの贈り物であれば、リイエンは喜んでくれるだろう。一行はしばらくカンフーシューズの話をしていたが、突然ビッチ先生が遠い目をした。

「……ねえ。アンタ達は魔物の戦いで、実際に誰かの死を経験した事があるかしら?」

ビッチ先生の突然の質問で、ガツシユペアの表情は真剣な物になる。

「俺は一度、呪文の集中砲火を受けて心臓が止まった事がある。その時に得た力が【アンサー トーカー答えを出す者】だ。だが俺達が見る限りでは誰かが死にかける事はあっても、本当に死んだ場面に出くわした事は無い」

「そうだの、私も清麿が死にかけた戦いをきつかけに力が強まったのだ。それから私達が今倒すべき敵は、魔物を皆消そうとしておるのだ」

人及び魔物の死を、彼等はまだ経験していない。しかし一歩間違えれば誰かの命が奪われていた可能性は十分にある。さらにクリアノートを倒さなくては、魔物達は全員消される、つまりは皆殺しになってしまう。魔界の王を決める戦いとは、それ程に過酷な物である。

「そう……アンタ達はそんな危険な戦いの中でも、誰も殺さずに済んでいるのね」

「相手の本を燃やせば魔物は魔界に帰るからな……ところで、何故そんな話を俺達に？」
「ビッチ先生、どうしたと言うのだ？ 何だか元気が無いように見えるが……」

話を聞いたビッチ先生の口角は少し上がったが、目は笑っていない。その目はまるで、彼等を羨むようである。

「私はこれまで殺し屋として、数多くの命を奪ってきた。そんな私が今更E組のガキ共とやっていけるのが、分からなくなってきたよ」

ビッチ先生には迷いが生じている。自分と殺しを経験していない彼等とでは、住む世界が異なる故、相容れる事は出来ないのではないかと。

「非現実的な戦いを乗り越えて来たアンタ達ですら、まだ誰も殺してはいない。私にも、殺し以外の選択肢があったのかしらね……」

ビッチ先生の初めての殺しは、紛争中の故郷に押し掛けた民兵を自分の父親の銃で撃ち殺した時である。その後ロヴロと出会い、人殺しの血の記憶を仕事として飼い慣らす為に、殺し屋としての道を歩む事になった。そんな彼女は、厳しい戦いにおいても「殺し」という選択肢を取っていないガツシユペアに対して、思うところがある様だ。

「本を燃やせば勝てる魔物の戦いと、人間同士の殺し合いでは事情が異なるんじゃないのか？俺が仮にビッチ先生と同じ境遇だとして、誰も殺さない選択肢を取れたかは分らない」

「どうかしらね……本を燃やせばって、そんな簡単な話じゃないでしょ。それに相手から本を奪う際にも本の持ち主を殺す事だって考えられるのに、アンタ達はそれをしなかった。自分達の命の危険が何度もあったのにも拘わらず」

相手のパートナーの人間の命を奪う。それはこの戦いにおいて確実な勝ち筋の一つではある、実際に清磨も殺されかけたのだから。それでもガツシユペア及び仲間達は、その選択肢を取らなかった。殺す事が当たり前の環境で育ったビッチ先生にとつては、その事でさえも眩しい事だったのだ。その話を聞いて、ガツシユが悲し気な表情で口を開いた。

「私達には多くの仲間がいたからこそ、危険な戦いでも誰も死なせずに乗り越える事が出来たのだ……しかしビッチ先生は、ずっと一人で戦ってきたのだな……」

それを聞いたビッチ先生は目を見開いた。彼女はE組に来るまで孤独に殺しを行ってきたのだ。師匠の口ヴロがいるが、彼が仕事を手伝う訳では無い。そして彼女の目からは涙が流れた。

「先生、大丈夫か？」

「……」めんなさい、少し車を停めるわね」

清磨はつかさずビッチ先生に声をかけたが、先生が泣き止む事は無かった。そして彼女は丁度車通りの少ない道路で、車を端に寄せて停車した。その後、ビッチ先生は自分の目を手で隠す素振りを見せる。

「ビッチ先生、どうしたのだ？」

そんな先生に対してガツシユペアは心配の眼差しを向けたが、少ししてビッチ先生の口角が上がった。そして彼女は堂々と、目を覆い隠していた手をどけた。

「ハン!!ガキ共がナマ言ってんじゃないわよ、1人が何だって言うのよ!さあ、車出すからね!!」

そう言って彼女は車を出したが、運転がかなり荒い。強がつてはいるが、先生は完全には吹っ切れてはいない。ガツシユペアは内心それが理解出来たが、それを口には出さなかつた。

「暗い話して悪かつたわね、これも全部カラスマのせいよ!!」

「何で!?!」

突然烏間先生の名前が出てきて、ガツシユペアは驚きを隠せず、目が飛び出そうになった。

「アイツ、同僚の誕生日くらい祝いなさいってのよ!!」

その言葉を聞いて2人は察した、ビツチ先生は烏間先生に自分を見て欲しかったのだ。清磨はビツチ先生の烏間先生に対する思いは分かっていたが、先生がそこまで思い詰めている事までは分かっていなかった。ちなみにガツシユは、彼女の思いに今気付いた。ビツチ先生が愚痴を述べている間にも、車は清磨宅の前に着いた。

「じゃあねガキ共、今日付き合ってくれた分は後で埋め合わせするわ」

ガツシユペアが別れの挨拶を述べた後、ビツチ先生はそう言い残して先生は車を出した。2人は少しの間あつけに取られていたが、ガツシユが口を開いた。

「清磨、ビツチ先生は1人ぼっちだったのだな。今のE組に馴染めれば良いのだがの……」

「ああ、だが先生の問題はそう簡単には解決しない。少なくとも、俺達だけではどうにもならん」

そんな話をしながら、ガツシユペアは自分の家に入った。そしてその日、まさか学校であのような出来事が起こっているとは、2人共思いも寄らなかつた。

LEVEL. 51 すれ違いの時間

ガツシユペアが登校すると、E組の空気がかつてない程に重い。清麿は何事かと思いい、隣の席のカルマに事情を聞いたです。

「えっとね……」

カルマが昨日の出来事を話した。ビッチ先生の誕生日が過ぎてしまった為、ガツシユペアと出かけている間にプレゼントを用意する事になった。しかし生徒が渡すよりも鳥間先生が渡した方がよりビッチ先生が喜ぶのではと言う事で、彼等が購入した花を鳥間先生がビッチ先生に渡した。しかしその作戦がビッチ先生にバレて、彼女の逆鱗に触れてしまう。その後、先生は悲し気な表情をしてその場を去ってしまったのだ。

「そんな事があったとはの……」

それを聞いたガツシユペアの顔が暗くなった。ビッチ先生は殺し屋と英語教師という異なる立場で揺らいでいた矢先にこのような扱いを受けてしまった。今日先生が来たらクラス全員で謝罪した上で話し合おうとしたが、彼女が顔を見せる事は無かった。

そして夜、清麿の携帯電話に着信がかかってきた。

「もしもし、リイエンか？」

『清麿！私、今日何度かイリーナさんに連絡したけれど電話が全然繋がらないある！何か知ってるあるか？』

電話の相手はリイエンだ。彼女もビッチ先生と連絡が取れない様子で、清麿に事情を聞くために電話してきたのだ。そして清麿は事情をリイエンに話した。

『そうだったあるか。イリーナさん、明日は学校に来てくれればいいけど……』

「ああ。先生と連絡が取れなければ、言葉を交わすことすら出来ないからな」

生徒達も殺せんせーも悪気があってこのような事をした訳では無い。むしろビッチ先生と烏間先生を思つての行動だったが、すれ違いが起こり、逆効果になってしまったのだ。しかし彼女が学校にいない以上、謝罪をする事すら叶わない。

『その事で烏間さんは何か言つてたあるか？』

ビッチ先生の烏間先生に対する気持ちはリイエンも知っている。そして清麿は、烏間先生の言葉を思い出す。

『色恋で鈍る刃は必要ない、地球を救う任務だからな。君達中学生とは違つて俺や彼女はプロフェッショナル、情けは無用だ』

烏間先生の厳しい言葉。大人が仕事に取り組む以上は、中途半端な気持ちで臨む事は

許されない。烏間先生の言う事は正しいのだが、それを聞いた生徒一同は複雑な心境になった。清麿がその言葉をリイエンに伝えた後、彼女は寂しそうな口調で声を発した。

『烏間さん、厳しい人あるね。確かに地球を救う仕事なら、それくらいの意気込みは必要ある。それでも、イリーナさんは……』

リイエンはガツシュペアと同様に、これまで魔界の王を決める為の厳しい戦いを経験した。魔物の戦いは、強い意志がなければ乗り越える事は出来ない。地球滅亡を防ぐ事も同様に、生半可な覚悟では成し遂げられない。それが分かっている彼女は烏間先生の言葉を否定するつもりは無いが、ピツチ先生の想いを考えるといたたまれない気持ちになる。

「とにかく、明日先生が来てくれれば話は早いんだがな。明日も来ない様なら、俺達から探しに行く事も視野に入れないと……」

『……分かったある』

そのまま2人の通話は終了した。隣で話を聞いていたガツシュは、今にも泣きそうな顔を見せる。

「清麿、このままピツチ先生とお別れなんて絶対に嫌なのだ……」

ガツシュは最悪のパターンを想像する。それぞれの気持ちがすれ違ったままお別れになってしまう事を。そんな彼の頭に清麿は自分の手の平を優しく置いた。ピツチ先

生が心配なのは清磨も同じである。

「そんな事にはさせない。もし明日も学校に来ない様だったら、アンサーカード【答えを出す者】を使つても先生の居場所を突き止めてやる！」

「ウヌー！」

このままビッチ先生と決別したまま終わる展開は許さない。そう決意した2人は、明日に備えてそのまま就寝の準備に入った。

しかし次の日もビッチ先生が学校に来る事は無かった。さらにその日は鳥間先生も出張で、夕方まで校舎を離れている。そんな中でも殺せんせーは授業を行うが、生徒一同はどこか上の空だった。皆ビッチ先生が心配なのである。そして今日の授業が終了した。

「イリーナ先生に動きがあれば連絡してください。先生はこれから、ブラジルまでサッカー観戦に行つてきます」

殺せんせーは超スピードで教室を出てしまった。こんな時にサッカー観戦とはどうなのかと考える生徒達も多い。

「ビッチ先生、今日も来なかったね……」

「ケータイも出てくれないよ」

矢田・倉橋を始めとして多くの生徒が彼女と連絡を取ろうとしたが、いずれも失敗に終わっている。その時、ガツシユが教室に入ってきた。

「ビツチ先生、大丈夫かの……」

ガツシユの泣きそうな顔を見て、E組の空気は重くなる一方だ。その時、それを見かねた千葉が口を開いた。

「なあ高嶺。お前の【答えを出す者】なら、ビツチ先生の場所も分かるんじゃないのか？」
その言葉を聞いて、生徒達の目に希望が宿つたと同時に清麿の方を向く。クラスメイ
ト達と目が合つた清麿は頷いた。

「そうだな、俺も使おうと思つていた。ちよつと待つてくれ」

清麿がそれを発動させようとした時、1人の男が入ってきた。その男は松方さんの為
に救急車を呼んでくれた花屋だ。

「イリーナの事は大丈夫だよ、彼女にはやつてもらふ事があるからね」

花屋の男は当たり前のようにクラスに溶け込んできた、まるで自分が当事者であるよ
うに。その事を誰も違和感に思わなかったが、清麿はビツチ先生の居場所を探る為では
無く男の正体を探る為に【答えを出す者】を発動させた。その答えを得た清麿は驚愕す
る。

「皆、ソイツから離れる!! ガツシユ、奴から目を離すな!!」
「ウヌ!!」

ガツシユですら男の違和感に気付くのが一瞬遅れた。清磨も【アンサーカード答えを出す者】が無ければ気付いていたかどうか。清磨の叫びを聞いたE組一同はようやくその男の違和感を感じ取り、男から離れた。それと同時に清磨は男の方を指差し、呪文を唱える。

「ザケルガ!!」

ガツシユの口から放たれた一直線の電撃を男は紙一重でかわした。ガツシユの呪文を見てもなお、その男は不敵な笑みを浮かべる。

「なるほど、これが魔物の力か。確かに強力だ」

その男は魔物の事を知っている様子だ。そして男は話し続ける。

「せめて自己紹介くらいはさせてくれないかな? ……僕は『死神』と呼ばれる殺し屋です。さて律さん、送った画像を表示して」

『死神』と名乗った男がそう言うのと、律にメールが送られていた。『死神』、かつてロヴロが存在を示唆していた最強の殺し屋の名前であり、ナゾナゾ博士とアポロが所在を追っていたが、結局正体を掴めなかった。そんな男は何と日本にいたのだ。そして清磨は彼が本物であると答えを出していた。

「花は虫をおびき寄せます」

死神がそう言うと、律は手足を縛られて倒れているビッチ先生の写真を表示した。死神は彼女を人質に、E組全員を捕える手筈である。そして捕えた生徒達を利用して何らかの方法で殺せんせーを殺す計画だ。

「来たくなければそれでも良いけど、その時は彼女を全員に行き渡る様に小分けして君達に届けます」

恐ろしい事を平然と言つてのける死神に対しても、多くの生徒は未だに警戒出来ていない。それこそが死神の恐るべき事の1つである。標的に警戒させずに近付いてトドメを差す事が出来るのだから。しかしガツシユは死神から、本来あるはずのない感覚を感じ取った。

「お主……これはどういう事なのだ!!」

そしてガツシユの感じる物の正体に、清磨は気付く。

「おい、どういう事だ死神!!」

何故お前の体の中には、クリア・ノートの意志が宿っているんだ!!」

「へえ、気付くんのだ。力を付ける特訓は無駄になってない様だね」

魔物には魔力が宿っており、それを探る事に長けた魔物も存在する。ガツシユはそれが得意と言う訳では無かったが、デュフオーの指導の1つとして魔力探知を教わっていた為、死神の中に眠るクリアの意志を感じ取る事が出来た。そして清磨は【アンサー・トリガー答えを出す者】を使ってその事に気付いた。

「……ま、魔物だつて!!」

言うまでも無く、E組一同は驚愕する。死神と言う最強の殺し屋の中に、魔物の意志が宿っていたのだから。

「皆疑問に思っているようだね、それに答えてあげよう」

死神は自分とクリア・ノートの出会いを話し始めた。

回想

某国の森で死神が同業者の襲撃の為の移動をしている最中、彼は大きな力を感じる。死神が力の発生源に近付くと、繭のような姿をしているバリアに囲われたクリアがい

た。その隣にはパートナーのヴィノーもおり、彼女もまた同様にバリアに囲われていた。

「待っていたよ。この力にまで気付くとは、やはり君は僕の意志を宿すに相応しい」

クリアは以前から死神に目を付けており、彼をおびき寄せる為に自分の体から特殊なエネルギー波を周囲に出していた。

「君は誰だい？とてつもない力を秘めているようだけど……」

死神もまた、クリアの持つ力に興味を示す。そしてクリアは死神に魔物の存在について話した。当初死神は魔物の存在が信じられないと言った様子だったが、すぐに考えを改めた。

「このままでは僕自身、身動きが取れないからね。君の体を介して外の世界を見たいんだ」

クリアは自分の目的を話した。外の世界を見て、ガツシユ達がどれだけ力を付けたのかを見ておきたかったのだ。しかし弱い人間に意志を宿した所で、他の魔物の襲撃を受けるとマズい。そこで死神のような強い者の体を探していたのだ。

「へえ。君の意志を僕に宿すとして、こちらには何かメリツトがあるのかい？」

「力を与えよう、僕の宿す力全てと言う訳にはいかないが。ヴィノーを同行させられないから術も出せないよ。しかし魔物の意志を宿した君の力は、これまでとは比べ物にな

らなくなる。君にもやりたい事があるのだろうか？」

クリアは死神が目的、殺せんせー暗殺の為に力を欲している事を見通していた。そして死神は自分の知らない力の存在を知って、口角を上げる。彼はクリアとの取引を行う事にした。

「良いだろう、君の意志を僕に宿そうじゃないか」

「そう言うと思ったよ。あと、意志を宿すと言っても君の自我を乗っ取るつもりはないから安心していいよ。たまに僕の意志を出させてもらう時はあると思うけど。それから、君には協力者を紹介しよう」

クリアがそう言うのと、彼の近くでは異空間の穴が形成される、そしてそこからはカブトムシのような角を持った黒い大きな魔物ゴームと、そのパートナーのミールが出現した。ゴームは空間を操る力を持ち、あらゆる場所に出現する事が出来る。そして術の威力も強大で、アースペアを一方的に打ち負かす程の実力を持つ。

「ゴーム、ミール。時が来たら彼に力を貸してあげて欲しい。いいね？」

「アンタの命令なら仕方ないびよん」

「ゴォー！」

「……これは頼りになりそうだね」

こうして死神はクリアの意志を宿した事で強力な魔物にも引けを取らない身体能力

を手に入れた上に、ゴームペアの協力をも得られるようになった。今の死神の持つ力は、余りにも大きい。

回想終わり

クリアとの出会いを話した死神は得意気な表情を浮かべる。大きな力を得て、優越感に浸っているのだ。その事を聞いて驚愕する生徒達に構わずに、死神は話しを続ける。

「君達にイリーナを見捨てる事は出来ない。だから彼女を助けに必ず来る。そして君達には、僕の万を超える死神の技術及び魔物の力の実験台になってもらうからね。何、大切な人質を簡単に殺したりはしないから安心していいよ」

死神はそう言った後に、持って来た花を上を持ち上げる様に投げる。そして投げられた花が散ると同時に死神の姿は消えていた。

「人間が死神を刈り取る事は出来ない。畏れるなかれ、死神が人を刈り取るだけだ」

死神が消える間際、そう言い残す。そんな死神の事を、生徒達は啞然としながら見ている事しか出来なかった。闇雲に殴り掛かっても、返り討ちになるのは目に見えている。そして散った花びらの中には手紙が混じっており、ビッチ先生の居場所が書いてある地図と指定の時間、この事を他の人に話せばビッチ先生を殺す事が書かれていた。

死神が姿を消した後、生徒達がビッチ先生の誕生日に購入した花束を調べると、そこには盗聴器が仕掛けられていた。それによってE組の情報を探り、ビッチ先生が単独行動になるスキを狙ったのだ。そして死神は、鳥間先生と殺せんせーが同時に校舎を離れるこのタイミングをも知った上で、大胆に教室に乗り込んできた。

「何て事だ……死神にクリアの力が宿っているなんて」

清磨は後悔する。もっと早くにビッチ先生を探していれば、後手に回る前に死神を襲撃出来ていたのではないかと。ガツシユもまた、悔し気な表情を浮かべる。そんな時、「おいお前等、落ち込んでても仕方ねーだろ。魔物の力だか死神の技術だか知らねーが、俺等全員で行かねーとあのビッチが殺されちまう。コイツでも使って最高の殺し屋の計画を潰してやろうぜ」

寺坂が超体操着を取り出す。最高の殺し屋が魔物の力を宿してもなお、彼の目には恐れは無い。彼の言動を見た他の生徒達も、ビッチ先生を助ける覚悟を決める。

「守る為の力、今こそ使うタイミングじゃん……それから高嶺とガツシユ、魔物絡みだからってアンタ等だけで出しゃばるのは禁止だから。まあ、2人なら大丈夫だと思っけど」

「……………そうだな」

「莉桜……………分かったのだ!!」

魔物の力の事を聞いた中村は、ガツシユペアが2人だけで無理をする可能性を危惧した。そんな彼女の気持ちがあつたガツシユペアは頷く。2人も本心では、クラスメイトを魔物の戦いに巻き込みたくない気持ちはある。しかしビツチ先生を助ける為に、そして一緒に暗殺を行つてきた仲間を信用する為にガツシユペアは、彼等と共にこの戦いに挑む決意をする。

そして指定時間の少し前、E組の生徒が全員ビツチ先生のいる建物の前まで来た。イトナのラジコンで周囲や屋上に人影がない事は把握出来たが、ゴームペアが死神に付いている以上どこで敵に遭遇するかは分からない。そして清麿は【^{アンサー}答えを出す者^{カー}】を發動させた。

「皆、敵が来るぞ!!」

生徒一同が身構えた後、清麿の言う通りに突如発生した異空間の穴からゴームペアが出現した。

「はくん、コイツ等が死神が言つてた人質達ね。弱そうだぴよん」

「ゴロー!!」

ミールは明らかにE組の生徒達を見下したような言動を見せる。その後ミールは気だるそうにガツシュペアを指差した。

「アンタ達2人は私達と戦うびよん。他の連中はこの建物の中に入りな。私の言う事に逆らえば、イリーナとか言う女は死ぬびよん」

ミールは能天気になんか言うが、その態度が逆にE組一同をこわばらせる。ビッチ先生を殺す発言は嘘などではない。自分達が死神達の言う通りに動くしかない事を、改めて実感させられた。

「今は誰も殺す気も無いんだな？」

清磨はゴームペアを睨み付ける。ビッチ先生の無事と今現在はE組が殺される心配は無いと答えは出せたが、やはり不安は拭えない。

「アンタ等が言う通りに動けば問題ないびよん。さあ、付いて来な」

ミールがそう言うのと、異空間の穴が新たに形成される。そしてゴームペアはその穴に入って行った。ガツシュペアがそれに続こうとすると、渚と茅野が声をかけてくれた。

「2人共、無茶しないでね！」

「あんな奴等に負けないで！」

2人の言葉を聞いた清磨は口角を上げた。

「ああ、ビッチ先生と共に皆で生還しよう。あいつ等の思い通りにはさせない」
「皆はビッチ先生を頼むのだ!!」

そしてガツシユペアは異空間の穴に入って行くが、他の生徒達の多くは2人に心配の眼差しを向ける。しかし、

「高嶺とガツシユなら大丈夫でしょ。私達はビッチ先生を助けないと」

速水は強気な態度を崩さない。彼女はガツシユペアの強さを信用している。

「思っただけど、死神が花束に盗聴器を仕掛けたって事はさ、その直前のE組の情報は詳しくない可能性が高いんじゃないかな?」

不破は持ち前の推理力を活かして、死神の情報収集能力の限界を予測する。彼女の推測が正しければ、現在の危機的状況の打破になり得る。

「その通りかもしれないな。高嶺とガツシユは分断されたが、俺達は俺達の成すべき事を成さないと。死神が俺達の全てを知る事は出来ない。その強みを活かしてスキを見て、ビッチ先生を救出。そして全員で脱出する!!」

機員が今回の大まかな目標を立てる。それを聞いたE組一同、やる気を見せた。

「律、12時を過ぎても戻らなければ殺せんせーに事情を話して」

「はい、皆さんどうかご無事で」

一方で原は最悪のケースに備えて律に連絡を入れる。彼女もまた抜かりが無い。そ

して彼等は建物に突入するのだった。

LEVEL. 52 魔物の時間

ゴームの作る異空間の穴を通ると、ガツシユペアは地下のような場所に到着した。

「ここはさつききの建物の地下だぴよん。今のクリアは術を出せないからね、お前等は私達が倒させてもらうよ」

「ゴーーーーー！」

ガツシユペアはデユフォーの指導の下で厳しい特訓を積み重ねてきたが、ゴームもまた強力な魔物だ。彼等は本気でガツシユペアに勝とうとしている。

「ガツシユ、コイツ等は強い。絶対に気を抜くなよ!!」

「ウヌ!!」

ガツシユペアもまた臨戦態勢に入り、清磨は【アンサーキーパー答えを出す者】を発動させた。しかし清磨はある事実^に気付く。

（マズイな、あんまり強力な術を使うとこの建物ごと崩れかねん。だが、あいつ等相手に手加減をする訳にはいかない……）

清磨は術のぶつかり合いによる建物の崩壊を恐れた。それによって自分達やクラスメイト、ピッチ先生を生き埋めにする事は許されない。そのような状況でもゴームペア

は容赦なく術を唱える。

「ディオボロス！」

ゴームの両腕から黒いエネルギー波が放たれる。これは基本術であるが、その威力は並の初級術とは比べ物にならない。それに対して清磨は、術の弱所を指差した上で呪文を唱える。

「ザケルガ!!」

ガツシユの口からの一直線上の電撃が放たれ、相手の術を打ち破った上でゴームにダメージを与える事に成功した。しかしザケルガの威力はゴームの術により威力が減らされており、大きなダメージとはならなかった。

「へく、少しは強くなってるみたいじゃない。なら、これならどう? ギガノ・ディオボロス!!」

先程よりも強力な黒いエネルギー波がゴームの両腕から放たれる。術も広範囲で威力も高く、先程のようにザケルガだけで全てを打ち破る事は難しい。

「清磨!!」

「分かっている、テオザケル!!」

ゴームのギガノ級の術の相殺に清磨はテオザケルを選んだ。広範囲な電撃はゴームの術の打ち破る事に成功する。

「ゴーーーー!!」

「ああもう! 私達の術よりの確に威力の高い術を出してくれちゃって!! ボージルド・ディオボロス!」

清磨は【アンサー答えを出す者】カーを使用し、自分達の心の力の無駄使いを防ぎつつもゴームの術を打ち破り、かつ建物に影響を最小限にするための術を選ぶ。相手の術に競り勝った電撃はゴームペアにダメージを与える事に成功するかに思われたが、彼等の前には何重もの黒い円状の盾が形成されており、テオザケルを防ぐ。

「……やってくれるわね」

ミールは自分の術が防がれて、気が立ち始める。しかし彼女が清磨の方を見ると、ガツシユが見当たらなかった。

(又オオオ!)

「ゴーーーー!!」

「このガキ、いつの間に!!」

テオザケルはおとりで、ガツシユペアの狙いはミールの持つ本そのものにあつた。電撃に気を取られたゴームペアの隙を付いたガツシユが、小柄な体格を活かしてミールの懐に飛び込もうとする。本を奪いさえすれば大規模な術の衝突を起こさずにゴームペアとの戦いを終わらす事が出来るのだが、寸前でゴームがガツシユに気付いた。

「ゴーーーーー！」

「くっ！」

ゴームがミールとガツシユの間に入り込んで本の奪還を防いだ後に、ゴームは腕を振り回す。両腕の攻撃でガツシユを殴ろうとする。

「あらあら。お前等がせいこい事しようとするから、ゴームのストレスが溜まってきてるびょん」

直接本を奪う作戦に出たガツシユペアをミールが見下したような目で睨み付けるが、清磨の口角は上がっている。

「ああ、そのようだな。そしてストレスのせいでゴームの攻撃が単調になっているぞ。随分と隙だらけな攻撃だな！」

ゴームの大振りな打撃をガツシユは尽く受け流す。体格の差はあれど、王族の力に目覚めてかつ日々特訓を積み重ねているガツシユの身体能力は、ゴームを攪乱するには十分だ。

「ゴーーーーー！」

ゴームがさらに大きく腕を振るつたが、ガツシユはそれをジャンプする事でかわした。そしてガツシユがゴームの頭上を越えて着地した後も、ゴームは振るつた腕をそのままに体勢を戻す事が出来ていなかった。そこに隙が生じる。

「行くぞガツシユ!! バオウ・クロウ・デイスグルグ!!」

「ウオオオオ!!」

清麿が呪文を唱えると、ガツシユの体がバオウ・ザケルガの腕に包まれた。そしてガツシユはそのままゴームに突っ込むが、ゴームはどうか体勢を立て直す。

「チツ! バークレイド・ディオボロス!!」

ゴームの両腕から先程とは異なるエネルギー波が放たれ、バオウの腕が包まれた。その時にガツシユの動きが止まり、術はねじ曲がりそうになる。

「そんな腕、この術でぐしゃぐしゃにしてやるよ!!」

「又オオオオ!!」

ゴームの術を受けて、ガツシユは動く事が出来なくなる。ゴームのこの術は捕えた相手の攻撃を空間ごと捻じ曲げるて打ち砕く事が可能であり、アースのディオガ級の術をも破った事もある。

「大丈夫だガツシユ!! お前なら突破出来る!!」

「当然なのだ!!」

清麿は【アンサーカード答えを出す者】にてガツシユならゴームのこの術を打ち破れるという答えを出す。そしてガツシユの攻撃はゴームの術に打ち勝ち、ゴームペアに迫る

「ゴーーーー!!」

ガツシユはそのままバオウの腕でゴームを上から叩きつけ、その衝撃でミールも後ろに吹き飛ぶ。それでもゴームはまだ立ち上がり、ミールに駆け寄る。バークレイド・デイオボロスにより、術の威力は減少していたのだ。

「ゴオオオオ……」

「このガキ共、やってくれるわね……」

一方的にダメージを受けていくゴームペアは怒りに感情を露わにする。それに呼応するかの様に、ミールの持つ本の輝きは増す。

「これでも喰らえ!! ウィー・ムー・ウオー……」

「デカいのが来る!! S E T!!」

「ウヌ!!」

ミールが大技を発動させようとしており、ガツシユペアが身構える。これまではガツシユペアが戦いのペースを掴んでいたが、ゴームペアはまだ大技を発動させていない。

「ジンガラム・デイオボロス!!」

「エクセレス・ザケルガ!!」

ゴームから放たれた棘を纏った黒く巨大な球状のエネルギー波とガツシユから放たれたX線状の極太の電撃がぶつかり合う。お互いの大技の衝突は凄まじく、狭い建物なら容易に崩れ落ちかねない程だった。しかし、どうかこの地下はそうならず済ん

でいる。

「ゴーーーー!!」

術のせめぎ合いは続いたが、ガツシユの電撃がゴームの術を押し始め、そのまま黒い球体を押し返す事に成功する。そしてエクセレス・ザケルガはゴームペアに直撃したが、ゴームがミールを庇った為、本を燃やすには至らなかった。しかしゴームはガツシユの術に尽く押し負けており、ダメージは確実に蓄積されている。

「ゴーーーー……」

「おのれ!」

ゴームが大ダメージを受けてもなお、2人は戦う姿勢を崩さない。そんな彼等を見かねたガツシユが声を荒げる。

「何故お主達は、そんなボロボロになりながらもクリアに力を貸すのだ?! クリアが魔界を滅ぼせば、ゴームは1人ぼっちになってしまうのだぞ!!」

クリアの目的は全ての魔物を消す事であるが、ゴームに関しては自分に力を貸す代わりに生かしてもらえろと言う条件が提示されている。しかしそうなった場合は、ゴームは孤独に誰もいない魔界で生活しないとイケなくなる。ガツシユはゴームが孤独になる事も含めて、クリアのやろうとしている事が許せなかった。

「うるさいね!! 1人だろぅが殺されずに済むならそれでいいじゃないか!! 誰もクリアに

は逆らえないんだよ!!」

「ゴォー!!」

ガツシュの言う事にミールは耳を貸さない。彼女はクリアの強さと恐ろしさをよく分かっており、クリアに歯向かう選択肢など持ち合わせていないのだ。そんなミールにとつてガツシュの言葉は、ただ不快な気分になるだけである。そしてゴームのストレスも限界までたまっていた。

「ムカつくお前等には最大術を喰らわせてやる!!」

ミールの持つ本の輝きがさらに増す。その術の威力の大きさを【^{アンサー}トーカー】で知った清磨は顔色を変える。

「おい、それ程の威力の術をこんな地下で使うな!! 建物が崩れかねんぞ!!」

「何だと!!」

清磨の言葉を聞いたガツシュも驚いたが、ミールは呪文を唱えるのをやめようとしな
い。

「それでも私とゴームは異空間を移動して逃げられるさ! そしてクリアも死神つて奴の中
から出れば問題は無い!! 他の連中の事なんて知った事か!!」

「……やむを得ん。ガツシュ、あの術を使うぞ!!」

「分かったのだ!!」

これからゴームから繰り出される最大術に対して、ガツシユペアは新たな術を使おうとする。そしてお互いの本の輝きがこれまでとは比べ物にならなくなる。それは、彼等の唱える術の強力を表す。ミールが先に呪文を唱えた。

「ディオボロス・ザ・ランダムリート!!」

ゴームの術は立方体を形成させて、そこからは無数の丸や三角の黒いエネルギー波が出現する。

「ガツシユ、意識を俺に集中させろ。術を出してお前が気を失つても、俺がお前の目になって狙いを定める。第15の術、ジオウ・レンズ・ザケルガ!!」

清磨もまた呪文を唱え、巨大な電撃の蛇が召喚される。蛇には手足と顔から伸びる角及び電撃の鱗が存在する。そして幾つもの黒いエネルギー波がガツシユペアを襲ったが、蛇からは電撃を纏う鱗がそれぞれ独立し、エネルギー波達を相殺する。この鱗及び黒いエネルギー波は術者が操作可能である。

「うおおおお!!」

清磨とミールの叫び声と共にエネルギー波と電撃の鱗のぶつかり合いは苛烈を極めるが、^{アンサーカード}「答えを出す者」を持つ清磨の方がより正確にゴームの術を打ち破る。そして電撃の鱗がエネルギー波だけでなく立方体をも打ち砕き、ゴームの術は完全に破られた。

「ゴーム……」

「な、こんな事が……」

ゴームペアは自分達の最大術を破られた事に驚愕する。しかも電撃の鱗の多くは失われたが巨大な蛇の本体は健在であり、今にも2人に襲い掛かろうとしている。しかし、電撃の蛇とゴームペアの間で堂々と割り込んだ者がいた。

「そこまでだよ。ゴーム、ミール。今すぐ退くんぞだ」

そこにはクリアの意志を宿した死神が現れた。その時の死神の目はただひたすらに冷徹だ。

「な、んこまでコケにされたのに撤退って……」

ミールは死神の撤退命令に納得が行かない様子だ。この戦いにおいて一度もガツシュペアに満足なダメージを与えられておらず、どうにか一矢を報いたいと考えている。しかし、

「2人の撤退はクリアの意志でもある……ガツシュは強くなった、ゴームでは敵わない程に。これ以上2人が無理した結果、ゴームの本が燃えるのは避けたいからね」

「くっ……」

死神はミールを睨み付ける。しかし今の死神の体からはクリアの意志が出ている。それに気付いたミールは悔し気な表情を浮かべながら、ゴームが形成した異空間の穴から撤退した。やはり彼女はクリアには逆らえない。

「さて……その術を引っ込めてくれるかな？ 電撃の鱗の大半はゴームの術の相殺に使われたし、本体をけしかければこの建物自体が崩れ去る。そうだろ？」

「……チツ！」

現状はクリアの言う通りで、術の本体を死神やゴーム達にぶつける訳にはいかなかった。清磨はやむを得ずにジオウ・レンズ・ザケルガを解き、電撃の蛇は消え去った。

「お主は死神、いや……クリアか!!」

「正解、今は僕の意志を出させてもらっている」

術が解けて意識を取り戻したガツシユは、死神の体でクリアの意志が表面化されている事に気付いた。

「本当に強くなったんだね……しかも、さっきの術は本気じゃないんだろ？ 建物を壊さないように」

「そこまでバレーしているとはな」

クリアの言う通り、ガツシユペアはジオウ・レンズ・ザケルガを本気の威力では使用していない。それでもゴームの最大術を打ち破り、その事はクリアを感心させた。

「これなら僕が完全体となった時、最後の戦いが少しは楽しめそうだな。さて、後は死神の中で観察させてもらうとしよう」

クリアが多少は認める程にはガツシユペアの実力を見せつける事は出来たが、2人は

それに慢心する様子は一切見せない。そしてクリアの意志は再び死神の中へ戻った。

「おっと、クリアの言いたい事は言い終わったようだね。さて……」

「死神……お前の暗殺計画は何としてでも食い止めなくてはならん!!」

死神の人格が表に出てきた時、清麿は【^{アンサー}答えを出す者】にて死神の考える最悪の暗殺計画の答えを出していた。

「へえ、全てお見通しって訳だ」

「そうだ。お前の暗殺計画、俺達生徒もろともこの地下放水路から水を流し、閉じ込めた殺せんせーを溺死させる寸法だな!!」

「な……貴様、何という事を!!」

死神の暗殺計画を知ったガツシユペアは憤慨する。死神は初めから生徒も一緒に殺せんせーと共に殺すつもりだったのだ。しかし清麿はゴームとの戦いに専念しなくてはならず、すぐに死神の暗殺計画を【^{アンサー}答えを出す者】で知る事は出来なかった。

「死神の圧倒的強さとビツチ先生の裏切りによって、俺達以外の生徒は全員檻の中か」「凄いな、そこまで分かるんだ。イリーナから聞いた君の能力はとんでもないようだ」

清麿は自分達がゴームペアと戦っている間のクラスメイトの動向の答えを導き出す。生徒達は3班に分かれたが、ビツチ先生の裏切りもあつて全ての生徒は短時間で捕まってしまうのだ。それを聞いたガツシユは驚愕する。

「それだけじゃないよ、イリーナのお陰で殺せんせーまで檻に入れる事が出来た。そして彼女には鳥間の足止めもしてもらっている」

「何だと、殺せんせーまで捕まったと言うのか!？」

助けに来たはずのビッチ先生の裏切りに加えて殺せんせーの捕獲。清磨はそれが事実だと気付く。今のE組は絶体絶命と言っても過言ではない。ガツシユペアは顔をしめる。

「誤算があるとすれば、君達とゴームとの間にあそこまで力の差があつた事かな。君達は殆どダメージを受けていない上に、心の力も温存されている。君達を倒すのは、一筋縄ではいかなそうだね」

口ではそういうものの、死神は余裕の表情を浮かべる。

「はは。君達が相手なら、僕が新たに得た魔物の力を存分に楽しめそうだ。他の生徒達相手に使っていない僕の技術も、色々試させて貰おうかな?」

「やかましい!!お前は俺達が倒してE組全員でここを出る!」

「ウヌ!!私達は貴様などには負けないのだ!!」

現状を明らかに楽しんでいる死神とは対照的に、ガツシユペアの表情は真剣な物だ。殺しをゲーム感覚で楽しみ、自分の力で容赦なく他人を傷付けようとする死神を、ガツシユペアは許せなかった。

「よく言うね。仮に僕を倒せたとして、イリーナは君達に付いて行くのかな？僕の心理掌握で彼女は僕の言いなりになったからね」

現状ビッチ先生は死神の味方だ。死神を倒しても彼女がE組に戻らない可能性も考えられる。しかしガツシユペアが動揺する事は無い。

「ビッチ先生は何としてでもE組に戻ってきてもらうのだ!!」

「お前の心理掌握何て知った事か!!そんな事で俺達を惑わせると思ったか!!」

「君達は強かだね。それでこそ殺り甲斐があるってもんだ。君達を殺した後に、操作室で水を流させてもらおう!」

ガツシユペア及び死神は臨戦態勢に入る。

その頃、檻の中では簡単に捕まった殺せんせーが申し訳なさそうな表情を見せる。

「まさかイリーナ先生が死神の味方をしていたとは……」

「あのビッチ、やってくれるよな」

寺坂を始め、多くの生徒がその事実を驚く。味方だと思っていた人に裏切られるのは、辛い事である。

「……さて、全員分の首輪と手錠は取り外せましたね」

「ビッチ先生が外した爆弾が仕掛けられた首輪と、俺達が付けられた物の構造は同じ。随分と簡単な構造だ、取り外すのは容易だし乱暴に外しても起爆はしない」

死神がガツシユペアと対峙している間に、イトナが首輪を解析した上で殺せんせーが手錠と共に外した。電子機器についてはイトナが詳しく、首輪の解析には手こずらなかった。

「よし。次の一手だが……岡島、監視カメラはどんな感じだ？」

「強めの魚眼だが、三村の読み通りで正確に見えない場所があるぜ」

岡島は三村の指示の下、監視カメラから見えにくい場所を探る。岡島は写真撮影が趣味の為、カメラの性質はよくわかる。よって彼にはカメラから見えにくい場所を探る事も出来る。

「よし、その見え辛い場所に紛れよう。菅谷、頼めるか？」

「任せとけ」

続いて菅谷が揮発物質を生徒達の超体操着に吹きかける。すると瞬く間に超体操着が壁と同じ色になる。そして生徒一同はカメラから見えづらい場所にて、超体操着を背に壁に張り付く。全員が並列ではカメラから見える可能性がある為、肩車をして全員がその場所に入るようにした。

「この作戦も、映像の段取りを知ってた事と皆の長所を生かす事でやれたよ。最も、高嶺

とガツシユか烏間先生が死神を倒してしまえば意味は無いんだがな」

三村は監視カメラを見た死神に対して自分達が逃亡したと錯覚させる為に今回の作戦を考えた。ちなみに殺せんせーは全裸で保護色を使って床に紛れている。

「三村君流石ですねえ。さて、後はあの3人を信じるだけだ」

殺せんせーは全裸である事を恥ずかしながら、三村の手際に感心する。檻の中でE組が死神の目を欺こうとしている事を、ガツシユペアしか見えていない死神は知る由も無い。

LEVEL. 53 死神の時間

ガツシユピアと死神が戦い、他の生徒達と殺せんせーが細工を仕掛けている中、烏間先生とビッチ先生はお互いに銃を向け合って対峙していた。

「大人しく銃を降ろせ、イリーナ。さつきお前が俺に当てられなかった時点で勝負は付いている、死ぬぞ」

「そんなの覚悟の上よ、死神は私を理解してくれた。ここで私とアンタと一緒に死んで、死神が高嶺達を殺せばあのタコの暗殺計画は成功したも同然」

死神はビッチ先生に共感するような言葉をかけて、彼女を操っている。死神はビッチ先生に自分もまたまたテロが絶えない命なんてすぐに消える貧困地に生まれ、金と己の技術のみが信用できる事を思い知らされたと吹き込んだのだ。

「そもそも、アンタに私が撃てるのかしら？」

ビッチ先生の言葉を聞いてもなお、烏間先生は眉一つ動かさなかつた。プロとしての責務を果たす為であれば、例え同僚相手でも引き金を引くべきだ。烏間先生はそう考えているが、内心迷いが生じていた。それをビッチ先生は見逃さない。

「隙が出来たわね、カラスマ」

ビッチ先生は銃を持つ手とは反対の手に隠し持っていたスイッチを押した。その時、大きな音と共に天井が崩れる。彼女の持つスイッチは天井に仕掛けられた爆弾を起爆させるものであり、死神の命令によつてそれで烏間先生の足止めをするよう言われていたのだ。勿論ビッチ先生の安全の保障は無い。

「イリーナ、お前!!」

天井が崩れ落ちる中、烏間先生はどうか瓦礫に潰されずに済んだが、死神とガツシュペアがいる場所への通路は塞がれた。また、ビッチ先生は瓦礫の下敷きになってしまった。

時は少し遡り、ガツシュペアと死神が睨み合う。お互いにお互いの隙を伺っており、両者微動だにもしない。

「へえ、闇雲には突っ込んだり呪文を唱えたりはしないんだね」
「自分から隙を作つてお前の技を喰らう訳にはいかないからな。万を超える死神の技術と言うのも、ハツタリではない様だ」

清磨は【アシ答えを出す者】で、死神の体や衣類に多くの武器が仕込まれている事を見破る。迂闊な行動に出れば、死神の攻撃をまともに受ける事になってしまう。しかも今の

死神にはクリアの強さが宿っている。魔物の身体能力と死神の技術の組み合わせは脅威だ。

「清磨には近づかせぬぞ!!」

「行くぞガツシユ、ザケルガ!!」

一直線の電撃が放たれたが、死神は難なくかわす。そして死神は清磨に接近しようとするが、ガツシユがそれを阻む。

「簡単には本を奪わせてくれないみたいだね!」

「当然なのだ!!」

「ラウザルク!!」

肉体強化の術が唱えられたが、クリアの力を得た死神はダメージをゼロには出来ないものの、ガツシユの攻撃を上手く捌いて見せる。ガツシユの打撃は受け流され、決定打を放てないでいた。

（クリアの力を得た死神、とてつもなく強いのだ!!だが、どうにか隙を作らねば……）

（魔物には仕込んだ凶器は効かないと考えた方が良いね、どうしたものか……）

ガツシユと死神は思考を巡らせながら戦うが、ラウザルクの継続時間が終了した。

（術が切れたから少しスピードが落ちてるね、ここを狙う!!）

ラウザルクが切れるタイミングを狙って、死神はガツシユではなく清磨の方に右腕を

伸ばす。そして右腕の裾の奥からは鉤のついたワイヤーが清磨の持つ本を目掛けて放たれた。

「な！お主、そんな物を！」

「ふふ、これも死神の技術の1つだよ」

超スピードで放たれたワイヤーだが、清磨はこの一撃を【^{アンサー}答えを出す者】を用いて見切り、紙一重でかわす。死神が清磨自身を狙う展開も予測していたのだ。

「へえ、見切るんだ」

「お前はまだまだ武器を仕込んでいるからな、気を抜いたりはしないさ!!」

「厄介な力だね……」

ワイヤーをかわした清磨を死神は、感心と不快の両方の感情を持ち合わせた上で見ていた。死神が不意打ちで清磨に攻撃しようとしても【^{アンサー}答えを出す者】でそれを見切る事が可能だ。よってガツシユは清磨を気にせず死神との戦いに専念させる事が出来る。

「清磨!!」

「ガツシユ、俺は心配いらなから死神から目を離すな!!」

「ウヌ!!」

死神の接近を許してはいけないと言う答えを清磨は出していた。死神の持つ技術の1つ「クラップスタナー」、対象の意識の波長に合わせて衝撃を与え、神経を麻痺させ

て動きを封じる。渚が使う「猫だまし」の完成形であり、それを喰らえば勝負は終わる。清麿はガツシユにもその技を発動させないように立ち回れる為の指示を出す。そして死神とガツシユが再び対峙した時、何かが爆発するような音が聞こえてきた。

「ついにイリーナが起爆させたみたいだ、これで烏間諸共瓦礫の下敷きだね……」

「な……：テメエ、初めからそのつもりで!!」

「言つたる？イリーナには烏間を足止めしてもらうつて」

「貴様がビッチ先生にやらせたのか?!許せないのだ!!」

ビッチ先生が死神の指示で自らも巻き添えに起爆させた事を知ったガツシユペアは、怒りの感情を死神に向ける。それとは対照的に、死神は笑みを浮かべる。清麿は【アンサー・トゥー・カー答えを出す者】で2人の安否を確かめたかったが、死神と対峙している以上その余裕は無い。

「イリーナ、僕を心酔してくれているみたいだからね。悲惨な境遇で育つたつて嘘を付いてあの女を引き入れたのさ。これも僕の技術の……」

「テオザケル!!」

死神はビッチ先生を利用する事しか考えていない。？八百を並べて相手の同情を誘い、味方につける一種の洗脳。そして目的の達成の為に容赦なく切り捨てる。殺しの世界では普通の事であるが、それを知る由の無いガツシユペアには死神の行動を容認出来

ない。死神の言葉を遮って彼等は強力な電撃を放つ。

「はは、酷いなア。その電撃、人に向ける威力じゃないだろうか？」

「な、その顔……」

「お主、一体何が……」

クリアの力を得た死神は、テオザケルを真正面から受けても倒れる事は無い。そして余裕の態度を崩さない死神の顔を見て、ガツシユペアの顔は驚愕する。その理由はテオザケルで死神を倒し切れなかった事では無い。何とその顔の皮は剥がれ、骸骨のようになってるのだ。

「驚いたかい？変装の技術を極める為に顔の皮は捨てたのさ。君達の電撃のせいじゃないから安心していいよ」

穏やかな口調で死神は話す、その言動は狂気に包まれている。自分の顔の皮を剥がすなんておよそ正気の沙汰ではない。青ざめた顔をしたガツシユペアを見て、死神は優越感に浸る。

「じゃあ、終わりにしようか」

死神は手を銃の形にして人差し指を清磨の方に向けようとした。その前にガツシユペアはお互いに目で合図を送り、ガツシユが清磨と死神の間に入った。

「オルダ・ラシルド!!」

清麿は【アンサートーカー答えを出す者】で死神の攻撃を見切り、電撃の盾の呪文を発動させた。死神の指には極小サイズの銃が仕込まれており、死神の射撃技術によって相手の大動脈に弾丸を放ち、大量出血で相手を死に至らしめる。

「そんな盾で防げるのかな？」

死神は優越感に浸りながらこの技 “死神の見えない鎌” を発動させる。その弾丸は何と電撃の盾を貫通しようとしていた。この技はクリアの力で威力が増しているのだ。

「ザグルゼム！」

清麿はつかさず呪文を唱えて、電撃の球はオルダ・ラシルドを強化した。すると貫通されかけていた盾が修復され、弾丸をはね返した。そして電撃を纏った弾丸を清麿が操作して死神を目掛けて攻撃したが、彼はもう一発同じ技を使用して攻撃を防いで見せた。

「僕の動体視力なら、放たれた弾丸に弾丸を当てる事だつて出来るのさ」

「くっ、技が人間離れしてやがる！」

「それはお互い様だろ？」

超スピードの弾丸を操作する事は容易では無いが、清麿は【アンサートーカー答えを出す者】を使用してどうにか死神に狙いを定める事が出来ていた。しかし死神は、そんな攻撃を完璧に見切った上で新たな弾丸を放って相殺して見せたのだ。それと同時にオルダ・ラシルドは

消えた。

「さて、次は何を試すか……?!」

不敵な笑みを浮かべていた死神の表情が一変する。そして死神の体からは、クリアの意志が前に出て来た。

「お主、クリアだな?!」

「そうだよ……ここまで君達の実力を見させてもらったが、そろそろ潮時かな。僕は自分の体に戻るよ」

「おい、待て!!」

清麿の制止も空しく、クリアの意志は死神の体から離れた。その直後、死神は意識を戻す。

「残念、クリアの力は失われたか。これは分が悪いかな?」

クリアの意志が離れてもなお、死神は動揺する事なく次の一手を考える。魔物の力が失われても、死神の技術は健在である。

「ガツシュ!!」ここからは死神の持つ本来の力との戦いだ!! 奴は借り物の力を無くしたに過ぎない!! 絶対に気を抜くな!!」

「ウヌ!!」

「油断してくれないんだね。まあ、それでこそ殺り甲斐があるけど」

死神からクリアの力が失われても、ガツシユペアの緊張感が無くなりはいしない。戦いは仕切り直しとなり、両者は勝ち筋を探しながら戦いに挑もうとしたが、もう1人がそこに来て銃弾を撃つ。

「あれ、イリーナは失敗しちゃったのか……」

「そこまでだ、死神!!」

「！……」

「烏間先生!!」

そこに来たのは上半身が裸になった烏間先生だ。しかし撃たれた銃弾は死神にかわされる。

時は再び遡り、場面は烏間先生に戻る。瓦礫で下敷きになったビッチ先生を烏間先生が救出して傷の手当てを行う。烏間先生は自分の服を包帯代わりにしていた。

「カラスマ、どうして助けたのよ?」

「お前に嵌められてもなお、生徒達はお前の身を案じていたからな。それを聞いてプロの粹にこだわっていた俺自身が小さく思えたんだ」

烏間先生は事前に生徒達にビッチ先生を助けるようお願いされていた。間違いを犯したビッチ先生を許すように烏間先生は頼まれていたのだ。

「その割には、私に銃口を向けてたじゃない」

「それはお前を止める為だ。だが、おれは隙を作ってしまった。まさかお前が自爆を選ぶとは思わなかった」

「……そう」

例えビッチ先生を殺さないつもりでも、烏間先生は彼女を止める為に銃を使わざるを得なかった。それを聞いたビッチ先生は素っ気ない返事をする。

「イリーナ……済まなかった、思いやりが欠けていた。だから今回のような事態を招いてしまった」

「……アンタのせいじゃないわよ、バカ」

烏間先生からの素直な謝罪。彼はお互いにプロだからと言って、必要以上にビッチ先生に踏み込もうとしなかった。その事ですれ違いを起こしてしまい、彼女を傷付けてしまった事を申し訳なく思っていた。そんな謝罪を受けたビッチ先生は顔を赤くする。

「お前がどんな世界で育つていようと、俺と生徒がいる教室にはお前が必要だ」

烏間先生はビッチ先生の事を必要としてくれている。それを聞いたビッチ先生は嬉しいと思う反面、後ろめたい気持ちもある。そして烏間先生は立ち上がって塞がれている道に目を向けた。

「応急処置は済ませた、俺は高嶺君とガツシュ君の方に向かう。お前はそこで大人しく

している」

「その瓦礫はどうするつもりなのよ？」

「竹林君が作った指向性爆薬がある。それを使えば、道を作る事が可能だ」

鳥間先生は爆薬を瓦礫に仕掛けた後、起爆させる。すると道が開けたので、鳥間先生はそのまま進んでいく。ビッチ先生は鳥間先生を死神の下へ送り出した。死神に命じられた役割を放棄して、再びE組の味方をしてくれたのだ。

「私、いまさらどの面下げてあいつ等に会えばいいのよ……」

ビッチ先生は罪悪感に苛まれていた、自分は生徒達の命を奪おうとしたのだから。彼女はこれから自分がどうすれば良いのかを考えながら、リエンから貰った首飾りを眺めていた。

場面はガツシユペアの方に戻る。彼等と死神の交戦中に、鳥間先生が合流した。さらに死神はクリアの力を失っている為に形成は彼等が有利に思われるが、ガツシユペアと鳥間先生が気を抜く事は無い。

「3対1は流石に分が悪いかな。けれど、僕には人質がいる事を忘れてないかい？」

自らが不利な状況にも関わらず、死神は余裕の表情を崩す事は無い。死神は捕えてい

る生徒達の首輪を爆破させようとし、タブレット端末を取り出した。

「二歩でも動くど人質に取り付けている爆弾を起爆させる。脅しじゃないってことを知ってもらうために、2〜3人殺してあげよう」

「何だと?!」

死神は端末を操作すると同時に口角を上げた。首輪によって何人かの生徒を殺せたと思ひ、檻の中の動画をタブレット越しに確認したが、死神の顔色が変わる。

「バカな!! 誰もいないだと?!」

そこには死神が起爆させた首輪の残骸が転がるだけで、生徒と殺せんせーの姿が無かった。明らかに動揺する死神とは対照的に、清麿は得意気な表情をしていた。

「どうした、まさかあいつ等に逃げられたのか?」

「ツ……そんな、どうやって?!」

清麿は【アンサー答えを出す者】で生徒達の作戦が分かっており、あえて死神を煽る為に質問をした。死神は冷や汗を掻く。

「ウヌ、皆は無事なのだな!!」

「その通りみたいだ、ガツシユ君! (そうか。彼等は考えがあると言っていたが、上手くいったみたいだな)」

ガツシユと烏間先生が安堵の表情を浮かべた。烏間先生は事前に生徒と殺せんせー

には作戦があると聞いており、それが成功した事を察した。その一方で死神は焦る。「やってくれるね！だが、人質は遠くには行けてないハズ。ここで僕が君等を皆殺しにした後にもう一度捕えればいい」

どんなイレギュラーが起きようとも、死神には諦める選択肢は無かった。自らの技術があれば、3人を殺せると考えている。

「いくらアンタでも、3対1はキツイんじゃない……」

「ここからは俺1人に任せてくれ、2人はイリーナを頼む。君達はよくここまで戦ってくれた。これ以上生徒を危機に晒したくない」

ガツシユペアは再び臨戦態勢に入ろうとしたが、烏間先生は自分だけで死神と戦おうとする。彼は教師として、生徒である2人を死神の魔の手から守ろうとしている。それを聞いた死神は烏間先生を睨み付ける。

「あくまで邪魔をするんだね。しかも1人で僕と戦うだつて？……コケにしてくれるじゃないか。それに僕以外で、誰がああ超生物を殺せると思っているんだ？」

「教師として俺は、彼等の命を犠牲にした暗殺を認める訳にはいかない。死神、俺の生徒と同僚に手を出した罪は重いぞ！そもそも奴を殺す技術ならE組に揃っている!!」

死神の言動の全てを烏間先生は否定する。それだけではなく、烏間先生は明確に死神に対して怒りの感情を向ける。それを見たガツシユペアは、死神は烏間先生に任せて問

題ないと判断出来た。そして清磨は死神の技術について烏間先生に話そうとしたが、彼はそれを断った。

「教えてくれるのはありがたいが、奴の技の対策はしているから問題ない」

「わかりました、ここはお願ひします！ガツシユ、ビツチ先生の所に向かおう！」

「ウヌ!!」

ガツシユペアは烏間先生にこの場を任せて、ビツチ先生の方に向かった。

怪我で座り込んでいるビツチ先生を清磨が肩を貸してガツシユと共に檻の前に辿りつた少し後のタイミングで、烏間先生が気絶している死神を担いでここまで来た。死神にはガツシユの電撃でのダメージが残っており、かつその手の内のいくつかを烏間先生が生徒達から聞いていた為に対策出来た事で、それ程苦戦する事なく倒す事に成功したのだ。

「クラス皆でこの危機を乗り越えられましたねえ」

殺せんせーは満足気な表情を見せる。死神を撃退した烏間先生、ゴームペア及びクリアの力を退けたガツシユペア、死神を欺く事に成功した生徒達と殺せんせー、そして最終的に烏間先生を送り出してくれたビツチ先生。クラスが一丸となって死神の企みに

打ち勝った。しかし烏間先生は何故か檻を開けようとはしない。

「手は無いのか……タコだけを閉じ込めたまま殺す方法が!」

殺せんせーをこのまま暗殺する方法を烏間先生が考えていたのだが、諦めて檻を開ける。そして生徒達と殺せんせーは無事に檻から出る事が出来、死神は拘束された状態で防衛省の職員達に連れていかれた。その後、ビッチ先生が口を開いた。

「アンタ達ともここまでね。私はガキ共を殺そうとした、これは許される事じゃないわ。さよなら」

ビッチ先生がそう言つてその場から離れようとしたが、生徒達がそれを許さない。彼女はあつけなく捕まってしまった。

「そうよね。アンタ達を殺そうとしたんだから、私は報復を受けても文句は言えないわ」
ビッチ先生は遠い目をするが、生徒達にはその気は無い。

「んな事しねーよ、怪我が治つたら学校に来いや」
「皆先生の事を心配してるぞ」

寺坂や清磨を始め、生徒全員がビッチ先生の復帰を望んでいる。しかし彼女は、どうして生徒達を殺しかけた自分が必要とされているのかが分からない。生徒達の言動に、ビッチ先生は戸惑うばかりだ。

「裏切つたりヤバい事したり、それでこそそのビッチじゃないのかい?」

「そうだよ、そんなビッチと学園生活は結構楽しいからさ」

竹林と中村がそう言うが、それこそが生徒一同の総意だ。生徒全員が彼女に微笑みかけてくれるが、ビッチ先生は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「けど、私は……」

「ビッチ先生はこれまで一人ぼっちだったが、今は違うのだ。これからは皆で楽しく過ごそうぞ!!」

ガツシユの言葉を聞いて、ビッチ先生は目を逸らす。これまで孤独に戦ってきた彼女だが、そんな自分ですら受け入れてくれる居場所がある。散々命を奪ってきた自分がここに手を伸ばしても良いのかと考えていた時、烏間先生が前に出た。

「イリーナ。その首飾りはリイエンさんが誕生日にお前に送った物だな?」

「カラスマ、どうしてそれを?」

「そんな事は別に良い。お前は死神に組してからもずっと悩んでいたんだろう。自分が生徒達を嵌める事について。もし本当に非常に徹するならば、彼女の贈り物を大切にはしないはずだ」

烏間先生はビッチ先生の身に付けている首飾りを見て、彼女がE組を完全には見限れていない事を察したのだ。それが凶星なようで、ビッチ先生はバツの悪そうな顔をする。そして烏間先生は、死神から勝ち取ったバラの花をビッチ先生に差し出した。

「この花は俺の意志でお前に渡そう。誕生日は、それで良いか？」

しかしビッチ先生はその花に対して不満を抱く。花も一本しかなく、渡すタイミングも唐突。何か文句を言おうと思っていたが、そうはならなかった。

「……はい」

ビッチ先生はとても嬉しそうにそれを受け取る。そして彼女は怪我が治り次第、E組に復帰する事になる。

「烏間先生がビッチ先生と……」

「よしよし」

一方で倉橋の目からは涙が流れており、矢田になだめられていた。先生達の距離が近づいた喜びもあるが、倉橋自身の恋が報われない可能性が高まった瞬間でもある。

今回の事件を経て、殺せんせーおよびE組の生徒の要望により、暗殺によって彼等が巻き添えになった場合には賞金が支払われない事となった。防衛省はそれをすぐに了承したが、彼等は大規模な暗殺プロジェクトを進めている様子だ。

決戦!! VS クリア・ノート編

LEVEL. 54 予感と苦悩の時間

死神との戦いが終わった後、ガツシユペアは帰宅せずにモチノキ町のホテルの一室に招待されていた。帰路に着く途中にアポロとナゾナゾ博士に電話でここまで呼び出されたのだ。言うまでも無く、アポロの財閥が経営するホテルである。

「2人共、こんな時間に呼び出して済まない」

「清麿君、ガツシユ君。まずは今日の戦い、お疲れ様だね」

この2人は今日にE組と死神が接触した事を知っている様子だ。彼等は死神の情報が遮断された後も、可能な限り彼について調べようとしてくれていたのだ。

「2人共、危険を冒してまで死神について調査してくれてたんだよな」

「しかし、私達はその情報を何も活かす事が出来なかったのだ」

ガツシユペアは無力感に苛まれる。死神についてもっと警戒していれば、今回の事態を未然に防ぐ事が可能だったのではと。結果として犠牲は出なかったが、誰かが死んでいるもおかしくない事態だったのだ。加えてクリアまで絡んでいたのだから。

「何を言う。結局我々は大した情報を提供する事が叶わなかったのだ。君達のせいでは

ない」

「博士の言う通りだ。今回僕達は何の役にも立てなかった」

ナゾナゾ博士とアポロは2人に詳細な情報を得られなかった事を申し訳なく感じている様子だ。4人それぞれが、自分にもつとやりようがあったのではないかと考えている。そしてしばらくの間、その場に沈黙が流れる。その沈黙を最初に破ったのは清磨だ。

「今回と同じ失敗は繰り返さないようにするとして……博士とアポロに頼みがあるんだ」

清磨が真剣な表情で言い放つ。それを聞いた博士とアポロは当然身構える。

「今回の死神の事にクリアが絡んできた。そこから察するに、奴等との戦いの日はそう遠くない。だから……」

清磨の頼みはこうだ。クリアとの戦いはいつ何処で行われるか分からない。よって遠距離の移動の際には、アポロに飛行機の手配をお願いしたいとの事である。また移動中にもクリアの襲撃を受ける可能性も考えられる為、非常事態にも対応できるパイロットを選ぶべきだとも彼は考えている。

「勿論だ。僕達に出来る事なら協力は惜しまない」

「パイロットには心当たりがある。任せてくれ」

彼等は2つ返事で引き受けてくれた。

ホテルでの話し合いが終わり、ガツシユペアが家に帰宅したが、デュフオーがまだ起きています。今日何が起こったのかが、ある程度察しが付いている様子だ。ちなみに華は既に眠っていた。

「デュフオー、起きてたのだな」

「ああ、クリアが動き出したからな。早速話を聞かせてくれ」

「そうだな……」

3人が清麿の部屋に移った後、清麿が事情を話す。死神の襲撃を受けた事、それにクリアが関わっていた事、クリア達との戦いがそう遠くないであろう事を説明した。それを聞いたデュフオーは眉をひそめる。

「そうか。戦う時期に関しては、各々の力は円熟期に来ているから問題は無い。だが、いっつ戦いになっても良いように気を引き締めておけ。他の仲間達への連絡は俺が明日しておく」

打倒クリアに向けて、一同は日々特訓に励んでいる。その成果は確実に出ており、各々の実力は高まっている。だが、完全体に近付いたクリアの実力は未知数だ。デュ

フォーはガツシユペアに念を押しした。

「当然だ。連絡の方は頼んだぞ、デュフォー」

「ウヌ、分かったのだ」

清磨も同じ事を考えていた。その話を聞いてガツシユペアは気合を入れ直す。魔界の滅亡をかけた激闘の日は近い。

ビッチ先生がE組に復帰する日の朝、ガツシユペアが登校すると校舎の入り口で楽しみに電話をする彼女がいる。彼女は丁度通話が終わったようで、ガツシユペアに手を振ってくれた。

「おはよう、アンタ達！」

「ビッチ先生、おはようなのだ！」

「おはよう先生、機嫌が良さそうだな」

ビッチ先生は朝から元気がある様子だ。リエンからプレゼントを貰った日のようにテンションが上がっている。

「さつきまでリエンと電話してたんだけど、また日本に来てくれるみたいなのよ！フ、次は何を仕込んであげようかしら……」

「おおつ、またリイエンと会えるのだな!!」

「先生、程々にしておいた方が良いんじゃないや……」

電話の相手はリイエンだ。彼女もまたビッチ先生を心配しており、気が気でない様子だった。そんなリイエンにビッチ先生が謝罪した後に、ガールズトークに花を咲かせていたのだ。しかも彼女がまた日本に来てくれるという。ビッチ先生はそれが非常に楽しみな様だ。

「あの子にも心配かけちゃったからね。埋め合わせしなきゃ!」

そう言い残してビッチ先生は校舎に入って行く。元氣を取り戻した彼女を見て、ガツシユペアも安心した様子で教室に向かう。

「近々進路相談をしようと思います。皆さん、ざっくりで良いので志望校並びになりた
い職業について考えておいて下さい」

帰りのHRの際、殺せんせーがそう言った。ちなみにその後、地球が無くなるから無駄になるとも付け足してくる。進路希望が決まり次第、殺せんせーが面談を行ってくれる。今日の放課後は各々の行きたい高校や将来の夢についての話題で持ち切りだ。

「進路か、どうしたものか……」

清麿はため息をつく。これまで殺せんせーの暗殺のみならず魔物との戦いの日々を追われており、将来について深く考える時間が取れていない。前の学校でも進路について、かつての担任だった中田秀寿先生「バージョン2・コードネーム『TM・リー』」に問われた事があつたが、具体的には答えられずに苦言を呈されてしまった。

「え、高嶺君は魔界とこつちの世界を繋げるんじゃないの?」

清麿が悩んでいる時、隣の席のカルマがニヤケながら声をかける。確かに彼自身もそれは考えていたが、リスクの大きい行動である。

「そんな簡単な事じゃないって前にも言っただろう……将来の事はもつと考えなくてはならぬな。そう言う赤羽の方こそ、何か考えているのか?」

ガツシユの目標を手伝えれば進路について何か分かると考えていた清麿だったが、現状は見つけられずにいる。そんな彼はカルマに聞き返す。

「え、俺はそんなに考えてないよ。何になるのが良いのかね?」

清麿の質問をカルマははぐらかすような口ぶりで答えた。しかし口ではそのような事を言いながらも、彼の目には明確なビジョンが見えている様子だ。それを見た清麿は内心焦りを感じる。

「ていうかそんなに慌てなくても良くね? 皆の話も聞いてみようよ」

クラスメイトの将来について聞けば、ヒントが得られるかもしれないとの事である。

そしてカルマは早速清磨の前にいる奥田に話しかけた。

「あのさ、奥田さんの将来はやっぱり研究者？」

「はい。理科が好きなので、研究の道に進みたいです。後、進路相談の時に言葉巧みに毒入りコーラを殺せんせーに盛ろうと思ってます」

奥田の夢はハッキリしている。理科が得意な彼女はそれに見合った道を進もうとしている。暗殺を通して身に付けた自信と超生物を毒殺しようとする気概があれば、厳しい研究者としての世界でもやっていけるだろう。

「なるほど、奥田らしくて良いと思うぞ（……あれ、さり気なくとんでもない事言わなかったか？）」

清磨も奥田に感心するが、彼女の毒入りコーラの発言は聞き捨てならなかった。殺せんせーは進路相談の時ですら、暗殺を受け付けている。

「お2人の進路は、どんな感じで考えているんですか？」

奥田が聞き返す。彼女も2人の将来について関心を持ってくれている。

「それが俺も高嶺君も全然決まって無くてさ。どうしたものかと悩んでいるんだよね。だから奥田さんの話を聞こうと思ってるさ」

「そうだったんですね。カルマ君も高嶺君も頭が良いから、どんな所でもやっていけそうな気がします。やりたい事が見つかるの良いですね！」

「ああ、頑張つて探してみよ」

奥田が微笑みかけてくれる。彼女の純粹無垢な笑顔は、頭を抱える清麿を励ますのに十分だった。そして3人がもう進路について少し話し合った後、カルマは渚の席に視線を移す。

「そうだ、渚君にも進路について聞いてみよつか」

「分かった、そうしよう！」

「私も渚君のお話、聞いてみたいです」

カルマの提案と共に、清麿達は渚の席に向かった。

「渚、聞きたい事があるんだが……」

「3人共、進路について？」

「そうそう、高嶺君が凄く悩んでいるみたいだからさ。渚君は何か目指してる物つてある？」

進路について聞かれた渚は、清麿と同じく明らかに悩んでいる様子だ。そして少し考えた後、彼は口を開く。

「そうだね、将来は……」

「渚ちゃんの進路は、女子高に進学してからのナースかメイドっしょー!」

渚が将来について話そうとした瞬間、中村に遮られてしまう。しかも明らかに渚の進路を歪めようとしており、清麿達は苦笑いを見せる。

「中村さん、ちよつと……」

「だったら渚君、卒業したらタイかモロッコに行こうよ!」

「カルマ君、取ろうとしないでよ!!」

中村の渚イジリにカルマが参戦する。2人の発言を否定した渚だが、後に彼は大きくため息をつけて少し暗い表情を見せる。

「多分僕には……」

「清麿、そろそろ帰ろうぞ!……ウヌ?」

渚が再び将来について話そうとしたが、今度はガツシユに遮られた。その時の彼等の間には何とも言えない雰囲気漂う。相手から進路について聞かれたのに、彼の話は途切れがちだ。

「渚の顔が暗いのだ……何かあったかの?」

「ガツシユ、間が悪かったな」

「いや、ガツシユ君のせいじゃないよ……」

ガツシユは渚の表情には気付く事が出来たが、場の雰囲気には気付く事は出来なかつ

た。そんな彼を清磨が何とも言えない表情で見るが、渚がフォローを入れてくれた。しかし、何度も話を遮られた彼の目からは涙が流れている。

「ガツシユ君！今ね……」

茅野がガツシユに進路相談の事を説明した、そして渚が自分の事について話そうとしている事も。今のE組では、生徒達の将来の話で盛り上がっている。

「何と、そうであつたか……」

「ガツシユの夢は、優しい王様で決まりだもんなー！」

「その通りなのだ!!杉野は野球選手かの？」

「おうよー!」

彼等の会話に杉野が加わる。彼の言う通り、ガツシユには優しい王様以外の目指す道は無い。他のE組の生徒達が進路について悩む中、彼の目標は確定している。そんな真つすぐなガツシユを渚が見つめる。

「やっぱりガツシユ君で凄いいよね、ここまでやりたい事がハッキリしているなんて……」

「渚。さつきから元気が無さそうだが、大丈夫かの？」

「うん、僕はね……」

渚はようやく自分の将来の話を出来る事が出来た。やりたい事が明確では無く、自分には人を殺す才能がある事、人の「意識の波長」を見切る事が出来る為に自分が死神と同

じ技が出来るであろう事を話した。それを聞いた他の生徒達は困惑の表情を浮かべる。「渚、殺し屋になつてしまふのか?」

ガツシユが不安な感情のこもつた声で言い放つ。友達が殺しの道の歩む事は、ガツシユとしても素直に承諾しかねる様だ。

「どうだろうね。でも、これは大した長所の無い僕にはこれ以上望めないような才能だから……」

「自分の将来について真剣に向き合つて苦悩する事、これは大きな糧になりますよ! 又ルッフッフ」

「……殺せんせー、いつの間に?」

渚が思い詰めた様子で話を続けていると、突如殺せんせーが現れた。先生の出現により生徒一同は驚くと共に、場の雰囲気が多量なりとも軽くなる。そして殺せんせーが口を開いた。

「しかし今の渚君の言葉には『自棄』が見られますね……まずはどうして君がその才能を身に付けたのかをもう一度見つめ直しなさい。そうすれば君の才能を何の為に、誰の為に使えばよいかが見えてくるはず。後は進路相談の時にゆっくり話し合ひましょう。ではまた明日」

そう言い残して殺せんせーは窓から出て行つた。渚には自己評価が低く、自分の事を

顧みない一面がある。だから4月の自爆も平然とやってのけた。そんな彼の危うい一面を殺せんせーは見抜いた。また他の生徒達も渚に心配の眼差しを向ける。殺せんせーの暗殺とは違う、本当に人の命を奪う危険な職業をクラスメイトが将来の選択肢に入れていいるのだから。そんな彼等の気持ちを察した渚は、あえて明るい口調で話し始めた。

「それは分からないよ、殺し屋って凄く危ないだろうし……さあ時間も遅くなってきたから今日は帰ろう！」

渚が無理をしている事を他の生徒達は理解していたが、それを言及する者は誰もいない。渚の言葉を皮切りに、多くの生徒達は帰り支度を始めるのだった。

ガツシユペアは渚・カルマ・茅野・杉野と共に帰り道を歩いてしたが、暗い雰囲気は漂う。

「皆ゴメン、僕のせいで何だか気まずくなっちゃって……」

このような時でも彼は周りを気遣ってくれているが、渚自身も思い詰めた様子だ。そんな彼を見かねた清麿が、少し考えた後に渚に問う。

「なあ渚。お前が悩んでいる根本的な原因ってのは、もっと別のところにあるんじゃない

「いのか？殺せんせーは何か気付いていたみたいだが……」

そもそもなぜ渚が暗殺の才能に目覚めたのか、清麿はそれが渚にとって苦悩する一番の原因であると考えている。「答えを出す者」を使えばすぐに分かる事であるが、人の心を勝手に覗き込むのは良くない。清麿の話聞いて、渚は凶星を付かれたような顔をする。

「悪い、言いたくなければそれでも良いんだが……」

「いや、皆に話すよ。これ以上溜め込んでも良くなきさそうだし」

渚の表情を見た清麿はバツの悪そうな顔をしたが、渚は悩みの原因を話してくれた。それは渚の母親についてだ。渚の母親「潮田広海」は自分自身が厳しい環境で育ち、親の影響で思い通りの人生を歩む事が出来なかった。その事が彼女にとって大きな傷となり、自分がこれまで出来なかつた事を渚に押し付けるようになった。渚が男なのにも関わらず、中性的な言動や恰好をしている事もこれが原因である。

「それで父さんも、そんな母さんと上手くやって行けずに家から出てっちゃったんだ」

渚もまた、竹林や神崎と同様に親の鎖に縛られる。広海にとつて渚は自分の人生の「2週目」としか思っていない。そんな彼女の執念に渚は逆らう事が出来ずに人の顔色を伺う生活を送るようになった。それが原因で彼は「波長の意識」を見分けられたり、自分を犠牲にする事を厭わない暗殺の才能を身に付けたのである。

「最近は母さんの機嫌が良くない事が特に多くなってるし、どうにかしたいんだけど……」

渚はそう言うが、彼は諦めの気持ちも抱えている様だ。渚の話聞いた彼等は重苦しい表情をする。そんな時、杉野が口を開いた。

「すごいや俺とカルマで渚の家に遊びに行つた時、結構キツイ反応されたっけな。そんな事になってたなんて……」

2人が訪れた時も、広海はその事をあまり快く思っていないかつたのだ。場の空気が暗くなる中で、ガツシユが体を震わせる。

「そんなの……辛すぎるではないか!!」

「ガツシユ君……」

竹林の時と同様に渚が母親に大切にされていない事を知って、ガツシユはやるせない気持ちになる。そんなガツシユを見た茅野も釣られたように辛そうな表情をする。

「……家族の問題となると口出しは辛い、渚自身の気持ちをもつと伝えた方が良くんじゃないのか?」

清麿は苦虫を噛み潰したような顔で言い放つ。これまで渚は母親の機嫌を損ねないように強くは言わなかったが、それでは渚自身が潰れてしまう可能性がある。清麿達はそれを危惧している。

「……それも、そうかも知れないんだけどね。言い出したたら聞かないからさ、家の母親」
その事は渚も薄々気付いている様子だったが、上手く母親とは話せていない。清麿もまた彼に対して無理強いをする事が出来なかったが、渚が話を進める。

「……でも、このままじゃいけない事は分かっている。どこかで向き合わなくちゃならないんだ、でも中々踏ん切りがつかなくて……」

渚は内心では母親と向き合わないといけない事は分かっている様子だ。そんな時、カルマが口を開く。

「親の問題って難しいよね、俺等がどこまで踏み込んでいいかも分からないし……まあ、いざとなったら高嶺君の家に逃げ込めばいいんじゃないかね？」

「う、家か!」

「ウヌ!! 清麿の母上殿なら許してもらえるかもしれないのだ!!」

清麿の家にはこれまで何度も魔物の戦いの関係者が泊まる事があった。今もデュフォーが居候している。それを知っていたカルマが家出を提案したのだ。それを聞いた清麿は驚いたが、ガツシユは目を輝かせる。

「ハハ、どうにもならなくなったらそうしよつかな……」

「……まあ、何かあつたら連絡してくれ。そうなった場合はお袋にも聞いてみるから」

渚が冗談交じりにその話に乗ろうとしたが、清麿は満更でもない様子だ。そんな会話

をしている内に、彼等の間の雰囲気は先程よりも軽くなっていた。

「渚が家出かあ」

「渚ってそういうタイプじゃなさそうだから、お母さんもビックリしちゃうんじゃない？」

「何時でも待つておるぞ!!」

杉野・茅野・ガツシユも便乗しており、渚が本格的に家出する方針で話が進みつつある。そんな彼の目には希望が宿っており、そこからの帰り道は楽しい雑談を繰り広げる事が出来た。

そして渚達と別れたガツシユペアは帰路に着く。

「渚、さつきよりも元気になつていたのだ」

「ああ。あれなら大丈夫そうだが、俺達は引き続き渚の相談に乗る事にしよう！」

「ウヌー！」

渚の表情が明るくなった事で、ガツシユペアは安心する。そのまま彼等が帰宅すると、玄関には通常よりも多くの靴が置いてあつた。

LEVEL. 55 悲報の時間

ガツシユペアが帰宅すると、家の和室でデユフォー、テイオペア、そしてフォルゴレが2人を待ち受けていた。しかしフォルゴレがいるのにキャンチヨメがその場に居ない。また場の空気が非常に重く、彼が清磨宅を訪れた理由をガツシユペアはすぐに理解する事が出来た。それは渚の悩みにおいて希望の兆しが見えて安心していた2人の精神をどん底に突き落とすには十分すぎた。

「なあ、これって……」

重苦しい雰囲気の中で清磨が口を開こうとするが、上手く喋る事が出来ない。

「ああ、その通りだ。キャンチヨメは魔界に帰ってしまったよ……」

「そんな、何があつたと言うのだ……」

突然の仲間との別れ。フォルゴレがここまで一人で来ていた為、理由を察する事は出来ていたが、その事を改めて聞いたガツシユペアとテイオペアはさらに辛そうな表情をする。そしてフォルゴレは話を続けた。

回想

キャンチョメペアはミラノで貴族のような恰好をした魔物のパピプリオ及びパートナーのルーパーと再会し、そのまま2人の魔物は友達になった。しかしパピプリオペアはゴームペアの襲撃を受けて、彼を守ったルーパーは大ダメージを受けた。それに怒ったキャンチョメは新術“シン・ポルク”で自らが何本もの触手を持つ巨大なライオンの獣人に変身して敵を痛めつけるが、それを見かねたフォルゴレがゴームペアを彼の攻撃から身を挺して防いだ。

「やめろ、キャンチョメ……」

「どうしてそいつらを庇うんだい？この攻撃はフォルゴレだつてダメージを受けるのに」

シン・ポルクはキャンチョメ自身をどんな姿にも化けさせられる。また変身したキャンチョメの体には自分の想像した力を持たせる事が出来、相手の精神に直接ダメージを与えられる。キャンチョメには、どうしてフォルゴレがそんな危険な術の発動中に敵を守ろうとするのかが理解出来ない。

「キャンチョメが間違つた方向に行かない為だ。ライオンになつてはいけないんだよ……」

キャンチョメは強くなつたが、その力に溺れかけている。それを分かっていたフォル

ゴレは今の彼が間違っている事を証明する為に自分の過去を話し始めた。スターになる前の彼は荒ぶっており、ライオンの様に強かった。しかしそんなフォルゴレに対しては皆が恐れ、誰も近付かなくなり、彼の両親に至っては銃を突き付けた上でフォルゴレを家から追い出してしまった。

「わかるか？前にも言ったが、ライオンの牙には小鳥は止まらないんだ!!」

それを聞いたキャンチョメは、わかばパークでのライオンとカバさんの話を思い出さず。何故フォルゴレはライオンでは無くカバさんにこだわるのか。そして彼は話を続ける。

「故郷を追い出された私は、偶然TVでカバさんの牙に小鳥が止まる映像を見たのさ」

その時の映像にフォルゴレは感銘を受けて、愉快なスターを目指すようになった。しかし未だに彼の両親はフォルゴレには近づいてくれない。そうなったら終わりだとフォルゴレはキャンチョメを諭す。それでも彼は拳を引込めようとしない。キャンチョメの強力な一撃がフォルゴレを襲うが、彼はそれを受け止めた。

「キャンチョメ、あの時は言わなかったがカバさんは強いんだぜ。子供を守る時は特に、ライオンを倒す程に強いのだ!! 私はいっただってカバさんだった。私の姿はキャンチョメの目には、カッコ悪く映っていたかい？」

その言葉は決定的だ。キャンチョメにとって一番の憧れであるフォルゴレは、常にカ

バさんであろうとしている。そして彼はとても強い。その強い力をフォルゴレは決して誰かを傷付ける為に使おうとはせず、何度もキャンチョメを守ってくれた。そんな彼がキャンチョメにとってカッコ悪い訳が無い。キャンチョメの目には涙が溢れ出し、彼は元の姿に戻った。

「うわあああん!!ズルいよ、フォルゴレよりカッコイイ動物なんている訳ないだろー!!」ゴメンよ、フォルゴレー!!」

キャンチョメはようやく自分の間違いに気付き、フォルゴレに泣きつく。そんなキャンチョメをフォルゴレは優しく抱きしめるのだった。

その後キャンチョメは術を解き、フォルゴレはミールから本を取り上げた。その後キャンチョメは必要以上に痛めつけてしまったゴームペアに謝罪し、今度は彼等を喜ばせる幻を見せる為に術を發動する。幻の中で小鳥が自分に近寄ってくる様子を見たゴームはとても楽しそうだ。

「ゴーム、魔界に帰ったら友達になろうよ」

「ゴー!」

その言葉を聞いたゴームはとても嬉しそうだった。そしてキャンチョメは術を解く。後はゴームの本を燃やすだけかと思われたが、その場にはいつの間にかヴィノーが出現していた。

「シン・クリア・セウノウス・ザレフェドロー!!」

ヴィノーが術を唱えたと同時にキャンチョメは何か気付き、フォルゴレとパピプリオに自分達の本を遠くに投げさせた。そして本にはクリアの消滅の術が放たれ、彼等の本は燃えてしまった。しかしルーパーとの別れを惜しむパピプリオとは対照的に、キャンチョメは平常心を保つ。彼はガツシュの勝利を信じており、自分達が消される事は無いと確信している為だ。ガツシュの存在をパピプリオペアに伝えた後、キャンチョメはゴームの方を見た。

「ゴーム、ミール!!この戦いで君達を痛めつけた事は本当に申し訳ないと思ってる!!こんな事を言うのは都合がいいかもしれないけど、君達もガツシュ達に力を貸して欲しい!!ガツシュならゴームを絶対に一人にさせないから!!」

ゴームは彼の言葉を黙って聞く。キャンチョメはそれだけを伝えると、涙を流しているフォルゴレの方を向いた。

「ホラ、フォルゴレも泣くなよ……」

「バカ、泣いてるのはキャンチョメの方だろう……」

フォルゴレの言う通り、キャンチョメの目からも涙が流れ出る。先程までは強気な態度を取っていた彼だが、パートナーとの別れを実感すると一気に悲しい気持ちが沸き上がった。

「嫌だよ!! フォルゴレ、フォルゴレ~~~~!!」

「キャンチョメ、キャンチョメ……キャンチョメー!!」

フォルゴレはキャンチョメの肩に手を置きながら、キャンチョメはフォルゴレの腕を握りながら、それぞれ泣きながら別れを惜しむ。突然の別れ、彼等がそれを受け入れるのには時間が足りな過ぎた。そしてキャンチョメの体は消えて、彼は魔界に帰った。その後フォルゴレは涙を流す事しか出来なかった。

回想終わり

フォルゴレは経緯を話し終えた後、涙を流しながらゴームの本を燃やせなかった事を謝罪する。しかし、その事を責める者は誰もいない。

「スマン、そして頼む……必ずクリアを倒して、魔界で魂だけになっているキャンチョメを生き返らせてくれ……」

魔界の王を決める戦いにおいて、残りの魔物が10体となった時には魔界全ての住人は魂だけとなる。そして戦いに勝ち残って王になった者は、他の魔物を自由にできる。クリアはこれを使ってゴーム以外の魔物を消そうとしている。それだけは防がなくてはならない。

フォルゴレは一人帰り道を歩く。その背中は悲壮感に溢れている。彼はキャンチョメとの別れで大きな傷を負ったが、それでも日本まで来て清麿達にその事を伝えてくれたのだ。そんなフォルゴレを一同は黙って見送る事しか出来なかった。

「清麿、私は特訓に行つてくるぞ！」

ガツシユの一言を皮切りに各々がそれに励もうとしたが、テイオだけは顔を青くしてその場を動こうとはしない。そして彼女の目からは涙が流れ出る。

「テイオ!!」

そんなテイオに恵が駆け寄ろうとしたが、彼女は黙つてその場を走り去る。キャンチョメが魔界に帰つた事を聞いたテイオは、辛い現実を受け止めきれなかった。

「お、おい! テイオ!!」

「どこ行くの!!」

清麿と恵がつかさずテイオを追いかけようとしたが、ガツシユが両腕を広げてそれを止める。

「テイオの事は、私に任せて欲しいのだ!!」

ガツシユの目には強い意志が宿っている。何としてもテイオを連れ戻すと、彼の目が

物語っていた。そしてガツシユはテイオを走って追いかける。それでも自分達のパートナーが心配である清磨と恵は、テイオとガツシユの後を追った。

テイオはがむしやりに走る。とにかくその場から、辛い現状から逃げ去りたかった。例えそれが叶わない事だとしても。そして彼女は公園まで来ていた。今は人がほとんどいない。その孤独さがさらに彼女を追い詰める。テイオはどうすれば良いかが分からずに一人で佇んでいたが、青髪の少年が彼女に話しかける。

「テイオちゃん？」

「……………渚……………」

その公園には渚がいた。彼は母親との話し合いについて決意を固める為に、家以外の場所で一人になりたかった様だ。そんな渚がテイオに声をかけるが、彼女の目からは再び涙が流れて始める。

「テイオちゃん、大丈夫!!」

渚はテイオが何らかの原因で非常に落ち込んでいる事は分かったが、どうしてそうなったのかは分からない。彼がどうすれば良いかを考えていると、ガツシユが公園まで走ってきた。

「ガツシユ君、大変なんだ!! ティオちゃんが……」

「ウヌ、渚ではないか! 事情は分かっている!」

ガツシユがティオの方に駆け寄る。それを見た渚は、ガツシユがティオと1対1で話したがっている事をすぐに察する。

「ガツシユ君、後はお願ひね!」

「分かったのだ、渚も自分の事としつかり向き合うのだぞ!」

「勿論!」

渚はその場を離れた。彼にも成すべき事があるのだから。そして公園に2人だけになつた事をガツシユが確認すると、彼は口を開く。

「ティオ、辛いのは分かるが今は皆のところ……」

「何でガツシユは不安にならないの!?!」

ガツシユがティオを連れ戻そうとした瞬間、彼女は叫ぶ。ティオはどうしてこのような時にもガツシユが心を乱さないでいられるかが分からない。

「キャンチョヨメって、凄く強くなつたんだよね?……それなのにクリアに倒されて……私、怖いのをずっと我慢してたけど、もう限界!!」

ティオは自らの感情をぶちまける。彼女は日に日に不安な気持ちが増していたが、それでも恐怖を押し殺して日々特訓に励んでいた。しかしキャンチョヨメが魔界に帰った

話を聞いて、ついに耐え切れなくなってしまうのだ。

「ガツシユは何で平気なのよ!!何で……」

親しい仲間との別れ。そして消されてしまうかもしれない恐怖。それらが身に降りかかってもガツシユは変わらない。そんな強かな彼を見て、ティオは苛立ちまで覚えてしまう。

「ティオ、約束しよう。お主がもし負けても私が王となり、必ず生き返らせる。ティオだけでなく、魔界の皆に再び肉体を与えて救い出す」

ガツシユは迷いなく答える、ティオの負の感情を受け止めたうえで。彼にはそれ以外の道は無いのだから。それでも、ティオの目から不安と恐怖は消えない。

「だから、何でそんな事が言えるの!!勝てる保証なんて……」

「私は色んな者達に思いを託されたり、王になれなくて魔界へ帰って行つた者達を多く見て来た。だからどんな事があるうとも、王にならねばならぬ。確かに不安もある、だがそれ以上に皆の思いを叶えねばならぬ。私は、そういう物を背負っておるのだ」

ガツシユも平気でいられる訳では無い。しかしそれ以上にやり遂げなくてはならない事がある。それは、優しい王様になる事。その為にも、彼は負の感情に構っている余裕など無い。そんなガツシユの意志を目にしたティオは、自分の心が軽くなつていくのを感じた。

(そっか、私……ガツシユのこういうところが……)

「テイオ、皆のもとに戻ろうぞ！」

「うん！」

テイオは再び微笑んでくれた。

時は少しさかのぼる。渚は母親と向き合う為に自分の家を目指す。そんな時、彼は清磨と恵が走ってくるのを見た。

「高嶺君、恵さん!!」

「渚(君)!!」

渚に気付いた2人は足を止めた。そして渚は2人にテイオとガツシユの居場所を教える。

「ありがとう、渚君！」

「2人共、一体何が……」

清磨と恵だけでなく渚もテイオの事が心配だったが、彼には何が起こったのかが分からない。そして清磨が少し考えた素振りを見せた後に口を開いた。

「恵さん、先にテイオ達の方に向かってくれ！」

「清麿君……分かったわ!」

彼女は何かを察した様にすぐに公園に向かう。

恵がこの場を離れた後、清麿は渚に事情を説明した。

「そんな、キャンチョメ君が……」

渚はわかばパークにてキャンチョメとの関わりがそれ程あつた訳では無いが、自分の友達の間での別れを聞いて、悲し気な表情を見せる。

「俺達の戦いはもうすぐ始まる。悪いがその間は渚の相談には……」

「僕の事なら大丈夫だよ!!」

ガツシユペアがクリアとの最終決戦の準備をする際には、他の事を考える余裕は無くなる。それはクラスメイトの悩み事として例外ではない。それを申し訳なく思う清麿だが、渚は気にしていない。

「高嶺君達は自分の戦いに専念して!僕も、自分の事はこつちで何とかするから!」

「……ああ、頑張れよ渚。くれぐれも1人で背負い込むな!」

「分かつてる、僕達には皆がついているからね!ごめん、足止めする形になつちやつて。高嶺君はテイオちゃん達のところに行つてあげて!」

渚も清麿も孤独ではない。頼れる仲間がいる。彼等は2人を支えてくれる。その事実だけで、清麿も渚も困難に立ち向かつていける。2人はお互いに背を向けて目的地に

向かった。

清磨は全力疾走してガツシユ達のいる公園に辿り着いた。そこには3人が揃っており、テイオの顔色もかなり良くなっている。

「済まない、遅くなった!」

清磨は来るのが遅くなった事の謝罪をしたが、3人共気にしていない素振りだ。

「清磨は謝らなくて良いわよ、勝手に飛び出しちゃった私が悪いんだから。こつちこそごめんなさい」

テイオが大きく頭を下げた。自分のせいで皆に心配をかけてしまった事を申し訳なく感じている。それを見たガツシユペアと恵は、安心したような顔をする。今のテイオなら大丈夫だと、そう思えた。

「一先ず、清磨君の家に戻りましょうか。デュフォーさんも待つてるし」

恵の一声にて、彼等は清磨宅に戻るのだった。

清磨宅の前に一行が辿り着くと、デュフォーが扉の前で立っていた。そんな彼を見て

テイオが謝罪の言葉を述べようとすると、その前にデュフオーが口を開いた。

「今日の特訓は無しだ。それぞれ明日以降に向けて、心を落ち着かせておけ」

デュフオーからは意外な言葉が出てきた。彼は清麿達がキャンチョメとの別れによつて精神が乱れている事に気付いている。

「今の状態でそれをしたところで結果は出ない。明日に引きずらないよう、今日は休むんだ」

これはデュフオーなりの気遣いでもある。彼は仲間を失った清麿達のメンタルを案じて、休息を取るように言ってくれたのだ。そして彼はそのまま清麿の家に入つて行く。それを見た清麿達は少しの間あつけに取られていたが、ガツシユが言葉を発する。

「デュフオー、私達の事を心配してくれたのかの？」

「……そうだな。今日はデュフオーの言う通り、心を休めておこう」

デュフオーの気遣いを察した彼等は休息を取る事にした。そんな時、恵が何かを思いついたかの様に口を開く。

「3人共。デュフオーさんもああ言ってくれた事だし、ちよつと出掛けない？」

ガツシユペアとテイオペアは今、モチノキ町のファミレスにいる。恵曰く、自分の好

きな物を食べて少しでも元気をつけたうえで、明日以降の特訓に励もうとの事である。ちなみに料金は全て彼女が出してくれるそうだ。

「恵さん、本当に良いのか？」

「気にしないで。皆、食べたい物や飲みたい物を自由に頼んでよ」

清麿が申し訳なさそうな態度を取るが、恵は優しく微笑む。皆を氣遣つたのもあるが、彼女自身も戦いの前に、この4人で楽しい時間を過ごしておきたいと考えている。

「ウヌ、それならお言葉に甘えるのだ。ブリの料理は無いかの……」

「恵、ありがとう！何にしようかな」

ガツシユとテイオが嬉しそうにメニュー表を眺める。彼等が無邪気に食べたい物を決める様子を、清麿と恵は隣で暖かい目をして見守る。

「テイオも大分明るくなってくれたな」

「そうね、ガツシユ君のお陰だわ」

こうして彼等はそれぞれ食べたい物を注文する。

それぞれの料理が出揃った。4人は少しの間は黙食をしていたが、初めにテイオが口を開く。

「私、キャンチヨメがいなくなつた事を聞いてどうしたら良いのか分からなくなつちやつたの。あんまりにも辛くて悲しくて……それでもガツシユは歩みを止めようとはしなかつた」

彼女の話を3人は黙つて聞く。ガツシユが気丈であつたお陰で、テイオは立ち直る事が出来た。もしそれが無ければ、彼女は絶望に心を支配されていたであろう。

「私、全然ダメだな。皆同じ気持ちなのに1人で辛い気になつて。皆の事も散々振り回しちやつて……」

飛び出してしまつた事を未だに気にしている様子だ。そんな彼女を恵が優しく抱き寄せる。

「テイオ……私達は1人じゃないわ。辛い事や悲しい事は皆で共有していけば良い。困難な事は協力して取り組めば良い。今までだつてそうしてきたじゃない」

「……そうよね、恵」

ガツシユの言葉がテイオに希望を与えてくれるのなら、恵の言葉はテイオに癒しを与えてくれる。テイオは顔を赤くしながら、恵の言葉を受け入れていく。その後、ガツシユペアが話を続ける。

「テイオ……自分が孤独ではない事を忘れてはだめだ。仲間の内、誰が欠けていてもここまで来れなかつただろう。そしてこれからも。だから俺達にはテイオが必要だ。」

ティオの守る力があれば、どんな敵が来たって大丈夫さ」

「ウヌ、ティオの盾はとても強いからの」

彼等はティオを頼りにしてくれている。それだけでは無く、絶望に打ちひしがれていた自分を鼓舞してくれようとしている。その事は彼女にとって、非常に嬉しい事だった。

「皆……ありがとう!!」

こうして4人の間には再び楽しい雰囲気が始める。そして彼等は雑談をしながら料理を食べ進めた。

そして帰り道、ガツシユペアが恵にお礼と別れの挨拶を述べた後、ティオが手を振ってくれた。

「じゃあね、また明日!! (……明日、か……)」

ティオがそう言うと、彼女は明日という言葉を中心に心の中でも述べる。キャンチョメの事を聞いた当初、何もかもに絶望していたティオだったが、今の彼女は明日への希望を見出す事が出来ている。恵や清磨が声をかけてくれたのもあるが、元氣を取り戻せたのはガツシユの存在が大きい。それを実感したティオは嬉しい気持ちになる。

「ウヌ、また明日!!」

ガツシュもまた、別れの挨拶を述べた。そんな彼等には迷いなど無く、明日以降はしっかりと特訓に臨む事が出来た。

LEVEL. 56 開戦の時間

特訓の時間を少しでも取る為にガツシユペアは、授業終わりにすぐに教室から出て裏山を降りる。その時、彼等の前には黒い異空間の穴が出現した。

「清麿、これは!?」

「まさかここぞで攻めて来るとは……」

ガツシユペアはゴームが襲撃してきたと思つて臨戦態勢に入る。しかし、そこからは下半身と右腕を失つていたゴームが出現した。

「なっ!?」

予想外の出来事にガツシユペアは驚きの感情を露わにする。自分達に戦いを挑むのかと思われた魔物が瀕死の重傷で現れたのだから。彼等が愕然としてみると、異空間の穴からはミールが出て来た。彼女もゴーム程では無いが、傷を負っている様子だ。

「アンタ等のいる学校はクリアが宿つた死神から聞いてたから、魔力を探つてすぐに見つけられたびょん」

ゴームペアは以前にも柵ヶ丘に来ており、ガツシユペアがその学校に通っている事を知っていた為、2人を発見するにはそれ程苦労はしなかった。

「ゴ……ゴ……ゴ……」

ゴームは隠し持っていた石板を取り出す。そこにはマジックで鳥が描かれている。これはキャンチョメがゴームとの友情の証に渡した代物だ。

「その絵、キャンチョメが描いたのよ。そのキャンチョメを生き残らせるようにクリアと話したけど断られて、戦って……で、こうなったわ」

ゴームは自分だけが消されないと言う条件の下でクリアに従っていた。しかし彼はキャンチョメとの出会いを通して、友達の大切さを知る事が出来た。1人では寂しいと感じるようになり、クリアと戦う道を選んだ。

「キャンチョメが言っていたわ、アンタ達がクリアを倒す為の力になって欲しいって。初めはふざけんなって思ったけどね」

ミールは当初、クリアに逆らう事に反対していた。自分達がクリアに敵うはずが無いのだから、挑むのは無駄であると。自分が殺されずに済むのだから、それで問題ないと考えていたのだ。

「でもコイツは譲ってくれなかった。だから私自身、実際にクリアが気に食わないのもあつて持てる力の限りゴームと一緒に戦ったけど、やっぱり無理だったわ。思った通りの結果よ」

しかし彼女はゴームの意志に押し負けて戦う道を選んだ。その結果クリアの圧倒的

な力の前に破れてゴームの体の多くは消滅した。しかしゴームペアは最後の抵抗として、クリアとヴィノーをアメリカのロッキーマウンテン脈に置き去りにしてきたのだ。そしてミールはクリアに対して「ざまあみろ」と吐き捨てた後にゴームの本を取り出した。「そろそろゴームが死にそうだから、本を燃やしてよ。死ぬ前に魔界へ帰してあげれば、肉体の損傷なんて関係ないからね」

今の状態で魔物が魔界へ帰れば、魂だけの状態になる。よってどんなダメージを受けようとも、死んでさえいなければ問題は無い。ゴームの本目掛けてガツシユペアは手加減したザケルを放ち、本は燃えだした。

「ねえガツシユ。こんな事を聞くのもなんだけど、あんたが魔界の王になったらさ……キヤンチヨメ達だけじゃなくてゴームの事も生き返らせてくれる？」

ミールは尋ねる。必死で懇願するでもなく、まるで断られても仕方ないと考えているような素振りだ。自分達は彼等と敵対し、アースペアをあざ笑い、パピプリオペアをいたぶり、E組の生徒達を危機に陥れた事すらあるのだから。それでもガツシユの返答は分かりきっていた。

「ウヌ、約束するのだ!!」

彼に他の魔物を消すと言う選択肢は無い。優しい王様を目指す以上は、皆が平和に暮らせる世界を作らなくてはならない。そこにはどんな犠牲も許されないのでから。

「そ、ありがと。じゃあ帰るわね。いい加減ガキのお守で疲れちゃったから……ば〜い」
彼女はガツシユが自分の願いを聞いてくれてもあからさまに喜ぶような事はせず、ただこれまで通りの表情で礼を述べた。しかしガツシユペアにはその時のミールの口角が若干上がったように見えた。そして彼女はそのまま山を降りて行く。

「清磨……」

「ああ、ガツシユ。キャンチョメとフォルゴレは正しい事をしたんだ。だからゴームとミールはクリアに立ち向かってくれた」

フォルゴレはゴームの本を燃やせなかった事を申し訳なく思っていた。しかしキャンチョメがゴームと友達になろうとしてくれたお陰で彼等はクリアと決別する道を選んだ。その結果、クリアはロツキー山脈に不完全な強さのまま置き去りにされている。

「そうなの。ところで清磨……」

「分かっている。おい、隠れてないで出てきたらどうだ？」

ガツシユペアとゴームペアのやり取りを覗き見している者達がいる。ガツシユは自分の嗅覚で、清磨は【^{アンサー}答えを出す者^{カード}】でそれぞれ気付いていたが、敵では無かったのであえて黙っていた。

「にゅやあ、気付いていましたか」

森の木には殺せんせー・渚・茅野・カルマが隠れており、彼等は清磨の言葉に従って

姿を現した。

「高嶺君、今のつて死神に協力してた魔物だよね?」

「でも、かなりボロボロだったけど……」

「下半身が消し飛んでるつて……一体どんな魔物と戦えばこんな事に……」

ゴームペアは死神に手を貸していた為に彼等は良い印象が無かったが、先程の2人の様子を見て、さすがに同情の念を禁じ得ない。それと同時に、魔物の戦いの過酷さ及び相手の魔物の恐ろしさを容易に想像する事が可能だった。

「ゴームとミールは俺達が倒そうとしている魔物クリア・ノートと手を組んでいたが、キャンチョメのお陰で彼等はクリアに立ち向かってくれた……キャンチョメは魔界に帰ってしまったが……」

E組の生徒達はわかばパークでキャンチョメと面識があつた。全員がキャンチョメと親しくなつた訳では無いが、彼が魔界に帰つた事を聞いたカルマと茅野の表情は暗くなつた。渚はその話を事前に聞いていた為、2人程辛そうにはしていない。

「……君達をあまり危険に晒したくは無いのですが、魔界が滅ぶのなら見過ごせないですよね……」

ガツシユペアから事情を聞いている殺せんせーには、これから危険な戦い挑もうとする彼等を止める事は出来ない。しかし教師として彼等の命の危機を見過ごしたくは無

く、2人の力になれない自分の無力さに先生は苛まれる。

「ウヌ、私達はこの戦いに勝ち残らなくてはならない!」

「そうだな、俺達は奴を倒す為に特訓をしてきたからな!」

そんな殺せんせーを見て、ガツシユペアは強気な表情で言葉を返した。

「……ちなみに、その魔物と戦うのっていつ頃になりそうなの?」

「それは分からぬ。詳しい日には決まってはいいのだ」

「だが、ゴーム達がクリアをロッキー山脈に放置してくれている今はチャンスだ。決戦の日はそれ程遠くは無い」

カルマが戦いの日程を尋ねる。これに関してはデユフォーにも相談しなくてはならないが、近いうちに戦いが始まるのは明確だ。そんな2人の返答を聞いて、殺せんせーが再び口を開いた。

「日時が決まったら連絡を下さい、平日なら学校を休まなくてはならないでしょう」

「ああ、分かった!」

「了解なのだ!」

これまでガツシユペアは長期にわたる魔物の戦いで学校を休んだ時がある。そして今回も例外では無いだろう。しかし教師の立場でありながらも、殺せんせーは快くそれを了承してくれた。

「ただし条件が1つ、必ず無事に帰って来なさい。先生との、いいえ……E組の皆との約束です」

殺せんせーは穏やかな口調でそう言った。その言動からは2人を心配してくれる優しき及び、必ず約束を守る様にと言う強い意志を感じさせる。殺せんせーに続いて、渚とカルマも口を開く。

「絶対に勝つてきてね!」

「頑張つてよ……まあ2人なら大丈夫だつて思つてるけど」

2人はガツシユペアに激励の言葉をかける。ところがそんな彼等とは対照的に茅野は黙つたままである。そんな彼女の表情は暗くなる一方だ。

「……これでお別れとか、無いよね?もし、そんな事になっちゃったら……」

彼女は最悪のシナリオを想像していた。ガツシユペアの敗北及び魔界の滅亡、それはガツシユの死を意味する。また今回の戦いでは、魔物では無い清磨もどうなるかは分からない。彼等が無事に戻ってくる保証はどこにも無いのだ。しかし、

「カエデ、心配するでない!! 私達は必ずクリアを倒して戻ってくる!!それに私達には、頼れる仲間もおる!!」

顔色の優れない茅野に対してガツシユが言い放つ。彼等には仲間と共に戦いに勝つ以外の選択肢は無いのだから。そんな強気なガツシユを見た茅野の口角が少しだけ上

がる。

「……強いな、ガツシユ君は。今までも一直線に困難に挑んで、打ち勝ってきたんだもんね。絶対に帰ってきて！」

そして彼女はガツシユに近付いたのち、小指を差し出した。必ず戻ってくると言う約束の為の指切りだ。クラスの間が消されてしまうなど、あつてはならない事態である。

「ウヌ、約束なのだ!!」

それを見たガツシユも小指を差し出す。2人の小指を引つ掛け合い、お互いの腕を下に振る。これで彼等が無事に帰って来てくれる、茅野は指切りのおかげでそう思う事が出来た。その後、彼女はガツシユの頭に優しく手の平を乗せた。

「私も、応援してるからね！」

「ありがとうなのだ!!」

茅野が笑みを浮かべながらガツシユに言葉をかける。その様子を清磨達は微笑ましく見ていたが、カルマが茶々を入れる。

「茅野ちゃん、ガツシユ君ばかりに構っていると高嶺君が嫉妬しちゃうよ〜」

「今それを言うのか……」

「ははは」

このような場面でもカルマは冗談を挟んでくる。ガツシユペアの強い意志によって、そんな余裕が出来る程に場の雰囲気は軽くなっているのだ。そんな光景を見た渚は苦笑いをする。

「勿論高嶺君も無事に帰ってきてよね！」

「分かっている、ちゃんと戻って来るさ!!」

茅野は清磨にも言葉をかけた。言われるまでも無く、ガツシユペアには負けは許されない。清磨は強い意志を持って返答する。

「……さて、一先ず2人は大丈夫そうなので私は帰ります。日程の連絡の方だけよろしくお願いします！」

「ああ、了解した」

「殺せんせー、またなのだ！」

そう言い残して殺せんせーはその場を超スピードで去った。殺せんせーがいなくなった後、彼等も山を降りてそれぞれ帰路に着いた。

その日の夜、ガツシユペアはデュフォーと共にクリアとの戦いで作戦を立てていた。

「4日後にクリア討伐を決行だ。奴の身体は完全には治っていない、ゴーム達が作ってくれたこの時期を逃す手は無いからな」

クリアとの決戦の日程が決定した。当日までに特訓の最後の追い込みや作戦の準備及びイメージトレーニング、仲間との連絡を行い、確実にクリアを仕留められるようにする。このチャンスはゴームペアがクリアに立ち向かってくれたが故に生まれたものでもあり、クリアは異空間内で身を潜める事はもう出来ない。

「こつちが動けば、クリアも勝負をロツキー山脈にて受けて立つ考えだろうな。キャンチヨメ達の本を消した超長距離砲撃の対策は、多方向からの侵攻にて行う。お前達が乗る飛行機はおとり役となる」

敵の術は強力だ。遠距離からも容赦なく攻撃を行ってくる。その対策の為にも、誰かがクリアの攻撃を引きつける役にならなくてはならない。今回はガツシユペアとティオペアがそれを引き受ける。清麿の「アンサーカード答えを出す者」で「攻撃を避けられる答え」及び「攻撃を防ぐ答え」を出し、その指示に従ってティオの盾でクリアの攻撃を防ぐ手はずだ。その間にウマゴンとブラゴが自分の魔力を消してクリアに近付き、奇襲をかける。

「デュフオーも「アンサーカード答えを出す者」を持っているが、やはり一緒には来れぬのか？」

ガツシユが尋ねた。今のデュフオーは本の持ち主では無くなったが、彼の出す指示は的確だ。それなら戦場でも活躍出来るのではないかとガツシユは考えていたが、清麿が

それを否定する。

「ああ、残念ながら『足手まとい』だ。その力があってもパートナーではない人間は狙われる標的となってしまう」

清磨の話でデュフオーは無表情で聞く。彼もそれを自覚しており、反論する事はしなかった。敵の攻撃から自分の身を守る術を持たなければ、戦場に出る事は出来ない。

「最後にクリアだが、こいつの『完全体の力』は俺の能力でも明確な答えが出ない。そして超長距離砲撃とは別に、もう一つ『隠している力』を持っている。これが今のところ一番の気がかりだが、それに対処する指示も『予測』だがいくつか出した。頑張れよ、ゼオンの……いや、魔界に住む全ての魔物の未来を作ってくれ!!」

クリアの持つ未知なる力に対してもデュフオーは対策を立ててくれた。それだけではなく、彼はかつてのパートナーのゼオンのみならず、全ての魔物の身を案じてくれている。そんなデュフオーの懇願を聞いた2人は大きく頷く。そして今日の作戦会議は終了してガツシユペアが部屋に戻ろうとしたが、その前にデュフオーは再び口を開いた。

「今から4日間はクリア打倒に専念する事になる。この作戦については俺が他の皆に伝えておくから、お前達はあの超生物に連絡しておけ」

「……殺せんせーの事だな！分かったのだ！」

「ありがとう、デュフオー」

デュフオーはそう言い残して自分が借りている部屋に戻って行った。

『4日後ですか……随分急なですね』

「ああ、そして明日からも準備があるから学校を休ませて欲しいんだが……」
『……分かりました』

部屋に戻ったガツシユペアは早速殺せんせーに連絡を入れる。いきなり知らせで少し驚いた殺せんせーだったが、すぐにその事を了承してくれた。そして殺せんせーとの通話を終えたガツシユペアだったが、少しした後、清磨のスマホに律が出現する。

「高嶺さん、ガツシユさん……」

彼女もまた2人の身を案じており、心配そうな表情を浮かべる。彼女はガツシユペアが必死に特訓に励んでいる様子を時折スマホ越しに覗いており、今回のクリアとの戦いの詳細も分かっていた。倒すべき相手がかなりの強敵であることも。

「律、俺達は必ず帰って来る。そして皆で殺せんせー暗殺を成功させよう！」

「私も……でE組の皆と別れるつもりは無いぞ！だから大丈夫なのだ！」

ガツシユペアは強気な表情で言い放ったが、律から不安が消える事は無い。そして彼

女もまた、言葉を発した。

「2人が明日から学校を休む事は殺せんせーに言われてE組の皆さんに伝えておきました。そして皆さんからのメッセージを受け取りました、必ず無事に帰ってきて、応援してるから」と。そしてこれは私からのメッセージでもあります。私も友達を失いたくないのですので」

ガツシユペアが明日から学校を休む事は既にE組全体に広まっている。そしてE組一同は同じ事を考えていたようである、律を含めて。それを聞いたガツシユペアの口角が上がる。

「当然だ!!」

クラスメイトの応援を聞いて、彼等の心は高ぶった。自分達の為にこれだけ多くの者達が応援してくれているのだから。そんな2人を見て、ようやく律から不安の表情が消えた。彼女は機械でありながら、極めて感性豊かである。

その頃、殺せんせーは某国の豪邸の屋根にて寝る支度をしながら、ガツシユペアの身を案じていた。

「さて、そろそろ2人に律さんのメッセージが行き届いている頃でしょうかね。彼等は

非常に危険な戦いに臨もうとしている……助けに行きたいのは山々なのですが、他の生徒の為の授業もありますからね。それに、渚君の3者面談も」

殺せんせーの戦闘能力があれば魔物の戦いでも役立てる可能性はかなり高い。クリアノートと言えども、ノーリスクでマツハ20の速度を出せる超生物を相手取るのは容易では無いだろう。しかし殺せんせーは彼等の為だけに授業を放り出す訳にはいかない。それに、渚の母親との3者面談も控えている。渚が広海に自分の言いたい事を伝えた結果、3者面談を行う事になったのだ。

「こんな時、あなたならどうしますかね……」

雪村先生」

雪村先生、殺せんせーが柵ヶ丘に来る前にE組の担任だった女性である。彼女のお陰で殺せんせーはE組で先生をやる事になったのだが、2人の関係が明かされるのは先の話だ。

クリアとの戦いの当日、ガツシユペアとテイオペアは出発の為に空港に来ていた。ナゾナゾ博士とアポロが手配してくれたジェット機にてロッキー山脈に向かい、クリアを

倒す。その為の空路も2人が準備してくれた。そして空港にはナゾナゾ博士とアポロだけでなく、アシユロンのパートナーであるリーンも見送りに来てくれている。

「では、行ってくるのだ」

「頼んだぞ。今回の戦いは今まで共に戦った仲間にも連絡をしておいた。全ての者がお主達の勝利を願っておる。そしてこの決戦は知らずとも、かつてパートナーであった魔物の身を案ずる者は多い。どうか……頼む……」

ナゾナゾ博士が代表して激励の言葉を述べてくれたが、彼もまたかつてのパートナーのキッドの事を大切に思っている。それはアポロ及びリーンも同様だ。魔界のみならず、そのパートナー達の思いに応える為にも、清磨達は勝たなくてはならない。

「行つてきます。そして……必ず勝利して帰つてきます」

恵が姿勢を整えて強気に言い放った。彼女の言葉こそが、クリアとの戦いに挑む者達の総意である。そして彼等はジェット機に乗り込んだ。魔界の滅亡をかけた激戦が今始まる。

LEVEL. 57 仲間の時間

余談ではあるが、清磨達の乗るジェット機のパイロットは「マジョステイック12」の司令塔のテレパシス・リーダーとビッグ・ボインが務める。一行はロッキー山脈を目指す。飛行機内の空気が重い。

「作戦の事は聞いてたけど、私達っておとりなのよね……」

特にテイオの顔色が明らかに優れない。先日ので吹っ切れたように思われたが、完全に不安を払拭するには至らなかった。そんな彼女の前にガツシュが歩み寄り、その両手を自分の手で握る。

「テイオ、そんな顔をするでない!!この場面はお主の盾が鍵になるのだ!!それに皆もついておるぞ!!」

いきなりガツシュに手を握られたテイオは困惑する。自分を励ましてくれているのは分かるが、彼女は顔を真っ赤にして狼狽する。

「え……ちよつと……いきなり……」

「ウヌ、どうかしたかの?」

しかしガツシュには、テイオが何故このような反応を見せるのかが分かっていない。

そんな光景を清麿と恵が暖かい目で見ている。そしてガツシユの言動に対してついにテイオが限界に達して、彼の手を振りほどいた。

「急に手を握らないでよ!!ビツクリするじゃない!!……分かってるわよ、やれば良いんでしょ!!」

「そんな、怒らずとも……」

テイオの心から不安が消えた瞬間だ。彼女は顔を赤くしながら言い放ったが、ガツシユにはそれが怒っている様にはしか見えない。仲の良い2人だ。清麿と恵も相変わらずそんな彼等を見守る。

それから少しした後、ガツシユが何かを感知した。

「来る、クリアの術が来るのだ!!だがこれは……キャンチョメ達を襲った術ではない!!飛んでいるそのものに“意志”を感じるのだ!!」

ガツシユの魔力を感じたクリアが術を発動させた。その名は“シン・クリア・セウノウス・バードレルゴ”。牙の生えたくちばしと大きな腕を持つ巨大な鳥の骨のような姿をした術であり、術自体が意志を持つ。残り4〜50分程で飛行機と接触してしまう為、清麿は「^{アンサー}答えを出す者」にてその対処法を考える。

その頃、アメリカ合衆国の某州には数日前から烏間先生が出張で訪れている。先生は出張先に向かう為に徒歩で街を歩いていたが、上空を何かが超スピードで通り抜けていく感覚に襲われた。

（今のは何だ？まさかあのタコが抜け出して……いや、それにしても嫌な感じがする。そういえば今日まで高嶺君とガツシユ君が休みを取っていたな、魔界を滅ぼす魔物との戦いの為に。それと関係があるのか……）

烏間先生が感じた物こそバードレルゴである。彼もまたE組にて非日常的な体験をしており、超スピードで飛び回るクリアの術からにじみ出る何かを感じ取れた。

（胸騒ぎがする。2人共、無事に帰ってきてくれよ!!）

他のE組の面々と同様に、烏間先生もまたガツシユペアの身を案じる。

バードレルゴ発進より48分後、ガツシユペアは術が間もなく飛行機に衝突する事を感じ取る。ガツシユは魔力感知で、清磨は「アンサー答えを出す者」でそれに気付き、清磨はティオペアに術を出させる合図をした。

「今だ!!」

「チャージル・セシルドン!!」

巨大な盾が飛行機の前に出現し、バードレルゴと衝突した。ティオの盾もシン級の術を受け止められる程に強くなっているがクリアの術はまだ生きている。その術が体制を立て直すと盾を自らの両腕で掴み、飛行機を落とそうとする。いきなり絶体絶命かと思われたその時、何者かがバードレルゴを弾き飛ばした。

「何が起こったの?!」

「この魔力は……」

「来てくれたんだ……ウマゴン!!そして、サンビームさん!!」

バードレルゴを弾き飛ばしたのは新たな術の“シン・シユドルク”によって体が通常の何倍にも大きくなり、巨大な角とブースターの付いた強力な鎧によって空中を動けるようになったウマゴンだ。サンビームはウマゴンに乗りながら指示を出していたが、彼は空中にも関わらずウマゴンから飛び跳ねる。

「え、サンビームさん大丈夫なの?!」

「ウマゴンと心が通じ合っているから問題ない!!完璧なコンビネーションだ!!」

これ程リスクの高い行動が出来るのは、ウマゴンペアがお互いを信用しきっている為だ。飛行機の中で見ていた恵は驚いたが、清麿はこのペアなら大丈夫だという答えを出す。

「グル!!グル!!グル!!グル!!」

一方空中ではサンビームの掛け声に合わせてウマゴンは超スピードでバードレルゴに攻撃を仕掛ける。ウマゴンは小回りを利かせて動き回る事で、バードレルゴの反撃を許さない。日本でこの術を使った時は満足に使いこなせていなかったが、今はクリアの最大級の術相手に優位に立ち回れる程にウマゴンペアは成長していた。

「グルービービー!!!」

ウマゴンの強力な一撃は、バードレルゴを海の水面に突き落とす。それでもウマゴンは攻撃を辞めようとせず、バードレルゴの尾に噛みついて持ち上げる。

「AAAA!!RO!!CKUU!!NNNN!!ROOOOLL!!」

サンビームの叫びに合わせて、ウマゴンはバードレルゴを岩石海岸に叩き付けた。彼のシン級の術により、スピードだけでなくパワーも強大な物になっている。そしてウマゴンは完璧なコンビネーションによって空から降りるサンビームを自分の背中に乗せた後、飛行機に乗る清麿達と目を合わせる。

「バアアアア!!!」

しかしバードレルゴはまだ動きを止めない。クリアの意志を感じ取って本気で敵を消しにかかろうとしている。ウマゴンペアはそれに立ち向かおうとしたが、ガツシユペアは冷や汗を掻く。

「清麿、あれは!!!」

「いかん！今の奴は消滅の力を纏っている、それもウマゴンのシン級の鎧をも消してしまいう程に強力だ!!」

清麿達は飛行機の中でウマゴンペアを見守りながら、彼等がその事に気付くのを祈る。この距離では直接伝える事も出来ない。しかし、そんな彼等の思いを感じ取ったかのようにウマゴンはバードレルゴと接触する寸前で避ける。しかし完全にかわし切る事は出来ない。ウマゴンの角と鎧の一部は消滅する。その後も彼等はクリアの術から逃げ続けるが、ティオペアがウマゴンの異変に気付いた。

「今は何とか逃げられてるけど、これってマズいんじゃない……」

「ウマゴンの体がボロボロになってるわ」

シン・シウドルクは強力な術だが、術者にかかる負担が非常に大きい。このままではウマゴンの命にも関わってしまう。それに比べてバードレルゴは強大な消滅の力を纏う事で自らの体が朽ちてきているが、体が失われる程にその速度は増す。このままウマゴンペアが逃げ切れればバードレルゴは消えてなくなるが、それは容易な事では無い。

「ウマゴンとサンビーム殿、頑張るのだ!!」

「ガツシュ!!何時でもウマゴン達を助けられるように、絶対に目を離すなよ!!」

「ウヌ!!」

ガツシュ達がウマゴンペアを応援する中、清麿は彼等を援護出来る最善のタイミング

を見計らう。そんな中で術の副作用に苦しめられるウマゴンペアは絶体絶命と言っても差し支えない状況だが、ここで彼等の特訓の成果が活かされる。それは、アフリカで野生を経験した事によって手に入れた“生”への執念。そのお陰でウマゴンは限界を超えたエネルギーが体中にめぐらされる。そして見事にバードレルゴから逃げ切ったと思われた。しかし、

「清磨!!」

「……ガツシユ、外に出るぞ!!」

首だけになったバードレルゴが最大限の速度でウマゴンペアに食らいつこうとする。このままでは彼等に逃げ道は無い。しかし清磨はそんな彼等に道を作る為の答えを出し、ガツシユのマントに乗って飛行機の外に出る。

「ウマゴン!!」

「ジオウ・レンズ・ザケルガ!!」

ガツシユペアが電撃の鱗を持つ蛇を召喚する。そしてバードレルゴの首に穴をあける為にそれをぶつける。術を発動させた場所はウマゴンペアから離れていたが、ガツシユの声にウマゴンは気付く。そしてウマゴンはガツシユの術の巻き添えを喰らわないうように鎧を自分達を包む流線形に変形させる。その後、ガツシユペアの作った道に一直線に出て、無事にクリアの術から生き延びた。

バードレルゴ消滅後にウマゴンペアもまた飛行機に乗り込み、ウマゴンはテイオのサイフォジオのよって元氣を取り戻す事が出来た。しかし先程の戦いで飛行機のエンジンが一機止まってしまふ。よって次の攻撃に耐えられる保証が無くなった為、ウマゴンがシン・シユドルクを使用し、清麿達を乗せてロッキーマウンテン山脈に向かう事となる。

「皆!!これよりクリアの砲撃空域に入る!!ウマゴンの速さとテイオの盾、持てる力を全て出して突破するぞ!!」

清麿の掛け声と共に、全員が気合を入れ直す。彼等とクリアの距離が縮まった為、クリアは超長距離砲で清麿達を狙う事が可能となる。この術、シン・クリア・セウノウス・ザレフェドローラもまた意思のある術で、クリアが消滅波を放出する砲台とその砲撃手及びクリアが狙いを定める為のヘッドギアを召喚する。その精度は正確無比で、狙った獲物は逃さずに確実に消滅波で滅ぼす。

「ウマゴン!!鎧を変形させて、皆の体をホールドするんだ!!」

「メル!!」

サンビームが指示を出す、ウマゴンの鎧が清麿達の足に絡みつき、そのまま彼等を固定させた。その後清麿が術を出すタイミングをテイオペアに指示しようとしたが、恵

は砲撃の弾数と方向の大まかな指示のみで大丈夫だと断言した。彼女達も特訓を積み重ねており、完璧なコンビネーションでクリアの攻撃を防ごうとする。そして、

「来るぞ、前方正面の斜め上からー発!!」

清磨の言う通りにクリアの砲撃が近付いてきたが、ティオペアはそれを恐れない。彼女達は共に特訓を乗り越えた事で、お互いの息はピッタリだ。

「チャージル・セシルドン!!」

ティオペアはそれぞれ盾の名前を叫ぶ。術を出すタイミング、盾の角度、砲撃の勢いの殺し方及び消し方、全てが完璧だ。その後もクリアの砲撃は何発も彼等を襲うが、ティオペアは見事にそれを防いで見せる。

（私の力で、皆を守るんだ!!）

しかしクリアの砲撃も苛烈になる。弾数が増えてきているのだ。いかにチャージル・セシルドンが強くても、盾一つで防げる攻撃には限界がある。ところが、

「リマ・チャージル・セシルドン!!」

恵が新たな呪文を唱えた。この術は2つのチャージル・セシルドンを出現させて、ティオペアがそれぞれ片手で盾を操る。これならより多くの攻撃を同時に防ぐ事が出来る。しかし片手で相手の攻撃を受け止める事になる為、ティオペアの負担もかなり大きい。実際に彼女の両腕にはダメージが蓄積されている。

「テイオ、大丈夫かの?」

テイオの腕の怪我にガツシユが気付く。彼女のダメージが大きくなってもクリアの砲撃が止む事は無い。しかしテイオは強気な態度は崩さない。

「大丈夫よ!!それより恵、砲撃は私達で全てはね返す!!良いわね!」

「はい!!」

「クリアに辿り着くまでガツシユには傷一つ負わせない!!ガツシユには、私達の明日を作ってもらうんだから!!」

テイオはキャンチョメの本が燃やされた事で不安と恐怖に飲まれかかっていたが、ガツシユのお陰で明日への希望を取り戻す事が出来た。ガツシユなら魔界を救ってくれる、彼女はそう確信している。そして彼等は陸に辿り着く。

その頃E組では通常通り授業が行われていたが、生徒一同どこか上の空で、あまり集中出来ない。

「皆さん、心配なのは分かりますが今は授業に集中して下さい」

彼等はガツシユペアの身を案じており、更に放課後には渚の3者面談が控えている。広海が渚をE組から抜けさせる為に3者面談を希望したのだ。ガツシユペアが無事に

帰ってきてくれるのかという心配及び渚がE組を抜けてしまうのではという不安で、内心授業どころではない。しかし、

「殺せんせー、その板書間違ってますよ」

「にゅやっ!!」

「先生こそ、間違い多くない?」

「かたじけない……」

磯貝が殺せんせーのミスを指摘する。しかも倉橋が言うように1度や2度ではない。心配事で授業に専念出来ないのは、殺せんせーも同じだ。

(高嶺君とガツシユ君、大丈夫かな?それに、僕の親の事も……)

渚もまた今後の事を考えて顔を暗くする。今日のE組の空気はいつもより重い。

場面は清麿達に戻る。彼等は無事に陸まで到着出来たが、何とザレフエドーラの砲身がそのまま射出された。至近距離からの射出による消滅波の威力は計り知れず、ガツシユペアがバオウ・ザケルガを発動させようとしたが、ティオがそれを止める。

「バオウだと砕かれた消滅波が下にいる人達に行くかも知れない、それは絶対にダメ!!」
清麿達が陸に辿り着いてからは、クリアは一般人も巻き添えにしかねないような砲撃

を放つ。しかし魔物の戦いで無関係な人々が傷付く事は、彼等にとつては許されない。また、テイオが自分で攻撃を受け止めようとした理由はもう一つある。

「ガツシユと清磨には、万全の状態でクリアの元に行つて欲しいの」

クリア程の強敵が相手なら、完璧なコンディションで戦いに向かわなければ勝負にならない。テイオはそれが分かつており、ガツシユペアを万全な状態で辿り着かせたかつた。

「恵!!!」

「はい!!チャージル・セシルドン」

テイオペアは盾を発動させたが、この規模の術をまともに受け止めればテイオ自身もただでは済まない。清磨達もそれを理解しており、全員が苦虫を噛み潰したような顔をする。そしてクリアの砲身がテイオの盾に接触し、超強力かつ超広範囲な消滅波が放たれた。

（恵、清磨、ガツシユ、ウマゴン……皆と楽しく過ごせる明日をガツシユが作ってくれたから!!だから私も……）

クリアの攻撃と最強の盾とのせめぎ合いは壮絶だ。衝撃まで完全に抑える事は叶わない。しかしテイオの守りたい心が最大限に発揮されたチャージル・セシルドンは、見事にクリアの攻撃を防ぎ切る。その後、彼女の意識は途切れた。

ティオが目を覚ますと体は地上についており、涙を流す清麿達に自分が取り囲まれていた。また恵が大声で彼女の名前を泣き叫んでいるのを聞いて、自分の本が燃えた事を察した。

「(皆、無事だ……) 恵……あり、がと……」

「ティオ!! ティオ!!」

「そんなに泣かなくても大丈夫よ……後はガツシユ達に任せれば……」

顔が崩れる程に泣きわめく恵とは対照的に、自らの本が燃えたのにも関わらずティオは落ち着気を見せる。それどころか皆を守りきれた事やパートナーにお礼を言えた事で、安堵の表情をする。

(皆と別れるのは確かに寂しい……でも……)

そんなティオも寂しいと思う気持ちはあった。しかしそれ以上に彼女は安心していった。ここで自分が倒れてもガツシユが戦いに勝って新しい明日を作ってくれるのだからと、彼女は確信している。だからティオは別れる寂しさはあっても不安の感情は持ち合わせていない。

「ガツシユ、今までありがとう……後はお願いね……」

「分かっておる!!クリアは必ず倒すのだ!!」

テイオの意志はガツシュに引き継がれる。ガツシュは涙を流しながらも宣言する、魔界は自分が守ると。

「ガツシュ、じゃあね……また、明日」

「ウヌ!!また明日なのだ!!」

“また明日”、テイオは再びその言葉を口にする事が出来た。仲間たちは大粒の涙を流しているが彼女には不安の気持ちは無く、安らかな顔で魔界へ帰って行った。

テイオが魔界へ帰って少しした後、ガツシュがザレフェドラーの力が消失した事に気付く。術の本体が清麿達目掛けて発射されようとしたが、ブラゴのシン級の術がそれを阻止したのだ。

「急ぐぞ、清麿!!」

「ああ!!」

ガツシュペアは前に進もうとした。テイオは魔界へ帰り、ウマゴンは術の反動で体がボロボロ。もう自分達しかブラゴペアと共にクリアと戦う事が出来ないのだから。しかし、

「メル、メルメルメ……!!」

「2人共ウマゴンに乗ってくれ!!私の心の力では“ゴウ・シユドルク”が限界だが、それ

でもガツシユが清磨を背負うよりも何倍も速く走れる!!今は少しでも早くブラゴ達の下に駆け付けなければならぬ!!違つか!!」

サンビームは呪文を唱える。今ブラゴ達と共にクリアを倒せなくては、魔界を救うチャンスは2度と訪れない。ウマゴンが満身創痍であっても、彼に乘せてもらおう方がブラゴペアと共にクリアを倒せる確率は上がる。ガツシユペアには迷う時間すらない。そして2人はウマゴンの背中に乗り、クリアの元に向かう。

彼等はブラゴペアの応援に向かうが、ウマゴンの体が崩れ始めた。『シン』の術の反動が非常に大きく、本来は動ける状態ですら無かったのだ。

「ウマゴン……お主とは魔界の王の座をかけて、正々堂々と戦いたかった……」

ガツシユの願い、共に魔界の王を目指す為に死力を尽くしてせめぎ合う。しかしその願望は、クリアの手によって潰された。彼はそれが非常に悔しかったが、その思いを察したウマゴンは笑みを見せる。そして一層出力を上げて、クリアの元へと走る。

「メルメルメ〜!!」

ウマゴンはガツシユとの過去を思い出す。彼はかつて、自分の上に他の魔物が乗る事が気に食わなかった。そんな彼の事などお構いなくガツシユはウマゴンと友達になる

うとするが、当然それは拒絶される。ある日、ウマゴンの父親が毒蛇にかまれた。薬を買う必要があるが、ウマゴンは言葉を話せない。しかし偶々近くにいたガツシユが事情をウマゴンの父親から聞いて、共に薬を買いに行ってくれる事になった。自分が散々拒絶してきたガツシユは迷う事なく手を貸してくれた。それを機にウマゴンはガツシユと仲良くなり、誰かを背中に乗せる喜びを感じる事が出来た。

ガツシユペアとウマゴンがクリアの元に駆け付ける一方で、サンビームは本からウマゴンの体が限界まで来ている事を感じ取る。そして彼は恵に頼んでウマゴンの本を燃やしてもらう。

「スマン、ウマゴン……よく頑張った……」

サンビームも恵も涙を流しながらの決断だ。しかしサンビームは悲しい気持ち以上に、ウマゴンがここまでやり遂げた事を誇らしく感じていた。

ウマゴンは体が透けながらもガツシユペアを乗せて走り続ける、自分の母親の言葉を感じ出しながら。もし魔界の王様になれなくても、本当に助けたいと思える人を助け

られたら、それは王様になるよりも幸せな事だ」と。今の彼はそれを実現出来ている。だから体中が激痛を襲おうとも、ウマゴンが笑みを絶やす事は無い。

「ウマゴン……ウマゴーン!!」

ガツシユの叫びと共にウマゴンは魔界へ帰って行く。2人は涙を流すが、足を止める時間は無い。テイオとウマゴンがここまで頑張ってくれたお陰で、ガツシユペアは万全な状態でクリアの元に辿り着ける。彼等の為にも、進むしかないのだ。

「乗るのだ、清磨!!」

ガツシユがマントを広げる。それに清磨が乗ろうとしたその時、彼等の隣を風が走る。そこには、本来いるはずのない者がいた。

「な……どうして……」

その存在を見たガツシユペアは言葉を失う。嬉しいとかそのような気持ちよりも、驚きの感情が彼等を襲った。そして目の前にいるその者は口を開く。

「来るのが遅くなったのは申し訳ありません。ここからは私も力を貸します。

「マツハ20」の速度ですぐに君達を目的地に連れて行きます、乗りなさい
「殺せんせー!!!」

彼等の元には、今も校舎で授業を行っているはずの暗殺対象が現れた。

LEVEL. 58 激闘の時間

時は少し遡る。桐ヶ丘での昼休み、生徒達の話題はガツシユペアの事で持ち切りだ。

「皆さん。2人が心配なのは分かりますが、しっかりと昼ご飯を食べて午後の授業に備えましょう」

殺せんせーはそう言うが、誰も昼食に手を付けようとはしない。全員がガツシユペアの事が気がかりで、昼食がのどを通る心境ではない。そんな時、

「ねえタコ、アンタがガツシユ達のところに行つて来てあげれば良いんじゃないの？」

「[[[[[!]]]]」

ビツチ先生が驚くべき発言をする。彼女の主張はこうだ。今は烏間先生及び部下達が出張でない状態で、E組及び殺せんせーの事はビツチ先生に一任されている。さらに昼休み明けからは彼女の授業であり、それが終わるまでに殺せんせーが戻つてこれば問題ない。仮に間に合わなくても、多少の授業の遅れなど殺せんせーならすぐに取り戻す事が可能だ。それに今は生徒達も集中出来る状態では無い為、このまま漫然と授業を行うよりも合理的であると。

「3者面談にしたって、アンタが間に合わない場合は私が引き受ければ問題ない。カラ

スマがない以上、アンタが変装するかの2択だからね」

ビッチ先生の提案を聞いた殺せんせーは生徒達の方を見る。いくら2人が心配であるとは言え、他の生徒達を放置して良いのかと疑問を抱く殺せんせーだったが、生徒全員が先生を見て頷いてくれた。

「殺せんせー、行つて下さい！」

「これは私達の総意です！」

クラス委員の磯貝と片岡の言葉に他の生徒も賛同する。早くガツシユペアの助けに向かつて欲しい、ここで2人とは別れたくないのだと。それを見た殺せんせーの口元がいつも以上にニヤけた。先生も2人のところに向かいたい様子だ。

「皆さん、ありがとうございます！ではイリーナ先生、私がない間、よろしくお願いします！」

そう言つて殺せんせーはマツハ20でロッキーマウンテン山脈に向かった。先生の嗅覚があれば、ガツシユペアを探す事も難しくくない。殺せんせーが2人の助太刀に向かったことにより、クラス内では一気に安心感が広まった。

「ビッチ先生、良いこと言うね〜」

「別に、今の教室の雰囲気は耐え切れなくなっただけよ（これでデパートに付き合つてもらった借りは返したわ。2人共、戻つて来なかつたら承知しないから）」

倉橋に褒められた事に対して、ビッチ先生は少し顔を赤くした。口には出さないが、内心では彼女も2人の事を心配している。しかしその事を他の生徒達にもからかわれてしまう。また渚の3者面談をビッチ先生が行う場合に備えて模擬練習が行われたが、ビッチ先生がディーピキスの事を口走り、渚の母親役を演じた片岡の逆鱗に触れたのは別の話だ。

時は戻る。ガツシユペアは殺せんせーに乗ってクリアの元に向かう。少しでも早くブラゴペアと合流して、共に敵を倒す為に。

「相変わらずの速さだな、これならすぐに辿り着ける!!」

「ウヌ!!ありがたいのだ、殺せんせー!!」

「ええ、皆さん君達を心配していますからねえ!生徒が命を懸けなくてはならない場面なら、私も同じに命を懸けます!!」

殺せんせーの言葉は大袈裟などではない。自分達の命を懸けて魔界を守ろうとしているガツシユペアを見て、自らも文字通りそうしようとしているのだ。生徒達のリスクを軽減させる為に。彼等は何としてもこの戦いを勝ち残らなくてはならない。そして、「待った、殺せんせー!!」

清麿の掛け声で殺せんせーが止まる。ここから離れた場所で、クリアがブラゴ目掛けて呪文を發動させていた。彼等の戦いは既に始まっている。クリアの呪文「アンサーディオガ・ランズ・ラデイス」は消滅の力を纏った巨大な槍だが、清麿は「アンサーディオガ」にてこの術の相殺はバオウ・ザケルガが最適であると答えを出していた。「ディオガ」の名前は付いているが、この術の威力はガツシユペアの最大呪文で相殺しなくてはならない程に強力だ。

「バオウ・ザケルガー!!」

ガツシユの口から巨大な電撃の龍が放たれ、消滅の槍を喰らいつくした後にそれは消える。クリアの術を見事に打ち破ったガツシユペアだったが、2人を乗せている殺せんせーが明らかに動揺していた。

「ちよつと待つてくださいい2人共……こんな術を持つてるなんて、先生聞いてませんよ……あんなのモロに喰らったら……」

初めてバオウ・ザケルガを目の当たりにして、その威力に驚いている様子だ。殺せんせーの再生能力を以てしても、この術をまともに喰らえばただでは済まない。顔を青くしながらテンパる殺せんせーをガツシユペアは何とも言えない表情で見つめていたが、ここまで力を貸しに来てくれた先生に対して強くは突っ込めない。

「い、殺せんせー……」

「は、つい……」

清麿に声をかけられた殺せんせーがようやく落ち着きを取り戻す。

そして先生は2人を乗せてブラゴの後ろの少し離れた所に辿り着いた。

「よお、遅かったじゃねーか!!ガツシユ!!清麿!!」

クリアとブラゴの戦いは明確にブラゴが劣勢だったが、彼はガツシユペアの到着まで力をセーブして戦っていた。クリアを倒す為の共闘を最優先する為に、敵を片付けるチャンス伺っていたのだ。そして彼等は到着したのだが、

「……誰だ!!」

ブラゴペアは殺せんせーを見て驚愕する。魔物とは無関係にも関わらず、その超生物の容姿はあまりにも現実離れしているので無理もない。

(なるほど、死神が殺したがっていた超生物も来たか。だが関係ない、邪魔者はまとめて消し去るのみ)

一方でクリアは死神から殺せんせーの情報を得ており、それほど驚きを見せなかった。

「高嶺君とガツシユ君の先生ですよ。生徒の危機には教師は力を貸すものです!!」

「2人共!!説明している暇はないが、殺せんせーは俺達の味方だ!!」

清磨の言葉を聞いて、ブラゴペアはそれに納得するように頷く。彼等は全面的に清磨を信用しているのだ。

「なら、助太刀をお願いしようかしらね」

「勿論です、美しいお嬢さん!」

「な……」

殺せんせーは軽口をたたきながら超スピードでクリアに突っ込み、その周りをマッハ200の速度で飛び回る。殺せんせーは事前に清磨から、〃自分達には構わずにクリアを攪乱してくれ〃と指示を受けていた。つまり清磨は殺せんせーにおとり役を頼む事になるが、先生ならそれを無事にやれるという信用でもあった。殺せんせーはそれを分かった上で承諾してくれたのだ。ちなみに殺せんせーの言葉を聞いたブラゴペアは複雑な心境になる。

(この超生物、アシユロンのシンとどちらが速いか。動きが変則的だな、完全に見切るのは容易では無いが……)

「ラージア・ラデイス!!」

「にゅやつ!!」

ヴィノーが呪文を唱えると、クリアの周りから広範囲の消滅波が放出される。並の敵

ならこれだけで避ける事も叶わずに跡形もなくなりかねない。しかし、殺せんせーは見事に攻撃の範囲外に逃れる。そして消滅波の放出が終わると、ガツシユとブラゴがクリアを挟み撃ちにした。

(やはりあの超生物はおとりか……)

しかしクリアには動揺する様子が無い。2人の攻撃を真正面から受けるつもりだ。

「テオザケル!!」

「ザング・マレイス!!」

「バ・スプリフォ!!」

広範囲の電撃と重力の刃がクリア目掛けて放たれる。どちらも中級呪文以上の威力のある術だが、クリアの術にかき消されてしまった。クリアの術は大きく分けて物体を消滅させるラデイス系と、呪文を消滅させるスプリフォ系の2つに分けられ、どちらも非常に強力だ。そしてクリアが呪文を出し終えたと同時に上空にいる殺せんせーも触手で攻撃を仕掛けようとするが、

「バ・ランズ・ラデイス!!」

クリアの全身から複数の消滅の槍が放たれる。ガツシユはマントで防ぐことで直撃は免れる。ブラゴと殺せんせーも少しかすったが、それ程のダメージは受けていない。しかし彼等はクリアと距離を取らされる。近づく事すら難儀だ。

「少しは期待したのだが……まさか、この程度ではあるまいな？」

クリアは修行を積んできたガツシユ及びブラゴ、そして助太刀に來た殺せんせーを相手にしてもなお、余裕の態度を崩さない。実際にクリアは、彼等相手にまともなダメージを受けていない。しかしガツシユ・ブラゴ・殺せんせーの目には闘志が宿っている。そしてガツシユは多くの者に魔界の未来を託されてきた事を思い出す。

「清磨!!」

ガツシユが叫ぶ。これが彼等の実力な訳が無い。ここからが本当の勝負所だ。

「ブラゴ!!シエリー!!」

清磨が2人の名前を呼びながらハンドサインを出す。ブラゴペアはそれを見て即座に次に何をすべきかを理解する。そしてガツシユとブラゴが再びクリアを挟み撃ちにした。

「アム・ド……」

それを見たヴィノーが呪文を消滅させる術を出そうとしたが、それは失敗に終わる。ヴィノーを覆うバリアを、殺せんせーの触手が掴んでいた。

「ヌルフフフ。君には少しの間、目を回してもらいます!」

「うわああああ!!」

殺せんせーはバリアごとヴィノーを振り回す。これではヴィノーも満足に呪文を唱

える事が出来ない。クリアは呪文無しでガツシユとブラゴを相手取らなくてはならなくなる。

「おのれ!!」

「ニューボルツ・マ・グラビレイ!! (あの超生物のお陰で、呪文を唱える事に専念出来るわ)」

ブラゴが重力の球を出現させると、クリアはそこに吸い寄せられて身動きが取れなくなった。強大な重力は動きを封じるのみならず、クリアの体にダメージを蓄積させる。呪文が使えないクリアがこの重力から逃れるのは容易では無い。

「エクセレス・ザケルガ!!」

ガツシユから巨大な電撃の光線が放たれた。それはブラゴの術の重力に吸い寄せられ、クリアを襲う。

「ぐああああ!!」

電撃を避ける事も防ぐ事も出来ず、クリアはそれをまともに喰らった。クリアが攻撃を受けた瞬間、清磨が再びシェリーにハンドサインと掛け声にて指示を出す。そしてシェリーは次に何をすべきかを即座に判断し、今出している術を解いた。

「ディオガ・グラビドン!!」

先程とは異なる大きな重力球がブラゴから放たれ、電撃を真正面から受けているクリ

アの背中にそれはぶつけられる。クリアは、ディオガ級以上の術2つを同時に喰らい、ダメージを受ける。通常のディオガ級の術であれば気にはならないが、ガツシユもブラゴも特訓で力を付けており、術の威力も大幅に増していた。

「ぐう、バカな……」

呪文が使えないクリアは、ガツシユとブラゴのコンビネーションを相手にハッキリ劣勢だ。このまま畳みかけたいところであるが、殺せんせーがヴィノーを解放していた。「これ以上振り回すとこの子の脳に影響が出かねません」

彼等の目的は魔界の滅亡の阻止であり、クリアやヴィノーの命を奪う事では無い。よってこれ以上ヴィノーを振り回す事で彼女の平衡器官に影響を及ぼす展開は避けたい。殺せんせーはヴィノーを解放した後、クリアに触手で攻撃を仕掛ける。

「小賢しい真似を!!」

「リア・ウルク!!」

「にゅやツ!これをかわすとは……」

触手の一撃は、紙一重でクリアに避けられる。殺せんせーは触手で追撃を仕掛けるが、これも見切られる。殺せんせーの超スピードに対し、クリアは自らも速度強化の呪文を使用する事でスピード勝負を繰り広げる。その時、

「アム・グラナグル!!」

重力によって強化されたブラゴの腕による打撃が、クリアを襲う。しかし、クリアはこの一撃もかわして見せた。殺せんせーの方に意識が向かっていても、ブラゴへの警戒は怠らない。今のクリアの隙を付くのは容易では無い。

「バ・ランズ・ラデイス!!」

クリアの全身から再び消滅の槍が放たれる。殺せんせーとブラゴはギリギリでこれをおかす。しかしクリアは、ある事に気付いた。

(待て、ガツシユは何処だ!!)

彼の視界からガツシユが消えている。クリアは決して警戒を緩めていない。しかし殺せんせーとブラゴと言う強敵2人を同時に相手取る事で、ガツシユへの注意がほんの少しだけ逸れた。今のガツシユは魔物であると同時に暗殺者である。暗殺者相手に注意を逸らす事は命取りだ。ガツシユはクリアの後ろに潜伏していた。

(バカな、いつの間に!!)

クリアが後ろを振り向いてガツシユの存在に気付くが、手遅れだ。呪文を唱えるヴィノーがガツシユの存在に気付いていない。よってクリアは呪文無しに懷まで飛び込んできたガツシユを相手取らなくてはならない。

「ラウザルク!! ナイブス・ザケルガ!!」

「うおおおお!!」

清麿が呪文を唱えると、ガツシユの右腕に電撃のナイフが握られる。それと同時にガツシユの猛攻がクリアを襲う。鍛え抜かれた電撃のナイフは、クリアの纏う鎧をも切り裂いてゆく。

「ぐああああ!!」

クリアはナイフによる斬撃を喰らい、悲鳴を上げる。そして清麿はガツシユに指示を出しながら、ロヴロの助言を思い出す。

『君達は存在感が強すぎる』

清麿はかつて、その言葉に対する答えを半分しか出せていなかった。しかし今は違う。離島の時の答えは、〃自分達の存在感で、他の攻撃を悟らせないようにする〃事。そして今は、〃自分達よりも強い存在感に紛れて攻撃を行う〃というもう半分の答えを出したのだ。

(ようやくロヴロさんの言葉を全て活かす事が出来た!!後はクリアを追い詰め、倒す!!)
ガツシユの攻撃をクリアはまともに受けるしかない。クリアは他の魔物を感じする能力に長けているが、それでもなおガツシユを見失った。殺せんせーとブラゴの存在感も大きい、ガツシユは特訓で自分の魔力を抑える事を身に付け、戦いの最中にそれを行い、姿を消したのだ。

「何だ、コイツ等の攻撃は……」

ガツシユペアがクリアを追い詰める様子にブラゴは違和感を感じる。これまでとは何かが違うと。その隣では殺せんせーが顔に○を浮かべる。

「この攻撃はまるで……」

「そう、暗殺です!! 2人共、素晴らしい!!」

シエリーの言葉を殺せんせーが遮る。相手の隙を付いて、隠された刃で攻撃する。ガツシユペアは日々の暗殺生活での経験をも実戦に取り入れていた。言葉をブツ切りにされたシエリーは不快な表情を殺せんせーに向けるが、先生はそれに気付かない。

「(この攻撃は、その超生物が関係しているのか?! だが今は……) シエリー!!」

「デイゴウ・グラビルク!!」

ブラゴの掛け声と共にシエリーが呪文を唱える。そしてブラゴの全身は強化され、彼もクリアへの攻撃に加わろうとする。しかし、

「バ・スプリフォ!!」

ヴィノーがようやくガツシユの存在に気づき、術を消し去る呪文を唱える。そしてガツシユの電撃のナイフとクリアに流れるガツシユの電撃は一瞬にして消え去った。

「テオラデイス!!」

ガツシユとブラゴに対してクリアは消滅波を放つが、彼等はこれを難なくかわした。「随分やつてくれるじゃないか……(コイツ等、なぜこれ程に息が合う?)」

清磨の出すわずかな指示を、ガツシユだけでなくブラゴペアと殺せんせーも完璧に理解して、常に最善の行動を取れている。クリアはこの事が不可解だった。

『クリアを倒すという思いが強い程、コンピネーションが見せる強さは増してゆく!!』

シエリーの頭にデュフォアの言葉がよぎる。清磨の指示は彼女達の思考の遙か上へ行く。しかし戦闘においては“本能”で、出された指示の可能性から最良のものを導き出せるという。そして各々の思いが一つになる事で、強力な連携が取れるのだ。ちなみに殺せんせーは教師として貪欲にガツシユペアの事を知ろうとしてきた為に、次に彼等が何を求めるのかを容易に理解する事が出来、皆の連携を崩す事なく戦いを優位に進められている。

「おおおお!!」

ガツシユ達の攻撃を受け続けながらも、クリアは次の反撃の手を緩ませない。攻撃を辞めれば、そこで負けるのだから。そして彼が両手を前に出す。

「フェイ・ガンズ・ビレルゴ!!」

クリアの両腕からは、尖った口のような形をした大量の消滅波が放たれた。消滅波は数が多いだけでは無く、一つ一つが高速で動き回る。ガツシユ達とて対応が容易では無いと思われたが、

「クエアボルツ・グラビレイ!!」

シエリーが呪文を唱えると、ブラゴはクリアの周りに大きな重力の壁を複数枚出現させる。そこから発せられる重力により、高速で動き回る消滅波の動きが鈍る。その隙を清麿は見逃さない。清麿がクリア目掛けて中指と親指で指差す。

「ジオウ・レンズ・ザケルガ!!」

ガツシュの口から電撃の鱗を纏う巨大な蛇が出現すると同時に、電撃の鱗はたちまちクリアの消滅波を相殺した。

「この術、ゴームの時とは比べ物にならない!!」

クリアは一度、死神の中でこの術を見ているが、その時のガツシュペアは本気では無かった。しかし今回は違う。制限する物も無く、彼等は全力で術を行使する。そして術の本体がクリアに襲い掛かるが、ブラゴの術によって彼は身動きが取れず、それを真正面から喰らった。勝負ありかと思われたが、クリアは立ち上がる。

「……仕方がない。ヴィノー、シン・クリア”を使うぞ」

大ダメージを受けたクリアだが、意識が無くなるまでには至らない。攻撃力だけでなく、防御力も生半可ではない様だ。そしてクリアは、自身の最大術の使用を決意した。

LEVEL 59 完全体の時間

クリアがシンの術の使用を決意した時、清麿は「アンサートリガー答えを出す者」でその術の対処法を導き出す。しかし、その答えを得た清麿の顔が青ざめた。

「奴に術を出させてはいかん!!」

清麿は術の発動自体を止めようとする。この術を出させた瞬間に取り返しがつかなくなる、彼は答えを出したのだ。その言葉を聞いて真っ先に動き出したのは殺せんせーだ。

「ならば、あの赤子を止めれば……」

「リア・ウルク!!」

殺せんせーが超スピードでヴィノー目掛けて触手を伸ばして呪文を止めようとした瞬間、彼女はシンの術では無くスピード強化の術を唱えた。そして速度を増したクリアが殺せんせーに迫り、先生の触手を握りしめて、ヴィノーへの接近を防いだ。

「良い判断だ、ヴィノー」

「しまった!!」

クリアはそのまま殺せんせーを清麿達の方に投げ飛ばす。もしヴィノーがシンの術

を唱えようとしていた場合は、殺せんせーの接近を許して術を出させない展開に持ち込まれていた。彼女はそれを読んだ上であえてスピード強化の術を唱え、クリアに殺せんせーを妨害させたのだ。

「シン・クリア・セウノウス!!」

隙を付いてヴィノーが呪文を唱える。するとクリアは下半身が球体で、巨大な翼を持つ消滅の力を纏った聖霊のような姿をした術を発動させた。それは非常に神々しく、見る者を圧倒するには十分な威厳を持つ。強大な力を持つクリアの最大術を見て清磨の顔色は悪くなる一方だ。

「おい清磨!!何に気付いた?!」

「あいつを倒してはいけない……取り返しのつかない事になるぞ……」

いつになく弱気な表情を見せる清磨に対してブラゴが問い詰めるが、彼は驚くべき事を口にする。この術を破ってはならないのだと。

「高嶺君!!どういう事ですか?!」

「バカな事を言ってるじゃねえ!!倒さねーと、コイツに俺達が消されるだけだろーが!!」
殺せんせーもブラゴも清磨の言う事には賛同出来ない。このままではあの術を自分達がまともに喰らうだけなのだから。そして殺せんせーは渾身のエネルギー砲を撃つために体内に力を溜め始め、ブラゴは術を出して貰う為にシエリーに視線を送る。

「シン・バベルガ・グラビドン!!」

迫りくるクリアの術に対して、ブラゴはシン級の重力で対抗する。しかしこの重力の中でも、シン・クリアは動きを止めない。この術は確実に彼等に近付いてくる。

「ははは、無駄だ!!クリアの術の頂点には誰も敵わない!!」

確実にブラゴの術が押されている。この光景を見て、ヴィノーが嘲笑う。それでもブラゴペアは諦めない。そしてシン・クリアが2人まで届きそうになったその時、

「なめるな——!!」

先程まで劣勢だったブラゴの術が、シン・クリアの動きを封じ、押しつぶし始める。それを見たヴィノーは驚愕する。クリアの最大術が押し負けているのだから。

「こんな事が……」

ブラゴペアだけで生み出せる力量には限界がある。しかしブラゴは特訓で地場の強い土地を巡り、自らの力の根源が星そのものの力であると理解した。地球は強大な力を持ち、彼の術はそれを借りる事が出来る特性を持つのだと。

「ほんのわずかに、地球の自転を俺の体で受け止めるような行為。当然力が増す程、俺の体もヤバイ。だが……これでクリアの術とも戦える!!」

大きな力の代償として地球の重力をまともに受ける事となり、体にかかる負担も果てしない。これ程のリスクを背負わなくてはクリアのシンへの術には対抗出来ない。そし

て強大な重力がクリアの術を更に押し潰す。

「清磨!!この術ごとクリアを倒せ!!俺達が力を合わせれば出来るはずだ!!」

「スマン、その通りだ……迷う余地など無かった!!」

弱気な態度を見せる清磨をブラゴが叱責する。それを聞いた彼は、クリアを倒す為に再び心の力を溜め始める。

「行くぞガツシュ!!」

「ウヌ!!」

清磨を見たガツシュも臨戦態勢に入る。そして殺せんせーもまた、攻撃に加わろうとする。先生も体内にエネルギーを溜め終えた様子だ。

「ならば先生も……」

「待った、殺せんせー!!」

殺せんせーの加勢を清磨が止めた。先生は当然、怪訝な表情を見せる。

「高嶺君、しかし……」

「ここから先は何が起こるか分からん!!先生、今は力を温存しておいてくれ!!」

「……分かりました!!」

ここで全ての力を使い果たして、クリアを倒し切れない場合は最悪だ。その先は絶望しかない。だからその場合にも備えて、殺せんせーには今は力を温存してもらう。もし

もクリアを一気に倒せるようならその時に先生の力を借りれば良い。清磨の考えを察した殺せんせーは引き下がる。

「バオウ・ザケルガー！！」

ガツシユの口からは巨大な電撃の龍が召喚され、シン・クリアに襲い掛かる。

「いつけええええ！！」

「バオオオオオ！！」

この時、打倒クリアと言う共通の目的を持つガツシユペアとブラゴペアの心は、完全に1つになった。そしてバオウ・ザケルガがシン・クリアを倒す為にブラゴの術の範囲内に入った瞬間、電撃の龍に変化が起こる。重力の術を受けたそれは、何と色が黒く変貌したのだ。

「どうなっているのよ、これは……」

「魔物の術、恐るべしですねぇ！」

「だがこれで、クリアを倒せる！！」

お互いの心が1つになった時、各々の術は融合を果たした。しかしその原理は、アンサー・トリガー【答えを出す者】をもってしても分からない。だが確実に言えるのは、ブラゴの力を得たバオウの威力は更に増している事である。ただでさえ強力なバオウ・ザケルガにシン級の術の力が加わる。電撃と重力が合わさり、バオウは進化を遂げる。そして黒いバオウ

はシン・クリアを一方向的に打ち破り、そのままクリアに直撃した。

「やったわ!!」

クリアを倒したのだと思いシエリーが歓喜の声を上げる。しかし清麿が出した答えは絶望そのものだった。

「『力の支配』が、始まる……」

清麿の言葉と共に、シン・クリア・セウノウスが再び姿を表した。ブラゴ達もこれに驚愕するが、それは術者であるはずのヴィノーも同じだった。

「何で、敗れて消えたハズじゃ……」

今出ている術はヴィノーが唱えた訳では無い。そしてシン・クリアの仮面が破れ、姿が変貌する。先程までの神々しい見た目は打って変わって、禍々しい悪魔のような姿を模す。それは下半身と両肩が黒い球体に包まれ、巨大な尾を持つ。その化け物は口を開く。

「礼を、言う……我は『完全体』と、なれた」

その言葉と同時に、その額からはクリア・ノートの上半身が露出した。しかしクリアには既に意識が無い。

「これは、抜け殻だ……我が、クリア。全てを消滅させる絶対的な……力なり」

それを見た清麿達は愕然とするが、ブラゴだけは何かに納得するような表情を見せ

る。

（そうか……クリアの性格が最初出会った時と変わっていたのは、*“力”*に支配されていたからか）

クリア・ノートが初めてブラゴ達の前に姿を表した時に比べて、今回の戦いのときの方がより凶悪で残忍な性格となっていた。ブラゴはその事に違和感を覚えていたのだ。そして間もなくヴィノーがバリアごとクリアに吸い寄せられていくが、彼女も意識を失っている。

「これでヴィノーも……心の力を生み出すエネルギー体となった」

そのままヴィノーはクリアに取り込まれた。その後、クリアの尾が清磨達目掛けて薙ぎ払われる。彼等は間一髪でかわすが、尾の一撃にも消滅の力が宿っており、その周辺はえぐり取られるように地面の表面が消え去っていた。今のクリアは全身に消滅の力を纏っている。

「ブラゴ!!」

清磨が指示を出すと同時に、クリアの全身から消滅波が放たれようとしていた。

「シン・バベルガ・グラビドン!!」

それと同時にシエリーが呪文を唱える。ブラゴの術により、ギリギリのタイミングで消滅波の直撃は免れた。しかしクリア自体にはブラゴのシン級の術は届いていない。

そしてクリアの周りは、清磨達の足場となるわずかなスペース以外の地面がさらに削り取られていた。清磨は【答えを出す者^{アンサー・トーカー}】で次の一手を考えるが、彼の全身から冷や汗が滲み出る。

「奴を倒す答えが……出ない……」

それを聞いた一同は驚愕する。しかし、彼等のやるべき事など決まっている。

「それでも我々は勝たねばならん!!何としても、奴を倒す答えを作り出すのだ!!」

「ここで負ける訳には行かないでしょう!!」

「クリアの額にある球体、あそこが一番ダメージが通りやすい!!そこに攻撃を続ければ、奴を倒せるかもしれん!!反撃に気を付けながら、一気に打ち砕くぞ!!」

倒せる為の答えは出なくとも、ダメージが通りやすい場所の把握は出来た。となれば、その希望にすがり、一斉攻撃を仕掛けるしかない。ここでの負けはそのまま魔界の滅亡に繋がる。よって諦めるといふ選択肢は彼等には存在しないのだ。

「シン・バベルガ・グラビドン!!」

まずはブラゴの術により、少しでもクリアの動きを鈍らせる。しかし完全に動きを封じる事は出来ない。またシン級の術の連発は、確実にブラゴの体にダメージを蓄積させていた。それでも、彼は攻撃の手を緩めない。

「バオウ・ザケルガー!!」

続いて電撃の龍が召喚され、再びブラゴの術と合わさり、その体を黒くした。そして清磨はバオウの力を全て牙の先に集中させて、クリアの額をピンポイントに狙う。

「今度は先生も行きますよ!!」

そして殺せんせーは体に溜めた力を放出し、清磨と同じくクリアの額に狙いを定める。その為に通常の攻撃よりも攻撃範囲を狭めて、その分貫通力を増すように一直線のエネルギー砲を放った。殺せんせーの力のコントロールは、イトナ戦の時にやって見せていた。

「「「いっけええええ!!」」」

意識を失っているガツシユ以外の4人が、同時に叫ぶ。彼等は死力を尽くして自らの攻撃をクリアに当てる。しかし、

「狙いは良い……だが、届かない!!」

クリアの全身から消滅波が放たれる。そして無情にも、彼等の全力の攻撃を消失させた。尚且つクリアの攻撃は死んでおらず、5人を襲う。シエリーは心の力を完全に切り、殺せんせーにはこの消滅波から仲間を守る術は持ち合わせていない。

「皆、俺達の後ろに!!ラシルド!!」

クリアの攻撃を防ぐには、ガツシユの盾の呪文以外は存在しない。清磨は心の力を込めて、全員を防ぐ事が出来る大きさの盾を、ガツシユに出させた。

「ザグルゼム!!ザグルゼム!!」

ただのラシルドでは、この攻撃は防げない。クリアの消滅波を防ぐには、少なくとも3発分のザグルゼムで強化する必要があると清磨は答えを出したが、彼の心の力にも限度がある。

3発目のザグルゼムを放つ事は叶わず、電撃の盾は崩れた。ラシルドのお陰で多少なりとも消滅波の威力は落ちているが、強力な事には変わらない。

「清磨!!」

「おのれエ!!」

「ふんにゆやあああ!!」

ガツシユはマントで自分と清磨を、ブラゴは身を挺してシエリーを、殺せんせーは触手を伸ばして自らの急所をそれぞれ守った。殺せんせーにはここで完全防御形態になる選択肢もあったが、それでは先生が攻撃に加われなくなる。この後の戦いでは何の役にも立てなくなるのだ。生徒が命を懸けている状態で、先生としては自分だけ安全圏に逃げる選択肢は無い。

そして消滅波を受けたブラゴの体は痩せこけた上に気を失い、殺せんせーも完治する

までにはかなり時間がかかるほどに体の多くを損失している。しかし、
「まだ、立ち上がるのか……」

体が痩せこけていても、マントの力で防御したガツシユにはまだ立ち上がるだけの力が残されている。

「ザケル!!」

心の力が殆ど残っていない清麿は、ザケルを数発程撃つ事しか敵わない。それでも彼等には、この戦いに勝つ以外の選択肢は無い。

「(ゴ)かしい!!」

クリアも迎撃するが、清麿の【アンサー答えを出す者】とガツシユのマントの力を使い、どうにか致命傷を避けて見せる。しかし清麿が立ち上がる事が出来なくなつた。それでもガツシユは、クリアに立ち向かう。

「ま……まだなのだー!!」

「ふん……ボケ、が……」

ガツシユはマントを使って空を飛び、クリアの顔と対面する。しかし無情にもクリアは口から消滅波を放つ。満身創痍のガツシユがこれをおかす事は不可能だ。

「ガツシユ(君)!!」

シエリーと殺せんせーが叫ぶ。そして先生は力を振り絞って触手をガツシユの方ま

で伸ばし、クリアの攻撃から逃がそうとした。しかし殺せんせーのダメージも大きく、ガツシユを完璧に逃がす事は出来なかった。

「済まぬ……殺せんせー……」

「ガツシユ君……もう君は……」

「戦える状態では無い」。殺せんせーはそう言いかけたが、ガツシユの目にはまだ闘志が残っている。それを見た先生は自分の言葉を飲み込んだ。そしてガツシユは殺せんせーの触手により着地に成功するが、体を動かす事は出来なかった。

（こうなったら、先生が……）

そんなガツシユを見て、殺せんせーは捨て身の一撃を放つ決意をした。今の先生は体の回復にエネルギーの大半を当てているが、その力を全て攻撃に回す。そして最大威力のエネルギー砲をクリアに放つ。勿論それでクリアを倒せる保証は無い。それでも殺せんせーは、生徒の為に命を懸ける以外の道は取らないつもりだ。

「待て、殺せんせー……」

地に伏せながらも心の力を溜め続けている清磨は、殺せんせーのやろうとしている事に気付いた。そして清磨は深呼吸をすると、出せる限りの声を発した。

「ダメだ、殺せんせー!!……それをしてはいけない!!」

殺せんせーの捨て身の攻撃をもってしても、クリアをどうにか出来る保証は無い。仮

にどうにかなったとしても、それを行った殺せんせーはただでは済まない。E組の手による暗殺以外で、殺せんせーの生命に危機が訪れる展開はなんとしても避けたいところだ。

「止めないで下さい……………これしか……………」

殺せんせーは清磨の制止を聞くつもりは無い。それを見たガツシユも立ち上がろうとする。

「殺せんせー……………自分も死ぬつもりなのか……………それは、ダメだ……………」

しかしガツシユには立ち上がるだけの筋力が残されていない。そんな光景を目の当たりにしたシエリーの表情は絶望に染まり、彼女の目からは涙が流れ落ちた。

(もうダメ……………もうコイツには、何をやっても勝てない……………)

シエリーは完璧に戦意を消失した。圧倒的な力を前にして、どうにもならないと彼女の本能が告げている。

その一方で、ガツシユはこれまで出会ってきた仲間の顔を思い浮かべていた。彼等の為にも、ガツシユは立ち上がらなくてはならない。

「皆……………魔界にいる皆……………待つて、おるのだ……………」

魔界を救う為にも、ガツシユは最後まで諦めない。例え呪文が使えなくても、どんなに体が瘦せこけても、彼は立ち上がろうとする。

「あやつを倒し……魂だけになった皆を、生き返らせるから……」

遂にガツシユは立ち上がった。何か策がある訳では無いが、それでもここで地に伏す訳にはいかないのだ。そんなガツシユを見てクリアは嘲笑う。

「ハハハ……みじめだな。もうお前達は戦えない……魔界は我が滅ぼす……お前の努力は、全て無駄だったんだよ!!」

クリアは勝利を確信している。そして、ガツシユ達の行いが全て無駄だと断言した。しかし、

「……そんな訳……無駄な訳が、無いでしょーが!!」

クリアの言葉を殺せんせーが全力で否定する。

「彼等は……守るべき物の為に、ここまで戦った!!それも……自らの命を懸けてまで!!それは世界を統べる者としてのあるべき姿であり、非常に尊いものだ!!……彼は優しい王様であろうとし続けている、貴方と違って……そんな生徒達の努力を否定する権利は、貴方には無い!!」

殺せんせーの表情がどす黒く変化する。クリアの発言は先生の逆鱗に触れたのだ。先生もガツシユの目指す王の姿は聞いている。そしてガツシユがこれまでもこの戦いでも、その理想を追いかけて尽力してきた姿を彼は知っている。教師として生徒を見守り続けたのだから。そんな生徒の努力を踏みにじられたのだから、当然殺せんせーも激

怒する。そして先生はエネルギー砲を放つ準備に入った。

「待て、殺せんせー!!」

しかし今の殺せんせーがそれを放てば先生の生命に関わる。清麿はそれを阻止したいが、声を出す以外の行動が取れない。

「何をしようと無駄だ……ハハハ!!」

「くそ……笑うな……」

「ハハハハ!!」

「笑うなー!!」

清麿が叫ぶと同時に、彼の持つ本が金色に輝き始める。そこには、本来自分の本には書いてあるはずのない呪文が出現していた。清麿はそれを見た瞬間、その目には希望が宿る。

「これは……術を唱えられる!!この呪文には俺の心の力は要らない!!頼む、ガツシュを助けてくれ!!」

今のガツシュペアの本には、“本来術を持っていた者の力”が溢れている。よって、その呪文を唱えるのに、清麿の心の力を消費する事は無いのだ。

それと同時に、ガツシュの後ろには一人の魔物の魂が出現していた。

『ガツシュ、ありがとよ……俺達の為にここまで頑張ってくれて。だから、今度は俺達が

お前を助ける番だ!』

「お、お主は……」

その魔物の顔を見た時、ガツシユの目には大粒の涙が流れ始める。彼はかつて、魔本を犠牲にしても守るべき物を守る姿をガツシユに示してくれた魔物だ。

「ジオルク!!」

清磨が呪文を唱えると、先程まで満身創痍だったガツシユのダメージが全て回復した。この術「ジオルク」の効果は、死んでさえいなければどのようなダメージも回復出来るのだ。そしてガツシユの後ろにはその呪文の本来の持ち主がおり、彼の肩に手を置いている。

『さあ、もうひと踏ん張りだぜ。ガツシユ!!』

「ダニー!!」

ガツシユの後ろにいるのは、彼と友達になった魔物の1人のダニーである。

LEVEL 60 友達の時間

突如出現したダニーの魂。しかしなぜ彼が人間界に現れたのかは、ガツシユペアにも分からない。

『お前の事を感じたのさ。この戦いを見て、ガツシユの俺達への強い思い……俺達の為に頑張る姿が魔界にも伝わったんだ。ガツシユを助けたいと思ったら、気付けばあの金色の本にいたのさ』

この戦いは魔界にいる魔物達も見ていた。そして、魔界の滅亡を防ぐ為に必死で戦うガツシユの姿に感銘を受けて、ダニーは居ても立つても居られなくなったようだ。ガツシユの力になりたい。彼がそう考えるうちに本が金色に輝き、ガツシユに力を貸す事が可能となった。

「何があつた……何故ガツシユの体が回復している？」

ダニーの姿はクリアには見えていない。否、金色の本を所有するガツシユペア以外にはその魂は見えない様だ。その光景を見た清磨に再び希望が宿る。

「俺には見える、ダニーの姿が。ガツシユの仲間に……友達になつてくれた魔物の姿が!!」

「そして清麿は再び立ち上がる。ガツシユと共に戦う為に。彼等は反撃の狼煙を上げる。」

そんな彼等の姿を見た殺せんせーもまた立ち上がる。先程まで彼等を包み込んでいた絶望感はそのこにはない。

「何が起こったかは分かりませんが希望が見えてきましたねえ。少し彼等の様子を見ましょうか、ヌルフフフ」

こんな時にも、殺せんせーは自分の顔に緑色の縞々模様を浮かべる。この局面はガツシユペアに任せて問題ないと、先生は判断したようだ。

清麿達が再び元気を取り戻す一方で、クリアは何があつたのか分からない様子だ。それでも魔界の滅亡と言う目的は変わらない。その為にクリアはガツシユ達に攻撃をす

る。

「何があつたかは知らぬが、全て消し去ってくれる!!」

クリアの全身から消滅波が再び放たれる。その瞬間、消えゆくダニーに変わり、別の魔物がガツシユに力を貸してくれた。

『ガツシユには、傷一つ付けさせぬ!!』

「シン・ゴライオウ・ディバウレン!!」

呪文を唱えた瞬間、全身に刃を纏った5本の尾を持つ巨大な白虎が召喚される。その

虎は凶暴な外見をしているが、そこには術者の“守る意思”が宿っている。その事はガツシユペアも理解している。そして白虎は清麿達を襲う広範囲の消滅波を完璧に防ぎ、彼等を守った。

「全て止められただと!!」

クリアは狼狽する一方で、金色の本には新たな呪文が出現した。

『ガツシユ、お前の為なら何でもするぜ?』

「シン・ガルバドス・アポロディオ!!」

今度は何本もの大きく鋭い爪を持つ、青白い巨大な魔獣が出現する。術の持ち主にも似ている魔獣だが、その大きさと迫力はそれをも凌駕する。クリアは消滅の力を纏った自らの体を利用してガツシユペアを襲うが、魔獣がそれを許さない。何とそれはクリアの巨体を押し返した。そして今、ガツシユの隣には2体の魔物が立っている。

「ウォンレイ!!レイン!!」

『守って見せるぞ、ガツシユ』

ウォンレイはリイエン共に、これまで何度もガツシユ達に力を貸してくれた。それは今回の戦いとして例外では無い。そんな仲間との再会故に、ガツシユの目からは涙が溢れる。

『ガツシユ、泣くな。俺達は当たり前の事をしているだけだ』

青白い大きなクマのような姿の魔物「レイン」は穏やかな口調でそう言った。彼は魔界時代からのガツシユの親友で、ガツシユに魔界でも人間界でも助けられている。そんなレインがこの戦いに協力しない道理はない。

「お……のれ……何が起こっている!!」

他の魔物の姿が見えていないクリアには、自分の攻撃が防がれた挙句に自らが押し返された理由が分からない。そしてクリアは怒りのままに消滅の力を宿した巨大な尾を、清磨達目掛けて薙ぎ払う。その時、

『パールモーン!』

「シン・ギドルク!!」

呪文を唱えた瞬間、ガツシユの背中からは複数の大きな棘が生え、彼の足には巨大なブースターが装備される。その後、ガツシユは超スピードで清磨及びブラゴペアを抱え、クリアの一撃をかわして見せた。この術はシン・シドルク同様に強力な肉体強化の術だ。ちなみに殺せんせーはある程度ダメージが回復してきており、自力でそれをかわす事が出来た。

「カルディオ!」

次に出現した魔物はウマゴンと同様に馬の姿で、紺色の体をしている「カルディオ」だ。彼はウマゴンをライバル視しており、ガツシユペアとの直接的な絡みは多くない

が、アースと共にファウードの帰還装置を死守してくれた大切な仲間である。

『パールパールモーション!』

カルディオは得意げな表情をする。そんな彼をガツシユペアは嬉しそうに見ながら、クリアの方に向かう。その後、清磨は殺せんせー目掛けて大声を上げた。

「殺せんせー!!俺達は大丈夫だから、先生はブラゴとシエリーに付いていてくれ!!」

「にゅやッ!分かりました!!」

清磨の指示を受けた殺せんせーはブラゴペアの方に駆け寄る。その時のシエリーはブラゴを抱えながら、次々と強力な呪文を使用するガツシユペアを不思議そうな顔で見ている。

「どうなっているのかしら?それに、あの金色に輝く本は……」

「詳しい事は私にも分かりません。しかし、確かな事が1つ……今の彼等ならこの状況をひっくり返してくれる。あの2人には恐れ入りますねえ、ヌルフフ」

殺せんせーはガツシユペアの勝利を確信する。今の彼等にとつてはどのような敵すらも、恐れるに足りないのだと。彼等は絶望的な状況でも最後まで諦めようとせず、遂には絶体絶命の状況を乗り越えようとしている。そんな2人を見て、殺せんせーは心底感心している。

その一方で、クリアはガツシユペア目掛けて尾を振りかざして2人を消そうとした。

しかし、それは阻まれる。

『全く、邪魔な尻尾でござるな』

「シン・ヴァルセル・オズ・マール・ソルドン!!」

『スライアアアツシュ!!』

巨大な尾がガツシュペアを襲う前に大きな無数の剛剣が空から降り注ぐ。その中の一太刀だけでも、並の魔物なら容易く両断されてしまうだろう。それらの剣達はクリアの尾をいとも簡単に、細かく切り刻んだ。これにより尻尾による厄介な攻撃が繰り出される事は無くなる。

「アース!!」

ガツシュがその名を呼ぶ。大剣を持つ侍口調の魔物の名を。アースはゴームとの戦いに敗れてしまったが、彼の「魔界の平和を守る法律を作りたい」という思いは、パートナーのエリーを通してガツシュに伝わっている。

『ガツシュ。貴方が王になった暁には法の知識を徹底的に叩き込む故、覚悟して下さいな!』

アースはガツシュを次期王になると決め打っている。その事前提で彼が話を進めていると、更に別の魔物が出現した。

『そんなに細かくしちゃうと、そいつのシッポを全部消しにくくなるじゃないかー!』

「お前は相変わらずだな……ミコルオ・シン・ゼガルガ!!」

体中に歯車を持つ巨大な機械神の様な形をした術が出現する。その神々しい外見は、シン・クリア・セウノウスにも引けを取らない程に見る者を圧倒する。勿論術の威力も強力で、大きく長い両腕で切り刻まれたクリアの尾を包み込み、全て消し飛ばした。対象を包む姿は慈愛に満ちた女神そのものだ。

「キッド!!」

キッドはナゾナゾ博士と共に、千年前の魔物との戦いに挑んだ仲間だ。その戦闘で彼は魔界に帰ってしまったが、そこでキッドは大きく成長する事になった。

『ガツシユー!また会えたのは嬉しいけど、今は戦いの最中だ。気を抜くなよ、アイツはまだまだやる気だからな!!』

キッドの言う通り、クリアは攻撃の手を緩めない。そしてクリアが両腕を広げると、その両手の平にはそれぞれ槍の形をした消滅波が出現する。

「次から次へと……ならば、我が神速の槍を喰らうがよい!!」

クリアの両手から放たれた槍は、超スピードでガツシユペアを襲う。それと同時に、金色の本には新たな呪文が出て来た。

『あんな速いだけの攻撃、大した事ないよ!』

「ああ、その通りだ……シン・ノロジオ!!」

ガツシユの口からは広範囲のオレンジ色の光線が吐き出され、2本の槍に直撃する。その瞬間、超スピードで迫ってきたその速度はまるで止まっているかの様に遅くなった。この術は触れたものの速度を極端に落とす術だが、通常の「オラ・ノロジオ」よりも技の範囲も継続時間も強化されている。

「モモン!!」

次に来てくれたのは、ウサギとサルを足して2で割ったような姿をした魔物「モモン」である。彼は当初は臆病な挙句にスケベだったが、ファワードにてそれらを克服し、ガツシユと共に戦ってくれた。

『君達のお陰で僕は変わったんだ。本当にありがとう!』

モモンはお礼を言う。ガツシユペアとの出会いのお陰で、臆病な自分と決別出来たのだと。そんな彼の言葉を聞いた2人が頷くと、次の魔物が現れた。

『あの攻撃を投げ返してやるぞ!』

「シン・シャオウ・ニオドルク!!」

ガツシユの体は、頭部の左右それぞれの側面に大きな角を生やした、銀の鎧をまとう小麦色の巨大な獣の姿と変貌する。そして獣の腕は消滅の力を纏う2本の槍を難なく両腕で掴み取り、それをクリアに投げ返した。消滅の力を持つ攻撃を手で触れられたのは、シン級の肉体強化のお陰である。そしてそれは投げ飛ばされたと同時にシン・ノロ

ジオの効力が切れて、超スピードの槍がクリアを襲う。

「リーヤ!!」

『ガツシユ! やつぱりお前は、やる時はやる奴だな!!』

ガツシユの姿が元に戻ると、彼はリーヤの姿を認識する。ガツシユが名前を呼ぶと、リーヤは魂の状態にもかかわらず、自分の角でガツシユをつつこうとしていた。彼の友好の証だ。モモン・リーヤの連携で、見事にクリアの超スピードの攻撃を防ぎ切ったのだ。

「だが、今の攻撃は効いていないぞ」

クリアの言葉はハツタリではない。やはり弱点を狙わなくては有効打にはなり得ない。そしてクリアは自分の両肩の角を分離させ、それは無数の弾へと変貌した。それらはクリアの周囲に浮遊し、今にもガツシユ達を攻撃しようとする。その時、

『行くわよ、ガツシユ』

「ミベルナ・シン・ミグロン!!」

無数の小さな月が出現し、クリアの攻撃を牽制する。一つ一つはそれ程脅威には見えないが、特筆すべきは数の多さだ。突然現れたそれを見て、クリアも迂闊な攻撃をする訳にはいかないと判断した。

「レイラ!!」

『あなた達との約束を、あんな奴に邪魔なんかさせないわ』

紫色の髪と服を身にまとう魔物の少女「レイラ」は千年前の魔物でありながら、初めからガツシユ達の味方をしてくれた。そして共に戦いを勝ち抜いた後、ガツシユとその仲間の誰かが王となり、成長した彼等と魔界で再会する約束をしてくれたのだ。その約束の為に、何よりも自分を救ってくれたガツシユの為に、彼女はここに来てくれた。

『分・散!!』

「ファルゼーレ・ヴァーロン!!」

小さな月に続いて、それと同じ程度の大きさの星が無数に出現し、クリアの周りを覆う。正体不明の物質には、クリアとて安易な接触は許されない。

「パムーン!!」

星のような髪型をした魔物「パムーン」もまた千年前の強力な魔物だ。当初はガツシユと敵対していたが、彼の本当の強さを感じ取り、ゾフィスと決別して味方になってくれたのだ。

『今度こそお前の為に戦える!』

デボ口遺跡での戦いでは、ガツシユ達と戦おうとした矢先にゾフィスに本を燃やされてしまい、共に敵に挑む事は叶わなかった。しかし今、ようやく彼は力を貸す事が出来る。自らを石化と孤独の恐怖から解放してくれた友達の為に。

『クリアスレボリユーション』
『莊嚴回転』 3・6・0!! Vの体勢を取れ、ガツシュ!!』

次に出現した魔物がそう言うのと、ガツシュは無意識に両手を斜め上に広げ、Vの体勢になつていた。

「シン・チャールグル・イミスドン!!」

呪文を唱えると同時に、無数の月と星からはV字の光線が発射された。それはクリアの生み出した弾を消し去るだけでなく、本体にも防御の姿勢を取らせた。その光景はV字の光線の威力の強さを物語っている。しかも月と星の数は数え切れない程で、それら全てからの攻撃は脅威だ。今この時、クリアは攻撃手段を奪われている。

「お主、ビクトリーム!!」

現れたのは頭も体もVのような姿の、レイラ達と同じく千年前の魔物『ビクトリーム』だ。彼は強敵の1人であり、ガツシュ達と和解した訳では無かったのだが、この戦いに協力してくれている。しかし、友達になつた覚えのない魔物の出現に、ガツシュは明らかに動揺している。

『良いVだったぞ、ガツシュ。それから……魔界に帰る時には、メロンの種を持って帰ってきてくれ。待つてるからな』

彼はメロンが好物だ。参戦してくれた理由は、戦いを終えたガツシュにメロンの種を要求する為だった。曰く、『一粒の種は、100万のメロンを生む』との事だ。緊張

感漂う戦いに変な雰囲気が出て来てしまったのは別の話。

「小賢しい真似を!!……これならどうだ!」

先程まで防御の体勢を取っていたクリアは、再び両腕を広げる。すると、彼の背後には大量の消滅波の弾幕が出現した。クリアが両腕を前に出した瞬間、それらはガツシユ達目掛けて発射された。

『かう、かうかう!』

「シン・リグノオン!!」

ガツシユの両手の平から巨大な錨のついた鎖が数多く出現する。それらは清麿の意志で操作され、地面に突き刺さる。その後、その鎖は地面から大きな岩を持ち上げ、無数の消滅弾を相殺しようとする。

「バカめ、そんな岩で防げると……!」

しかしクリアの予想に反して、持ち上げられた岩は消滅弾を通さない。清麿は鎖を的確に操作して、クリアの攻撃を防いで見せる。

「ロップス!!」

『かう〜!』

この術の使用中はガツシユの意識は失われず、出現した彼をすぐに認識する事が出来た。ロップスはガツシユと戦い、引き分けた魔物だ。彼等の再戦が果たされる事は無

かったが、今度は共闘する事が出来ている。そしてガツシュと目が合ったロップスは、嬉しそうに手を振ってくれた。

「バカな……そうか……これは、鎖で持ち上げられた物質は強化されるのか!!」

クリアの予想は正しい。ロップスのシンの術は、「デイノ・リグノオン」よりもさらに強力な鎖を呼び出すだけでなく、持ち上げる物質までもがより頑丈になるのだ。その鎖で持ち上げられた岩は、クリアの攻撃にも対抗出来る程に硬い。

「おのれ……これが本気だと思ふなよ!!」

クリアがそう言うのと弾幕の数が増し、攻撃範囲が大きく広がった。持ち上げられた岩だけでは全てを防ぐのは困難かと思われたが、更に別の魔物が出現した。

『ピッポツパツ。これは私の新たな変形合体の番号だ!ピヨ磨、呪文を唱えるピヨ!!』

「ピヨ磨って呼ぶな……シン・ガンジルド・ロブロン!!」

呪文を唱えるとガツシュの下半身はUFOのような物を纏い、その周りには銀色の盾が大量に出現した。それらの盾も術者の操作が可能であり、その数も強度もより増している。無数の頑丈な盾による変幻自在な攻防を全て見切るのは困難だ。そして銀色の盾は、岩と共に見事にクリアの攻撃を防ぎ切った。

「コーラルQ、お主まで来ておったとは……」

『ピポパピポツ。私の変形は無敵にして無限だピヨ!!』

ロボットの様な姿をした魔物“コーラルQ”はガツシユ達の情報を事前に入手した上で戦いを挑んだが、成長を続ける彼等相手に敗れてしまった。そんな彼は、自分の新たな術を見せびらかして自慢しに来たようだ。ビクトリームに続いて、自分の欲の為に金色の本に出現した魔物である。

「おのれ……ならば、力だ。適当な小技では逃げ切れんぞ!!」

クリアがそう言うと、自らの下半身にある黒い巨大な球体を切り離した。クリアは全身に消滅の力を宿しており、その球体で彼等を押し潰そうとしている。

「ハアアアア!!」

クリアが念じると、何と黒いそれがもう一つ具現化した。一つでも強力すぎる攻撃になり得るのに、それが2つに増えたのだ。クリアは自分の勝利を疑わない。そして球体はガツシユ達に襲い掛かる。

『ゴォー!!』

『ディオボロス・シン・ランダミート!!』

灰色の四角形の立方体が2つ出現する。そこからは無数の闇の力が放出される。その物量は敵の攻撃を容赦なく破壊し、渾身の一撃を防がれた相手に絶望感を与える事すら可能だ。様々な形をする黒いエネルギー波はクリアの巨大な球体を崩壊させ、打ち砕いていく。そして強大な力を誇る球体の一つが完全に崩れ去った。

「ゴーム、来てくれたのだな!!」

『ゴォーッ!!』

ゴームはかつてクリアと協力関係だったが、キャンチョメと友達になる事で1人の寂しさを知りクリアに反旗を翻した。その戦いには敗れたが、ゴームの意志はガツシュにも伝えられている。そんな彼がガツシュ、そしてキャンチョメの為にも尽力してくれている。

「この術は……だが、まだ攻撃は残っている!!」

クリアの言う通りもう1つの球体は健在だ。ゴームのシン級の術をもつても、球体の1つの相殺が精一杯だった。しかし、

『クリア……お前に真なる竜の吐息を味合わせる時が来たようだ……』

「シン・ドラゴノス・ブロー!!」

清磨が呪文を唱えると共に、ガツシュの意識が途絶える。その瞬間、彼の頭上からは巨大なエネルギー波が放出された。単純なエネルギー砲の放出、だが威力は計り知れない。その一撃は小細工無しに敵を襲う。回避も防御も至難の業だ。クリアの球体は跡形も無く消し飛んでいた。

「これは……アシュロンがそこにいるのか……」

『力に支配されたバカめ、俺の事を覚えていようだな』

“竜族の神童”の一体、アシユロン。非常に高い戦闘能力を誇る彼はいち早くクリアの存在に気付いて戦いを挑んだが、打倒する事は叶わなかった。しかし彼のお陰でガツシュ達はクリアの目的を知り、それを止める為の力を付ける事が出来たのだ。そんな彼の存在感は、力に支配されて自我を失ったクリアが認識出来る程である。

『気合を入れ直せ、ガツシュ。ここからの奴は、死に物狂いでかかって来るぞ』
「ウヌ!!」

アシユロンに気付いたクリアは身の危険を感じるようになった。それ故に、クリアの攻撃はさらに苛烈となる。

『清麿、俺の声が聞こえているな？力任せでは奴を倒せん。皆の力で、クリアを倒す答えを導き出すんだ』

「ああ、分かっている」

アシユロンに言われるまでも無く、清麿は次の一手を考える。確実にクリアにダメージを与え、打倒する為の一手を。その一方でクリアは、明らかな苛立ちを見せていた。

「ガツシュが他の魔物の術を使うだと?……ふざけるなアアア!!」

クリアは上半身及び下半身に2本ずつある腕を振り回す。そしてそれらの拳は、ガツシュペアに狙いを定める。しかし彼等は動じない。次に何をすべきかを分かっているから。

「ガツシュ、狙いはクリアの抜け殻の頭部に見える力の球体!! 肉体強化で近付き、至近距離ダメージを与える!!」

『肉体強化が必要なら、俺の出番だぜ!!』

清磨が指示を終えた瞬間、新たな魔物が出現する。これから行う攻撃において、彼の持つ術は最適だ。

「そうだな、テッド!! シン・ドラグナー・ナグル!!」

テッドの肉体強化の術を使用する。シンブルな身体能力の強化だが、それ故に速さと力は強大だ。さらにシン級の術となればクリアの攻撃ですら、今のガツシュを捕えるのは容易では無い。そして迫りくるクリアの一撃に合わせて、ガツシュは己の拳でそれを弾き返す。しかしクリアも手を緩めない。次の攻撃はすぐに飛んでくる。

『右側に構え直し!!』
ライトサイド・ターン

テッドの指示と動きにガツシュが合わせる。彼等は同じ釜の飯を食った事もあり、お互いに認め合った友だ。そんな2人が息を合わせるのは難しい事では無い。確実にクリアの攻撃を捌いて見せる。

『奴の額まで一気に駆け上がる。俺の肉体強化とお前のマントならやれる。行くぜ、ガツシュ!』

「ウヌ!!」

ガツシユがマントに清磨を乗せた後、彼等はクリアの弱点目掛けて飛び出す。それを見たクリアは全身から消滅波を放つ。しかし、ガツシユ達は足を止めない。

『そのまま行きなさい……ガツシユの坊や、テッド』

「任せるぞ、チェリツシユ！」

次に現れたのは、テッドが何よりも大切に思う金髪の魔物の少女「チェリツシユ」である。ファワードでテッドに救われた後、彼女はガツシユ達に協力してくれた。そして今回も、テッドと共に力を貸してくれる。

「シン・グラード・ガンズ・コファアル!!」

魂の状態のチェリツシユが、大きなスナイパーライフルを支える。そして彼女の周りには、無数の小型の砲台が出現した。それらからは頑丈な宝石が発射される。宝石一つ一つが一撃必殺級の強度を誇り、クリアの攻撃を全て相殺する。

『ナイス援護だぜ、チェリツシユ!!』

テッドの言う通り、チェリツシユの攻撃は正確無比だ。そして彼等はクリアの額に接近する。2人の魔物のコンビネーションにより、ガツシユペアは無事にクリアの弱点の間近に迫る事が出来た。

「おのれ!!だが……いくら近付いたところで、お前達ごときではこの抜け殻を壊せぬ!!」
自らの眼前まで来たガツシユ達を煩わしく思いながらも、クリアは弱点を突破される

とは考えない。その殻の硬度は未知数だ。その時、体にいくつもの傷を持つ屈強な姿の魔物が出現した。

『てめえ、俺の力をなめてくれるじゃねーか』

「バリー!!」

かつて一度ガツシユペアを打ち負かした魔物「バリー」。彼はその戦いで、どのような力にも屈しない「強き王」を目指すようになる。そしてバリーは成長を遂げ、ガツシユ達と共に戦い、自らが犠牲になる道を選んだ。王になる事は叶わなかったが、そんな彼をパートナーのグスタフは「王をも殴れる男」と評した。

『ガツシユ。奴の弱所は、クリアの抜け殻という強いバリーで守られている。だが殻のつなぎ目を正確に裂ければ、弱所を露出させる事が出来る』

バリーは敵の弱所を見抜く事が出来る。そして彼は即座にクリアの弱点を見つけ出した。

「シン・ドルゾニス!!」

ガツシユの両腕に竜巻状のドリルが纏われる。そしてガツシユは半分バリーに意識を預ける形で、着実にクリアの抜け殻を無駄なく破壊していく。一見地味にも見える攻撃だが、バリーの戦闘技術の高さ無くして抜け殻の破壊は成し得ない。当然クリアはそれを妨害しようとするが、両腕のドリルでクリアの拳をもはじき返す。

「貴様らアアア!!」

それを見かねたクリアは、さらに攻撃の頻度を増す。4本の腕がガツシユを襲う。彼は攻撃に対して身構える。しかしこのままでは弱所の突破に手間取り、それを破壊する前にクリアの一撃を受けてしまう。清麿がそれを危惧した時、金色の本に新たな呪文が出現した。

『邪魔をするなー!!』

「お前……シン・アミレイド!!」

清麿は一斉に殴り掛かるクリアの拳目掛けて、指差しながら呪文を唱えた。するとガツシユの口からは巨大な網が吐き出され、クリアの腕を拘束した。ただ拘束するのみならず、その網はクリアの腕の動きを完全に止めた。この術は通常の「アミレイド」と異なり、範囲や網の強度が増しているだけでは無く、網に触れた者の動きを封じる能力を持つ。

「お主……パンブリ!!」

パンブリと呼ばれたが、パピプリオの間違いだ。彼は何度かガツシユ達と対立したが、協力してくれる場面もあった。そしてパートナーとの絆は本物であり、ルーパーはパピプリオを実の息子のように愛している。

『パピプリオだ!!次期王だったら、他の魔物の名前を間違えるなよ!!』

「ウヌ……済まぬのだ」

口調はキツイが、彼もまたガツシユを次の王として認めてくれている。それを察したガツシユはすぐに謝罪した。

『続けるぞ、ガツシユ』

バリーの言葉を皮切りに、再び抜け殻の破壊を続ける。パピプリオのお陰で妨害を受けずに攻撃に専念出来る。そして抜け殻は完全に壊され、クリアの弱点である力の球がむき出しになった。

「そこからは逃がさんぞお!!」

クリアは力技でパピプリオの拘束を解いていた。そして巨大な手で彼等を握りつぶそうとするが、次の魔物が出現する。

「シン……」

『ヨポイ!』

「ヨポポ!!」

緑のタイツを身に付けた小柄な少年の魔物“ヨポポ”は、ガツシユがイギリスで出会った魔物だ。彼はパートナーのジエムを大切に思い、彼女を守る為にガツシユと共に、自らの本が燃える事も顧みずに敵に立ち向かった。

「ヨポポイ・トポポイ・スポポポイ!!」

清麿が呪文を唱えると共に、ヨポポの動きに合わせてガツシユが踊る。そしてクリアもまた、その動きに合わせて踊る、否、踊らされている。この呪文は、敵を術者の動きに合わせてしまうのだ。それはクリアのような強力な魔物ですら抗う事は叶わない。

「か……体が勝手に……」

これにはクリアも動揺を隠せない。クリアはガツシユ達に一撃を喰らわせる事が出来なかつた。そして踊りのせいで隙が生じる。

『今のうちよ、ガツシユちゃん!!』

『ヤバい反撃が来る前に、そこを離れるゲロ!!』

「パティ!!ビョンコ!!」

パティと、カエルのような姿をした魔物「ビョンコ」が来てくれた。ビョンコもパティと同じくガツシユ達と敵対していた。しかし彼等の姿を見て改心し、自らリスクを冒しながらもガツシユ達を守ってくれた。

「シン・スオウ・ギアクル!!」

パティの呪文により、巨大な水の龍が召喚される。それは通常の「スオウ・ギアクル」よりもさらに大きくて強力だ。長い体を持つ水龍の外見は美しく神秘的ですらあるが、保持する力と水量はシン級の名に恥じない。

『アンド……』

「シン・ニュシルド!!」

水の龍に粘性の液体がまとわりつく。元はビヨンコの盾の呪文で、粘液で敵の攻撃を包む術だが、今回はパティの術に対して使用した。そして粘液を纏う水の龍は長い体を活かしてはクリアに絡みつき、その動きを封じる。

『ガツシユちゃん、後は頑張つて!魔界で待つてるわ!!』

『絶対に生き残つて、皆で一緒に遊ぶゲロよ!!』

「ウヌ!!」

2人はそう言い残して魔界へ帰って行く。彼等はガツシユの勝利を確信している。クリアが動けない間にガツシユペアは地上に戻る。そして2人はクリアに対して、最後の一撃を放とうとした。

LEVEL. 61 金色の時間

ガツシユペアは最後の一撃を放とうとするが、1人の魔物の少女がそれを止める。

『その前にやる事があるでしょ！清麿、そんなんじや持たないわよ？』

「確かにその通りだ……テイオ!!シン・サイフオジオ!!」

呪文を唱えると同時に、柄から丸みを帯びた刃が4本に伸びる剣が出現した。そして癒しの力を持つそれは清麿・ブラゴペア・殺せんせーの傷と体力を回復させる。この呪文は、術者の魔物以外の仲間を元気にしてくれる様だ。

「凄い回復力だ！」

「おやおや。力がみなぎってきますねえ、ヌルフフフ」

「そうね、ブラゴも元通りになったわ」

術を受けた彼等は笑みを浮かべる。殺せんせーの顔は、相変わらずの緑の縞々模様だ。またシエリーの言う通りに痩せこけたブラゴの体も回復したが、彼の意識が戻るには至らなかった。

「テイオ、ありがとうなのだ!!」

『もう一息だからね。ガツシユ、頑張りなさい!』

「ウヌ!!」

ティオの参戦、術による全員の体力回復。清麿達の勝利は確定したかに思われたその時、クリアは水の龍による拘束から逃れていた。それを見た清麿の顔色が変わる。

「あいつ、まさか!!」

「気付いてももう遅い……ここまで追い詰められるとは思わなかったが、お前達〃肉体を持つ者が行けない場所〃に行けば我が勝利は揺るがない……」

クリアの下半身があつた部位から、エネルギーが放たれる。しかし、それは清麿達にダメージを与える為の物では無い。クリアは自らの体をブースター替わりにし、放出されるエネルギーによって遙か上空を目指す。

「奴はどこに行こうとしておるのだ!!」

「……宇宙だ!!俺達はそこに行くことが出来ない。奴は宇宙空間で力を溜めて、そこからこの地球を丸ごと消そうとしている!!」

清麿は【アンサー答えを出す者】で最悪の答えを導き出す。しかしクリアの狙いが分かったところで、このままではどうする事も出来ない。現状彼等が宇宙に行く事は不可能なことから。

「にゅやツ!!ここにきてそんな……」

先程まで余裕の表情を浮かべていた殺せんせーだが、一瞬にしてその顔を真っ青にす

る。相変わらずテンパるのが速い。この状況、絶体絶命と思われたその時、また一人の魔物の少女が来てくれた。

『私が、ガツシユと清麿の命を守るわ』

「こんな力を持つていたのか……シン・ライフオジオ!!」

優しい光がガツシユペアの体を包む。その光に包まれた者は、どのような空間にいても“生命”が守られる。この術の持ち主はかつて、自分の力は誰かを傷付ける事しか出来ないいと絶望していた。しかし彼女の持つ優しい心と強い意志によって、遂に何かを守る為の術を会得するに至った。

『ガツシユ。私ね、人を傷付けるだけじゃなく、こんな力も持つていたみたい』

「コルル……とても優しい術なのだ」

ガツシユは大粒の涙を流しながら、コルルとの再会を喜ぶ。かつて自分が優しい王様を目指すきっかけとなった彼女もまた、ガツシユの味方をしてくれる。そんな彼を見て、コルルは優しく微笑んだ。

「もう少しだからの。必ず、優しい王様になって見せるのだ」

『うん、お願いね』

コルルは懇願するとともにその目から涙を流す。そしてガツシユペアは2人で宇宙空間に向かう為に、ガツシユがマントを広げる。そこに清麿が乗ると同時にガツシユの

仲間がまた来てくれた。

『メルメルメ〜!!』

「ウマゴン!!宇宙まで連れて行ってくれるのか!」

『メルメルメ〜!!』

「シン・シユドルク!!」

共に戦ってくれた仲間のウマゴンが、今度は彼等を宇宙空間まで行くのに協力してくれると言う。そして呪文を唱えようと、ガツシユの両肩には巨大なブースターが出現した。強力なその術で、ガツシユペアは超スピードで宇宙に向かう。魂の状態のウマゴンと共に。

(!!このスピードは……)

ガツシユの速さを見て、殺せんせーが対抗心を燃やす。先生はすでに落ち着いている。それだけの余裕と安心感を、ガツシユペアが提供してくれたのだ。そして殺せんせーも上空を目指す。

(宇宙空間に行くことは出来ない……ですが、目に見える範囲の攻撃をエネルギー砲で防ぐ事くらいなら!!)

クリアは強力な攻撃を地球目掛けて放とうとしている。ガツシユペアの攻撃がそれとぶつかり合った時、余波が地球を襲うかもしれない。殺せんせーはその事を危惧し

た。

宇宙空間。力を溜めている最中のクリアは、信じられない光景を目にする。肉体を持つガツシユペアが、地球を背に宇宙空間に來ているのだ。

「おのれ、なぜ來れる!!」

当然クリアは驚愕する。そしてクリアは時間をかけて溜めた消滅波を、彼等目掛けて放とうとする。

「ならば、最大の一撃を喰らわせるまでよ……お前達は避けられない。なぜなら、お前達の後ろには地球がある……時間をかけて溜めたこの一撃、これで終わりだー!!」

クリアから極太の消滅波の光線が放たれる。それがガツシユペア及び地球に直撃したかに思われたが、その攻撃はそれらをすり抜けてしまった。当然彼等にはダメージは無い。

「何だと……どうなっている?」

『君は幻を攻撃したからさ。流星は清麿、呪文を唱えるタイミングを分かっている……僕、キャンチョメの“シン・ポルク”をね』

清麿は事前にキャンチョメの最強呪文を唱えていたのだ。どんな幻覚をも自由に相

手に見せられる呪文を。この呪文の効果はそれだけでは無いが、クリアの攻撃を本物の地球から逸らすという目的は幻を作る事で無事に果たされた。

『もうちよつとしたら術も解けて、ガツシユ達の姿が見える様になるよ。時間を稼がせてね……僕ら魔物の皆が、君を倒す為にガツシユの元に集まる間は』

キャンチョメの言う通り、多くの魔物達の魂がガツシユペアの元へ駆け付ける。そして彼等の力が金色の本に蓄積されていく。当然クリアには何が起こっているのかが理解出来ない。

「一体どうなっている……だが、全方位に強力な消滅波を放てば……」

『させると思うか?』

クリアが大きな魔力に気付いて後ろを振り向くと、下半身が砲台で2本の角と4枚の翼を持つ銀色の巨大な雷神が出現している。その術の禍々しさと迫力を見る者を戦慄させるのに十分だ。それはクリアとして例外では無い。そしてそのすぐ下には、ガツシユの兄であるゼオンがいる。清磨はキャンチョメだけでなく、ゼオンの呪文をも事前に唱えていたのだ。

『“ジガディラス・シン・ザケルガ”だ。より短いチャージで、さらに強力な電撃を放てる様になった。喰らえ!!』

「ZIGAAA……」

「おのれえ!!」

雷神の砲口から放たれる銀色の極太な電撃がクリアを襲う。クリアの巨体をも覆いかねない広範囲な一撃はかわす事すら困難だ。その威力は言うまでもない。ゼオンのシン級の術をまともに喰らえば、クリアとてただでは済まない。止む無くクリアは全方位に放とうとした消滅波を一直線の光線状に変えて、ゼオンの電撃にぶつける。

「我が攻撃が……押し負けるだど!!」

銀の電撃が少しずつ消滅波を押ししていく。クリアが力を溜めて放った攻撃にも競り勝てる程にそれは強力だ。そして電撃はクリアに直撃する。しかしクリアは自らの急所を腕でガードしていた為、致命傷を負う事は無かった。こうしている間にも、ガツシユペアの元には、より多くの魔物達が集結する。

その頃地球では、ブラゴが目を覚ましていた。

「シェリー、本を。俺の力も、ガツシユの元へ……」

ブラゴは宇宙空間で何が起こっているかを察する事が出来た。そして彼は自分の力を、魔本を通してガツシユペアの元へ送る。

そして宇宙空間では、ガツシユペアがゼオンの元まで来ていた。その時の彼の表情はともも穏やかだ。

『ガツシユ……よくここまで頑張ったな』

「ゼオン！お主こそ、力を貸してくれてありがとうなのだ」

ガツシユの礼を聞いて、ゼオンは嬉しそうな顔を見せる。彼等はかつてすれ違いで敵対してしまっただが、お互いの思いを込めた最大呪文のぶつかり合いを経て和解した。そんなゼオンもまた、ここまで死力を尽くした実の弟であるガツシユを次期王として認められている。

『金色の本が持つ力、そういう事だったのか。ガツシユ……お前はどんなに追い詰められても、最後まで俺達を救う事を諦めずに戦い続けてくれた。その姿はまさに王だ。だからガツシユの本は金色に輝き、本の持つ真の力を引き出した。お前の民を思う姿は、魔界に住まう魔物の心の一つにした』

ゼオンはこの戦いを見て、王とは民の為に全てを捧ぐ者であると理解した。そして彼は魔界の皆の為に絶望に立ち向かうガツシユこそ、王の姿そのものであると感銘を受けていた。他の魔物達もまた同じ事を考えており、皆がガツシユに力を与えてくれる。そこには敵も味方も無い。全ての魔物がそこに集まる。

『ガツシュ、清磨。皆の力をバオウに集め、クリアを倒すぞ!!』

ゼオンの指示に従い、ガツシュペアは金色の本に力を溜める。そして次の一撃に全てを注ぐ為にガツシュはシン・シユドルクを解いた。魔界の皆の力が彼等に集まると本だけでなく、ガツシュペアの体までもが金色に輝く。そして、全ての魔物の力が収束された最強の呪文の名を清磨が唱えた。

「シン・ベルワン・バオウ・ザケルガ!!」

ガツシュの口から電撃を纏う金色の龍が出現する。それは通常のバオウとは異なり、西洋のドラゴンのような姿をしており、両手及び胸部にも龍の頭を持つ。その体はクリアの何倍もの大きさを誇り、威力も他の呪文とは比べ物にならない程に強大だ。ガツシュペアは魔界の皆が心と力を合わせた術をもって、魔界を滅ぼす存在に打ち勝とうとする。

「バオオオオ!!」

その姿を見たクリアは狼狽する。しかし自分の力に絶対の自信を持つが故に、クリアは引こうとはしない。そして金色の龍を打ち負かす為に、今残る全てのエネルギーを最後の一撃に込める。

「どんな術だろうと……我が、負ける訳が無い!!」

クリアは極太の消滅波を放つ。それはバオウに直撃するが、押し勝つ事は叶わない。

皆の力が合わさった術はいかなる攻撃をも受け付けない。そして敵の攻撃を受けてもビクともしない金色の龍は、消滅波ごとクリアの体を飲み込んだ。絶対的な力を誇り、ガツシユ達を絶望のどん底に突き落としたクリアの力は遂に消滅しようとしていた。

「おおお……おのれ……」

「バオオオオ!!」

バオオウの電撃はクリアを打ち砕いた。そしてクリアの中にいたヴィノーがようやく出現したが、彼を纏うバリアは電撃によつて破られ、クリアの持つ透明の本は燃え尽きた。

「シン・ライフオジオ!!」

無防備になったヴィノーに対して、コルルが優しい光を纏わせる。クリアの消滅の力は打ち砕かれ、この戦いはガツシユ達の勝利となった。

「やったな、ガツシユ」

「ウヌ……」

清磨が労いの言葉をかけるが、ガツシユは彼の方を向いていない。ガツシユの視線の先には、この戦いに力を貸してくれた魔物達が集結している。

「皆、本当にありがとう!!皆のお陰なのだ!!」

彼等の存在無くして、この戦いの勝利は有り得なかった。それ程にクリアの力は絶望

的だった。それでも諦めずに立ち向かった結果、金色の本の力が出現し、魔界を守る事が出来た。他の魔物達も、歓喜の声を上げる。

戦いを終えたガツシュペアはヴィノーを抱えて地球に舞い戻る。そこには、ブラゴペアと殺せんせーが待ち構えていた。

「……見事だ」

「2人共、クリアを倒してきたのね。これで魔界の滅亡の心配は無くなったわ」
「本当に、お疲れ様でした」

彼等は安堵の表情を見せながら2人に労いの言葉をかける。そして殺せんせーは穏やかな笑みを浮かべながら自分の触手をガツシュペアの頭に置く。これで大きな戦いの1つは終わったのだと皆が確信していた。その時、

「にゅやあ。高嶺君とガツシュ君、聞きたい事があるのですが……」
「ウヌ？」

先程までとは打って変わり、殺せんせーが冷や汗を掻き始める。2人共何事かと思つて身構えるが、先生の質問を聞いて拍子抜けする。

「……本が金色に輝くのは……君達の意志で出来るのですか？」

「何だ、そのことか……」

「何だじゃありません!!先生にとつては死活問題なんです!!」

シン級のラッシュは、マツハ20の速度を誇る殺せんせーにとつても脅威だ。場合によつては、金色の本だけで暗殺が成功しかねない。殺せんせーはその事を危惧して、再びテンパリ始めたのだった。

(それ、私も聞こうと思つていたのよね……)

シエリーが心の中で呟く。彼女達は最終的にガッシュペアと戦わなくてはならない。金色の本の事についてはブラゴペアにとつても重要な事だ。自分達がいくら打倒クリアの為に厳しい特訓を積み重ねて来たとは言え、金色の本の力は大きすぎる。彼女がそんな事を考えていると、清麿が口を開いた。

「多分、そうはならないと思う。クリアとの戦いは、魔界の存続がかかった緊急事態だったし」

その答えを聞いて殺せんせーとシエリーは安心する。

「そうですか……さて、先生は先に戻ります。皆も待つていますし、今日は渚君の3者面談の日ですからねえ。それでは!!」

殺せんせーがそう言い残して、超スピードで去つた。E組の担任である彼は、いつまでも教室を開けておく訳にはいかない。それだけでなく、渚の母親との話し合いもある

のだから。

「嵐の様に去って行ったわね……」

シエリーが呆れ混じりの表情でそう言った。そして、少しの間の沈黙がこの場に流れる。

4人はしばらく言葉が話さなかったが、この沈黙を清磨が破った。

「なあ、2人共……殺せんせーの事、何も聞かなくて良いのか？」

魔物でもないのにもかかわらず、殺せんせーは非現実的な存在だ。しかもマツハ20の速度で飛び回り、今回の戦いでも高い実力を遺憾なく発揮していたのだから、その正体を知りたがるのはごく自然な事だろう。しかしブラゴペアは、殺せんせーの正体については言及して来なかった。

「全く気にならないって言えば、嘘になるわね。いきなり現れた時はビックリしたもの」「そうだな……だが、敵ではないのだろうか？」

2人は言い放つ。確かに殺せんせーはいつも清磨達の事をよく考えてくれており、今回の戦いでも自らの命を賭して力を貸してくれた。しかし殺せんせーは地球を滅ぼそうとしている。その事実を知れば、2人も黙ってはいないだろう。ガツシュペアが殺せんせーの事を話すかどうか悩んでいると、シエリーが再び口を開いた。

「それより、私達には話し合う事があるでしょう？……魔界の王を決める為の最後の戦

い、いつがいいかしらね？」

クリアを倒しても彼等の戦いは終わらない。最後まで残ったこの2組が決着をつけない限りは。流石に今すぐ戦う意志は彼等も持ち合わせていないが、逃れられない勝負である。それを聞いた清磨は、少し申し訳なさそうな顔を見せる。

「その事なんだが……3月まで待つてくれないか？」

「大分先延ばしにするのね」

清磨の提案に、シエリーが意外そうな顔をする。

「この戦いが終われば、どっちが勝つてもガツシユと別れる事になるからな。3月には俺の中学校の卒業式がある。ガツシユにもそこにおいて欲しいんだ」

ガツシユは今、清磨と同じくE組の生徒の1人だ。だから卒業式までは一緒にいたいと清磨は考えている。E組全員で卒業式を終えた上で、ブラゴペアとの戦いに臨みたいのだと。

「それに……」

「あの超生物絡みか？」

ブラゴが清磨の言葉を遮る。

「奴が何者かは知らんが、恐らくお前達で解決すべき事なのだろうな。どうしてもと言うのなら、力を貸してやらんでも無いが。マツハ20の超生物か……一度手合わせした

くはある」

彼はまるで、ある程度殺せんせーについて分かっているような物言いだった。殺せんせーとE組の絆、殺意で結ばれるそれは部外者が介入すべき事では無いのだと、そこまで見通しているかの様である。殺せんせーと共に戦い、確証はない物の先生の正体についてある程度本気で理解出来たのかもしれない。

「俺達と戦うまでに、やり残した事は全てやっておけ。そしてわだかまりの無い状態のお前等を全力で倒し、俺はどんな奴でも治められる王になる」

ブラゴの勝利宣告だ。彼等がかつてガツシユペアを實質敗北に近い形までに追い詰めた事がある。その事によりガツシユペアは魔物の王を決める戦いを知り、ブラゴペアにライバルという物を感じた。そんな彼等との最終決戦、一切の未練が無い状態で挑まなくては許されない。

「良い戦いにしよう」

「そうね、お互いの全てをぶつけ合う事になるでしょうね」

彼等は向き合う。そして4人が戦う意志を固めていると、1機のヘリコプターがすぐ近くまで来た。彼等の元に来たヘリコプターには、共に戦ってくれた恵とサンビーム以外にも、彼等に強くなる為の道筋を示してくれたデュフォーが乗っている。そしてヘリコプターの扉が開くと、彼等はそこから降りて来た。

「皆、無事だったか!」

まずはサンビームが、彼等の安否を確認する。今回の戦いは余りにも壮絶な物であり、清磨達の事が心配で気が気でなかったようである。

「勝って良かった!!」

続いて恵が目には涙を溜めながら、ガツシユに抱き着く。戦いに勝利できた事で、喜びの感情以上に心底安心している様だ。その後降りて来たデュフォーは無事に戦いを終えてくれた彼等を見て無言で頷いた。そして一行はヘリコプターに搭乗し、それぞれの帰る場所を目指すのだった。

LEVEL. 62 帰還の時間

「皆、よくやってくれた。これで魔界は滅びずに済んだ」

空中を飛ぶヘリコプターの中で、デュフォアが労いの言葉をかけてくれた。この戦いでテイオとウマゴンは魔界へ帰る事になってしまったが、彼等は見事に魔界を守り切れた。その事実に対して一同はひとまず安心する。そしてデュフォアは話し続ける。

「それから、いくつか話さないといけない事がある。まずはクリアのパートナーの事なのだが……」

彼はヴィノーの話題を出した。彼女は本の持ち主としてクリアに育てられて来たが、本当の両親の所在が分からない。そこでどうにかヴィノーの親を見つけた上で彼女を引き取ってもらう必要があるが、その為の手掛かりがほとんどない状態だ。

「ヴィノーの両親が見つかるまで、ナゾナゾ博士が預かってくれるそうだ。そして両親を探し出すとも言っている。ナゾナゾ博士は今、フランスの空港にいる」

「それなら、私とブラゴがこの子を紳士^{ムッシュ}殿に渡せばいいわね」

ヴィノーをどうするかは決まった。ナゾナゾ博士の行動力及び幅広い知識・人脈があれば、手掛かりが少ない状態でもヴィノーの親を探し出してくれるだろう。またユーモ

アに溢れた博士なら、赤子であるヴィノーを退屈させる事も無い。
「さて、次が本題だ」

クリアとの戦いが終わり比較的柔らかな表情を見せていたデュフオーだったが、彼の顔が真剣な物になる。そんな彼を見て、サンビームと恵が清麿に聞いたです。

「清麿、あの黄色いタコみたいな生物は何だったんだ？」

「ガツシユ君達の味方みたいだったけど……」

殺せんせーは2人に見られていたのだ。国家機密である先生は普段は人目に付かないように細心の注意を払っているが、クリアとの戦いに意識が集中しており、誰かに目撃されるリスクが頭から抜けてしまっていた。

「俺達がヘリコプターでお前達の方に向かっている途中で奴を見た。ガツシユと清麿が宇宙にいる時だな」

殺せんせーは上空でクリアの攻撃による余波を警戒している時に、彼等に見つかった。しかし状況が状況である為、清麿は先生を責めるような事は考えていない。

「ウヌう、清麿……」

「殺せんせー、見られてたんだな……」

ガツシユペアはうつむく。殺せんせーの事は国家機密である為に極力話すべきでは無いが、今ここにいるのは共に厳しい戦いを乗り越えて来た仲間だ。地球を滅ぼそうと

している殺せんせーの存在を、皆に黙認するのは抵抗がある。

「その事なんだが……」

殺せんせーが実際に見られてしまった以上、隠し通すのは容易では無い。そして清磨は殺せんせーについての事情を話す決断を下した。先生が地球を滅ぼそうとしている事、E組内で行われている暗殺の事など、これらを聞いた仲間達は複雑な心境となる。ちなみにヘリコプターのパイロットは運転に集中しており、この話は聞いていない。

「地球を滅ぼそうとしているマツハ20の超生物か……戦う相手としては申し分ないな」

殺せんせーが地球を滅亡させる事を聞いたブラゴは殺せんせーと戦う気概を見せる。ブラゴの重力をもってすれば、殺せんせーの超スピードも妨害出来るかもしれない。一方でシエリーは沈黙を突き通す。それからサンビームが口を開いた。

「清磨、一つ確認したい」

「それは？」

清磨がサンビームの方を向く。

「この事を黙っていたのは、我々にクリアの事に専念してもらおう為か？」

彼はハッキリさせておきたかったのだ。どうしてガツシユペアがこれ程に深刻な問題を、自分達だけで抱え込んでいたのかを。

「ああ、その通りだ。こんな重要な事を皆に黙っていたのは、申し訳なく思っている」
「そうか……」

清磨の謝罪を聞いたサンビームは頭を抱える。殺せんせーの事を知っても、今の彼にはウマゴンがない。直接殺せんせーをどうにかする手段を持ち合わせていないのだ。そんな自分の無力さをサンビームは感じている。

「清磨君とガツシユ君は、魔界と地球の危機の両方に直面していたって事よね……」

恵が顔色を悪くする。魔界と地球の滅亡。片方だけでもガツシユペアの心を疲弊させるには十分だというのに、彼等はそのどちらも背負っていたのだ。その重圧に耐えるのは、生半可な精神力では不可能だ。そんな事情を知った彼女は、2人がクリア以外の何かを抱えている事に気付けなかった事で罪悪感に苛まれる。

「……でも、変じやないかしら？」

先程まで言葉を発していなかったシエリーが口を開いた。

「あの超生物が地球を滅ぼす悪党だというのなら、この戦いに力を貸してくれた事の説明が付かない。それにガツシユも清磨も、あれの事は信用しているみたいだったし」

シエリーの疑問はもつともだ。殺せんせーが悪い者であれば、クリアとの戦いに協力してくれる理由が分からない。E組の事を何よりも考えてくれる殺せんせーについてかつてガツシユペアも同じ事を問い詰めたが、答えは得られていない。

「そもそも、あの超生物の正体を【答えを出す者】で導き出せば……」

「いや、それはしたくないんだ」

彼女の提案を清磨が拒否した。

「地球の危機なのに何言ってるんだって思われてもおかしくない。でも殺せんせーの正体にはこの力を使わずに、E組の皆と一緒に辿り着きたいんだ。殺せんせーは散々クラスのために尽くしてくれた。その事に報いるには、E組で殺せんせー暗殺を成功させた上で正体を知る。それしかないと思ってる」

「ウヌ……皆に話していなかったのは済まぬのだが、私達に任せて欲しいのだ」

ガツシユペアの決意は固い。あくまでE組の力で殺せんせー暗殺を成してこそ意味があるのだと。彼等はこの考えを変えるつもりは無い。その主張を聞いた一同は、この事に納得したような表情を見せる。

「分かった。だが、もし我々に出来る事があるようならいつでも言ってみて欲しい」

まずはサンビームがそう言う。ウマゴンがいない状態でも、やれる事が何かしらあるはずだと彼は確信している。

「私は日本にいるから、困った事があれば相談してね！」

続いて恵が微笑みかけてくれる。これまでの戦いで仲間同士支え合ってきたが、魔物の戦いが終わったとしても、彼女はガツシユペアを支えてくれる。

「2人共、ありがとう（なのだ）!!」

ガツシユペアは礼を言う。地球の危機だというのに、彼等は自分達の考えを理解してくれた上で力になってくれるのだから。これ程嬉しい事は無い。魔物の戦いで得られた絆はこれからも失われない。

「あなた達の気持ちは分かったけれど、あの超生物の正体は私も興味があるのよね。^{ムッシュユ}紳士殿を通して、個人的にあれの正体を探るくらいは構わないかしら？」

「ああ、分かった」

ブラゴペアもまた、この戦いで殺せんせーに力を貸してもらっている。そんな先生の事にシエリーが興味を持つのは何らおかしくはない。そんな彼女の言葉に清麿は同意する。

「もつとも……デユフォー、あなたはその正体に気付いているみたいだけれど」

「^{アンサー}【答えを出す者】で奴を見たからな。だが、それをここで話すわけにはいかない」

シエリーがデユフォーの方を見る。彼は殺せんせーの事を知った上で、その処遇をガツシユペア及び他のE組に一任している。

「奴の打倒に関して、今はお前等に任せてやる。マツハ20の超生物を相手取るんだ。俺達の最後の戦いに向けて良い特訓になるんじゃないのか？だが、根を上げる様ならいつでも言え。その時は俺達があいつを仕留める！」

ブラゴは自信ありげにガツシユペアに言い放つ。その気になれば、殺せんせーもガツシユペアも自分とシエリーで打倒する事が出来るのだと。

「バカいえ、それを成し遂げるのは俺達だ！」

「ウヌー！」

ブラゴの挑発にガツシユペアが答える。お互いに自分の勝ちを譲るつもりは一切ない。そして殺せんせーの事も話し終わり、彼等はそれぞれの目的地を目指す。

ヘリコプターは初めにフランスに着陸した。ブラゴペアがそこで降りた後、2人は空港で待ち受けるナゾナゾ博士と合流し、ヴィノーを引き渡した。そこで彼等は、殺せんせーの事を改めて聞いた。続いてアフリカの空港に辿り着く。そこでサンビームは残りのメンバーに別れの挨拶を交わした後、1人ヘリコプターを降りた。

（ふう、私の戦いも終わってしまったか……）

彼はウマゴンとの戦いの日々を思い出しながら、空港の出口を目指す。

（考えてみれば、ウマゴンと一緒に入れた時間はそれ程長くは無かったな）

ウマゴンがサンビームと共に初めて戦ったのは千年前の魔物との戦いの時であり、ガツシユ達がパートナーと出会うよりも大分後の話である。その戦いが終わっても彼

の宿舎はペット同伴が叶わず、ウマゴンは主に清麿宅の小屋で生活していた。しかし過ぎ去った時間が長くなくても彼等の絆は本物だ。

(ウマゴン……共に戦えた事を、誇りに思うぞ)

ウマゴンは己の機動力を活かして、戦いの時はいつも体を張っていた。そんな彼に仲間は何度も助けられてきたのだ。ウマゴンの事を考えていると、気付けばサンビームの目には涙が溜まっていた。

「うう、ウマゴン……」

我慢の限界に達し、ついにサンビームは泣き出した。どれだけ人目に付こうとも構わずに、彼は涙を流し続けて下を向く。それだけウマゴンとの別れは悲しい物である。そんな彼を見かねたのか、1人の女性がサンビームの元へ駆け寄り、ハンカチを差し出した。

「おおよ……大丈夫ですか？」

「あ、あなたは……」

ハンカチを受け取ったサンビームが顔を上げると、そこには修道服を来た女性が立っていた。

「サンビームさん、本当にお疲れ様でした」

その女性の名はエル・シーバス。かつてモモンと共にガツシュ達と戦ってくれたパー

トナーである。彼女はナゾナゾ博士の手紙を受け取り、クリアとの戦いについても知っていた。そんなシスターはすぐにサンビームがウマゴンと別れた事を察して、労いの言葉をかけてくれたのだ。

「ここでは何ですので、どこか入りませんか？」

「……ああ、そうしようか」

そして2人は空港内の喫茶店に入っていく。それから紆余曲折を経て、彼等が同居生活をはじめるのは別の話である。

場面はヘリコプターに戻る。その中ではしばらくの間沈黙が続いたが、恵が口を開いた。

「サンビームさん、大丈夫かしら？」

彼女はウマゴンと別れたサンビームの身を案じている。自身もティオと別れてしまい、パートナーの魔物を失う辛さがよくわかるのだ。そんな恵を見たガツシユペアは悲し気な顔を見せる。

「はっ……ごめんなさい。場を暗くしてしまって……」

「いや、恵さん。そんな事は……」

2人の顔色を見た恵はすぐに謝罪する。これ以上雰囲気を重ねたくする訳にはいかないのだと。それを聞いた清麿はすぐにフォローを入れた。そして恵はなるべく明るい話題を振り続け、話を極力途切らせないようにしてくれた。まるで、自らの感情を誤魔化すかのように。

そして翌日の早朝、ヘリコプターは日本の空港に辿り着いた。ガツシユペア・恵・デュフォーは無言でヘリを降りて、歩き続ける。そして彼等が出口を目指している途中の広場で、中高生くらいの団体がそこに待ち構えているのを見かける。こんな朝早くから何事かと彼等は思ったが、その団体はガツシユペアが良く知る集まりだった。

「無事に帰ってきてくれたんだね」

「皆さん、本当に良かったです。私、心配で心配で……」

そこにはE組のクラスメイト達が彼等を出迎えてくれていた。まずはカルマと奥田が前に出て、安心したような表情で声をかける。また奥田の目は少し潤んでいた。彼等の帰還を知って、涙を浮かべるほどに嬉しかったのだ。

「待っていてくれておったのか……」

これにはガツシユペアも驚きを隠せない。自分達が日本に戻るタイミングで、彼等が

その場に来てくれたのだから。

「……俺は先に戻るぞ」

「お、おう」

E組のクラスメイト達を見たデュフォアは清磨に声をかけた後、1人彼の家に戻って行った。そして清磨は再びE組の方を見る。

「しかし皆、どうして……」

「私もいるあるー!」

清磨が言葉を詰まらせていると、また1人別の仲間が出迎えてくれていた。

「「リイエン?!!」」

そこにはリイエンがいた。彼女もまたナゾナゾ博士からこの戦いの事を聞いており、丁度日本に滞在していた為に空港まで来てくれていたのだ。これにはガツシユペアも恵も驚く。そしてリイエンが清磨の近くまで来て、小声で話しかけた。

(清磨、恵と2人で話をさせて欲しいある)

清磨は恵がテイオの事をとて悲しみ、今にも泣きだしそうな状態である事を分かっている。しかし、気丈に振舞おうとする彼女に水を差す訳にはいかない。どうしたものかと考えていた矢先にリイエンが気を利かせてくれた。

(済まない。恵さんの事は任せるぞ)

(了解ある！)

清磨の頼みを了承した後、彼女は恵の腕を掴んだ。

「恵、こつちに來て欲しいあるよ！」

「リイエン、どうしたの?!!」

戸惑う恵に構わず、リイエンはその腕を引つ張り続ける。そして彼女は恵と共にその場を離れた。

リイエンに連れられた恵は、一足先に空港の外に出る。まだ朝早い時間帯であり、外も薄暗く、人通りも無い道で2人は向き合つて立ち止まっていた。

「恵、ここなら誰もいないあるよ。もしあなたが1人になりたいのなら、私はガツシュ達の所に戻るある」

リイエンは優しい気にそう言う。彼女はテイオと別れた悲しみをこらえる恵の事を考へて、人が見えていない場所まで連れて来てくれたのだ。そんなリイエンの考えを察した恵は首を横に振り、今度は自らが彼女の手を握る。共にここにいて欲しいのだと。

「テイオつてね、初めは心を閉ざしていたの……親しい魔物に裏切られたつて」

恵はテイオとの出会いを話し始める。マルスの襲撃を受けたテイオは海に落ちたが、

そんな彼女を恵が救出した。ティオは恵と出会い、そして人間界でガツシユペアに助けられる事でもうやく安心する場所を手にする事が出来たのだ。

「それでも段々と心を開いてくれるようになって……あの子と過ごしていると本当の妹が出来たみたいで……」

恵は魔物の戦い以外にも、アイドルとしての仕事がとても忙しい。そんな彼女をティオは支えてくれていた。そして2人で生活するうちに、彼女達は本当の姉妹のように仲良くなっていたのだ。恵の話をリイエンは黙って頷きながら聞いている。

「でも……もうティオは一緒じゃない。私……あの子のいない生活なんて考えられない……」

恵の目からは涙が溢れ出る。

「……ティオ、ティオ、ティオ……!!うわあああああつ!!」

そして彼女は我慢の限界に達したかのように泣きじゃくる。これまで当たり前のように隣にいてくれた少女はそこにいないのだ。そんな恵を見て、今までは話を聞く事に徹していたリイエンが彼女を優しく抱きしめる。

「恵……」

リイエンの目からも涙が流れる。彼女もまたウォンレイとの別れを経験しており、恵の気持ちは痛い程に分かるのだ。ウォンレイが魔界に帰った時は、ティオペアがその場

にいてくれた。その事は多少なりともリイエンの支えになつただろう。そんな彼女は、今度は自らが恵を支えようとしている。

「私……リイエンみたいに、強くはなれないよ……」

リイエンは今でも心でウオレンレイと強い絆で結ばれている。だからお互い離れていても気丈でいられる。その事が恵の目にはとても強かに映っているのだ。

「恵……あなたの心の中に、テイオはずっといるある」

リイエンは恵の耳元でそう呟く、まるで自分にも言い聞かせるように。そして恵はしばらくした後によろやく泣き止み、2人は今日一日行動を共にするのだった。

場面は空港の中に変わる。ガツシユペアは、自分達を待つてくれていたクラスメイト達と向き合う。そして矢田が口を開いた。

「2人が帰つて来る時間を律に調べてもらつたの。その後リイエンさんが日本にいらつて話を聞いたから、一緒に来たんだよ。2人共無事に……」

彼女はここに来た経緯を話してくれたが、その言葉を遮るかのように1人の女生徒が全速力で前に出て来て、ガツシユに抱き着いた。茅野だ。

「ガツシユ君!!ちゃんと帰つてきてくれて本当に良かった!!うわーん!!」

「カエデ、ただいまなのだ！」

彼女は大粒の涙を流す。それ程に心配だったのだ。二度と会う事は無くなってしまうのではないかと、茅野は気が気でなかった。

「もう、カエデちゃんたら……高嶺君だっているのに」
「はっ……ごめんね」

泣きじやくる茅野を見かねた矢田が、呆れた表情を見せながら彼女の頭に手を置く。そしてようやく平常心を取り戻せた茅野が、恥ずかしそうな顔をして謝罪する。茅野はガツシユを思うあまり、清麿の事をおざなりにしてしまったと少し罪悪感に苛まれる。

「そーだよ茅野ちゃん。見てみ、高嶺が嫉妬してるから」

「相変わらずだねえ、高嶺君は」

「やかましい！」

このような場面でも、中村とカルマは平然と清麿を煽ってくる。彼等がブレる事は無いだろう。清麿は2人の発言を否定しつつもクラスメイトと他愛のない会話をする事で、無事に帰ってこられた喜びに浸る。

「これでガツシユ君が優しい王様になるまであとちよつとだね」

矢田はそう言いながら、ガツシユと目線を合わせる為にしゃがんだ後に彼の両肩に手の平を乗せる。

「そうだの、桃花。私は優しい王様になって、誰も争わないで良いような世界を作るのだ！」

「うん！」

ガツシユの決意を聞いた矢田は満足気な顔を見せる。かつて暗殺肝試しの時に、争いが苦手な彼女はガツシユに魔界で皆が平和に暮らせるような世界を作るようお願いした事がある。ガツシユはそれを覚えられていたのだ。

「2人共、お疲れ様〜」

そんな中、倉橋がいつも通りのゆるふわな口調で2人を労う。しかし彼女の瞳は、どういう訳か少し赤くなっていた。そして彼女を見てガツシユペアの顔が険しくなる。

「陽菜乃、済まぬのだ……」

「え、何でガツシユちゃんが謝るの？」

「ウマゴンは、魔界に帰ってしまったからの……」

ウマゴンとティオの送還。今回の戦いは自分達の勝利で終える事は出来たが、彼等は再び日本の地を踏む事は叶わなかった。ウマゴンと倉橋は短い付き合いの中でも親睦を深めており、そんな2人が会う事が出来なくなった事に対してガツシユペアは申し訳なく感じていた。しかし、

「……知ってるよ、その事は」

「……どういう事だ、倉橋？」

彼女はその事を既に分かっていた。だが、どうしてそれを知れたのかが不明であり、清麿は問いただす。その時、彼のスマホから律が起動した。

「はい。僭越ながら、今回の戦いはクラスの皆で見させて頂きました」

「えっ!!」

律の本体は、色々な物質を作り上げる事が可能だ。そして彼女は飛行型の超小型カメラを制作し、それを殺せんせーに付けたのだ。そのカメラは律の本体と繋がっており、彼女を通してE組の皆はその戦いを観戦する事が出来たのだ。これにはガツシユペアも驚愕する。

「だが、授業中じゃなかったのか? どうして……」

「ビッチ先生が自習にしてくれたんだよ」

清麿の疑問には不破が答える。午後一発目はビッチ先生の授業であり、彼女が気を利かせてくれたのだと。

「魔物同士の戦い……見てて寿命が縮まった気がしたかな……」

片岡が軽く汗を掻きながら口を開く。常人にとっては異次元でしかないこの戦いを実際に見るのは、かなり刺激が強かったようだ。

「そこにウマゴンちゃんといちやんとティオちゃんがいなかったから、魔界に帰っちゃったんだろ

うなつて……」

「そうだったのか……」

殺せんせーが来た時には、既にテイオとウマゴンが魔界に帰った後である。カメラには殺せんせー以外にガツシユペアとブラゴペアしか映っておらず、彼等が送還された事を察する事が出来たのだ。そしてウマゴンの別れを知った倉橋は、涙を流した。その事に清麿が納得しながらも、彼はこの場に一人の生徒がいない事に気付く。

「あれ、渚はいないのか……」

「渚は朝、やる事があるって言ってたぞ」

磯貝が教えてくれる。そして渚の事を考えたガツシユペアはある事を気にした。

「渚と言えば……あいつは大丈夫だったのか?！」

「ウヌウ、渚の母上殿との事はどうなったのだ?！」

「あいつは今日もE組に来るぜ。あとは本人に話を聞いた方が良いんじゃないやね?」

「良かった(のだ)」

ガツシユペアの疑問に前原が答える。その問題は無事に解決したようだ。それを知った彼等は安心するが、そんな2人に対して速水が呆れたような顔を見せる。

「こんな時まで人の心配って、アンタ達はブレないわね」

自分達が壮絶な戦いを終えて来たばかりにもかかわらず、2人が渚を気にかける様子

を見た彼女がそう言う。しかし、常に人を気にかけてくれる事こそが彼等の強さであると彼女には分かっている。

「そろそろここを出た方が良いんじゃないかなのか？ 学校もあるだろう。お前等、今日は疲れただから休むとか言わないよな？」

イトナが時計を見ながら2人を煽るような口調で話す。彼はガツシユペアならここで弱音を吐かない事を分かった上で試すような素振りを見せてきた。クリアとの戦いが終わっても、E組での暗殺生活はまだまだ終わらないのだから。

「もちろん登校するさ。殺せんせーにもちゃんとお礼を言えてないし、渚の事も気になるからな」

「ずっと学校は休み続けてしまったからの」

2人は休むつもりなど無い。そして一同は空港を出る。ちなみにガツシユペアは一度家に戻り、登校の準備を改めて済ました後に学校に向かうようにした。

番外編 応援の時間

時は遡る。殺せんせーがガツシユペアの元に向かった後、ビッチ先生が3者面談を行う場合に備えて模擬練習が行われたがあまり捗らなかつた。そんな時、律の画面に清麿達の映像が流れている事に一同が気付く。

「ようやく起動しました」

「律、どういう事かしら?」

「はい、イリーナ先生。殺せんせーには、私が作った超小型カメラを付けておきました。カメラの動きは私が操る事も出来ません」

それを聞いた彼等は律の性能の高さを改めて思い知る。律自身も清麿達が心配で、戦いの様子を見ておきたかったのだ。そしてビッチ先生は何かを察した様に、わざとらしい口調で話し始める。

「……私、体調が悪くなってきたわ。午後の授業は自習にするしかないわね。ガキ共、ちゃんと勉強してなさい……間違ってもタコ達の戦いなんて見てるんじゃないわよ」

ビッチ先生が仮病を使っているのは言うまでもない。当然生徒一同、それに気付いている。そんな先生に対して、矢田が声をかける。

「ビッチ先生、それって……」

「そのまんまの意味よ、私は保健室で休んでくるわ。誰も見てないからって、あんまり騒ぐんじゃないわよ?」

彼女はそう言い残して教室を出た。ビッチ先生は、生徒達が心置きなく清磨達の戦いを見られるよう取り計らってくれたのだ。それを察した生徒達は早速律に移される画面に注目する。

「今日のビッチ先生、いつになく気が利くよな」

「まあ、3者面談の方はダメダメだったけどよ」

村松と吉田が口元に笑みを浮かべてそんな話をする。彼女の気遣いに皆感謝しているのだ。そして画面には清磨達がブラゴペアと合流する場面が映し出される。

「あの黒い少年は魔物かな。怖そうな見た目をしてるけど、ガツシユ達の味方みたいだね」

「何か刺々しいよな、あの魔物」

竹林と千葉がブラゴについて述べる。その外見から、彼等はブラゴに怖い印象を持つたようだ。

「となると、あの金髪のねーちゃんがパートナーか?……って超美人じゃねーか!!」

「高嶺の奴、あんな綺麗な人とまで知り合いなのかよ!! チクシヨー!!」

前原と岡島はシエリーに注目する。画面越しとはいえ緊張感漂う戦闘を見てもなお女性に興味を示す2人は流石だ。そんな様子を多くの女性陣が呆れた顔で見ている。そしてガツシユ君達の戦いの最中、茅野は険しい顔を見せる。

「ガツシユ君達の仲間の魔物って、彼だけなの？」

彼女はあの場にウマゴンとティオがいない事に気付く。この場面でなぜ彼等がいないのか、その理由は1つしかない。それを察したクラスの空気が一気に重くなる。

(そんな、ティオちゃん……)

渚はティオとは仲が良く、彼女が魔界に帰った事を知って辛そうな顔をする。そんな彼を見かねて、隣にいた杉野が声をかける。

「渚……」

しかし声は渚に届かない。ティオの送還は彼にとつてもショックだったのだ。

「おい、大丈夫か!」

「はっ……ごめん、杉野」

渚を心配する杉野は、彼の肩をゆすりながらより大きな声をかける。その甲斐もあつて、杉野の声はようやく渚に届いた。

「渚、ティオちゃんと仲良かったもんな……」

「うん。別れちゃったのは寂しいけど、今はガツシユ君達の応援をしないと!」

渚はあえて明るい表情で返事をする。辛いのは自分だけではないと、そう己に言い聞かせるように。その時、クラス内で誰かのすすり泣く声が聞こえた。

「うう……そんな……ウマゴンちゃん……」

涙を流すのは倉橋だ。彼女はウマゴンと親睦を深めており、それ故に彼が魔界へ帰った事実がより重くのしかかったのだ。そんな倉橋に多くの生徒達が心配の目を向ける。

「陽菜ちゃん……」

近くに座る矢田が彼女を抱き寄せ、その頭を撫でる。ウマゴンとの別れを受け止めきれない倉橋を見て、彼女もまた悲し気な顔を見せる。

「大丈夫、外に出る？」

「ううん、ちゃんと見てなきや。それに……」

泣き止む気配を見せない倉橋を見て、矢田が別の場所で彼女を落ち着かせようと提案する。しかし、倉橋はそれをしない。

「ガツシユちゃん達の方が、もっと辛いはずだから」

倉橋は自分以上に、彼等の方が仲間との別れを悲しんでいると確信している。そんなガツシユ達を差し置いて、自分だけがこの戦いから目を背ける訳にはいかないのだと、彼女は自分を奮い立たせる。

倉橋が泣き止んでからしばらく、E組一同は無言でガツシユ達の激闘を見守る。強力

な呪文の応酬、仲間同士の絶妙なコンビネーション、【アンサートーカー答えを出す者】によるハイレベルな指示、殺せんせーの速度。その戦いは自分達の次元を遥かに超える物であると、生徒達は否応なく分からされる。

「何だよこれ……本当に、現実世界で起きてる事なんだよな？」

「信じられねー。まるでアクション映画を見ているようだ」

菅谷と三村が怪訝な顔で言い放つ。しかし、そうなるのも無理はない。彼等の戦いは余りにも現実離れしているのだから。

「ていうかこの戦い。殺せんせーの速度に慣れてないと、目で追う事も出来ないんだけど」

「ここまで力の差をまじまじと見せつけられるのは、流石に堪えるわね」

中村や速水を始め、多くの生徒達が苦虫を噛み潰したような顔を見せる。この戦いにもともについていく事は、自分達には出来ないのだと思いきらされる。

「もうあいつ等だけであのタコを殺す方が良いんじゃないかねーのか……」

寺坂が呆れ混じりの表情でぼやく。ガツシユペアと殺せんせーの実力を改めてその目で見た彼は、自分達が足手まといになっているのではと感じ始める。

「あれ？そんな弱音を吐いちやうんだ、寺坂。ビビってるの？」

「カルマテメー!!うるせーぞ!!言ってみただけだろーが!!」

そんな寺坂を見たカルマは容赦なく煽る。しかしそれを聞いて、寺坂は再び自分に自信を持つようになる。

「まあでも、寺坂の言う事も分からなくは無いかどね。呪文の力つてぶっ飛んでるし」
軽口を叩くカルマでさえもこの戦いには思うところがあるようだ。彼は鋭い目つきで映像を見続ける。

「ガツシユ、普段の訓練の時よりも動きが素早いじゃねーか」

一方で木村はガツシユの身体能力を素直に評価する。この戦いを見て以降、彼が日課である走り込みの距離を伸ばしたのは別の話だ。

「これが魔物の実力か、分かつてはいても悔しいな（でもなんだろう、この気持ち……）」
機動力で度々ガツシユをライバル視してきた岡野は、実力差を見せつけられて険しい表情をする。しかし、ガツシユに負けたくない気持ちは強まっていく。岡野は元から負けず嫌いな一面はあるが、この戦いを見てそれが顕著になってきている。

「ガツシユ君が凄いのはもちろんだけど、あんな激しい戦場での確な指示を出せる高嶺君も大概だよな」

「戦い慣れしてるんだろな。それに殺せんせーだって、あいつ等にちゃんと合わせている」

片岡と磯貝は、清磨と殺せんせーに注目する。最前線で攻撃を仕掛けるのはガツシユ

とブラゴの役割だが、彼等に指示を出す清麿、それに合わせて的確なタイミングで呪文を唱えるシエリー、ガツシユ達の邪魔をすることなくクリアを妨害する殺せんせーがそれぞれ息を合わせる事で、見事にクリアを追い詰めている。

「巨悪を倒すという明確なビジョンに向けての共闘、これが本当の力という物か……なるほど。触手に頼っていた時の俺では、どうあがいてもあいつ等には勝てなかつたんだな」

彼等の高い實力を見て、イトナはかつてシロの下で触手の力を得た時の事を思い出す。彼はより強い力を求めて勝利する事にのみ固執していたが、それでは成すべき事をやり遂げる為の本当の力を手にする事は出来なかつたのだと改めて実感した。

「あらイトナ、まるで今ならあいつ等に勝てるみたいな言い方じゃないの」

「フン、どうだろうな」

彼の発言を聞いた狭間は意地の悪そうな顔をして言い放つ。彼女の言葉に対してイトナは素っ気なく返すが、どこか思うところがあるようだ。

「イトナ、根性あるね。寺坂と違って」

「テメーまだ言うか!!」

カルマは相変わらず寺坂を煽る。緊張感溢れる戦いを目にして軽口を叩く彼の肝はかなり据わっている。それだけでは無く彼の行動は、清麿達なら無事にやり遂げてくれ

るといふ信頼の裏返しとも取れる。実際に今の戦況は清磨達がクリアを押ししている状態だ。

「あれ、ガツシユ君のこの攻撃ってまるで……」

原が呟く。ガツシユがクリアの背後に迫り、殺せんせーとブラゴの存在感に紛れて敵を電撃のナイフで切りつけている。その攻撃方法の正体は、E組では日常そのものである物と同じだ。

「二種の職業病だよ。魔物の戦いにすら暗殺を取り入れるなんて」

不破が感心するような物言いをする。『暗殺』はE組内では常日頃からありふれている物であるが、外の世界はそうでは無い。突然『戦闘』から『暗殺』に切り替えられれば、クリア程の強者ですら動揺する。実際にガツシユの暗殺により、クリアは無視できないダメージを負う事になった。

画面越しではクリアの放つフェイ・ガンズ・ビレルゴに対してジオウ・レンズ・ザケルガが発動される。

「ガツシユ君達、まだあんな術を持ってたんですか!？」

奥田が驚愕する。E組一同が直でみたガツシユペアの一番の大技はエクセレス・ザケルガだ。こちらもディオガ級相当の強力な術だが、それを凌ぐ呪文を見せられた彼等は驚きを隠せない。そしてガツシユの術はクリアの術を相殺し切り、クリア自身にも大ダ

メージを与えた。

「これで終わったのかな？それならいいけど……」

神崎は心配そうな表情で口を開く。彼女は内心、敵がまだ立ち向かって来るのではないかと気が気でない様子だ。そして神崎の予想通り、クリアは起き上がる。

「おいおい、まだ立ち上がって来るのかよ……」

寺坂が顔色を悪くする。クリアはかなりのダメージを受けているハズなのに、一向に倒れる気配を見せない。

「寺坂以上の耐久力だねえ……まあ、寺坂はバカだからダメージを受けてる事にも気付いてないだけだろうけど」

「カルマ!! いい加減にしやがれ!!」

カルマの軽口は寺坂の逆鱗に触れる。カルマなりに寺坂を評価している意味合いもある言動であろうが、それ以上に彼の煽りを寺坂は煩わしく感じた。

「寺坂、うるさいぞ」

「ああ!!」

怒鳴る寺坂に対してイトナが画面を指差しながら毒を吐く。寺坂が怒りを露わにしながら律の方を見ると、その画面にはクリアの最大術が映されている。その神々しさは、先程まで荒ぶっていた彼を黙らせるのに十分な物である。

「何、あの術……」

「ガツシユちゃん達、大丈夫かな……」

矢田と倉橋を初め、多くの生徒達が心配そうな顔を見せる。画面越しにもかかわらず、クリアの術の強さが彼等にも伝わってくる。

「高嶺がいつになく焦ってるように見えるが」

「アイツどうしたんだ？何が起こるってんだよ……」

清磨がセウノウスの正体に気付いた時の表情を見て、磯貝と前原も嫌な予感がしていた。そして教室内の緊張感が一気に高まる。

「もう一人の魔物が術を出したな。こっちも強そうだぞ」

「スゲー、あんなデカイ術を抑え込んでやがる」

ブラゴのシン・バベルガ・グラビドンの威力に千葉と岡島が感心する。この術がセウノウスを押している光景を見て、先程までの緊張感が少し和らいだ。

「どうなるかと思っただけど、これなら大丈夫そうじゃん？」

中村が安心したような顔で口を開く。実際にブラゴの術のお陰で、セウノウスが清磨達に届く気配は一切ない。そしてガツシユもバオウを発動させた。

「へえ、これがガツシユ君の最強呪文ね」

先程まで飄々とした態度を見せていたカルマだが、バオウ・ザケルガの威圧感を感じ

て冷や汗をかく。そして彼はこの術がガツシユペアの他のどんな術よりも強い事を見抜いた。

「ガツシユ君達が皆を巻き込まない為に、あんまり強い術を使わないのは知ってたけど……」

片岡がバオウを見て目を細める。自分のクラスメイトの持つ力の強さに、彼女は圧倒されつつある。そしてバオウがセウノウスとぶつかり合う。

「……何か変だね」

竹林が違和感を覚える。バオウがブラゴの重力に触れた瞬間、その色が金色から黒へと変色しているのだ。そしてバオウはブラゴの力をも得て、より強力な術へと変貌する。

「……王道展開来たー！！」

それを見た不破のテンションが上がる。生徒一同何事かと思つて彼女の方を向くが、不破は得意げに現状の解説を始めた。

「ガツシユ君ともう1人の魔物の力が合わさったんだ！敵を倒したいという仲間同士の気持ちが一つになる事で、より大きな力が産まれて巨悪を倒す！！少年漫画の王道だよね！！」

彼女の目は輝いている。ガツシユとブラゴの最大術の合体は、不破のテンションを最

大限まで高めるのには十分な光景だ。ライバルが共闘して敵を倒す際に、お互いの最大術が合体する。漫画好きの彼女がこの展開を見て熱くならない理由は無い。

「確かに凄い力です!!相手の術がどんどん押されていきます!!」

奥田の言う通り、セウノウスは黒いバオウに競り負けている。そして各々の最大術のぶつかり合いは苛烈を極めたが、バオウがセウノウスを押し勝つ事に成功し、クリア本体を黒い龍が襲う。

「ガツシユ達が勝ったんだ!!」

杉野を始め、ガツシユペアの勝利に思われる映像を見た生徒達が喜びの表情を見せる。しかしその瞬間、律の映像には驚くべき光景が映し出される。

「いや待って……何なのよ、あれは」

最初に気付いたのは狭間だ。破られたかに思われたシン・クリア・セウノウスが再び姿を表す。それだけでは無く、セウノウスの顔面がひび割れ、そこからは悪魔のような顔が出てくる。

「ハァ!!どうなってんだよ!!」

木村が声を荒げる。そして画面中には完全体となったクリアが映し出され、クラス内の雰囲気は先程までとは打って変わって重くなる。

「大丈夫なのか?あいつ等、かなり力使ってたよな……」

「殺せんせーもいるし、何とかなると思いたいけど……」

吉田と村松を始め、生徒達の顔が青ざめていく。完全体クリアの禍々しさと強大な力は、画面越しでも彼等にひしひしと伝わってくる。そして映像内ではガツシユ・ブラゴ・殺せんせーがクリアに攻撃を行うが、クリアはそれらを打ち消し、彼等に大ダメージを与えた。

「嘘でしょ……こんな事が……」

「悪い夢、じゃないんだよね……」

速水と原がかすれた声で呟く。律の画面上には、恐らく自分達の中で最も大きな力を持つ2人と、日々工夫を凝らしても殺すには至らない暗殺対象が瀕死の状態で伏している。その光景はクラス内を絶望感で満たすのには十分過ぎた。

「そんな……ガツシユ君、高嶺君、殺せんせー……」

渚が絞り出したような声で彼等の名を呼ぶ。このままでは皆死んでしまう。彼の心は焦燥感と絶望感に支配される。

「嫌だ……嫌だよ、こんなの……」

茅野の目から涙が流れる。彼等が死にかけているのに自分は何も出来ない。そんな無力感が彼女を襲う。

（ガツシユ君……）

彼女は、自分が弟のように可愛がっているクラスメイトの名を心の中で呼ぶ。こんなところで会えなくなってしまうのか、そんな気持ちで彼女の心を蝕む。そして涙を流すのは茅野だけでは無い。

「起きてよガツシユちゃん!!高嶺ちゃん!!殺せんせー!!」

倉橋が立ち上がって泣き叫ぶ。普段の天真爛漫な彼女からは想像出来ない程の狼狽の仕方だ。それを見かねた矢田が慌てふためく倉橋を抑えようとするが、彼女の目からも涙が流れていた。

「陽菜ちゃん、落ち着いて……」

「皆が死ぬなんて、嫌だよお」

矢田に抱き寄せられた倉橋が消えそうな声でそう言う。

「皆、まだ殺せんせー達が負けたって決まった訳じゃないって!!」

「そうだ、まだ高嶺が凄い作戦を考えてるかもしれない!!」

絶望感漂うクラスを見かねて片岡と磯貝が叫ぶ。彼等はクラス委員として少しでもE組を鼓舞させようとするが、クラスメイトの顔が晴れる事は無い。口ではそう言う2人でさえも、ガツシユ達がどうなるか分からないといった気持ちを内心抱えている。

「これ、かなりヤバくね?」

普段は余裕の表情を崩さないカルマでさえも、現状を見て諦めかけている。それ程に

清麿達とクリアの力の差は大きい。もうどうにもならない、そんな雰囲気クラスを覆う。

「本当に……終わっちゃうんですか？……ガツシユ君も消されて、高嶺君も殺せんせーも死んで……そんな……」

奥田が大粒の涙を流しながら、かすれた声を出す。彼女の問いに答えられる者はいない。安易に大丈夫だと言い切れる状態では無いのだから。そう思われた時、神崎が口を開く。

「皆よく見て……ガツシユ君達は、まだ諦めていない」

諦めの雰囲気が出る現状においても、彼女はガツシユ達を信じている。神崎に言われて他の生徒達も画面を見ると、ボロボロになりながらもクリアに立ち向かうガツシユがいた。それだけではない、清麿と殺せんせーも弱音を吐いていない。この絶体絶命の状況でも、彼等は勝とうとしているのだ。

「だから奥田さんもそんな顔はしないで、きっと大丈夫だから」

「神崎さん……」

神崎は奥田の肩に手を乗せる。このような非常事態においても、彼女はとても強かだ。そんな神崎に奥田は再び涙を流しながら抱き着く。そして神崎は、彼女の頭を優しく撫でる。

「その通りだね。彼等はまだ戦おうとしている、絶望的な敵を目の前にしても。だから僕達も諦めちやいけなかった……」

渚の目には再び希望が宿る。どのような敵にも果敢に立ち向かっていく彼等を見て、渚は1つの決断を下す。

(どれだけピンチでも、高嶺君達は折れない。彼等は強い。僕だつて……)

3人の強かさに感銘を受けた渚は、自らも母親に立ち向かう事を決める。渚自身逃げて来た訳では無いが、彼等を見てここ一番で自分の主張を通す大切さに気付いたのだ。

「おい、アレは何だ?」

千葉が律の画面を指差すと、清麿の持つ本が金色に輝いている。そして清麿もそれに気付いて呪文を唱えると、クリアの攻撃で痩せこけていたガツシユの体が元通りになった。

「高嶺達つて、あんな術まで持ってたの!!」

「何が起こったんだ?」

岡野とイトナが怪訝そうな顔をする。先程まで死にかけていたガツシユの体が全快したのだから無理もない。他の生徒達も、ガツシユが元気になった喜び以上に彼等に起こった事への疑問が勝る様子だ。

「……あれつてもしかして」

菅谷が口を開く。ガツシユの全快の原因には、彼は心当たりがあるようだ。

「菅谷、何か知ってるのかよ?」

「ああ、ガツシユ達に聞いた事があるんだ。あいつ等の友達の魔物の中で、どんなダメーヂを負ってもすぐに回復する術を持った奴がいるってさ」

岡島の問いに菅谷が答える。そして菅谷はガツシユペアが話してくれたダニーの事を思い出す。今ガツシユが使った術はダニーのそれと同じ物では無いのかと、彼は考えている。

「美術館に行った時に聞いたな。言われてみればそうなんだが、ガツシユ達が自分の友達の魔物の術を使えるって……そんな事があるのか?」

菅谷と同じく話を聞いていた三村も同じ結論に至ったが、まだ半信半疑といった様子だ。その一方で画面越しでは清麿がシン・ゴライオウ・デイバウレンを唱え、全身に刃を纏った巨大な白虎を召喚していた。

「あれってもしかして……」

「間違いない!!リイエンさんのパートナーの術だよ!!」

先程まで悲しみに満ち溢れた顔をしていた倉橋と矢田の表情が明るくなる。彼女達は、共にビッチ先生の弟子であるリイエン経由でウォンレイの術の事を知っている。だから2人は巨大な白虎をウォンレイの術であるとすぐに分かったのだ。

「そんな奇跡みたいな事があるのか……まあ彼等が経験した苦勞の事を考えれば、妥当なのかもしれないが」

竹林が指で眼鏡を上げながら感嘆する。厳しい家庭環境で育つて来た彼には重圧にさらされる境遇に置かれた者の気持ちはよく分かり、ガツシユペアが背負う物の重さを理解する事が出来ている。そんな時、

「……王道展開その2来たー……!!」

不破がガツツポーズをしながら叫ぶ。これまで出会いと別れを繰り返した魔物達が最終決戦に向けて力を貸してくれる。彼女にとってはたまらない光景の様であり、自身の瞳からは炎が出ている。

「魔界にいる友達の助太刀!! その友が持つ最強クラスの術の使用……そんなのずる過ぎるよ!!」

不破のテンションが限界を超える。彼女にとってガツシユペアの戦いは、漫画の世界が現実に現れたかのように錯覚してしまう程の物である。気合が入りまくる彼女を見た多くの生徒が苦笑いをする。

「不破さん、冷静になろうね……」

そんな不破を見かねた原がなだめる。こんな場面でも彼女のおかん気質は健在だ。

「これなら勝てる!! 頑張れー!!」

その一方で茅野は涙を流しながら立ち上がる。しかし先程とは異なりその顔には陰りはなく、希望に満ちた表情をしている。そんな彼女は満面の笑みを浮かべて隣にいる渚の肩を何度か叩く。

「良かったー!! 本当に良かったー!!」

「ちよつ……茅野、痛いから!!」

茅野が嬉しいのは分かるが、それで痛い思いをする渚はたまったものではない。多くの生徒達が呆れ混じりの顔で2人に視線を向ける。

「ゴメン、渚……」

ふと我に返った茅野が顔を赤くしながら謝罪する。

「お前等はしやぎ過ぎじゃないか? まだ決着はついてないだろう?」

「杉野……それは茅野と不破さんに言つてよ」

何故か自分まで舞い上がっている扱いを受けた渚は、若干不満そうな顔を見せる。しかし彼の表情はどこか嬉しそうだった。その頃画面の中では、ガツシユの体が小麦色の獣の姿になっていた。

(あの術は?)

磯貝がそれに反応する。この術の本来の持ち主はリーヤである。アリシエを経て彼の術の事が分かっていた磯貝はリーヤの存在に気付く事が出来た。

清麿がジオルクを唱えた瞬間にE組の雰囲気は明らかに一変した。彼等はガツシュペアと殺せんせーの勝利を疑わない。そしてシン級の術のラツシュが続く中、清麿はシン・サイフオジオを唱えた。

「あの術で高嶺達も回復したっばいね」

「うん、テイオちゃんの術だ！」

中村の言葉に渚が続く。彼は清麿達からテイオの守りと癒しの術について聞いていた。彼女と仲の良かった渚は、テイオが魔界に帰った後も清麿達に力を貸してくれている事をとて喜んでいる。その時、画面ではクリアが上空に旅立つ。

「おい、アイツは何処に行くつもりなんだ!! (何だろう……嫌な予感がする)」

「ハア!!(ここ)に来て逃げるのかよ!!」

磯貝と前原が声を荒げる。特に磯貝はクリアのする事に対して内心胸騒ぎがしており、気が気でない様子だ。そして彼の予想通り、クリアは最悪の行動に出る。

「宇宙だア、んなの有りかよ!!ヒキヨーにも程があんだろ!!」

寺坂が画面越しにクリアを怒鳴るが、今にも律ごと掴みかかろうとする彼を吉田と村松が取り押さえる。しかし寺坂の言動をクリアは知る由も無い。そしてE組には不安気な雰囲気漂い始める。その時、映像内でガツシュペアはコルルとウマゴンのシン級の術を使用する事でクラス内に再び希望が宿る。そして彼等が宇宙に旅立つ様子を見

て、倉橋が口を開く。

「あの術……ウマゴンちゃんの術じゃないかな!!」

彼女はガツシユペアにウマゴンの術の事を聞いていた。そして彼等がウマゴンの術を使った事を知ると、倉橋の目からは再び涙が流れる。

(ウマゴンちゃん……2人をお願いね)

彼女は心の中で呟いた。

律のカメラは宇宙までは行く事が出来ず、そこでの様子を生徒達を知る事は叶わぬ。そんな彼等はガツシユペアを信じて無言で画面を凝視する。そんな時、

「おい、あれ見ろよ!高嶺達じゃねーか?」

「ホントだ!あいつ等、勝ったんだな!」

木村と岡島が、ヴィノーを抱える清磨とガツシユを発見する。そして彼等が地上に降り立った時、クラス内では歓声が沸き起こる。

「!!!やったー!!!」

E組一同、ガツシユペア及び殺せんせーの勝利を心底喜ぶ。隣にいる者同士肩を組む者、お互いに手を取り合う者、感動のあまり涙を流す者、クラス内の反応は様々だ。特

に不破の興奮の仕方はとてつもなく、原になだめられていた。

「私も嬉しいです！高嶺さん、ガツシユさん。本当にお疲れ様でした！」

先程まで映像を流していた律も喜びの顔を見せる、その時の彼女は、まるで生きた人間そのものの表情だった。

「一時はどうなる事かと思つたわ……魔物の戦いつて心臓に悪いのね」

その一方で片岡の顔色はあまりよろしくない。彼等の勝利への喜び以上に、現実離れた戦いを見せられてどつと疲れた様子だ。そんな時、彼女の後ろに岡野と矢田が迫る。

「メグ、ちよつと元氣なくない?」

「そうだよ!!せつかくガツシユ君達が勝つたんだから、一緒に喜ぼうよ!!」

2人が片岡に抱き着く。いきなりの事で呆気に取られた彼女だったが、すぐに満更でもない表情を浮かべて、嬉しさを2人と共有するのだった。

「無事に終わって良かった。高嶺にしろガツシユにしろ、見ててヒヤヒヤする場面が結構あるんだよな」

「でも、それがあいつ等にとって当たり前なんだろうね。だからこそ、2人共あんなに強いんだ」

多くの生徒達が感情を露わにする中、千葉と速水は比較的落ち着いている。しかし2

人共内心では清磨達をととても心配しており、彼等の帰還をととても嬉しく感じている。「うえ〜ん、良かったよ〜!」

倉橋・茅野・奥田の3人が嬉し涙を流しながら手を取り合う。今回の戦いを見て最も涙を流したのは、間違ひなく彼女達であろう。そしてそんな3人を見た神崎が輪に混じり、彼女達と抱き合う。

「いやー、皆はしゃいでるね〜」

「はは。無理もないよ、あの戦いの後じゃ」

「あんなのを見て、平常心でいる方が無理でしょ」

「まあ、これであいつ等にとつても一安心なんじゃねーのか?」

カルマ・渚・中村・寺坂が盛り上がるクラスを見ながら話す。千葉や速水と同様に彼等も割と通常通りの言動をしているが、ガツシユペアの肩の荷が下りた事でホツとしている。ちなみにその隣では吉田と村松が肩を組んではしゃいでいる。

「僕も負けてられないかな、これは」

「渚君、いつになく殺る気だね?」

渚が気合いを入れる。勿論放課後に行われる3者面談に向けてだ。ガツシユペアと殺せんせーの不屈の精神を見た彼は、自分も堂々と母親と向き合う覚悟を改めて決める。

「お、渚の男気が見れそうだね。頑張りな」

「すごいや渚のが残ってたな。まあ無理すんなよ」

中村と寺坂も渚の応援をしてくれる。彼等の思いを受け取った渚の表情は、いつになく強気な物になる。

「渚さん、ファイトです！」

「律まで……皆、ありがとう」

律も渚に声をかけてくれる。多くの生徒達が殺せんせー等の勝利を喜ぶ中、渚はその先を見据えて自分が挑むべき戦いに向けて心を整えるのだった。

LEVEL 63 進路の時間

クリア・ノートとの戦いに勝利したガツシユペアは帰宅後、早速登校の準備に取り掛かる。それが終わった後に学校に向かおうとするが、同時にデュフォーが家を出て来た。

「もう、行ってしまうのか？」

「ウヌウ、今日一日くらいゆっくりしていても良いと思うが……」

「魔界の存続をかけた戦いは終わったからな。もうここに居座る理由はない」

デュフォーは新たに旅立とうとしている。もう少ししても良いのではと考えるガツシユペアだったが、彼の意志は固い。

「さて、残るはブラゴ達との戦いだけだな」

デュフォーがそれを口にした瞬間、場の緊張感が高まる。クリアとの戦いが終わっても、2人の魔界の王を決める戦いは続く。しかも戦うべき相手は2人にとってライバルとも言える存在。絶対に負けられない。

「お前達なら大丈夫だとは思いますが、絶対に気を抜くなよ。最後の戦いがつまらない幕引きになるのは、皆避けたいだろうだからな」

「当然だ。まだ俺はガツシユを王にさせてやれてない」

「あの者達は、とてつもなく強いからの」

彼等はブラゴペアの強さをよく理解している。確かにクリアとの戦いの時、クリアを最終的に倒したのはガツシユペアだ。その時はブラゴペアよりも総合的な実力は上だったかもしれない。しかし彼等はこの時も鍛錬を重ねている。油断するなど決して許されない。

「清磨、【^{アンサー}答えを出す者】を鍛える特訓は継続しておけ。あれはいつ失われてもおかしくないからな」

「分かっている。この力はブラゴ達との戦い、そして殺せんせー暗殺の為にも必要な物だ」

デュフォーは清磨が【^{アンサー}答えを出す者】を失う事を危惧する。これからガツシユペアが成すべき事を果たす為には、この力は重要になってくる。

「あの超生物の暗殺に取り組むなら、魔界の王を決める最後の戦いまで力が鈍る事は無さそうだな。どちらもぬかるなよ」

デュフォーはそう言つて2人の方を振り返る。その時に彼は笑顔を見せてくれた。それを見た清磨は、今のデュフォーならこれからの人生を楽しむ事が出来ると確信した。

「ああ。今までありがとうな、デュフオー」

「お主がいなければ、この戦いに勝つ事は出来なかったのだ」

ガツシユペアはお礼の言葉を述べる。クリアとの戦いに参加こそしていないが、デュフオーの考え出した特訓が無ければ彼等に勝ち目は無かった。デュフオーもまた、魔界の存続に大きく貢献した。そして彼は再び旅立つ。ちなみに何処に向かうのかまでは分からない。

「俺達も学校に行こう。そろそろ向かわないと遅刻しかねん」

「そうだの、久し振りの学校に遅刻は嫌なのだ」

デュフオーを見送った2人は、少し速足で登校を始める。

ガツシユペアは学校の裏山まで辿り着く。今回の戦いを経て魔界の滅亡を防ぐ事が出来たが、2人にはもう一つ不安に思う事があった。それは、渚の母親の事。渚がE組を出してしまうのではないのかと心配していたのだ。しかし、そうはならなかった。

「2人とも、おはよう！」

「おはよう（なのだ）！」

渚が後ろからガツシユペアに声を挨拶してくれた。彼は今日も普通にE組に登校し

ている。

「2人共、本当にお疲れ様。僕の方は心配しなくても大丈夫だったよ」

渚が事情を説明する。3者面談の時の広海は凄い剣幕で渚をE組から出させる事を主張したが、渚自身がE組に残りたい気持ちをしつかりと伝えた。これまで渚に強く反発された事の無かった彼女は動揺しながらも彼に暴言を吐くが、渚は一步も引かなかった。それを見た広海は渚が自分自身とは違う事によろやく気付き、渋々E組に残る事を承諾したのだ。

「これ以上E組から出る事を強要するならば家を出ていくって言ったら、やつと折れてくれてさ。でも今まで母さんが育ててくれたのは事実だから、これからは毎朝の家事は僕がやる事にしたんだよね」

「なるほど。空港で渚だけがいなかったのはそういう事だったのか」

「渚が残ってくれて良かったのだ」

渚が空港に来ていなかったのは、家事に励んでいた為だ。そんな彼の残留を聞いた2人は心底安心する。自分達の責務を果たす事が出来ても、その間に大事なクラスメイトが1人欠けてしまつては素直に達成感に浸れない。

「とは言え、俺達は結局渚には何もする事が出来なかったな」

「ウヌウ……」

ガツシユペアが罪悪感に苛まれる。渚に対して相談に乗ると言いながらも、クリアの事でそれどころでは無くなり、渚にとつて役立てなかつたのだと2人は考えている。しかし、それを聞いた渚は首を横に振る。

「そんな事ないよ。僕がここまで母さんに反発出来たのは2人のお陰でもあるんだから」

それを聞いたガツシユペアは怪訝な顔をするが、渚はそのまま話を続ける。

「昨日の戦いで、2人と殺せんせーは最後まで諦めなかつた。そんな強い意志で敵に抗い続けた結果、君達は勝つ事が出来たんだ。それを見て凄く勇気が湧いてきたんだよね。だから強気に言いたい事を伝えられた。殺せんせーにも2人にも感謝してる」

今回の戦いを見たE組の生徒達は様々な感情を抱いた。素直に勝利を喜ぶ者、殺せんせーとガツシユペアが凄いと思った者、自分も負けてられないと思つた者、魔物の戦いが非常に過酷である事を実感した者など様々だ。その中でも渚は自分も彼等のように強い心を持ちたいと思ひ、3者面談に臨む事が出来た様だ。

「渚の為にもなれたのなら、良かったのだ！」

「まさか戦いが見られてたと知つた時はビックリしたがな。けど皆が応援してくれてたのは素直に嬉しい。ありがとう」

3人はそんな話をしながら校舎を目指して山を登り続ける。そして校舎が見えるま

「であと少しという所で、渚が立ち止まった。

「2人共、ちよつと良いかな？」

渚がガツシユペアに尋ねる。2人は何事かと考えるが、渚は一息ついた後に再び口を開く。

「僕に勇気をくれて本当にありがとう。その……これからは2人の事、*“清磨”*と*“ガツシユ”*って呼んでも良いかな？」

渚のお願いは、彼等を下の名で、かつ君付けは無しで呼ぶ事だった。かつて渚は清磨に自分を下の名で呼んで欲しいと頼んだ事がある。そして今度は自らが、彼等をファーストネームの呼び捨てにしたいとの事だった。

「ウヌ!!私は大丈夫なのだ!!」

「俺も構わないぞ。これからもよろしくなー」

ガツシユペアは快く承諾する。彼等の距離がさらに近付いた瞬間だ。

その日の放課後、クリアとの戦いを終えたガツシユペア及び渚の進路相談が職員室にて行われる。まずは渚の進路相談が先に始まり、ガツシユペアは裏山で対ブラゴペアに向けての特訓を行いながら待機する。渚は当初殺し屋の才能がある事で苦悩していた

が、別の道を目指す事に決めたのだ。それは、教師としての道。ちなみにわかばパークのさくらに勉強を教えに行った時も、彼女から先生が向いていると言われたようだ。彼の進路相談は無事終了し、ガツシユペアの番が回ってきた。

「さて、お待たせしました。君達で最後ですねぇ」

「まさかガツシユの進路相談までしてくれるとはな……」

ガツシユと共に殺せんせーによって職員室に連れてこられた清磨は、呆れたような表情を見せる。魔物の進路相談など今まで聞いた事も無いし、それを実際に行おうなどは殺せんせーくらいしか考えないだろう。

「ガツシユ君も大事な生徒ですからねぇ、最も、彼の道はほぼ決まっているのでしようが」

「ウヌ！私は優しい王様になるのだ!!」

ガツシユは自信満々にそう答える。今回の戦いを経て、彼はその夢まであと一步の所まで来ている。ブラゴとの戦いを終えて勝つ事が出来れば、彼は晴れて魔界の王となる。

「ガツシユ君の目指す王様の姿は素晴らしいです。しかし、それは同時にとっても大変な事でもあります」

殺せんせーの顔が険しくなる。『優しい王様』、それは魔界の誰もが平和に暮らせる

世界の王の事を言うのだろう。それを目指すのは容易では無い。どのような事があっても誰も傷付かず、誰も犠牲にならない世界を作るのは至難の業だ。ガツシユもそれは理解している。

「分かつておるぞ、殺せんせー。それでも私にはそれ以外の道は無いのだ」

ガツシユの意志は固い。それを捻じ曲げる事など、何人たりとも出来はしないだろう。彼の言葉を殺せんせーと清磨は感心したような顔で聞く。

「そう言うと思っていました……では一言だけアドバイスを。ガツシユ君、王様になつてからは積極的に周りを頼つてあげて下さい」

王だからといって全てを一人で背負う必要は無い。ましてガツシユの様に民を思う優しい王になるのなら、なおさら一人で突つ走るべきでは無い。独裁政治の先には未来など無いのだから。

「ウヌ……私には分からない事がたくさんあるからの。多くの者達の力を借りる事になると思うのだ」

「フム、よろしい」

ガツシユの言葉を聞いた殺せんせーは満足気な笑みを浮かべる。先生の言いたい事は彼にも伝わっている。そして殺せんせーは清磨の方を向く。

「続いては高嶺君の番です。将来やりたい事、ざっくりで構いません。何かありますか

「？」

その問いを聞いた清磨が目を細める。そして彼はこれまで身に起こった出来事を振り返る。ガツシユとの邂逅、前の学校でのクラスメイト達との和解及び交流、多くの魔物との戦い、共に戦う仲間達との出会いと別れ、E組での殺せんせー暗殺、そしてクリア・ノートとの魔界の存続をかけた決戦。そのいずれもが清磨に大きな影響を及ぼしている。

「将来に向けてのハッキリとしたビジョンは見えていない。いつかビツチ先生に言われたように、魔界と人間界の行き来を可能にする為の研究者になる事も考えた」

清磨はまだ悩んでいる、自身のこれからの事を。仮に魔界と人間界を繋げる道を選んだとしても、それは容易では無い。そして彼は話し続ける。

「……だが、クリアとの戦いを経て思ったんだ。ガツシユは魔界の危機を救った。ならばこの戦いが終わってからガツシユと再び会うのは、俺はもつと大きな男になってからの方が良いのではないかと。ガツシユが魔界の危機を救って王になるつてのに、俺がこのままつてのは釣り合わない。だから、俺は大きく……地球を救えるような大きな男になりたい！」

清磨は自分の夢を語る。それはお世辞にも具体的とは言えない。だが、彼の目にはそれを必ずやり遂げて見せるという明確な意思が宿っている。殺せんせーもそれを察し

たのか、清磨の言葉に納得したような顔で話を聞いてくれている。

「とは言え、殺せんせーの暗殺に成功すれば一度は地球を救った事にはなるんだがな。だがそれだけじゃ足りない。この地球がどんな危機に陥ろうとも、何度でも救えるような男に俺はなりたい！」

「清磨。ならば私も立派な大人に成長してから、清磨との再会を果たしたいのだ！」

清磨の言葉を聞いたガツシユが彼の方を向く。魔界の王を決める戦いが終わっても、お互いに再会出来る事を確信している。

「おやおや。2人共大変な道を目指そうとしているのに、不安の2文字が今の君達には見当たりませんねえ。不思議な物です、2人ならどんな困難でも乗り越えてしまうのではと思えてしまう」

殺せんせーが少し呆れ気味な表情を見せる。今のガツシユペアには迷いが無い。どのような壁にぶつかろうとも、彼等は必ず乗り越えていくのだろうと殺せんせーは確信している。

「高嶺君……一先ず君の将来の夢は、研究者にしておきましょうか。魔界と人間界を繋げる方法を探りつつ、地球の為になるような物を発明する研究者と言う事で。しかし、私の暗殺だけでは不十分とは大きく出ましたねえ。ヌルフッフ」

殺せんせーは緑色の縞々模様を浮かべる。それを見た清磨は負けじと不敵な笑みを

見せる。

「それを成す為には、先生の暗殺とブラゴ達への勝利は絶対条件。まずはその2つのミッションを成功させない事には前に進めん。だからクリアとの戦いを終えた後も、俺とガツシユが気を抜く事は有り得ない。覚悟しておいてくれ」

「何としても、やり遂げて見せるのだ!!」

清磨だけでなく、ガツシユもまた決意を固める。1つの戦いが終わっても、彼等のやるべき事はまだまだ終わらない。

「君達の覚悟は受け取りました。卒業するまでに殺せると良いですねえ！それから大丈夫だとは思っています。高嶺君は第2学の刃業の方もおろそかにしない様に。さて、進路相談はここまでですかね」

こうしてガツシユペアの進路相談は終了した。しかし殺せんせーが席を立とうとした時、再び2人は口を開く。

「殺せんせー。言いそびれていたが……クリアとの戦いに力を貸してくれてありがとう！」

「ウヌー！とても助かったのだ！」

彼等は殺せんせーにお礼を述べる。クリアとの戦いが終わってから先生にそれを述べる機会に恵まれなかったが、進路相談の時にようやく伝える事が出来た。

「とんでも無い。困った生徒を助けるのは、教師として当然ですから」

生徒の為に命を懸ける事すら殺せんせーは当たり前だと言いつ切る。ここまで生徒思いの先生は中々いないだろう。ガツシユペアは改めて殺せんせーに感謝する。先生だけでは無い、今まで多くの人々に彼等は助けられて来た。彼等はこの思いを忘れる事なく、自分達の夢に向かって行く。

進路相談が終わってガツシユペアが帰り支度を始めると、殺せんせーがそれを阻むかのように口を開いた。

「……それでは私は一旦ここを出ます。君達は少し待っていて下さい」

殺せんせーがそう言うのと、そのまま超スピードで職員室を出て行ってしまった。

「ここにいてくれて……何かあったのか？」

「ウヌウ、さっぱり分からぬのだ」

殺せんせーに待機している様言われた2人だが、その理由は不明だ。2人がどうしたものかとお悩んでいると、職員室に2人の生徒が入ってきた。

「清麿、ガツシユ！進路相談は終わったみたいだね」

「2人共ごめんね、もうちよつとだけ待って欲しいんだ」

渚と茅野だ。殺せんせーだけでなく、彼等までもがガツシユペアに待機するようになってきた。何がどうなっているのか、2人にとって謎が深まる一方だ。

「渚、カエデ。一体どうしたのだ？」

ガツシユが理由を聞くが、2人共それに答える素振りはない。そんな時、茅野がガツシユの座る椅子の後ろに来て、彼の両肩に手を乗せた。

「エヘヘ。それは秘密だよ、ガツシユ君」

「ウ、ウヌウ」

彼女は優しく微笑みかけるが、ガツシユは訝し気な顔をする。

「まあ、悪い事じゃないんだろう。もう少し待つてみるか」

「清麿、あの能力は使っちゃダメだよ」

清麿は諦めた様な表情でそう言う。これから起こる出来事について気にはなるが、彼の言動から見るにそれを教えてくれる事は無さそうだ。実際に渚は【アンサー答えを出す者】カードの使用を禁じて来る。

そして4人がしばらく談笑していると、今度はカルマが職員室に入ってきた。

「皆お待たせ、もう入ってきて良いよ」

カルマが口角を上げる。どうやら教室にてクラス総出で何かの準備をしていた様子だ。そして待ちわびていたかのように渚は清麿の、茅野はガツシユの手を引っ張る。

「お、おい渚。何なんだ？」

「カエデ、そんなに引っ張らずとも……」

「良いから良いから！」

いきなりの出来事でガツシユペアが困惑する。しかし渚と茅野はその手を放そうとしない。

「じゃあ2人共、先入ってよ」

一同が教室の前まで来ると、カルマがE組の扉を指差す。ガツシユペアが何事かと思いながらも教室に入ると、その瞬間に何かが破裂したような音が聞こえた。

「！！高嶺！！ガツシユ！！お疲れ様！！！！」

室内で待機していたE組の生徒達がクラッカーを鳴らすと共に、ガツシユペアに労いの言葉をかけてくれた。

「な、何だ！！」

「び、びっくりしたのだ……」

2人はまだ、何が起こったのかが良く理解出来ていない。そんな彼等が教室を見渡してみると、教室の至る所に色紙による飾り付けがなされている。まるで何かのパーティー会場の様だ。また並べられている机には、多くの料理が置いてある。そしてガツシユペアの視線はE組の黒板に向かう。

「こゝ、これは……」

黒板には大きく、「お帰り」と書かれていた。それを見た2人は察する。彼等は自分達が無事に帰ってきた事を祝ってくれるのだと。しかも教室には生徒達だけでなく、殺せんせーとビッチ先生も一緒にいる。

「カラスマはもう少ししたら出張から帰って来るわよ」

「烏間先生も君達が心配で、気が気でない様子でしたからねえ。ヌルフフ」

目の前の光景を見て、ガツシユペアの心は喜びで満たされる。こんなにも自分達を思ってくれる人達が目の前にいるのだと。そんな2人の目には涙が溜まり始める。

「昨日は僕が皆に祝ってもらった。今日は2人の番だよ」

渚が口を開く。彼がE組に残る事が決まった時も、クラスの皆が祝ってくれたそうだ。その時に厳しい戦いから帰って来るガツシユペアの為にも何かをしようという流れになった様だ。

「迷惑だったかな？……お祝いをするかどうか、悩んだんだよね。この戦いは2人にとっても辛い物だったと思うからさ」

茅野が申し訳なさそうな顔を見せる。クリアとの激闘を制して無事に生還したガツシユペアだが、この戦いによってテイオとウマゴンは魔界に帰ってしまった。その事による彼等の精神的ダメージが大きいのなら、この祝い自体が不謹慎な物になる可能性が

ある。だが、

「迷惑なんてとんでもない、ここまで準備してくれて嬉しいよ!!」

「ウヌ! 皆、ありがとうなのだ!!」

ガツシユペアは嬉し涙を流しながら、ここにいる全員にお礼の言葉を述べる。E組一同は魔物の戦いには直接関係している訳では無いが、ここまで自分達の事を思ってくれる。それだけでも2人が喜ぶのには十分だった。そんな彼等の前に、何やら箱の様な物を持ったイトナが近付く。

「お前等、何を泣いているんだ……全く。コイツでも受け取れ、開けてみろ」

ガツシユペアにプレゼントを渡してくれる様だが、無愛想な口調は相変わらずだ。そしてプレゼントを受け取ったガツシユがそれを開封すると、何とバルカン300のラジコンが入っていた。

「イトナ!! ありがとうなのだ!!」

「ようやく改良が終わった。丁度良いタイミングで渡す事が出来た」

この前のバルカンの試作品が完成したのだ。それを見たガツシユは目を輝かせるが、イトナは対照的に落ち着いている。しかし彼の口元が若干緩んでいるのを清磨は見逃さなかった。

「完成させてくれたんだな、イトナ。大切にするよ」

「好きにしろ」

清麿の言葉に対しても彼は素つ気なく返す。しかし、イトナは何処か嬉しそうだ。

そして一同はパーティのごとくそれぞれ向かい合う様に並べられた席に着く。先生達の席も用意してある。中心に座るのは当然ガツシユペアだ。そして2人の目の前には村松と原がたつた今調理していた料理が置かれた。

「特製ラーメンだ、家の店を出してる親父のとは訳が違うぜ！食つてくれお前等！」

「ブリの照り焼きだよ、ガツシユ君でブリ好きだったよね。おかわりもいっぱいあるからね！」

村松と原の料理スキルはE組の中でもトップクラスだ。机の上に置いてある料理の多くはこの2人が協力して作ったもので、それ以外のオードブル等は事前に買ってきた物もある。ラーメンの方は魚介と醤油のスープに味付け卵、焼豚、ナルト、メンマ等具材も盛りだくさんで豪勢だ。ブリの照り焼きは原特製のたれを使用しており、見た目も匂いも一級品である。

「凄く旨そうだ!!」

「ウヌウ、とても良い匂いだの!!」

ガツシユペアも食欲がそそられる。そして村松と原が自分の席に着くと、殺せんせーが口を開く。

「さて。烏間先生はまだ戻ってきていないですが、先に始めちゃいましょうかねえ！」
殺せんせーの言葉と共に宴は開始された。各々が目の前の食材を口にしながら談笑する。そんな光景を見たガツシユペアは、自分達がここに帰ってきたのだと改めて実感した。

LEVEL. 64 祝勝の時間

「清磨!! 楽しいのう、楽しいのう!!」

「そうだな、ガツシユ。皆には感謝しないと!!」

料理を頼張りながらガツシユがはしゃぐ。その隣で清磨がE組の事をありがたく感じていと突如教室の扉が開く。そこには、汗をかきながら教室まで来てくれた烏間先生がいた。

「高嶺君!! ガツシユ君!! 無事だったか!!」

「烏間先生!!」

先生が形相を変えてガツシユペアに駆け寄る。それだけ彼も2人を心配していたのだ。

「帰ってきてくれて良かった! 怪我はしてないか!!」

「怪我を治す呪文を使える仲間がいたので大丈夫です。俺達は敵を倒し、無事に帰って来る事が出来ました」

「烏間先生、心配してくれてありがとうなのだ」

先生の返答に2人が答える。それを聞いた彼はようやく安心したような表情を見せ

た。烏間先生は元々防衛省の人間だが、生徒達の事を心底大切に思ってくれている。そんな先生は出張先から櫛ヶ丘まで戻ると、2人のお祝いをする事を聞いた後に走ってここまで来てくれたのだ。

「カラスマ、随分動揺しているじゃない。良いわ、私が癒しを与えて」

「2人共大丈夫そうだな」

「おい無視すんな!!」

ガツシユペアを心配するあまり平常心を保てていない烏間先生を見かねたビツチ先生は、彼を露骨に誘おうとするが華麗にスルーされてしまった。これには当然彼女は憤慨する。

「イリーナ、話は後で聞いてやるから荒ぶるな」

「な、何よ……」

しかし、烏間先生もビツチ先生の事が眼中に無かった訳では無い。そんな彼の予想外の反応を見た彼女は顔を赤くする。烏間先生に相手にされていた事が嬉しい様子だ。

「死神の件を経て、2人の距離が近付いていますねえ。ヌルフフ」

「タコ、今お前を殺してやっても良いんだぞ……そもそも、今日は高嶺君とガツシユ君の祝勝会なのだろう。俺達の事を話す必要は無いと思うが？」

殺せんせーが冗談交じりに茶々を入れると、烏間先生が恐ろしい殺気を放って口を開

く。案外彼も、ビッチ先生の事は満更でも無いのかもしれない。

「清麿、鳥間先生が怖いのだ」

「まあ、仕方ない……」

ガツシユペアは鳥間先生に恐怖を感じる。そんな先生も落ち着きを取り戻した後に席に着き、祝勝会は再開された。

一同はしばらく席について近くの者と話していたが、机の上の料理も食べ尽くされていき、席を立つてダベる生徒達も多くなる。そしてガツシユの席には岡野が来てくれた。

「ガツシユ、本当にお疲れ様。凄い戦いだったね」

「ウヌ、ひなた。クリアは強敵だったからの」

彼女はまず、ガツシユに労いの言葉をかける。彼等の戦いぶりを見た岡野は何やら思うところがあるようだ。

「あれを見てガツシユの凄さは改めて分かった。魔物の身体能力は並外れている。でも何だか……運動で負けたくないって気持ちが強くなっちゃった」

魔物同士の戦いは過酷であり、生半可な強さでは勝ち残れない。ガツシユの運動能力はかなり高いレベルまで鍛えられている。並の人間なら追いつこうとも思えない物だが、負けず嫌いな彼女はそうでは無い。

「ガツシユがどんなに凄くても、私はずっとガツシユのライバルであり続けたい。これからもよろしくね。気を抜いてると追い越しちゃうから！」

「ウヌ……望む所なのだ!!」

岡野は笑みを浮かべながら改めてガツシユにライバル宣言をする。運動神経に自信のある彼女にとって、魔物の身体能力は見過ごせない。彼等はこれからも自分を高め合っていくだろう。その時、

「お前等、こんな時まで何張り合ってたんだよ……」

「随分気合入ってるな」

「ひなたは相変わらずだね」

前原・磯貝・片岡が2人の方に来た。彼等は席も近くて一緒にいる頻度が高い。特に磯貝と前原、片岡と岡野はそれぞれ親しい間柄である。

「ガツシユ君達にあんまり無茶はして欲しくは無いんだけど、魔物の戦いはそうも言ってもらえないのよね」

「そうなの、メグ。私は何としても勝ち残って優しい王様にならなくてはならないのだ！」

多くの生徒がガツシユペアの勝利を喜ぶ中、片岡は2人が戦いでボロボロになった姿を今でも痛々しく感じている。しかしどんなに自分達が傷付こうとも、彼等に立ち止ま

る選択肢は無い。

「ガツシユ、電撃のナイフでの暗殺は見事だったな！」

「磯貝、ありがとうなのだ！」

「戦闘」から「暗殺」の切り替え。常に殺せんせーを狙い続ける生活を経験しなくては成し得なかつた攻撃。磯貝は素直に感心する。

「お前が王になるまであともう一歩だな。頑張れよ！クラスの皆もアリシエも応援してるからさー！」

「ウヌー・リーヤもこの戦いに協力してくれておつたぞ」

彼のみならず、クラス全員がガツシユペアの応援をしてくれる。その事はさらにガツシユを喜ばせる。そして彼は友であるアリシエの名前を出した。彼もまたナゾナゾ博士からの手紙でクリアとの戦いについて聞いており、2人の身を案じている。

「アリシエさんか、磯貝から話は聞いてるけどまだ会つた事は無いんだよな。それより……ガツシユと一緒に戦つてもう1人のパートナーの人つて超美人じゃねーか!!是非お近付きになりたいんだが」

前原の女好きはここでも健在だ。そんな彼はシエリーと交友関係を持ちたい様である。

「前原、シエリーと友達になりたいのかの」

「ガツシユ、それは聞かなくて良いから！」

「ちよ、おま……」

しかし、前原の懇願は岡野によって遮られた。彼の女癖には辟易としている様子だ。そんな光景を磯貝と片岡は苦笑いをしながら見ている。

その頃、清磨はガツシユとは離れた席で不破・原・三村・菅谷・岡島と話していた。

「高嶺君、凄い戦いだったよ!!王道展開の連発からの強敵相手に勝利!!2人をモデルにした漫画、描いてみようかなあ?タイトルは金色の……」

「テンション上がりすぎだろうに。あと、勝手に人を漫画のモデルにするんじゃない」

「不破さん、昨日からずっとあんな感じなんだよ」

「そうだったのか……」

戦いが終わっても不破の興奮は収まらない。それを見た日、彼女は夜眠れなかったという。そんな不破に対して、原と清磨は何とも言えない表情をする。

「けど、気持ちは分からんでもないかもな。俺もあの戦い見てるとき、まるで映画の世界に入り込んだ気分になっちゃったからさ。あの映像は色々参考になるかもしれない」

「確かに色んな術の造形を見れた。いつか魔物の術の絵も描いてみたいぜ」

「そうだな。あんなバトルの写真をうまく取れりや、やる気が出るってもんだ！」

三村・菅谷・岡島もまたこの戦いに感銘を受けて、自分達の趣味のモチベーションが向上している。芸術分野に興味のある彼等にとって、非現実な出来事は良い刺激になる様だ。

「皆お熱いねえ」

「ははは」

気持ちが高ぶっているのは3人も同じだ。そんな彼等を原と清麿は、少し困ったような顔をしながら見ている。

「すごいや高嶺。ガツシユの体が全快した術って、お前等がシエミラ像絡みで会った魔物の術で間違いなんだよな？」

「覚えていたのか、その通りだ。ダニー以外にも多くの魔物が力を貸してくれた。皆の協力が無ければ、俺達は負けていただろう」

菅谷の問いに清麿が答える。この戦いは自分達だけでは到底乗り越える事は叶わなかった。金色の本の力が目覚めて、初めてクリアの勝利する事が出来たのだ。ガツシユペアがそれを忘れる事は無い。清麿がその話をする、何故か不破達が少し申し訳なさそうな顔を見せる。

「どうしたんだ、お前等？」

「いやあ、何と言うかさ……」

「高嶺達が大変な思いしてたのに、俺等だけで盛り上がっちゃった事に対して罪悪感をだな」

ガツシユペアにとってこの戦いは死闘そのものだ。彼等は文字通り命を駈けて勝負に挑んだ。岡島と不破を始め、そんな状況にもかかわらず彼等はその戦いを勝手に楽しんでいたのでないかと感じた様だ。

「気にしなくて良いぞ、皆応援してくれたじゃないか。それに俺達は無事に成し遂げられた、あとはブラゴ達に勝つだけだ」

清麿は皆を責めるような素振りは見せない。そんな彼の言葉を聞いた一同は安心してような表情を見せる。その後、不破が口を開いた。

「えつとね、高嶺君」

「どうした？」

「今回以外にも、今までの戦いの事も聞かせてもらって良いかな？」

彼女はこれまでの2人の事も知りたい様だ。それは自分達が楽しむ為では無く、仲間である彼等がどのような道を歩んできたのかを少しでも理解したいからである。

「勿論構わないぞ」

「ありがとう！」

清磨は2つ返事で聞き入れてくれた。その事が不破にとつて余程嬉しかったみたいで、彼女は満面の笑みを浮かべてお礼を言う。

清磨はこれまでの戦いについて不破達に話す。彼女等が話に聞き入っていると、寺坂・吉田・村松が清磨達の方に来た。

「オイおめー等。せつかくの宴だからつて、タコが余興やつてくれる奴探してたぜ」

寺坂は面倒くさそうな顔でそう言う。彼は最初に殺せんせーから何かやるように言われたが、断ってしまったのだ。そこで今度は先生から誰かやつてくれる人がいないか探すように頼まれたのだ。

「三村！お前のエアギターを披露するタイミングじゃねーのか？」

「吉田、何故それを!!」

吉田の発言を聞いた三村が動揺する。彼の隠れ趣味「エアギター」。誰にも見られない場所でこっそり嗜んでいたが、残念ながら吉田に見られていた。ちなみに殺せんせーはその事を知っている。三村の意外な一面が暴露され、彼に視線が集中する。

「あーもう!!分かったよ、やれば良いんだろ!!」

三村は半分やけになりながら教壇の前に立つ。

「三村航輝、エアギターやります!!」

「よっ、三村君待ってました!!」

三村の掛け声と同時に、何故か音響の準備をしていた殺せんせーがDJの恰好をしながら曲を流す。ヘヴィメタルな曲と共に、通常の彼では考えられないような激しい動きを見せて来る。彼の意外な一面が露わになったと同時に場が一気に盛り上がる。

一方で、別の席で三村のエアギターを見たガツシユは目を輝かせる。彼自身も余興に参加したくなかった様子だ。

「ウヌウ、私も何かやりたいのだ!!」

「よしガツシユ!!俺達はフォルゴレさんの曲で踊ろうぜ!!」

ガツシユに便乗して前原もやる気を出す。彼等は一度フォルゴレと共にわかばパークでのシヨーに参加している為、振り付けも覚えている。そんな2人の元に、三村のエアギターの写真を取りながら席を移動していた岡島が合流する。

「岡島、丁度いい所に来た。俺等も芸をやるうと思つてたんだよ!!」

「この3人つてことは、フォルゴレさんのダンスか?よし分かった!!」

「楽しみだの!!」

岡島は前原の考えている事をすぐに察して迷わずOKしてくれた。彼等のノリの良さは一級品だ。

三村の芸が終わると、ガツシユ・前原・岡島が前に出る。そして殺せんせーは「無敵フォルゴレ」の曲を流す。初めに彼等は「チチをもげ！」を流そうとしたが、女生徒達に止められてしまった。そしてこの宴の主役であるはずのガツシユまでもが余興に参加している様子を呆れながら見ている生徒がいた。

「何であの子まで踊ってるのよ。主役らしくどっしり構えていれば良いのに」

狭間が眉をひそめながら呟く。そんな時、

「まあ、ガツシユらしくて良いんじゃないか？彼も大きな戦いの1つが終わって、肩の荷が多少なりとも軽くなったのだろう」

「皆さん、とても盛り上がっていますね！」

「昨日あんな激闘を繰り広げたとは思えない程にな。全く大した奴だ」

近くにいる竹林・律・イトナが狭間に話しかける。ハイテンションなガツシユを見て、彼の重圧が薄れた事を喜ばしく思っている様子だ。

「ガツシユちゃん楽しんでるならそれでOKだよ。ガツシユちゃんが王様になったら、楽しい魔界になりそうだよね」

彼等の会話に倉橋が混じる。彼女は王様になったガツシユを想像して口角を上げる。

ガツシユなら王になっても大丈夫だと倉橋は確信しているのだ。そんな彼女の考えを察した狭間・竹林・律・イトナも同意する。

「やけに楽しそうだな……」

清磨もまたガツシユが芸をしている様子を呆れ混じりに見ている。そんな彼の元に木村と千葉が声をかける。

「高嶺は何かやらないのか？」

「それは面白そうかもしれないな」

「断る」

2人が冗談交じりに清磨に芸を勧めるが、彼にはその気は無い。

「高嶺ってそういう柄じゃないでしょ」

「だからこそ見てみたいってのもあるけどね」

「勘弁してくれ」

続いて速水と矢田が清磨に話しかけるが、あくまで彼は芸に参加する気は無いようだ。

「それは冗談として……本当にお疲れ様、高嶺。あの戦いは見ててヒヤヒヤしたぞ」

まずは千葉が労いの言葉をかけてくれた。彼はガツシユペアの強さが分かっているが、2人が窮地に立たされた場面を見せられて気が気で無かったのだ。だからこそ千葉は2人が戦いに勝利してくれて心底安心している。

「アンタ達はちゃんと戻ってくると思ってた。一先ずお帰りなさい」

速水の素っ気ない口調は健在だ。しかし彼女も他の生徒と同様に2人を心配していたのは、ここだけの話である。

「今はこう言ってるけど、凜香ってホントは高嶺君達の事を凄く気にかけてたんだよ」

「矢田、余計な事言わなくて良いから」

「ハハハ。取り敢えず心配させたのは悪かったよ」

素直でない速水の心境を矢田がバラしてしまった。そして速水は顔を赤くしながら矢田を嗜める。矢田自身は悪気があつた訳では無いが、速水からのお叱りを受けた事で彼女は少しバツの悪そうな顔を見せる。そんな光景を見た清麿が笑う。

「やっぱ魔物の力ってスゲーんだな。改めて思い知らされたわ」

「ガツシユもかなり特訓したからな。それに暗殺の訓練も加わって、アイツはかなり強くなったよ」

木村が魔物の強さに感心する。かつて落ちこぼれ呼ばわりされていたガツシユの実力は清麿と共に戦いを乗り越える度に高まっていき、仲間と協力し合いながらもここま

で勝ち残る事が出来たのだ。

「俺達も、もつと強くならないとな」

「そうね。殺せんせーを暗殺する為にも」

ガツシユペアの戦いぶりを見て、千葉と速水は殺せんせー暗殺の意志を改めて固める。元々仕事人気質な2人だが、ガツシユペアを意識している所もあるようだ。

「そうだな。岡野じゃねーけど、俺も負けてられん」

木村も同じことを考えている。彼もまた負けず嫌いな性格だ。2人の戦いはE組の生徒の多くに影響を与えるには十分だ。

「皆気合入ってるなあ。でも、ガツシユ君達があんなに頑張ってる姿を見ちゃったからね……本当に、2人が無事に帰って来てくれて良かった。凄く心配したんだよ」

「ありがとな、矢田」

一方で矢田は少し暗い表情を見せる。それ程に2人の事が心配だったのだ。優しい性格の彼女には、魔物の戦いは刺激が強かったのかもしれない。そこまで気にかけてくれる矢田に対して、清磨は嬉しそうな顔で礼を述べるのだった。

ガツシユは芸を終えた後に自分の席に戻る。そんな彼を神崎と杉野が待ち受けてい

た。

「ガツシユ君、ダンスお疲れ様。とても上手だったよ」

「宴会の主役が余興つてのにも、中々レアな気がするけどな」

「ウヌ、とても楽しかったぞ!!今までも色んな者達とダンスをしてきたのだ!」

今回やわかばパークのダンス以外にも、ガツシユは何かある度に誰かと踊る頻度が高い。ヨポポ、ビクトリウム、コーラルQ、ビッグボイン等様々だ。それは戦いの最中だろうとお構いなしである。そんな話に2人は笑みを浮かべながら耳を傾ける。

「魔物って楽しそうな奴がたくさんいそうだな。色んな魔物を見てみたかったぜ」

「王様を決める戦いがなければ、良い子が多いんだろね。私も会ってみたいなあ」

杉野も神崎も他の魔物達に興味津々だ。

「そんな数多くの魔物が住む魔界をガツシユは守り切ったんだよな。ホントにスゲー事だと思う」

「しかし杉野、私だけではそれを成し遂げられなかったのだ。他の魔物達も協力してくれたからクリアを倒せた。皆には感謝しておる!」

杉野は改めて感心する。もしも金色の本の力が出現しなかったら、ガツシユペアはクリアを倒す事が叶わずに魔界は滅びていたであろう。他の魔物達と協力する事で魔界の滅亡を防げた。ガツシユペアがそれを忘れて力に溺れる事は無い。

「ガツシユ君はこれまでもそんな小さな体で戦い抜いてきたんだよね、優しい王様になる為に。そして今回の戦いでもガツシユ君が諦めずに頑張ったからこそ、皆も力を貸してくれたんじゃないかな？」

神崎はガツシユの頭を撫でながらそう言う。実際にその通りだ。ガツシユペアは最後まで逃げる選択肢を取らなかった。だから他の魔物達が感銘を受けて金色の本が発動するに至ったのだ。

「有希子……兄のゼオンも似たような事を言ってくれたのだ。魔界の王を決める戦いは悪い事だと考えておったが、私達が戦ってきた事は無駄では無かったのだな」

「戦いの善し悪しは分からないけど、これが無ければ皆ガツシユ君に会えなかったんだよね……それはちよつと寂しいかな」

「……それもそうなの」

ガツシユは未だに悩んでいる、魔界の王を決める戦いが本当に悪い事なのかどうか。コルルを初めこの戦いで傷付いた者は多いが、それを経て多くの者達が成長しているのも事実だ。この戦いがあったからこそE組もガツシユペアと共に楽しい時間を過ごせた。それが無かった事になってしまうのは、皆にとつても好ましくない。

彼等がその事について考えていると、ガツシユの後ろから物凄い勢いで抱き着いてくる女生徒がいた。

「ガツシユ君くく!!」

「ヌオツ……カエデ!!」

言うまでも茅野である。彼女がそこまでするのはそれだけガツシユが心配だったからであろう。画面越しではあるが、目の前でクラスメイトが消えかけたのだ。不安にない訳が無い。そんな彼女共に奥田もガツシユの所に来てくれた。

「今回は無事に帰って来てくれたけど、魔物の戦いが終わっちゃったらもうガツシユ君は魔界に帰っちゃうんだよね。そんなの……」

ガツシユに抱き着きながら茅野は寂しそうな顔を見せる。魔界の王を決める戦いはガツシユとブラゴの一騎打ちが最後になる。その戦いが終わってガツシユが魔界に帰れば、彼等が再会出来る保証などどこにも無い。二度と会えない可能性の方が高いくらいだ。

「確かにそうですよね。私もガツシユ君と二度と会えなくなるのは寂しいですから」

奥田もまた悲し気な表情を浮かべる。元々内気であった彼女にもガツシユは明るく接してくれた。そんな彼との別れ。目を逸らしたい事ではあるが、直面は避けられない。辛い真実に耐えかねた奥田は、茅野と同様にガツシユに抱き着く。

「私も……ガツシユ君とお別れしたくないです!!」

「ウヌウ、愛美まで……」

奥田はガツシユとの別れを嫌がるが、残念ながらそれは受け止めなくてはならない事実だ。当然彼女もそれが分かっている。2人の女生徒が自分にくつついている状況にガツシユは一瞬だけビツクリするが、すぐに平常心に戻って言葉を発する。

「2人共、心配するでない。清麿が魔界と人間界を繋ぐ方法を考えると言っておった。私も何か探ってみよう……だから今は一緒に楽しい時間を過ごそうぞ！」

「うん……うん!!」

「はい……今後ともよろしく願います!!」

今にも泣きそうな顔だった茅野と奥田が再び笑顔を見せる。今の彼女達には不安は無い。これからの別れを嘆くよりも、今共にいる時を有意義に過ごす方が良いに決まっている。そんな3人が一緒にいる状況を見ながら杉野と神崎は温かい目で見守る。

「あいつ等は分かりやすく自分の気持ちを相手に伝えていける。確かに思ってる事を素直に口にするのは大切な事だ」

「うん、ちゃんと言わないと分からない事って絶対にあるからね」

2人は会話を交わす。特に神崎は厳しい父親によって抑圧されてきた過去を持つ為、思いを伝える大切さが良く分かっている。

(俺も、神崎さんに素直に思いを伝えられたら……)

「杉野君、どうしたの？」

「いや、何でも……」

杉野は神崎を見て顔を赤くする。そんな彼に神崎が声をかけてくれるが一步踏み出せない。彼女に対する好意を中々本人に言えないでいる杉野であった。

茅野と奥田に抱き着かれるガツシユを見ているのはこの2人だけではない。清麿もまた渚・カルマ・中村・寺坂と共にそれを目撃していた。

「ガツシユって結構モテるよね。高嶺、アンタ本当にガツシユを取られちゃうんじゃないの?」

「顔に嫉妬の2文字が書かれてるよ、高嶺君」

「んな訳あるか!! ったく……」

「ははは」

清麿はいつも通りに中村とカルマにいじられている。この会話の流れを断ち切る方は【アンサー者カ】をもつてしても分からないかもしれない。そんな様子を渚は苦笑いを見ながら見ている。

「まあ高嶺、テメーもガツシユもよくやったんじゃないのか? そもそも、あの力があればタコの事もやれんだろ?」

寺坂の言う力、金色の本。殺せんせーのマッハ200の速度をもつてしてもシン級の術の連打は脅威だ。しかし清磨は首を横に振る。

「そんなうまい話は無いさ。あの力も魔界の危機だから出て来たようなもんだしな」

「ケツ、今だつて地球の危機だろーが。あのタコが爆破させようとしてんだからよ」

確かに魔界の滅亡は防がれたが、殺せんせーによる地球の滅亡の危機は去っていない。このまま卒業までに暗殺を成功させなければ、ガッシュペアはブラゴペアとの最終決戦を行う事すら叶わない。

「あれ、寺坂がまともな事を言ってるね。頭でも打った？」

「珍しい事もあるもんだ」

「テメー等うるせーぞ!!」

カルマと中村のイジリの対象が清磨から寺坂に移った瞬間である。寺坂は2人を怒鳴るが、彼等はそれを意にも介さない。

「2人は変わらないね、清磨」

「そうみたいだな、渚」

2人はそんな光景を呆れ気味で見ながら、それぞれの名前を呼ぶ。渚の清磨呼びは思った以上にしつくり来ている様子だ。そして呼び方の変化に対してカルマ・中村・寺坂がそれぞれ反応する。

「渚君の清磨呼びも、結構様になってるね」

「何か渚、高嶺達の戦いが終わってから変わってきてる気がする」

「どういう心境の変化だ？別に良いけどよ」

「そうだね。清磨とガツシユの戦いを見て、僕は母さんに思いを伝える覚悟が出来たから」

ガツシユペアの戦いを見た後の渚と母親の口論は凄まじかった。そんな渚を見て、彼の印象が変わったと感じる生徒達も多い。

「いや、渚の勇気が見れたって感じだよ。けど、何も知らずに性別の事でいじっちゃったのはちよつと不味かったかな？ゴメン」

「中村さん、気にしなくても大丈夫だよ」

中村が申し訳なさそうな顔を見せる。自分が渚の性別に関して触れていた事を悪く思っているのだ。彼女自身、渚がここまで思い詰めていた事を知らなかったのだ。しかし、当の本人は気にしていない様子だ。

「しかし、高嶺もガツシユもあんな強気な渚を見れなかったのは残念かもだね」

「まあ、渚君がやる時はまたあるんじゃない？」

「おめー等、見世物みたいに言うなよな」

「けど、僕も皆で清磨とガツシユの戦いを見てたから人の事は言えないのかな……」

ガツシユペアの戦いも渚の口論も、しつかりとE組の皆に見届けられていた。しかし仲間が見ていくれるのは、3人にとってそれぞれ力になった様だ。

「俺とガツシユは皆で倒すべき敵を倒した。渚はE組に残る事が出来た。これでしばらくは暗殺に専念出来るだろう。最も、ブラゴ達との戦いにも備えなくてはならんが」

「ブラゴつてのは、あの黒い魔物の事だよ？彼等も強そうだったな」

「高嶺君達なら大丈夫でしょ。まあ頑張つてよ」

「勿論だ、何としてもガツシユを王にして見せる！」

ガツシユペアの目的の1つは果たされた。しかしそれはゴールなどでは無い。彼等の戦いはまだまだ続いている。清麿が決意を新たにしていると、ガツシユと目が合った。そしてガツシユペアはそれぞれの顔を見て頷く。お互いにこれから成すべき事は分かっている。それに向けて最大限努力するのは確定として、今はそれぞれこの宴を楽しむ事にした。

二期編後半く冬休み編

LEVEL・65 お出かけの時間

ロッキー山脈でのクリア・ノートとの戦いも終わり、それに関わった者達はそれぞれ
の生活に戻る。ガツシユペアは殺せんせー暗殺及びブラゴペアとの最終決戦に向けて
の特訓、ブラゴペアは日々の鍛錬及びナゾナゾ博士・アポロの協力を経て殺せんせーに
ついての調査（博士はヴィノーの親を探しながら）、デュフォーはあてのない旅、サン
ビームはアフリカでの仕事、恵はアイドル活動の再開。

そしてとある休日、恵が仕事の無い日と言う事でガツシユペアと共に外出する事にな
った。ちなみに彼等は今、柵ヶ丘の街中を歩いている。

「恵さん、どうしてまた柵ヶ丘に行こうと？」

「実は直近でこの地域での仕事があるの。だから少しでも土地勘を身につけておこうと
思っただけ」

現地の事を少しでも知っておいた方がそこでの仕事がしやすいとの事で、恵はガツ
シユペアに柵ヶ丘市を案内してもらっている。魔物の戦いが終わっても彼等の交流は
続いて行くだろう。

「ウヌ、恵は仕事熱心なのだな！」

「当分はアイドル活動が主になっていくからね。でも、時間があるときはこうやって2人と会いたいな」

「俺もそうしたい。これからも連絡を取っていこう」

「そうね」

彼等はそれぞれやるべき事がある。頻繁に顔を合わせる事は叶わないが、それでもお互いに一緒に過ごす時間を作っていきたくないと考えている。一行はそんな話をしながら街を歩いていくが、時折恵は寂しそうな表情を見せる。

（恵さん、テイオがいなくなつて辛いんだろ。だがこつちからその話題を蒸し返す訳にはいかない。どうすれば……）

その原因を清麿が分かり切つていても、容易に改善する事は出来ない。親しい者との別れはそれ程に悲しい事なのだから。ましてや彼女達は本当の姉妹の様に仲が良く、共に苦闘を乗り越えてきたのだ。そんな2人の絆は本物である。清麿はどうしたものかと考えていたその時、

「清麿、大丈夫かの？」

「何だか顔色が良くないわね。どこかで休む？」

ガツシユと恵が不安そうな表情で彼を見る。恵の事を案じていた清麿だったが、逆に

2人に心配をかけてしまった。それを察した彼は申し訳なく思うと同時に自分の気持ちを誤魔化す為に笑みを見せる。

「2人共、心配しなくても良いよ。済まない（いかんいかん、俺が気を使わせてどうする……）」

「ウヌウ、それなら良いが」

2人を不安な気持ちにさせてしまったと思い、清麿は焦る。その後、彼は何か楽しい話題がないかを頭の中で考える。そして清麿の脳内に、柵ヶ丘中で行われるとあるイベントの事がよぎった。

「そうだ、恵さん」

「どうしたの?」

「実は来週、うちの中学で学園祭があるんだ。E組も店を出すから、都合が良かったら来てくれないか?」

11月中旬の土日に学園祭がある。しかし、このイベントは柵ヶ丘学園における年間最大の行事と言っても過言ではない。トップの売り上げを誇るクラスは就活でもその事をアピールする事が可能な程だ。ちなみにE組では裏山で取れる食材を使った出店を行う。料理は村松や原が中心で行い、生き物に詳しい倉橋や殺せんせーは食材の選別、文章力に長ける狭間は商品紹介、美術が得意な菅谷はポスター作成等E組の長所を

最大限に活かす寸法だ。

「柗ヶ丘の学園祭ね……」

恵は何かを考える素振りを見せる。

「恵、その日は仕事かの……」

思い悩む彼女を見てガツシユが声をかける。恵のアイドル活動はとても忙しく、土日に休む事もままならない場合も多い。だから学園祭の日も何かしらの仕事が入っているとガツシユペアは考え、残念そうな顔をする。

「実はね……その日の学園祭で私もコンサートに出演する事になってるのよ」

「な、何と!?」

恵の口からは思いも寄らない言葉が発せられた。柗ヶ丘での仕事は、学園祭への出場の事だったのだ。

「中等部のA組の出し物なんだけどね、その浅野君て子がうちの事務所と繋がりがあ
るみたいなの。だからそこで歌って欲しいって……」

「A組!?」

ガツシユペアの目が飛び出そうになる。恵がただ学園祭に仕事として来るならともかく、浅野達A組の出し物に参加するのだから。今回も体育祭や定期テストと同様に、E組とA組はそれぞれの売り上げを競うつもりだ。彼等は恵に事情を話した。

「そっか。清麿君達とは今回、商売敵って事になっちゃうのかな」

彼女はバツの悪そうな顔をする。しかし、話はそれだけに収まらない。

「あとね……」

そこでフォルゴレさんと共演する事になったの」

「フォオ、フォルゴレだと!?!」

ガツシユペアの顎が外れそうになる。共に戦ってきた2人の仲間が、今度はA組陣営に行ってしまったのだから。この勝負もまたE組にとって分の悪い戦いになりそうだ。A組はイベント系、E組は出店。単価はA組の方が高くなり、恵やフォルゴレを始めとする多くの有名人による集客力はバカにならない。さらにE組は裏山にて店を出す。山を登るだけでも一苦勞なので、立地でもA組が有利だ。

「でも1日中ずっとそこにいる訳じゃないから、空いた時間でフォルゴレさんと一緒にE組の方にも行くようにするわね。ちなみにどんな料理にするつもりなの?」

「ああ、それはな……」

恵もフォルゴレもE組の店に来てくれるという。そして清麿はE組で出す品について説明する。メインはつけ麺で、村松の得意分野だ。しかし、材料は小麦粉では無く裏山に落ちているどんぐりを粉にする。それ以外の食材も全て裏山の物を使用する。裏山には多くの高級食材も眠っており、サイドメニューも豊富だ。

「へえ、自給自足の食材を使った料理か……楽しみにしてるわね」

彼女は期待値を上げる。E組とA組の売り上げ対決の勝敗は如何に。

一行はショッピングモールのゲームセンターに来了。休日なだけあつてかなり混雑しており、多くのゲームが客で埋まつている。彼等はどうにかやれる場所が無いかを探している、見覚えのある2人組がシューティングゲームをしていた。

「ウヌ、あの者達は？」

「……何だ、あいつ等も来てたのか」

ガツシユペアがその2人に話しかける。

「杉野と神崎じゃないか」

「お主達もここに来ておつたのか!!」

「あ……高嶺達!!」

「こんな所で会うなんて奇遇だね」

(E組の子達だったのね……)

杉野は彼女に気があり、度々遊びに誘つたりしている。彼は何度もアプローチをかけているが、現状は神崎がそれに気付く素振り無く、当の本人からはいつも気にかけてくれる友達としてしか見られていない。しかし時が経てば、杉野の思いは報われるかもしれない。

「高嶺君、そちらの方は……」

神崎と杉野が恵の方を向く。その視線に気付いた彼女は変装用の伊達メガネを外し、2人に対して自己紹介をする。それを見た2人も本物のアイドルが目の前にいる事に動じながらも自分達の名を名乗り、挨拶を済ませた。

「よろしくね。友人君、有希子ちゃん」

「は……はい!! (いきなり下の名前で呼んでくれた?!)」

「よ、よろしくお願ひします (何だか緊張しちゃうな……)」

国民的アイドルとの対面で杉野も神崎も狼狽する。

予期せぬタイミングで有名人と顔を合わせて、当初は困惑していた杉野と神崎だったが、少し恵と話すすとすぐに打ち明ける事が出来た。ちなみに恵は今、神崎と共にシューティングゲームで遊んでいる。

「このゲーム、結構難しいわね……」

「はい、少しコツがいりますので」

「恵、頑張るのだ!!」

隣でガツシユが応援してくれるが中々上手くない様子だ。恵は四苦八苦しながら神崎にレクチャーを受ける。

「あく、また失敗しちゃった……私は全然だったけど、有希子ちゃんてゲームがとても得意なのね」

「ありがとうございます。大海さんも初めてにしては筋が良かったですよ。他のもやってみますか？」

「“恵”で大丈夫よ……そうね、次はガツシユ君がやりたいゲームにしましょう」

おしとやかな女性同士、彼女達は気が合う様子だ。内面が強かなのも共通している。しばらくは恵が中心でゲームをしていたが、今度はガツシユが神崎に教えを乞う番の様だ。そして神崎は自分の両手をガツシユの両肩に乗せる。

「ガツシユ君、何をやってみたい？」

「そうなの……」

ガツシユは周りを見渡しながら、どのゲームをプレイするかを決めかねている。

その一方で清磨と杉野は、野球のアーケードゲームをやりながら3人の様子を見ていた。

「なあ高嶺、神崎さんと恵さんて凄い組み合わせだよな？」

「と言うつと？」

「だって2人共いかにも清楚な美女同士って感じだろ？華があるって言うか……」

かたやクラスで気になる女子ランキング堂々1位でE組のマドンナ的存在、かたや現役女子高生でありながら超国民的人気アイドル。そんな2人が談笑する姿を見かけたら、多くの人間が振り返ってしまっただろう。恵は伊達メガネで一応は変装しているが、優れた容姿は健在だ。

「ガツシユの奴、あんなに神崎さんと親し気に……」

「ハハハ」

ガツシユは今、恵に見守られながら神崎に格ゲーを教わっている。他の人がゲーム内でカッコよく技を決めている様子を見て自分もやりたがったのだ。しかも彼は神崎の膝に座りながらそれをしている。そんな2人を見て嫉妬する杉野に対して清麿は苦笑いをする。

「ガツシユは女子達の間でも人気だからな」

「愛嬌があるんだよな、純粹で裏表もないし」

2人がガツシユを評する。彼の無邪気な一面は女子達の母性本能をくすぐるのだろう。特に茅野は最たる例で、何かあつてはガツシユを気にかけている。彼等はしばらくガツシユの話を続けていたが、杉野が別の話題を振る。

「恵さんてかなり親しみやすいよな。近寄りたいたい雰囲気も無いし」

「ああ、気さくでとても良い人だよ」

話題がガツシユから恵の事へと移り変わる。杉野にとっては思いも寄らない出会いだったが、彼女の人柄ゆえに今は緊張感も無い様子だ。相手が有名人となると一緒にいてもどこか壁を感じてしまう場合も考えられるが、杉野にとって恵はそうはなっていない。

「いきなりファーストネーム呼びされた時はさすがにビビったけどな」

「なるほどな」

恵は魔物の戦いにおける仲間以外にも、水野やE組の生徒達の事も下の名前で呼んでいる。ガツシユペアの友達という事で、彼等とも親しい関係を築きたいと考えているのだ。

その頃ガツシユは、神崎の指導の甲斐あつて格ゲーで勝ち越す事が出来ていた。

「ガツシユ君、凄いわね！」

「しかし、ほとんど有希子のおかげだったのだ」

「ううん、ガツシユ君はよく頑張ってたよ」

ガツシユは素直に喜べない。重要な場面では神崎が操作していた事も多く、自分の力

で勝てたとは思っていないようだ。そんな彼等の後ろに小学生くらいの子供達が並び始める。

「あの者達もこのゲームをやりがあっておるみたいなの」

「それなら私達はどいた方が良いかしら？」

「そうですね。ガツシユ君、お疲れ様」

「有希子こそ、ゲームを教えてくださいありがとうございますのだ！」

3人がその場を去ると子供達がゲーム機に群がる。余程楽しみだったみたいだ。そしてガツシユ達は少し離れた場所で野球ゲームをしている清麿と杉野に合流した。

「清麿達がやっているのも楽しそうなの！」

「そうだな。俺達も一区切りつきそうだし、次はやってみるか？」

新たに興味を示したガツシユに対して清麿がそれを勧める。ガツシユはゲームの画面を見て目を輝かせる一方で、杉野が先程の格ゲーのエリアの方を見て険しい顔を見せる。

「杉野、どうしたんだ？」

「あれ見てみるよ」

杉野が指を差す。するとその先では先程の子供達がゲームをしているのだが、彼等はどこか悲し気な空気を醸し出していた。清麿達がその様子をよく見ると、子供達は対面

に座る中年の男と対決をしている。しかし子供達はその男相手に齒が立たず、しまいは全員泣かされてしまった。そして男の方は優越感に浸っている。

「随分と大人げない事をしてるわね」

「ウヌウ、子供達がかわいそうなのだ」

恵とガツシユを始め、一同は眉をひそめる。小学生相手に散々マウントを取り続ける大人の様子を見せつけられれば、誰しもが良い気分にならないだろう。男の行動を見かねた彼等はその場に向かう。

そして一同は男の隣に立ち、まずは清麿が止めに入る。

「おいアンタ、その辺にしといたらどうだ？」

それを聞いた男は不快な表情をして彼等を睨み付ける。自分の楽しみを邪魔された事が気に食わない様だが、周りから見れば弱者をいたぶる悪人でしかない。男は口を開く。

「何だよ、俺はコイツ等と遊んでやってるだけだぞ」

男は小学生達を指差しながら、不細工な顔で彼等を睨み返す。遊んでいると言うが、無理矢理に対戦を申し込んで相手を蹂躪し、優越感に浸っているだけだ。しかも本人に

はその自覚が無いようだから性質が悪い。男は不満を述べ続ける。

「あーあ、せっかく楽しくやってたのに気分悪くなった。オタク等学生だよな？口の利き方に気を付けた方が良いんじゃないの？全く……」

男の理不尽な言動に一同はストレスを溜めていく。そして清磨の怒りが頂点に達し、今にも鬼の表情を見せて男に物申そうとしたその時、神崎が一步前に出た。

「だったら、次は私と勝負しませんか？」

彼女がそう言う。穏やかな口調はこれまでと変わらないが、その目と言葉には明確な闘志が宿っている。ゲーム好きな神崎にとって、ゲームセンターで好き勝手に振舞う輩の存在は容認出来ない。

「有希子ちゃん？」

神崎の変貌に恵が戸惑う。神崎の強かな面を知る者は多くないが、突如それが露わになる事で恵を動揺させる。

「私が勝ったら、二度とこんな真似はしないと誓ってくれませんか？勿論貴方が勝てば、私達は何も言いません」

「構わねえよ。俺にたてついた事、後悔させてやる！」

神崎の強気な発言に男は動じる事なく勝負を引き受けた。ガツシュ・恵・杉野は彼女に不安の目線を送るが、神崎は自信に満ちている。彼女のゲームの腕前は確かだ。そし

て清磨は神崎相手に、かつて修学旅行で自分が格ゲーで完膚なきまでに叩きのめされた事を思い出す。

（まあ問題ないだろう……あの時の神崎、ちよつと怖かったんだよね）

「清磨、大丈夫かの？」

清磨が冷や汗をかきながらその時の事を考えていると、ガツシユが心配の眼差しを彼に向けた。

一方で神崎は男と対戦する為にゲームの前の席に着こうとする。ゲームの前には小学生達が群がっていたが、彼女は自分が座る為の場所を作ってもらった。

「ちよつとゴメンね。もう大丈夫だから」

神崎が泣き顔を見せる小学生達に優しく微笑みかける。そんな彼女が子供達から目を逸らした瞬間、その視線が冷たくなるのを清磨は気付き、彼は寒気を感じる。神崎がゲームの準備を始めたと同時に、子供達にはガツシユが駆け寄る。

「お主達、もう心配はいらぬのだ。あのお姉ちゃんが悪い者をやつつけてくれるからの！」

「「「うん！！」」」

ガツシユは子供達に混じって神崎を見守る。そしてゲームセンターの秩序をかけた戦いが開始された。

格闘ゲームはルールとして、先に5勝した方が勝ちだ。しかしサレンダーも認められている。神崎と男の対戦は、始めは互角の様に思われた。

「結構レベルが高そうな戦いだわ、有希子ちゃん負けないでね」

「神崎さん、ガンバレ！」

恵と杉野は神崎を応援するが、清磨は口を開かない。神崎の実力の片鱗を知る彼にはこの先の展開が分かり切っている。

(……そろそろか?)

清磨の予感的中した。途中までは一進一退の戦いが繰り広げられていたが、段々と神崎が優勢になる。一度開いた差は縮まる事なく、彼女は相手のプレイヤーにダメージを与えていく。かつて神崎にゲームで完敗した清磨だからこそ、この展開を予測する事が出来た。

「ウヌ!!有希子、凄いのだ!!」

ガツシユの声と同時に神崎が1勝をもぎ取る。男は汗をかきながら2戦目の準備に入るが、神崎は余裕の表情を崩さない。

「くっ……次だ次！」

男の機嫌が優れない。自分がここまで押されるとは思いも寄らなかつた様だ。そして2戦目が始されるが、男が神崎にダメージを与える事は叶わない。ガツシユと杉野

はその光景を見て目を輝かせるが、恵は違和感を覚えて清磨に問いただす。

「ねえ清磨君、これって……」

「気付いたか、恵さん。もうこれは決闘などでは無く一方的な蹂躪、いや誅伐と言うべきか」

清磨の言う通り、神崎と男の間では実力差があり過ぎてもはや勝負にならない。男は反撃する事すら許されずに体力を削られていく。画面に映されているのは公開処刑と言つても過言ではない。清磨と恵は冷や汗をかきながら体を震えさせる。圧倒的な強さを持つて神崎は2戦目、3戦目共に勝ち星をあげていく。既に男の顔には戦意は皆無だった。そんな光景を見かねた清磨は止めに入ろうとした。

「なあ……神崎。相手もやる気を失っているみたいだし、その辺にしておいても……」

「ダメだよ、まだ勝負はついてないから」

神崎は聞く耳を持たない。男が自分より弱い相手の事はいたぶるくせに、強い相手とぶつかった瞬間逃げる行為は許せない。

「……そうか」

（清磨君が折れた!!）

清磨は彼女を止める事が出来なかった。それ程に神崎の芯は強い。気の強い彼をもつてしてもこの試合を止められなかった事実を恵は重く受け止める。そしてゲーム

は再開されたが、清磨と恵は神崎に怯えながらその光景を見届けた。

結果は言うまでも無く神崎の圧勝だ。男は懲りたのか、自分がしてきた言動を猛省した上で土下座する。

「申し訳ございませんでしたー!!」

こうして1人の悪徳ゲーマーは神崎の手で成敗された。その男は謝罪の弁を述べた後、走ってその場を去った。

「やったのだー!!」

「神崎さんスゲー!!」

ガツシユと杉野は子供達と共に神崎に駆け寄るが、清磨と恵の顔は青ざめたままだ。

「あいつ等、神崎の恐ろしさに気付いてないのか?」

「有希子ちゃん、テイオとは違った意味で怖いわね……」

彼女がゲーム内にて容赦無く敵を葬る様子を見て、恵はテイオを引き合いに出す程の恐怖を感じた。2人が神崎について話していると、丁度ガツシユ達に囲まれている彼女と視線が合った。その時の神崎は通常通りのおしとやかな表情を見せていたが、清磨と恵は苦笑いしながら彼女に手を振り返す事しか出来なかった。

LEVEL. 66 お出かけの時間・二時間目

清磨・ガツシユ・恵はゲームセンターを出て神崎・杉野と別れると、時刻は昼頃になろうとしていた。そこで彼等は昼食を取れるエリアに行く事にする。一行はショッピングモールのフードコートを目指す。

「友人君と有希子ちゃんて、多分デートでここに来てたのよね？邪魔しちやったかしら？」

恵が少し申し訳なさそうに口を開く。近い年代の男女が遊びに来ている様子を見た彼女はそれをデートと決め打つ。

「まあ、杉野はそのつもりだったんだろうな。神崎はその事に気付いていないようだが」杉野の好意を神崎が察する様子は今のところ無い。彼には頑張つて欲しい所である。そんな2人を見た清磨は改めて杉野に同情するのだった。

「杉野は有希子の事が大好きだからの！」

「ガツシユ、その意味が分かっているのか？」

「ウヌ？」

杉野はその好意故、何かと神崎を気にかける事が多い。彼女はその事自体には非常に

感謝しているが、杉野の気持ちに気付くには至らない。そんなもどかしい様子はE組内の知るところだ。ガツシユもその光景を目の当たりにしているが、彼も恋愛感情には疎い。

「(分かってないみたいだ。テイオ、頑張れ)……恵さんもそんなに気にしなくても良いと思うよ」

「ありがとう、清磨君(……テイオも先が思いやられそうね)」

ガツシユの鈍い様子を見て、2人は心の中でテイオの応援をする。彼女の思いがガツシユに届いてくれるかは未知数だ。ある意味テイオと杉野は立場が似ているかもしれない。

「友人君の気持ち、有希子ちゃんに伝わると良いのだけど……」

「ああ、杉野には報われて欲しいよ」

恵は杉野と神崎とは初対面であるが、それでも杉野の思いが理解できる程に彼の好意は滲み出ている。今日で彼等と交流を深めた恵は、これからも2人の事を応援していくだろう。そして清磨も。そんな彼等の恋愛事情を話していると、清磨と恵のお互いの視線が合った。

「2人共目を合わせてどうかしたかの？」

「!?」

ガツシユに声をかけられた2人は汗をかき、顔を赤くしながらそれぞれ目を逸らす。恵は清磨に思いを寄せており、それがきっかけで水野にライバル視された事がある。清磨の方も満更ではない様子だ。

3人はフードコートに辿り着くが、混雑故に空いた席が見当たらない。彼等が3人分の空席を探していると、聞き覚えのある声が聞こえて来た。

「あれ、ガツシユ君達!!」

それを聞いた3人が振り返ると、見覚えのあるクラスメイト達がフードコート内のスイーツを机に並べている様子が見られた。そこには茅野・奥田・不破・矢田・倉橋の5人がいたのだ。特に茅野と倉橋は甘い物が好物で、他の女子達と一緒にスイーツを食べに行こうと言う話になった様だ。

「お主達も来ておったか!」

「今日はE組の奴によく会う日だな」

杉野・神崎に続いてクラスメイトとの鉢合わせ。ガツシユペアは驚きを隠せない。

清麿達も食べたい物を注文した後に5人と合流する。清麿と恵は隣に座り、ガツシユの隣には茅野が席に着く。そして恵はE組女子達に自己紹介を済ませた。

「高嶺君達、本当に大海恵さんとお友達だったんですね……」

「そんなに緊張しないでよ、愛美ちゃん。あと、私を呼ぶときは“恵”で大丈夫だからね」

恵の左隣に座る奥田は緊張を隠せない。E組での経験を経て彼女の内気な面は大分改善されたかに思われたが、国民的アイドルを目の前にしてどう話せば良いか分からなくなっている。そんな奥田に対して恵は諭すように声をかけるが、彼女はかなりシャイな一面がある。それを見かねた茅野とガツシユが口を開く。

「大丈夫だよ奥田さん、恵さんつとでも良い人だから！」

「ウヌ。愛美、その通りなのだ！」

「は……はい！」

それを聞いた奥田は頷くが、顔を赤くしたままだった。そんな彼女を他の面々は見守る。そして一同は各々食事を楽しみながら雑談に入るが、午前中の杉野と神崎についての話題が出て来た。そして不破が何かに納得した様に喋り出す。

「そっか……神崎さん、杉野君と一緒にいたんだ。今日は用事があるって言ってたけれど、その事だったんだね」

彼女達は今日の遊びについて神崎も誘っていた様だが、杉野の誘いの方が先約だった。杉野の誘いがあと少し遅ければ、断られてしまっていただろう。そんな彼の積極的な姿勢について矢田が感心した様に話し始める。

「杉野君、頑張ってるみたい！やっぱり一途な恋って良いな〜」

ビッチ先生の弟子である彼女はクラス内での色恋沙汰にも関心が強い。矢田自身も異性からはモテているが、素敵な相手が見つかるには至らない。

「男女と言えば、愛美ちゃんって結構カルマ君と一緒にいるよね」

「はい、カルマ君にお願ひされて色々作ってるんです」

「へー。愛美ちゃん、カルマ君と仲良いんだ」

矢田が突如奥田に話を振る。奥田の理科の才能を買ったカルマはしばしば彼女にイタズラ道具に作成を依頼している。2人の関係を聞いた恵は感心するが、矢田が気になっているのはそこでは無い。

「うーん、でもそれだけなのかな？」

「ど、どういう意味でしょうか……」

奥田は気付かない素振りを見せるが、矢田は2人にそういう感情がある可能性を考える。そんな話をしていると、恵を含む女性陣の話題は恋バナになっていた。その様子を見た清磨は少し居心地の悪さを感じる。ちなみにガッシュはブリの料理を夢中で頼

張っており、話のほとんどを聞いていない。そんな時、

「あれ、高嶺ちゃんどうしたの〜?」

清麿の心境を察した倉橋が声をかけてくれる。女子6人に対して男子2人。しかもガツシユは食べるのに夢中であり、清麿はどこか疎外感を感じていた。

「いやな倉橋、今話してるのついていわるるガールズトークって奴だろ?俺とガツシユがここにいて良いのか分からなくなってるな」

「言われてみればそうかもね……そつかあ、女の子に囲まれて緊張してるんだ〜?」

「そんなんじゃないぞ!全く……」

てつきり倉橋がフォローを入れてくれるかと思われたが、清麿がからかわれる流れになっちゃった。

「高嶺君、モテそうな割に結構ウブな所があるよね!」

「そんな一面も少年漫画の主人公っぽいかな!」

「やかましい!」

矢田と不破も便乗して清麿をいじる。彼は顔を赤くしながら言い返すが、彼女達はそれをものともしない。

(清麿君が手玉に取られてる……有希子ちゃんもだけど、E組は侮れない子が多いわね)
一方で恵はE組女子の手強い側面を見て警戒を深める。日々の暗殺生活で彼女達の

武器は着実に磨かれている。何も知らない男達が迂闊に手を出せば痛い反撃を受ける事だろう。殺せんせーを初めとするE組の先生達の教育の賜物だ。

「ごちそうさまなのだ！」

「ガツシユ君、口にいっぱいいてるよ」

先程まで食べてばっかりのガツシユがようやく完食したようだ。彼の口まわりは食べ物で汚れており、茅野が呆れ気味の表情をして紙ナプキンでそれを拭き取る。E組では通常通りの光景だが、恵は訝し気な顔でそれを眺める。

「恵さん、どうかしましたか？」

「ううん、何でもないわよ愛美ちゃん。ただカエデちゃんがそうしていると、本当にガツシユ君のお姉ちゃんみたいだなって……」

「そうなんです。茅野さんとガツシユ君で、すごく仲が良いんですよ！」

奥田に尋ねられた恵は少し慌てながら誤魔化す。しかし奥田はそれを気に止める様子は無い。そんなガツシユと茅野の絡みを他の女子達も温かく見守る。その一方で清磨の頭には嫌な予感がよぎる。

「高嶺ちゃん、嫉妬しちゃダメだよ」

「……その会話の流れはどうかならんのか」

恒例のネタが繰り広げられて清磨が何とも言えない表情を見せる。ただでさえ彼が

アウエーな雰囲気を感じている場面において、この会話はいつも通りの流れとは言え清麿には堪えたようだ。ふてくされ気味な彼に矢田が声をかける。

「でもこれ、高嶺君の寂しい気持ちが増しちやつてる?」

「そういう訳では無いぞ……」

「あんまり拗ねないでよ、からかつちやつたのはゴメンって」

「拗ねては無いんだがな」

清麿の否定の言葉には力がこもっていない。流石にいじり過ぎたと思ったのか、矢田は申し訳なさそうな顔を見せる。そんな時に恵が意外な発言をする。

「でも清麿君がそこまでからかわれるのって、それだけ親しみやすいって事なんじゃないのかな?」

「恵さん!!」

彼女の言葉を聞いた清麿がたじろぐ。まさか恵まで自分がいじられる事を肯定してくると思いきも寄らなかつたのだ。

「ウヌ、清麿は『いじられキャラ』なのだ!!」

「おいガツシユ!!どこでそんな言葉を覚えたんだ!!」

ガツシユは思わぬ事を口走る。それを聞いた清麿は驚きながら今にも目が飛び出そうな顔を見せる。

「莉桜が言ってたのだ！清磨と渚はいじられキャラだと」

「中村の奴、いらん事を……」

情報源を知った清磨は頭を抱える。しばらく彼に対するいじりは止まりそうにない。そんな時、不破が得意げに腕組をする。

「うんうん。皆にいじられるだけの愛嬌も、漫画の主人公の要素の1つだよー！」

漫画好きの彼女にとつて、ガツシユペアの存在は漫画の世界から飛び出してきた様にしか思えない。『このマンガがすごい!!』のコードネームは伊達では無い。そんな不破の熱意は恵にも伝わる。

「優月ちゃんって本当に漫画が好きなのね！今度おすすめのを紹介してくれないかしら？」

「分かりました！いやあ、高嶺君もガツシユ君もいかにも王道漫画に出てきそうな感じですよ!!でも2人ってジャ○プと言うよりは……」

「不破、その辺にしとけよ」

不破の発言に対して危機感を覚えた清磨が阻止しにかかる。彼の中では、それ以上不破に喋らせるると良くない事が起こる気がしてならなかった。そして一同はしばらく雑談を続ける。

各々の会話が落ち着いてきた時、倉橋が何かを思いついたかのように口を開く。

「そうだ、ガツシユちゃん！もし良かったらしばらく私達と行動しない？」

「ウヌ？」

「あ！それいいね〜」

彼女の意外な提案にガツシユが首をかしげるが、矢田を始めとした他のE組女子達は何かを察した様にそれに同意する。奥田だけが何だか分からないといった顔を見せるが、他のクラスメイトと共にそれを受け入れる。

「陽菜乃ちゃん、桃花ちゃん……ど、どうしたの？」

「おいお前等……それって……」

事情を察した清磨と恵が戸惑う。2人は正式に付き合ってこそいないが、お互いの事を思っている可能性が高い事は離島の件以降E組内で広まっている。よく言えば2人を思っている行動であり、悪く言えば下世話だ。そして茅野がガツシユの腕を掴む。

「ガツシユ君、一緒に行こ!!」

「カエデ、引つ張らずとも……」

「す、すみません。後で連絡しますね!」

ガツシユペアと恵はどうしたものかと考えるが、結局E組女子に押し切られてガツシユは連れていかれる事になった。奥田だけが申し訳なさそうにするが、反対する事は叶わない。

「み……皆、行っちゃったわね」

「あいつ等、何考えてんだ？」

清麿と恵は目が点になってしまった。少しの沈黙の後、恵が口を開く。

「E組って、結構個性的な子達が多いのね」

「……そうだな、あいつ等の持つ刃は油断ならない」

2人はE組について話し始める。恵はまだクラス全員と顔を合わせた訳では無いが、他のクラスメイトにも興味がある様子だ。しばらくその話をした後、彼女は別の話題を持ちかけた。

「そう言えば、清麿君と2人きりになった事ってあんまり無かったわね。今まではガツシユ君やテイオも一緒だった場合が多いし」

「確かにそうだった。それが当たり前だったからな」

ガツシユペアとテイオペアは特訓や戦い、日常でも顔を合わせる事が多かったが魔界の王を決める戦いが終わればどうなるかは分からない。そうでなくても今はテイオが魔界に帰ってしまい、恵の心の傷は完全には癒えてない状態だ。

「俺もガツシユとはずっと一緒という訳にはいかんからな。いずれ来る別れに備えておかないと。それから朝にも言ったが、戦いが終わってもこうやって顔を合わせていきたくない」

「今後ともよろしくね。あと最後の戦いも頑張つて！」

恵は応援の言葉をかける。ガツシユペアの最大のライバルのブラゴペア。彼等は時に力を合わせながらも厳しい戦いをここまで乗り越えて来た。最後の戦いにおいて、これ以上相応しい組み合わせは無い。

「ありがとう恵さん。とは言えその前に、殺せんせー暗殺を成功させなきゃならんのだ
がな」

「2人共、忙しいわね」

「魔物の戦いが始まってからは非日常の連続だからな。ガツシユとの出会いが無ければ恵さん達に会う事も、E組に行く事も無かったし」

清麿は魔界の王を決める戦いを経て多くの出会いを経験した。パートナーであるガツシユは勿論、目の前にいる恵や他の仲間達。魔物絡み以外でも清麿が変わった事で水野達とも交流を深める事が出来た。また理事長の推薦でE組に行く事にも繋がった。

「この戦いは一生忘れられない物になるわ。それに魔界でテイオが見てくれてるって考えれば、どんな事でも乗り越えられそう」

「ああ、戦いが終わってもガツシユ達とずっと会えない事は無いと思ってる。けどガツシユは王として大変な毎日を送るだろうからな。俺もそれに見合うだけの男にならないと」

2人がこれからの人生に向けて決意を固める。魔物の戦いは彼等の将来にも大きな影響を及ぼしていくだろう。

2人はフードコートを離れた後、食材のコーナーにいる。恵が食材を切らしている状態であり、その買い出しを清磨が手伝う事となった。

「ゴメンね清磨君、付き合わせる形になっちゃって」

「せっかく一緒に来てるんだから、そんなに気にしなくて大丈夫だよ」

遊びに来たにもかかわらず、恵は清磨に自分の家事に同行させてしまう事を申し訳なく考えている。しかし清磨は満更でもないようだ。

「何を作るつもりなんだ？恵さん」

「鍋料理よ、大分涼しくなってきたから作り置きも出来るからね」

「鍋か……体があつたまりそうだ」

恵は親元を離れて暮らしており、家事スキルも申し分ない。清磨も彼女の手料理を食べさせてもらった事があり、その美味しさはよく分かっている。彼は恵の多才な面について素直に尊敬している。

「料理も全部1人でって、改めて考えるとすごいよな。俺、そういうの全然だから」

「一人暮らしを始めると慣れて来るわよ。清麿君の場合なら、華さんのお手伝いからやってみると良いんじゃない？」

華の料理の腕前もかなりの物であり、ガツシユは彼女の手料理が大好物だ。清麿も母親が作ってくれるコロツケが特に好きで、高嶺家に泊った事のあるテッドは玉子焼きを美味しそうに食べていた。

「そうだな、俺も一人暮らしをする可能性に備えてどうにかする必要はありそうだ」

「それに……もし良かったら、私が教えても……」

「め、恵さん!!」

恵の提案に清麿が動揺する。彼等は日々交流を深めているが、実際に清麿は彼女の家が上がった事は無い。テイオと一緒にならまだしも、恵が一人の時であればどうしても意識はしてしまう。彼女も少し顔を赤くしている。

「ふふ、清麿君さえ良ければ……ね」

「周りにバレないようにしないと……」

恵がウインクをしながら清麿に微笑む。彼女の様な女性にここまで好意的に接して貰えるのはありがたい事だが、清麿はたじろぐ一方だ。そして2人は食材を買い物かごに入れていく。

「そう言えばね、清麿君……」

「どうしたんだ？」

恵が何かを疑問に思うような素振りでも口を開く。

「カエデちゃんの事なんだけど」

「茅野がどうかしたのか？」

話題は茅野についてだ。彼女達はガツシユペアを通して仲良くなったが、恵は彼女についてどこか思うところがある様子だ。先程もガツシユと楽しそうにする茅野について、何かを考えながら見つめていた。

「何だか、誰かに似ているような気がするのよ。どこで見たのかまでは思い出せないんだけどね」

「そうなのか。茅野に似た芸能人とかだったり？」

「んん、どうかしら」

恵は茅野を知り合う前に見た事があるかもしれないという。しかしその記憶は鮮明では無く、彼女自身も気になっている。一方で清麿も茅野について何かを感じる時が何度かあり、真剣な表情でその話に耳を傾ける。

「茅野か。ガツシユの事も良くして貰ってるし、話しやすい奴ではあるんだがな。言われてみれば、あいつ自身の事はあんまり聞けてなかったような気がする」

「そうだったんだ……でもカエデちゃんの事は私の思い込みっただけだと思うから、清

「磨君も気にしすぎないでね」

「分かったよ、恵さん」

清磨も恵も、彼女に対して感じた違和感の事は分からずじまいだ。しかし彼等にとつて茅野は親しい人物であり、特にガツシユペアとは同じE組の仲間だ。これからも茅野と仲良くしたいと考える2人だが、彼女の隠し持つ本性には辿り着けなかった。

買い出しを終えた彼等は次に行きたい場所について話し合う。まだ外が暗くなるような時間では無く、ガツシユもE組女子達と行動を共にしており、2人での時間はまだまだ続きそうだ。

「恵さん、次はどこへ行こうか？」

「さっきは私に付き合ってもらっちゃったから、清磨君の行きたい所で良いわよ」
「そうだな……」

清磨は自分が気になっている場所について考える。そんな2人の様子は、傍から見たらデートに来ているカップルにしか見えないだろう。2人の関係がどこまで進展するかはまだまだ定かではない。

LEVEL. 67 学園祭の時間

学園祭当日。本校舎では多くの客で盛り上がりを見せるがE組の出店での売り上げは芳しくない。裏山という立地のハンデは大きい。山のふもとではガツシユと矢田が客寄せを行うが現状2人は暇を持って余している。

「ウヌウ。人が来ないのだ、桃花」

「まだまだこれからだよ、ガツシユ君。私達でいっぱいお客さんと呼ばうね！」
「分かったのだ!!」

矢田は日々ビツチ先生から交渉術を学んでおり、それを活かして多くの客を集めようという寸法だ。それに加えてガツシユの愛嬌があれば鬼に金棒と思われたが、そもそも近くまで客が来ないのだからそれも振るわない。そんな時、学ランを着たガラの悪い5人組の高校生がふもとの方に来た。

「いらつしやいませー!」

矢田が営業スマイルを見せながら高校生達に声をかけるが、ガツシユは彼等に敵意をむき出しにする。

「お主達!!何をしに来たのだ!!」

その5人組は京都で茅野と神崎を拉致した不良達だった。ガツシユが目の敵にするのも無理はないが、今の彼等は大事な客である。矢田がその場をなだめようとするが、先に不良のリーダー格のリユウキが口を開く。

「フツツにメシ食いに来ただけだよ。触手でビンタされたり電撃浴びせられたりするの
はゴメンだからな」

「お客さん、ヤンチャはしないで下さいね。さて、ご注文は何にしますか?」

彼等に暴れる気が無い事を察した矢田が改めて接客モードに入る。E組の店の特徴としてふもとで事前に客の注文を聞いておくのだが、これは客が店まで辿り着くのに時間がかかるのを逆手に取って、注文を聞いた後に山中の食材を採る事で、客が来るまでの時間に合わせて調理する事で新鮮な料理を提供出来るのだ。

「せいぜい美味しいもん食わせてくれや」

注文を終えた不良達が嫌味つたらしい目つきをしながら山を登り始める。その後ろ姿をガツシユが睨み続けるが、そんな彼を落ち着かせるように矢田がガツシユの両肩に手を乗せる。

「ガツシユ君、そんなに怖い顔してるとお客さんが来てくれないよ」

「ウヌ、しかしだの……」

「大丈夫だって、お店には皆もいるし。それに……」

ガツシユは先程の不良達が何かしでかすのではないかと気が気で無い様子だが、矢田はそれを気にしていない。例え高校生達が悪い事をしてきたとしても、E組の皆ならそれを乗り越えられると彼女は確信している。そんな矢田がガツシユを諭していると、寺坂と吉田が2人の方に来た。

「ガツシユの怒鳴り声を聞いて来たんだが……」

「さっきの高校生達絡みだよな？何か企んでそーだったけどよ」

寺坂と吉田の役割は足腰の弱い客を人力車に乗せて、括り付けた自転車に乗って山中腹まで運ぶ事だ。矢田とガツシユとは別の場所で待機していたが、2人の様子を見て来てくれた。彼等は何事かと考えていたが、矢田が事情を説明する。

「……んだよ、そういう訳か。何事かと思つたぜ」

「まあ問題ねーだろ。ガツシユ、あんま騒ぎ起こすなよ」

寺坂も吉田もそれに納得したような素振りを見せる。不良達の悪巧みなど、今のE組にとつては何ともないと言わんばかりだ。

「2人共わざわざ来てもらつちやつてごめんね。もう大丈夫だから」

「気にすんなよ。そういう事が万が一起こつた時のために俺等がここに配置されてるのもあんだからな」

「又ウ……」

寺坂が無愛想な喋り方をしながらガツシユの頭に手を乗せる。寺坂も吉田もE組内では力が強い方である為に人力車を引く係を引き受けているが、乱暴な客を抑える役割も彼等は担っている（ガツシユも然り）。そんな事態は起こらないに越した事は無いのだが、世の中には色々な人がいる。そんな客から店を守る使命を彼等はぶつきらばうな素振りをしながらも引き受けてくれている。

「にしても客が来ねーな。結構ヤバーんじやねーのか？」

吉田が頭をかきながら不安気な顔をする。リユウキ達以降の客足が無い。このまま人が寄り付かなければ、A組との対決はまるで勝負にならない。しかも向こうには恵とフォルゴレも参戦する。彼がそんな事を考えていると、老夫婦2人とその娘と思われる3人組が彼等の方に来てくれた。

「皆、ここにちはあるー！」

客はリイエンとその両親だった。学園祭の事をビツチ先生から聞いた彼女が両親を連れて日本まで来てくれたのだ。ちなみに実家の農作業は他の村人をお願いしている。そしてリイエンはガツシユを抱き上げる。

「リイエン、来てくれたのだな！」

「私は皆の助っ人だからどこでも駆け付けるあるよ」

「ありがとう、リイエンさん！」

リイエンとその両親が注文を選ぶ。そして彼女達がメニューを決めると、リイエンの両親は寺坂と吉田に人力車に乗せてもらい、そのまま山の中腹まで向かった。リイエンはそれに乗らなかつたが、彼女の身体能力なら裏山を登る事は苦では無い。

「色々工夫が凝らされている店あるね」

「ウヌ！ クラスの皆で頑張っているのだ！」

「じゃあ私も行くある。ガツシユ、桃花、お疲れ様ある」

「ご家族と一緒にゆっくりしていつてね！」

リイエンが2人と雑談をかわした後に山を登ろうとするが、先程の不良達が眼にハートマークを浮かべながら山を下ってくるのが見えた。彼等は走りながら「お金降ろさなきゃ！」と叫んでいる。

「桃花……今のつて、イリーナさんの仕業あるよね？」

「うん、先生が彼等をたらし込んだと思うよ」

「ビツチ先生、凄いのだ！」

店に着いた高校生達はE組の営業妨害の為に嫌がらせをしようとしたが、ビツチ先生のお色気攻撃によつてそれは阻まれた。そして彼等は先生にたぶらかされて、より多くの料理を注文する為に駅前のATMに向かったのだ。そんな彼等を見たリイエンは呆れ顔をしながらも山を登る。

一方で清麿は店のホールを務める。彼には厨房に立つという選択肢は無く、また端正な顔立ちを活かす為はこの役割を果たす事になった。そして彼は食事を終えたリイエンとその両親の分の会計を行う。

「ありがとうございます、またお越しくださいませ」

「「こちらこそありがとうございます」

リイエンの両親が穏やかな口調でお礼を述べてくれた。2人はここの料理を気に入ってくれたようだ。

「リイエン、中国から来てくれてありがとうございます」

「清麿、料理すごく美味しかったある！」

「あらリイエン、気に入ってくれたかしら？」

清麿が接客をしていると、ビッチ先生が彼女に声をかける。

「はいある、イリーナさん……」

リイエンはビッチ先生と話を交わした後山を降りていく。一通り接客を清麿が終えると、その斜め後ろで口元をニヤケさせる中村がこちらを見ている事に気付いた。そして清麿は怪訝そうな顔をしながら彼女に声をかける。

「中村、一体どうしたんだ？」

「いやあ、高嶺の接客も様になつてると思つてさ。アンタが誰かに頭を下げてる光景つて、あんまり想像出来んかったのよね」

「俺だつてそうする時くらいあるぞ……つたく」

中村は相手に対して下手に出ている清磨をイメージし辛かった様だ。あらゆる逆境に対しても我を突き通す彼の様子を見て来た彼女にとっては無理もないだろう。しかし清磨も、かつて前の学校でテスト範囲を教えて貰う事をクラスメイトに懇願した経験がある。かつては周りを見下してきた彼も変わる事が出来たのだ。

「それもそうだ。高嶺つて顔も悪くないし、案外接客業とかも向いてたりしてね」

「さあ、どうだろうな」

口を開けば清磨や渚をイジる事の多い中村だが、今回は好意的な事を言つてくれた。彼女の予想外の言動に、清磨は少し顔を赤くする。

「ま、変な客が来て鬼にならなけりやだけどね。接客中に鬼磨になつちやダメだよ」
「鬼磨言うな……つてあの人達は？」

結局中村にからかわれてしまった清磨である。そんな2人は見覚えのある集団が来ているのが見えた。そして彼等の接客は渚が行う。

「渚、来てやったぞー!!」

「さくらちゃん、松方さんに園の皆!!」

渚はわかばパークでのボランティアが終わった後も、時々さくらに教えに足を運んでいる。その時に彼女達に学園祭について話した様だ。A組には遠く及ばないにしても、少しずつ客数を増やす事が出来ている。

「渚、やるねー」

「ああ、俺達もやるべき事を成そう」

そんな様子を見た中村と清麿は再び仕事に取り組んでいく。

わかばパークの皆に料理が行き渡り、彼等が渚と話している一方で、3人組の女子高生の客が来た。しかしそのうちの1人はE組の良く知る人物であり、清麿が挨拶に向かう。そして彼等は店の端にて会話を始めた。

「清麿君こんにちは！他の皆も元気そうだね、ガツシユ君も下で頑張ってたし」

「しおりさん、来てくれてありがとう！」

女子高生の1人はしおりである。清麿はしおりにクリアとの戦いの事を連絡したついでに、学園祭の事を彼女に伝えていた。またしおりもE組とは面識があった為に、友達を連れて山を登ってまで来てくれたのだ。ちなみに彼等の連絡先はわかばパークでのボランティアの時に交換しておいた。清麿が礼を述べると、しおりの友達が彼女に声をかける。

「しおりの知り合いなんだ、だったら話していきなよ」

そう言つて彼女達は先に席に着く。そして少しの沈黙の後、しおりが口を開く。

「清麿君。魔界を守る為の戦い、本当にお疲れ様。勝つてくれてありがとう、改めてお礼を言わせてね。ガツシュ君にも伝えといたから」

「こつちこそ応援してくれてありがとう。その戦いでは、コルルも力を貸してくれた」

彼女は直接ガツシュペアに感謝の気持ちを伝える為に来てくれたのだ。そして清麿はコルルが来てくれた事を話すと、彼女の目が潤み始める。

「……そっか、コルルも頑張ったんだね」

「ああ、彼女の性格通りの優しい術を提供してくれた。本当に助かった」

コルルのシンの術が無ければ、ガツシュペアは宇宙ヘクリアを倒しに行く事は出来なかつた。彼女が2人の生命を守ってくれたからこそ魔界の滅亡が防がれたと言つても過言ではない。清麿の話聞き終えた時、しおりの目には涙は無くなつていた。

「話を聞かせてくれてありがとう。じゃあ私も行くね！」

「待った、しおりさん」

彼女が友人のいるテーブルに向かおうとするが、清麿がそれを止める。

「今、わかばパークの皆も来てるんだ。もし良かったら顔を出しといて欲しい。子供達もしおりさんには懐いていた様だから」

「分かったよ、挨拶しとくねー」

しおりはわかばパークへ職場体験に来ていたが、3日間と言う短い期間で見事に多くの子供達と心を通い合わせる事が出来ていた。そんな彼女は友人の元に戻る前に松方さん達の席に向かうが、子供達はとても喜んでゐる。彼女は再び暖かく迎え入れられた様だ。そんな様子を清磨は嬉しそうに眺めるのだった。

その頃ガツシユは矢田と共に客寄せを行うが、少しずつ人が集まる様になっていた。

「わかばパークの皆もしおりちゃんも元気そうだったのだ！」

「そうだね、こうやって色んな人が来てくれてゐる。それはとてもありがたい事だよ」

店が裏山にある事はE組にとって不利な条件であるが、一同は工夫を凝らしながら少しずつ客を集めていく。矢田の会話術やガツシユの愛嬌もその工夫の1つである。そんな時、1人の中学生くらいの帽子をかぶった少年が軽率な笑いを浮かべて近付いてきた。

「ここが渚ちゃんの店かー」

そこに現れたのは、離島のホテルで女装した渚に一目ぼれしたユウジだった。彼の顔を見たガツシユは目を輝かせる。

「おおつ、お主まで来てくれたのか!!あの時はありがとうなのだ!!」

「やあ君か!お礼なんていいって!!それより、渚ちゃんは上にいるんだよね!!」

彼のお陰でガツシユペアとカルマは離島のホテル6階を楽々突破出来た。ガツシユはその事のお礼を言えて嬉しそうだったが、ユウジの頭の中は渚でいっぱいだった。

「そうですけどお兄さん、何を注文しますか?」

「うゝん、そうだねえ……」

ユウジは食べる物を決めた後に嬉しそうに山を登っていく。そして彼が店に着くと渚が中村に無理矢理女装をさせられ、渚は恥ずかしさあまりに他の客や生徒から見えない場所でユウジと一対一で接客を行う事となる。

彼を2人が見送った少し後、強面の中年の外国人が2人に迫る。

「あの標^タ的に招かれたのだが、おススメの料理はあるかね?」

「ロ、ロヴロさん!!」

「いきなり出て来たのでビックリしたのだ」

彼の気配のない接近には暗殺の訓練を経験してきたE組でも対処は困難だ。ロヴロは死神の襲撃を受けた時に死にかけていたが、どうにか一命を取り留める事が出来て今に至る。そんな彼は注文を終えた後に、満足気な顔でガツシユを見つめる。

「ガツシユ、君は顔を合わせる度に成長しているのだな。特に今はとても吹っ切れた顔

をしている」

「魔物の戦いもあと少しで終わろうとしておるからの。しかし、まずは殺せんせー暗殺を成功させねばならぬ」

ロヴロは魔物の戦いについては詳しく知らないが、一目ガツシユを見ただけで彼が大きな戦い（クリア戦）を乗り越えた事を見抜く。多くの殺し屋の選別が今の彼の仕事であり、人の表情からその者の強さを見抜くうちに、顔から他人の心境等も分かる様になったのだ。

「ふむ、頑張りたまえ。大変な道になるだろうが、君ならどんな困難も乗り越えられるだろうな」

「ウヌ!!」

ロヴロはガツシユの頭に手を置きながら言い放つ。彼にもガツシユの強さが良く分かっている。それと同時に、ガツシユの目指す理想の大変さも。ガツシユは一度だけロヴロに自分の夢を話した事があるが、それを聞いた彼は難しい表情を浮かべていた。そして今も。彼は山道を進んでいく。

その後はしばらく殺せんせー暗殺を狙ってきた暗殺者達ばかりが来て客数を稼ぐこ

とが出来たが、やはりA組には及ばない。ガツシユと矢田がどうしたものかと考えていると、見覚えのある2人組が近付いてきた。

「あ……あなた達は?!」

「こんにちは。ガツシユ君、桃花ちゃん」

「ここに清磨達がいるのか……つと、ガツシユは集客かい？」

「ウヌ!!」

恵とフォルゴレだった。2人が来てくれた事でガツシユと矢田は目を輝かせる。矢田もまた2人と顔を合わせており、彼等の来店を嬉しく思う。

「2人共、料理は何にしますか？おススメは……」

矢田は早速得意の会話術で恵とフォルゴレに料理を紹介していく。それを聞いた2人は興味津々といった表情でメニュー表を眺める。

「参ったなあ、君のおススメがどれも良さそうで悩んじゃうぜ!!」

「なら全部とかどうか？フォルゴレさん」

「ハハハ、バンビーナがそう言うなら……」

（フォルゴレさんが桃花ちゃんに乘せられてる!!）

矢田の説明を聞いたフォルゴレが今にも搾取されようとしている。そんな様子を見た恵は改めてE組の手強さを実感した。そして2人が料理を注文し終わると、ガツシユ

が彼等に声をかける。

「2人共、たくさん頼んでくれてありがとうなのだ!!」

「……そうね、ほぼフォルゴレさんの注文だけだ」

「ガツシュ。私は無敵の英雄パルコ・フォルゴレだぜ?! これくらい訳ないさ!!」

結局フォルゴレは矢田のおすすみを全て注文する事にしたのだ。フォルゴレの女好きと矢田の交渉術の相乗効果である。しかし彼には悔いはない。友が働く店なのだから、その売り上げに貢献するのも英雄の役割だと考えている。

「ありがとうございます、ごゆっくりどうぞ!」

矢田が声をかけると、恵とフォルゴレが山を登り始める。

そして恵とフォルゴレが店の席に着くと清麿が彼等に料理を運ぶが、フォルゴレの注文が多くて大変そうだ。

「2人共、来てくれてありがとう。随分な量を頼んだな」

「バンビーナとガツシュが勧めてくれたからな! 当然の事をしたまでさ!」

(ほとんど矢田のお陰だろうな……)

「清麿君もお疲れ様」

料理が机に並ぶと早速2人はそれを口に作る。まず2人はどんぐりつけ麵を食べるが、その美味しさ故に彼等の箸は止まる気配が無い。

「美味しい！」

「これは凄いな！清磨も作ったりしたのか？」

「いや、俺は調理には手を出していない」

2人は料理を食べ進める。その間にも清磨は彼等が注文した料理を運び続けるが、完食するペースが予想以上に早い。それ程にE組の料理のクオリティが高いのだ。そしてフォルゴレが口を開く。

「そうだ清磨。恵もだけど、クリアとの戦いに勝ってくれてありがとう！これでキャンチヨメや他の皆が消される事は無くなった」

彼は礼を述べてくれた。それを聞いた清磨の口角が上がる。

「魔界の皆が力を貸してくれたからな。それにキャンチヨメがゴームと友達になつてくれたのも大きい」

キャンチヨメがゴームと仲良くなつたお陰でクリアは自分が不利な状況を作り出す事になった。それが無ければ清磨達は負けていたかもしれない。この戦いでは誰が欠けていても勝つことは叶わなかつたのだ。清磨がそんな事を考えていると、2人の元には何人かの生徒が挨拶に来た。

「フォルゴレさん!! チワーツス!!」

「お、君達か! 元気そうじゃないか!」

まずは岡島と前原がフォルゴレに声をかける。彼等は共にわかばパークでダンスをした仲であり、2人はフォルゴレの大ファンでもある。またフォルゴレがわかばパークに来た事で、E組には彼のファンが増加した。

「恵さん、こんにちは」

「カエデちゃんと有希子ちゃん!」

恵の元には2人の女生徒が声をかける。ガツシユペアを介して彼女と接点を持つ生徒が多くなり、彼女のファンも増えている。

2人は多くの料理を全て完食した。そして清磨が会計を済ますと恵がチケットの様なものを2枚彼に手渡ししてくれた。

「恵さん、これは?」

「A組の催しの入場券よ。私達は明日出るから、時間が合ったら顔を出して欲しいな」

「もちろん来てくれるよな?」

清磨も2人が出るのなら、是非とも見に行きたいと考えている。しかしA組はE組の

商売敵。またクラス内での仕事もあるのでそちらに行つて良いものかと悩んでいる。

「無理しなくても良いのよ。ただ来れたら、ね？」

「じゃあな、清磨！」

「あ、ああ」

そして2人は山を降りていく。清磨はどうするかを未だに決めかねている。そして彼はチケットを自分のポケットに隠すと、再び自分の仕事に戻るのだった。

LEVEL. 68 縁の時間

学園祭2日目の朝。ガツシユペアは山を登りながら、昨日恵から貰ったチケットについて話していた。

「恵さんとフォルゴレの共演。是非とも見に行きたいところではあるが、A組の店なんだよな」

「そうなの。それに私達にはE組での仕事があるのだ……」

彼等は恵達を見に行く為にA組の店に入るかどうか頭を悩ませる。共に戦った仲間の招待なのだから、本心では足を運びたいと考えている。しかし商売敵であるA組の利益に貢献して良い物なのか、それにE組での業務もあるのではないか。そんな気持ちで2人の決意を鈍らせる。その時、2人の隣を風が走った。

「良いんじゃないですか？行つてあげても」

「殺せんせー！」

「ヌルフッフ、おはようございます」

突如殺せんせーが出現した。先生は清磨がそれを受け取る場面を見ていたのだ。そんな彼は2人にA組のステージを見に行く事を勧めて来る。ガツシユペアは黙ったま

まだ。

「確かに今はA組と売り上げを競っています。ですがせつかくの学園祭、楽しんでも罰は当たらないかと。それに彼等は君達にとつて大切な仲間なのでしよう？ E組での縁も大事ですが、2人が魔物との戦いで得られた縁もまたかけがえのない物のはずです」

殺せんせーは全てを見透かしたような目をしながらそう言う。楽しい学園祭なのでからA組との売り上げ対決が全てではない。そして先生は「縁」という言葉を口にする。昨日クラスの店に来てくれた客の多くはE組と面識、つまり縁があつた人達だ。そんな人々にこれからもE組の皆は助けられていくだろう。

「まあ、考えておいて下さい。それから私の方から長話をしておいて何ですが、E組の校舎まで急いだほうがいいかもしれませんねえ」

「先生、それって……」

殺せんせーはそう言い残してその場を去る。清麿が事情を聞こうとしたが、先生はもうこの場にはいない。

「清麿、どういう事だったのかの？」

「さあな、取り敢えず校舎に向かうか」

ガツシユペアは早足で山を登る。殺せんせーの言う縁について考えながら。しかし2人がそれについてより深く理解出来るのはすぐ後の事だ。彼等は足を進める。

2人が校舎に向かう途中の道で、何故か行列が出来ていた。まだ開店前だというのに多くの客が待つてくれているのだ。彼等は驚きのあまり目が飛び出そうになるが、話はそれだけに収まらない。何とテレビ局の職員までもが取材に来ており、彼等の対応は三村が行っている。

「ウヌ……何が起こっているのだ？」

「さっぱりわからん。まだ開店すらしてないと言うのに……」

「2人共遅いよー!」

戸惑うガツシユペアに不破が声をかける。2人は彼女の方を向くと不破が事情を説明してくれた。大勢の来客の原因が気になった彼女が律に調査を依頼した結果、E組の店に関する情報源がユウジである事が判明した。彼にはグルメブロガーとしての一面があり、その情報の信憑性は高く、E組で料理をネットで絶賛してくれたのだ。

「そうであったか、優月」

「いやあ、渚君が女装してまで彼の接客をした甲斐があつたよね!」

「アイツには助けてもらえばなしだな。渚は災難だったが……」

ユウジには渚の女装がバレてしまったが、彼はそれを責めなかった。それどころか渚

からの「欠点や弱点を武器に変える」という言葉に感銘を受け、親から甘やかされても
らった小遣いをふんだんに使い、E組の料理を始めとしたお스スメの情報を開示して
くれたのだ。

「今日は大忙しだよ！昨日はA組相手に劣勢だったけど、ここにきての反撃の兆し。ま
さに王道展開!!」

「そ、そうだな……」

不破が目を輝かせる。渚は意図せずに起死回生の一手を放ったのだ。そこから生じ
る逆転の目。漫画の様な展開に彼女のやる気が増す。そんな不破を見たガツシユペ
アも店の仕事に取り掛かる。

不破の言う通り客数が昨日の比では無く、E組一同大忙しだ。殺せんせーがガツシ
ユペアに早く登校するように急かしたのもこれが原因だ。全く知らない客からE組と縁の
あつた人物まで、多くの人々が来てくれた。そして清磨も自分と縁のある2人組の男女
の接客を行っている。

「驚いたよ、サンビームさん。まさかシスターと同居しているなんて」

「ハハハ、まあな。彼女とはクリアとの戦いが終わった後にアフリカの空港で再会した

んだ」

「お久しぶりです、清磨さん。どの料理も美味しいですね」

「全くだ、グルービーだぜ。Dr. ナゾナゾも良い店を紹介してくれた」

何とサンビームとシスターがアフリカから来てくれた。学園祭の情報はユウジのみならず、ナゾナゾ博士までもがガツシユペアと関わりのある人々に流していた。勿論全てのパートナーが来れる訳では無いが、ここでも縁が活きている。

「もつとも、彼はヴィノーの親探しがあるから行けないと言ってたがね」

「そうだったのか、残念だ。相変わらずあの人は俺達の見えない所で協力してくれるんだな」

ナゾナゾ博士が来られない事を一同は惜しく感じる。今この時も、博士は自分の成すべき事に尽力している様だ。そして彼等の席にもう1人のE組の生徒が顔を出す。

「サンビームさん、お久しぶりですー！」

「やあ、倉橋さんじゃないか」

倉橋はウマゴンを通して彼とも親しくなっている。また生き物が好きな彼女は、動物との意思疎通がそれなりに可能であるサンビームに尊敬のまなざしを向けている。

「およよ、そちらの子は？」

「彼女は清磨のクラスメイトだね、ウマゴンと仲良くしてくれたんだ」

サンビームがシスターに倉橋を紹介すると、彼女達はお互いに挨拶を交わす。しかしウマゴンの名前を出した彼の顔が暗くなる。

「倉橋さん。ウマゴンの事なんだが……」

「はい、ガツシユちゃん達から話は聞きました。お別れしてしまっただけ」

「聞いていたのか」

サンビームはウマゴンと倉橋を再び合わせる事が出来なくなった事を申し訳なく感じていた。アフリカから日本に来ていた間、倉橋はウマゴンと初めて会ってから毎日顔を合わせてくれた。その事をウマゴンも嬉しく感じていたのだが、彼はもう人間界にいない。

「でも、ウマゴンちゃんと二度と会えないとは思っていません。そうですね？」

「ああ、その通りだ！」

「おおよ……（私も再びモモンと会う事が出来るでしょうか）」

倉橋はガツシユペアが魔界と人間界を繋げる方法を見つけた事を確信している。そうすれば、帰ってしまった魔物達が再び人間界に来る事が可能であると。そんな話を聞いたシスターは密かにモモンとの再会に期待する。

サンビームとシスターに別れの挨拶をした後に清磨は校舎の中に入ろうとするが、誰かが叫んでいる声が森から聞こえて来た。

「ま〜〜〜〜つ！！」

「何だ?!!」

清磨が後ろを振り返る。すると上半身の多くを露出した、妖精のような恰好をした髭を生やした中年の男がガツシユを抱えて、ターザンのごとくツタにぶら下がってこちらに迫ってくるのが見えた。その男とガツシユペアは面識がある。

「ふむ……………ここまで来れば問題はなからう」

「おいアンタ!!何してる?!!」

その男「プロフェツサーダルタニアン」はガツシユペアがイギリスに行った時に出会い、清磨の父親と同じ大学で教授をしている。また彼はどういう訳か魚や妖精などのコスプレをする頻度が高いが、本人は断固としてそれを趣味とは認めない。

「あの人……………清磨の知り合いなの?」

「変質者にしか見えないんだけど……………」

渚や茅野を始め、そこにいた多くの者が驚愕する。何処から突っ込めば良いかが分からない。ある意味昨日来ていた殺し屋達以上の珍客だ。ダルタニアンとガツシユペアが知り合いだと察したE組達は、怪訝そうな顔で清磨の方を向く。

「知らん!!こんな奴は知らん!!」

皆の視線に耐え切れなくなった清磨はダルタニアンとの面識を否定する。しかし、

「コラー!!清磨オ!!ダルタニアンを悪く言うでない!!」

「!!「やっぱり知り合いなんだ!!」!!」

「ワーーーーー!!」

ガツシユが清磨に怒鳴ると、E組一同はダルタニアンがガツシユペアの客であると確信した。そして誤魔化しが効かなくなった清磨は発狂する。そんな中、ガツシユはクラスメイト達にダルタニアンと共にここに来る経緯を話し始めた。

回想

ガツシユは昨日と同じく矢田と共に客寄せをやっていたが、ある家族連れの客が現れた。

「いらっしやいませ、何に……」

矢田が早速接客を行おうとしたが、ガツシユが尋常ではない程の冷や汗をかいている。彼女は何かかと思つてガツシユの方を見るが、彼は家族の中の女の子の方を向いて震えていた。

「ナ……ナオミちゃん……」

「ガツシユ、こんなところで会うとはね」

その家族はナオミちゃんとその両親だった。久し振りにガツシユと対面したナオミちゃんはいつも通りに泣きながら逃げ回る彼を追いかける。

「又オオオオ!!」

「ちよつと、ガツシユ君!!」

矢田がつかさず止めに入ろうとするが、突如として黒い影が彼等に迫る。その影の正体こそがダルタニアンである。そして彼はそのままガツシユを連れて行ってしまった。そんな様子を見た矢田もナオミちゃん一家も呆気にとられるしかなかった。

回想終わり

ダルタニアンがナオミちゃんからガツシユを守ってくれたのは分かったが、彼が何故妖精のような恰好をしているのかは明かされなかった。

「ダルタニアンは私を助けてくれたのだ!!」

「だーもう!!分かったからお前は矢田のところに戻れ!!」

「ウヌウ、しかし……」

今山を降りようとすると再びナオミちゃん和鉢合わせするかもしれない。ガツシユはそう考えながら体を震わせていると、ダルタニアンが彼の肩に手を置いた。

「よろしい、私が連れて行ってあげよう！」

「ダルタニアン、ありがとうなのだ！」

「まゝゝゝゝつ!!」

ダルタニアンがガツシユを抱えると、再び彼はターザンのごとくツタにぶら下がりがら山を降りて行つた。

「何だつたんだ……」

清麿がため息を付きながら仕事にとりかかろうとするが、そんな彼を見る者達がいる。カルマと中村が顔をニヤケさせている。

「あれも知り合い？高嶺君の人間関係どうなつてんの……」

「てか、結局鬼麿になつてんじゃない」

「じゃかあしい!!」

清麿はダルタニアンの事でいじられてしまった。

その頃ガツシユは矢田と合流していたが、ダルタニアンは帰ってしまった様だ。

「ガツシユ君、今の人って……」

「ダルタニアンは友達なのだ！ナオミちゃんから私を庇ってくれたのだ！」

「……そっか（聞きたいのは、そういう事じゃないんだけどなあ）」

矢田は苦笑いしながらガツシユの話聞く。結局ダルタニアンは料理を注文せずになくなったが、彼が何をしにここに来たのかは分からずじまいだった。ちなみにナオミちゃん一家が山を降りてきたときには、ガツシユは矢田の後ろに隠れてやり過ぎた。

今日は昨日とは打って変わって客足が途切れる事は無い。しかしE組全員が無休で働く訳では無く、ローテーションで生徒達が休憩を取れるようにしている。ちなみに今は矢田が休憩を取っており、代わりに磯貝がガツシユと共に客寄せを行う。

「お客さんがたくさん来てくれて良かった。忙しいけど、やりがいがあるってもんだ」

「ウヌ！磯貝、頑張ろうぞ！」

磯貝もまた交渉術に長けており、ルックスと人柄を活かして多くの客を引き寄せていく。特に彼がかつて働いていた店での常連客のマダム達からの人気が高い。そんな中、1人の女性客が彼等の元を訪れる。

「いらつしやいませ！」

「おおっ……つくしではないか！来てくれたのだな！」

「言われた通り来てやったぞ、ガツシユ」

つくしだ。ガツシユが植物園に行つて直々に彼女に声をかけていたのだ。そしてつくしはメニュー表に目を通すが、彼女の目の色が変わる。

「驚いた。自然薯を使った料理がこの値段で食べられるなんて」

植物園の管理人を務めるだけあり、つくしは植物に詳しい。そんな彼女は自然薯の価値も分かっている。また他の植物をふんだんに使った料理の数々につくしは関心を示す。多くの生態系が存在する裏山は、つくしにとつてもオアシスかもしれない。

「そうなんです!!自然薯がこの値段で食べられるのはここだけですよ!!」

突如磯貝がプツシユを始めるが、これには彼の家庭事情が大いに関わっている。

「俺も卒業後、自然薯掘りを考えてまして……」

「いや、そんな簡単に取りれるものじゃないよね」

貧しい環境で育つて来た磯貝にとつて、自前で高級食材を入手出来る環境は理想的だ。普段の彼からは想像出来ないようなうっとりした表情で将来設計を語る。しかし磯貝の家庭事情を知らないつくしは、無謀な計画を立てる彼に心配の眼差しを向けた。

「つくし、何を食べるのだ？」

「どうしようかな……」

ガツシユに尋ねられたつくしは食べる料理を選ぶ。そして彼女はメニューを注文した後、山を登っていく。その後もガツシユと磯貝は集客を続けるが、再びガツシユペアに面識のある集団がここまで来てくれた。

場面は店に変わる。E組一同は相変わらず大忙しだったが、ガツシユが清麿の良く知る中学生の集まりを引き連れて山まで登ってきた。

「おーい、高嶺くん！」

「水野達まで来てくれたのか！」

水野、山中、岩島、金山、仲村だ。清麿が柵ヶ丘に転校した後も彼等の付き合いは続いて行く。彼等とのつながりも、ガツシユペアにとっては大切な縁だ。

「清麿。さつき桃花が休憩から戻って来ての、今度は私と清麿が自由時間にしていいと言ってくれたのだ！スズメ達と共に学園祭を楽しもうぞ！」

「そうだったのか」

ガツシユが事情を説明してくれる。彼は水野達と再び行動を共に出来る事が余程嬉しいのか、目を輝かせていた。清麿も彼等に混じろうとするが、そんな彼の肩をふもと

から戻ってきた磯貝が叩く。

「恵さんとフォルゴレさんのライブ、楽しんで来いよ！」

「済まない、磯貝」

ガツシユペアは事前にA組の入場券を貰っていた事をクラスメイト達に相談していた。そして彼等は恵とフォルゴレの順番の時間に合わせて、ガツシユペアの自由時間としてくれたのだ。そして2人は水野達の接客を終えると、彼等と共に山を降りていく。

ガツシユペアが水野達と山を降りた少し後に、山のふもとに2人組の男女が訪れる。

「いらつしやいませ！（あれ、この人達は……）」

「こんにちは、清磨とガツシユはいるかしら？」

来ていたのはブラゴペアだ。矢田は律の動画を通して彼等を見ていたのですぐに2人に気付く事が出来た。

「ごめんなさい、今高嶺君とガツシユ君は席を外してまして……」

「そうか、まあいい」

入れ違いになつてしまった彼等だが、ブラゴは特に気にした様子もなく矢田に返答する。彼等は殺せんせーの正体を探る為のヒントが無いかとE組の取り巻く環境を見る

来たのだ。そのついでにガツシユペアにも挨拶をと考えていたが、それは叶わなかった。

「ところで、この店にはワニの肉は無いのか？」

「え……ワニ？」

ブラゴはワニの肉が好物だ。そんな彼はE組を取り巻く自然の中ならワニがいるかもしれないと踏んだが、残念ながらここでは取れない。

「ある訳ないでしょう、全く……あなた、この子の言う事は気にしなくて良いから」

「は、はあ」

ブラゴの無茶振りに困惑する矢田に対してシエリーがため息をつきながらフォローを入れる。そして彼等も料理の注文を終えると山を登って行った。

その一方でガツシユペアと水野達は浅野率いるA組の店に入場する。そんな清麿を見かけた浅野が声をかけて来る。

「高嶺、何故ここにいる？敵に塩を送る程E組に余裕があるとは思えないが？」

「そんなつもりは無いぞ。俺達も大海恵とパルコ・フォルゴレを見に来たんだよ」

明らかに敵意を向けて来る浅野に対して清麿が呆れ混じりに返答する。E組とA組

が売り上げを競っているのは他の生徒の知るところでもあり、浅野は敵に情けをかけられたと周りに勘違いされる事を懸念していた。

「まあいい、客として来てくれるなら丁重に扱ってやる。ご丁寧に入場券まで持っているようだからな。ゆっくりしていけ」

「それはどうも」

浅野はそのまま自分の仕事へ戻っていく。そして清磨達も客席まで足を運ぶが、清磨の顔を見た本校舎の生徒達が彼等から離れていく。彼が鬼磨として本校舎から恐れられているのは相変わらさずだ。

「何か俺等、さけられてねーか？」

「さっきの人も、高嶺の事を目の敵にしてたよねえ」

「……ノーコメントだ」

そんな様子を見て山中と岩島に疑惑の眼差しを向けられた清磨だが、彼は知らん振りをする。他のクラスの人間に怖がられている事実を皆にあまり話したくないと考えている。そうでなくとも清磨には多くの仲間がいるので、本校舎の生徒からの評価などどうでも良い。

恵とフォルゴレの共演と言う事で、客席は完全に埋まっている。立ち見している者もいるくらいだ。そして2人が入場して場は盛り上がるが、水野の顔色が優れない。

（高嶺君とガツシユ君、事前に入場券持ってたな。高嶺君で、恵ちゃんの事が……）

彼女は清麿に好意を持っているが、彼と恵が親しい関係にある事を知っている。そんな水野は清麿の事を恵に取られてしまうのではと考えており、気が気で無い様子だ。そして元気のなさそうな水野を見かねたガツシユペアが声をかける。

「スズメ、大丈夫かの？」

「人が大勢いるから人酔いでも起こしたか？水野」

「え……大丈夫だよ、2人共！ホラ、恵ちゃんとフォルゴレさんが入ってきたよ！」

彼等に心配をかけまいと水野が誤魔化す。そして彼女の言う通りに2人が入場して来ると、観客のテンションのボルテージがマックスになる。恵とフォルゴレが自己紹介を行った後、2人のデュエットが開始される。

「清麿、2人共とても楽しそうなのだ！」

「そうだな、ティオやキャンチョメと別れてふさぎ込んでいる感じでもなさそうだ」

恵もフォルゴレも魔物の戦いを終えて新たな一歩を進んでいる。彼等とていつまでも後ろを向いている訳にはいかない。ガツシユペアがそんな事を考えていると、丁度2人と視線が合った。そして彼等は客席から2人に手を振ると、恵とフォルゴレが頷いてくれたように見えた。

2人の出番が終わったので清麿達は外に出る。他の芸能人の出演も残っているが、初めから彼等の目的は恵とフォルゴレのみであった。

「あの2人の共演ってヤベーよな。あつという間に時間が過ぎて行つたぜ」

「そうだねー、楽しかったよ」

金山や仲村を始め、彼等のテンションは上がりっぱなしだ。それ程の2人の影響力は大きい。一行はしばらくその話題で盛り上がる。そんな中で清麿が口を開いた。

「悪い皆、俺とガツシユはそろそろE組に戻るよ」

「ウヌウ……もつと店を回りたいが、やる事があるからの」

彼等は目的を果たした。それに今でもE組一同は仕事に励んでいる。そんな中で自分達ばかりが店を開ける訳にはいかない。それを聞いた水野達は少し残念そうな顔を見せる。

「まあ、仕方ないか……2人共、また会おうね！」

水野達はガツシユペアに別れの挨拶を述べた後に他の店を回り始めた。学園祭はまだまだ続いているのだから。そんな彼等の後姿を見た後に2人もE組の店に戻る。

ガツシユペアは山を登りながら今日の2人のライブについて話す。彼等の息はピツタリ合っており、それぞれの魅力を損なう事なく共演を果たしていた。また冗談交じりにフォルゴレが恵の乳を揉む素振りを見せた（実際には触っていない）が、彼女の合気道の技を喰らわされていた。その事ですら2人は笑いに變えており、客からのウケは非常に良かった。

「そう言えば清麿、2人に会いに行かなくて良かったのかの?」

「そうしたいのは山々だが、恵さんもフォルゴレも仕事で来てるからな。まだまだやる事があるだろう。それに堂々と2人の仕事場へ乗り込むのは流石にな……」

ガツシユペアは仕事終わりに2人に挨拶に行きたかったが、仕事中の彼等の邪魔をする訳にはいかない。清麿はそう判断して真っ直ぐE組の店に戻る事にした。そして2人が歩いていると、1人の短髪の女性が歩いてくるのが見えた。そして彼女はガツシユペアに声をかける。

「あなた達、渚のお友達よね?」

この女性こそが渚の母親、潮田広海だ。渚の話聞く限り2人は彼女に良いイメージを持っていないかったが、彼女からは悪意は感じられなかった。

「急にごめんなさい、渚の母です。あの子がどうしてもE組を抜けたくないって言うから、一目このクラスの事を見に来たかったのよ」

彼女は穏やかな口調で話を続ける。そこにはかつて渚を強引に縛り付けようとした毒親はもういない。ガツシユペアは黙って彼女の話に耳を傾ける。

「実はあの子と一度、E組の事で大喧嘩をしちゃってね。まあ、私が悪かったんだけど。その時の渚、あなた達と同じ眼をしていたのよね」

その大喧嘩こそが3者面談で繰り広げられた口論である。その時の渚はガツシユペアの影響を大きく受けていた。だから広海も渚と2人が同じ眼をしている様に見えたのだろう。そして渚はE組を抜ける事だけは断固として拒否しており、彼女にはそれが不思議で仕方なく、実際にそこに足を運ぶ事にしたのだ。

「皆凄く楽しそうだったわ。そんな様子を見て、ようやくあの子がE組を抜けたくない理由が分かった気がする」

広海の顔が暗くなる。彼女は今でも罪悪感に苛まれているのだろう。実の息子の事を見てあげる事をせずに、自分の理想ばかりを押し付けてしまった事を。そして彼女は何かを思いついたように再び口を開く。

「……………」
「……めんなさい、長話をしてしまつて。じゃあ行くわね、これからも渚の事をお願いしたいいいかしら?」

「ウヌ、渚は大切な友達だからの!」

「勿論です」

「ありがとう」

ガツシユペアの返答を聞いた広海は嬉しそうな顔をしてその場を去る。これからの渚達の親子関係はより良いものになっていくだろう。ガツシユペアはそう確信した。

「渚が母上殿と仲直り出来て良かったのだ！」

「そうだな、もう心配はいらない。俺達も自分の成すべき事を成そう」

2人はE組の校舎に辿り着くが、既に閉店していた。客数が予想よりも多かったが、これ以上山の幸に手を出すと個々の生態系が崩れる可能性があり、殺せんせーが打ち止めにした。売上げの結果はA組が1位、E組が3位となったが彼等に悔いはない。この学園祭を経てE組は縁の大切さを学ぶ事が出来た。そしてガツシユペアは他の生徒達と後片付けを行う。

LEVEL. 69 期末の時間・二時間目

学園祭も終わり、2学期の目玉の行事は期末テストのみとなる。そこで殺せんせーは1学期の中間と同様に生徒達に全員50位以内の目標を課す。しかしE組一同は日々成長しており、どのような困難でも乗り越えてその目標を達成した上で卒業する事が出来る。先生は断言した。

「それはどうだろうな、何たって……」

多くの生徒が気合を入れる中、杉野だけは優れない顔色を見せる。その目標に当たって、彼は進藤から本校舎での不安要素を聞いていた。それはA組の担任の変更、しかも理事長が直々に教鞭をとるといふ。先程とは一転、それを知った生徒達の多くが冷や汗をかく。

その日の放課後、E組の生徒達は理事長の話をしながら山を降りる。不破曰く、〃理事長と殺せんせーは異常な力を持っているのに普通に先生をやっている共通点を持つ。そんな理事長が教育に専念するんだから手強いのは当然〃との事だ。

「理事長殿は、あくまでE組が勝つのを許さぬつもりかの」

「仮にそうだとしても、俺達は負けられん。胸を張ってE組として卒業する為にも」

「そうだね、ここまで熱心に指導してくれた殺せんせーの為にも！」

ガツシユペアや渚を始め、生徒達は理事長の存在を危惧しながらも覚悟を決めていく。標的から教わった第二の刃。これを最大限に振るいE組全員で50位以内を目指す。それを成し得なければ、自分達は暗殺を成功させたとしても不完全燃焼となる。一同が山を降りると、そこには一人のA組の生徒が待ち構えていた。浅野だ。

「お前、どうしたんだ？」

「偵察って訳でも無いだろう？」

前原と磯貝が彼に尋ねると、浅野は両手を握りしめて少しだけ頭を下げる。

「君達に依頼がある。あの怪物を……理事長を殺してくれ」

浅野の懇願。多くのE組達は動揺する。とは言え、文字通り理事長の命を奪って欲しい訳では無い。殺すべきはその教育方針。何故A組のトップの彼が、敵視するE組に頭を下げてまでこのような依頼をするのか。浅野は話を続ける。

「今のA組は地獄そのものだ。理事長は生徒達を煽り、彼等にE組への憎悪を支えに勉強をさせて力を伸ばそうとしている。だが、そんな物は本当の力では無い。それでは彼等がこれからも僕を支えるのは無理だ。目を覚まさせて欲しいんだ、僕の仲間と父親

の。だから君達は正しい敗北を彼等にもたらしめてくれ」

彼は改めて頭を下げる。浅野自身が敗北を知っているからこそ出来る事だ。それ今の彼は心底他人を氣遣っている。浅野もE組との勝負を経て成長しているのだ。しかし、

「ふうん。それで、言いたい事はそれだけなの？浅野君」

今までの流れをすべて無視するかのごとくカルマが煽る。これには浅野も怒りの表情を浮かべるが、それは無視された。

「ウダウダ考えずに殺す気で来たら？ま、1位を取るのは俺だけどき」

（カルマ君は相変わらさずだね）

ここに来ての1位宣言。周りの事など度外視で勝負に來いとカルマは発破をかける。これまでもE組とA組は全力で戦ってきたのだから。そんな彼の様子を見た者は、呆れ混じりに心の中で呟く。そしてカルマは浅野に対して言い終えると、今度は清磨の方を向いた。

「ねえ高嶺君。俺の言ってる意味、分かるよね？」

カルマは浅野だけでなく、清磨をもトップから引きずり下ろすと言い放つ。彼の敵はA組だけでは無い。自分と同じかそれ以上の成績を誇るクラスメイト。カルマにとつて清磨は、自分が1位を取る為に避けては通れないライバルだ。それを聞いた清磨の口

角が上がる。

「言われるまでも無いな。泣いても笑っても俺達全員が同じテストを受ける最後の期末。絶対に負けられん」

「皆、ガンバレなのだ！」

清磨も同じ事を考えている。彼もまた浅野に勝った事が無い。カルマ相手には勝ち越してこそいるものの、油断する選択肢は存在しない。否、あつてはならない。他の生徒達も日々学力を伸ばしている。少しでも気を抜けば容易に上位からはじき出されるだろう。

「高嶺、お前は良い目をしている。それに赤羽の勝利宣言……分かった、まとめてかかってこい。僕も全力でやらせてもらう」

浅野が彼等の宣戦布告を受け取る。彼はもう周りを憂いて弱気な面をちらつかせる事は無い。最初から難しく考える必要など無かった。これまで通り、各々がベストを尽くして勝負すれば良かったのだから。浅野は不敵な笑みを浮かべたままその場を立ち去るかと思われたその時、彼はガツシユを指差す。

「ところで……その児童は何者だ？」

((((今それ聞く!!)))

E組の多くが呆気にとられる。よりにもよつてこのタイミングでガツシユの詮索。

しかし気は抜けない。ガツシユの事情が浅野に知られば、芋ずる式に殺せんせーの事がバレかねない。そもそも緑のバッグから顔と手足を出した子供が中学の帰り道に行っているのだから、事情を知らない浅野が違和感を覚えるのは自然だ。この場に緊張が走ったその時、浅野はため息をつく。

「まあどうでも良いか。そんな事より君達の上に立つために自習をしなくてはならないからな」

浅野はそう言い残して今度こそE組に背を向ける。生徒達はガツシユの正体を聞かれなくてホツとした。

次の日以降E組は期末テストに向けて全力に取り組む。ノルマを達成し、それを標的に報告する為にも。殺せんせーもありつただけの分身を作つて生徒達に勉強を教えるが、分身が崩れる程に先生も忙しい。しかし今回の勉強方法はそれだけではない。殺せんせーの指導以外にも、生徒同士でも得意科目を教え合わせたのだ。そうする事でより理解が深まる。

「漸化式は特殊解に持つて行つてだな……」

「なるほど、そういう事か」

「……分からない」

清麿は千葉と速水に数学を教えている。数学の成績は彼とカルマがトップクラスだが、カルマは寺坂グループの指導で手一杯だ。2人の全体の成績は上位だが、速水は漸化式で苦戦している。

「速水、大丈夫か？」

「……多分これで問題ない」

千葉に心配された速水だが、どうにか問題を解き終えた。彼女の解答を清麿が確認するが、正解だったようだ。彼は笑みを浮かべながら頷く。

「私、悔しいけど今のままじゃ理数ではアンタ達に勝てそうにないわ。でも皆の足を引く張るつもりは無いから」

速水は清麿と千葉に対して劣等感を覚える。しかし全体的に見ればそれ程点数が劣る訳では無い。そんな彼女はもう一度気合を入れ直す。

「随分な殺る気だな。この調子で頑張ろう」

「そうだな、高嶺。ところでこの解き方なんだが……」

清麿と千葉は次の問題に取り掛かる。そんな2人を見た速水も負けじとそれに加わり、意見を交換していく。

今日の勉強時間が終わり、生徒達は山を降りる。彼等は明らかに疲労を感じている。ただでさえ柵ヶ丘のテストの難易度は高いのに、今回はとりわけテスト範囲が広くて難しい分野も多い。これは理事長の一存だ。

「今回の期末テスト、下手な模試なんて非にならないんじゃないか？」

清磨はため息をつきながらぼやく。彼は数学のみならず他の教科でも生徒達に教える役割を担っていた。しかしテスト範囲は中学校レベルを余裕で凌駕している。教えるのも一筋縄ではないかない。

「いやー、大変だよ。特に覚えの悪い奴に教えるとなると」

カルマが清磨の肩に手を乗せて来る。彼は寺坂達に数学を教えていたが、あまり捗らなかつた様だ。そして彼等が間違える度にカルマは容赦なく竹刀でひっぱたいた。特に寺坂は叩かれる頻度が高く、彼の頭にはいくつかコブが出来ていた。

「チクショー!! 覚えとけよカルマ!!」

寺坂はコブだらけの頭をおさえながらカルマに怒鳴る。それを見た多くの生徒が苦笑いを見せる。自分は叩かれたくないと。そんな中でガツシユは苦虫を噛み潰したよう顔をする。

「皆頑張っておるのだな。私は何もする事は出来ぬが……」

ガツシユは正式に生徒として登録されていない為、テストを受ける事は無い。故に学業に関して彼は蚊帳の外だ。生徒一同が必死で取り組む中、自分が何も出来ない事が歯がゆく感じている。その時、

「気にすんなよ、ガツシユは俺達の応援をしてくれれば大丈夫だって！お前の分まで紙の上で殺し合ってくるからさ！」

岡島がガツシユの肩を叩く。直接テストに関わる事が叶わなくても、ガツシユの意志は他の生徒達に受け継がれている。だからテストの時もガツシユの心はE組と共にある。岡島が得意げに言い放つと片岡が目を細めた。

「岡島君に同意する日が来るとはね……でもその通りだわ（岡島のくせに生意気よ）」

「片岡!!何で悔しそうな顔してんだよ!!」

彼女は岡島と同じ事を考えていた事があまり気に食わなかった様だ。クラス内での岡島の扱いはお世辞にも良いとは言えない。彼がエロ絡みの行為を繰り返した結果ではあるが、決してクラスで煙たがられている訳では無い。

「そういう事だ、ガツシユ。心配はいらない。必ずクラス全員で50位以内を取ってE組の校舎に帰って来る。お前の気持ちはしかと受け止めた」

「岡島、メグ、清磨……ありがとうなのだ!!私も皆を信じておるからの!!」

清磨がガツシユの頭に手を置いてそう言うと、ガツシユの表情は明るくなった。例え

自分が行動を共に出来なくても、E組全員が頑張ってくれる。その事実だけで彼の心は満たされた。そんな時、清磨のスマホにてモバイル律が起動する。

「ガツシユさんのお気持ちは分かります。私も「仁瀬さん」に代わりをお願いする立場ですの〜！」

(((仁瀬……にせ律さんか!!!)))

律もガツシユと同じくテストを受ける事が出来ない。そこで彼女の替え玉としてテストを受けるのが烏間先生の上司の娘、尾長仁瀬だ。クラスの多くが彼女の事を認識していても、これまで本名を聞く事は無かった。律がその名を呼ぶ事で初めて知る生徒も多い。

「仁瀬さんも50位以内を目指して頑張っています。だから私の意志は彼女に託します」

律は彼女に勉強を教える内に2人の間には友情が芽生え、今は何でも話せる仲だ。

「確かに私とガツシユさんは直接テストを受けられませんが、誰かが私達を思ってくれる限り私達は常に一緒です。皆さん、よろしくお願いします!」

「律の言う通りだの!! 私達の方まで頑張ってくれなのだ!!」

律とガツシユの懇願に皆が頷く。E組全員で挑むA組との最終決戦。これに勝たない事には、暗殺が成功してもクラス内に未練が残ってしまう。そんな事は許されない。

一同はこれまで以上に気合を入れてテスト勉強に励んだ。

期末テスト当日。E組は試験会場の教室目掛けて廊下を歩くが、その途中でA組の生徒達が教室から彼等を睨み付ける。理事長の洗脳により彼等のE組に対する憎しみが跳ね上がっており、今にもE組達を食い殺さんとする勢いだ。

「これが理事長の洗脳教育のなれの果てか。尋常じゃないな……」

「確かに浅野君の言う通り、これは地獄だわ」

「あれえ、高嶺もカルマもビビってんの？」

2人がA組の惨状に苦言を呈するが、そんな彼等を中村が煽る。しかし彼等の自信は揺るがない。これはE組とA組の対決であるが、それと同時に彼等に殺意を教えた殺せんせーと理事長の対決にも他ならない。そして生徒一同が席に着いた瞬間、期末テストは始まる。

期末テストもいよいよ終盤に差し掛かる。今は最後の数学の時間だ。他の4教科の難易度も高く、全て解き切れなかった生徒も多い。体力の消耗が激しい中での最後の数

学。多くの生徒が苦戦を強いられる中、清磨は後ろから2番目の問題を解き終えた。

(本当に漸化式が出て来るとはな、しかもラスト前で……さて)

清磨は気合を入れ直す。今回の期末テストは彼が最も力を入れて勉強し、全力をぶつけている試験かもしれない。転校する前の中学でのテストの難易度はそれ程高くなく、学年トップは当たり前。柗ヶ丘に来た後のテストではクリアとの戦いが常に脳裏によぎる状況で、100%勉強に専念出来ていたかは怪しいところだ。しかし今回はその憂いすらない。

(まさか勉強で……)まで熱くなる日が来るとは思わなかった。浅野、赤羽。お前等を超えて俺は満点を取る!!)

転校してから清磨は試験において単独で1位を取った事は無い。学業において自分と同等かそれ以上の実力者との戦い。彼はこの時、勉強を楽しく感じていた。これは柗ヶ丘に来なければ味わえなかった感情だ。そして彼は最終問題に目を通す。

(空間の問題か……だが、何かありそうだな)

清磨は手を動かさない。最後の問題は一見複雑な計算が必要に思われる。それでも彼なら時間以内に解くことは不可能ではない。しかし彼は違和感を覚える。そしてどういう訳か清磨の頭に浮かんだのは数式では無く、これまでの魔物との戦い及び暗殺の日々だった。

(……なるほど、そういう事だったか。こんな解き方もあるんだな)

清磨は最後の答えを出す。今回のアプローチの方法は、もしも彼がガツシュと出会う事無く家に引きこもったままであればまず思いつかなかっただろう。多くの出会いと経験を経たからこそ、清磨はこの解答に辿り着けた。

(ありがとな、ガツシュ。そして皆)

清磨は心の中で仲間達に礼を述べる。彼等のお陰で色々な世界がある事が理解出来たのだから。少しした後にはチャイムが鳴り、試験は全て終了した。

後日テストが返却された。しかしE組にとって重要なのは総合順位。果たして全員が50位に入れたかどうか。生徒達の緊張感は最大限まで高まる。

「では発表します」

殺せんせーはトップ50位が乗っている順位表を黒板に張り出す。E組での最下位は寺坂だ。そんな彼は総合で47位。それが意味する事は、

「「「全員50位以内ようやく達成!!」」」

「皆、おめでとうなのだ!!」

生徒一同は歓声を上げる。ノルマは無事達成された。上位勢もほぼE組が独占、A組

に完全勝利したと言つても過言ではない。そしてガツシユも元気いっばいに彼等に勞いの言葉をかける。

「何か、最終回つばいよね」

「おい不破、勝手に終わらすんじゃない」

突如遠い目をして呟く彼女に清磨がツツコミを入れる。皆の暗殺生活はまだまだ続くのだから。ちなみに清磨とカルマは初の500点満点での同率一位。彼等との間に優劣は付かなかつた。

「何だ、高嶺君とは引き分けか。勝ち逃げされた気分なんだけど」

「お互い満点だからな。ともあれ俺達は最高の結果を出せた、それで充分だろ」

2人は素つ気なく言葉を交わす。他の生徒と比べてテンションがそれ程変わらぬのは、喜びよりも目標を達成できた安心感が勝つたが故だ。決して嬉しくない訳ではない。そんな彼等の頭に殺せんせーが触手を乗せる。

「高嶺君とカルマ君。君達と浅野君の差は、数学の最終問題でした」

浅野はその問題を完答する事が出来ず、満点を逃した。彼は数学のみ97点の合計497点での総合3位。清磨とカルマが辿り着いた解答方法に彼は気付けなかつたのだ。清磨だけでは無く、カルマもE組での暗殺生活を経たからこそこの方法にありつけた。

ちなみに他のA組の生徒達はテスト前半の調子は良かったが、後半になると多くの生

徒が応用問題でつまずいていた。殺意でのドーピングは時間をかけて育ててこそ意味がある。殺意はそんなに長続きするものではない。

しばらく全員が喜びを分かち合った後に一息つく。生徒達が席に着くと、殺せんせーは改めて彼等に問いただす。

「さて皆さん。全員E組を抜ける権利を得た訳ですが、ここから出たい人はいますかね？」

答は分かり切っている、当然ノーだ。生徒達は暗殺用の武器を構えて返答した。そして彼等が暗殺へのやる気を見せたその時、何かがぶつかるような大きな衝撃音が聞こえてくると同時に教室が揺れる。

「にゅやっ、一体何が？」

殺せんせーの声と共に皆が窓から外を見るが、何と校舎の半分がシヨベルカーによって取り壊されている。生徒達が何事かと考えていると、理事長が外に立っていた。

LEVEL. 70 理事長の時間

「今朝の理事会にて旧校舎を取り壊す事が決定しました。皆さん、退室の準備をお願いします」

理事長が言い放つ。E組の生徒達には新校舎に移ってもらう予定だ。そこは刑務所を参考にした牢獄のような環境で、彼曰く、「私の教育理論の完成形」との事だ。横暴とも言える突然の決定に当然生徒達は反対するが、理事長は意にも介さない。そして彼は殺せんせーの方を向く。

「それから殺せんせー、私の教育には既に貴方は要らない。今ここで殺します」

何と理事長は禁断の伝家の宝刀、殺せんせーの解雇通知を取り出した。この学園のトップは理事長だ。その気になれば彼の一存で他の教師や生徒を学校から追い出す事も出来る。殺せんせーは冷や汗をかいて怯える。

「はわわわ、そんなのが許される訳……」

「リストラ」殺せんせーが教師である以上これは確かな弱点だ。そしてあろうことか、先生は不当解雇であるとデモに訴えかけ始める。

「解雇の2文字はこのタコに面白い程聞くんだよな」

「超生物がデモって……」

杉野と渚を始め多くの生徒が彼に呆れの目線を向けるが、そんな中で清麿が口を開く。

「ちよつと良いですか、理事長？」

「何かな？」

「殺せんせーをクビにするって事は、俺とガツシユもここから出て行かなきゃならな
いって事ですすよね？」

彼の疑問は必然だ。元々ガツシユペアは殺せんせー暗殺の為に、理事長の推薦でE組
に來たのだから。その暗殺対象がいなくなれば自分達もお払い箱では無いのかと清麿
は考えた。他の生徒達も不安気にガツシユペアを見る。しかし理事長は首を横に振つ
た。

「好きにすると良いよ、高嶺君。私も罪のない中学生を路頭に迷わせる程鬼では無い。
このままE組として新校舎で勉強するもよし、さらに君のような優秀な生徒なら本校舎
に來る選択肢もある。ただ殺せんせーの解雇が気に入らなくて学校をやめるとい
うのであれば私は止めない」

清麿が退学になる事は無さそうだ。理事長の言葉を聞いた生徒一同はそれに関して
は胸をなでおろす。そして理事長はガツシユの方を向いた。

「しかし……ガツシユ君を学校に来させる事は出来なくなるね。流石に新校舎には彼の居場所はない」

ガツシユは顔面蒼白になるが、理事長の言う事は正しい。そもそもガツシユは正式には生徒として登録されていない。暗殺の戦力として理事長が登校を許可していたに過ぎないのだから。

「又オオオオ!!嫌なのだー!!」

「ガツシユ君!!今こそ立ち上がる時です!!」

「ウヌー!!」

ガツシユは泣きながら殺せんせーのデモに参戦する。彼等は至って真面目に理事長に訴えかけているのだが、多くの生徒達はその様子を何とも言えない表情で見つめる。しかし理事長は笑みを浮かべながら、先程までちらつかせていた解雇通知をスーツのポケットにしまった。

「まあ、それが嫌なら私の暗殺に付き合ってください。その為に来たのですから」

理事長の目は冷徹だ。自らの教育に不要になった者は容赦なく切り捨てる。それは殺せんせーとて例外では無い。その為に彼は一度校舎の取り壊しを中断させた後、校舎に入っていく。

殺せんせーの暗殺方法はシンプル。半円に並べられた5つの机にそれぞれ問題集を置く。その問題集にはピンが抜かれた手榴弾が挟み込まれ、ページを開いた瞬間爆発する仕込みだ。しかし問題を解く者はページの右上の問題を1問解くまでは席を離れてはいけない。

「4つの対先生手榴弾と1つの対人用手榴弾。見た目や臭いで判別は不可能。貴方が先に4冊解き、私が最後の1冊を解く。このギャンブルで私を殺すかギブアップさせれば、貴方とE組がここに残るのを認めます」

強者としての立場を利用した、殺せんせーにとって圧倒的不利な暗殺。E組一同は苦虫を噛み潰したような顔をして、窓の外から殺せんせーを見守る。自分達が殺せなかった超生物がこんな方法で殺されてしまうのか。彼等は拳を握りしめる。それでも殺せんせーに断る選択肢は無い。

「どうかな、高嶺君とガツシュ君。強者は簡単に、一方的に弱者をねじ伏せる事が出来る。優しい王様という理想が如何に非合理的かつ非現実的であるかが、この暗殺を通して分かると思うよ。この前の話し合いの白黒もハッキリしそうだね」

「何だと、理事長殿?」

理事長の言葉を聞いたガツシュは目を細める。この暗殺でかつて理事長と行われた

優しい王様をめぐる議論の決着がつくという。だがこれを止める選択肢は無い。理事長の圧倒的権力のなせる業だ。そして清磨には怒りが込みあがる。理不尽を押し付けられた挙句に自分達の追い求めるものを否定された。彼は我慢の限界に達する。

「おい!!それ以上は」

「ストツプです、高嶺君」

理事長に反論しようとする清磨を殺せんせーが止める。今の清磨の言葉は理事長には届かない。ならばどうすれば良いか、先生にはそれが分かっている。

「理事長、ガツシユ君なら優しい王様になれますよ。貴方は言った。この暗殺をもつて2人の目指す王の姿を否定する」と。ならば私はこの暗殺を乗り越えて貴方の言葉を否定して見せましょう」

殺せんせーは暗殺を引き受ける。それ以外の道は無いのだから。権力のみで先生を殺す事で自分の合理性を証明し、ガツシユペアの理想を打ち砕く。それを防ぐのは殺せんせーが理事長とのギャンブルに打ち勝つ以外の方法は存在しない。先生はまず数学の問題集を開く。

(平面図形計算……えーと、これは……)

口では強気に勝負を受けると言った殺せんせーだが、内心は自らの圧倒的不利な状況でかなり焦っている。すぐにテンパるのも弱点で、理事長の思惑通りだ。そして先生が

頭を抱えていると、何かが破裂するような大きな破裂音が教室中に響いた。

「まずは1ヒット。あと3回耐えられれば貴方の勝ちですね。出来るとは思えませんが」

大量のBB弾のせいで殺せんせー顔に凹みが出来ている。3度も耐えられるかは疑問だ。理事長は優越感に浸る。「強者は好きな時に弱者を殺せる」。防衛省からの口止め料と暗殺の賞金を使ってこの心理を教える仕組みを全国に広める。彼の願望は見事に果たされると思われたその時、3冊の問題集が閉じられる音が聞こえた。

「全て解きました。日本全国の問題集を完璧に覚えたつもりでしたが、数学だけは生徒に長く貸してしまっていますね。問題を忘れていました、私もまだまだです」

先生の発言と同時に、矢田がカバンから理事長の課した数学の問題集と同じ物を取り出す。何と殺せんせーは教職に就くにあたり、全ての問題集を頭に入れていた。彼はこれくらい教師を目指すなら当たり前だと豪語するが、決して容易な事では無い。

「こんな方法では私を殺す事も、ガツシユ君の目指す王の姿を否定する事も出来ませんよ。貴方は安易な暗殺方法で自らの首を絞めた。さあ理事長、残り1冊です」

理事長の前に最後の問題集が置かれる。殺せんせーは無事に彼の暗殺を回避した。それだけでは無く、強者が好きに弱者を蹂躪出来る現実を突き付けてガツシユペアの理想を否定する事も失敗に終わった。

「自分の死が目の前にある気分はどうです？」

殺せんせーの言葉を聞いた理事長の頭には走馬灯が流れる。かつてE組の校舎は理事長が塾を開いていた場所だった。その第一期生は3人。当初理事長は彼等に「良い生徒」に育てる為に尽力した。そして彼等は皆志望した中学へ入る事が出来た。しかしその内の1人の「池田」は中学時代にイジメにあい、自殺してしまった。

(だから私は、強者を育てる為に……)

彼は「良い生徒」では無く「強い生徒」を育てる道を選んだ。その為の柵ヶ丘学園。そしてかつての塾は見せしめの為にE組の校舎とする。そして理事長は殺せんせーとガツシュペアが存在を知り、自らの理想の為に彼等を利用する事を決めた。そんな今の彼の目の前にあるのは死だ。しかし理事長はそれに手を伸ばそうとする。

「まさかアンタ!!死ぬ気なのか!!」

「やめるのだ!!理事長殿!!」

ガツシュペアが叫ぶ。彼が問題集を開けば間違いなく無事では済まない。目の前の人が傷付こうとする光景を2人が見過ごす道理は無い。彼等は優しい王様を目指しているのだから。しかし理事長はその声には耳を貸さない。そんな彼を止める為にガツシュは窓から教室に入ろうとした。その時、

「ガツシュ君、待って下さい!」

殺せんせーがそれを制止する。そしてガツシユが足を止めた一瞬、理事長は問題集を開いた。その直後に起こる爆発、理事長は死を恐れていない。それを見たガツシユペアの脳裏によぎるのは絶望。目の前の命が失われる事を止められなかったが故の。しかし爆風が消え去った後、そこに死人は存在しなかった。

「これは……」

「ヌルフッフ、脱皮です。脱いだ直後の皮なら、手榴弾の爆風くらいは防いで見せますよ」

殺せんせーの奥の手の一つ、脱皮。これがあるからこそ彼はガツシユペアの手を借りる事無く理事長を助けられた。殺せんせーには、理事長が自分に負ければ自爆を選ぶ事を予測出来ていた。ガツシユペアに教室まで来させなかったのは、万が一彼等が爆発による怪我を負うリスクを避ける狙いもある。

「私達は似た者同士でしたね。昔の理事長の事は調べさせてもらいました。私の教育の理想は、かつての貴方の教育とそっくりだった」

弱者が集うとされるE組。しかし本来のE組制度の目的は見せしめなどでは無い。生徒達が同じ境遇をクラス内で共有し、校内いじめに団結して耐え、仲間に相談できる環境を作る為であるとの事だ。

「そんなE組を創り出したのは……他でもない理事長です。貴方は本能的に私が同じ教

育論を持つ事を予感していたのでしようか。だから私を教師として雇った。そして高嶺君とガツシユ君をE組に呼び寄せたのは私の暗殺の為だけでは無く、彼等なら「良い生徒」としての最高の手本となり得るからと言ったところですかね」

殺せんせーは全てを見透かしたかのように言い放つ。理事長は昔に描いた理想の教育を無意識に続けていたのだと。その話を聞いたガツシユペアは怪訝な顔を見せる。まさか自分達がE組に推薦された理由が、暗殺以外にもあつたとは思ひも寄らなかつた。そして理事長は何か納得したような顔を見せて口を開く。

「私は十年余り、多くの強い生徒を輩出してきた……さて、殺せんせーも私のシステムを認めましたね。ならば恩情を持つてE組は存続させる事としましょうか」

旧校舎の取り壊しは中止となった。E組はこれまで通りの環境で残りの学園生活を過ごせる。E組一同は喜びの表情を見せた。

理事長が校舎を出る。すると彼は悟つたような表情でガツシユペアの方を向いた。

「そういう事だったのか、高嶺君とガツシユ君。今なら何故私が魔界の王を決める戦いに勝ち残れなかつたのかが分かつたよ」

理事長が何気なく口にした発言を聞いたE組一同の間に沈黙が流れる。そして、

「「理事長も戦いに参加してたの!?!」」

ガツシユペア以外の生徒は驚愕する。まさか彼が魔物の戦いに参加していたとは夢にも思わなかったのだ。確かに理事長はガツシユペアの力の事を知った上で、彼等をE組に推薦した。しかし魔物の事を知っていても理事長が直々に戦っていた訳では無いと生徒達は思い込んでいた。そして彼等は理事長に対して、魔物の戦いに関する質問責めを行う。

「やれやれ、口に出す程の事では無いのだがね。まあ、パートナーである彼には悪い事をしたと思っているよ」

理事長は自分とパートナーの魔物との日々を話し始める。パートナーとなった魔物の背丈はガツシユと同じくらいで、それ以外の容姿はかつての教え子の池田によく似ていた。しかし彼はお世辞にも強い魔物とは言えなかった。それを理解した理事長は彼を洗脳教育して強くする道を選ぶ。

「そこから既に敗北は決まっていたのだろう」

洗脳教育により、彼の術の威力も身体能力も飛躍的に上がった。そんな2人の前に現れたのがナゾナゾ博士とキッドだ。博士は理事長が魔物を洗脳する様子を見かねて戦いを挑んだ。純粋な強さだけなら洗脳教育によって、その魔物がキッドを上回っていたかもしれない。

「だが君達も分かる様、この戦いにはパートナーのコンビネーションが必須だ」

洗脳教育でお互いの信頼関係を築く事は不可能だ。そんな事で得た強さには限界がある。理事長達はそこをキッドペアにつかれた結果、本を燃やされてしまったのだ。話を終えた理事長はガツシユの頭に手を置く。

「私の戦いはこれで終わりだよ。彼は“良い王様”になりたがっていた。彼の目指した理想とガツシユ君の目指す優しい王様。どちらが王になっても魔界の皆は喜びそうだね」

理事長はその魔物を大切に思っていない訳では無い。むしろ池田の面影を見た彼を強者にしたいという思いばかりが先走った結果、彼は負ける事になった。魔物の戦いでは、お互いが寄り添い合わなくては本当の強さを得る事は出来ない。その事によりやく気付いた理事長はわずかな後悔の念を感じる。

「理事長殿。私が魔界に帰ったらその魔物とも友達になりたいぞー！」

「ああ、よろしく頼むよ」

ガツシユの言葉を聞いた理事長の口角が上がる。そして彼は話を続けた。

「それから高嶺君、ガツシユ君。彼の住む魔界を救ってくれた事、礼を言うよ」

「その事まで知っていたんですね。魔界の皆のお陰で勝つ事が出来ましたよ」

理事長もまたナゾナゾ博士からクリアとの戦いの話を聞いていた。理事長がその魔

物と過ごした時間は長くない。だが博士が言うにはその魔物は洗脳された状態でも、理事長の事を最後まで案じていた様に見えたとの事だ。理事長もまた教え子の面影を感じる魔物には思うところがあつた。そんな彼が救われた事にはガツシユペアに感謝している。

一通り話しを終えた理事長は、この場を去る前に殺せんせーの方を向いた。

「では私は本校舎に戻ります。それから殺せんせー」

「何でしょうか？」

「たまには私も殺りに来て良いですかね？」

「当然です。好敵手にはナイフが似合いますね」

理事長が対先生ナイフを振りかざす。しかし彼には淀んだ殺意は無い。理事長もまた殺せんせーに手入れされ、爽やかな殺意を持つようになった。これからは息子との関係もより良くなるだろう。そして彼は山を降りていく。その後E組一同が壊されかけた校舎の修理に追われる羽目になったのは別の話だ。

LEVEL. 71 正体の時間

期末テスト終わりの演劇発表会。こちらもE組それぞれの長所を活かして見事にやり切った。特に狭間の脚本及び杉野の名演技は、此度の発表会に大きな爪痕を残す結果となった。これでE組一同残りの学園生活は暗殺と受験勉強に専念する事が出来る。

「ウヌ、渚とカエデがどこに行ってしまったのだ？」

ガツシユが教室を見渡すと、先程までいたはずの2人がいなくなっていた。ガツシユは何事かと考える素振りを見せていたが、殺せんせーが何かに納得したように頷く。

「私が見てきますよ、ガツシユ君。君達はゆっくりして下さい、ヌルフッフ」

「分かったのだ！」

殺せんせーがそのまま教室を出て行く。その後残った生徒達は暗殺計画についての話し合いをする事にした。出てきた案としては極寒の環境を利用して先生を襲撃する事、先生をスキーに誘った時に雪山を水に溶かした上で襲う事などが挙げられた。

「そう言えば速水ってスキーの経験者だったよな」

「そうね。スキー場で暗殺するなら任せて」

千葉が速水に声をかける。彼女はE組に来る前はスキー部に属しており、雪山に関し

ては場慣れしている。生徒達のどんな経験が暗殺に生きて来るか、分かったものではない。

「清麿、スキーとやらも楽しそうなの！」

「あくまで暗殺の為だがな（ウインタースポーツと言えば、前回のスケートは悲惨だった）」

ガツシユはスキーに興味を示すが、清麿はウマゴンペアや水野達とスケート場に行った時の惨劇を思い出す。それなりの大人数で行ったのにもかかわらず、誰一人としてまともに滑る事が叶わなかった。それだけでは無くお互いの足の引つ張り合いが始まり、散々氷の上で転がり回るだけで終わってしまったのだ。そして清麿の顔色が悪くなる。

「おい高嶺、他にもいい案ねーのか？つか何辛気臭せー面してんだテメーは」

「大した事では無いんだが……」

寺坂がぶつきらぼうな口調で清麿に問いただす。他の生徒達も何事かと思つて彼の方を向く。そして清麿はスケート場での出来事を彼等に話すと、クラス内では笑い声が響いた。

「ギャハハハ!!そんで思いつきこけたってか!!」

「ぶつ……ねえ高嶺、そんな時の写真とかない訳？」

「高嶺君、中々面白い事を話すね〜。ククツ」

「やべえ。想像しただけで笑えてくる……ハハハハ!!」

その話題は特に寺坂・中村・カルマ・岡島のツボにハマった様で、彼等は清磨をあざ笑う。他にも笑みを浮かべる生徒達が多く、清磨の堪忍袋の緒が切れる。

「じゃかあしい!! だったらお前等も滑れるんだろーな!! 俺の事笑った奴、全員でスケート行くぞ!!」

清磨が怒鳴り散らす。彼はヤケを起こしている。暗殺の話はどこへやら、気付けばE組はスケートの話一色になっていた。そんな光景を見た速水がため息をつく。折角自分の経験を活かしたスキーでの暗殺の話題が遮られて複雑な心境だ。そんな彼女の視界には頭を押さえたガツシユが入る。

「ガツシユ、どうしたの?」

「ヌウ、凜香……スケートで転んだ時は本当に痛かったからの。それを思い出してしまったのだ」

今となつては笑い話になっているが、氷の上に思い切り体をぶつけたのだからタダで済む訳が無い。ガツシユが顔を青くしていると、原が彼の頭に手を置いた。

「まあ、どのスポーツも常に怪我のリスクがあるからね。皆無理しなきゃいいけど」

原は熱くなるクラスメイト達に心配の眼差しを向ける。今の彼女の目線は子供達を見守る母親のそれだ。そんな中、狭間が首を横に振りながら会話に加わる。

「どんどん話が逸れていくわね。まあ、焦る必要は無いんでしようけど」

彼女は素っ気なく言い放つが、その顔にはわずかながら笑みが浮かんでいる。影を好む狭間だったが、E組に入った当初と比べて大分楽しそうな顔をする頻度が増えてきている。そんな彼女をガツシユが見つめる。

「どうしたのよ？ガツシユ」

「何だか綺羅々が変わったような気がするのだ！」

狭間の変化にガツシユが気付く。無駄にテンションが高まる事こそないが、彼女もE組での日々をしっかりと楽しんでいる。そして狭間は何かを思いついたように口を開く。

「あら、人はそんな簡単に変わるものじゃないわよう？」

彼女は笑みを浮かべるが、それ以上に顔に影が差している。狭間は無邪気に自分に話しかけるガツシユに対して、幽霊のような顔をして見せた。

「又オオオオ!!」

それを見たガツシユは冷や汗をかきながら震えて逃げ出す。そしては原に隠れてやり過ぎそうとした。

「狭間さん、あんまりガツシユ君を怖がらせないでね……」

そんな原が怯えるガツシユの頭を呆れ混じりに撫でる様子を、速水は何とも言えない

表情で見ていた。

E組での何気ない日常が繰り広げられていると思われたその時、突如外から何かが破裂した音が聞こえてきた。それと同時に校舎が揺れる。先程まで盛り上がっていた生徒達の顔が一齐にこわばり、彼等はすぐに外へ出た。

生徒達が音の聞こえて来た方に向かう。そこでは倉庫の前で殺せんせーが尋常でない程に動揺しながら、倉庫の屋根上を見つめている。そして生徒一同先生と同じ方に視線を向けると、そこには驚愕の光景が存在した。

「あくあ、失敗しちゃった。ダメだな、私」

屋根の上には茅野が立っている。しかし生徒達は彼女を見て愕然とする。何故なら彼女の首からは有り得ないはずのものが生えていたのだから。

「茅野さん、何なんですか？それ……」

「嘘、一体何が……茅野さん」

奥田と神崎が信じられないといった様子で一步前が出る。しかし他の生徒達も考える事は同じだ。彼女は触手を生やしている。なぜなのか。そんな彼等の疑問に答えるかのごとく、茅野は口を開く。

「茅野カエデ」って本名じゃないの。今までずっと演技してきたんだ、ひ弱で無害な女子にね。『雪村めぐり』の妹って言えば分かりやすいかな？」

彼女は淡々と語る。演技と言うのは嘘ではない。実際に今の茅野の顔は別人のように険しくなっている。そして茅野は冷たい目つきで殺せんせーを見つめると、多くの生徒達が動揺する。その原因は彼女の冷徹な視線故では無い。雪村めぐりの名前が出て来た事だ。

「カエデ……何を、言っておるのだ？」

ガツシユが冷や汗をかきながら彼女に聞いた。彼には状況の整理が出来ていない。そんなガツシユを見た茅野は何か納得したように話し始める。

「そっか、ガツシユ君はお姉ちゃんとは面識が無いんだっただね。なら知らなくても当然か……それより、コイツが私のお姉ちゃんを殺したんだよ」

「『『『『『』』』』』」

茅野が殺せんせーを指差して言い放つ。彼女の衝撃的な言葉を聞いて生徒達が驚く中で、彼女は話を続ける。

「だから私はお姉ちゃんを敵を討つ為だけにE組に入った。今まで皆と仲良く過ごしてきたのもそれがバレないようにするための演技、嘘っぱちなんだよ。他の事はどうでも良い」

茅野は言い放つ。これまでのE組での生活は彼女にとつて偽りの物であると。仲間と共に苦楽を共にしてきた事も、全て演技でしか無いと。ガツシユは彼女の言う事をようやく理解した。しかし彼はそれを認めたくない。だから反論する、大声を張つて。そうでもしないと、ガツシユの何かが崩れるかもしれない。なかつた。

「そんなハズなからう!!カエデ!!お主は私達がクリアとの戦いから帰つてきた時、泣きながら喜んでくれたではないか!!あんなにも心配してくれたではないか!!なのに……」
「いや、それも全部演技だつて言つてるじゃん。ガツシユ君は騙されてたんだよ」

彼の叫びは茅野には届かない。彼女は冷たくガツシユを突き放す。今のガツシユの前には、かつて自分を弟のように可愛がつてくれたクラスメイトはもういない。いるのは触手を持つた復讐者のみ。

「ヌウ、それでも……」

「ガツシユ君」

「!カエデ……」

口元を震わせながらも言葉を発しようとするガツシユに茅野が微笑みかける。その時の彼女の笑顔は今までE組の皆に見せて来たものだった。それを見たガツシユは安堵の表情をする。しかし、

「ほら、また騙された。懲りないなあガツシユ君は」

「な……」

茅野は先程までとは異なる邪悪な笑みを浮かべる。まるでガツシユに対して、今までの自分は嘘偽りであると改めて思い知らせるかの様だ。それを見たガツシユは絶望に支配された。これまで彼はどんな強敵に力の差を見せつけられようと、どんな危機的状況に遭遇しても諦める事は無かった。しかし親しい者からの裏切りを受けて、ついにその心が折れた。そしてガツシユは全身を震わせて膝をつく。

「ぐう……ウヌウ……」

「ガツシユ君つて王様目指してるんだよね……だったら、こういう演技も見破れるようになった方が良いんじゃない？そんなんじゃない」

「茅野!!もうやめろ!!」

立ち上がれないガツシユに対してまだ茅野は追い打ちをかけようとする。しかし、それは清麿の怒鳴り声によって防がれた。彼は自分のパートナーが散々罵られた事で切れている。そしてガツシユの方にはようやく倉庫から出て来た渚が駆け寄った。

「やっぱり高嶺君は怒ると怖いな……：そういえば高嶺君さあ、私が何か隠してるって事に気付きかけてたよね？」

「や!!」

そう指摘された清麿は目の色を変える。彼は何度か茅野の言動に違和感を覚える事

があつた。だがその事を彼女は感づいていた。

「アンサーカード【答えを出す者】、だっけ？その力を使われればバレてたけど、それで見破られる事は無いつて確信があつた。だつて高嶺君、それで私を見ようなんて絶対しないでしょ？」

清麿はこの力を乱用してこなかった。イトナの事を探る時ですら一瞬躊躇つた程だ。勝手に人の抱える物の答えを出すのは、相手にとつても良い気分はしないだろう。だから彼は安易にそれを使用しないと決めていたが、清麿のその決断すら茅野は織り込み済みだつたと言う。清麿は言い返さない。

「まあいいや、またやるよ殺せんせー。場所は後で連絡するから」

茅野がそう言い放つた後、彼女は尋常ではない速度でその場を離れる。殺せんせーやガツシユならそれを止められた可能性もあつたが、今の彼等にはそこまでの余裕が無い。

多くの生徒達がその様子を見て呆氣に取られていたが、その中でもイトナが顔を青くしながら口を開いた。

「有り得ない……メンテもせずに触手を生やし続けてるなんて……地獄の苦しみだぞ」

かつて触手を体内に宿していた彼だから理解出来る。誰かに管理してもらわなければ、触手の持ち主は脳の中で棘だらけの虫が暴れ続けるような激痛に襲われる。それを表情に出さずに耐えきる事など出来るはずが無いと。だが、茅野はそれをやってのけ

た。

「茅野……そんな……」

清麿が歯ぎしりをする。もしも自分が違和感に気付いた時に【アンサートリーカー】でその正体を探っていれば、別の道があったのではないか。苦痛に苛まれる茅野を救う事が出来たのではないか。そんな後悔が彼を襲う。清麿が両手を力強く握りしめる様子をクラスメイト達が心配そうな表情で見つめる。

「俺の……せいなのか……どうすれば?」

彼は思わずそう呟く。しかしその発言を聞いたE組の多くは、途端に彼に対して否定的な目線を送る。その中でもカルマがため息をついた後に、呆れ混じりの表情で話し始めた。

「高嶺君……流石にそれ、自惚れすぎでしょ?」

「しかし、赤羽」

「何でも自分の力で思い通りに出来るとか思わない方が良いつて」

カルマの言葉に反論しようとする清麿の発言をも彼は遮り、冷たい視線を送る。カルマには怒りが込みあがっている。高いスペックを持ち合わせる同級生が、ある意味力に溺れかけている事に対して。

「その力で茅野ちゃんが隠してる事を知ってどうすんの? 仮に一番良い方法を導き出せ

たとして、それを彼女がはいそうですかって簡単に受け入れると思う？」

茅野の目的は殺せんせーへの復讐。クラスメイト達がそれを知ったところで止められる保証など無い。ガツシユペアなら力で取り押さえる事が出来るかもしれないが、それで彼女自身が納得するハズが無い。呪文や【答えを出す者】をもつても本当の意味で茅野を止めるのは至難の業だ。それなのに清麿が自分なら出来るって決め打ったような言動をする。その事はカルマの逆鱗に触れた。

「……済まない、赤羽。お前の言う通りだ。この力は万能じゃないって、分かっていたつもりだったんだがな」

清麿は素直に謝罪する。カルマの叱責により冷静さを取り戻した彼は、すぐに自分の間違いに気付く事が出来た。茅野の本性が露わになって焦るあまり、彼は周りを見ようともせず、自分の力だけでどうにかする可能性ばかりを探ってしまった。清麿が態度を改めた様子見たカルマは、ホツとしたような顔をした後に彼の肩を叩く。

「頼むよ高嶺君。この後皆で茅野ちゃんをどうにかする方法を考えないといけないんだからさ」

カルマが清麿を見て口角を上げる。今の清麿は次に成すべき事が分かっている。多くの生徒達も2人のやり取りを見て多少なりとも気が楽になった。そんな時、寺坂が一歩前に入る。

「つーかよ……誰が悪いって話になったら、茅野の苦しみに気付いてやれなかった俺等全員の落ち度だろーが。カルマ！高嶺！テメー等だけで勝手に話進めてんじやねーよ！」

彼は言い放つ。茅野は大切なE組の仲間だ。そんな彼女が間違つた方向に向かつているのなら、クラス全員でそれを止める以外の道は無い。かつてはいじめっ子のガキ大将だった寺坂だが、彼もまた暗殺生活を通して誰かを氣遣う事が出来る様になつてゐる。

「……皆さん、ここにゐるのも何ですし、先ずは中に入りましょうか」

殺せんせーが生徒達に教室に戻る様に指示する。いつまでも寒い外に居続ける訳にはいかない。先生の言葉を聞いた生徒達の多くは歩き始める。しかしガツシユは立ち上がりこそしたものの、足を動かそうとはしなかった。そんな彼の隣にいた渚は声をかける。

「ガツシユ、僕達も戻ろうよ。後は教室でこれからの話し合いを」

「済まぬ、少し私を一人にして欲しいのだ」

ガツシユは渚の言葉に対して首を横に振る。そんな彼を見かねた生徒達は何事かと思ひガツシユの方を向くが、清麿が口を開く。

「そうだな……悪い皆、今はガツシユをそつとしてやってくれないか？」

彼はガツシユの考えている事が分かった。ガツシユはまだ立ち直れていない。今の彼には時間が必要なのだと。清麿の言葉を聞いた生徒達は、ガツシユに心配の眼差しを向けながらも校舎に入っていく。

ガツシユを除くE組の皆が教室に戻った。教室内で生徒達は口を開かない。その中で、まずは殺せんせーが沈黙を破る。

「高嶺君、律さん、イトナ君……勿論ガツシユ君もですが、君達は雪村あぐり先生とは接点が無いのですよね。彼女は私がE組に来る前にこの担任を勤めていた人です」

今回の一件のキーパーソンである雪村先生。彼女は殺せんせーの前のE組の先生だ。しかし転校生達は先生の事を知らない。だから殺せんせーは彼等に雪村先生の事を紹介するところから始めた。

「茅野は……その人の妹だと言ってたな」

殺せんせーの説明を聞いた後、清麿が苦虫を噛み潰したような顔をする。E組の前担任の妹、それこそが茅野の正体。しかも先生は殺せんせーが命を奪ったという。多くの生徒が疑問に思う中、三村がスマホを取り出した。

「皆。『磨瀬榛名』って憶えてるか？」

彼のスマホには1人の子役女優が映し出されている。彼女は現在休業中だが、その画像を見たE組一同は驚愕する。髪型や雰囲気こそ異なるが、その少女の容姿が茅野そっくりなのだ。そして磨瀬榛名は芸名であり、彼女の本名は「雪村あかり」。雪村先生と同じ苗字だ。

「実は茅野の事、前に見た事あるような気がしてたんだが……そういう事だったのか」彼は何かに納得したような物言いをする。磨瀬榛名は休業期間が長くて多くの人々の記憶から消えかかっていたが、テレビ業界に詳しい三村は彼女の事を憶えていた。だから茅野を見て思うところがあつた様だが、正体に気付く事は出来なかった。そして三村は彼女の出演する動画を律に頼んで流してもらおう。

「確かに茅野だ……スゲー演技だな……」

前原の言う通り、画面に出て来る彼女の演技力はかなりの物だ。それをもって1年近くクラスメイト達に自分の正体と触手による苦痛を隠していた。そして茅野の動画を見ている渚が思い詰めた表情をする。そんな彼に対して清麿が声をかける。

「渚、大丈夫か？」

「うん、考えてたんだ。茅野が僕やガツシユと一緒にいる機会が多かった理由を」

茅野はE組においては基本誰とでも仲良しだ。しかしその中でも誰と行動を共にする事が多いかと言われれば、これは渚とガツシユだろう。その事には彼等と気が合う以

外の理由があつたのではないかと渚は予測する。

「茅野は多分、僕の殺気の陰に自分の殺気を隠していたんだろうね。そして……」

「ガツシユと仲良くしていたのは……俺の気を少しでも緩める為、か？」

「そうだと思う」

清磨と渚は同じ結論に辿り着く。渚に隠れて自分の暗殺の才能を誤魔化す事、茅野の事情に感づく可能性のある清磨に警戒されない様にガツシユと交流を深める事。どちらも自分の目標を達成する為であると。茅野は渚とガツシユを利用していたのでないかと2人は考える。

「ガツシユ、大丈夫かな？」

渚はこの場にはいないクラスメイトに心配を向ける。ガツシユがこの事を知れば、これが事実であれば彼はさらに傷付くだろう。清磨は渚の肩に手を置く。

「アイツが心配なのは皆同じだが、これはガツシユが自分で乗り越えなければならん事だ。そして茅野を連れ戻す為にはガツシユ……そしてE組の皆で迎えに行く必要がある。酷な様だが、ガツシユには自力で立ち直ってもらう。親しい者からの裏切り……これもアイツが王になる為の試練なのかもしれん」

ガツシユペアはかつて何度も強敵との力の差を思い知らされた事がある。しかし、その度に仲間と共に困難を突破してきた。しかし今回は違う。ガツシユは仲間だと思つ

ていた者から突き放された。これは今まで経験した事が無い。

校舎の外ではガツシユが一人、膝と手を地面について涙を流す。今まで自分が友達だと思っていたクラスメイトからの裏切り。それはこれまで経験してきたどんな絶望とも異なる。簡単に立ち直れる訳が無い。

「又ウ……ウ又ウ……」

同じ裏切りと言えば、かつてビツチ先生は死神側に寝返ってE組の生徒達を死の危険に晒した事がある。しかし彼女自身が散々葛藤していた上に、死神の心理掌握もあつた為、純粹に先生だけの意志とは言い難いかもされない。またウオンレイペアもフアウード復活の為に敵対した事があつたが、こちらはリエンが人質に取られていた状況だ。しかし茅野は違う。初めからE組の事を何とも思っていないと言いつつ。元から自分達を見限るつもりしか無かつたのだと。

「又オオ……カエデエ……」

ガツシユの脳裏には彼女とのE組での日々が思い浮かぶ。楽しかつた事や大変だつた事、どれも大切な思い出だ。しかし茅野はそれらを偽りだと断言した。ガツシユはそれがたまらなく悲しかった。

「ぐ……うう……」

ガツシユは未だに立ち上がれない。ここでもいつまでも落ち込んでいる訳にはいかない。そんな事は彼にも分かっている。しかし、それでも茅野に裏切られていた事実を受け止める事は叶わない。ガツシユは泣き続ける。彼は一向に頭を上げようとしない。そんな時、ガツシユの耳には聞こえるハズの無い少女の声が届いた。

『「こらガツシユ！いつまでメソメソしてるのよ！」』

「ウヌ!?」

その声を聞いたガツシユは顔を上げる。

「ヌウ、どうして……」

「テイオ!!」
彼の目の前には、今は魔界にいるはずのテイオが立っていた。

LEVEL. 72 苦闘の時間

「テイオ……どうして……」

ガツシユの前にはテイオが魂の状態で立っていた。今は魔物の戦いの最中でも無く、金色の本の力が出ている訳でも無い。それなのに何故この場に彼女がいるのか。真相は不明だ。

『詳しい事は私にも分からないけど、アンタがいつまでも泣いてる姿を見てられないと思つたのよ。そしたら、気付いたらこうなつてたつて訳』

「テイオ……クリアとの戦いが終わつても、ずっと私達を見ておつたのか？」

テイオは魔界からもガツシユを見続けていた。魔界を救ってくれた友を、ずっと気にかけていたという。自分達の為の明日を作ってくれた仲間にも、いつまでも下を向き続けて欲しくは無かつたのだ。

『ええそうよ、ガツシユと清麿がこんな問題まで抱えてると知つた時はビツクリしたけど。今の私達にはもう見守る事しか出来ない……そう思つてたけど、また話せるようになつたわね』

テイオは微笑みかけてくれる。クリアとの戦い以降、再びガツシユと話せる事が嬉し

いようだ。ましてや今の彼はこれまで経験しえなかつた絶望に打ちひしがれている。それならば、彼女のやるべき事は一つしかない。

「テイオ……カエデが……」

『ええ。私もマルスに裏切られた経験があるからガツシユの気持ちは分かるわ。でも辛いのアンタだけじゃないでしょ？清麿や渚、他の皆だって同じじゃないの？だから立ち上がりなさい！』

テイオは発破をかける。彼女はガツシユの心境を理解した上で、あえて甘やかす様な言い方はしない。かつてテイオ自身がクリアの圧倒的強さの前で心が折れかかっていた時、彼のお陰で立ち上がる事が出来た。そんなガツシユを彼女は信用している故だ。彼なら再び立ち直ってくれるとテイオは確信している。

『ガツシユ。私、カエデとはあんまりお話する事が出来なかつたけど……ガツシユのクルスの人とも清麿達程一緒にいた訳じゃないけど……貴方達が過ごした日々が全部嘘偽りだったとはどうしても思えない。だから、ここでアンタに立ち止まって欲しくない』

テイオもE組の生徒の何人かと顔は合わせている。彼女は特に渚と仲が良く、ガツシユペアがE組にて楽しい日々を送っていた事も知っている。いくら茅野が心の内に何かを抱えていたとしても、それらを演技の一言で切り捨てられる事が彼女には考えら

れない。そんなテイオの言葉はガツシユの心に届く。

「ウヌ……ウヌウ……」

ガツシユは涙を流しながらもようやく立ち上がった。ここで伏していても何にもならない。そしてテイオの言葉を聞いた彼は決意を新たにすする。

「テイオ……」ここまで来てくれてありがとうなのだ。お主のお陰で元気が出たぞ……カエデがどんなにひどい事を言っても、カエデは私の……私達E組の、大切な友達だ!! だからカエデはあのままにはしておけぬ!! 必ず私達で皆の下に連れ戻す!!」

例え茅野がE組を、ガツシユを見限ろうとしても関係ない。彼が茅野を友と思う気持ちには変わらない。そしてガツシユは茅野と向き合い、E組全員で彼女を止める事を決めた。例え茅野自身がそれを拒絶しようとも。

『やつとガツシユらしくなってきたわね。これなら大丈夫そうかしら』

テイオは安堵の表情を浮かべる。彼女はどんな事があっても、ガツシユには前を向いていて欲しいのだ。

『じゃあ私は行くわね。ガツシユ……またアンタが弱音を吐くようなら何度だって来てあげるから!』

「ウヌ!!」

テイオはそう言い残して姿を消した。ガツシユが見たテイオは本当に魔界から来て

くれた彼女の魂だったのか、それとも彼は幻を見ていたのか。それは分からない。しかしそれは大きな問題では無い。再び立ち上がったガツシユは校舎に入る。皆で友を連れ戻す為に。

「……ガツシユ君、戻ってこないね。高嶺君、本当に彼を一人にして大丈夫かな？」

その頃E組の教室では、片岡を始めとして多くの生徒がガツシユを心配する。茅野が可愛がつてくれてた分、彼が受けた精神的ダメージは大きい。ガツシユはこれまで厳しい戦いを何度も乗り越えてきたが、親しい者からの裏切りはこれまでの苦痛とはまるで異なるだろう。しかし清麿の意志は固い。

「渚にも言ったが、これはガツシユに与えられた試練だ。本当にあいつが茅野を思うのなら、ちゃんと戻って来るさ」

彼はガツシユに手を差し伸べる選択肢を持たない。それに彼がへこたれたままであるのなら、茅野を連れ戻す際の戦力にもならないだろう。一見厳しいようであるが、清麿がガツシユを信用した上での決断だ。

「高嶺君、結構ガツシユ君に対してスパルタだよね……」

「ガツシユは王になるからな。これからも辛い壁を乗り越えなくてはならん事は多々あ

るだろう。今はあいつを信じてやってくれないか?」

片岡が諦めた様な素振りを見せる。清磨の発言に対してE組の多くは言い返せない。この中で一番ガツシユの事を分かっているのは清磨だ。そんな彼がガツシユを待ち続けるのなら、自分達もそうするべきだと彼等は判断した。

「あえて突き放すのは信頼の証か……高嶺君とガツシユ君の関係、ちよつと羨ましいな」
不破が納得したような素振りでも口を開く。これまでの戦いで培ってきたガツシユペアの絆。お互いを信頼する関係は易々と崩れる物では無い。そして教室の扉が開く。

「皆、遅くなって済まぬのだ!!私はまだ大丈夫だぞ!!」

ガツシユがこれまで通りの明るい表情で教室に入ってきた。それを見た多くの生徒達は安心したような顔を見せる。彼は見事に試練の1つを乗り越えて見せた。そして清磨が笑みを浮かべながらガツシユの頭に手を乗せた。

「ガツシユ、よく1人で立ち上がったな。これで」

「それは違うのだ!」

しかし清磨の言葉は否定される。ガツシユは1人で立ち上がった訳では無い。

「テイオが現れてくれたのだ。テイオは私を元気づける為に来たと言っておった。そうならなければ、私は立ち上がる事が出来なかつたかもしれぬ。私もまだまだだの」

テイオの言葉が無ければ、ガツシユはどうなっていたか分からない。彼の心に大きな

闇が住まう事になっていたかもしれない。だがそうはならなかった。今のガツシユは前を向く事が出来ている。

「テイオちゃんが!! 本当に来てたの!!」

彼女と仲の良かった渚を始めとして、多くの生徒が驚く。魔界に帰ったハズの彼女がなぜ現れたのか。それは分からずじまいだが、ガツシユはテイオには感謝している。

「そうか……テイオは何て言ってたんだ?」

その中でも清磨はすぐに平常心に戻ると、ガツシユに改めて事情を聞いた。ガツシユがテイオとの会話を皆の前で説明すると、清磨と渚が口角を上げる。

「ハハハ、テイオは変わらないな」

「テイオちゃん、ずっとガツシユを気にかけてるんだね」

彼女の強気な物言いに清磨と渚が感心する。テイオがどれだけガツシユを思っているのか、その会話だけでも彼等は理解出来た。そして元気になったガツシユを見たクラス一同、全員で茅野を止める決意をする。そんな彼等は殺せんせーの方を向く。

「まずはガツシユ君、おかえりなさい……そして皆さんの言いたい事は分かります。先生の過去について、ですかね」

殺せんせーは皆の思いをすぐに察した。茅野の言動。殺せんせーは何故雪村先生の意志を継ぐのか。そもそも先生の正体は何なのか。E組一同、殺せんせーの言葉に頷

く。しかし先生は首を横に振った。

「勿論全て話す事は約束します。ですがそれは、E組全員が揃ってからです」

殺せんせーが口を割るのは、茅野がここに戻って来てからだと言いつつ。彼女も大切なE組の生徒なのだから。まずは茅野を連れ戻さない事には始まらない。そして殺せんせーの持つスマホに茅野から連絡が届く。今夜7時。櫛ヶ丘公園奥のすすき野原まで”と。

「クラス全員で向かいましょう。茅野さんは何としても先生が止めて見せます」

殺せんせーは茅野の暗殺を正面から受けるつもりだ。例え自らの命に代えてでも。かつてガツシユペアがクリアとの戦いに挑んだ時の様に。そんな決意をする殺せんせーだが、ガツシユと渚が一步前に入る。

日も短くなっており、6時を過ぎれば辺りはほぼ真つ暗だ。そして櫛ヶ丘のとある岩山の崖にて、黒いノースリーブのワンピースに着替えた茅野が街を見下ろす。

(ここ)まで私は完璧に演じて来た、今日この時の為に)

彼女はここに来るまでの過程を思い出す。

(今でも覚えてる。息絶えた姉とその血を弄ぶ触手の怪物)

雪村先生は教師としてのみならず、夜は結婚相手の働く研究所での手伝いをしていた。しかしそこで突然の大爆発が起こる。たまたま近くにいた茅野は研究所の侵入に成功するが、その時には彼女の姉は死んでいた。

（そこで見つけたんだよね、触手の種を……触手が私に聞いて来たつけ。どうなりたいか）を。私は「殺し屋になりたい」って答えた。アイツを殺す為に）

茅野の願いはただ一つ。姉の命を奪ったであろう超生物への復讐。そして彼女はE組での生活を振り返り続ける。

（柵ヶ丘のE組に入って、上手く渚に隠れたと思つた矢先にガツシユ君と高嶺君が転入してきたんだよね。しかも高嶺君、何回か私の事に気付きかけてたし）

ガツシユペアの転入は彼女にとつても予想外だ。超生物の命を狙う暗殺者の参戦はある程度予測はしていたが、まさか電撃を放つ2人組が来るなどとは思うまい。しかも清磨は何度も激戦を乗り越えた経験から、茅野に違和感を覚える事がしばしばあったという。

（触手の戦いについて来れるとしたら、間違いなくあの2人）

茅野はガツシユペアへの警戒を深める。今回の暗殺において最も脅威となり得る2人。ガツシユの身体能力と清磨の「答えを出す者」なら、触手の速度に対応する事も十分可能だ。そして彼等の呪文の数々と様々な戦いで得た経験値。まともにやり合うのは

分が悪いかもしれない。

(でも、ガツシユ君のメンタルは一度へし折った。仮に立ち上がってきたとしても問題は無い。だって……)

「私の準備が整うまで待って言ったんだけどなあ」

茅野の思考を遮る様に1人の男が彼女に話しかける。茅野が後ろを向くと、そこにはシロが立っていた。彼女が触手を所持する以上、今回の一件にシロが絡んでいても何らおかしくはない。

「最初からアンタに期待なんかしてない。イトナ君の事も見捨てたくせに」

茅野は冷たく言い放つ。協力関係だと思っているのはシロだけの様だ。しかしシロは得意げに話を続ける。

「代謝バランスも不安定なんだろう？メンテもせずに触手を使えばどうなるか……」

シロの言葉に聞く耳も持たず、茅野は触手の一撃を繰り出す。しかしそれは紙一重でかわされる。シロもただ者では無い。

「私1人で殺るの。今すぐ消えて」

茅野は全身に汗をかいている。触手の副作用による激痛は今も彼女を苦しめ続けている。それでも彼女は気丈な態度を崩さない。この暗殺を成功させる為に。そして約束の時間も迫ってきており、茅野はその場を超スピードで離れて目的地に向かう。それ

を見たシロは呟いた。

「冷たいなあ、私はたったひとりの兄だというのに」

午後7時、すすき野原にてE組一同と茅野は対峙する。

「約束通り、殺されに来たんだね！」

彼女は乾いた笑みを浮かべる。その頭の中には、復讐の事以外は入っていない。E組一同は触手に舐まれる茅野に心配の眼差しを向ける。しかし彼女が止まる事は無い。

「やっつと、お姉ちゃんのお仇が取れる」

茅野が殺せんせーを指差す。彼女はこの目を心待ちにしていた。全ては死んだ姉の為。しかし彼女の復讐を肯定する者は他には誰もいない。殺せんせーが本当に雪村先生を殺したなどと、他の生徒達には考えられないのだ。

「茅野、考え直す気は無いか？」

「殺せんせーがそんな酷い事するとは思えないだろ」

竹林と杉野を始め、多くの生徒達が茅野の説得を試みる。しかし彼女は耳を貸さない。茅野は姉を先生が殺したと決め打っている。そんな状態ではクラスメイト達の声は到底届かない。今度は清麿とイトナが一步前が出る。清麿は「アンサーを出す者」で、イト

ナは体に触手を宿した経験で今の茅野の体調を理解する事が出来ている。

「それ以上触手を使つてはいけない!!茅野自身が持たないぞ!!」

「今、体が熱くて首元だけが寒いだろう。触手の移植による代謝異常だ。そんな状態で戦えば」

「うるさい」

イトナの話を遮ると同時に、茅野から生える2本の黒い触手は炎を纏う。彼女は全身の体温をさらに上げて、その熱を触手に集めたのだ。当然茅野の負担は大きくなる。

「茅野さん……それ以上は……」

殺せんせーが言いかけた瞬間、茅野は燃える触手で自分と先生の周りに炎のリングを作り上げた。彼女は復讐をやめるつもりは一切無い。またリングには、殺せんせーの苦手な環境変化の狙いもある。

「これで邪魔者はいれない……ハズだったんだけどなあ」

リングの中には茅野と殺せんせーのみ、他の生徒は炎のせいで中には入れない。そう思われたが1人、炎の中でもお構いなしに割り込んでくる生徒が彼女と先生の間に入る。

「どういうつもり?そこ、どいてくれないかな……」

ガツシユ君!!」

「カエデ!! 今のお主に殺せんせーを殺させる訳にはいかぬ!!」

ガツシユが殺せんせーを背に、両腕を広げて茅野の前に立ちふさがる。両者の鋭い視線がお互いを睨み付ける。お互いに引き下がる選択肢は持ち合わせていない。

「もう一度言うね、ガツシユ君。そこどいて……痛い目にあいたくなかつたらさあ!!」
「絶対にどかぬ!!カエデ、お主に後悔して欲しくないのだ!!」

茅野がこれまでに出した事のないようなドスのきいた声でガツシユを怒鳴る。しかしガツシユはそれには屈しない。そして彼は茅野に負けず劣らずの大声で返すと、彼女は訝し気な顔をする。

「言ってる意味が分かんないんだけど……後悔して何?」

「本当に殺せんせーがカエデのお姉ちゃんを殺したかどうか、分からぬでは無いか!!それに、これ以上苦しそうにするカエデを見てなどいられぬ!!」

他の生徒達も考えていたが、本当に殺せんせーが雪村先生を殺したかどうかは分からない。茅野自身でさえ、直接彼女の命が奪われた場面には出くわしていないのだから。しかし茅野の精神は触手に支配される一方だ。

「そうとしか考えられないんだよ!!邪魔しないで!!」

茅野が上空に跳ぶと同時に2本の触手がガツシユを襲う。炎を纏ったその攻撃は火山弾そのものだ。触手の超スピードを見切るのはガツシユでも容易では無い。わずか2本のはずの触手が十数本にも見える。時には叩き付け、時には薙ぎ払う。触手の攻撃

方法は変幻自在だ。

「聞き分けの悪い子にはお姉ちゃんがお仕置きしてあげる!!」

茅野の殺意が完全にガツシユに向く。それこそが狙いだ。茅野からメールが来た時、当初殺せんせーは自ら彼女を止めるつもりだった。しかし今の茅野に殺せんせー暗殺を成功させる訳にはいかないとE組は結論に至る。先生の話を聞く為にも。その為に先ずはガツシユが茅野を相手取る事となったのだ。

「今のお主に、殺せんせーは殺させぬ!!」

隕石のごとく苛烈な触手の連撃。それが地面に叩き付けられる度にクレーターが増える。マントでの防御すら間に合わない。それでもガツシユは致命傷を避け続ける。しかし全ての攻撃を見切るには至らない。彼は横からの触手の薙ぎ払いを喰らう。

「グハッ……」

「どうしたのガツシユ君!! エラそーな事言つときながら結局逃げるだけじゃん!!」

ガツシユは吐血する。茅野が容赦ない攻撃を繰り返す一方、ガツシユからは反撃は行わない。否、反撃できないのだ。その理由は1つ。そして炎の触手が2本、彼を捕えて巻き付く。

「捕まえた♡君が私に攻撃なんか出来る訳ないもんね」

「又ウ……」

茅野がガツシユと仲良くなつた理由がこれだ。自身と交流を深めておけば、いざ離別したところで彼に電撃を放たれるリスクは少なくなる。実際にガツシユが茅野に攻撃する事は出来ていない。そうでなくとも彼女を傷付けるなどあつてはならない。清麿もそれが分かつており、無理矢理に攻撃呪文を唱える事はしない。

場面はリングの外に移る。E組一同が茅野達を見守る。その中でも清麿は【アンサー・トーカー答えを出す者】で、渚は彼女の波長を見る事で「猫だまし」を撃つタイミングを見計らう。彼等は茅野の触手を抜く為の作戦を事前に立てていた。先ずは茅野の殺意を殺せんせーからガツシユに向けさせる。彼自身は復讐対象で無い為、そうする事で多少なりとも「触手の殺意」を弱められる。そこで渚が直接彼女を傷つけるリスクのない猫だましによつて茅野の殺意を完全に忘れさせた上で殺せんせーが触手を抜く手はずだ。しかし、

「な……………これは……………」

「ダメだ、茅野の波長は触手のせいで乱れすぎてる。あれじゃあ猫だましは使えない」
 彼等は作戦変更を余儀なくされる。猫だまし以外の何かで茅野の殺意を忘れさせるしかない。新たな方法を考えるが、その間にも茅野の精神は触手に支配されていく。

「ガツシユ君が押されてる、こんな事が……」

「俺の時なんか比べ物にならない。それ程に今の茅野は強い」

しばらくE組一同は2人の戦いを見てみると、不破とイトナが怪訝な顔をする。触手の力を得たクラスメイトが魔物相手にも渡り合う程の強さを見せる。しかし、そんな力にリスクが無い訳がない。

（だが、あそこまで触手に侵蝕されてしまえば……）

「茅野は死なせないよ」

イトナの思考を渚が遮る。彼の表情を見た渚には、イトナの考えはお見通しだった。触手の侵蝕による茅野の生命の危機。それでも渚は諦めない。彼は茅野の殺意を忘れさせる方法を一つだけ持ち合わせていた。

場面はガツシユ達に戻る。触手に捕えられたガツシユはそのまま地面に叩き付けられた。その後も触手の猛攻は続く。上下左右、2本の触手はガツシユを逃がすまいと彼を狙い続ける。しかしガツシユに攻撃は当たらない。彼は実戦中にも成長を続け、触手を見切り始めている。

「ちよ（ハ）まかと!!」

茅野は苛立ちを覚える。自分の攻撃が命中する気配が無い。ガツシユの成長は彼女を焦らせるには十分だ。そして彼女はミスを犯す。茅野は2本の触手でガツシユを押し潰そうとするが、その攻撃は余りにも大振りで隙だらけだ。ガツシユはそれを見逃さない。そしてそれは、リングの外にいる清磨達も同じだ。

「ラウザルク!!」

清磨は肉体強化の術を唱える。これなら直接茅野を傷付けるリスクは無い。また突然呪文を唱える事で茅野を動揺させる狙いもある。ここでも触手の弱点を突いていく。そして強化されたガツシユは2本の触手を完全に受け止めた。ラウザルクの使用しながら、熱によるダメージもそれ程気にならない。

「くっ……この術があつたか!」

茅野は勝利を急ぐあまり隙を作ってしまった。そしてガツシユに捕えられる。触手細胞は高い戦闘能力とスピードを得る事が出来るが、パワーはそれ程上がらなかつたりする。だから力勝負になれば、強力な魔物相手に勝ち目は無い。そしてガツシユはダメ押しと言わんばかりに触手に自らのマントを絡める。

「カエデ、やつと捕まえたのだ!!」

「やだ!!放して!!」

「絶対に放さぬ!!」

茅野は体をジタバタさせるが、ガツシユから逃れる事は出来ない。そんな状況にイラつく茅野は叫び続ける。

「何で邪魔するの!! お姉ちゃんの事、ガツシユ君には関係無いじゃん!! ほつといてよ!!」
 「そんなの出来る訳なからう!! 私は……E組は絶対にお主を、友達を放したりはしない!!」

ガツシユにとって、E組にとっては友達を見捨てる選択など有り得ない。だから例え茅野が復讐の道に走ったとしても、皆が彼女を見捨てる事はしない。そして茅野の後ろには殺せんせーが回り込み、先生の触手で彼女の体を捕える。

(殺せんせーまで……もう逃げられない!でも、これで……)

「不意を突く形になって申し訳ありません。ですが、私もまた君達を放す訳にはいかなー! お姉さんに誓いましたから!」

ガツシユと殺せんせーによって茅野の動きは完全に封じられた。そして彼女の目の前には渚が着地する。彼は茅野の殺意を忘れさせる方法を思いついた様だが、どのようにならから跳んで来たのか。茅野が周りを見渡すと、清麿と磯貝が隣り合っているのが視界に入った。

(磯貝君……そうか、体育祭の時のイトナ君と同じ事を渚に……)

彼女は渚が磯貝との連携で炎を跳び越えた事を察する。茅野は動かない。そして渚

は彼女に接近する。猫だましが有効では無い今、彼に何が出来るか。他のE組一同も彼を見守る。

「言わせないよ茅野……全部演技だったなんて」

渚はそう言い放つと同時に茅野を抱きかかえ、何と唇と唇を重ねた。それを見た多くの生徒は驚愕する。岡島・不破は目が飛び出そうになり、清磨に至ってはさらに顎が外れかかっていた。

(E組での思い出が嘘だったなんて、復讐しか頭になかったなんて……絶対に言わせない)

渚はキスを続ける。その間に茅野の顔は赤くなり、彼女の頭の中は復讐どころでは無くなる。そして殺意が忘れ去られていく。ちなみにこの光景はカルマと中村によつてスマホで撮影されていた。

「殺せんせー、どうだったかな?」

渚の15hitのキスを受けた茅野は気絶する。それと同時に彼女は横になり、触手も勢いを無くしてガツシユから解放された。

「満点です渚君!!」

「又ウ……渚……」

殺せんせーはピンセットを持ち出し、茅野の触手を抜く。より素早く、より正確に。

生徒の命がかかっているのだから。そうして彼女の触手が完全に除去された。ちなみにガツシユには目の前の光景が理解出来ない。渚の言動に対してどう反応すれば良いか分からない様子だ。

LEVEL. 73 終業の時間・二学期

野原を燃やす炎が完全に消えると同時にE組一同、茅野のもとへ駆け寄る。気を失った彼女は今、奥田に膝枕をしてもらっている状況だ。

「無事に触手は抜けました。しばらくは絶対安静ですがね」

殺せんせーの言葉と同時に全員は胸をなでおろす。ひとまず最悪のケースは避けられた訳だが、見事なキスを披露した渚はカルマ・中村に冷やかされていた。ビツチ先生に至ってはキスについてダメだする始末だ。場の雰囲気は緩んだその一瞬、何かに気付いた清磨は後ろを振り返って人差し指と中指を差す。

「ラシルド!!」

ガツシユが清磨の指差す方を見ると同時に電撃の盾を出現させる。すると盾には一発の対先生用BB弾が接触し、それは電撃を纏って放った人間に向けて弾かれる。しかしそのBB弾はさらに別で放たれたBB弾で相殺された。

「またそうやって邪魔をする。ま、良いけどね」

そこにはシロともう一人、BB弾を放ったライフル型の銃を持つ全身を黒いスーツで包み込まれた人物が立っている。

「しかし、使えない娘だな。命と引き換えの復讐劇なのに、その超生物にろくなダメージを与えられていないじゃないか」

シロは茅野を侮辱する。彼女が大好きな姉の為に命がけで行った復讐を、
“の一言で切り捨てたのだ。それを聞いたE組一同はシロに怒りを向けるが、彼は黙らない。

「もう少し良い所まで見せて欲しかったけど……まあ、姉妹揃ってポンコツだったか」「ザケルガア!!」

シロの聞くに堪えない発言を遮るかのように清磨は呪文を唱える。一直線の電撃はシロに向かうが、もう一人そこにいた者がそれを受け止める。そして電撃は弾かれた。「このスーツには耐電性の物質を組み込んである。君達の電撃のサンプルは少し取っておいたからね。解析もさせてもらった。本気で撃てば、貫通出来たかもしれないからねえ」

シロが煽る。ガツシユペアがシロを殺さない様に電撃を手加減していた事すらお見通しだったのだ。そんなシロをガツシユペアが睨み付けて声を荒げる。

「黙れよクソ野郎!! 茅野をバカにするんじゃない!!」

「使えないと言ったか!! 貴様!! カエデがどんな気持ちでこの暗殺に挑んだと思っておるのだ!!」

2人は明確に怒りを露わにし、怒気を放つ。友を愚弄される事を彼等は許さない。しかし彼等の怒りはシロには届かない。ガツシユペアの言う事など何とも思っていないのだ。そしてシロは話を続ける。

「その電撃についても聞きたいところだが……高嶺清磨、お前も【答えを出す者】を使えるのか」

シロの口から【答えを出す者】が出てきた時、清磨の顔色は変わる。なぜこの力の事を知っているのか、と。そんな清磨の考えなど見通しているかのようにシロは嘲笑う。

「ククク……その力を持つ者の人体実験に携わった事があつてね。確かその時のモルモットは『少年D』と呼ばれていたか」

清磨は即座にシロの言う事の答えを出す。そして答えを知った清磨は驚愕する。少年D、それはデュフォーが研究所に捕えられていた時の呼び名だ。彼はその力を持つが故に研究所の者達に利用され、最終的に北極に捨てられた。ゼオンが来なければ彼は死んでいただろう。清磨はシロを睨み続ける。

「だが最優先にすべきはその怪物を殺す事……その力の処遇については、後で考える事にしようか」

シロはそう言い放つと、自らの覆面とボイスチェンジャーを取り外す。そしてその男は初めて姿をさらす。黒のくせ毛を持ち、左目は眼帯のような物で覆われている。次か

ら次へと起こる急展開についていけない生徒達も多い。

「やはり君か……柳沢!!」

殺せんせーが声を荒げる。この男「柳沢誇太郎」は殺せんせー誕生に大きく関わる天才科学者であり、雪村姉妹とも関りがある。しかも柳沢は触手絡みの事に出す前は、デュフォーの人体実験にも関わっていたと言う。柳沢を見たガツシユペアは確信する。E組にとつて、この男は最大の敵となると。

「ふん、気付いていたのか。まあ良い。今は行こうか、「二代目」」

柳沢はもう一人を二代目と呼び、この場を離れようとする。ガツシユペアも柳沢の退却を止めるつもりは無い。そんな2人を柳沢は嫌味つたらしく鼻で笑う。

「何だお前達、手を出す気は無いようだな……懸命だ。今我々がまともに殺り合えば、他の生徒達がタダでは済まないだろう。それに俺も奥の手は持っている」

そう言い残して柳沢と二代目と呼ばれた者はその場を離れた。ここでガツシユペアが彼等と戦う意志を見せれば、柳沢達は他の生徒を巻き添えにする戦い方を行うだろう。しかも茅野が衰弱している状態。彼女をそのままにして戦うのは良くない。2人は手を出したくても出せなかったのだ。

柳沢達は去つて行くが、それを気に留める者はここにはいない。それ以上に茅野が心配だからだ。触手は抜かれたが、それにより味わつた苦痛が完全に消える事は無い。一同が茅野を見守る中、ようやく彼女は目を覚ます。

「あれ……私……」

「目が覚めましたか、茅野さん」

殺せんせーを初め、そこにいる者達は胸をなでおろす。復讐に囚われた1人のクラスメイトがようやく解放された。彼等にとつてはそれだけで充分なのだ。続いて渚が茅野に声をかけるが、どういう訳か彼女は顔を赤くして目を逸らしてしまう。

「最初は殺せんせーに対して純粋な殺意を持ち合わせてた……」

茅野は話し続ける。殺せんせーに復讐するつもりでE組に入ったが、先生と過ごすうちに殺意に確信が持てなくなつた様だ。しかし復讐を踏みとどまる事は触手が許さなかつた。

「バカだな私。自分だけこの1年間、ただの復讐に費やして」

「そんな事無いよ」

彼女の話を渚が遮る。彼は確信している。茅野がE組での生活を心から楽しんでいたので。

「茅野がこの髪型を覚えてくれたから、僕は長髪を気にしなくなつた」

渚が髪を伸ばさざるを得ない時、茅野が髪を結んでくれた。これでお揃いの髪型だと。渚はそれが嬉しかったのだ。

「殺せんせーって名前、茅野がつけたんだよ。皆その呼び方を気に入って使ってきた。例え目的が何だったにしても、茅野はこのクラスを作り上げた仲間なんだ。だから演技だなんて言わせない。皆と過ごした日々を」

渚は茅野とのE組での生活を思い出す。楽しかった事、大変だった事、本当に色々な事があつた。そんな一年間が茅野にとつて演技である訳が、嘘である訳が無いのだから。そして茅野は目に涙を浮かべる。演技などでは無い本物の涙だ。

「ありがとう……でも……」

茅野は視線をガツシユに移した後に首を横に振る。

「私……今さら戻れないよ……ガツシユ君の事……いっぱい傷付けちゃったから」

今回の一件で、茅野はガツシユに多くの暴言を吐いた。さらに反撃が出来ない彼を触手で一方的に痛めつけた。ガツシユが心身共に受けたダメージは小さくない。今の彼女にとってそれが一番の気がかりだ。しかし、

「カエデ、私の事なら大丈夫なのだ。それだけお主はお姉ちゃんが好きだったのだから？」

ガツシユは彼女を恨むようなマネはしない。茅野の攻撃を真正面から受ける事で、彼

女の姉に対する強い愛情を理解する事が出来ていた。

「……それに私達にとつては、このままカエデとお別れする事の方がよっぽど辛いのだ。だから戻つて来てはくれぬかの？」

この発言こそがクラスの総意だ。確かに茅野は一度、E組から離別しようとした。しかしそれはE組の望むところでは無い。ここに居る誰一人が欠けてもE組は成り立たないのだ。しかし彼女は戸惑う。

「でも、私……」

「茅野！戻つて来てよ！」

そんな茅野の手を渚が握る。その時の彼の表情は辛そうだ。大切な仲間が遠くへ行こうとしているのだから。しかし渚に手を握られた茅野は顔を赤くする。

「ちよ……渚……」

「はっ……ごめん茅野、つい……」

恥ずかしそうにする彼女を見た渚は、申し訳なさそうにその手を放す。何人かの生徒がそんな様子をニヤニヤしながら見ている。そんな中でも清麿が悟った様な顔で口を開いた。

「茅野、お前は触手に精神を蝕まれても一人で抗おうとしてたんだな。ガツシユの事だって、コイツを思ってくれたからこそ茅野と引き離すような発言をしたんじゃないの

か？」

清磨はガツシユの頭に手を置きながら問う。彼は仮説を立てていた。茅野が初めからE組を大切に思っていた事は勿論、イタズラにガツシユを傷付ける事など有り得ないと。

「高嶺君、それって……」

「触手に支配されれば、自我を保つ事すら困難になるだろう。そんな状態になればガツシユはもつとダメージを受けてたハズだ。だからお前はあえてキツイ発言をしてガツシユと……E組の皆と距離を取ろうとした。俺はそう思っている」

茅野の目的はあくまで殺せんせー暗殺。その為に周りを巻き込むような事を彼女はしない。しかし強大な触手の力はそれを許さないかもしれない。だから茅野は他の皆と離れる道を選んだと清磨は確信している。

「それに茅野、お前は一度でも俺や赤い本を狙おうとしなかったじゃないか」

「あつ……」

清磨のその発言が決定的だった。もし本当にガツシユが目障りであれば、ガツシユを直接相手取るよりも、清磨か赤い本を攻撃すれば良かったのだ。しかし茅野は違った。内心ではガツシユを、E組の事を本当に大切にしているのだから。

「お願いだよ茅野、皆で殺せんせーの話を聞こう。先生はE組が皆揃ったら真実を話す

と約束してくれたんだ」

渚が真剣な眼差しで懇願する。それを聞いた茅野の目からは、たまり続けていた涙が零れ落ちる。それはまるで、彼女が今まで我慢していた気持ちが溢れるかの様だった。

「うん……私、演技をやめても良いんだ……」

茅野が本当の意味でクラスに馴染んだ瞬間だ。彼女の真の思いがクラス中に伝わる。それを拒む者など誰もいない。クラス一同、安堵の表情を見せる。少しの沈黙が流れた後、磯貝が殺せんせーの方を向く。

「殺せんせー、そろそろ話してくれませんか？本当の事を。どんな事でも俺達は受け入れますから」

殺せんせーの過去、どうしてE組に来たのか。雪村先生、そして柳沢とはどのような関係だったのか。それらがついに明かされようとしている。しかし、殺せんせーの口からは意外な発言が出る。

「勿論全て話します。ですがその前に……」

殺せんせーは清磨と目線を合わせる。

「高嶺君、君の話を先に聞かせてくれませんか？柳沢の言う『少年D』とは何なのか？」

「その事か。そうだな……」

今日1日で明かされた情報量は余りにも多い。しかも殺せんせーの過去についてまで明かされようとしているのだから、順序だててしっかりと説明しなければ話についていけなくなる生徒が出て来る可能性もある。そこで殺せんせーは自分の話は最後にして、まずは【アンサーカード答えを出す者】と柳沢の関係について清磨に求めた。

「俺が直接関わった訳では無い。あくまで出せた答えの範囲での話になるが……」

清磨はデュフォー事やその過去を分かる範囲で皆に説明した。柳沢含む研究所での非人道的な人体実験。顔をしかめる者も多い。

「ケツ……あのヤロー、とんでもねーマッドサイエンティストじゃねーかよ」

「ま、アイツがろくでもねーのは今に始まった事じゃねーだろ」

吉田と村松を始め、多くの者達が怪訝な顔をする。柳沢の負の一面がさらに露わとなった瞬間だ。ガツシユペアを除くE組とデュフォーはほぼ関わりは無かったが、それでも柳沢達の鬼畜な所業は聞いて気分は悪くなる。

「又ウ、そんな事が……」

「俺の知る限りでの話はここまでだ。柳沢、やはり奴は許せない」・

ガツシユペアは憤慨する。まさかデュフォーの憎しみの原因がこれ程壮絶な物だったとは、思いも寄らなかつた様子だ。

「彼も大変だったのですね。柳沢、どれだけの人間を弄んで来たのか……」

殺せんせーが口を開く。まるで自分もデユフォーに近い経験をしてきたような素振りだ。先生は自分の事のように心を痛めている。

「さて、続いては私の番ですかね……」

殺せんせーが自分の過去を語り始める。

殺せんせーの事を知ったE組達は言葉を失う。先生がかつて“死神”と呼ばれた殺し屋だった事、弟子だった二代目死神の裏切りによつて柳沢に捕えられて触手の人体実験のモルモットにされた事。そこで雪村先生と出会い交流を深めた事、自らの力の暴走を止める為に飛び出し、致命傷を負った彼女を助けられなかった事。そして雪村先生の意志を継いだ殺せんせーは今の姿となり、E組の担任を引き受けたのだ。

「先生の教師としての師は雪村先生です。目の前の人をちゃんと見て、対等な人間として尊敬し、一部分の弱さだけで人を判断しない。彼女から学びました」

ついに明かされた殺せんせーの過去、そして雪村先生との関係。殺せんせーは彼女を殺していなかった。それどころか雪村先生を心から尊敬しており、彼女が案じていたE組を大切にしてくれている。そして生徒達の頭にはE組での日々が思い浮かぶ。

「もし仮に殺されるなら、他でもない君達に殺してもらいたい」

殺せんせーは言い放つ。彼等を結びつけているのは暗殺者と標的という絆。しかし殺せんせーの正体は訳の分からない超生物ではなく1人の人間。生徒達は考える、自分達はこれまで通りの暗殺生活を送れるのかと。そして、〃この先生を、殺さなくてはならないのか〃と。

殺せんせーの過去を聞いたE組一同はそのまま解散となった。茅野はすぐに病院に運ばれ、他の生徒達は帰路に着く。しかし、彼等の間に会話は無い。それはガツシユペアとて例外では無い。他の生徒達と別れたガツシユペアはそのまま清麿宅を指す。

「殺せんせー、人間だったのだな……」

「ああ、そうだ。俺達は……」

「彼等は理事長から地球を滅ぼそうとしている超生物の暗殺を依頼された。しかし超生物の正体は人間だ。人間である殺せんせーの命を奪う行為は優しい王様として相応しくない事では無いのか。2人がそう考えながら家の玄関前まで辿り着くと、そこには1人の青年が彼等を待ち構えていた。」

「久し振りだな……清麿、ガツシユ」

「ああ、そうだな……」

デュフオー」

清磨宅で彼等を待ち受けていたのはデュフオーだった。彼はクリアとの戦いの後にあての無い旅に出たが、何やら事情があつてモチノキ町まで戻つてきた様子だ。そして彼は口を開く。

「お前達、奴の正体が分かつたようだな」

デュフオーは【^{アンサー}答えを出す者^{トリーガー}】で今日のE組での出来事を把握する。殺せんせーの過去に關しては、同じく人体実験のモルモットにされた経験のある彼にも思うところがあ

る。デュフオーは複雑な心境でガツシユペアに問う。

「ウヌ、まさか殺せんせーが人間だったとは……」

「先生の過去を全て聞いた。そして」

「俺の事はどうでも良い」

清磨の言葉をデュフオーが遮る。彼は柳沢と対峙してデュフオーの事情を知つた。清磨は彼の壮絶な過去を初めて知り、何と声をかければ良いか悩んでいた。しかしデュフオーが彼等と話したい事はそれでは無い。

「人体実験に關わつた奴等の多くに復讐は殺さない程度には済ませている、全員では無いが。復讐しきれなかつた連中もまとめてファワードで消し飛ばすつもりだったが、

今はそんな事に興味は無い」

(な、何て?)

デュフオーの物騒極まりない発言に清磨は言葉を失う。とは言えデュフオーがされた仕打ちは想像を絶する物であり、それ程に連中は憎まれても文句は言えない。

「それよりも、今はお前達がどうしたいか……だ。あのタコの正体が判明した。その上で何をしたいのか。お前達はその答えを出さなくてはならない」

デュフオーは言い放つ。このまま悩んでいても前には進めない。殺せんせーの事が分かった上でE組がどのような行動を取るべきか。それは彼等自身で決めなくてはいけないのだと。ガツシユペアは口を開かない。

「考える時間はまだある。これから冬休みなのだろう?次に学校に行く時までには決めておけ。俺の言いたい事はそれだけだ」

デュフオーはその場を去ろうとする。彼はガツシユペアに伝えるべき事を全て話した。ならばここには用は無いと彼等に背を向けるが、2人はデュフオーに声をかける。

「待つのだ、デュフオー。もう夜も遅い、ここに泊っていくのはどうかの?」

「そうだな。それにお前こそこれからどうするつもりなんだ?」

2人の話を聞いたデュフオーは歩みを止めて振り返るが、すぐに首を横に振る。

「宿なら別で取つてある。今は俺の事よりお前達が答えを出すべきだ。それによつても

これから成すべき事は変わってくるだろう」

彼はあくまでガツシユペアに答えを出す事だけを考えるよう催促する。彼にもやるべき事があるのだろうが、今それを打ち明けるつもりは無いようだ。

「それから柳沢と言ったか……E組がどんな答えを出すにしても、奴とは再び相まみえる事になるだろう。十分に警戒しておけ」

デュフォーはそう言い残して今度こそその場を去って行った。明日からは冬休み。しかしE組にとっては遊ぶ余裕など、まして先生の暗殺に取り組む余裕などないかも知れない。それぞれがこれから成すべき事に向き合わなくてはならない。大きな決断に迫られる冬休みとなるだろう。

LEVEL. 74 冬休みの時間

「高嶺清麿、ガツシユ……」

柳沢は自らの本拠地の薄暗い一室でガツシユペアの名を呟く。他のE組はおろか、触手生物とも異なる力を持つ2人組。そして彼はガツシユの電撃を偽殺せんせー騒動の時、触手細胞を破壊されたどさくさに紛れて回収していた。

「まあ良い、あの怪物を殺しさえ出来れば他の事など。だが……」

柳沢の目的は殺せんせーの命を奪う事。だから柳沢にとってガツシユペアの事は、それを邪魔する警戒するべき敵と言った認識だ。しかし、何故か政府は彼等の力について野放しにしている。柳沢はこの事が甚だ疑問である。

「奴等の事に関して、政府は圧力でも受けているのか？」

柳沢の予想は正解だ。電撃を放つ2人組の存在を、政府が野放しにする訳が無い。しかし政府側からは彼等に関する言及は一切無い。防衛省に圧力をかける者達が存在するからだ。

1人目は理事長。暗殺の為にE組の校舎を使わしてもらっている防衛省は彼には逆らえない。また理事長はガツシユペアの力に不用意に干渉するようならば、今すぐE組

から殺せんせーを追い出した上で、触手に関する非人道的な人体実験を世論に暴露する事も辞さない。また彼以外にもガツシユペアの事を、つまりは魔物の事を口止めする者が存在する。

「そうか、ついに超生物の正体が分かったんだね」

アメリカ某州のビルの一室。そこで一人の青年が通話を終える。電話相手は殺せんせーの正体を突き止めた様だ。彼が受話器を置くと同時に一人の老人がその部屋に入ってきた。

「アポロ君。彼女達は奴の事を知ったみたいだね」

「そうですね、ナゾナゾ博士。恐らく清麿とガツシユもこの情報を得た事かと思われませう」

「なるほど」

アポロもまた日本の防衛省に圧力をかけている。彼の財閥は大きくてそこもコネクションがある為、お互いの為にガツシユペアの事は目を瞑るようにして貰っている状況だ。ナゾナゾ博士が殺せんせー絡みで比較的自由に動いているのも彼のお陰である。

「こつちもヴィノー君の両親を見つけられたからね。あの超生物の事に専念出来るよ」

ヴィノーはすでに両親に引き取られた。その後も彼はアポロの情報網や協力者達と共に、殺せんせーの正体を探る事に尽力している。先程のアポロの電話相手こそがその協力者だ。

「後は清磨君達がどう動くかだね。我々も最大限協力したいが、彼等の意志も尊重しなくてはならない」

殺せんせーの正体を知ったガツシユペア含むE組が何を成そうとするのか。それによっても博士とアポロの動きも変わってくるだろう。

場所は変わってフランスの豪邸。アポロとの通話を終えた女性はため息をつく。

「あの超生物の問題……思ってた以上に業が深いみたいね」

「その様だな、これを知ったガツシユ達が何を思うか」

殺せんせーの正体を掴んだブラゴペアは顔をしかめる。2人もナゾナゾ博士とアポロの協力を経て殺せんせーの正体を知るに至った。しかしそれを知った2人は、あまり良い気分では無い。

「あの超生物は殺し屋として多くの命を奪ってきた。確かにその事は許されないでしょう。それでも1人の人間を好き勝手弄んで良い理由にはならないわ」

シエリーは人体実験の事を知って両手を握りしめる。人を人とも思わない非人道的な行為。殺せんせーは彼女達と共にクリアに立ち向かってくれた。その事に感謝しているシエリーは憤慨する。

「褒められた事では無いのは確かだな。だが今はガツシユ達の決断を待つべきだろう」
「ええ、分かっているわ」

ブラゴにたしなめられたシエリーは怒りの感情をこらえる。最終的に判断するのは自分達では無くガツシユペア、そして2人の属するE組なのだから。もし彼等から助けを求められればブラゴペアもすぐに動くだろう。しかし自分達から手を出す問題では無い事を、2人は理解している。

「あの2人、どうしているのかしらね」

シエリーはガツシユペアの身を案ずる。殺せんせーの過去を知った2人が何を思うのか。

場面は清磨宅。冬休み1日目の夜、ガツシユペアは改めて殺せんせーの事について話し合う。彼等は理事長から殺せんせー暗殺の依頼を受けてE組へと編入した。しかし、その暗殺対象が人工的な超生物では無く人間であるのなら事情は変わる。

「殺せんせーはE組の事を本当によく見てくれた。その恩に報いる為にも、そして地球の爆発を防ぐ為にも先生暗殺を成功させるしかないと思つていたが……」

「ウヌウ、殺せんせーは地球爆発の為だけに作られた訳では無かつたのだ」

2人は考える。殺せんせーの正体が判明した今、これまで通り先生の命を狙い続ける生活を送り続けても良いのかと。

「地球を爆発させたくないなら殺せんせー暗殺を続けなくてはならぬ。しかし、その方法では元々人間だった殺せんせーは死んでしまふのだ」

ガツシユは苦虫を噛み潰したような顔をする。彼には迷いが生じている。E組での最大の目標、殺せんせー暗殺。しかし彼等は先生の正体を知ってしまった。悩む素振りをするガツシユを見た清磨が口を開く。

「これまでは殺せんせー暗殺に向けてクラスで力を合わせて来た。だが俺達が一番に成すべき事は何だ？そもそも俺達は何の為にE組に来たのか？」

清磨は原点に振り返る。彼等は理事長の依頼を受けてE組へ編入した。その内容は「地球を滅ぼす超生物の暗殺」。その目的は言うまでも無く地球の爆破を防ぐ為だ。殺せんせー暗殺はその為の手段の1つ。そしてガツシユペアは決意を固める。

「清磨、私は……」

ガツシユが先に気持ち打ち明けた。それを聞いた清磨の口角が上がる。ガツシユ

ペアは同じ結論に辿り着いたのだ。清麿も口を開く。

「ふう、大分スッキリした。怒涛の展開のせいで、視野が狭くなっていた様だ」

ここ数日で新たに判明した事が多すぎる。その事はガツシユペアを焦らせるのには十分だった。しかし彼等はそれを克服し、自分達のやりたい事を決めた。

「最も、一筋縄ではいかないだろうがな。俺達だけでは成し遂げられない事だ」

「そうなの……他のE組の者達とも話し合わなくてはなるまい」

彼等は答えを出した。後はE組全員が協力してくれるかどうか。この話は3学期に持ち越しとなる。そんな時、清麿のスマホに電話がかかる。

「もしもし、サンビームさん？」

『学園祭以来か、清麿。やっぱりあの超生物の事が気になってな』

相手はサンビームだ。クリアとの決戦で彼は殺せんせーの存在を知った。その事について気にしており、ガツシユペアの近況を知りたくて電話をかけたのだ。

「殺せんせーの事か。そうだな、サンビームさんにもこの事を伝えようと思ってたんだ……」

清麿は事情を話す。そして殺せんせーの正体を知ったサンビームは電話越しで驚くが、すぐに平常心を取り戻して話を続ける。

『ふむ、それがお前達の判断なら全力で応援するさ。ただ……』

サンビームはガツシユペアの判断を尊重してくれた。2人が半端な気持ちで決断を下した訳では無い事を彼は理解している。共に厳しい戦いを乗り越えた仲間なのだから。しかし彼の声のトーンが途端に低くなる。何か気がかりな事があつたのだろうか。清磨は身構える。

『あの超生物が人間時代に殺し屋をやつていたらならば、その時に彼は多くの人々を殺した事になるんだよな。それについてはどう考える?』

殺せんせーの“死神”としての罪。今でこそE組の事を思つてくれる良き教師であるが、彼がこれまで両手を血に染めて来た事実は変わらない。サンビームは直接殺せんせー暗殺に関わつて来なかつた。だからこそ、客観的に殺せんせーの過去について言及する事が出来た。自分の仲間の恩師が元殺し屋だと分かつた今、サンビームは複雑な心境だ。

「もちろん殺せんせーの過去を全て水に流す事は出来ない。それは先生自身分かつているハズだ。その為に俺はこの選択をしたつてもある」

清磨は殺せんせーの事情を全て加味した上で決断を下した。彼の選択には一切の甘えは無い。清磨には殺せんせーにやつて欲しい事がある様子だ。そして彼の覚悟は電話越しのサンビームにも伝わる。

『グルービー、ならば言う事は無い。私にもやれる事がありそうならいつでも相談して

くれ』

「済まない、サンビームさん」

こうして通話は終了した。清麿はサンビームとの話をガツシユに伝える。それを聞いたガツシユは一瞬だけ悲しげな顔を見せて下を向いた。

「ウヌ。殺せんせーは昔、悪い事をしておったからの」

ガツシユは呟く。殺せんせーの過去。まさか恩師が殺し屋だったとは思ってもよらなかった。しかしガツシユはすぐに清麿に視線を合わせる。

「それでも私の答えを変わらないのだ！」

「ああ、3学期は荒れるだろうな」

ガツシユペアは答えを出した。それがE組にどのような影響を及ぼすのかは定かでない。

年明け。モチノキ町は雪がちらつく。ガツシユペアは恵と共に神社に初詣に来ている。クリスマスから年末にかけて忙しかった彼女だが、この時だけは休みを取れた。参拝を終わらせた3人は出店をまわる。

「すごい人混みだな。ガツシユ、はぐれるなよ」

「ウヌう」

「どこの店も並んでいるわね」

神社は大混雑だ。彼等は参拝の帰りに出店で食事を済ませる計画を立てていたが、人が並び過ぎていて為そのまま神社を出る事にした。彼等は出口を目指していると、恵が口を開く。

「そう言えば2人共、私に相談があるって言つてたわよね」

「そうだな。殺せんせーについてだが、流石にここは人が多すぎる。どこか個室がある場所があれば良いんだが」

彼女もまたこれまで戦いを乗り越えて来た仲間だ。よつてこれからガツシユペアが成そうとしている事を話しておきたかった。

「この近くに、客席が個室の定食屋があるわ。そこで話しましょう」

「ウヌ……丁度お腹もすいてきたからの」

一同の次の行き先が決まった。彼等はそこを目指して人混みを歩き続ける。

彼等は定食屋に着いた。そこで個室に入り、各々が料理を注文した後、清麿が恵に真実を話す。殺せんせーの正体、茅野の事情。これらを聞いた恵は目を細める。

「そっか……あの超生物が元人間だった事には驚きね。それだけじゃない……カエデちゃんが誰かに似てると思つたら、磨瀬榛名ちゃんだったのね」

「恵、その名前を聞いた事があつたのかの？」

恵は雪村あかりの芸名を口にする。以前彼女は茅野を見た事があると言つていたが、それは磨瀬榛名を知っていた為だった。

「榛名ちゃんの事、私も大ファンだったからね。休業を聞いた時は寂しく思つたなあ」

茅野の正体を知つた恵は複雑な心境になる。磨瀬榛名の事はファンではあつたが、まさか心にそこまで大きな闇を抱えていた事など知る由も無かつた。

そして彼等は話題を殺せんせーについてに切り替える。ガツシユペアは自らの決断を恵に話した。それを聞いた彼女は笑みを浮かべる。

「これが俺達の答えだよ、恵さん」

「良いと思う。私は直接殺せんせーと関わつた訳じゃないけど、2人のしようとする事なら応援したいな。それに、そのやり方が清麿君やガツシユ君らしいし。私にも出来そうな事があつたら何時でも言つてね」

「ありがとうなのだ！」

恵は2人の答えに同意してくれた。だが、それを成し遂げるのは容易でない。それでも彼等には諦める選択肢は無い。ガツシユペアが腹をくくると、清麿のスマホに一通の

メッセージが届く。

「渚からじゃないか」

「なんて書いてあるのだ?」

相手は渚だ。メッセージの内容は茅野のお見舞いの誘いである。入院してから彼女の容体が良くなり、面会の許可が降りたそうだ。ガツシユペアは当然これを了承する。清磨は渚に返信すると再び恵に視線を合わせる。

「これから渚達と茅野のお見舞いに行きたい。良かったら恵さんもどうかかな?」

「カエデちゃんの……一緒に行きたいけど、私までいて大丈夫?」

恵は躊躇う。本心では彼女が心配だが、E組での問題に対して、部外者の自分が安易に首を突っ込んでよいのかと内心疑問に思う。しかし清磨は首を横に振る。

「それは問題ないよ。渚にも恵さんと一緒にいる事は伝えたから。ぜひ来てくれって言ってた、茅野も喜ぶだろうってさ」

クリア戦以降、その戦いに関わっていた者達は殺せんせーの事を知った。その事はE組の生徒達も知っている。よって恵がそれについて気を使わなくても良い。しかも彼女は茅野を含めてE組の何人かとは面識がある。断る理由が無い。

「ありがとう、ご一緒させてね」

「分かった。それから渚は他にも数人誘ってから来るって言ってたな」

「カエデと会えるのは楽しみなのだ！」

こうして彼等は、茅野のお見舞いの為に柵ヶ丘の病院を目指す。

そして病院の一室。ガツシユペアと恵は茅野がいるベッドまで訪れる。既に渚・杉野・奥田・神崎が先に来ていた。

「清麿達、来てくれたんだね」

「ガツシユ君、高嶺君。それに恵さんまで」

「カエデ、もう体調は大丈夫か？」

「うん、3学期からは学校に行けるよ」

茅野は冬休みを丸ごと病院で過ごす事になってしまったが、3学期からは退院出来る。それを聞いた清麿達はホッと胸を撫でおろす。

「見た感じ元気そうだけど……カエデちゃん、あんまり無理はしないでね」

「ありがとうございます、恵さん」

今の茅野は特に体調が悪い訳では無いが、油断は禁物だ。恵は彼女に改めて心配の声をかける。そして彼女は目線を茅野から渚に移す。

「渚君、私の事まで誘ってくれてありがとうね。カエデちゃんの元気そうな顔が見れて

安心したわ」

「そんな、とんでもないです。恵さんこそ来てくれてありがとうございます」

彼女は礼を述べた。清麿から話を聞いた時は気が気で無かったが、茅野の体調が良さそうで心底安心している。礼を聞いた渚もまた恵に感謝する。

「元氣そうで良かった、茅野……いや、雪村？」

一方で清麿は茅野を呼ぼうとする。しかし呼び名をどうすれば良いかで、彼は悩む事となる。

「ああ、高嶺君もそこで引つ掛かるんだね……呼び方は今まで通りで大丈夫だよ。そっちの方がしっくりくるし」

「分かったよ、茅野」

「清麿、このやり取りは2回目なんだよ」

「やっぱり、気になっちゃいますよね」

茅野カエデは本名では無い。それを知った清麿は彼女の呼び方をどうすれば良いか悩んでいた。渚や奥田も同じことを考えていた様だが、その心配は無用だった。暗殺を通して出来た彼等の絆を以てすれば、名前の真偽は些細な問題なのかもしれない。そして茅野は恵の方を向く。

「それから恵さん、どこまで話を聞いてますか？」

「ゴメンね、清麿君とガツシユ君から全部聞いちゃった。カエデちゃんの事も」

「謝らなくても大丈夫ですよ、私達も魔物の戦いの事を聞いてますので。恵さんがどこまでE組の事を知ってるか、分かっておきたかったんです」

恵は申し訳なさそうにするが、茅野は気にしていない。他のE組のメンバーも頷いてくれる。それを見た恵は安心する。

「でもカエデちゃんが磨瀬榛名ちゃんだと知った時は驚いたな」

「アハハ、ずっと隠してましたからね」

恵と茅野の語り合い。学生の身で芸能界に携わった者同士、お互いの苦労を分かり合える様だ。彼女達の仲がさらに親密になる。

「現役女子高生アイドルと天才子役の対談……三村あたりがテンションを上げそうな組み合わせだな」

「確かに。最初に茅野の事に気付いたの、アイツだもんな」

芸能人同士の対面を見た清麿はそう呟くと、杉野が同意してくれた。彼女達の対談は続く。

「でもカエデちゃん、大変だったよね。色々な物背負ってE組に入って……」

恵の顔が暗くなる。亡くなった姉の為の復讐心を抱えての暗殺教室への加入。中学生の身には重すぎるのではないか。恵はそう思えて仕方が無かった。しかし茅野は首

を横に振る。

「気にしないで下さい恵さん。それはお互い様です、テイオちゃんの事だつて……」

茅野がフォローを入れてくれた。恵もまたテイオが魔界へ帰った事で、大切な人と会えなくなる苦しみを知っている。テイオは魔界で生きてはいるが、次に会えるのはいつになるか分からない。テイオの名前が出た時、ガツシユペアは目線を下に向ける。自分達も最終的に、別々の世界で生きていかななくてはならなくなるのだから。

「あの子は相変わらずみたいだけどね。ガツシユ君が落ち込んでた時にまた来てくれたとか」

テイオからの救いの手。それが無ければガツシユは立ち上がれたかどうか分からない。ガツシユはその事をとっても感謝している。しかし、その話を聞いた茅野は目線を逸らす。

「ガツシユ君……その時は本当にごめんね」

「ウヌウ、カエデ。落ち込むでない」

気まずそうな顔をする彼女の前までガツシユが来た上で声をかける。彼は茅野を責める所か元気づけてくれた。そんなガツシユを見た茅野は彼を抱き上げ、ベッドに腰をかける自らの膝の上にガツシユを座らせた。

「ガツシユ君は優しいね」

茅野は嬉しそうな表情でガツシユの頭を撫でる。この休みの間に再び彼の顔を見れた事が余程嬉しかった様だ。そんな2人の様子を一同は温かい目で見守る。少しした後には茅野は渚に声をかけた。

「すごいや渚。ガツシユ君達が来る前に何か言いかけてたよね」

「ああ、そうだ。茅野には謝らないと！」

渚は茅野を止める為に、勝手にキスしてしまった事を気にしていた。彼は謝罪の言葉を述べるが、茅野は笑って許してくれた。

「何言ってるの、私を助けてくれたんでしょ？むしろ感謝してる」

「そっか……嫌われたらどうしようと思ってた」

「渚君、良かったですね」

茅野の言葉を聞いた渚は安心する。彼等はこれからも親交を深めていくだろう。しかし茅野が僅かに渚から視線を逸らした事を、神崎と恵は見逃さなかった。

「そろそろ帰ろっか。茅野さんもまだ完全には良くなってなさそうだし」

「……………そうね、カエデちゃんには万全の状態で学校に行つて欲しいもの」

2人の言葉を皮切りに一行は病室を出た。しかし恵と神崎以外の面々はきよとんと

した顔を見せる。なぜ彼女達が皆を帰らせるような事を言ったのかが理解出来ていない。そして神崎と恵は清麿達の後ろを歩く。

「恵さんも気付きましたか？茅野さんの本当の気持ち」

「うーん、何となくですけどね。でも有希子ちゃんやんが皆に帰る様に言った事で確信に変わったかな」

一同はそのまま帰路に着く。神崎と恵が察したのは茅野の想い。また神崎は、この時初めて茅野がE組と同じ目線に立った様に感じた。そして彼等が帰った後、茅野が渚の事を考えてベッドの中で悶える。しばらく彼女はその気持ちを押し殺して、演技をしなから過ごす事になるだろう。

三学期編

LEVEL. 75 分裂の時間

3学期の校舎。全員登校こそしているが生徒達の顔色は優れない。暗殺対象の正体は人間。自分達は同じ人間の命を奪おうとしていた。これからも暗殺を続けて良いのだろうかと思ひ詰める者も多い。

(やはりこうなってしまったか……)

彼等の様子を見た烏間先生は職員室で頭を抱える。彼も断片的に殺せんせーの過去を聞いていたが、それを打ち明けるべきではないのではと考えていた。現に多くの生徒達は悩み続けている。

教室内の生徒全員が着席するとビッチ先生が入ってきた。そして彼女は少しの沈黙の後、口を開く。

「アンタ達が本当はどうしたいか……よく考えなさい。それから私のような殺し方は絶対にダメ。多くを失うから」

彼女は殺し屋として多くの命を奪ってきた。自分が生き残る為に、自分の気持ちを押し殺して。そんな過酷な生活を送ってきた先生なりに、生徒達に最大限の助言をしてくれている。生徒達は黙って耳を傾ける。

「せいぜい悩みなさいな。アンタ達の中の、一番大切な気持ちを殺さない為にも」

先生はそう言い残して教室を出た。彼等には自分のような人生を歩んで欲しくない。奪いたくない命を奪う事は自らも大きな傷を負う事になる。彼等が背負うにはそれは大きすぎる。だから彼女は生徒達に助言する。自分と同じ苦しみを味わって欲しくないから。

その日の放課後、渚がE組全員を裏山に召集をかける。多くの生徒達が疑問に思う中、彼は自分の思いを口にする。

「出来るかどうかなんて分からない、でも……殺せんせーの命を助ける方法を探したい」
渚の答えは「殺せんせーを救う事」だった。勿論方法など分かりはしない。しかし先生の過去を知った以上、皆も今まで通りの暗殺対象として見る事は出来ないのではないかの考えだ。色々な事を教えてくれた先生と楽しく過ごしてきたのだから、殺すよりも助けたいと思う事が自然であると彼は言う。

「……清麿」

「ああ、そうみたいだな」

ガツシユペアは目を合わせて口角を上げる。奇しくも彼等の出した答えは渚と同じだった。2人が皆に伝えるまでもなく、渚が先に提案してくれた。恩師を助きたい。その考えは間違っていない。現に渚に賛同する生徒達も多い。

(良かった、皆……)

渚は安堵する。ガツシユペア以外にも杉野・茅野・倉橋・片岡・不破・原等の多くの生徒達が同じ事を考えてくれていた。

そうして先生を助ける方法についての話し合いが盛り上がるが、話はそう上手くは纏まらない。クラス全員が渚の意見に賛成している訳では無いのだから。中村が口を開く。

「渚……悪いけど私は反対。暗殺者と標的が私達と殺せんせーの絆、それはとても大切な事。だからこそ、何が何でも殺さないといけないと思うから」

彼女は強気な口調で言い放つ。殺意が結ぶ絆、これこそが今のE組の根幹だ。その揺らぎはクラスの崩壊にもなり得るのではないか。中村はそう考えて真っ先に反対意見を述べた。周りの空気は一変する。すると中村の後ろに寺坂・吉田・村松が立つ。

「助けるつつつても、俺等にやれる事なのか？奥田や竹林の知識だつてせいぜい大学生

レベル、そんな方法を編み出せる確証はねえ……まあ高嶺のチート能力を使えばその限りじやねーかも知んねえがな」

寺坂が渚の発言を否定した後に清磨の方を向く。【アンサーカード答えを出す者】を使えば殺せんせーを助ける方法も分かるかもしれない。しかし、それが分かってもE組全員が受け入れられるかは別の問題。寺坂もそれを理解している。

「そうだな……この力で答えを導き出しても今の皆が納得するとは思えない。だから俺もそうはしてこなかった」

殺せんせーを殺すにしても助けるにしても、クラスが一丸となつて結論に辿り着かなければならない。清磨も内心では殺せんせーを助けたいと思つているが、今は【アンサーカード答えを出す者】を使うべきでは無い。

「俺等だつて渚の言う事を考えなかつた訳じやねえ。けどな、全員でその方法を探して結局見つかりませんでしたとかシャレになんねーだろ」

「せつかく身に付けた暗殺の力を使わずに無駄にして、タイムリミットを迎える事になるからな。そんな半端な結末を、あのタコが喜ぶとは思えねえ」

吉田と村松が真剣な表情で意見を述べる。答えを得られないまま、何も出来ないまま卒業を迎えるなどあつてはならない。かつては暗殺に対して後ろ向きだった寺坂グループだが今は違う。暗殺について、クラスについてしっかりと考えた上で自分の気持

ちをぶつけている。

「てか渚君、調子に乗りすぎでしょ。一番暗殺の才能があるくせに殺すのをやめようとか、何考えてる訳？」

カルマが言い放つ。渚を睨み付けながら。今のカルマは明確に渚を軽蔑している。クラスの誰よりも暗殺の才能を持つ張本人がそれを投げ出そうとするのだから。その事が彼には、才能が無いなりに必死で暗殺を頑張ってきた者達への冒瀆に思えて仕方が無い。

「渚君さあ、力の弱い人間の気持ちをおかたてないんだろ。だからそんな事が言えるんだ！」

「そうじゃない！殺せんせーを助けたい正直な気持ち!!カルマ君は殺せんせーが嫌いなのだ!!今まで殺せんせーと過ごしてずっと楽しかったじゃんか!!」

「それはタコが皆の殺意を鈍らせないようにしてくれたからだろう!!その努力もわかんなーのに半端な事言い出してんじゃねーよ!!頭小学生か!!」

それぞれの口調が強くなる。カルマは渚以外が同じ事を言い出した場合、ここまで感情的にはならなかっただろう。彼はE組へ進学する以前から渚の持つ底知れぬ何かに気付いていた。それこそが「暗殺の才能」。渚相手にケンカや勉強で勝っても、彼にはその才能が無い。そんな渚が暗殺を投げ出す行為がどうしても許せない。だからこそ

渚の言動はカルマの逆鱗に触れた。一方で渚も負けじと彼を睨み付ける。

「何その目。小動物のメスが逆らおうつての？」

カルマはこれまで見せた事の無い怒りの表情を渚に向ける。カルマが吐き出す渚への数々の暴言。多くのクラスメイトが見ている事しか出来ない状況の中、ガツシユが歯を食いしばる。渚とカルマの因縁。それは殺せんせーが柵ヶ丘に来る以前からのものであるが、そんな事を知らないガツシユは遂に動き出す。

「そんな言い方……しなくとも良いでは無いか!!渚だつていい加減な気持ちで言い出した訳ではなからう!!」

(ガツシユ……)

彼は2人の間に割つて入る。カルマと渚の言い合いを黙って聞いていられなくなつた様子だ。そんなガツシユに渚は視線を移す。そしてカルマはつかさず怒りの矛先をガツシユに向けた。

「へえ……ガツシユ君、渚君の味方をするんだ。まさか君まで殺せんせーを助けようとか言わないよね？」

カルマとガツシユの怒気がぶつかり合う。そしてカルマは察する。ガツシユも殺せんせーを助ける方法を探そうとしている事を。その事はさらに彼をイラつかせる。

「?でしよ……正気なの?」

「私も冬休みの間、考えていたのだ。殺せんせーも皆と同じ人、しかも地球の滅亡は先生が望んでいる訳では無い。それならば本当に命を奪つても良いのかと」

ガツシユは考えを吐露する。殺せんせーの過去が明らかになった以上、これまでと同様に先生の命を狙い続ける事は出来ない。それを聞いたカルマは舌打ちをした後に反論を続ける。

「何それ……ていうかガツシユ君さあ、優しい王様を目指してるんだよね？もしも中途半端な事しかして、期限までに殺せんせーを殺す事も地球の滅亡を止める事も出来なかったら皆死ぬんだよ？そんなんじゃないやあ優しい王様になれなくね？」

「それは分かっている!!」

正論。カルマの言う事は正しい。殺すにしても助けるにしても期限以内に成し遂げられなければ地球は終わる。そうなった時点でガツシユは優しい王様にはなれない。だからカルマはその考えを認められない。ガツシユもそれは理解している。しかし、「それでも私は殺せんせーを助けない!!先生の事も大切だから!!大切な人1人助けられずして、何が優しい王様か!!」

ガツシユは言い放つ。殺せんせーの命をも救つてこそその優しい王様だと。彼はファードでの戦いの時も、地球の滅亡か仲間の命の選択に迫られた。しかしガツシユは仲間と共に困難を乗り越え、どちらも失わない結果を得る事が出来た。だから彼は今回も

どちらかを切り捨てる事はしない。ガツシユの言葉を聞いた清麿は口角を上げる。しかしカルマは一步も引かない。

「確かに君達の力は大きい。でもさ、何でも自分達の力だけで思い通りになるとか」

「そんな事を考えてはおらぬ!!」

ガツシユはカルマの言葉を即座に否定する。ガツシユとて自分だけで殺せんせーを助けられるとは思っていない。

「これは皆の……E組の力を合わせなくては成功させる事は出来ぬ!!」

殺せんせーを助ける。口では簡単に言ってもその方法を見つける事は容易で無い。クラス全員が協力して初めてそれにありつけるかどうか。それすらもやってみなくては分からない。

「だから皆!!殺せんせーを助ける為に力を貸して欲しいのだ!!」

ガツシユは深々と頭を下げた。E組全員で力を合わせてもらえる様に。それを見た渚は後悔する。ガツシユの行動は本来、言い出しっぺである自分が行わなければならぬ事だったと。そして彼も頭を下げる。

「僕からもお願い!!皆、協力して!!」

渚は罪悪感に苛まれる。殺せんせーをどうするかについて、自分の事しか考えられていなかったと。他の皆も同じに悩んでいるのに、自分の意見で手一杯だった事を恥ずか

しく感じた。そんな渚とガツシユの様子をカルマは見つめる。

「なるほどね、2人が半端な気持ちで言い出した訳じゃないのは理解出来たよ」

ここで彼は初めて渚とガツシユの言動を受け入れる。2人の思いは伝わった。しかし、理解を示す事とそれを肯定する事は別問題。

「でも……それでも力は貸してあげられない。あのタコを殺すべきだと思ってるから」

カルマの意志は変わらない。しかし今の彼の目からは軽蔑・怒りと言った負の感情は消えていた。渚とガツシユの全力の思いにあてられ、不用意に暴言を吐くような真似はしなくなる。しかし、

「俺に言う事を聞かせたいんだつたらさあ、俺を倒してみたら良いんじゃない？」

カルマの挑発。お互いに意見を曲げる事が無い以上、力づくで相手に言う事を聞かせる以外の方法はない。すると渚が一步前に入る。

「渚、お主……」

「ごめんガツシユ。最初に皆に頭を下げるのは僕の役割だったのにね……だからこの役は、カルマ君とケンカして勝つのは僕が引き受ける」

心配の眼差しを向けるガツシユを差し置いて渚は臨戦態勢を取る。それを見たカルマは渚に殴り掛かろうとする。一触即発かと思われたその時、大量の武器を抱えた最高司令官のコスプレをした殺せんせーが登場した。

「そのケンカは大いに結構。ですが暗殺で始まったこのクラス。決着をつけるのはこれでどうでしょう?」

「(((事)の張本人が仲裁案を出してきた!!)))」

生徒達が内心ツツコミを入れてみると、烏間先生とビツチ先生も合流した。そして殺せんせーが説明を始める。赤色と青色に分けたペイント弾とその色のインクを付けた対先生ナイフ。そしてチーム分けの旗と腕章が用意された。

「先生を殺す派は赤、殺さない派は青。この裏山を戦場にチーム毎で戦い、相手のインクを付けられた人は死亡退場。相手チームを全滅か降伏させるか、敵陣の旗を奪ったチームの意見をクラス全員の総意とする。どうですか?」

自分の生死が関わる状況でも殺せんせーは楽しそうだ。生徒達が全力で決めた答えならば、どのような物でも尊重すると言う。しかしクラスが分裂したまま終わる事は何としても避けたい。その為の仲裁案だ。それを聞いた皆は頷く。全員がこの方法を受け入れた。

「それから高嶺君とガツシユ君。君達は呪文・アンサーカー【答えを出す者】・マントの使用は禁止でお願いします」

「分かった (のだ) 」

先生はガツシユペアに制限を設けた。彼等の力は大きく、順当なハンデと言える。そ

れでもガツシユの魔物としての身体能力と清磨の頭脳は脅威だが、他のE組も鍛えられた暗殺者揃い。例え倒す事が出来なくとも、一発彼等に攻撃を当てるだけならば十分に可能だ。そしてガツシユを含めた多くの生徒達が色を決めていく。

(青チームにはガツシユがいるが制限も多い。ふむ……)

まだ武器を取っていない清磨は心の中で呟く。ガツシユ一人の戦力は大きいが、赤色には各分野のスペシャリストが集まる。男子の数も多い。

赤チーム カルマ・岡島・岡野・木村・菅谷・千葉・寺坂・中村・狭間・速水・三村・村松・吉田・イトナ

青チーム 磯貝・奥田・片岡・茅野・神崎・倉橋・渚・杉野・竹林・原・不破・前原・矢田・ガツシユ

ちなみに律は協調の観点から考えて中立の立場を取り、烏間先生と共に戦いを仕切る役割を引き受けた。

「残るは高嶺君だけですなあ」

「おつとそうだな。出遅れてしまった。だが俺の答えは決まっている」

殺せんせーに急かされた清磨は前に出て青色の武器が置かれる箱の前に立つ。クラ

ス全員の意見を聞いた後でも彼の気持ちは揺るがない。

「俺は確かに殺せんせーの暗殺の為に理事長に推薦された。だが先生の過去を知った時に考えたんだ。俺自身が本当はどうしたいのかを。何が一番正しいのかまでは正直分からん。そして出した結論は殺せんせー、アンタには生きていて欲しい」

ガツシユペアは理事長の推薦でE組に来了。しかし事情が変われば彼等の考えも変わる。

「俺とガツシユが理事長から受けた依頼は、地球の滅亡を防ぐ為に超生物を殺してくれだ。だが実際はどうだ？殺せんせーは超生物なんかじゃなくて俺達にとって大切な人だ。だから殺さずして地球の滅亡を防ぐ方法があるのなら、諦めたく無い」

ガツシユペアの目的は地球の滅亡の阻止。殺せんせーの命を奪わずにそれが出来るのなら、当然その道を選ぶ。

「そしてこれはガツシユのパートナーとしてでは無く、1人のE組の暗殺者として出した答えだ。文句は言わせん」

清麿はそう言つて青色の武器を取る。ガツシユを王にする為では無い。彼自身の意志に基づいた答え。その否定は誰にもさせたくない。そして清麿が元の場所に戻ろうとすると、カルマが彼に声をかける。

「良かったよ高嶺君。ガツシユ君が殺せんせーを助けたいから青チームに入るとか言い

出さなくて」

「当然だ。ガツシユがどうしたいか以上に、俺自身が殺せんせーを助けたいと思った。だからこつちを選んだ。それに先生には、まだやってもらいたい事がある」

「へえ」

カルマは口角を上げる。清麿は自分の意志でカルマと敵対する道を選んだ。だからこそ倒しがいがある。ただガツシユに引つ張られるだけの清麿なら相手にする価値も無いと、彼は考えていた。

「やってもらいたい事、ねえ……まあ今は良いや。取り敢えず全力で潰しに行くけど、文句ないよね？」

「それはお互い様だ。悔いを残さない戦いにしよう」

カルマの宣戦布告。彼は学業において遂に清麿に勝つ事が出来なかった。他の分野でもどれだけ清麿と張り合えるか。カルマは渚だけでなく、この戦いで清麿をも打ち倒そうと心に決めている。こうしてE組全員がチームを決めた。

各チームに別れて作戦会議が始まった。チーム毎の連絡は超体操着のフード内に仕込まれた内臓通信機が使われる。また超体操着の機能として即座に迷彩を塗る事が出

来る。赤チームは菅谷、青チームは彼に塗り方を教わった倉橋がその役割を引き受けた。しかし超体操着を持たないガツシユはこれらの恩恵を受けられない。これも彼が抱えるハンデの1つだ。

「ガツシユ、お前はカモフラージュとして裏山の葉っぱをマントに着ける事にしよう」

「ウヌ……清麿、頼むのだ」

清麿がガツシユにカモフラージュを施していると、渚が倉橋に裏山の迷彩とは別の迷彩を施してもらっているのを目撃する。それを見た清麿は口元に笑みを浮かべた。渚はとんでもない事をやろうとしていると。全員の迷彩が塗り終わると、磯貝が清麿に呼びかけた。

「多分向こうはカルマが指揮を取ってくる。アイツは頭がキレるからな。こっちの指揮官は高嶺がやるか？」

他の青チームの面々もそれに賛同する。清麿の頭脳を以てすればカルマの指揮にも対抗出来る。しかし清麿は首を横に振った。

「それは戦況を見て臨機応変に決めて行こう。俺達皆が考えた作戦で赤チームを倒す」

清麿1人で全てを仕切るつもりは無い。あくまで青チーム全員が力を合わせる事に彼はこだわる。清麿は意見を出していくが、それは他の皆も同じ。彼等は作戦を考えて本番に備える。

LEVEL. 76 サバイバルの時間

青チーム、赤チームともに準備が完了する。そして各々が配置に着いた事を烏間先生が確認した。

「では始めよう。クラス内サバイバル……開始!!」

烏間先生の合図と同時に2発の赤い凶弾が青チームを襲う。撃ったのは速水と千葉。標的は竹林と片岡。いきなり絶体絶命と思われたが、ギリギリの所で彼等はそれをかわした。カルマの指示で青チームのブレイン2人を開幕早々退場させる狙いだったが、それは失敗に終わる。

「ふう……間一髪だね。危なかった」

「高嶺君が事前にアドバイスをくれなければやられていたわ」

しかし清磨はそれを読んでいた。E組髓一のスナイパー2人が敵にいる。その射撃は最も警戒すべきであろう。そこで清磨は青チーム全員に狙撃が当たりにくい場所を待機するよう命じた。清磨は速水と千葉の射撃能力と周りの環境を全て計算した上で、彼等に安全地帯を教えたのだ。

「ナイスだ。竹林、片岡」

清磨は親指を上立ててgodの合図を2人に出す。清磨は弾が当たりにくい場所を皆に教えたが、それでも千葉と速水の射撃は侮れない。彼等ならそんな状況でも狙いを外さないかもしれない。しかし竹林と片岡は清磨の助言があつたとはいえ、それを見越して自分の判断で射撃をかわす事が出来た。

「じゃあ、あれをやるうか」

竹林はペイント弾を仕込んだ筒を取り出すとそれを地面に置いた。中には爆薬が仕込まれており、それを使って赤チームの溜まり場に青のインクを降らせる手はずだ。しかし、

「ちよつ、何なの!!」

不破が何かに気付いて指差す。その先には一機のドローンが飛んでいた。イトナが作った物であるが、それを見た清磨の顔色が変わる。

「皆ー!!それから離れる!!」

清磨の予想通り、そこからは赤のインクが大量に発射された。青チームはそれをよけようとするが、不破と竹林に赤のインクが命中した。イトナの超高動機ドローンが猛威を振るう。

「うう、何てこと……」

「やられてしまったか」

死亡した2人は悔しそうな表情を見せる。ドローンは飛び回り続け、今度は清麿に狙いを定める。清麿は再び回避の体勢に入ろうとするが、突如何かがそれに命中し、ドローンは地上へと落ちる。

「イトナの奴、とんでもねーもん作りやがって！」

杉野が野球で使う軟球をぶつけたのだ。彼はそれを殺せんせー暗殺に使う為にも使っており、BB弾も仕込まれている。球を直接クラスメイトにぶつける訳にはいかないが、ドローンを落とす事くらいなら問題は無い。

「杉野、助かったのだ……」

杉野のファインプレーにガツシユ達青チームは感心する。そして清麿は竹林が作った砲台に近付く。

「相手の攻めが落ち着いた所で、取り合えずコイツを敵陣営にお見舞いしよう」

清麿が死亡した竹林の代わりに筒の下の台にあるスイツチを押すと、青いペイント弾が発射される。そして敵陣の上空からインクの雨が降り注いだ。

「これで敵も一網打尽なんじゃねーの？」

「いや、どうだろうな。何人やれる事やら」

前原が自信満々に言い放つが、清麿の表情が固い。そして彼の心配は的中する。青のインクが広範囲に降り注いだのにも関わらず、死亡したのは狭間と菅谷だけだった。赤

チームもこの展開を読んだうえで動いていたのだろう。また清磨はこの場に青チームの1人がいない事に気付く。

「ガツシユ、杉野。一緒に来てくれるか？他の皆は磯貝と片岡の指示に従ってくれ！くれぐれも1人にはなるな！」

「お、おう……そつちは頼むぞ高嶺！」

清磨はガツシユと杉野を連れてその場を離れる。磯貝は清磨の意図を完全に理解する事は出来なかったが、彼の指示に従って片岡と共に陣形を組み直す事にした。

そこから離れた場所では、岡島と千葉が青チームの女生徒にやられていた。

「嘘だろ……いつの間に背後に……」

「神崎さん、オンラインの戦争ゲームもやりこんでいたみたいだぞ」

2人を死亡させたのは神崎だ。彼女はゲームのお陰で狙撃手が潜みやすい場所及び守備に隙間が出来やすい地形を全て熟知している。そんな彼女は進撃を続ける。

その頃神崎は旗を狙う為に、フィールドの外側から回り込んでいた。中央突破は難易

度が高い為、彼女が走るルートで攻めるのが定石だ。しかしそれを理解しているのは神崎だけでは無い。カルマがそこに待ち伏せており、足で木にぶら下がりながら彼女を捕えようとする。その時、

『伏せろ、神崎』

神崎に通信が入ったと同時に一発のインクがカルマを襲う。カルマはつかさず体を起こしてそれを避けるが、神崎が地に伏せた事で彼女への攻撃は出来なくなる。

「チツ」

カルマは舌打ちをした後に、茂みに隠れて姿を消した。そして間もなく神崎と清麿達が合流する。

「神崎さん、間に合ってよかった」

「ゴメンね、一人で出しゃばっちゃったかな？」

杉野は安心した様にそう言うが、神崎は申し訳なさそうな顔を見せる。単独行動した結果、カルマに殺されかけたのだから。しかし彼女を責めようとする者は誰もいない。

「とんでもない、むしろよく千葉を倒してくれた」

「有希子、2人も倒して凄いのだ！」

ガツシユペアは彼女を褒める。スナイパーコンビの片割れを倒した事実は大きい。現状は青チームに分があると言える。しかし油断は大敵。彼等は今後の方針を話し合

う。

「まずは敵の数を減らそうぜ。今のままじゃ旗は取るのは無理だろ」

杉野の言う通り、敵を倒して攻撃されるリスクを減らす事で初めて旗の奪取が現実的となる。赤チームの誰を最初に倒すべきか。司令塔となり得るカルマか中村、残ったスナイパーの速水、機動力トップクラスの木村・岡野コンビ、防御が得意の寺坂組、ドローン使いのイトナ。赤チームは強敵揃いだ、清麿は意外な人物の名前をあげる。

「……三村を倒しておきたい」

「三村君？」

清麿を除く3人は怪訝な顔を見せる。単純な戦闘能力で言えば、他の赤チームと比べて三村は高くない。しかし彼の長所はそこでは無い。清麿が話を続ける。

「ガツシュ、菅谷達と美術館に行った時の事を憶えているか？その時にアイツ、テレビ業界のプロデューサーなどの仕事に就きたいって言ってたんだよ」

「ウヌ、美術館は楽しかったのだ！」

「そういう事を言ってるんじゃない！」

清麿はガツシュにツツコミを入れつつ話を続ける。彼は将来の夢に向けて広い視野を持つよう心掛けている。三村はそれを活かして死神を欺いた事すらある。清麿はその能力が、青チームにとって脅威になると決め打った。

「例えばあそこで三村が青チームを監視するとどうなると思う？」

清麿は鳥間先生の左後方に見える高台を指差す。彼の言う事にガツシユと杉野はピンと来ていない様子だが、神崎が何かを察した様に口を開いた。

「三村君の広い視野で、私達の場所が筒抜けになるって事？」

神崎の解答を聞いた清麿が頷く。赤チームの指揮をカルマが取る以上、彼は三村の長所に気付くはずだ。

「正解だ。そんな事になれば俺達は圧倒的不利な状況に追い込まれる。だから他の連中も最大限に警戒しつつ三村を倒す。それにフィールド全体を見渡せられるのはあの高台だ。仮に三村がいなくても、そこを占拠出来れば悪い様にはならん」

彼等の目的地は決まった。4人は周りに注意を払いながら高台を目指す。

清麿達は磯貝チームと連絡を取りながら高台を目指す。その際に片岡と、自陣の旗付近で無人トラップを仕掛けていた原が死亡した事を知る。そして彼等は目的地付近に辿り着いた。

「ウヌ……向こうから2人分の匂いがするのだ」

「三村とその護衛だろうな。赤羽の奴、用意周到なこった」

カルマは青チームが三村に気付く事を見越してもう一人をそこに配置していた。彼等は話し合つた結果、そのもう一人はガツシユが相手取る事になった。

「ガツシユ、気を付けろよ。お前に施しているカモフラージュは激しく動く簡単に落ちる。そうなれば遠距離からの射撃の的ではない」

「分かつたのだ」

助言を聞いたガツシユが高台に近づく。すると木の陰から2発の赤いインクが放たれた。しかしガツシユはそれをかわす。そして彼はインクを放つた敵に戦いを挑む。その相手は木村だ。木村の機動力に加えてガツシユはカモフラージュを落とさないように動きが制限されている。魔物だからと言つて一概にガツシユが有利とはいえない状況だ。

「頼んだぞ、ガツシユ」

「じゃあ、三村君は私が撃つね」

杉野が呟くと、神崎が前に出た。

「げっ、神崎さん！」

神崎が銃から青いインクを放つ。三村が気付いた時はすでに手遅れ。彼にそれが命中する。しかし同時に神崎には赤いインクがつけられていた。速水の遠距離射撃だ。

「それじゃあ、後はよろしくね」

「神崎、お前……」

「そんな、神崎さん……」

彼女が笑みを浮かべながら2人に託す。この時清磨と杉野は察した。何故彼女が率先して三村を倒しに行つたかを。この場の青チームの中で、単純な戦闘能力なら神崎が劣るだろう。それが分かつた彼女は速水の射撃圏内にもかかわらず、自分の身と引き換えに三村を撃ちに行つたのだ。そして清磨は次の手を考える。

「速水の射撃は俺が食い止める。木村はガツシユに任せる。杉野、お前は新たな敵が来ないかを見張つてくれ」

「食い止めるってどうやって……」

「そんな物は決まってる」

指示を聞いた杉野の頭に疑問符が浮かぶが、清磨は自信ありげな表情で銃を取り出す。しかし彼が使おうとしているのはいつものハンドガンでは無く、ライフル型のそれだった。

「速水相手に銃撃戦かよ」

杉野は苦虫を噛み潰したような顔を見せる。銃撃戦は速水の一番の得意分野。彼女の土俵に清磨は堂々と上がりこもうとしている。しかし清磨が一発インクを撃つと、速水の射撃の頻度は下がった。

「速水の動体視力とバランス能力……インクを当てるには至らなかつたか」
「いや、牽制出来てるだけでもスゲーよ」

射撃をかわされた清磨は悔しがるが杉野は感心する。杉野は清磨も器用ではあるが、彼が銃撃戦で速水相手にここまで戦えるとは思っていなかった様子だ。清磨はもう一発放つ。

（これもかわすのか……それに……）

清磨は周りの環境を全て計算して速水に狙いを定めるが、彼女を捕えるのは容易では無い。それどころか速水はインクをかわしつつ、どのような体制でも反撃を行っていく。不安定な木々の上でも彼女の射撃の命中率が下がる事は無い。

（アイツの身体能力を活かした射撃が強力すぎるな……だが……）

清磨は銃撃を仕掛けながら手応えを感じている。自らの射撃能力の向上を。実戦を経て清磨も成長を遂げている。

場面は木の陰の速水に移る。清磨の射撃をかわす事は出来たが、その正確性には彼女も驚いていた。

（高嶺の射撃が……まで正確とは……呪文や【答えを出す者】^{アンサーカード}だけがアイツの強みじゃな

いのは分かってたけど)

速水は怪訝な顔を見せる。清磨は訓練時も赤い本を手放す事は無かった。それは射撃の時も同様。彼は常に片手が塞がった状態だった。しかし今は違う。呪文の使用が禁止された事で彼は本を持つ必要が無い。清磨の両手がフリーになった事に加え、本来彼が持つ計算能力と空間把握能力。これらによって清磨の射撃能力は格段に増していた。

(気を抜いたらやられるわね……でも千葉には及ばない)

速水は再び清磨の射撃をかわす。清磨の隠れた刃が露わになった瞬間だが、遠距離射撃の経験値なら速水と千葉が勝る。彼女は変幻自在に木の上を動き回り、自らも銃撃を加えていく。しかし射撃を回避出来るのは清磨も同じだ。

(高嶺に当てるのも簡単じゃないみたいね。長引かせるのも得策じゃない。なら……)

速水は清磨の射撃能力の向上に気付く。このまま勝負を続けるのは彼女にもリスクがある。そこで速水はある事を思いつく。

場面は再び清磨に戻る。木に体を隠しながらの攻撃。彼は射撃の慣れを感じているが、油断は出来ない。少しでも気を抜けば、それは敗北に繋がる。

（くっ……もう少し顔を出したいが、そんな事をすればたちまち赤いインクの餌食だ。あともう一步なの！）

樹木に隠れながら清磨は悔しがる。速水の射撃は苛烈を極める。清磨も反撃して牽制はしているが、彼女を仕留めるには至らない。樹木からギリギリ顔を出さない位置での射撃が精一杯だ。その一方で杉野は周りを警戒しながら上を見渡す。すると上空では、2人の小柄な女生徒によるハイレベルなナイフ術での対決が繰り広げられていた。茅野と岡野の対決だ。

（茅野の奴、岡野と互角にやり合ってやがる！）

茅野の身体能力は触手のせいで鈍っていたが、今はその憂いも無い。岡野の足につけられたナイフの連撃も難なくかわして見せる。そして2人は清磨の存在に気付く事無くその場を去った。杉野は一瞬だけ彼女達の方に注目するが、その隙を速水は見逃さない。赤いインクが清磨では無く杉野目掛けて放たれる。

「わりの、高嶺。喰らっちゃまった」

杉野が悔し気な顔を見せる。清磨にインクを当てられない事に痺れを切らした速水は、隙を見せた杉野に狙いを変えたのだ。杉野も極力射撃が届かない場所で清磨の護衛をしていたが、一瞬だけ意識が逸れた事が致命傷となった。

「気にしなくて良い。速水を仕留められなかった俺が悪い（リスクを冒しても前に出

るべきだったか……)」

清麿は安全策を取った結果、杉野が赤いインクを受ける事となった。彼は顔をしかめる。しかし、その後からの速水の銃撃が来ない。彼女もまた清麿の射撃を警戒して、杉野を倒した後に撤退した。その時に速水が非常に悔しそうにしていた事は、本人しか知らない。

(1人になってしまったか……：そういえば茅野と岡野はガツシユ達と同じ方に向かったな。ひとまずそこに進むか)

清麿はガツシユと茅野の援護に向かう。

時は少し遡る。清麿が速水と銃撃戦を繰り広げていた一方で、ガツシユは木村を追いかけ回していた。

「ゲツ……！」

「ウヌー！また外したのだ！」

ガツシユと木村はハンドガンを持ちながらお互いに撃ち合う。木村は何度か樹木に隠れてガツシユを狙おうとするが、彼の嗅覚によってその場所は筒抜けだ。しかしガツシユは射撃が得意では無く、木村に攻撃を当てられない。

(隠れてもガツシユにはバレる！それなら……)

(本当はナイフを使いたいのだが、接近戦はリスクが高いのだ！)

木村の身体能力が高くて、まともに一対一で戦えばガツシユ相手は分が悪すぎる。ガツシユもまたナイフをもって懐に飛び込みたい所であるが、それでは彼の体が露呈してしまう。その隙を速水は見逃さない可能性が高い。彼女なら清麿の銃撃をかくぐつてガツシユに狙いをつける事すらやつてのけてもおかしくない。

「どうしたガツシユ！ナイフは使わないのか？」

木村はガツシユを挑発する。まともな戦闘ならガツシユに勝ち目は無くとも、一瞬だけ隙を作らせる事なら可能だ。その隙を木村又は他の赤チームがつければ、ガツシユを退場させられるのだから。

「ヌウ……清麿に言われておるからの……」

ガツシユは小声で呟く。清麿の助言。ガツシユは超体操着による迷彩を施せていない為、他の生徒と比べて居場所が露呈しやすい。清麿に施されたカモフラージュも激しい動きをすれば取れてしまうだろう。そうなれば遠距離からの攻撃の餌食だ。だから安易にナイフを用いた接近戦をするべきでない。そう彼は指示を受けていた。少しの沈黙の後、ガツシユと木村は決断を下す。

「ならばこの一撃で！」

2人は同じタイミングで体を樹木から露呈させ、お互いに銃口を向けた。その時、上から2人の女生徒が降りて来る。

「ウヌ、カエデー！」

「岡野じゃねーか！」

先程まで上空でナイフ対決を繰り広げていた茅野と岡野が合流する。少しの間無言でそれぞれ敵を睨み合うが、先に岡野が口を開く。

「(ト)なら速水さんの射撃の範囲外だよ、かかってきたら？」

彼女の発言の真偽は不明だ。ガツシユも茅野もうかつに信じる訳にはいかない。しかしいつまでも動きを止めていても仕方が無い。各々は臨戦態勢に入る。

「私が掩護する。ガツシユ君、ナイフ使って良いよ！」

茅野が銃を取り出すと同時に青いインクを放つ。それが開戦の合図となり、ガツシユはナイフを取り出して木村と岡野に突っ込む。

「ガツシユ！今度こそ勝たせてもらうよ！」

岡野もまたナイフを構えてガツシユに迫る。単純な力比べになれば当然ガツシユが勝る。そこで岡野は身軽さと木村との連携を活かしてガツシユに一撃を当てようと狙う。そしてガツシユの意識が岡野に向かった事を木村は見逃さない。

(今だ!!)

木村は銃を構える。そして彼はガツシユにハンドガンに向けたが、彼は自身に青いインクが迫った事に気付く。

「させない！」

「うわっ、あぶねー！」

木村はギリギリで青いインクをかわすが、茅野の猛攻は止まらない。彼女は木村や岡野にも引けを取らない身体能力を隠し持っていた。茅野の連射は続く。木村がかわしながら、同じくハンドガンで赤いインクを放つ。しかし茅野はそれらを避け続ける。

その頃岡野は木の上で、足にナイフを装備してガツシユに足技を仕掛ける。彼女の技により、十数本のナイフの蹴りがガツシユに襲い掛かるようにも見える。しかし当たらない。

(全部かわされてる!!このままじゃヤバイ!!)

岡野は攻撃一辺倒で少しでもガツシユを近付かせない様にする。防御に回った瞬間に敗北は決まる。それ程に魔物の身体能力は恐ろしい。

「ひなた……攻撃が速くなっていくのだ!負けてられぬ!」

ガツシユの目の色が変わる。彼は本気を出す決断をした。体のカモフラージュに気

をつかって手加減をしていれば勝負が長引く。その間に茅野が木村に負けるかもしれない。戦いではいつ不測の事態が起こるか分からない。だからガツシユはリスクを冒してでも、この一撃で岡野を倒す事を決めた。

「嘘！このスピードは！！」

ガツシユの速度が増す。岡野の足技を全て紙一重で見切る。そして彼は距離を詰め、岡野の懐まで飛び込んだ。

「これで決めるのだ！」

ガツシユはナイフを使い、一瞬で岡野を切り裂く。それと同時に彼女は地面に尻もちをつく形で転落した。ガツシユが岡野の前に立つ。

「悔しい、また勝てなかった……」

「ひなた、強かったのだ！」

ガツシユはしゃがみ込む岡野に手を差し伸べる。その手を彼女は取ると、そのまま立ち上がって言い放つ。

「次こそ負けないから！」

「ウヌー！」

岡野はそう言い残してその場を去った。しかし彼女はガツシユに負けても、どこか清々しい顔をしていた。ライバルと全力で競う事が出来たからだろう。岡野に後悔は

無い。彼女のそんな表情を見たガツシユも嬉しそうにする。そして彼は嗅覚を頼りに茅野と木村の方に向かった。

LEVEL. 77 決着の時間

「ガツシユ！いつの間に!!」

岡野を倒したガツシユは木村の後ろに回り込む。そしてナイフで彼の背中を切りつけた。

「ガツシユ君!」

茅野がガツシユに駆け寄る。岡野・木村と言う強敵2人を倒した事による安心感は大きい。彼女はホツとしたような表情をしていた。

「カエデ、やったのだ!」

ガツシユと茅野はハイタッチをする。そんな光景を見ていた木村は悔しがりながらも、どこか満足気な顔をしていた。全力を出し切れた事の喜びが大きいのだろう。

「お前等の本気、しかと見届けたぞ。じゃあな」

「ウヌ!」

木村は2人から離れていく。そして彼とは入れ替わりで、清麿がガツシユと茅野に合流した。2人の勝利を察した清麿は笑みを浮かべる。

「2人共無事だったか……おっと、ガツシユはカモフラージュをやり直さないとだな」

「あ……高嶺君！」

「清麿！」

清麿は早速ガツシユにカモフラージュを施した。それが終わった後、彼等は今後の方針を話し合う。

「陽菜乃ちゃんがやられちゃったんだよね……」

茅野が岡野と戦う前、倉橋が岡野に負けた場面に遭遇していた。そこから彼女達の戦いが始まったのだ。清麿は考える素振りを見せる。

「敵味方、人数がだいぶ減ってきているな……赤チームも動いてくるかもしれない。まずは磯貝に連絡を取ってみよう」

清麿の提案に2人が頷く。両チーム脱落者が増えて来た。そろそろ旗の奪取が視野に入る頃合いだ。清麿は磯貝に内戦を繋ぐ。

「磯貝、今こっちはガツシユと茅野の3人だ。そっちはどうだ？」

『奥田がやられた。前原・矢田と共に旗を取りに行きたい所だが、速水の射撃が厄介過ぎてな……』

清麿は苦虫を噛み潰したような顔をする。もしも自分が速水を仕留められていれば、

この様な事にはならなかったのではないかと。しかし現状を嘆いていても仕方が無い。彼は次の策を考える。

「そつちにいる敵は速水だけか？」

『いや、寺坂がいるな。アイツだけでも倒しておきたいが、迂闊に出れば速水にやられる』

「……そうか」

清磨は考える。速水は強敵だ。それに加えて守りの要の寺坂。彼は当初吉田・村松と共に人面岩の陰で防御に徹していたが、予想以上に赤チームの人員が減少した。そこで守りは中村と交代する形で彼は速水の護衛役を引き受けた。そして彼は一つの決断をする。

「磯貝……3人で速水と寺坂は食い止められそうか？」

清磨の提案。磯貝達に速水・寺坂を抑え込んでもらう事。特に速水の射撃を早急に止めない事には自由に動き回る事すらままならない。神崎が早々に千葉を倒していなければどうなっていたか。清磨はスナイパーの存在に頭を悩ませている。

『どうだろうな、あともう1人いれば大分楽だが敵は他にもいる。だが高嶺達は旗を守る』

「いや……その必要は無い」

磯貝の発言を清麿は遮る。彼は旗の守りは要らないと言い切った。内戦越しの磯貝は勿論、その場にいるガツシユと茅野も怪訝な顔を見せる。

『原の仕掛けた無人トラップか？だがそれだけじゃ心許ないと思うぞ』

原は赤いインクを受ける寸前まで、青チームの旗の周辺にトラップを仕掛け続けている。そこには人が関与するまでもなく発動する物もいくつかある。確かに足止めにはなるが、無人の状態で食い止められる時間はたかが知れているのではないか。磯貝はそう考えるが、清麿の自信は揺るがない。

「当然それもある。だがそれ以上に……俺達には、最強の“死神”が味方にいる」

彼は言い放つ。青チームに所属する死神、渚の存在を。彼の暗殺の才能を以てすれば、旗の守りは必要無いのだと。彼の存在を聞いた一同は納得する。今どこに潜伏しているか誰にも分からない渚。彼がこのまま大人しくしているとは思えない。

『分かった。それなら俺達が速水と寺坂を倒しにかかるが、その間にお前達で旗の奪取するって事で良いな？』

「ああ、その作戦で問題ない」

『健闘を祈る』

「お互いにな」

やる事は決まった。旗の守りは渚に任せる。そして磯貝チームは速水と寺坂を引き

受ける。その間にガツシユペアと茅野は磯貝達の戦場よりもさらに外側を回り込んで旗を奪取。作戦を聞いた茅野とガツシユは頷く。

ガツシユペアと茅野は旗を取りに向かう。青チームの勝利の為に、殺せんせーを助ける為に。今は磯貝達が速水を引きつけているだから遠距離射撃の心配は無い。そう思っていた矢先、彼等の前には一機のドローンが飛んでくる。

「ウヌ!!これは……」

「いかん!!よけろー!!」

そこからは大量の赤いインクが発射される。ガツシユペアは近くの樹木に隠れる。その無差別攻撃は脅威だ。ドローンがいつ襲ってくるか分からない。その事実は清磨から遠距離射撃という選択肢を奪う。イトナの場所を探る間にドローンの餌食になりにかねない。

「きやあつー!」

「カエデ!!」

茅野が赤いインクを受けた。だが、それと同時に清磨の手には何かが握られていた。それは、杉野から託された対先生BB弾が埋め込まれたボール。とつさの事ですぐにそ

れを取り出す事は出来なかった。だが、今ようやく彼は動くドローンに狙いを定めた。そして投げたボールはドローンに命中し、地に落ちる。

「2人共、ごめんね」

茅野は謝罪する。ここに来ての戦力の低下。彼女は申し訳なく思うが、ガツシユペアはそれを責めない。

「いや、大丈夫だ茅野。必ず赤い旗は奪い取る」

「カエデ、待つておるのだぞー！」

「うん……お願いね！」

インクを受けた茅野を置いて、ガツシユペアは旗の奪取に向かう。そこには赤チームの指揮官のカルマと、イトナが待ち受けている。勝負も終盤に差し掛かっていた。

赤チームの旗。そこにはカルマとイトナがいる。彼ら2人がその守備役を担う様だ。そして清磨はガツシユを別の場所に潜伏させた上で単身乗り込む。両手にハンドガン添えて、カルマとイトナ目掛けて青いインクを放つ。

「カルマ、ガツシユがどこにいるか分からない。お前は旗の守りに専念しろ」

「言われなくても分かっているって」

イトナは銃を構える。一方でカルマは射撃を避けつつも旗から注意を逸らさない。旗の周囲にも隠れ蓑はあり、どこからガツシュが飛び出すか分からない。清磨の相手はイトナが努める。

「これで終わりだ！」

イトナが銃口を清磨に向ける。流石の彼もこの状況でドローンを操る余裕は無い。清磨目掛けて赤いインクを放ち続ける。しかし清磨もそれをかわして見せる。

「高嶺！ガツシュはどこにいるんだ!!」

「答える義理は無い!!」

清磨はイトナの銃撃をよけ続ける。しかし彼の放つ青いインクはイトナを狙っていない。標的は旗を守り続けるカルマだ。

（まあ。高嶺君ならイトナの銃撃をかわしながら、俺を狙うくらいやってのけるよね）

カルマは特に驚くこともせず、最小限の動きで銃撃をかわす。あまり動き過ぎると、どこかに潜んでいるガツシュに旗を取られてゲームセットだ。

「ふざけているのか！」

イトナは不快な顔を見せる。無理もない。目の前の清磨は、まるで自分の事など眼中にないかのようにカルマを狙い続けるのだから。そして痺れを切らしたイトナは、ついに清磨に赤いインクを当てる事に成功する。

「俺を舐め過ぎだ、高嶺……」

イトナは清麿に背を向けようとするが、彼の背中には青いインクが命中していた。

「……チエックメイトだ」

「しまった!」

清麿の口角が上がる。イトナは潜んでいたガツシユの銃撃を喰らった。そしてガツシユは赤い旗目掛けて走る。その事にイトナとカルマは気付くが、もう手遅れだ。

「く……高嶺君が俺ばっかり狙っていたのはこのためか!」

カルマは焦る。彼は清麿の銃撃をかわしていたように見えて、実は清麿に旗から離れる様に誘導されていた。カルマなら最小限の動きでインクをかわす事を清麿は分かっていた。だからカルマの動きを清麿は計算し、ガツシユへの攻撃が間に合わない場所までカルマを動かす為に青いインクを撃ち続けた。

「これで終わりなのだ!」

ガツシユは旗の目の前まで近付く。彼が旗を取って青チームの勝利かと思われた時、ガツシユの動きが止まる。彼は考えた。本当にこのまま旗を取って良いのかと。

（ガツシユ……お前……）

清麿はガツシユの考えを察する。そして彼は納得した。丁度そのタイミングでカルマはハンドガンを出し、ガツシユに赤いインクを当てていた。

「ガツシユ君……舐めプって訳では、無さそうだね」

悔し気な表情をするガツシユにカルマは背を向ける。カルマは自分達の負けを悟っていた。ガツシユが足を止めるまでは。しかしガツシユは旗を取ろうとはしなかった。その理由はカルマにも何となく察しが付いた。そして彼は青チーム最後の生き残り、渚との戦いに頭を切り替える。

赤いインクを付けられたガツシユペアは退場者たちの待つスペースに辿り着く。そこには渚・カルマ以外の全員が待ち受けていた。磯貝・前原・矢田は速水と寺坂相手に相打ちとなり、青チームの旗の奪還を狙った中村・村松・吉田は烏間先生の背後に隠れていた渚から攻撃を喰らわされてしまった。

「ねえ高嶺、渚が烏間先生の後ろにいて知ってたの?」

「ああ、アイツは先生の着ている迷彩を塗ってもらっていたからな」

中村の質問に清磨が答える。だから清磨は旗の守りは要らないと断言できたのだ。それを聞いた中村は下を向く。そしてここには殺せんせーも待機していた。先生はガツシユペアに劳いの言葉をかける。

「お疲れ様です。2人共、惜しかったですねえ」

「そうだな、殺せんせー」

清麿は答える。勝負は青チームが勝利一步手前だった。しかしガツシユが旗を取る事が出来ず、赤チームは首の皮一枚繋がる結果となった。しかし清麿は特に悔し気な表情を見せていない。隣のガツシユとは違って。

「皆!! 済まぬのだ!!」

ガツシユが頭を下げる。謝罪を述べた後、彼は齒を食いしぱり続ける。自分のせいで青チームは一度、勝利のチャンスを逃す事になったのだから。しかし彼を責めようとする者は誰もいない。

「気にしなくて良いよ。ガツシユ君が旗を取れなかった理由、何か分かる気がするから」
茅野がフォローを入れる。確信こそしていないが、彼女は何となく理解していた。ガツシユが旗を取れなかった理由を。

「最終的にあの2人が勝負の決着を付けてこそ、皆が納得出来る結果になると思つたって事かな?」

「ウヌウ、そうなの」

不破がガツシユと茅野の考えを代弁する。そんな彼女の予想は正しかった。

「そつか……なら仕方ないよ、ガツシユ君。私も何だかそんな感じがしたし」

「優月……」

不破は早々に退場してしまった。しかし、だからこそ彼女は客観的に戦いを見る事が可能になった。そして不破は持ち前の推理力を活かして、早い段階でその考えに至る事が出来た。

「確かにこの戦いは元々、渚とカルマ君の喧嘩が原因だったからね」

片岡が口を開く。彼等こそがサバゲーの発端。ならばその2人の決着無しに各々が満足のいく結果は得られないのではないか。ガツシユはそう考えて、旗を取る直前に足が止まってしまった。

「まあ、そこに至るまでにそれぞれが死力を尽くしてきたからこそだがな。その結果どっちが勝っても文句はねえ」

寺坂が悟った様な表情で言い放つ。クラスのそれぞれが全力を出した結果であれば、どう転ぼうとも悪い様にはならないと。

「だからガツシユ、いつまでも泣きそうな顔してんじゃねーよ」

「寺坂……」

そして寺坂はぶつきらぼうながらもガツシユに声をかける。それを聞いたガツシユの顔は晴れて来た。そしてE組一同は渚とカルマの戦いを見に行く為に戦場の近くに移動する。

「そこまで!!赤チームの降伏により、青チーム……殺さない派の勝ち!!」

渚とカルマの一对一の勝負は、カルマの降参により決着がついた。序盤は戦闘能力で勝るカルマが優勢だったが、彼は渚に根性を見せられた事で負けを認めただった。青チームの皆は大いに喜び、赤チームの皆はそれぞれ複雑な心境だ。

またこの戦いを機に、渚とカルマはそれぞれの名前を呼び捨てする事になる。カルマ曰く、「喧嘩の後では君を付ける気にはなれない」との事だ。

「2人共、お疲れ様(なのだ)」

そんな2人にガツシユペアは労いの言葉をかける。2人の戦いは彼等の心をも熱くさせた。それぞれの思いのぶつかり合いは、心の力を使用して戦うガツシユペアにも思う所があつた。何かを思う気持ちには、それ程に大きな力に繋がる。

「いや、今日は散々だったな。喧嘩では渚に負けて、ゲームメイクでは清磨に負けた。ガツシユにも旗を取られかけたし」

カルマは呟く。今日は負けてばかりだったと。しかし彼の言葉を聞いたガツシユペアの頭には疑問符が浮かぶ。何故か自分達の呼び方すら、カルマは変えていたのだから。そんな2人の顔を見たカルマの口角は上がる。

「まあ、2人とは喧嘩したって程では無いんだけどね。でも何処かのタイミングで呼び

方を変えたいと思つてた。君等がどうしても嫌だつて言うなら仕方ないけど」

カルマは言葉を続ける。今までの呼び方は何だか他人行儀だと思つており、この戦いを機に呼び名を改めたいと考えていた様だ。そんな彼の考えを察した2人は笑みを見せる。

「分かつたのだ、カルマ!!」

「そうだな。俺も構わないぞ、カルマ……だが訂正しておく所がある」

ガツシユは変わらないが、清磨は呼び方を変更した上でカルマに言いたい事がある様だ。

「今回のゲームメイクは俺だけじゃない。青チームが皆で力を合わせた作戦だ」

清磨は渚の肩に手を置きながら言い放つ。青チーム全員が丸となつて得られた勝利、殺せんせーを助ける方法を見つける為に。決して清磨一人で策を積み上げた訳では無い。

「渚、3人同時の暗殺は凄かつたな」

「清磨……」

渚の暗殺術。それ1つで清磨は旗を守る必要が無くなった。この事実はとても大きい。彼は渚の持つ刃に感心していた。

それから4人が少し話していると、ガツシユが茅野・岡野・倉橋に呼ばれる。そして

彼等がサバゲーでのナイフ術の話で盛り上がる一方で、何者かが清麿の肩を叩いた。

「高嶺……アンタの射撃があんなに強いなんて、聞いて無いんだけど」

「ねー。話を聞いた時、ビックリしたよ」

清麿が後ろを振り向くと、速水と矢田がいた。彼女達は清麿が、速水と互角の銃撃戦を繰り広げた事に驚いている。清麿の器用さと空間計算能力のなせる業だ。

「あのまま続けてたら私が負けていたかもしれない。だからカルマにいったん退却するように言われたのよね」

「まさか……あの調子だと先に狙撃されていたのは俺の方じゃないのか？」

「どうかしらね」

2人はお互いの実力を認め合う。速水にとって清麿は、千葉以外での射撃における新たなライバルとなった様だ。

「矢田、アンタにやられた事も忘れないから」

「えへへ、私もその後すぐ退場しちゃったけどね」

「そうか、矢田が速水を仕留めたんだな」

矢田が速水を倒した事を知ると清麿が感心する。争いが苦手な彼女が殺せんせーの為に放った凶弾。それはE組髓一のスナイパーを殺すに至った。矢田だけではない。このサバゲーでは、多くの生徒の思わぬ実力が発揮された。

(E組……改めて考えると、とんでもない逸材が揃っているんだな。矢田が速水を倒したのもそうだが、イトナのドローンに神崎のサブゲアの才能。全くもって油断ならん) 清磨は冷や汗をかく。この1年間で誰がどんな刃を磨いているのか分かった物でない。そんな彼の様子に矢田が気付く。

「どうしたの、高嶺君?」

「いやな、矢田。やっぱこのクラスは凄いなって。俺もガツシユもE組に来る事が出来て良かったって、心底思えるよ」

E組は日々研鑽を重ねて来た。そして彼等は自らの才能を大いに伸ばした。その事はガツシユペアとして例外では無い。E組の存在は2人にとつても影響が大きく、実力の向上に繋がっている。

「私も高嶺君とガツシユ君に会えて良かったって思ってるよ。魔物の話を聞いて、何だか自分の知らない世界が一気に広がった感じがしたから。何より2人と話して楽しいし」

「そう思ってくれるのは嬉しい」

矢田の言葉に清磨は喜ぶ。自分達は良い仲間に出会えた。彼はそう感じる事が出来た。隣にいる速水も口角を上げる。

他の生徒達も今回の戦いについてそれぞれ語り合う。そんな様子を少し離れた場所で見っていた殺せんせーは、これまで通りのニヤけた口調で隣の烏間先生とビッチ先生に話し始めた。

「時には鬪争こそが、皆の仲を最も深めるチャンスなのです」

「なるほど……今回の事もお前にとって教育のうちだったと言う事か」

生徒達は大きな選択を迫られた結果、本気で戦いに挑んだ。その結果として彼等はお互いの新たな一面まで理解し合う事が出来た。E組の団結力はさらに高まったと言える。そんな彼等ならどんなに難しい問題でも立ち向かっていけるだろう。そして生徒一同は先生達の方を向く。

「皆はコイツを助ける道を選んだな」

烏間先生の言葉に皆が頷く。その後、先生は少し考える素振りを見せた後に口を開く。

「助ける方法を探す期限は今月一杯とする。君達が暗殺をしなくても、こいつを殺そうとする勢力は多いからな。俺も……この暗殺は君達に成功させて欲しいと考えている。生かすも殺すも、全力でやると約束してくれ」

「[[[[[あゝ=]]]]」

烏間先生の約束を聞いた生徒達は大声で返事をする。生徒達が葛藤した上で決めた選択肢。烏間先生も全力で取り組むならそれで良いと言う。ここからは彼等にとって新たな一歩となるだろう。暗殺対象を助ける為の生活。生徒達は決意を新たにす。

LEVEL. 78 自由研究の時間

サバゲーの次の日、ガツシユペアが山道を登っていると2人の前にはイトナが見えた。彼等は早速挨拶を交わす。

「お前等か、おはよう。昨日はよくもやってくれたな」

イトナが早々にサバゲーの話題を出す。彼は清磨の策にハマリ、ガツシユの銃撃で退場した事が悔しい様子だ。

「それはお互い様だろう。あのドローンには度肝を抜かれたぞ」
「ウヌ、私もビックリしたのだ」

超高動機ドローンは青チームを大いに苦しめた。これまでは偵察の為に使われた物が突如牙をむいたのだから。結果的に青チームは勝つ事が出来たにしても、決して楽な戦いでは無かった。クラスメイト達の刃はガツシユペアも手を焼いた。

「まあいい、今日からはあのタコを助ける為に全力を尽くす。俺のドローンも何かの役に立てばいいが」

「殺せんせーの地球爆発の阻止か……容易では無いだろうが、皆で探って行こう」
「殺せんせーには死んでほしくないのだ！」

彼等は気合を入れ直す。イトナのドローンに対する熱意は本物だ。ガツシユペアもそれは分かっている。果たして良い方法は見つかるだろうか。

その日の授業終わりの放課後、教室にて殺せんせー救出計画の話し合いが行われる。E組全員で答えを出す事が大前提の為、清磨は「答えを出す者」で方法を見つけた事はないつもりだ。そして竹林が昨夜考えて来た意見があるとの事で、彼が教壇に立つ。

「各国首脳が先生を殺す事しか考えないとは思えないんだ。殺す以外の方法で爆発を防げるなら、それも立派な選択肢だからね」

彼は殺せんせーを助ける研究を誰かしらが行っていると決め打っている。だからその研究を皆で探つてこそ解決の糸口が見つかるのだと言いつつ。しかし烏間先生がそれを否定した。

「このタコを作った研究組織は月の爆発後、その責任を問われて研究のデータと主導権を先進各国に譲り渡した。今は地球を救う為に研究が行われているが、当然この情報は最高機密で、君達にそれが伝わる事は無いだろう」

政府にとってE組は末端の暗殺者に過ぎない。そんな彼等に機密情報を外部に広まるリスクを冒してまで伝えるとは思えない。だからE組がその情報を手にする事は叶

わない。それが烏間先生の考えだ。それを聞いた生徒達の顔が曇る。しかし、
「プロジェクトのデータベースに侵入しました」

「「「「はっ！」」」」

律があっさり全世界での触手に関する研究項目とそのスケジュールの情報を入手してしまった。彼女もこの1年で機能拡張べんきょくかくちやうしており、最高機密のセキュリティに侵入できるまでに至ったのだ。烏間先生含めたE組一同は愕然とする。

「何だかよく分からぬが、律が凄いのだ……」

「律、流石だよ。こんな事まで出来るようになっていたなんて、やはり君は最高だ」

「ありがとうございます！」

ガツシユは戸惑うが、竹林は律を褒め称える。律は生徒達と多くの会話を交わしてきたが、特に竹林は彼女を気にかける事が多い。また彼が律にメイドモードなる機能を要望していたのはここだけの話だ。

「とんでもない成長を遂げたな。律も刃を磨き続けていたって事か……」

「そうですね、高嶺さん。ですが研究の具体的内容までは知る事は出来ませんでした」

清麿は素直に感心するが、情報の詳細までは分からなかった。律曰く「最重要の情報のやり取りの痕跡がネット上では見つからなかった」との事だ。それを聞いた清麿は1つの答えを予想する。

(なるほど、確信情報のやり取りは)

「手渡しで行われる訳ですなえ。情報をメモリに保存して人の手での嚴重管理ですか」

清麿の思考を殺せんせーが遮る。彼等は同じ結論に至った。原始的な方法だが最も情報を盗まれにくい。実際に律に侵入されても情報が露呈する展開にはならなかったのだから。ネット外でのやり取りは律も手出しが出来ない。そんな時、

「見つけた!!タイトルから察して先生を助ける研究を探したけど、これしかない!!」

不破が律の画面上に並べられた研究項目から、殺せんせー救う研究を探し出した。しかし問題はここから。その研究は国際宇宙ステーションで行われている。よってそのデータを入手するのは非常に困難だ。いきなり絶体絶命と思われたが彼等に諦める選択肢は無い。全力で助ける方法を探すと決めた以上、引き下がる訳にはいかないのだ。

「烏間先生とイリーナ先生、席を外してもらっていいですかね?」

頭を惑星の形に変化させた殺せんせーが、先生達に教室外に出る様お願いする。何か2人に聞かれると都合の悪い事があるのだろうか。清麿の頭に嫌な予感がよぎるが、それは的中する。殺せんせーがとんでもない事を言い出した。

「季節外れの自由研究!!宇宙ステーションをハイジャックして実験データを盗んでみよう!!」

クラス一同は愕然とする。ハイジャックは立派な犯罪だ。いくら殺せんせーを助け

る為とは言え、それはいかがなものか。これはマズイと感じた清麿は、冷や汗をかきながら反論する。

「待て皆、早まるな!! 殺せんせーを助ける研究が行われている事まで答えを出せたんだ!! ならばその結果を【答えを出す者】で」

「清麿、ストップね」

しかし彼の意見はカルマに遮られる。

「……」まで答えを出せたからこそ、自分達皆で結果まで辿り着きたい訳じゃん。だからその力は結果を知る為じゃなくてさあ、少しでも周りに迷惑をかけずに実行する方法を見つける為に使つてよ」

カルマはあくまでE組全員が一丸となつて答えを出す事にこだわる。それは他の生徒達も同じだ。それを察した清麿は頭を抱える。今自分が研究の結果の答えを出した所で、E組一同は納得しないだろう。すると岡島が口を開く。

「今更固い事を言うのは無しだぜ、高嶺。俺等も誰かに危害を加えない様に最大限気をつけるからさ」

「岡島、お前……」

かつて深く考えずにフリーランニングを裏山の外でやる事を言い出してしまった彼だが、今度は同じ失敗を繰り返さないつもりだ。しっかりと周りに気を遣う事も忘れな

い。それを聞いた清磨はため息をつく。そんな彼の肩に殺せんせーは触手を置く。「そうですね、皆が後悔をする展開は避けたい。だから高嶺君。君は律さんと共に、他の人に迷惑にならないような方法を探して下さい。先生も手伝います」

「清磨……」

殺せんせーの依頼を聞いた清磨は考える素振りを見せる。そんな彼にガツシユが心配の眼差しを向ける。皆の強い意志を感じ取った清磨は他に方法が無い事を悟る。そして彼は決断を下す。

「……分かったよ。それでしか皆が納得出来ないんだからな」

「高嶺さん、頑張りましょう！」

清磨が了承すると共に律がやる気を見せる。こうしてE組での前代未聞の自由研究が始まった。不安な事も多々あるが、E組一同が力を合わせて目標の為に努力しており、皆生き生きとしていた。

E組で話し合った結果、1つの方法が提案された。ハイジャックを成功させる為には宇宙センターのセキュリティ無効化は必須。そこでハイジャック担当の生徒以外に、交渉術に長ける矢田と倉橋がセンターに乗り込んで警備員や他の職員達を惹き付ける。

その間に足の速い木村が超体操着に保護色を施して管制室に忍び込み、USBで律作成の遠隔操作ウイルスをセンターのパソコンに仕込む案だ。

上手くいけば宇宙船に忍び込むのは容易になるが、万が一バレルリスクもある。清磨は自分の席で悩み続ける。

「……どうにか無線でウイルスを流せられれば良いんだが」

遠距離からウイルスを侵入させる事が可能であれば、よりリスクは軽減される。しかし宇宙センターの警備は厳重で、今の律のスペックを以てしても遠くからの潜入は不可能。それが「答えを出す者」で出た答えだ。

「私もまだまだですね」

「何を言う、律のせいでは無いのだ」

「その通りだ。国家機密を取り扱うセキュリティ、簡単にはいかないのは皆分かっている」

自分の力不足を嘆く律をガツシユペアが慰める。律がいなければ殺せんせーを助ける研究の存在が分からなかった。彼女の功績はあまりにも大きい。そして頭を抱える清磨に1人の生徒が話しかける。

「高嶺君、大丈夫？」

「……神崎か。もっとリスクの少ない方法を考えているんだが思い浮かばなくてな」

「そうだったんだ。あんまり思い詰めないでね」

難しい顔をする清麿を見かねた神崎が声をかける。彼女は1学期末テストで結果が振るわなかった時に清麿に励まされた。だからこそ今度は自分が清麿を元気づけようと思ってくれたのだ。

「心配をかけて悪いな」

「気にしないで。私も高嶺君とガツシユ君には助けてもらってばかりだから」

期末テスト以外にも修学旅行の不良達や鷹岡の魔の手、サバゲーの時でのカルマからの攻撃。ガツシユペアはこれらから神崎を庇った。また彼女にとつてガツシユペアの諦めない姿勢は、厳しい家庭に置かれた自分の励みにもなっている。神崎はガツシユの両肩に自分の手の平を置く。

「皆なら大丈夫だよ。きつとうまくやれる」

「有希子の言う通りだよ！」

彼女は言い放つ。E組がここまで積み重ねた経験があればここでつまづく事は無いと。ガツシユも同意する。そして彼女の強い意志を感じた清麿は腹をくくった。

「そうだな、もつと皆を信じないと」

そして作戦は決行される。ハイジャックはサバゲーの発端である渚とカルマに託された。他の生徒達が学校で祈る中、矢田・倉橋・木村も無事に自分の任務をやり遂げ、渚とカルマは誰にもバレずに宇宙船に乗り込む事が出来た。

2人が宇宙に旅立って数日後。渚とカルマを乗せた宇宙の試験機は、無事にE組の校舎に着陸する。また宇宙船は律が操作をしており、この経験はさらに彼女の知性を成長させた。

「渚、カルマ、律。本当にお疲れ様なのだ!!」

ガツシユが帰ってきた彼等に労いの言葉をかけると、2人は右手でgoodの合図を出してくれた。しかし、この事を知った烏間先生は当然頭を抱える。そこでこの宇宙船で人間を乗せて飛べたデータ、律が見つけたより効率的な宇宙への航路、殺せんせーが作った宇宙船のパラシユート構造のレポートを差し出す事でチャラにしてもらった。

2人が持ち帰ったデータは教室で律の画面に表示される。しかし専門用語が多すぎて生徒達の大半が内容を理解出来ない。清麿がそれを分かりやすく要約しようと画面をのぞき込もうとしたその時、奥田が画面の前まで近付く。

「えっと、高嶺君……私に任せてもらって良いですか？」

「……ああ、勿論構わんぞ」

奥田の積極性に清麿は目を丸くしながらも、その役割を彼女に託す。

「頼んだぞ、奥田!」

「愛美、ガンバレなのだ!」

そんな様子を見た杉野とガツシユが奥田に言葉をかける。2人共彼女の言動に感心している。理科が得意な奥田にとってこの役割は最適だ。

「えーとですな……」

彼女が解説を続ける。その中で触手生物が爆発を起こすリスクは、その体が大きい程少ない事が分かった。さらにデータに表示された化学式の薬品を投与する事で、その爆発の可能性を1%以下に抑える事が出来ると言う。だが問題はその薬品を作れるかどうか。

「これ……前に私が作った薬とほとんど同じですな」

データにある薬品は、かつて奥田が殺せんせーと共に先生の毒殺の為に制作した物とほぼ中身が同一の様だ。

「あの時の薬? 奥田さんやるじゃん」

「カルマ君、ありがとうございます。まさか毒殺の経験が活きるとは……」

カルマが奥田を労う。殺せんせーが地球を爆発させる確率は1%にも満たない結論に、E組全員で辿り着けた。それ以前に雪村先生が命がけて殺せんせーを止め、その先生が命をかけてE組に授業してくれたからこそ、ここまで来れたのだ。

「『『これで先生を殺せなくても、地球が爆発せずに済む!!』』』」

E組一同、喜びを露わにする。全員で力を合わせて答えを出す事が出来た。ここまでの道のりは決して楽な物では無い。多くの辛い事を皆で乗り越えて、ようやく見つけられた結論だ。しかし国が暗殺の要請をやめる事は無い。爆発の確率は0%では無いのだから。また暗殺があつたからこそE組はここまで成長できた事実は変わらない。よってE組一同、3月までは全力で暗殺に取り組む事にした、

表向きは。

その日の放課後、生徒達は裏山に集まる。殺せんせーは南国で寒さを避けており、ここにはいない。話す話題は当然殺せんせーについて。まずは寺坂が清麿に問い詰める。「おい高嶺……テメエはあのチート能力で、タコが地球を爆発させねー本当の確率を見たんじゃねーのか？」

今回得られた研究の情報では、殺せんせーが爆破する確率は1%以下だった。しかし人間が普通に研究する以上、0%と100%は有り得ない。絶対こうだと断言する事は

リスクも大きい。しかし【アンサートーカー答えを出す者】なら確実な答えを得る事が出来る。研究の結果である“1%以下”と言うあいまいな数値では無く、本当の結果を知る事が可能だ。「そうだな、おれが得た答えでは殺せんせーが地球を爆発させる確率は……」

0%だ」

清磨は断言する。殺せんせーが地球を爆発させる事は絶対に有り得ないと。それを聞いた生徒一同は嬉しそうな顔をする。1と0は違う。これで本当の意味で殺せんせー救出が可能になると。

「でも、その答えは僕達しか知らないんだよね。言っても多分信じないだろうし。だから国が暗殺を取りやめる事は無い。それでE組も表向きは全力で暗殺を続ける事にした」

渚が口を開く。【アンサートーカー 答えを出す者】の事を知らない大人たちは中学生の意見に耳を傾けたりなどはしないだろう。だから殺せんせー暗殺の依頼は続く。しかし彼等は知っている。殺せんせーが地球を爆発させる事は無いのだと。彼の言葉を皮切りに場の雰囲気^{アム}が重くなる。

「国の目をかいくぐつての殺せんせー救出。ある意味殺す以上に難しいかもな」

「それに私達が殺せんせーを助ける為に不審な動きを見せれば、烏間先生達に余計な迷

惑をかけるかもしれない。ただでさえハイジャックの件は危なかったんだから」

磯貝と片岡が苦虫を噛み潰したような顔をする。今回の自由研究によつて、下手をすれば烏間先生の首が飛ぶ可能性すらあつたのだ。

「そうだな。殺せんせー救出は場合によつては、俺達全員が国家反逆罪に問われる事だつて考えられる。そうなれば俺達の行いは烏間先生への裏切りにもなるだろう。政府にとつては危険な怪物をE組が逃がそうとしているような物だからな。国の方針に逆らうつてのは、それだけのリスクがある」

清麿の目がさらに真剣になる。国家反逆罪。もしも自分達が罪に問われれば本人以外にも、多くの人々に被害を与える事は間違いない。烏間先生の顔に泥を塗る事にも繋がる。それを察した生徒全員の顔がこわばる。

「だから殺せんせーの処遇に関しては国に任せるつてのが一番無難だ。俺達の手で暗殺を成功させるのが大前提だがな。もしも殺せんせーを助ける道を選ぶのなら、ここからは俺も【答えを出す者】をより積極的に使うつもりだ。少しでもリスクの小さい方法を探し出す。皆、どうする?」

清麿が確認する。殺せんせーを助けるにしても殺すにしても、E組全員が力を合わせなければ成し得ない。しかし助ける道を選ぶには、あまりにもリスクが大きい。【答えを出す者】を使つてもどこまで安全に行けるのか。一同が考える素振りを見せる

中、ガツシユが前に出た。

「それでも私は……殺せんせーを助けたいのだ!! 殺す以外に道があるのなら、私はその方法を取りたいぞ!!」

ガツシユは言い放つ。彼が意見を変える事は無い。それを聞いた他の生徒達も頷く。彼等は腹をくくつた様子だ。そして茅野がガツシユの頭に手を置く。

「……まで皆で頑張つてきたもんね。やつぱり後には引きたくない。私も殺せんせーを助ける道を選ぶよ!」

茅野の言葉を皮切りに他の生徒達も思いを述べていく。生徒達の答えは決まった。殺せんせーを助ける道を選ぶと。しかし烏間先生達には悟られないように表向きでは全力で暗殺に挑む。そして受験勉強と並行しての殺せんせー救出作戦。E組にとって一番大変な時期になるだろう。

「なあ、皆。提案があるんだが……」

生徒達がやる気を見せる中、清麿が照れ臭そうな表情をする。

「どうしたの清麿? まさか怖気づいたとか?」

「違う!」

カルマが冗談交じりに煽るが、清麿はすぐに否定する。そして彼は口を開く。

「俺達は大変な事をしようとしている……気合を入れる為にも、全員で円陣を組むのは

「どうだろうか？」

彼は顔を赤くしながらそう言う。自分達は今、難題を目の前にしている。表向きは全力で殺せんせー暗殺をしながら受験勉強に励みつつ、裏では誰にも迷惑をかけない様な殺せんせー救出作戦。乗り越えるのは並大抵な事では無い。だから彼は改めてクラスを一致団結させたくて円陣を提案した。それを聞いた生徒達は各々顔を合わせる。そして、

「それさんせく、皆で力を合わせるって感じで良いと思う！」

「高嶺君良い事言うじゃん！何か楽しそうだよね！」

倉橋と矢田を初め、生徒達が賛同してくれた。彼等の様子を見ながら清麿は嬉しく思う。この仲間達とならどの様な壁でも乗り越えられると思える。そしてE組だけには無い。これまで全ての出会いが清麿を成長させてくれた。

「清麿!!早速円陣とやらをやってみようぞ!!」

「ああ、そうだな！」

ガツシユに腕を引っ張られた清麿は他の生徒達と共に円陣を組む。そして言い出しつぺの彼は第一声を担当する。

「……絶対成功させるぞ!!」

「「「「オオオオオ!!」」」」」

す。生徒達の声は木霊する。彼等は覚悟を決めた。E組は最も大変な道に進む決断を下

LEVEL. 79 準備の時間

殺せんせーを助ける方針で決めたE組一同はそれぞれの家を目指す。救出作戦の第一歩は清麿の【答えを出す者】と律による政府の動向探り。周りに感付かれない様、今は安易に大人数で動くべきでは無い。山道では殺せんせー救出についての話題で持ち切りだ。

しかし山を降りた辺りからは受験の話が開始した。冬休みから1月にかけては色々あり、生徒一同は一見それぞれどころでは無かった。ところがこんな時期なのに、彼等は不自然に受験の事が頭に浮かぶ時があったという。

「……殺せんせーのマツハ囁きによるサブリミナル効果のせいだな」

清麿は【答えを出す者】でその原因を探る。殺せんせーは生徒達の受験の準備がおざなりになる可能性を危惧した。そこで彼等に分からない様、背後に迫り彼等に受験の事を吹き込んでいた。しかも先生の場合はそれを本人の台詞の様に語れる。

「清麿の背後にも殺せんせーがいた時があったという事かの？」

「そういう事になるな。言われてみれば心当たりがある（水野達と受験の話をした時、思った以上に話題が弾んだのはそのせいかな？）」

「全然気付かなかったのだ」

清麿は冬休みに自宅で水野達と受験勉強をした時、いつも以上に勉強が捗る事や受験の話が盛り上がる事があった様な気がしていた。それは殺せんせーのおかげだったのだろう。しかし勝手に後ろに立つ殺せんせーの存在をガツシユペアはおろか、把握出来た者は誰もいなかった。生徒達が殺せんせーのお節介に呆れていると、カルマが清麿の肩に手を置く。

「清麿。行きたい高校が決まってないならさあ、俺と一緒に柵ヶ丘に残るってのはどう？」

「ふむ……それは盲点だったな。しかしカルマ、お前ならもつと上の高校を目指しても良いんじゃないのか？」

カルマは外部受験で柵ヶ丘を受け直すつもりだ。さらに清麿への勧誘。しかし彼なら最高峰の高校に行く事も出来るのではないか。だがカルマ曰く、「本校舎の生徒達が元E組の上に立たれる時の屈辱的な顔を3年も見れるのは最高」との事だ。

「カルマ、そういう所は変わらないね」

渚が苦笑いする。彼のひねくれ具合は健在だ。しかしカルマが柵ヶ丘を目指す理由はそれだけでは無い。

「平均的な学力なら上の高校もあるけどさ、タイマンの学力で勝負して面白そうなのっ

て……多分柵ヶ丘にしかないと思うんだ」

カルマは浅野の顔を思い浮かべる。これまで何度もE組の前に立ちほだかつた強敵。2学期末ではカルマと清磨に破れこそしたが、それまでは常に柵ヶ丘のトップに、E組の乗り越えるべき壁としてあり続けた生徒。カルマは彼を好敵手として認めている。

「それに清磨にも勝ててないしさ……目指す職業なら普通になれる自信があるから、今は単純にバトルを楽しむのもありでしょ。浅野君や清磨が相手なら申し分ない」

「なるほど、そういう考えか……検討しよう。確か最終決定は今週末だったか」

純粹な学力勝負。清磨・カルマ・浅野の対決であれば、他を寄せ付けないだろう。清磨も内心、最後の期末テストは心が躍っていた。それをあと3年間続けられるなら悪い気はしない。彼は外部受験について真剣に考える事にした。すると隣の渚が悲し気な顔を見せる。

「卒業したら、それぞれ別の道に向かってくんだよね」

別れ。卒業後はE組全員が揃う機会はそれ程多くないだろう。皆が将来の夢に向けて歩き続ける。その事を渚は切なく感じている。すると彼の話を聞いたガツシユが下をうつむく。

「ウヌ……私も魔界に帰らなくてはならないからの」

柵ヶ丘の卒業後は魔界の王を決める最後の戦いが始まる。ガツシユペアVSブラゴ

ペア。どちらが勝っても魔物は人間界からいなくなる。そうならば再会出来るのはいつになるか分からない。

「ガツシユ君、寂しくなるね」

「そうだね」

茅野がガツシユの頭に手を置く。2人共少しだけ泣きそうな顔をしていた。清磨も考えるような素振りを見せる。理解していた事とはいえ、実際に別れがすぐそこまで来ていると考えると心苦しい物である。

帰宅後、清磨は部屋のパソコンを起動させる。するとPC画面に律が出現した。

「高嶺さん、良いのですか？私に個人情報を見られたくないからパソコンには入らない様おっしゃっていたのに」

彼女はPC画面上で首を傾げる。パソコンは個人情報の塊だ。律のスペックがあれば、それらの情報はすぐに暴かれてしまう。しかし清磨は躊躇しない。どうしても律に探って欲しい情報があるからだ。

「殺せんせーを助ける為にはそうも言ってもらえんからな。先生が地球を爆破させる確率が0%である事を知ってるのはE組の生徒だけだ。【アンサートリーカードカ】で国の動向を探っ

た結果、大掛かりな暗殺計画があと少しの所まで進められているのが分かった。律、それについて調べられるか？」

国の方針はあくまで殺せんせー暗殺の道。ならば政府が何も策を考えない訳が無い。清磨は大規模な計画が暗殺期限までに実行される答えを得たが、具体的な内容までは把握出来なかつた。そこで彼は律に調査を依頼する。

「やれる限りやってみます。任せて下さい！」

律が電脳世界を飛び回る。清磨も【答えを出す者】^{アンサートーカー}を発動させながらキーボード操作を行い、律を援護する。調べるのは国の最高機関の情報。容易な訳が無い。清磨は眉をひそめる。

「律、大丈夫そうかの？」

ガツシユは心配する。彼は電脳世界でのやり取りを理解していないが、清磨と律が必死に戦っている事だけは分かる。大事な仲間が頑張る中、彼も真剣な顔でPC画面を見つめる。律のスペックと【答えを出す者】^{アンサートーカー}。国のセキュリティ相手にどこまで太刀打ち出来るか。

清磨と律がPC内で奮闘する間、ガツシユがふと窓を見つめるとすでに陽が沈んでい

た。彼等は帰宅後、数時間にわたり国から情報を得ようと奮闘していた。勿論証拠を残さない方法で。ハッキングを咎められれば面倒だ。少しした後、画面に律が表示される。

「2人共、ひとまず得られた全ての情報を開示します」

律が説明する。国が行う暗殺計画“天の矛・地の盾”。天の矛は宇宙空間から触手生物のみを溶かす広範囲の光線を放つ。しかしそれだけでは殺せんせーに感付かれて逃げられる可能性もある。そこで地の盾により触手生物を溶かす光のドームで殺せんせーを包囲する手はずだ。

「何と……このままでは……」

「こんなものが発動されれば、殺せんせーでもお手上げだろうな」

ガツシユペアはうつむく。まさかこれ程の規模の暗殺計画を政府が企んでいたとは。しかも日本のみならず、他の国との合同でのプロジェクトだ。この計画から考えるに、世界には殺せんせーを助ける選択肢は無い。

「すみません。3月のいつに行われるのか、機材の詳しい配置場所などまでは分からなかったです」

律が申し訳なさそうな顔をする。彼女のスペックをもつてしても、国のセキュリティを完全に突破する事は出来なかった。

「とんでもない。律、よくここまで調べてくれた」

「ウヌ、これが分かっただけでも十分なのだ！」

ガツシユペアは律を労う。これ程の情報を仕入れる事が出来たのは律が日々刃を磨き続け、自らを高めていたお陰だ。生半可な努力では成し得ない。2人はその事が分かっている。

「ありがとうございます。もっと情報を探れるよう、私も頑張ります！」

律は微笑む。彼女はE組に来て、感情を持ち合わせるようになった。だから毎日E組の為に成長を遂げ続けてきたのだ。2人が律に感心していると、1階から彼等と呼ぶ声が聞こえて来た。

「清麿、ガツシユちゃん！ご飯出来たわよ！」

華が夕食を作り終えた。それを聞いた2人は空腹を感じる。パソコンに向き合っていた間は気付かなかつたが、時間は夕食時だ。

「行つてきて下さい。情報は私がまとめておきます」

「律、サンキューな」

「ありがとうなのだ」

律が情報の管理を引き受けてくれた。これで万が一にも情報が漏れる心配は無い。

2人が律にお礼を述べると、そのままリビングに向かった。

翌日の放課後、E組の生徒達はモチノキ町のホテルの会議室にて集まる。そこは清磨がアポロを通じて貸し切ってもらった部屋であり、何度か彼やナゾナゾ博士と顔を合わせた場所だ。今度は生徒達と共に、誰にも見つからない様に殺せんせー救出について話し合う。

「……これが今、各国が協力して行おうとしている暗殺計画だ。これを何とか防げば殺せんせーを助ける事が出来る」

清磨がプロジェクトの前で、律に映像を流してもらいながら解説を行う。それを聞いた生徒一同に緊張感が走る。このままでは殺せんせーは死ぬ。それを防ぐには早い段階から動き出さなくてはならない。しかし相手の出方が分かればE組も先手を取りやすい。政府も現状E組の作戦に気付いた様子は無い。

「凄い！これ、全部律と高嶺君が調べたの？」

「はい、全ての情報を完璧にという訳にはいきませんでした」
「そっか」

不破の問いに律が答える。それを聞いた彼女は誇らしげな顔をする。律の名付け親は不破だ。だから律が次々と成長する様は彼女にとっても嬉しい。何より殺せんせー

救出への道のりを示してくれた。そして不破は話を続ける。

「感情を理解した高スペックなAIの存在。ドラ○もんの登場も遠くないかな！そして高嶺君の手で魔界と人間界の接続が叶えば、魔物と○○型ロボットの共演まで見れるもー！」

「優月、楽しそうだのー！」

不破の妄想の連鎖。彼女は名付け親として律の成長を見て浮かれているのだろう。ガツシユはその妄想に興味を示すが、思考が飛躍する彼女に対して多くの生徒が呆れ混じりの視線を向ける。

「不破さん、何の話？」

「おい、そろそろ戻ってこい」

渚と清麿がツッコミを入れる。これ以上話が逸れる訳にはいかない。

クラス内で話し合い、各々が意見を述べる。生徒全員が殺せんせーを助けたい一心だ。自分達の恩師が、全く手の届かない場所で殺される展開は避けたい。

「そもそも、こんな大規模な計画を一般人にも知られずに実行するって不可能じゃないのか？」

千葉が口を開く。現状殺せんせーは国家機密だ。だから各国は無数の暗殺者を雇って秘密裏に先生を殺そうとしてきた。しかし、ここに来ての大規模なプロジェクト。殺

せんせー暗殺の為の最終兵器であるが、当然世論に隠すのは難しい。今度は三村が考えるような素振りを見せる。

「こんな事が表に知られれば、当然メディアは黙っていない。一瞬で大ニュースだ。政府が殺せんせーの存在を露呈させようとしている?」

彼は1つの結論に辿り着いた。この暗殺計画が実行されるなら、周りの目を誤魔化すのはほぼ不可能と考えて良い。それ程に多くの人員の協力が必要になるのだから。秘密裏の暗殺では殺せないが故の判断。しかし殺せんせーの事が表沙汰になるのは政府も都合が悪いのでは無いか。すると不破が政府の狙いに気付く。

「分かった! 政府は地球を爆発させる超生物として殺せんせーの話題を全世界に取り上げて、合法的に先生を殺そうとしてるんだ。政府がメディアに圧力をかければ、先生を悪役に仕立て上げる事は容易だからね!」

彼女は先程の妄想が嘘のようなシリアスな雰囲気を漂わせる。秘密裏に先生を殺すのは無理だと判断した政府は、今度は殺せんせーを悪役として表舞台に立たせた上で殺す選択肢を取った。そこには各国の保身や思惑も混ざっているのだろう。

「優月、名探偵みたいなのだ!」

「律や高嶺君、それに他の皆が意見を出してくれたお陰だよ。何よりもこんな無理矢理な方法で、先生を死なせたくないからね」

ガツシユが不破に感心の目を向ける。彼女はここでも推理力を発揮した。それも殺せんせーを助ける為だ。

「そんな！殺せんせーばかり悪者にするなんてひどいよ！」

倉橋を始め、多くの生徒が悔し気な顔をする。今まで自分達を育ててくれた恩師が悪として葬られようとしているのだから無理もない。

「大丈夫なのだ、陽菜乃。そんな事はさせないからの！」

「ガツシユちゃん……」

清麿の隣に立つガツシユが倉橋をなだめる。その様な展開にしない為にも話し合いが行われている。そして清麿が話をまとめた。

「その通りだ。このまま先生を見殺しにする選択肢は無い。しかし政府のやり口が分かった今、多少なりとも手は打てるはずだ。今は情報が足りていないから何とも言えないが、皆で良い方法を考えて行こう！」

彼の一声で今日の話し合いは終わる。世界規模で行われている殺せんせー暗殺計画の情報共有。これこそが今回の議題だ。それが分かった上でまずは各々が対策を考える。そして詳しい情報が得られたり有効な方法が思いつき次第、積極的にクラス内で共有していく。E組の方針が決まった。

「……勿論受験勉強にも力を入れながら、だ。こつちも結果を出せなくては殺せんせー

を裏切る事になるからな」

清麿が言葉を付け足すと何人かの生徒が顔を青くする。先生に恩を返す為に、何より自身の将来の為の受験。大事なものは分かるが、先生救出計画との並行は容易では無い。そして今日は解散となった。

帰り道。ガツシユペアは家を目指しながら殺せんせーの救出について話し合う。天の矛と地の盾を誰にも知られずに撤去し、殺せんせーを逃がす事。口にするだけなら難しい事では無いが、実際は政府への反逆行為だ。果たしてE組だけでそれが叶うのだろうか。

「清麿、中々大変な問題だの……」

「何だガツシユ、随分弱気だな」

「ウヌ、それは……」

「まあ、殺せんせーを助けるのは容易じゃあないさ」

彼等も自分が行おうとしている事が極めて難儀である事を理解している。しかし、「だが、俺達には頼れる仲間が多くいるじゃないか」

清麿は口角を上げる。彼等が諦める事は無い。そして帰宅後、清麿は仲間達に助太刀

を依頼した。

LEVEL. 80 バレンタインの時間

清麿は結局、カルマと共に柵ヶ丘の外部試験を受ける事を決めた。結果は2人とも無事合格。E組全体でも受験結果が出始める時期だ。しかし結果が伴わない生徒達も、めげる事なく受験の後半戦に挑む。

今日は2月13日。バレンタインデー前日の放課後。モチノキ町の公園でガツシユペアは1人の女子高生と対面している。彼女は2人に2つの小さな箱を差し出す。

「清麿君、ガツシユ君。バレンタインのチョコだよ。コルルのいる魔界を救ってくれたお礼、どこかでちゃんと思いたいと思ってたんだ」

しおりが彼等に渡したのはチョコレート。彼女は心底コルルの身を案じていた。だからコルルを消滅の危機から助けてくれた2人には本当に感謝している。

「ウヌ！良いのか、しおりちゃん？」

「わざわざ済まない、本当にありがとう」

「本当は当日に渡したかったんだけどね。明日は親の仕事が休みで、学校が終わったら

家族で出かける事になってさ」

しおりはコルルと別れた後、家族との関係も修復されている。家族で過ごす時間も大幅に増えている。

「それに明日は、清麿君が本命のチョコをもらうかもしれないさ」

「なっ……」

「フフ、なんてね」

彼女の言葉を聞いた清麿は顔を赤くする。清麿は恋愛絡みの話には弱いままだ。明日のバレンタイン。ガツシユペア含むE組ではどのような展開が繰り広げられるのか。

「じゃあね2人共！ガツシユ君、絶対に優しい王様になってね！」

「ウヌー！」

そう言つてしおりは帰つて行つた。ガツシユペアは最後の戦いに向けて気合を入れ直す。しかし明日のバレンタイン、E組で一波乱起こる事を彼等は知らない。

翌日。ガツシユペアが登校すると、何故か教室で男子の前原が岡野にチョコを渡そうとしている。奇妙な光景の原因が気になった清麿は、近くにいた岡島に事情を聞いたです。

「よー、お前等。実はよ……」

前原は前日、岡野とカラオケに行った。男女の恋愛ネタを気にする殺せんせーはそんな2人をつけ回す事を見抜いた前原は、自分達を囷にして他の生徒が先生を襲撃する計画を思いつく。しかし本気で彼にチョコを渡そうとしていた岡野はこの事を知り、激怒した。話はそれだけに収まらない。

「んで、岡野の機嫌を直した上でまたチョコをもらえねーと、殺せんせーが前原の内申書にチャラ男って書くんだと」

「何をやっているんだ、アイツは……」

清麿はため息をつく。真つ直ぐな性格をした岡野はこの手の策略が嫌いだ。まして自分の想いを、チョコを渡そうとした張本人に踏みにじられたのだから無理もない。仲直りは容易では無いだろう。

「ひなたと前原、ケンカしてしまったのかの……」

「100%前原が悪いけどな」

ガツシユが暗い顔を見せる。せつかく殺せんせー絡みでクラスが団結していたのに、このまま2人がこじれたまま卒業する展開は避けたい。多くの生徒達が同じ事を考えるが、岡野は一向に前原を許そうとしない。

「どうすれば良いんだろうね？」

「ひなた、頑固だからなあ」

渚と片岡が会話に加わる。前原の言動は岡野の逆鱗に触れる一方だ。このままでは埒が明かかないと渚達は清麿に相談を持ち掛ける。その時、前原もまた彼等の方に向かって来た。

「なあ高嶺、頼みがあるんだが」

「アンサー・トゥー・カウ【答えを出す者】で岡野がチョココを渡してくれる為の答えを出してくれ、か？断る」

「何故分かった？！」

前原の考えを見抜いた清麿は、その発言を遮る様に却下した。今回の件は前原自身でケジメを付けなければならぬ為だ。そんな彼の言動を見ていた岡野の怒りは増す。

「皆!! コイツの言う事聞いちゃダメだからね!!」

「ウヌウ……」

彼女の剣幕に対して誰も言い返せない。それでも前原は必死に岡野に頭を下げに行くが、状況は好転しない。果たして彼はチョココを受け取れるのだろうか。

前原は岡野からチョココをもらう事が出来た。彼女が自分の靴に仕込んでいた対先生ナイフを前原がチョココにすり替え、蹴りを喰らう事でそのチョココを顔面受けしただ。

これにて一件落着。そして放課後、ガツシユペアは帰り道を歩く。

「清麿、2人が仲直り出来て良かったのう」

「あれを仲直りと呼べるかは疑問だがな」

結局前原は彼女を怒らせていた。しかしその光景こそが2人のピッタリな距離感なのかも知れない。岡野のストレスは溜まり続けるかもだが。今日はバレンタイン。多くの女性がチョコを男性に配る日だ。義理、本命等目的や渡し方も様々である。ちなみに矢田と倉橋はE組男子全員（岡島除く）にチョコを配っており、ガツシユは茅野からもチョコをもらっていた。

ガツシユペアは昨日に続いてモチノキ町の公園に足を運ぶ。そして2人は再びチョコを受け取ろうとしていた。

「高嶺君、ガツシユ君。ゴメンね、学校も違うのに呼び出しちゃって」

相手は水野だ。彼女は少し顔を赤くしながら青い紙に包まれた箱を取り出す。中身はチョコプレートであるが、清麿は彼女に聞いたです。

「なあ水野、それはお前が作ったのか？」

「買った奴だよ。最初は作ろうと思ってたんだけど、マリ子ちゃんに止められて……」

「そうか」

水野は料理が上手ではない。それを危惧した清麿は失礼を承知で尋ねたが、仲村が制止してくれた様だ。隣のガツシユも胸を撫でおろす。

「えつとね……高嶺君、転校した後も私に勉強教え続けてくれたじゃない？そのお陰で、結構成績伸びたんだ。結局高嶺君と同じところには行けなかつたけど」

清麿が柵ヶ丘に入った後も、彼は水野達の勉強を見続けて来た。その甲斐もあつて水野の学力は急上昇し、進学時に柵ヶ丘の高等部も視野に入る程に成長した。しかし結果は及ばず、彼女は別の高校を受ける事となる。

「このチヨコはそのお礼で……だからそう言うんじゃないくて」

水野は清麿に好意があるが、中々言い出せずにいる。思いを伝える事はそれ程大変なのだ。また彼女の場合、内心で恵を意識しているのもある。

「水野……サンキューな」

「スズメ、ありがとうなのだ！」

ガツシユペアがお礼を言うと彼女は嬉しそうな顔を見せる。

「それじゃあね！」

水野はそう言うとその場を去る。彼女は清麿に思いを伝えようとはしなかつた。一方で清麿は悩んでいた。彼も水野の好意には気付いているが、それには答えられないだ

ろう。

(水野、礼を言うべきは俺の方なのに)

清磨がクラスで孤立していた時期でも水野は変わらず接してくれた。彼はその事に非常に感謝している。

(だが……)

それが恋愛に繋がるかは別問題。清磨は別の女性に好意を持ち始めている。

「清磨、今日は忙しいのだ。次は恵と植物園だったかの」

「あ、ああ」

「ガツシユがその女性の名前を出す。恵も清磨にチョコを渡そうとしている。清磨も察しが付いており、顔を赤くする。そしてガツシユペアは家に帰った後に出掛ける支度をする。彼等をつけている存在がいる事に気付かずに。」

植物園。ガツシユペアと恵は合流する。

「しかし恵さん、何で植物園なんだ？」

「ガツシユ君から聞いたの。清磨君が昔ここに何度も来てたって。だから私、一度は訪れてみたいと思ってたのよね」

ここはかつて、清麿が学校で孤立していた時に世話になった場所だ。彼の過去までは知らない恵だったが、植物園には興味を示していた。しかし清麿はどこか落ち着かない様子を見せる。

「あ、清麿とガツシユ。また来てたんだ」

「げ、つくし……」

つくしが彼等に話しかけた瞬間、清麿が嫌そうな顔をする。それを見た彼女は当然不快な気分になる。

「その嫌そうな顔は何？……そう、へえ」

つくしはムツとしたような素振りをするが、恵を見た瞬間に表情は一変する。彼女は顔をニヤケさせながら清麿をからかい始めた。

「そっかー、清麿がねー。そういや今日バレンタインだもんねー」

つくしのいじりは止まらない。彼女は清麿の変化が嬉しい。かつて不登校児だった清麿が女性を連れてくるまでに至った。その喜びは、清麿が初めてガツシユと一緒に植物園に来た時以上だ。清麿は顔を赤くする。彼が植物園に行く事に乗り気じゃなかった理由はこれだ。

「やかましい！恵さんも困っているだろう！」

「ハハ、それもそうだね。ゴメン」

いじりをやめたつくしは恵の方を向く。そして困惑している彼女に対して自己紹介を始めた。

「あたしはこの管理人のつくし。清磨とガツシユは常連だから顔なじみなんだよね」
「そうだったんですね。よろしくお願ひします」

「こちらこそよろしくお願ひします。そうだ。ガツシユ、ちよつとおいで」
「ウヌ?」

2人が挨拶を終えると、つくしはガツシユと共に場所を移す。ガツシユがここで育てている植物を見る為ではあるが、清磨と恵を2人にさせる狙いもある。つくしが彼等を見てウインクすると、その意図を察した2人は顔を赤くする。そんな様子が彼等を付けている者達に見られているとも知らずに。

つくしがガツシユを連れて行った後、2人の間にわずかな沈黙が流れる。少しした後、恵は自分のカバンから2つの箱を取り出す。1つは緑色の梱包で、もう1つはピンク色だ。

「ハイこれ、バレンタインのチョコね。2つとも清磨君の分だから」
「あれ、1つはガツシユのじゃないのか」

清磨は疑問に思う。てつきりガツシユペアで1個ずつだと思っていたが、どうやらそうでは無い様だ。恵は清磨にチョコを渡した後、さらに2つの箱を取り出した。

「ガツシユ君のはこつち。2個ずつチョコがあるのはテイオの分」
「テイオの……そっか」

テイオの名前が出た瞬間、清磨は何かに納得したような素振りを見せた。

「ええ、あの子にお願いされてたのよね。もしも自分が魔界に帰った時、私に自分のチョコも含めて清磨君とガツシユ君に渡す様について」

テイオは自分がチョコを渡せない可能性を危惧していた。魔物の戦いでは何が起るかわからない。だから彼女は恵に対して、2人に渡すチョコを託していたのだ。

「去年の2月は千年前の魔物との戦いで忙しかったからね。今年はちゃんと渡せて良かった。テイオも一緒に居られるのがベストだったんだけどね」

恵は少し寂し気な顔を見せる。今年のバレンタインデーをパートナーと過ごせなかった事、共に想い人にチョコを渡せなかった事を残念がる。

「そうだな……恵さん、本当にありがとう！魔界のテイオには、ガツシユにお礼を伝えてもらう事にするよ」

共に戦ってきた仲間からの、そして自分が好意を持つ女性からのバレンタインチョコ。清磨は心底嬉しい。彼は顔を赤くしながら笑みを浮かべる。

「清磨君、喜んでもらえて良かった。それじゃあ、色々回ってみよっか」

「そうだな……だがその前に……」

清麿は一瞬嫌な予感がした。そして彼は〔答えを出す者〕^{アンサートーカー}を発動させる事で、ようやく自分達がつけられている事に気付く。彼は一度頭を抱えた後に、追跡者達がいる方を向いた。

「おいお前等、何してる?」

清麿が怒気を放つと追跡者達が姿を現す。カルマ・中村・茅野・渚だ。茅野が渚にチョコを渡せずにいる様子を見かねた2人が、クラスメイト達がチョコを渡す場面を観察する事を提案した。そしてガツシユペアを追跡しようと言う話になり、近くにいた渚も連れて今に至る。

「お前等、性懲りも無く……」

「前にもこんな事があったわね」

清麿と恵は呆れた表情をする。そんな2人見た渚は気不味そうな顔をした。

「僕までいきなり連れてこられた訳なんだけど……」

「ゴメン」

巻き込まれる形になった渚に茅野が謝罪する。カルマ達が外に出る時、茅野がいつでも渚にチョコを渡せる様に彼も連れてこられた。

「じゃあ、あとは若いもん達でこゆつくり」

「またね」

「待たんかい」

その場を退散しようとした中村とカルマの肩を清麿が掴む。

茅野は渚にチヨコを渡す為と彼と2人きりになれる場所へ移動した。そして清麿と恵はカルマと中村に事情を聞いた。す。

「……なるほど、面白がつてつけていた訳じゃないのは信じよう」

2人の行動が茅野を思つての事だ（渚諸共いじり倒す狙いもあるが）。それに納得した清麿はひとまず彼等を許す事にした。

「でもここまでつけられてたなんて、全然気付かなかつたな」

尾行されていた事に関して、恵は彼等を責める所かその隠密スキルに感心する。これも暗殺の訓練の賜物だ。すると彼女は中村に視線を向ける。

「えつと、そつちの子は……」

「あ、どうも。中村莉桜つす。うちの高嶺とガツシユが世話になってます」

「大海恵です。よろしくね、莉桜ちゃん」

（マジで下の名前で呼んでくれた！）

初対面の恵と中村は自己紹介を終える。

その後、彼等は恵と中村、清磨とカルマに別れてしばらく会話を続けていた。恵と中村は初対面だが、女子同士気が合う様子だ。

「そう言えば莉桜ちゃんて、清磨君や渚君をからかう事が多いって聞いたわ」

「いや、そうっすね。渚に関してはアイツをいじるのが心のオアシスなんで。高嶺は最初怖いイメージがあつたけど、気付いたらいじってるのがしつくり来てたというか」
人をいじる事が多い中村だが、その頻度が高いのは渚と清磨だ。渚はともかく怒ると鬼になる清磨をうまい具合にいじれる中村を恵はすごいと感じた。

「でも正直わかんないんすよね。初めはいじるならガツシユの方だつて思つてたから」

「ガツシユ君をからかうと、カエデちゃんが黙つてないんじゃない?」

「あ、それはありますね。多分咎めて来るのは茅野ちゃんだけじゃないだろうし」

中村は当初は清磨ではなくガツシユをからかおうと考えていた。しかしガツシユが予想以上に女生徒から人気を集め、反発される可能性があつた為にガツシユの事はそれほどからかわなかつた。

「莉桜ちゃんがそこまでからかうのつて、やっぱり清磨君や渚君の人が良いからなのかな?」

「どうなんすかねえ」

結局中村は、清磨いじりが楽しい理由が分からなかった。中村と清磨には頭が良い故に悩みを抱える事になった共通点がある。しかし中村は清磨の過去を知らない。それでも彼女は無意識に清磨の事情を感じ取り、からかうに至ったのかもしれない。

「まあ。今となつては高嶺、立派ないじられキャラつすよ。渚もだけど」

「ふふ、そうみたいね」

清磨をからかうのは中村だけでは無い。高いスペックを持ちながらも近寄りがたさを感じさせず、むしろ周りにはからかわれるだけの人柄も清磨の魅力なのだろう。

場面は清磨達に移る。彼等は場所を移動し、茅野が渚にチヨコを渡す所を陰で見守っている。

「なあ、覗くのは野暮じゃないのか？」

「いやいや、茅野ちゃんが渚にチヨコ渡せるかを見届けるのは義務だつて」

カルマの目的は茅野にチヨコを渡してもらう事だ。ならばその顛末を見届けるのが当然と言いつつ。そして茅野は顔を赤くしながらも、どうにか渚相手に会話を続ける。

「困つたな、ここからじゃ会話が聞こえない」

「それは諦めろよ。さて、茅野は無事にチヨコを渡せばいいんだが」

2人は茅野を見守る。彼女はどうすれば良いかを考え続けるが、ついに決断を下す。そして渚にチヨコを差し出した。彼女は悩んだ末、まっすぐ前を向く渚の邪魔をしない様に自らの演技の刃で、そして最高の笑顔で彼を応援する事に決めた。

「これで俺達はお役御免かな？」

「そうみたいだ。さあ、恵さんと中村に合流しよう」

清磨とカルマはその場を離れる。

2人はE組のバレンタイン事情を話しながら恵達のいる場所へ向かう。そこで清磨は神崎が杉野に、速水が千葉に、狭間が寺坂グループ全員に、原が吉田に、片岡が磯貝にそれぞれチヨコを渡していた事を知る。そして彼等が歩くその途中、さらに別のE組の生徒が2人の前に現れた。

「カルマ君、ここにいたんですね。良かった、無事に会えて」

「奥田（さん）？」

何と奥田まで植物園に来ていた。彼女は律にカルマの場所を聞いてここまで辿り着いた様だ。奥田は顔を赤くしている。それを見た清磨は何かを察した様に口を開く。

「奥田、俺は席を外すぞ」

「すみません、高嶺君」

奥田はカルマにチヨコを渡そうとしている。本命か義理かは不明だが。それが分かった清麿は2人の邪魔をしない様に取り計らう。

「俺は誰かさんと違って覗く趣味は無いからな」

「言ってくれるね、清麿」

「散々いじられて来たんだ。これくらいは言わせるよ」

珍しく嫌味を言う清麿は口角を上げる。この時だけ彼はカルマをからかう事が出来た。そして清麿はカルマと奥田を置いて再び歩き続ける。その後、奥田は無事にカルマにチヨコを渡せた様だ。

清麿は恵・中村と合流する。そして彼は茅野が渚にチヨコを渡せた事を2人に話した。

「そつか。カエデちゃんと渚君、無事に結ばれてくれれば良いけど」

「いや、ここまで来た甲斐があつたつてもんだ(恵さんと話してたら渡すシーン見逃しちゃったか……まあ、渚に関しちや横取りとか無理つてのは分かりきつてたけどさ)」

恵が茅野の恋路を応援する一方で中村は呟く。彼女も渚に気があった様子だが、茅野の気持ちを考えて上で改めて身を引く決断を下した。

「中村、どうかしたか？」

「んにや、何でも。てかカルマは？」

少し寂し気な顔をする中村に対して清磨が問いたただす。しかし中村はとぼけた物言いをして誤魔化した。

「奥田もここにきててな、カルマと2人でいるぞ」

「マジ、そうなの?！」

「そつか。愛美ちゃん……」

奥田の存在に中村は驚きを隠せない。一方で恵はフードコートでの恋バナを思い出す。奥田とカルマの関係。彼女にその気があるかどうか。それは本人達には分からない。E組の面々の異性関係をあらかじめ把握した中村は帰り支度を始める。

「奥田ちゃんがねえ、大したもんだ。流石はバレンタインデー。さて、邪魔者は退散しますかね」

「莉桜ちゃん、また話しましょうね」

「じゃあな中村、また学校で」

「ハイよ」

2人と別れの挨拶を済ませた中村は植物園を出た。

中村が帰った後、清麿と恵は再び植物を見て回り始める。相変わらず他の客はほとんどいない。その事實は、この空間に清麿と恵しか存在しないのではと2人に錯覚させる。

「E組内でも、結構チョコが飛び交っているみたいね」

「その様だな。カルマが言ってた」

2人はE組女子のチョコ配布の話をする。義理から本命まで数多くのチョコが男子達に渡された。ちなみに岡島はチョコを1つも渡されておらず、血の涙を流していた。彼等はしばらくE組の事を話し続けるが、それぞれの視線が合う。

「清麿君（恵さん）」

2人はお互いの名を同時に呼び合う。偶然タイミングが重なってしまった。

「えっと、清麿君」

「済まない恵さん、俺から言わせて欲しい」

「ど、どうぞ……」

普段は恵に気を遣う事が多い清麿だが、今回は譲れない。彼は決心した。恵に想いを

伝える事を。E組の女生徒達の多くは勇氣を持ってチョコを渡した。そして恵も。彼女に影響された清磨は、真剣な眼差しで恵を見つめる。

「お……俺、恵さんの事が好きだ！」

告白。余計な言葉での飾りは不要。清磨はストレートにその思いを告げる。彼は顔を赤くして目を瞑る。緊張感も最大限に高まっている。そして清磨は恐る恐る目を開けて、再び恵の方を見る。すると彼女の目から涙が流れていた。

「……私も、清磨君の事が好きでした。想いを伝えてくれて、本当にありがとう」

「め……恵さん……」

2人の想いは通じた。こうして清磨と恵は晴れて付き合う事となる。清磨は喜びのあまり叫びたくなる気持ちを必死に抑えていた。すると突如恵が清磨に抱き着き、彼の唇に自分の唇を重ねた。

「!!」

「これ、私の初めてだからね！」

清磨から離れた後、恵は自分の唇に人差し指をあてながらそう言う。しかし清磨は顔を赤くするばかりで、彼女の言葉が耳に入っていない。数々の修羅場を乗り越えて来た清磨だが、色恋沙汰に関してはしばらく恵に振り回される事になりそうだ。

2人の告白が終わると、つくしに連れられたガツシユが彼等に合流する。ガツシユの手にはつくしからガツシユペアへのチョコ（義理）が握られていた。清磨と恵の変化にガツシユは気付かなかつたが、つくしはすぐに察する。そして彼女が仕事に戻ると同時に清磨達は植物園を出た。